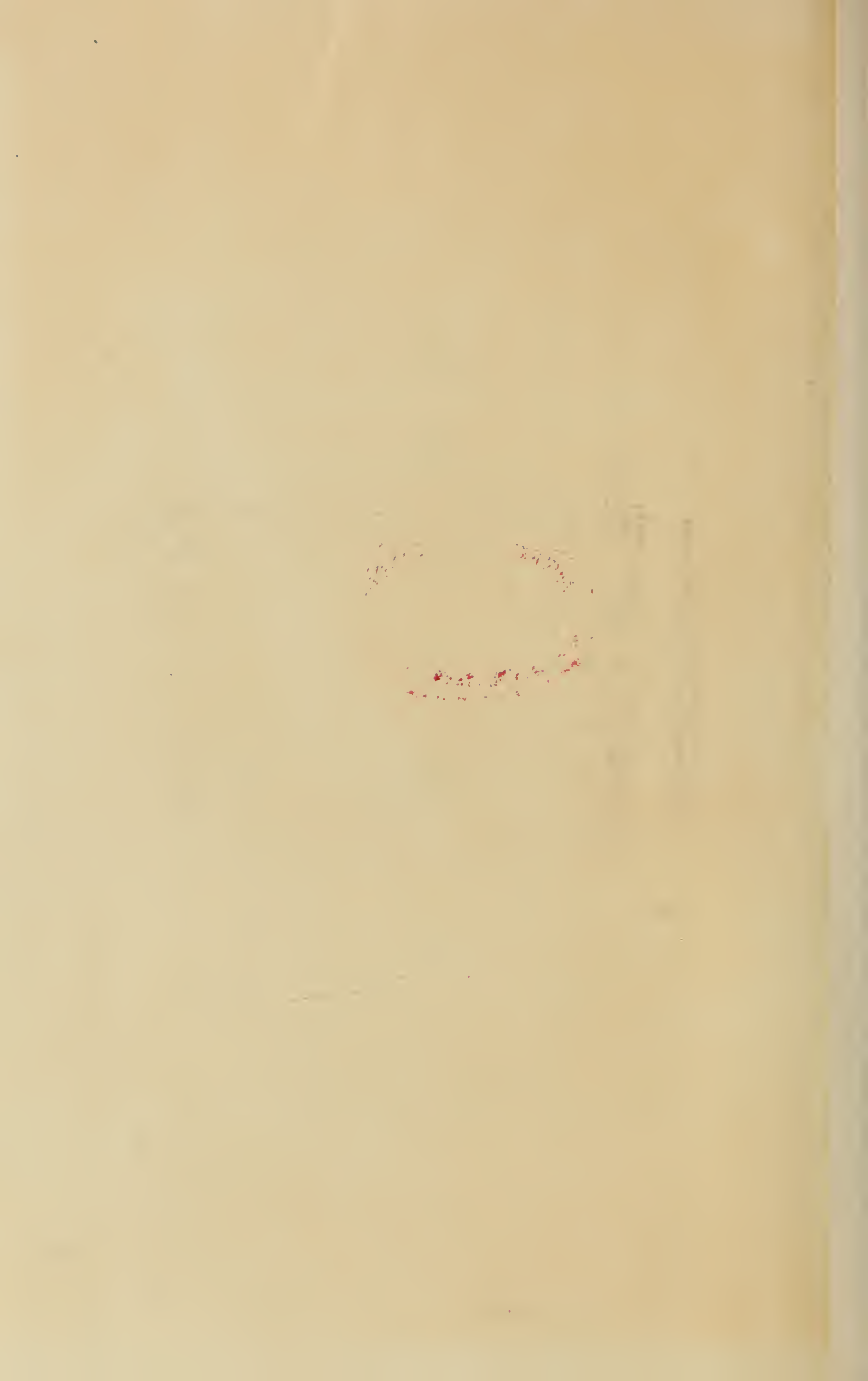


萩原蘿月著

芭蕉の全貌

三省堂刊行





一、杉風筆帳雪摸寫



二、破笠筆圭岳摸寫（芭蕉翁略傳所載）



三、筆者未詳（陸奥衛所載）



四、康工筆（？）俳諧百一集所載）



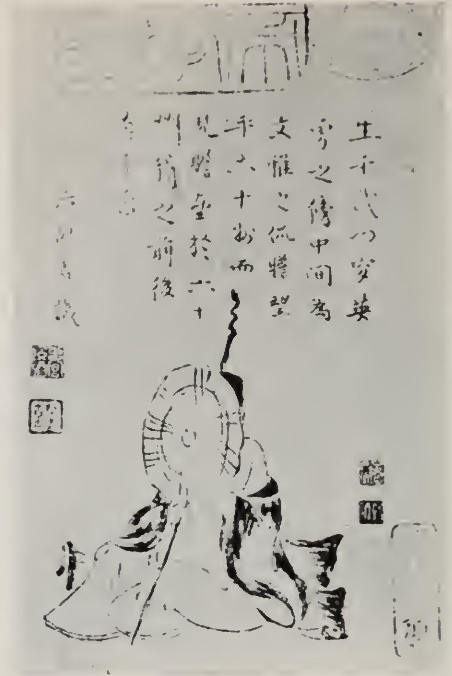
五、筆者未詳（鹿嶋詣所載）



六、寄潮筆（水鶏塚集所載）



七、筆者未詳（俳諧第一義集所載）



八、筆者未詳（行状記所載）



九、颱翅筆（一話一言所載）



十、杉風筆（一話一言所載）



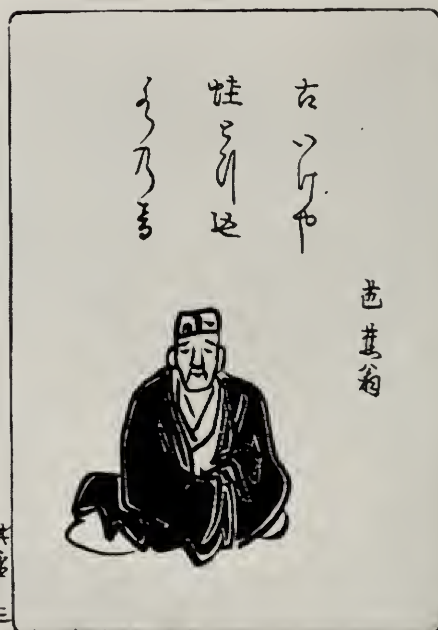
十一、祖荷筆（江戸の華所載）



十二、寥松筆（鹿嶋集所載）



十三、芭蕉自書鄭培摸寫（一話一言所載）



十四、蕪村筆（蕪村七部集所載）



十五、筆者未詳（聲の栞所載）

十六、芭蕉眞蹟（某氏巻子本）

十七、芭蕉眞蹟（朗詠切）

十八、芭蕉眞蹟（芭蕉眞蹟甲子吟行）

十九、芭蕉眞蹟（貞享二年句稿）

二十、芭蕉眞蹟（鹿島詣）

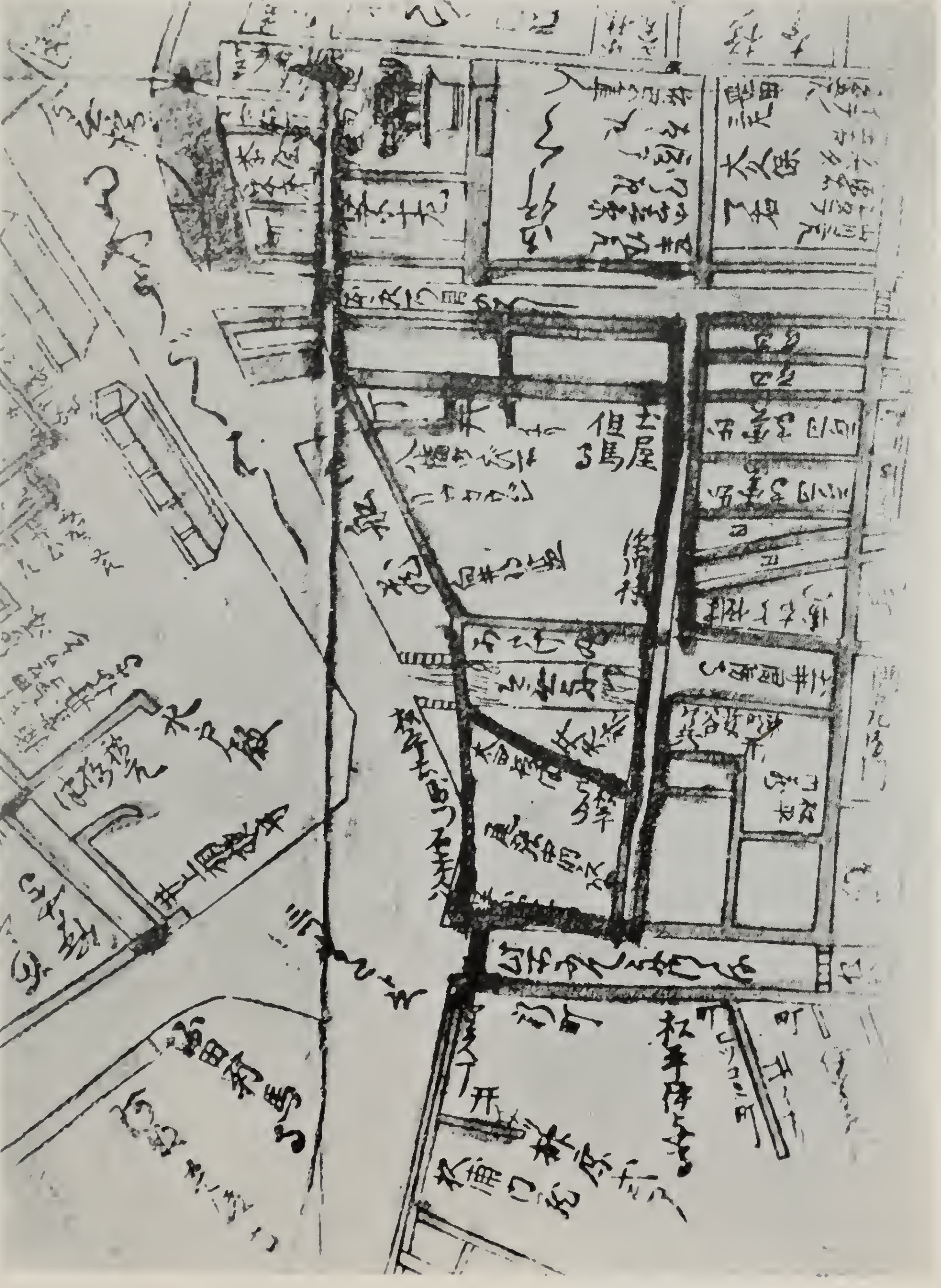
二十一、芭蕉眞蹟（鹿島紀行所載）

二十二、芭蕉眞蹟（更科紀行）

二十六、芭蕉筆（三等ノ文所藏）

二十七、芭蕉筆（むつのゆかり所藏）

二十八、西　猿　樂　附　近（增補江戸大繪圖）



二十九、物部道意印章

本阡　希志　側面彼換文字雅読

三十、物部道意印章

希志

三十一、北村季吟眞蹟（百番誹諧發句會）

三十二、佛頂和尚眞蹟（芭蕉門古人眞蹟所載）

三十三、芭蕉長兄眞蹟（芭蕉門古人眞蹟所載）

三十四、藤堂蟬吟、同探丸筆（芭蕉門古人眞蹟所載）

蟬吟

藤堂氏筆

三十五、義仲寺直愚上人筆（芭蕉門古人眞蹟所載）

繋舩蘆荻間蓬
底睡眠閑林葉
逐風到良疑雨
出山

直愚書

本書を故芳賀矢一先生の神前に捧ぐ

末弟

萩原蘿月

序

人の傳を作ることは眞に難事である。それは人を眞に知り、眞に寫すことの難いためである。今人は近きが故に、時代の見通し難きがために難く、古人は遠きが故に、環境を知ることの難きがために難い。資料多ければ、多きが故にその眞僞を辨じ又これを整理するに難く、乏しければ、乏しきが故に人の全貌を知るに難い。人格が偉大であれば、これを窺ふことが難く、平凡なればこれを寫すことが難い。性格、學問、事業、職務が我に遠ければ、遠きが故に難く、近ければこれをよく眺め、寫すに適當なる距離を定めることが難い。

俳聖芭蕉の傳記は、古今に亘つて乏しくはない。が、その眞に賴るべき、豐富にして、穩正なるものの稀なのは、惟ふに、その時代の遠いためか、その人格の偉大なためか、世の尊敬の餘りに高いためか、又はその資料の眞僞紛錯してゐるためか、いろ〳〵な事情が擧げられ、考へられる。

わが萩原蘿月君は、曩に「詩人芭蕉」を著して公刊され、同書は當時好評嘖々たるものがあつ

た。しかし、君はこれを以て足れりとせず、爾來十年なほその研鑽を續け、世評にも聽き、又以前の說をも反省して、更に焦點を整へて、新しく芭蕉の全貌を視直し、寫し直して本書を成された。かくして、本書は實に君が第二次の芭蕉全傳である。本書がよく芭蕉の知り難きをも知り、よく寫し難きをも寫し得てゐるのは、このためである。余は我が國文學界にこの良著を得たるを深く喜ぶ。

藤　村　作

序

恩師藤村作先生から、序文及び書名を賜はつた事を、劈頭第一に感謝する。しみじみありがたく思ふ。

余は大正十五年「詩人芭蕉」を刊行した。其書は當時約三年の日子を費して成つたもので、相當苦心して書いたものではあつたが、なほ誤謬や記事の不完全な點もあつて、改訂すべき著書であつた。其後十年の歲月は流るゝ如く過ぎたけれど、余の胸中には前書修正の念追へども去らず、かなり新材料も集まつたので、「詩人芭蕉」に大斧正を加へ、且つ俳論を補ひ、句文の誤傳を正し、その人生觀・自然觀等思想方面をも考察して、こゝに全く舊來の著と面目を一新した書を出す事になつた。本書が舊來の「詩人芭蕉」より、一層光彩を放つて居る事は、余の公言して憚らぬ所である。

一體余が著述の目的は二つあつた。一は諸書を涉獵し、諸說を檢討して、手落ちなく芭蕉の全般を知らうとした意志と、一は芳賀矢一先生の生前に於ける恩義に酬いようとした希望とであつ

た。

從來の芭蕉研究は、大部分芭蕉傳の研究であつた。それも芭蕉の俳人的生涯を、時代的に或は年表的に、説明するに過ぎなかつた。芭蕉の全生涯を通觀して、他方面の人々との交渉には、餘り指を染めて居なかつた。例へば本間道悅とか物部道意とか田中桐江などの傍系的人物の研究には詳かでなかつた。併し物の眞相はかゝる隱れたる生活方面から開扉される例は、研究史上往々ある事で、余は其點に留意し、かゝる方面の研究から、芭蕉の實相に一生面を開かうとして、聊か得る所があつた。まだ十分とは言へないが、從來の學者のなし得なかつた境地に突入した事は愉快に思ふ。

從來の學者は、芭蕉を神聖視する傾を持つてゐた。芭蕉を形式道德の權化のやうに考へる人も今でもある。是等は一歩進めると偶像崇拜の傳統に逆行する事になる。芭蕉は主情的な詩人である。芭蕉は凡人のすべての欲望を持つて、人生の行路難を嘗めたのであるが、遂に此一筋につながつて、社會性を失つたのである。芭蕉の常識は活きた人生の常識である。芭蕉の道德は詩の本質から迸出した道德である。芭蕉が妾を持たうが、伊勢のお玉は鐙か鞍かと唄はうが、何の事はないが、それを極力否定しようとするのが、古い學者の研究態度であつた。或は否定しない迄も、

之を當時の俳諧氣分としてぼかして了ふ學者もある。余が「貝おほひ」の研究は、かゝる傳統を打破すべく企てたもので、芭蕉の眞相を傳へる上に、相當な效果はあらうかと信じてゐる。

又從來の研究は芭蕉の思想方面に餘り觸れてゐなかつた。それは芭蕉の俳論の批判や人生觀・自然觀の論評は無い事もなかつたが、大方概念的で、詳しくなかつた。芭蕉の俳論はその意味に於て加へたもので、完成してはゐないが、多少統一的に試みた所に自信はある。なほ芭蕉の哲學的方面の研究もあるが、之は紙面が餘り擴大するので、他日を期して發表すべく割愛した。

余の研究は別に奇説も珍説もない。余はたゞ忠實に芭蕉の全面を考察しただけで、いはゞ從來の研究を廣めて、それに綜合的な知識を與へたといふに過ぎない。それも果して目的が達せられたか否かは、讀者の判斷に待つより外はない。自分としてはベストを盡して見たが、未だ未完成な點もある。學問は余一人の獨占ではない。普遍的綜合的研究に一歩を進めたといふ所が、本書の特色と云へば特色である。

余と亡師芳賀矢一先生との關係は、一朝一夕の談ではない。本書成るに及び、之を先生の御魂(みたま)に報告すべく墓前に立つや、萬感胸に迫つて、涙滂沱たるを覺えなかつた。余歳五十を過ぎ、窮乏殊に甚しく、一門生の援助によつて、辛うじて生きる者ではあるが、本書の成立既に前後十餘

年の歳月を費し、調ぶ可きものは大方調べ盡したので、此點は亡師の靈を辱汚しなかつたといふ確信はある。

昭和十年八月二十日

大塚の寓居に於て

萩原蘿月

凡例

一、本書は事實の正確な記錄を主とし、必ずしも行文の流暢に留意しなかつた。

一、古人の發句・連句・文章はつとめて原形のまゝ採錄したが、讀み惡き文章は句點を修正し、送假名を改め、假名を漢字に直したものもあつた。

一、誤字、假名遣の誤りは正したが、古字・俗字・訛言等は强ひて改めなかつた。

一、出典は必ずあげて置いたが、二三不明のものもあつた。

一、校正は出版を急いだため再校で打切り、三校は書肆の手に委ねる事にした。

一、本書は大森龍夫君の熱心な淨書によつて成立した。こゝに特記して君の努力を感謝する。

目次

第一章　芭蕉の家系

附錄

補遺

芭蕉の全貌

第一章　芭蕉の家系

第一節　先祖

一、彌平兵衛宗清の末といふ說

芭蕉の先祖は平氏で、池ノ大納言賴盛の侍彌平兵衛宗清の末と傳へられてゐる。蝶夢の「芭蕉翁繪詞傳」によると、芭蕉の氏族は柏原天皇の流、常陸助平正盛の末、右兵衛尉平季宗の子に、彌平兵衛尉宗清があり、其子家清土師三郎と稱し、五代を經、清正といふ人に子供多く、家を分ちて、山川・勝島・西川・松尾・北河と名乘つた。代々拓植ノ庄に住し、其末松尾與左衛門に至り、始めて伊賀の國府上野の赤坂に住んだ。芭蕉の父はその人であるといふ。竹人の「芭蕉翁全傳」(土芳及び兄景賢の口傳を筆記したもの、寶曆十二年奧書)には、清正の時山川・勝島・西川・松尾と分家し、其松尾氏の子某(百司とある)、その末が與左衛門となつて、蝶夢は此說に從つたものらしい。山崎氏の「俳人芭蕉」に、水戸史館の說として、はじめ宗清事によつて賴朝を助けた。賴朝之を德とし、宗清に伊賀ノ國阿拜(アベ)・山田兩郡の內數邑を與へた。宗清拓植の一枝を地にはさみ家居を卜したら、明年其枝繁茂し、花を見るに至つたので、拓植を氏とした。拓植氏後日置・福地・北村・松尾の數家に分かれた。云々とある。

なほ太田氏の「姓氏家系辭書」に、「江戸系圖」・「柘植系圖」をあげ、「江戸系圖」には宗清（赴₂伊賀國₁以₂柘植₁爲₁氏）を高棟より十代の後とし、「柘植系圖」には高棟より十二代の末とする。

宗清は情ある侍であつた。頼朝が平治の亂に破れて、美濃ノ國青墓の延壽の許を立出で關原へ來た時、たま〳〵通りかかつたのが宗清で、藪の蔭へかくれた子供を捕へて見ると、頼朝であつたので大に喜び、之を六波羅へ護送した。清盛は頼朝を一時宗清に預けた。宗清あはれを覺え、先づ頼盛の母池ノ禪尼（清盛の繼母）に會つて、頼朝の容姿の故右馬ノ助家盛（池ノ尼の子、頼盛の兄）に酷似せるを告げた。池ノ尼之を聞き、胸塞がり、重盛を促して、清盛に頼朝の助命を酷しく訴へさせた。重盛も之には當惑したけれど、假にも祖母の命であり、捨てて置く譯に行かず、頼盛を連れて清盛に池ノ尼の愁訴を告げ、頼朝一人殺したとて、亡びる平家の運ならば亡びるし、助け置いたとて平家の末繁昌あれば何の恐があらうと事理を盡して願つた。清盛もはじめは容易に聽き入れなかつたけれど、度々泣き付かれて見ると、强ひて頼朝を殺す事も出來ず、一日延しに頼朝の死罪をゆるめてゐた。頼朝もさすが利口であつた。父母・兄弟の冥福を祈りたいと言つて、小さき卒堵婆百本を造つた。かゝる事が一層涙脆い老尼の心を奪つたと共に、剛腹な清盛の心を緩和させた。遂に頼朝は宗清の願通りに死を赦され、伊豆ノ國へ流されたのである。十三歲で待賢門の軍に從ひ、馬踵りして鎌田に、「佐殿や在す。佐殿や在す。」と呼びかけられた不敵者、落人の行手を遮つた源内兵衛貞弘を、重代の髭切で眞二つにぶち拂つた剛膽者、その頼朝を助命して東國へ下す事は、虎を野へ放つやうなものである。宗清とあらう者が、その位の事を知らぬ筈もなからうが、

一度頼朝を自分の邸に引取つて、日夜いぢらしい姿を見、そのあはれな擧動に接しては、猛き武士もさすがに哀憐の情は湧き上つた事であらう。殊に頼朝は宗清の主君頼盛の兄に似てゐるといふのだから、自分の主君の稚顏も思出されて、いとど涙の種であつたらう。頼朝が百本の卒堵婆を造つたといふ事も、或は宗清の入れ智惠かも知れない。芭蕉の先祖に宗清のやうな人があつたかと思ふと、詩人的な血の流は爭へぬものである。

平家の果報は久しくなかつた。伊豆の流人頼朝は、やがて東國の大將軍に押立てられ、木曾が信濃に起り、北陸に勝ち、大軍比叡の前後に充ち滿ちては、平家の沒落如何ともしがたくなつた。一門の都落は悲しき極みである。池ノ尼も此運命の忽劇に出會つたならば、命長らうべくも思はなかつたであらう。空しきは人心である。一門が邸宅・宿坊に火を放つて都を落ちる際、頼盛だけは落ち行くと見せて赤旗ちぎり捨て、鳥羽の南赤江河原から都へ引返した。之はかねて頼朝から文通があつて、朝恩にも申し替へて宮仕しようといふ言葉を頼んだからである。宗清はどうしたかといふと、これも頼朝往年の恩を忘れず、差上す源氏の兵に、池殿の殿原に弓を引くな、宗清に手をかけるなと戒めて居た位だから、報恩の辭誼も手紙の端々にあつた事であらう。併し宗清は武士の面目を說き、一門と運命を共にすべきを頼盛に勸めたけれど聽かれなかつた。頼朝は頼盛に宗清を連れて鎌倉へ下れといふ。宗清は一門に後れてどうして鎌倉へ下れよう。宗清は斷然主家を退いたのである（平治物語、源平盛衰記、露伴の「頼朝」による）。「吾妻鏡」に、宗清は屋島へ赴いたやうにあるが、その後宗清の名も聞かないから詳かでない。

宗清が頼朝から伊賀ノ國に領地を貰つたといふ說は信じられない。「伊水溫故」に、「宗清を鎌倉に招き、報恩のた

め所領を宛んと欲するに受けず。諸方にさまよひ、柘植郷に隱れ、住し終る。云々」とあるが、或はさうかも知れない。柘植の枝を地にさして、吉凶を卜したなどといふ事は、小說めいて信じられない。併し何をたよりに宗淸が伊賀の柘植郷へ隱れたかは知る事は出來ない。柘植郷が宗淸の元來の領地であつたか、故郷であつたか、或は伊賀は平氏の一族の多い所であつた關係上、そこへ跡を晦したか、更に分らない。竹二坊の「はせを翁正傳」に、「彌平兵衞宗淸が屋敷の跡今に存す。庭に大なる石の手水鉢あり。人皆これを名物とす。云々」とある。

二、桃地黨といふ說

支考の「本朝文鑑」、芭蕉翁石碑ノ銘序に、「その先は桃地の黨とかや。今の氏は松尾なりけり。云々」とあり、又「俳諧十論」に、「故翁は伊賀の素生にして、其先は桃地の黨なるよし。云々」ともある。之は芭蕉の先祖に百司といふ別姓があるので、それを百司、桃地音の近似せる所から、誤つて轉用したものか。或は芭蕉の先祖に百司以外に桃地といふ氏族があつたものか、詳かでない。百司は伊賀七黨の一と傳へられる。

三、桃井家から出たといふ說

「類聚名物考」に、「翁は初めは桃井を名乘られたり。太平記の頃に見えし舞の家なりとぞ。故ありて後に松尾氏となられしが、云々」とある。何によつたものか未詳。

四、松尾大膳太夫宗正の末といふ說

素蓮の「芭蕉庵春秋」の頭書の說で、卽ち圀爺云、「先祖は鎌倉時代松尾大膳太夫宗正也。云々、」とある。「姓

氏家系辭書」、柘植氏の系圖中、宗正といふ人は見えない。

五、木曾義仲の裔といふ說

去留の「芭蕉翁全集」に、「或說に翁の歿後に及びて、笈の中より系譜一卷を出す。其系木曾義仲の裔より出づ。因て義仲寺に葬るといふ。按ずるに大系圖に、「義仲之子志田ノ三郎先生義憲、經廻伊賀ノ國之間、爲賴朝卿仰付、當國之住人服部六郎時定、於彼國千戶寺被誅之時自害。」とあり。或說と合せ考ふれば、義憲の子孫松尾氏を冐して、翁は其血脈にてもありしにや。云々」とある。併し此說は疑はしい。芭蕉歿後、笈の中から系譜が出たといふやうな事は未だ聞かない。笈といふのも變であるが、頭陀の內に殘されたものには系譜はないやうである。芭蕉が義仲寺に葬られ、木曾殿の句が芭蕉作と誤傳されるやうになつて、何か芭蕉は義仲と特別の關係でもあるやうに世間から想像され、義仲子孫說が揑造されたのではなからうかと思ふ。

第二節　父母・兄弟・親族

一、芭蕉の父

芭蕉の父の名に就いて二說ある。一說は與左衛門、他は儀左衛門である。與左衛門說は竹人の「芭蕉翁全傳」・「芭蕉翁一代錄」・「次郎兵衛物語」・蝶夢の「芭蕉翁繪詞傳」・素水の「芭蕉翁一代集」・「扶桑名畫傳」等に見

え、儀左衛門說は竹二坊の「芭蕉翁正傳」・湖中の「芭蕉翁略傳」・五柳の「芭蕉全傳」・去留の「芭蕉翁全集」・「墨水消夏錄」・魯庵の「芭蕉庵桃靑傳」・山崎氏の「俳人芭蕉」・瓊音の「芭蕉全集」等之に從つてゐる、樋口氏の「芭蕉研究」に、與左衛門が古いとあるが、そは竹人の全傳が芭蕉傳中比較的古く、且つ信じられるものであるから、推測した說だらうと思ふ。儀左衛門は正傳に記された以來諸書從ふもの多く、これ又相當の根據ある說らしく、先づ今の所何れを正しとするや詳かでない。

介我の「風俗文選犬註解」に、父松尾與左衛門とあつて、「實父は伊賀上野鐵砲鍛冶松尾甚兵衛なりといへり。」とあるが眞僞不明である。山崎氏の「俳人芭蕉」に、

伊賀の松尾氏の最も著れたるは松尾甚兵衛統幸の系にして、統幸は上野城主藤堂良勝に屬し百五十石を食み、元和元年大阪の役良勝と共に八尾口に戰死せし人なるが、芭蕉はその別家なるべし。大阪の役藩主藤堂高虎伊賀者を召して月俸を給ひし時、召されたる松尾五郎左衛門は蓋し半左衛門命淸及び芭蕉等が祖父なるべし。或は云はく芭蕉は上野の士松尾桃次の孫なりと。

とある。實父があるとすると、芭蕉は他から與左衛門の家へ貰はれて來た事になるが詳かでない。松尾桃次の孫だと云ふ說は、松尾氏の先に桃地黨があるといふ說から、桃地・桃次の音の近似によつて誤つたものぢやないかと考へる。政二の「俳道系譜」に、芭蕉を松尾甚左衛門の二男としてあるが、何れの書に據れりや明かでない。

芭蕉の父の職業に就いて諸書大方記錄がない。樋口氏の「芭蕉研究」に、「手蹟指南をしたのは實は此父與左衛

門であると記したものもあり、郷里でもさう傳へてゐるといふから、或はそれが實かも知れぬ。云々」とあるが、之も詳かではない。

二、芭蕉の母

母は伊豫宇和島の人、桃地氏の女であると、諸書に見えてゐる。「芭蕉庵春秋」の割註に、「支考ガ說ニヨル時ハ、芭蕉ノ父一族ノ緣ニヨツテ、桃地氏ノ女ヲ嫁リシ者也。年月日未詳、夫ニ後レテ存命シ、貞享ノ頃卒ス。」とある。今此支考說を解剖して見ると、支考は芭蕉の先祖は桃地黨であると言つてゐるのだから、一族の緣によつてと書いたのだらうが、芭蕉の先祖が桃地黨であるといふ事が、疑問の一歩と云はなければならない。竹人の說では、芭蕉の父の先に百司（モヽシ）といふ氏があつたといふのだが、支考はこの百司を音の近似から、伊賀の桃地黨の桃地に附會して、芭蕉の先祖にしてしまつたのかも知れない。一體伊豫宇和島の人桃地氏といふのがよく分らない。伊豫と伊賀とは藤堂家に於ては深い因緣のある土地で、はじめ藤堂高虎は伊豫宇和島から今治に移り、後伊賀・伊勢に封を轉ぜられたのであるから、其時芭蕉の母の家も、藤堂氏の轉封と共に、伊豫から伊賀へ移住したものか。そして芭蕉の父の家と親族になつたのであらうか。芭蕉の父の家は柘植氏の族で、代々伊賀に住んでゐたのであるから、芭蕉の母の家が伊豫から伊賀へ移住して、芭蕉の父の本家なる桃地黨と親族關係を結んで、桃地氏を名乘つたものであると見なければ、芭蕉の父の本家なる桃地黨が伊豫の族となるのも變な事であるから、之は芭蕉の母の家が伊賀へ移つてから、卽ち芭蕉の母の家の或者が、芭蕉の父と同黨なる桃地氏へ嫁いだとか、聟に來たとかして、桃地姓

を冒して、芭蕉の父の家と親族になつたと見なければなるまい。或は又芭蕉の父の本家なる桃地氏と同姓の人が、伊豫から伊賀へ移住して、其娘を芭蕉の父へ嫁がせたものか、などと種々疑念が起つて、取捨に困るのである。又竹人の說には、宗淸から九代目某氏に至り百司氏と改め、十代目が芭蕉の父とあり、芭蕉の母は伊豫から伊賀の名張へ來て、松尾氏に嫁いだとある。若し芭蕉の母が桃地氏であるならば、此桃地氏は九代目の一家のやうに思はれて、與左衞門との血族上の關係が近過ぎるやうで、之もどうかと思はれる。芭蕉の母の桃地氏が、芭蕉の父の先祖の百司氏と全く無關係の人であるならば、問題は容易に解決されるが、百司・桃地の音の近似せるため、種々の疑念起り、解決に苦しまされる。貞松の「芭蕉翁略傳」に、母の名をいよとしたのは異說であるが、信じられまい。母が伊豫の人の女であるといふ傳說から、その名を誤つたのぢやなからうか。文曉の「次郎兵衞物語」に、芭蕉の談として、母の先祖は新田氏であるといふが、何に據つたものか詳かでない。

芭蕉の父はいつ頃死んだものか分らないが、常陸の本間家に傳つた「醫家年鑑」の記錄によると、延寶四年芭蕉は父の病を聞いて故鄕へ歸つたとあるから、其頃迄は生きて居たやうに思はれる。併し江戶からはる〲伊賀迄歸る位だから、此時の父の病氣は死病だとしないまでも、危篤であつたかも知れない。或は其時父は死んだものか。「次郎兵衞物語」に、與左衞門は中風で死んだとあつて、芭蕉幼時の事になつてゐる。芭蕉の母もいつ頃死んだものはかつきり分つてゐない。「野ざらし紀行」貞享元年九月の條下に、「兄の守袋をほどきて、母の白髮拜めよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老たり。云々」とある文意から推察すると、其頃母は旣に世を去つてゐたやう

に思はれる。素蓮の「貞享の頃卒す。」とあるは何に據つたものか。併し芭蕉が兄半左衛門に與へた遺言狀を見ると、「はゝ樣およし力落し可申候。」とあつて、母は芭蕉に後れたもののやうである。或は此母は芭蕉の繼母か。疑念を增すだけである。

三、芭蕉の兄弟

之も種々說があつて明かでない。普通二男・四女說と三男說とある。前者は竹人の「芭蕉翁全傳」・蝶夢の「芭蕉翁繪詞傳」・「次郎兵衛物語」・「芭蕉翁一代錄」・晋風の「芭蕉俳句定本」等、後者は竹二坊の「芭蕉翁正傳」・去留の「芭蕉翁全集」・湖中の「芭蕉翁略傳」・魯庵の「桃青傳」・山崎氏の「俳人芭蕉」・瓊音の「芭蕉全集」等の說である。今二男、四女說を代表して竹人の說をいふと、父與左衛門、長男命清（半左衛門）、長女某、次男宗房（芭蕉庵桃青）、次女某（嫁片野氏）、三女某（嫁堀内氏）、四女およし（後に命清の養女となる）。三男說を代表して竹二坊の說をいふと、父儀左衛門、長男與左衛門（上野赤坂町に手跡師範を以て業とする）、次男半左衛門（藤堂主殿長基の臣）、三男忠右衛門（藤堂新七郎良精の臣）である。「繪詞傳」には、儀左衛門を嫡子とし、後半左衛門命淸と改めたとある。半左衛門の名は芭蕉の書簡にもしば〳〵見え、遺言狀や芭蕉歿後遺物の整理に關し去來・其角の問合せなどを見ても長男で、家督相續の人らしい。三男說の與左衛門といふ名は他の記錄に見えず、長兄らしくもない。「墨水消夏錄」の芭蕉傳に、「父名は儀左衛門、母は桃地氏、四子あり、與左衛門、半左衛門、忠左衛門、次は芭蕉翁也。」とあるが誤である。

長兄半左衛門の職業に就ては、手蹟師範説と武士説とその折衷らしい說とある。但し手蹟師範といふ說が通說らしい。武士說も有力のやうだが、仕へた主君に關し種々說があつて明かでない。竹二坊は藤堂主殿の臣とし、一說(魯庵の桃靑傳に出)には藤堂九兵衛の臣とし、又藤堂良精ともあり、秀三は藤堂修理の臣とするなど一定しない。折衷說と云つたのは山崎氏の說で、山崎氏は半左衛門の手蹟が妙筆であるから、手蹟師範をしたのは半左衛門で、後長基に仕へたのかも知れないといふ。半左衛門の手蹟は、依兮の「芭蕉門古人眞蹟」に出てゐて、妙筆である。「次郎兵衛物語」によると、父與左衛門に六人の子供がある。長をはじめは儀左衛門、後主君から半左衛門と名けられた。娘三人は早生し、姉は藤堂和泉守の家中に嫁いでゐる。與左衛門は度々の不幸つゞき、其上一族の中にも不仕合せがつゞき、家內に三人も厄介人があり、芭蕉は病身、費用かさみ、活計難澁であつた。與左衛門の母は產後の大病で、一年余り床に就き、とう〳〵亡くなつた。自分(次郎兵衛)は父母と三人で芭蕉の家に來て居る。自分等は名張の家屋敷は勿論、諸道具、田畑を賣拂ひ、三十七八兩の金を作り、芭蕉の家の受拂ひをすませた。然るに間もなく與左衛門は中風で死んだ云々と詳述してゐるが、どこ迄信じられるか分らない。とにかく芭蕉一家は貧乏であつた事は想像に難くない。娘三人といふのは、竹人の系圖にある末の娘三人の事だらうが、竹人說には最後の娘をおよしと云つて、命淸の養女とある。このおよしははゝ樣およしのおよしだとすると、「次郎兵衛物語」の早世も怪しいものである。姉といふのは長女であらうが、晋風の「芭蕉俳句定本」の「芭蕉系譜」に山岸半殘へ嫁いだ人とある。

四、芭蕉の親族

竹人の系圖にある片野・堀内といふ人は、どういふ人だか分からない。芭蕉の甥に松村伊兵衛のある事は有名な話である。白亥の「俳諧眞澄の鏡」に、

　鯉屋手代伊兵衛は桃青翁の甥なり。幻世（高山傳右衛門）世話して小普請手代になし、松村眞左衛門と名乘る。本郷春木町に住す。其終る處を知らず。

とある。野桂の「江都祖翁墳塋集」に、芭蕉の位牌の圖が出て居て、中央、芭蕉翁桃青居士、左、水上居士、右、利水居士。水上居士は松村氏、寛保二壬戌年六月五日、利水居士は服部氏、享保二丁酉年十二月九日とあり、位牌は江戸紅葉山火之番松村太七郎方に殘り（此松村家から松尾・服部の兩家が出る）、芭蕉在世中松村は姪の家のちなみで、位牌及び手澤の手道具等があつたが、燒けて大方亡くなつたなどと記し、次に「茗荷集」夢塚の由來をあげ、桃鏡は太七郎先代の人かともあつた。「湖東問答」の桃鏡の序によると、服部利水は芭蕉の舊友で、去來とも親しく、江戸に下る頃、「湖東問答」の草稿を携へて、桃鏡の家に來り、祖父伊兵衛（一道と號）に與ふ。云々とある。之によると桃鏡の祖父伊兵衛は、芭蕉の甥松村伊兵衛の事で、代々俳人であつた事も分るが、此松村家から松尾・服部の兩家が出たといふ事は詳かでない。竹二坊の正傳に、寶暦の頃三代目半左衛門に至り、疫病で家族悉く死に絶えたとあるが、近頃樋口氏の研究によると、半左衛門の子孫は死に絶えたのではなく、その子孫は明治十八年迄赤坂町の舊宅に居住し、後魚町へ移り、現に松尾萬吉といふ人が當主であると言つてゐるが、或は寶曆頃死に

絶えた家を、親族の松村家が再興したのかも知れない。又服部家と松村家とはどういふ關係になつてゐるか、伊賀の服部土芳とこの服部利水とはどんな關係にあるか、それも判然しない。五明の「小夜話」に、仙臺の也寥和尙は芭蕉一家の人であるとあり、「枕表紙傳來」(其明のふくろ表紙に出)には、也寥は土芳老人の有屬で、奥州船岡大光寺禪和尙、風雅は烏醉居士と蘭惠で、碓花坊也寥と號し、浪花金龍庵にて居士と鐺內の粥を分かち云々とあるから、土芳も利水も也寥も芭蕉の親族に當るやうである。なほ江三の「むつのゆかり」に碓花也寥略傳と題して、

伊賀ノ國上野ノ產、碓井民部之輔淸光ノ次男、稚名宗一郎ト稱ス、蕉翁ノ從甥也、伯方ハ松尾氏、叔方ハ碓井氏　十五歲ニテ出家トナリ、加州大聖寺ニ修學ス。於仙臺向山宗禪寺遷化ス。法號環中道一大和尙。于旹天明四辰㞢二月五日

とある。竹二坊の正傳に、「伊賀上野町山田屋市兵衛(俳名雪芝)は翁の從弟也。」とある。又「一代錄」に、「大阪西御堂前花屋伊左衛門は內緣の人也。」ともある。御堂前の花屋は、芭蕉終焉の家であつて、諸書花屋仁左衛門とあるが、何に據つたものか一向明かでない。

樋口氏の研究によると、上野町松尾家菩提所愛染院所藏の位牌に、月峰不殘居士、芭蕉庵桃青居士と二人だけ並べてあるから、月峰は兄半左衛門の戒名であらう。元祿十五年三月二十九日に歿してゐる。松尾家はもと禪宗であつたが、上野に移つてから眞言宗になつたのであらうとある。

第三節　芭蕉の出生と通稱（附、庵號）

芭蕉は普通正保元年に生れた事になつてゐる。但し之は確實な記載があつての事でなく、芭蕉の歿年を元祿七年五十一歳に定めて、それから逆算した結果だらうと思はれる。正保元年は寛永二十一年十二月十六日の改元であるから、十二月十六日以前に芭蕉が生れたなら寛永二十一年生となるし、それ以後であれば正保元年生となるわけである。勿論月日は傳はつてゐない。たゞ「一代錄」に正保元年春出生とあるのが異說である。

芭蕉の出生地に就いては、古來伊賀ノ國阿拜(アベ)郡柘植(ツゲ)村（「和名抄」に阿拜郡柘殖鄕とある。「觀古雜帖」に「木類に柘を都美と註す。乃ち都美惠なり。音便して今は都介と云。殖字も植を用ふ。」とある。卽ちはじめは柘殖(ツミヱ)鄕と呼んでゐたが、後植字となり、ツゲといふやうになつた。）の產といふ說と、伊賀ノ國上野赤坂町の產といふ說とあつて一定しない。併し多くは前說に傾いてゐるが、近頃竹人の說が採られるやうになつて、後說に從ふ者も起つた。尤も「次郎兵衛物語」・「一代集」は赤坂說であつた。要するに「繪詞傳」說の如く、芭蕉の父の代になつて、伊賀上野赤坂へ移住したとしたならば、芭蕉は移住前に生れたか、或は移住後に生れたかによつて、柘植村の產とも赤坂の產ともなるわけであるが、そこがまだ詳かに知られてゐない。

歿年代や歿齡に就いても種々說があつた。オリヂナルなものに歿年月日の記載はあつても、歿齡を逸したもの

が少くないので、異説を生んだのであらう。卽ち歿年月の元祿七年十月十二日は、支考の「笈日記」（元祿八年刊）、路通の「芭蕉翁行狀記」（元祿七年冬序）、壺中・芦角の「芭蕉翁追悼木がらし」（元祿七年初冬序）などに明記ある事だから確實であるが、五十一歲歿は許六の「風俗文選」（寶永三年跋）の作者列傳、梨一の「奥細道菅菰抄」の芭蕉翁傳（猿雖の曾孫桐雨の筆記と加賀若杉の僧旣白房の覺書に據つて記したもの）等が信ずべき古いものである外、他に古い所では明記がないやうである。異說を少しあげると、淡々の其角年立「十七回」に芭蕉卒五十二、「水鷄塚集」の畫像誌に齡五十二歲元祿八年十月中の二日卒したまふ、「一代錄」に翁生壽五十二歲、白露の「誹諧名家錄」に終命年五十二歲、政二の「俳道系譜」に終焉歲五十二或五十三、石倉氏の「季吟傳」季吟系譜に歿于浪花年五十二、又丈石の「誹諧家譜」に歿齡五十三、春明の「誹家大系圖」に五十有三などとある。甚しきは紀逸の「黄昏日記」（寶曆十年刊）に元祿十一年戊十二月十二日卒といふ說もあつた。けだし芭蕉の歿年月日が、元祿七年十月十二日である事は動かす可からざる事實であるのに、如何にして歿齡に就いて斯の如き異說を生じたのであらうか。五十二歲或は五十三歲歿の記者は、芭蕉の出生を寛永二十年或は寛永十九年と考へてゐたのだらうか。古人も之に就いて疑を抱いたと見え、九々庵の「採菊暇筆」（天保年中序）に、「正保元年に生るとなり。蓋五十三といふは誤也。年歷考ふべし。」と云つてゐる。

芭蕉は通稱を多く持つてゐた。之は誤傳が中に入つたからであるらしい。金作、幼名らしい。支考の「十論爲辯抄」に、「稚名は金作といへるよし。云々」とある。其他「一代錄」・「次郎兵衞物語」・「葦錦抄」・「繪詞傳」・「芭

蕉翁全集」・「一代集」・「古今墨蹟鑒定便覽」・「本朝古今書畫便覽」等にも見えてゐる。金吾、「類聚名物考」に、「幼名は金吾といへり。……支考が十論に見えたり。云々」とあるが、金作の誤傳だらう。支考の十論には見えない。半七、幼名らしいがどうか、梨一の「芭蕉翁傳」、竹二坊の「正傳」、湖中の「略傳」等に見えてゐる。去留の「全集」に、「翁むかう髮を取りし頃より、いかなる故にや、何がしが許に寓居し、半七と改む。」とあるが、素蓮の「春秋」に、「半七アヤマリナラン。兄弟同字ヲ呼ブコト未聞。」とある。與作、他書に見えない名だが、「次郎兵衞物語」によると、與作が最初の名で、二歳の時金作と改めたとある。甚七郎、素堂の著と傳へられる「松の奥」に、芭蕉庵桃青俗名松尾甚七郎とあり、許六の「風俗文選」作者列傳にも武名松尾甚七郎とあるから、先づ慥かな名であらう。甚七、甚七郎の略稱か。香月半山の野坡に賴まれて書いた碑文に、「桃青子姓松尾字甚質云々」とあるは甚七の書き換へであらう。「一代錄」・「大系圖」に見えてゐる。藤七郎、沾涼の「綾錦」に松尾藤七郎とあるし、千梅の「自娛文艸」芭蕉塚碑文にも松尾藤七郎とあつて、やゝ信じられさうであるが、「類聚名物考」に、「一世には藤七郎と覺えたるもあり。是は誤なり。云々」とあるから一寸惑はされる。友七郎、「一代錄」に出るが、私の憶說では、藤七郎の藤の草體は友七郎の友の字に似てゐるから、之を誤つたものではなからうかと考へる。半七郎、「繪詞傳」に芭蕉全傳を引き、「藤堂家には半七郎と呼べり。云々、」又「次郎兵衞物語」に、「御名を殿樣より半七郎と御付けなされ、云々」とあるが詳かでない。半七、「春秋」に、「是恐ラクハ誤ナラン。其故ハ兄ヲ半左衞門ト云ヒ、芭蕉亦半七ト呼ブ時ハ、兄弟同字ヲ通稱トス。父子同名ヲ呼ビ、亦同字ヲ呼ブハ世ニアレ共、兄弟同

字ヲ呼ブ事未ㇾ聞。思フニ半七ハ兒半左衛門ノ初名カ。」とある。之によれば半七郎の名も甚だ疑はしくなる。甚四郎、秀三の「一代集」に杉風日記（杉風秘記）の文を引き、「松尾甚四郎殿伊賀より云々」とあるが、之は甚七郎の訛音ではあるまいか。忠左衛門・忠右衛門、之は二つ名がある譯ではなく、どちらか一方なのだらうと思ふが、種々說があつて一定しない。先づ忠左衛門からいふと、「繪詞傳」に、「後に名を更めて忠左衛門と云」、「略傳」に、「後改めて忠左衛門宗房と稱す」、素外の「古池蛙之詞原」に、松尾忠左衛門宗房、「一代録」に、「遺髮の御供松尾忠左衛門云々」、玄々一の「俳家奇人談」に、「今高野山報恩院の過去帳に從て忠左衛門となす。」、「春秋」に、奇人談の說を引き、「是明證也。高野山ニ至ラン人猶可ㇾ尋。」月化の「秋風庵文集」芭蕉翁略傳に、「忠左衛門を是とすべし。云々」とあつて、どうやら忠左衛門說の方が正しいやうにも思はれるが、竹二坊の「正傳」に、「報恩院の過去帳にも松尾忠右衛門殿と記して今に殘る。云々」とあり、去留の「全集」、沼波氏の「芭蕉全集」、勝峯氏の「俳句定本」、「江戸名勝圖會」等にも忠右衛門とあつて、實際報恩院の過去帳を見たらしい口吻で書いた玄々一や竹二坊が、一は忠左、一は忠右とあつて、どちらが正しいか惑はざるを得ない。新七、素連の「春秋」に、「一書ニ注ス。是誤也。其故ハ芭蕉ノ古主ヲ新七郎ト云フ。何ゾ其臣トシテ其主ノ名ヲオカサン。是ハ古主ノ名ト混交ナシタルノ僞說也。」とある。三八、之も「春秋」に、「一書ニ注ス。是モ亦其據ヲ不ㇾ知。」とある。源七郎、「久夢日記」に松野源七郎とあるが、刊行會本であるから誤植かも知れない。松野は不思議である。

以上古書に見えた芭蕉の通稱はこれ位あるが、改名の順序は全く分らない。たゞ慥かな所は金作は幼名で、忠

左衛門は成人してからの名であらう。「一代錄」に、童名金作、承應二癸巳年十七歳（承應二年は芭蕉十歳に當り、十七歳は誤である）、改名して友七郎と云ひ、後半七と改め、又甚七と改め、其後忠左衛門宗房と改めたとあるがどうかと思ふ。「次郎兵衛物語」には、「芭蕉御出生なされ、幼名を與作樣と申候。餘り御出生の時より御病身にて候故、御二つにて金作樣と改めさせられ候。……十五歳の時元服仰付けられ、御名を殿樣より半七郎と御付けなされ……半七郎樣十七歳の御時、御名の御本家の御緣家に紛らはしき御名御座候とて、藤七郎と御改名なされ候。又後三年して忠右衛門と改名したまふ。以上五度御名かはり給ふ。云々」とあるが、此物語は小說めいたものであるからどうかと思ふが、參考迄に引用して置く。素蓮は「春秋」に、「按ズルニ、世ニ更名(カイメイ)スル者アリトイヘドモ、如此何ゾ名ヲ改メン。思フニ是ハ芭蕉ノ同胞(ハラカラ)或ハ一族等ノ通稱ト混交ナシタルモノナラン。」と論じてゐる。或はさうかも知れない。私は後人の誤傳や書寫の誤も多く入つてゐるのではなからうかと考へる。

芭蕉は寛文頃迄名乘の宗房を俳號とした。名乘を直に俳號とする事は貞門の習慣で、その頃同名異人の宗房は他にもあつた。宗房は先祖の宗清の一字を取つたものだらう。延寶四年頃から桃青を號とし、天和元年頃芭蕉庵桃青と云ひ、以來芭蕉とも桃青とも用ひた。又宗茂とも云つたといふ說がある。許六の「宇陀ノ法師」に、「先師伊賀に住める比、釣月軒宗茂、泊船堂宗房など書きなぐりの反故など拾ひて、云々」とあるし、湖中の「略傳」に、「芭蕉在京東山の麓に居住」の條下にも、「宗茂とも書かれしと云。」とあるが詳かでない。

芭蕉の庵號は種々あつた。釣月軒、之は許六の說もあるが、芭蕉の「貝おほひ」の序に見えてゐるから慥かで

ある。釣月堂、沾涼の「綾錦」にあるが諸集に見えない。泊船堂、芭蕉が伊賀に居た頃書きなぐつた反故にあるといふ許六說や芭蕉在京中東山の麓に住んで泊船堂桃靑と云つたといふ湖中の「略傳」說は疑はしい。泊船堂は芭蕉庵の一名で、深川の水鄕でなくては釣合はぬ事と思ふ。詳しくは後章にいふ。宇陀ノ法師、湖中の「略傳」に芭蕉在京中の號のやうに記してあるが信じられない。素蓮の「春秋」に、「芭蕉未俗躰ニテ此稱アル事極メテ穩ナラズ。宇陀ハ素大和ノ郡名ニテ、宇多・宇陀ト通ジ用ヒテ、多・陀ニ別義ナシ。サレバ天子ノ謚號ニシテ、後人此二字ニ於テ憚カラザル事ヲ不レ得。又法師ハ僧階也。凡俗ノ身トシテ此稱アルベカラズ。其密ナル理ハ雜阿含經・十住婆沙論等ノ釋書ヲ讀ミテ可レ知。抑此邪稱ノ據ル所ハ、許六が編集ノ宇陀ノ法師ト云フ書名ニ發レリ。愚年十歲ノ頃此書ヲ讀ムニ及ビテ、題號ノ義ヲ問フ。或人答ヘテ曰、宇陀法師ハ芭蕉ノ名也。許六師ノ名ヲ書名ニセシト云々。是一書ノ說（湖中の略傳の說らしい）ニ先立ツコト數年ナレバ、邪說ノ傳ハリ來ルノ久シキ事知ルベカラズ。云々」とある。天々軒、「俳人芭蕉」に、「天々軒桃靑の名は「江戶三百韻」に於て揭げられき。」とある。之は詩經の桃夭篇から附けた號であらうから、桃靑號に改つてからの事である。坐興庵、芭蕉が延寶六年人の需に應じて、「六番句合」、「十二番句合」の判をした跋にある號で、山崎氏は坐興庵を芭蕉庵の一名としてゐるやうだが詳かでない。栩々齋、延寶八年其角の「田舍ノ句合」の嵐雪の序に、「桃翁栩々齋にゐまして云々」とある。當時芭蕉は三十七歲、翁といふ尊稱は既にこゝに始まつてゐる。華桃園、同年杉風の「常盤屋句合」の芭蕉の跋に出てゐる。芭蕉洞、天和三年刊「虛栗集」の跋に芭蕉洞桃靑とある。芭蕉庵といふべきを、當時の趣味として大袈

裟に云つたものであらう。素宣・風羅坊、天和初年芭蕉剃髪の際の號のやうであるが、剃髪の年代に就いて異說多く一定しない。路通の「俳諧勸進牒」(元祿四年刊)に芭蕉を風羅坊とする。詳しくは後章參照。杖錢、白雪の「俳諧曾我」(元祿十二年刊)に芭蕉翁杖錢とある。野桂の記錄に、印章の冠旁に杖頭錢とあるものがあると。鳳尾・羊角・羽扇・是等は專ら自書の印章に用ひたものらしい。集には見えぬやうだ。

第二章　仕官時代

第一節　芭蕉の主家

伊賀の上野は文祿年間筒井定次の居城であつた。定次は伊賀侍從と稱し、羽柴姓を賜はつた人であるが、荒淫度なく、家臣中坊飛驒と爭ひ、ために領土を沒收された。之は慶長十三年の事であつた。その跡へ伊豫宇和島の城主藤堂高虎が伊賀・伊勢の內に封ぜられる事となつた。それは同年冬であつた。「寛文印知集」卷之三に、伊賀國拾萬五百石、伊勢國（安濃・一志・奄藝・鈴鹿・河曲・三重・飯野・多氣八郡之內）拾七萬四百拾石、其他都合三拾二萬三千九百五十石とある。「俳人芭蕉」は延寶三年良忠の子良長が生家に差出した「新七郎書上」、「新七郎家乘」の記錄によつて說明して云、「慶長十六年高虎伊賀の國上野城を修め、一族良勝をして之を守らしめ、祿五千石を給しぬ。大阪の役良勝はその臣松尾甚兵衞等と共に討死しければ、良勝の子宗德時に年十五、封を襲ぎて名を良精と更む。その子良忠相續ぎて上野城を守る。」とあるが、樋口氏の研究によると、藤堂新七郎は上野城代の家でなく、最初の城代は藤堂出雲高淸で、之を出雲家と稱し、後藤堂釆女元則が代つて、之を釆女家と稱し、維新の際まで此家が城代であつた。新七郎良勝は藤堂家血緣の家でなく、政略上藤堂姓を名乘らせたものに

過ぎぬらしい云々とある。尤も梨一の「奥細道菅菰抄」の「芭蕉翁傳」には、「同國上野の城士藤堂新七郎良精の臣となり云々」とある。此良精が即ち芭蕉の仕へた主君で、上野町山溪寺に葬られたものらしく、墓に興雲院袢岳全單大居士、延寶二甲寅年五月二十四日とあるといふ事だ。良精歿してその子良忠跡をつぐ。良忠は通稱主計、蟬吟と號し、芭蕉の專ら仕へた人である。良忠と芭蕉との關係は別項に詳述する。良忠歿し、良長家をつぐ。探丸といふ人は卽ちこの良長で、「略傳」や去留の「全集」等によると、良忠の子となつてゐるが、「春秋」には探丸は蟬吟の弟で、兄早世して世を襲ぐとある。秀三の「一代集」の芭蕉翁傳に、「伊賀上野藤堂修理、探丸といふ此人か」とあつて、蟬吟の父の號にしてゐるのは誤であらう。

芭蕉は貞享五年春探丸を訪れ、「さまざまのことおもひ出す櫻かな」といふ句を作つてゐる。此發句は支考の「笈日記」に、「古主蟬吟公の庭前にて」とあり、竹二坊の「正傳」には、探丸子の別墅に花見の催しがあつた時の事になつてゐる。脇を探丸が附けて、「春の日はやく筆にくれ行」とある。この筆跡軸となり、藤堂家に傳はつてゐるといふ。探丸は舊主の弟ではあるが、芭蕉の門人であつた。「猿蓑」に五句入つてゐる。

一夜〳〵寒き姿や釣干菜

魚のかげ鵜のやるせなき氷哉

わきも子が爪紅粉殘す雪まろげ

やぶの雪柳ばかりはすがた哉

山鳥や躑躅よけ行尾のひねり

蜻蛉や何の味ある竿の先

（續猿蓑）

技巧の勝れた風が見える。依兮の「芭蕉門古人眞蹟」に、探丸・拙許・式之の三吟歌仙一巻が出てゐて、芭蕉が點をかけてゐる。

藪かげや一本手折水仙花　探丸子

遠近に聞餅搗の里　拙許

掛り舟山の尾崎を漕連て　式之

鶴の羽を伸す夕ぐれの月　丸

秋半短き市を歸る牛　許

蓑干墳に萩咲にけり　之

荒庵よし有げ成僧守て　丸

池水の水鶏扣く夜すがら　許

空燒の蚊屋打しめる私語　之

禿いくらの歌がるたとる　丸

松かげの行器の紐を解散し　許
四ツの時計に能の半入　許
薄々と初秋月のかたぶきて　丸
小坊見付る雲の稲妻　許
鯉飛や殘暑涼敷橋の上　之
鄕に藥うつ音のこつ〳〵　丸
花の香に野路の座頭の杖つきて　許
明日は戀死なむ朧夜ノ君　許
紐臥る敵うらゝかにかね黑シ　丸
鷗うきつく波あはれ也　許
鳴神に麓も獄もうち曇　許
聖の語る卵塔のうち　丸
犬蓼にのこる螢も覺束な　許
月に狸の罠を懸ヶ置　許
霧くろく匂る瀧の落る音　丸

守なき堂に紅葉まいらせ　許

かゝるけしきこの春おほく見申してあはれ催し候

胎ぬる妹が男子(ヲノコ)待にけり　許

東の留守のおもひ書文　丸

付やうふるめき候か

痩果る一重の花の咲兼て　許

鳴つゞきたる蛙つくばふ　許

飛廻る岡の鴯の塵くはへ　丸

竹簀戸細く明懸し門　許

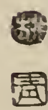
風の葉もなき柿の枝をれて　許

ねかねて猫の日影はかなき　丸

川岸(カシ)に積米に

借端の俵の雀むれ渡り　丸

釣垂笠の岸にうなづき　丸



伊勢安濃津の城主藤堂高次の二子に、藤堂佐渡守高通：任口と號する人があつた。勢州久居の城主で、寛文十一年十月京より北村季吟を招き、俳諧を學び、「久居八百五十韻」・「百番誹諧發句合」等の家書があつた。季吟の「續連珠」（延寶四年刊）に、

久居任口公へまゐりて

狩くらし月をえものゝ小鷹哉　　季吟

勢州久居にふたゝびいたりて

二度見るや名月にます殿作り　　同

勢州久居といふ所に任口のきみいみじき殿作りして
すみ玉ひけるにめしありて、彼地にまかりて、

此ところひさしかれぬや翁草　　同

おなじなりにかの地にて

くだら野も今やしらきの殿造ツクり　　湖春

などとあつて、季吟父子は餘程公の信任を厚うしてゐた。「甲子夜話」に、「藤堂家久居と名張と合せて三方と稱したりき。役かくる時彼三方の相談にて極るよし。云々」とあるから、藤堂家でも大切な親藩の一つで、石高、五萬三千石を領し、居城の壯觀、季吟の歎賞も强ち追從ではあるまい。なほ「百番誹諧發句合」（任口の發句を合せ、季吟の判詞を加へたもの）季吟の跋（延寶七年孟夏中八月）にも、

任々尊公、としごろ日比の御口ずさびをつがひて、百番の誹諧發句合となして、其判詞を仕るべきよし仰をかうむれり。身不徳に、心愚にして、其はゞかりあさからずといへど、其さき〴〵もしたしく御前にめされて御會をさばき、百韻の點をも合せ馴つかうまつりしにならひて、此たびも拜見するに、云々

とある。任口と季吟の對面が寛文十一年だとすると、蟬吟と季吟との關係はそれより以前であつたから、季吟と藤堂家との關係は久しいものと云はなければならない。從つて伊賀・伊勢の俳諧が、季吟風によつて指導され、感化された事は當然であつた。「續連珠」に伊勢國廿九人とあつて、任口は付句一、發句十五入選してゐる。その內より

春はたちすゑながみつの始かな　任口
門松の本とやいはふ江戸の春　同
ほだわらや取初祝ふ五萬年　同
をのが色ぞ青のりかづくあま蛙　同

蚊はさそと戸さゝでみるや夏の月　同

もしかはゞ芋在月や三百貫　同

見る人のほうあてなれや三ケの月　同

正立始て勢州に來たりしに

父よ兄よ花の筋ある弟草　同

山田にかり寢し侍りて

いねよやな今夜山田のかり枕　同

れん飛か月の輪をこす天津雁　同

草深くすむ姥鳴は隱居哉　同

季吟に始てあひて

染ばやとまつに北村しぐれ哉　同

季吟もとにつかはしける

築山も吉野で候よ雪の花　同

雪中に王子と云ふ所へ行侍りて

雪ふればこゝも白壁の王子哉　同

季吟もとより、伊勢海老や貴方に向つて祝日といひこ

されし返事に、

國のかざりよそのみやこ草　同

「百番發句合」の勝句の中から抄出する。

武藏野や邦幾千里とみよの春　任口

かぞいろを祝して

濱主に猶こす年や父母の春　同

勢州にて

若菜つむ祝儀やこゝの野田野村　同

鶯のうたは紅梅のおとゞかな　同

庭の池に白鳥のむれゐるを見て

白鳥やする花かづく水の上　同

花をふんで足引ならむ山もなし　同

春駒の雪間をひくは月毛かな　同

青梅は世にもすぐるゝ風味哉　同

かたるなよ駕籠より落と美人草　同

今年始てたままつりし侍て

去年までは踊を見しを玉祭　同

參宮しける道の程にて雨はれければ

秋風や雨雲すいて櫛田河　同

あすはあすけふは興有月見哉　同

季吟京よりきたるに雲出河の鮎をみせて

鮎は何とさが松だけに雲出河　同

大坂より梅翁きたりしに

老の旅猶ゆき〱に大儀哉　同

年の内に春はようこそ來たりたれ　同

言葉の洒落や物語・古歌の通俗化が重なる興味の中心であるが、取成も不卑て居らず、上品な雅かな句風は、さすがに大名の氣品を表してゐる。季吟の判詞は少し賞め過ぎてゐる嫌はあるが、日頃恩顧を受けてゐる大名ではあるし、階級觀念の强い昔時の習慣もあるから、餘り咎められまい、任口は元祿十年八月九日逝去。行年五十四。

芭蕉は此任口とは面識がなかつたらしい。

當時藤堂任口と同號の人に三人あつた。一は伏見西岸寺三世如羊和尚の任口で、之がよく藤堂任口と間違へら

れる。伏見の任口上人は芭蕉の友人らしく、芭蕉も貞享二年春伏見に至り、任口に逢つて、「我衣に伏見の桃の雫せよ」と詠んでゐる。連歌は里村昌程門、俳諧は松江重頼門。其角の「雜談集」に、「大かたの月をもめでし七十二」其他の句が出てゐる。貞享三年四月十三日寂。天明四年任口の一百年忌に當り、几董は「桃のしづく」といふ追善集を出してゐる。次は友次の「阿波手集」に、名古屋の人加藤氏信屋といふ任口がある。

料らるゝ鹿の子や二度のはらでもり　名古屋加藤氏信屋　任口

次は䄇政の「知惠袋」に

豊かなる代や丸腰の人のはる　任口子　一出

とある。

第二節　芭蕉と蟬吟

芭蕉が藤堂家に仕へたのは何時頃かといふと、之には承應説（芭蕉九歳—十一歳）と寛文二年説（芭蕉十九歳）とある。前者は支考の「本朝文鑑」の芭蕉翁石碑銘並序の記事を始めとして、素蓮の「春秋」、錦江の「芭蕉翁傳」等之に從ひ、後者は竹二坊の「正傳」、去留の「全集」、湖中の「略傳」、五柳の「芭蕉全傳」、瓊音の「芭蕉全集」、晋風の「俳句定本」等に見え、一般の說であるらしい。併し異說もあつて、「一代錄」は明曆年中とし、秀三の「一

代集」、「梨一の芭蕉翁傳」は萬治三年（芭蕉十七歳）近仕とある。尤も「次郎兵衛日記」の六歳奉公說は當になりさうもないし、「蜚錦抄」の「承應の頃は年いまだ十八九なるべし。」は誤である。

考へて見ると、支考の承應說も竹二坊の寛文二年說も、確たる根據があつて云つたものか分るまいと思ふ。承應說は彝庵のいふやうに君臣の情誼が普通でないといふ推測から、且つは直弟支考の記錄もあるといふ所から、葛飾派では此說を信じてゐるやうだが、支考の言の信じられぬ場合もあり、十九歳から仕へたとて、君臣の情誼に厚薄のあるわけでもあるまいから、今遽に信ずる譯にも行かないが、蟬吟の逝去に際して殉死すべき人であつたり、高野山へ遺髮を奉じて、やがて主家を脫退したり、元服して忠左衛門（去留云、其頃武家の風にて寵遇ある臣には主の名乘の一字を賜はる事あり。云々）と改めたりするやうな說の傳はつて居る所を見ると、幼時より仕へて居つたと考へたくもなるのである。此點から推測すると寛文二年說は物足りなく思はれるが詳かでない。

芭蕉は藤堂家に仕へたとしても、先に良精の臣となり、後に其子良忠に仕へたものか。或は良精に仕へると同時に良忠に仕へたものか。その點もぼんやり傳はつて居る。竹人の「全傳」には、「幼弱の頃より藤堂主計良忠蟬吟子に仕へ、云々」、去留の「全集」には、「主計良忠に侍せしむ。……常に側に置きて、云々」、錦江の「芭蕉翁傳」には、「子息良忠に仕へて小扈從を勤む。云々」とあつて、大方良忠の近侍であつたやうにあるが、「老の樂」の破笠說では藤堂家の料理人となつてゐる。とにかく武士と云つても地位の低い者であつたに違ひない。

芭蕉は明曆三年即ち十四歳の時、「犬と猿の世の中よかれ酉の年」といふ句を作つたと、梨一の「菅菰抄」中の

芭蕉翁傳に見えてゐるが信じられない。西武の「鷹筑波集」(寛永十五年刊)に一葉子の句として、「犬と猿のなかだちなれや酉の年」といふのがあり、又立圃の發句に季吟の點をかけたもの(疑はしいが、大判の薄葉六七枚位の寫本、或は二世立圃の句か。)に、「犬と猿の中もよかれや酉のとし」といふのもあつてどうかと思はれる。去留の「全集」に、

良忠誹諧を北村拾穗軒季吟に學び、蟬吟と號す。翁を京へ使とし、添削を乞ふ事數多たびなり。この時より翁も吟師の門に入らると云。一說には良忠和歌を好み、中院家の弟子たる故、翁をして京へ遣し、添削を乞ふ事たび〳〵なり。よつて季吟にもまみゆる事を得て、その門に入りたりとも云。

素蓮の「春秋」の良忠傳にも、

和歌ヲ嗜テ冷泉家ノ教ヲ受ケ、京ノ季吟之ガ師範タリ。亦誹諧ヲ好ミテ名ヲ蟬吟ト云。同ジク教ヲ季吟ニ受ク。此時芭蕉君命ヲ奉ジテ、季吟ガ家ニ使シ、同ジク學ビテ教ヲ受ク。云々

蟬吟が洛の季吟に教を受けた事は事實であるが、芭蕉が蟬吟の使者として季吟を訪れた事に就いては確證を得ない。蟬吟が季吟に俳諧を學んだといふ事は、寛文五年貞徳十三回忌追善を營んだ時、季吟と百韻を卷いてゐる事でも推測されるが、山崎氏の說の如く、或は新玉津島社說の如く、芭蕉が新玉津島に往來して、季吟の弟子となつたといふ說は信じられない。季吟の「新玉津島の記」や石倉氏の「北村季吟傳」に據ると、季吟が新玉津島へ移つたのは天和三年二月十四日の事であるから、芭蕉が君命を帶びて、寛文の前後季吟を新玉津島社內に訪れる道理はない。或は君命で上洛した事はあつたとしても、それは新玉津島社內でなく、他の場所でなければなるま

い。芭蕉が季吟に師事したといふ事も確證に乏しいが、たゞ一つ證據がある。それは延寳八年の「田舍之句合」の芭蕉の判詞に、「喚子鳥、予先年、吟先生にまみえて、此事を尋ね侍れば、云々」とあるし、土芳の「三册子」中の「黑ざうし」に、「呼子鳥の事、師の曰、季吟老人に對面の時、御傘に春の夕ぐれ梢高く來て鳴く鳥と思ひて句をすべしとあり。貞德の心いかにと尋ねられしに、老人のいはく、貞德も古今傳受の人とは見えず。全く句をせざる事也といへるよし、師の話あり。云々」ともあるから、直接芭蕉が季吟に教を受けないとは云はれないが、はじめは直接な關係ではなく、間接に主君蟬吟公を仲に置いて、例へば季吟が蟬吟の家へ招かれた時、近侍してゐた芭蕉も季吟と出會ふやうな事があつて、教を受け、それが追々深く親しくなつて來たのだらうと考へる。沾凉の「綾錦」には、菊岡隨性軒如幻が導いて、季吟の門人にさせたといふ異說がある。

蟬吟と芭蕉、之は二人共文學好きの主従であつたから、「略傳」說の如く、或時は宗房を呼んで、月花に遊んだ事もあつたであらう。竹人の「全傳」に、

寛文五年(翁二十二歲)の冬、貞德十三回忌の追善に、

野は雪にかるれど枯ぬしをん哉　蟬吟子

鷹の餌こひと音をばなき跡　季吟

共百韻に翁の句十八の中

日暮るゝまで汲むもゝの酒

ならで通ふはむしやうやみの夜
有明の影法師のみ友として
竹弓もいまは卒堵婆に引替て
なにの風情もな飯ばかりぞ

これらみな〳〵若年の作也。則島羽の里實相寺に書寫し納めて今にあり。云々

とあつて、芭蕉も貞德の追善會に列席したと見える。かういふ關係だから、芭蕉は常に蟬吟と俳席を共にした事は想像に難くないのである。蟬吟の句と芭蕉の句とを比べて見ると、その感化の大きかつた事は後章に述べる。

蟬吟は寬文六年四月早世した。芭蕉二十三歲の夏である。蟬吟逝去の年齡に就いては全く不明である。「一代錄」には、「寬文三癸卯年四月、はからず主計助十九歲にて世を早うし玉ひ、云々」とあり、伊賀の傳へには、正保三年に生れ、二十一卒去とあり（樋口氏硏究による）、魯庵の「桃靑傳」には、「明曆三年には芭蕉十四歲の少年にして、蟬吟は凡そ十歲の年長なれば、云々」とあるが、「次郎兵衛物語」には、芭蕉と同年にして、「御病氣もなく御急死被成候（此御急死の事故有て不記）」と云つてゐる。墓は上野町山溪寺、法名貞眞院實叟宗正居士とあると（樋口氏硏究）。

第三節　寛文の伊賀の俳諧

一、蟬吟・芭蕉・伊賀衆の俳諧

寛文の伊賀は俳諧の流行した地方であつた。殊に上野町は藤堂蟬吟の如き數寄者が居たから最も流行したやうだ。今當時の撰集によつて作者及び句數をあげると、重頼の「佐夜中山集」(寛文四年刊)に、伊賀上野之住として九人、即ち淨蓮寺知覺(一)・押川氏三畏(二)・西之丸西海(二)・窪田氏政好(七)・松尾氏宗房(二)・淺井氏未分(一)・櫻井氏重山(九)・保川氏一笑(六)・蟬吟(一)、湖春の「續山井」(寛文七年刊)に、伊賀國三十六人として、政好(付句七・發句卅四)・一留(付句三・發句廿六)・一笑(付句十二・發句卅六)・宗房(付句三・發句廿八)・野也(付句一・發句一)・蟬吟(付句四・發句廿九)・求笑(一)・義正(一)・三畏(四)・政長(一)・式之(五)・三列(一)・政好妻(二)・夏水(七)・宗興(一)・一以(四)・守直(一)・意見(一)・宗良(四)・忠頭(一)・一妙(一)・良光(一)・雪海(一)・惟正(一)・未分(二)・重山(十二)・正頭(二)・如心(三)・聖英(三)・市隱(四)・一尤(付句一・發句七)・吉之(二)・路休(一)・了壽(三)・光甫(一)・志計(二)、加友の「伊勢踊」(寛文八年刊)の作者句引伊賀之部に、一樂(一句)・重兼(一句)、正辰の「大和順禮」(寛文十年刊)に、伊賀之作者十一人として、正好(十一、政好トモアル)・一笑(五)・一静(六)、(本文ニ、伊賀上福山氏一静トアルハ、野ノ字ノ假名ヲ略シタノダラウ。)・

[上野岡村氏]清房（五）・[嶋ケ原住]性道（二）・[上野菅沼]重則（二）・[上野中村氏]海霜（一）・[嶋ケ原住]閑獨（三）・[上野氏女]了壽（一）・[上野山岸]宗貫（一）・[上野住]宗房（二）、「耳無草」（嘉永六年堤隣老人の識語に、寛文年間の發兌也とある。）に、蟬吟・野也・眞劔・志計・宗房等の句も見え、芭蕉の「貝おほひ」（寛文十二年作）には三十七人（大方上野の人だらう）の作者を集めてゐる。以上の中櫻井重山最も著れ、次で窪田政好・保川一笑など上手な作者であつた。「大系圖」によると、重山は重賴門、櫻井軒と號し、勢州久居の藤堂家の臣、本土は伊賀上野の人であつた。寛文十三年「はなび草」・「くるゝ」・「御傘」の三部を合せて、「公界集」といふ書を編んだ。要するに季吟の撰集に伊賀衆の句の多く取られてゐる事は注意すべきで、或は以上伊賀衆の多くは季吟門であつたかも知れない。伊賀衆の主なる人の句を次にあげて見よう。

亥年

謎にかけてとかば今年やかながしら　政好
花見るや參宮幸伊勢櫻　同
生れながらすす行者なれや梅法師　同
ゆかりもや秋來ては朱々さつた山　同
荷葉をやか樣に名高き支那の蓮　同
君が春やかぞへもしらじ算ケ日　同
つむ野邊の雪も解けたるなぞな哉　同

花鳥の色音より目に月夜哉　同
谷をてらす梅やあぢすきたかひこね　同
花咲やかく別世界極樂寺　同
吹風の口かためたし花盛　同
御幸又あれかし花のふるの瀧　同
あつもりは物かくまがへの花の顏　同
雲雀毛の駒もとび立春野哉　同
花の宿は盃母もかへじ隣草　同
姫ゆりと又姫瓜や御兩人　同
夕がほにいらつひるまのへだて哉　同
ほぞんかけの女鳥も鳴ぞ時の鳥　同
三かいはゆい一色のもみぢかな　同
手折ねど二つかねある棗哉　同
凪の手のねゝをさせつる小萩哉　同

宇治にて

伊勢武者があじろにかゝるこい紅葉　同

付句

土に埋れてのこる旗竿

葬道は哀やたれが跡ならん。　同

晩に出合ん約束をする

堪忍ももはやならざるからかひに。　同

〇

北窓に北斗の星か梅の花　一笑

鶯や春告鳥の申つぎ　同

人は胸螢は尻に思ひかな　同

客のためあたほたたくや雪の宿　同

みだならで花ぞ道びく日ごくらく　同

花や美女霞やのろし笑顔　同

眠る蝶やさんごの枕玉椿　同

ふつつりと風の手切た暑さ哉　同

まける藤やくりから不動夏木立　同
あもなるや七夕にそなふ萩の花　同
こよひさんごくもらぬ月はこはく哉　同
桂男きんかゞ光るひたいつき　同
庭にかきて捨がなとなすいろは哉　同
雁陣になびかす雲のはたて哉　同
芦の穗と寒さはいづれ雪のわた　同

付句

いせは大和に親もたりけり
春雨のふるのゝ櫻ひともして。　一笑
みめにはつかでえりにこそつけ
おしろいは首筋くだり流れ落。　同
はねける鯉の勢を見よ
龍門とかなにて書ける筆道に。　同

○

鳥を以て春に成ける今年哉　一留
風の前にかた酢をのむや梅の花　同
花の紐はとかれおそかれ春の風　同
花見には人にかくれんぼうしかな　同
まとふ軒を我妻とてやじゆふがほ　同
蟲けらや夏は人眞似蟬衣　同
晴れし夜を得たりやあふせ雨の星　同
歌人はいつきかし月のこよひ哉　同
月は眼桂男はひと見哉　同
散うせてかきけすやうないろ葉哉　同
咲けや咲け待つとしきかばかへり花　同
浪や鼓はんまちどりの足拍子　同

付句

散る花もそつじにふませたまふなよ
あの梅こそはとらの尾ときけ。　一留

見つけにけりな盜人のかは

瓜畠にむき散らしたるあと有て。　同

○

むかし〳〵祖父や植し姥ざくら　重　山

男女共に春は楊貴妃の花見哉　同

蜘の家や夏草村の新在家　同

池の面は底より上る落花哉　同

時しらぬ花はふしぎや遲櫻　同

金衣鳥きんも有ける啼音哉　同

渡りみるや盧外をかへりみつの月　同

をのづから天上くりや月の弓　同

月の鏡とぐや木末の栢榴粒　同

人心空にもなるや木練柹　同

松のつらゝ只白藤のながめ哉　同

をし鳥は波をたゝみの床寢哉　同

○

植て見よ榮ん土生金銀花　西海
雪つぶて打つ子や五つ六つの花　同
梅が枝や北野の宮も南むき　三畏
柑子門を出るや軒の大かざり　同
年玉や春明ぬれば暮る物　式之
いもの子の茶入袋か絹かつぎ　同
山姫の餅花なれや木々の雪　夏水
ながれあへぬ紅葉や岩にこゞりぶな　同
花やえむ念比ぶりの春の雨　宗良
木の目にもかゝる霞やうばざくら　路休
花と顏をあはをによるや糸櫻　了壽
花の色はうつりにけりな澤桔梗　未分
子規島の道より花車な音色哉　一妙
螢火や闇に地黒のとびかのこ　惟正

みぞれしてよろめく枝やさゝの醉　正次

以上見渡す所、伊賀衆の風調は、取成か見立、或は古事・古歌の通俗化で、つまり言語の連想上の興味が主である。蟬吟の句は從來「大坂や見ぬ世の夢の五十年」とか、「そり高き霜のつるぎや橋の上」とかしか一般に知られてゐなかつたが、「耳無草」・「續山井」等を見ても二三十句はあらう。

めでたいぞざれ言のけて御代の春　蟬吟

本尊かけ高念佛か時鳥　同

地をするは根亂れ髮の柳哉　同

散つくし手持わろいか花の風　同

門禮や餝松さへ立ながら　同

大ふくの茶もゆづり葉をいはひ哉　同

夷中にも京有興あり月と花　同

みとれぬる顏もやゝよめ八重櫻　同

雨露の恩や思はずしらず遲櫻　同

一留に逢て

鶯の歌にはへたのかはづ哉　同

子ゆゑにぞ雉はほむらを焼野哉　同
野をやくや蝶の眠の鼻ふすべ　同
夏木立藤をやつかの片手巻　同
内甲みてや折とる鎧草　同
水打は火の用心かほたるかご　同
月もうき出入のある雲間哉　同
二なりか男山なる女郎花　同
いこま山の霜は馬のりばかま哉　同
階の霜は袴のひだめ哉　同
霜柱日あたるかたや几帳面　同
霰降庭や白地の惣鹿子　同
餅のかはむくとやいはん雪丸げ　同
山窓の木の葉や凪にふつとこみ　同
犬櫻小春にさくやはなかへり　同

付句

妻子は里に忍ばせて置　蟬吟

なまぐさや道心がほはさしますな。

我は人人は我事たがひ事　同

同じやう名はよびまがふらし。

とてもよいしゆのまねはなるまい　同

馬は馬うしは牛づれ我らづれ。

長あくびしてうてる手拍子　同

たそたてゝこいちやにて目を覺さうに。

發句は大方取成とか、見立とかいふ、言語の連想から來る滑稽味を表してをり、付句は前句を說明するやうな事を云うてゐる。かゝる風は當時の伊賀俳諧の風であつて。獨り蟬吟に限つたわけではないが、さすが取成・見立が下品でない所は、殿様だけの雅趣を見せてゐる。

宗房の句風はどうであつたか。次に「佐夜中山集」・「續山井」・「大和順禮」・「耳無草」・「貝おほひ」等によつて抄出する。

姥櫻さくや老後の思ひ出　宗房

月ぞしるべこなたへ入せ旅の宿　同

花の顔に晴うてしてや朧月　同
盛なる梅にす手引風も哉　同
あちこちや面々さばき柳髮　同
餅雪をしら糸となす柳哉　同

花の本にて發句望れ侍て

花に明ぬなげきや我が歌袋　同
春風にふし出し笑ふ花もがな　同
なつちかし其口たばへ花の風　同

初瀬にて人々花みけるに

うかれける人や初瀬の山櫻　同
糸櫻こやかへるさの足もつれ　同
風吹ば尾ぼそうなるや犬櫻　同
花は賤のめにもみえけり鬼薊　同
降音や耳もすう成梅の雨　同
杜若にたりやにたり水の影　同

夕顔にみとるゝや身もうかりひよん　同
岩躑躅染る泪やほとゝぎ朱　同
しばしまもまつやほとゝぎす千年　同
秋風の鑓戸の戸やとがりこゑ　同
七夕のあはぬ心や雨中天　同
たんだすめ住ば都ぞけふの月　同
荻の聲こや秋風の口うつし　同
寐たる萩や容顏無禮花の顏　同
月の鏡小春にみるや目正月　同
時雨をやもどかしがりて松の雪　同

子におくれたる人の本にて

しほれふすや世はさかさまの雪の竹　同
霰まじる帷子雪はこもんかな　同
霜枯に唉は辛氣の花野哉　同

見馴河　吉野郡

五月雨も瀬ぶみ尋ぬ見馴河　同

宇治山　山邊郡

うぢ山や外樣しらずの花盛　同

きても見よ甚べが羽折花ごろも　同

女をと鹿や毛に毛がそろうて毛むづかし　同

雲とへだつ友かや雁の生わかれ　同

命なりわづかの笠の下涼み　同

付句

かたに着物かゝる物かはうき難所

今をたちうげとあつき日の岡。　宗房

後世ねがひとみ侍がた

しやかの鐙あみだやすりのつば刀。　同

賤が寢さまの寒さつらしな

おだ卷のへそくりかねて酒をかはん。　同

宗房の句風もやはり取成・見立多く、言語の滑稽、通俗な連想の興味が、主なる表現の目的であつた。なほいふと

古歌の語句に據つたものには、

花に明ぬなげきや我が歌袋　　宗房
うかりける人や初瀨の山櫻　　同
花の色はうつりにけりな澤桔梗　　未分
流れあへぬ紅葉や岩にこごり鮒　　夏水
伊勢武者があじろにかゝるこい紅葉　　政好
年玉や春明ぬれば暮る物　　式之

があり、梅に對して酸いといふ緣語を持つて來たものは、

盛なる梅にす手引く風も哉　　宗房
風の前にかた酢をのむや梅の花　　一留

の例もあり、花が笑ふといふ意味のものには、

春風にふき出し笑ふ花もがな　　宗房
花は美女霞やのろし笑顏　　一笑

といふ句もあり、風にその口をかばへてやたらに吹くなといふ意味のものには、

夏近し其口たばへ花の風　　宗房

吹風の口かためたし花盛　　正好

といふがあり、見立てたものには、例へば

霞まじる帷子雪はこもんかな　　宗房

帷子をかたひら雪に取成し、地上に霰まじりの雪の降る狀を、あられ小紋の模樣に見立てゝゐるやうな句には、

霰降る庭や白地の惣鹿子　　蟬吟

螢火や闇に地黑のとびかのこ　　惟正

の如く、土地の地を織物の地質に取成し、霰が降つて白くなる地面を、地質の白に見立て、白地の布の鹿子模樣だと洒落れた蟬吟の句、或は螢が闇に飛んでゐる光景を、黑地の布の鹿子模樣に見立てゝゐる惟正の句とも似通つてゐる。其他政好に源氏の夕顏の事を云つた句があれば、宗房にも同じく夕顏にうかりひよんとした句があり、政好に高比賣命の歌の句を引用したものがあると、宗房にも下照姬か月の顏といふ句があり、政好に秋來ては朱朱さつた山と云つて、朱々を種々に取成してると、宗房にも染める涙やほとゝぎ朱と云つて、朱をすに取成し、一笑が目極樂といふ言葉を遣ふと、宗房も目正月と眞似るなど、仔細に調べたら、類似點はかなり多い事だらうと思ふ。

付句は詞付で、前句の意味を說明したものに類似がある。例へば

後の世ねがひとみ侍がた

釋迦の鐙あみだやすりのつば刀　宗房

みめにはつかでえりにこそつけ

おしろいは首すじくだり流れ落　一笑

卽ち一笑の句はみめに對しておしろいと附け、襟についたのだから首すじから流れ落ちると云つたので、宗房も後世願ひとあるから、釋迦だの阿彌陀と附け、み侍かた（見侍ふ、御侍方）とあるから、鐙や刀を持つて來たのである。たゞこゝに注意すべきは、當時の芭蕉の句は言語の遊戯であるにせよ、主觀的な色調を持つ事で、例へば風もがな・花もがな・花にあけぬ嘆き・共ロたばへ・こや秋風・世は逆さま等、自己の感動を表した言語を多く用ひてゐる事である。

二、芭蕉にあらざる宗房號の俳人

寛文或はそれ以前の撰集に散見せる宗房號の俳人は、芭蕉と共に七人ほどあつた。中には住所は知れても姓名の分らない者、姓名は知れても住所の分らぬ者もあるが、何故にかく同名の宗房が多くあつたかといふに、貞門では名乘を俳號に用ひる關係上、改める事が出來なかつたからであらうと思ふ。次に是等の人を場所によつて區別すると、伏見の宗房、京の宗房、大和の宗房、伊賀の宗房となる。以上の中京の宗房の句と芭蕉の宗房の句との間に多く混交があつた。

イ、伏見の宗房

高瀨道甘（「へちまぐさ」の佐久間見純の跋に高䠷瀨道甘とある）の「へちまぐさ」（寛文元年跋）の卷末作者句引に、伏見之住として宗房が二人見えてゐる。一人は肩書なき宗房、他は高井と肩書ある宗房である。肩書なき宗房は十二句（本文十一句より見えない）、高井と肩書ある宗房は一句である。

花に似ぬ木やすねくろし梅こん性　宗房
いでや解しすんべるへるな苔の道　同
肴にやいでちとつまもよめが萩　同
花ちらす風は皇帝の臣下哉　同
咲を待かんねのゐぼし櫻かな　同
窓の花たちはなれ得ぬ薫かな　同
たがうゐた菖蒲刀の鮫の粒ツブ　同
旅ぢやくへ都は目はつかしは餅　同
夢に見し是ぞ邯鄲の枕瓜　同
此ごろの暑さを何とかはしやうよう　同
見たかどこにそれおゝ見えた相撲草　同
苗代の番ぐみの木やまんめぐり　高井宗房

とある。種寛の「誹諧作者之名寄」(種彦云、寛文末の印本と。寛文八年刊か。)に、高瀬道甘門人仲宗房とある。蓋し「へちまぐさ」肩書のなき宗房は仲宗房の事であらうか。寛文元年は芭蕉十八歳の時で、まだ撰集に句も見えないらしい時代だから、勿論此宗房の方が先輩で、句も功者であつたらう。又随流の「水車軋(スキシヤヨコガミ)」(見返しに、寛文元年獨吟回文千句なる「紙屋川水車」の後に附加した句集であらうと、種彦(?)の書入がある。)に、伏見と肩書した宗房と、何の肩書もない宗房との句が入つてゐる。肩書ある宗房は「へちまぐさ」の宗房であらうが、氏姓未詳。

けふたつは暑やさむやの秋の風　伏見 宗房
ちる一葉秋のあの字の初點哉　同
葛城や雪の波にも一葉船　同
大兵といはすまひとは手取哉　同

肩書なき宗房の句、

花に香にほるゝ目もとのしをにかな　宗房
すんかりの渡るは江や秋の空　同
雁が音や糸のしらべにきくならひ　同
月の輪はきよくもよきやあみだ笠　同

ロ、京の宗房

「誹諧作者之名寄」(種彦書入本)に、隼士(ハヤシ)氏常辰(ツネトキ)門人として荒木吉右衛門宗房がある。常辰は立圃門、京人であるから、荒木宗房も京人であらう。但し此宗房が「毛吹草」・「懐子」の宗房であるかは未詳である。

次に重頼の「毛吹草」(正保二年刊)・「懐子」(萬治三年刊、第一巻から第八巻迄懐子、第九・第十懐子伽)の宗房であるが、之も兩書句數之事といふ部に、京之住とあつて、「毛吹草」では宗房五十、「懐子」では第七巻の末に京之住宗房四、第九巻の末に京之住宗房十二とある。この五十といふ數は決して少ないものではない(本文發句四十八句しか見えない)。「毛吹草」の作者二百六十人中、五十句以上取られてゐる人は七人ほかない。

しだの葉を梭(なぎ)にもちゐの鏡哉　　宗房
もて來つる是ぞ年玉心玉　　同
とし徳の清めなるらしけさの雨　　同
○春も雪に野は飃をしの若菜哉　　同
つまぬよりもちゐやまじる雪薺　　同
鶯の歌でまじなへこぼれ梅　　同
春の夜のやみ目あやなし梅見月　　同
梅が香やとむる金(こがね)の衣(ころも)鳥　　同

春も水のあやをきらさぬ氷哉　同

花だにも持や心の鬼あざみ　同

仙術か年を古木の桃の花　同

日向の國なる人にあひて

日にむかふ國より花や咲や姫　同

長雨や寸善尺魔花の枝　同

中に一木くすむはいかに花の顏　同

都人のみる目恥るな伊勢櫻　同

氏もよしそだちもよしや藤の棚　同

かりがねも歸る時にやうれし鳴　同

住の江や人のみちくる汐干かな　同

手車となるや折取風車　同

床夏にするおけ是は花の塵　同

花〳〵を百あはせてや百合の花　同

瀧壺に聲ひゞけとや杜鵑　同

○螢見や草の袂とつゝみとく　同

石山にまかり古事を思出て

石山も金(こがね)花さくほたるかな　同

生絹ぞといふべき物や蟬衣　同

夕顔の花でつゞくれあばらやね　同

濱里の風(ふ)鈴(れう)なるらし荻の聲　同

女郎花交(け)名(みやう)や露のお玉女郎　同

笆(まがき)をば埒(らち)とやいはむ駒つなぎ　同

花さけば人やくびだけ思草　同

鹿の毛の星も射る矢の目當哉　同

郭公居ずば出あへか鴫の聲　同

廣澤のいけるかひ有月見哉　同

照る月の男ざかりはこよひ哉　同

名月は餘の物見せぬひかり哉　同

芦の穗の綿をきせぬや弟草　同

花は淵香は大海ぞ薗の菊　同

手を揚て壁に繪や書蔦栬(もみぢ)　同

木に百の枝も千萬なり木哉　同

しら壁にむかへばふらぬみぞれ哉　同

雪花は南の枝や遲ざくら　同

雪に枝連理とならぬ木々もなし　同

細炭やおきに成ても赤つゝじ　同

(廻文)咲見つゝ花形か名は鼓草　同

(同)比もなふ春とや取は鮒もろこ　同

(同)友の來つ子規(しき)猶なきし月の下　同

(同)生垣はむばらきらはん萩が景　同

「毛吹草」の宗房は正草(マサアキラ)の「ひむろもり」(正保三年刊)の中に批難された有名な人である。「ひむろもり」に云、

そうじて此發句の作者の光有と、鹽おしの作者の宗房といふ人の句に、別てわろきのみおほく入られたるは撰者の意趣ある人か。意趣あらばおほく入らるべからず。但又はひいきの人かといぶかしく侍れば、光有は當家の御字を付給へる人なれば直人にあらじ。宗房は名ばかりありて元來作者はなきごとくうけ給り及び侍。

る。莊子の寓言の筆法を學ばれけるにやとをかし。……

螢火や草の袂とつゝみとく

此發句は或人この撰者などと同心して、石山へ螢見に行て、夜船をさしとゞめ、堤だつ所に下り立、螢を京のつとに取るとて、

袖につゝみ紙につゝみの螢哉

とせしとこそ承れ。それを此撰者共後かやうにしたるよし慥に聞て侍るかし。……又撰者の句の中にて、あしき句は大方此宗房に名を書付たるよし風聞す。……我が句の中を三段にえりて、よきと思へるには作者を重頼と書つけ、中の品と思へるには宗房・光有・宗頼・春可・正直等と書、下の品には作者なしにせられたるよし承りぬ。云々

宗房といふ名はあつても實在の人ではない。それは重頼自身である。重頼の惡句は宗房の句として出すといふ說であるが、大體が感情論で眞僞は詳かでない。或は宗房といふ人は實在の人物だが、宗房の句に重頼の句と似たものがあれば、それをひどく直して、重頼自身の句のやうにして、宗房の名で發表したので、種々の噂を生むやうになつたのかも知れない。それは兎に角毛吹の宗房は芭蕉の宗房よりずつと先輩で、句も芭蕉の宗房より巧者であり、品よく洒落れてゐる。「花にあかぬなげきや我は歌袋」といふ句よりも、毛吹の宗房の「花にあかぬなげきはいつも仙翁花」と云つた方が見立がうまい。

「懷子」の宗房もやはり毛吹の宗房と同人である。それは毛吹にある句が此集にも出てゐるからである。

花よ雨よもるとも陰に隱笠　宗房

雁が音の歸時にや嬉しなき　同

床夏にすゑおけこれは花のちり　同

花にあかぬなげきはいつも仙翁花　同

（懷子）

長雨や寸善尺魔花の枝　同

花だにも持や心の鬼あざみ　同

心をも入て小鮎やすくひ玉　同

手車となるや折取風車　同

生絹ぞといふべき物や蟬衣　同

蘭菊やおのづからなる狐わな　同

濱里の風鈴なるらし荻の聲　同

なれもまた道づれするや旅の雁　同

鹿の音の星も射る矢の目當哉　同

名月は餘の物見せぬ光哉　同
蘆の穂の綿をきせぬや弟草　同
生垣のむばらきらはん萩の景　同
（懐子伽）

次に立圃の「小町踊」（寛文五年刊）にも宗房の句が見えてゐる。私の見たものは一冊を缺いてゐるから、句數も正確には分らないが、毛吹に出てゐる句がこゝにも入つてゐるから、作者は毛吹の宗房と同一人である。

氏もよし生立もよしや藤の棚　宗房
廿日過出るや名殘三ヶの月　同
とらへたき聲ばかり見る蘆まかな　同
これもまた水生木やもみぢ鮒　同
千代をふる天のてんつるあられ酒　同
雪花はみなみの枝や遲ざくら　同

ハ、大和の宗房

大和の宗房には八木住寺田氏宗房と多武峯住福本氏（？）宗房とある。八木住寺田宗房の句は高瀬梅盛の「ロ眞似草」（明曆二年刊）に、

花の時過不及なかれ春の雨　和州八木住寺田氏 宗房

又岡村正辰の「大和順禮」（寛文十年刊）に、

初瀬　城上郡

花に爰も無苦世界也初瀬山　和州八木住 宗房

などとある。「大和順禮」の宗房は寺田氏とはないが、恐らく「口眞似草」の宗房と同人であらう。

次に多武峯宗房の句は隨流の「鶯笛」（寛文十三年序）に三句ある。

雨露の恩に手をつくねたる蕨哉　多武峯福元 宗房

てきちよくにもてたうくるや花見酒　同

作り聲してもなけかし貌代鳥　同

寛文の芭蕉の句は古來多くの集に誤入されてゐる。彼の芭蕉全集の權威なる湖中の「一葉集」は芭蕉の句として次の句を入れてゐる。

しだの葉をなぎにもちゐの鏡哉　宗房

もて來つる是ぞ年玉心玉　同

氏もよしそだちもよしや藤の棚　同

雪花は南の枝や遲ざくら　同

これは毛吹の宗房の句である。

廿日過出るや名殘三ケの月　　同

とらへたき聲ばかり見る蘆間哉　　同

これもまた水生木やもみぢ鮒　　同

千代をふる天のてんつるあられ酒　　同

これは「小町踊」の宗房の句である。

てきちよくにもてゝてふ來るや花見酒　　同

これは隨流の「鶯笛」の宗房の句である。原本「もてたうくるや」とあるを、「もててふ來るや」に誤る。

花ちらす風は皇帝の臣下哉

道甘の「へちまぐさ」の宗房の句であるが、何丸は「句解參考」に芭蕉の句として、「かゝる時代の句にさへ意味深きは祖翁の常なり。あふぐべし。云々」と感心してゐる。

芭蕉の宗房と同名異人の句は六人あるが、その中四人は全く芭蕉の宗房とは違つた人である。とにかく芭蕉の宗房の句が重頼・安靜の集に散見せる事と、重頼・立圃の集にある宗房の句が、芭蕉の宗房の句と誤まられる事とは注意すべきである。此點はなほ後日の研究に待つ事とする。

第四節　芭蕉の亡命

一、所謂遁世といふ事

芭蕉の亡命を古人大方遁世と云うてゐる。併し遁世といふ語はどうかと考へる。遁世とは俗緣を絕つて佛門に入る事である。それは多年寵遇を受けた主君の死に逢つたのであるから、厭世氣分に包まれた事は事實であらう。官を退き、家を脫して、再び二君に仕へまいと思ひ定める事はありがちな事であらう。併しさうかと云つて芭蕉は、高野山へ入つて、一生主君の菩提を弔うた譯ではなし、國へ歸つて蟬吟の墓守をして終つたわけでもない。「次郎兵衞物語」に、芭蕉亡命後、伏見西岸寺任口上人を訪れ、桃靑號を貰つて出家したとあるが信じられない。寬文十二年江戶へ下つて、關口水道の工事に關係したといふ說といへど、芭蕉は俗體であらうと考へられてゐる。甚しきは堀割の普請奉行として、帶刀さへした好個の武士のやうに傳へた說さへある。殊に不思議な事は、遁世した芭蕉が遊女・野郞の三味に合せる小唄にすがつて、三十番の句合を鄕里の天滿宮へ奉つてゐる事である。「野ざらし紀行」に、「僧に似て塵あり。俗に似て髮なし。我僧にあらずといへども、浮着の屬にたぐへて、云々」とあつて、芭蕉自身でさへ自分を出家・沙門とは考へてゐない。主君が死んだ。近侍の武士は追腹を切らなければならぬが、殉死は天下の禁制である。そこで髻を拂つて遁世と來ると、如何にも其武士が忠臣であるかのやうに思は

れる。昔の芭蕉崇拜家は芭蕉をさういふ武士にしなければ收りが付かなかつたと見える。とんだ謬見である。當時の俳人氣質はそれほど窮屈なものではない。芭蕉は亡命である。主家脱退である。遁世などとやかましくいふべき事ではない。

二、亡命の年代・狀況・動機狀況

君臣の情誼たゞならざる蟬吟の死が、若い芭蕉の胸に一方ならぬ哀傷の感を惹起させた事は、推するに餘りがある。諸書大方亡命の事情を述べて、「寛文六年四月蟬吟逝去。六月半遺髮（遺骨とも）を奉じて、高野山報恩院へ收めた。六月末下山し、一度は歸國したものゝ、ひそかに遁世の志あり、頻に主君に暇を乞うたけれど許がない。そこで同年秋七月終に同僚城ノ孫太夫の許に、「雲とへだつ友かや雁の生別れ」といふ句を殘して亡命し、上京季吟に遊學した。時に歲二十三。」といふ事にしてゐる。

先づ遺髮か遺骨かといふ事だが、竹二坊・湖中・去留・五柳・魯庵等は遺髮で、梨一・「一代錄」・秀三・山崎氏・瓊音等は遺骨である。蓋し蟬吟の菩提所は伊賀上野山溪寺にあり、遺骸も亦そこに葬らるべきであらうが、當時の武士の習慣として、遺骨を高野山へ收める事を、無上の光榮と考へて居たやうだから、或は遺骨の一部分でも高野山へ納めたものかも知れない。梨一の「芭蕉翁傳」に、遺骨を負て云々とあるが、こゝは奉ずるとか、御供とかいふべき所であらう。「一代錄」に、「蟬吟の遺言に任せ、遺骨を高野山報恩院に納め、云々」とあるが、何に據つたものか明かでない。六月末に下山歸國したといふ事も、「一代錄」に、「大阪西御堂前花屋伊左衛門は內

緣の人也。一子伊三郎も死せりと語る。定めなき世を悲しみ、京に登り季吟にまみえ、衣をかゆる望を告て國にかへり。云々」とある。花屋伊左衞門といふと芭蕉が死んだ家の花屋仁左衞門の事であらうか。それが芭蕉內緣の人だとは珍說である。花屋が內緣なら、其裏座敷を借りる時、之道が請判を押す譯もあるまいと考へる。兎に角芭蕉は下山してすぐは歸らず、寄道してゐたやうに傳へられる。

主家亡命の際の出來事に就いて、二樣の傳說が殘つてゐる。一は城孫太夫の宅門に手紙を殘して行つた。それは短冊であつたといふ說、一は短冊を門に張付けて脫走したといふ說である。卽ち竹二坊の「正傳」は、

同僚孫太夫といふ者、それが宅門に包みたる書狀あり。取りて見れば、

雲とへだつ友かや雁の生別れ　　桃青

と書きしたんざくなり。云々

鷗州の「過去種」は、「親友孫太夫於門、趣意微細認一章、殘短冊、夜紛出奔。云々」湖中の「略傳」は、「宅門に一封を殘す。……と書きし短冊也。」、五柳の「全傳」は、「城孫太夫の門に一封を殘す。云々」とある。これ前說である。然るに梨一の「芭蕉翁傳」は、「同僚城孫太夫といふもの丶門に短冊を粘して、雲とへだつ云々と一句を殘し云々」、とあり、蝶夢の「繪詞傳」、「我住める隣なる城孫太夫が門の柱に短冊を書きて押しける。云々」、「一代錄」、「我住める玄蕃町の家の隣孫太夫といふ人の門の柱に短冊を糊して云々」、素蓮の「春秋」、「夜同藩ノ門戶ニ句ヲ粘テ云々」、其他玉晁の「誹諧百人一句抄」、瓊音の「年表」、魯庵の「桃青傳」等すべて之れ後說である。

門に短冊を張付けたといふ事はよく分るけれど、宅門に一封を殘す、雲とへだつ云々と書いた短冊であつたといふ說は、門の傍に手紙が置かれてあつたといふ意味か、門に手紙が張付けてあつたといふ意味か判然しない。そればかりでなく、短冊が封筒の中に入つてゐたといふのか、手紙の中に發句が記されてあつたといふのか、そこもはつきりしない。去留の「全集」は比較的その點を詳說して、「同僚の士城孫太夫といへるは、半左衞門の宅に隣りて交深かりければ、その門に一封の書を張置かる。雲とへだつ云々。これその書中に見えし發句とぞ。云云」とある。併し考へて見ると芭蕉は何故兄半左衞門の家へ短冊なり手紙なりを殘さないで、隣家の城孫太夫方へ殘したのだらうか。兄の家をこつそり拔出して、隣家だけへ知らせて行くのも變な話だが、兄へ知らせると、すぐ追手がかゝつて、引留められて了ふからであつたらうか。此點も判然しない。

亡命は夜であつた。而も松を越えて遁げたと傳へられてゐる。卽ち「繪詞傳」に、「おなじ秋の末ならけむ。主の館に宿直しける夜、門の傍なる松を越え出て、云々」とあり、「一代鈔」にも、「門の傍の松を越えて、云々」とある。併し亡命を秋と推定する說に反對な論者がある。それは天地庵素蓮で、彼は其著「春秋」に云、

按ズルニ此發句ヲ古來秋ト定メタルハ疑ナキコト不能。夫雁ノ別ハ二月ニシテ、雲ニ入ル鳥モ同ジク春也。芭蕉國ヲ去ル時、離別ノ情ニ當季ヲ結ンデ、雁ノ別ヲ秋ニ句作スレバ未熟也。又芭蕉古郷ヲ去ル秋、雁モ胡國ヲ去ル秋ト、時ヲ比ベテ雁ノ別ヲ秋ニ讀メバ理屈也。未是非ヲ不知。モシ春カ。此句ヲ春トスル時ハ、芭蕉國ヲ去リシモ亦春ナルベシ。

と論じてゐる。此說は後人に多大の影響を與へて、山崎氏の「俳人芭蕉」、瓊音の「年表」、晋風の「年譜」等皆二月退去と推定してゐる。

一體其當時芭蕉はどこに住んで居つたか。竹二坊の「正傳」には、

宗房宅地は藤堂新七郞中屋敷城東に在。良精の臣兄半左衞門爰に住す。孫太夫は隣家也。今河合何某住める所宗房が舊宅也。……兄半左衞門宅は赤坂町にありしが、云々

去留の「全集」にも、「住所は上野城の東なる良精の中屋敷の內なり。兄半左衞門も同じくこゝに住めり。」とある。是等の記事によると、芭蕉は良精の中屋敷の內に兄と一所に住んでゐたやうであるが、良精の中屋敷は玄蕃町にあつたから、玄蕃町の良精の屋敷內に兄と共に居つた筈であるが、半左衞門の住居が赤坂町にあつたとすると、赤坂町が半左衞門の私宅で、半左衞門はそこから良精の屋敷へ通つてゐたものか、或は御殿に泊つたり、宿に歸つたりしてゐたものか、その邊がよく分らない。「繪詞傳」や「一代錄」によると、芭蕉の家は玄蕃町にあつたやうであるが、それは玄蕃町に一軒家を構へてゐたといふのではなく、玄蕃町の良精の屋敷內にあつたといふ意味であらうが、お長屋のやうなものに住んで居たものか、御殿に起臥してゐたものか判然しない。門の傍の松を越えて遁げたといふと、餘り芝居じみて、芭蕉だけに滑稽な感もする。竹二坊の「正傳」に、藤堂新七郞良聖上屋敷の內に松あり。人皆芭蕉の松と呼ぶ。昔の松は枯れて、今の松は後植也。」とあるが、芭蕉の越えた松は良精の中屋敷の松である筈だのに、上屋敷內の松になつてゐるのは變である。良聖は良精の子孫だらうが、昔中屋

敷にあつた松が枯れて、上屋敷内に新しく植ゑて、昔の俤を忍んだものか。或は中屋敷は後に無くなつて、上屋敷だけとなつたものか。傳說もかうなると種々の說が加はつて一向分らなくなる。

以上は芭蕉亡命に關する普通の說をあげたものであるが、一方に此說を根抵から覆す異說がある。それは竹人の「全傳」の說で、それによると雲とへだつ云々の句は、亡命の際の句でなく（雲と隔つ友にや雁のいきわかれとある）、芭蕉が寛文十二年春仕官を辭して、名を甚七と改め、東武に赴く時、友人へ殘した留別の句であるといふのである。之は何丸の「句解參考」にもそんな前書になつて出てゐた。一體「芭蕉翁全傳」は伊賀上野藤堂采女の家老川口竹人（芭蕉門辻荻子の弟）の著で、土芳や竹人の兄景賢（荻子か）の口傳に據つたもので、比較的他の芭蕉傳よりも信ぜられる性質を持つてゐるので、近頃の學者中には此書の說を正しいものゝやうに考へて居る者もあるが、口傳なんてものは當にならぬもので、事實談もあらうが、一方に又話手の記憶ちがひ、或は事實を自分に都合のよい方に曲げる恐れのあるもので、うかと信じてよいかどうか分らない。第一雲とへだつの句が留別吟ならば、反對に送る人の餞別吟も殘つてゐさうなものである。芭蕉も湖春の「續山井」に多く句が取られてゐて、伊賀では人後に落ちぬ作者である。その芭蕉がはる〴〵東武へ赴くとしたら、友人・先輩などの送別吟位ありさうなものかと考へる。次に亡命して了へば「貝おほひ」の遊蕩氣分も許さるべきであるが、仕官の身であんなものを書くとは、主君の死に殉死說さへ傳はつてゐる芭蕉としては、聊か武士道が疑はしくなりはしないだらうか。之は竹人の記事を讀んで一寸感じた事ではあるが、今の場合一異說としてあげるだけで、之によつて

舊說が全然改められるとまでは信じてゐない。

芭蕉の亡命に就いて、もつと痛切な具體的な動機があつて、遁世を決心したのではなからうかといふ考が、昔から一部の俳人間に往來したと見え、芭蕉の殉死說を擔ぐ人があつた。此說の起源は路通の「芭蕉翁行狀記」(元祿八年刊)であつた。曰く、

若かりし程頼む方に別れ、同じ道にと思ひ定けれど、天が下の掟きわまりてはからひがたく、親・はらからのうきめひとかたならねば、甲斐なき命の露をかけて、云々

とある。

一體殉死は上古からあつた。日本紀に垂仁天皇の殉死の禁の詔が見え、孝德紀大化二年の詔に禁を犯す者は其族を罪すとある。足利時代に至り三島外記入道が細川頼之の死に殉じて切腹した事がある。豐臣時代には大木土佐守が加藤清正に殉死した例もある。なほ德川氏の世に入り、主君の死に殉ずる者多きを加へたので、幕府では寛文三年五月二十日天下に令して殉死を禁じた。「甲子夜話」卷二十一に云、

殉死のやみたるは水戸の義公に起る。常山文集に云、寛文元年庚丑七月、是月二十九日威公薨、公不食三日、哀毀殊甚。……威公近臣有欲自殺殉死者數人。公親往其家、敎諭懇惻以止之。時四方侯伯至殉死以多相誇。於是幕府嚴設禁令、以革其弊。實公爲之首唱也。云々

又「玉露叢談」に云、

寛文三年五月廿日、今年始めて將軍家より殉死御制の趣、「殉死はいにしへより不義無益の事なりといましめ置くといへども、被仰出無之故、近年追腹の者あまた有之、向後左樣之存念可有之者には、常々其主人より殉死不仕候樣に堅可申含之事候。若以來於有之者共亡主不覺悟之法度たるべし。跡目の息も不令抑留儀不屆可被思召者也。寛文三年五月廿日（本書餘錄）」

などとある。

殉死の禁に就いては以上の如く制令が出てゐて、去留の「全集」・梅通の「麥慰舍隨筆」・山崎氏の「俳人芭蕉」・醒雪の「芭蕉の誹諧」等は、殉死の禁令が寛文三年に出てゐるから、寛文六年の蟬吟の逝去に際して、近臣の殉死は出來ない事になつたといふ意見であつた。併し芭蕉は殉死するやうな人であつたらうか。殉死と決心した芭蕉であつたなら、亡命後坐禪三昧に日を送るとか、或は一向專修の念佛に亡君の冥福を祈るとかすべき筈であらうのに、變る事に品を代へて、とつと山家のいよ古狸だの、伊勢のお玉は鐙か鞍かだのと浮かれ出しては、殉死說も芭蕉を偶像視する人の想像說と見るより外はあるまいと考へられる。

なほ芭蕉亡命の動機に就いて、之を戀愛に結付けた異說もあつた。去留・魯庵・山崎氏などは皆之を附會の說として斥けてゐるが、果してさうであつたらうか。私は此說が伊賀の傳說として殘されてゐる事に少なからず興味を感ずるのである。戀愛說の一に曰、寛文二年芭蕉十九歲の時、蟬吟夫人の侍女と通ぜる寃罪を受け、一度は主家を去つたが、蟬吟の訃に逢つて歸參し、遺髮を高野山に收めて歸國したものゝ、友人の出仕すべき勸告を斥

け、郷を去つたのである（魯庵の「桃靑傳」引用、錦江の「芭蕉翁傳」の說）。其二に曰、蟬吟歿後繼嗣の爭を生じ、芭蕉は夫人を助けて三歲の遺孤良長をして家を繼がしめ、忠勤を勵んだので、未亡人との醜聞を傳へられ、大に激昂したためである（同書伊賀の傳說、岡野正味子の蕉翁遁世考に出づと）。其三に曰、芭蕉金作と云つて藤堂侯に仕へて居つた時、公に妾があつた。類なき美人であつた。或時金作袴の裾を破つたので、主君彼女に命じて縫はせた。金作白衣となり、女の傍に立つ。すると金作の君寵を妬める輩ひそかに之を主君に讒した。主君金作を咎めず、彼女に暇を取らせたので、女そのぬれぎぬを歎き、城池に投じて死んだ。金作之を聞いて遁世した（去留の「芭蕉翁全集」に據る。「俳人芭蕉」は之を花見の事とし、芭蕉の親戚なる蟬吟の侍女が芭蕉の破れた袴を繕つてやると、同僚が見て之を主君に告げる。女は入水して死んだとある）。其四に曰、兄半左衞門の婦と艷聞があつたためである（「桃靑傳引用、伊賀の傳說）。是等の傳說は勿論確實なる根據がなければ信じられぬが、それが亡命の動機でないとしても、若い芭蕉は何か婦人に好かれさうな容貌・性質を持つて居たのではなからうか。私は芭蕉をどこ迄も詩人として考へたい。詩人芭蕉は一時は主君の死に激動して殉死すべく思立つた事もあらうが、それが種々の事情で出來なくなると武士を捨てようといふ氣になり、其間に何等かの艷聞もあつて、「貝おほひ」（寛文十二年戌）の遊蕩氣分も起り、故鄕を離れて江戶へ下ると云つたやうな經過かも知れないと思ふ。たゞ之には確實なる根據がないから一片の憶說になつて了ふのだけれど、芭蕉をどこ迄も道德的な人物と見て、その人生を考察する事には不贊成を唱へたいのである。

芭蕉の亡命に關する戀愛說を骨子とした淨瑠璃がある。それは紀ノ上太郎作「志賀の敵討」（安永五年刊）といふ院本である。勿論伊賀の仇討に芭蕉の戀愛說を結付けたものである。其梗概をいふと、備前の國生田の奥方みすのと御前御入國に際し、お供には江戸詰の松尾半左衞門、弟藤七郎などがあつて、此度志賀の城主と當姬君との婚事成立し、姬君の引出物として、當家の家老渡邊數太夫・瓦井又鱗所持の名刀小豆長光・河井正宗を遣す事になつた。そして渡邊は刀の切味を試すために罪人の二つ胴を仰付かつた。所が又鱗の子政五郎は數太夫の成功を妬み、ひそかに設樂傳八郎といふ侍と謀り、自分の新刀を長光に入れ代へて了ふ。それを後で數太夫が知り、これ又政五郎の父を欺き、正宗を讓り受け、首尾よく二つ胴に成功した。政五郎刀を奪はれし事を無念に思ひ、歸を待つて數太夫を殺す。數太夫の子に東之介あり。奥方みすのと御前の侍女桂東之介に戀慕し、如何にもして自己の意中を告げようとする。それを松尾藤七郎と情婦のさくらとが粹を利して取持つてやる。さくらとはみすのと御前の侍女で、松永貞德の娘である。藤七郎は兄や其他の人の前で傳八郎よりひどく辱しめられ、三十三間堂を眞似た太宗寺の緣側で通し矢を射て、武士の名譽を回復しようと決心した。併し不幸にも其日の檢證は傳八郎で、矢に難くせを付け、惣矢一萬二千本の中通し矢三千六百と數へられ、剩へさくらから藤七郎へやつた艷書がばれ、藤七郎は散々恥をかゝされたけれど、奥方みすのと御前の情により、密通はもみ消されたものゝ、藤七郎は勘當され、遂に發狂し、忠僕寶井晋介やさくらと共にいづ地へか落行く事になつた。然るに一方御殿では明珍のくつわ紛失し、其詮議役に松尾半左衞門が出て政五郎を取調べる中、半左衞門は瓦井父子の奸計にかゝり、扞

心な政五郎を牢から取逃し、反對にくつわを盜んだ者に云ひ込められ、遂に獄門にかゝつて了ふ。其後東之介はあらき又右衛門の助を得て、政五郎を上野に討取り、首尾よく仇を返す事になつた。藤七郎も兄半左衛門の晒首を見て急に狂氣が直り、晋介・さくらを連れ、敵を討たうとして一足おそく現場へかけつけ、敵討に間に合はず、自殺しようとしたのを、東之介や又右衛門に留められ、今から我名を芭蕉と改め、「船となり帆となる風の芭蕉哉」といふ一句を本として誹諧歌の一派を弘め、兄の菩提のため諸國を行脚する事となつた。晋介・さくらも亦髻を拂つて、寶井の一字と晋介の晋を合せて、寶晋齋其角と改め、俳道に志したといふ筋である。「志賀の敵討」では芭蕉は色と連歌に武士道を忘れた侍のやうになつてゐる。殊に滑稽な事は戀の取持をしたり、氣狂になつたり、兄の敵討に間に合はず、いやもう武士として價値のない腰拔侍に脚色されて了つた。

〔補記〕「淩雨漫錄」(年代・著者未詳)に芭蕉庵桃青傳が出て、「忠右衛門悲歎剃髮して甥に家をゆづり雲水す。云々」とある。他書に見えぬ珍說である。

第三章　亡命後の動靜

第一節　上京說

亡命後の芭蕉は一般に上京したものと傳へられる。其年間は寛文六年秋から寛文十二年春まで、在京七年といふ。但し蟬吟の生前芭蕉は上京した事もあらうし、死後といへども上京したり、歸國したりした事もあるらしいから、はじめての上京ではなからう。又亡命を寛文七年二月とすれば在京六年となる。尤も竹人說の如く寛文十二年春迄仕官したとすれば、一定期間の上京說は無い事になるが、今は亡命後數年在京したものと見て、其間の消息を少し調べて見る。

一、洛に上り季吟に遊學する

此說の起源は支考の「俳諧十論」であらう。卽ち「壯年に仕官をしりぞき、洛の季吟に俳諧を學びて云々」とある。從來の芭蕉傳は大方之に從つてゐる。唯二三季吟入門の時日に就いて異說があるだけである。卽ち「一代錄」は芭蕉亡命を寛文三年と定め、京に登り季吟に見えとし、「一代集」は寛文四年春季吟門に入り、俳諧を學ぶ事七年とし、「春秋」は亡命を寛文七年二月かと斷じ、季吟遊學を其年に數へてゐる。

一、季吟から「埋木」を傳へ、季吟の執事となり、「繪合」といふ書に力をつくす。季吟の古典註釋を助く。

季吟から「埋木」其他の書を授つた事は、「俳諧十論」に、

洛の季吟に俳諧を學びて、埋木は書本にて朱點を加へたる物二冊あり。其傳は寛文の頃ならん。連歌の新式は幽叟より傳へられて、是も頭書に朱點を加ふ。或は百人一首の秘抄あり。或は古今の序傳あり。すべては孔子に七人の師あるが如き、道として學ばずといふ事なく、法として傳へずといふ事なく、云々

とある。之に就いて素蓮は「春秋」に、

按、埋木ハ季吟ノ選ニシテ、明暦元年十二月二十九日功成、同二年正月五日重校成、延寶元年十一月開板ス。其以前ナレバ寫本ヲ傳ヘシナルベシ。連歌新式ヲ玄旨法師ヨリ傳ヘシト云フハ支考が筆癖也。幽齋・貞徳・季吟ト傳ヘ來リシヲ、只其原ヲ云ヒシモノナラン。

と解してゐる。支考の「笈日記」に、芭蕉の遺物として新式・埋木・古今序註・百人一首等をあげてゐるが、是等は季吟から傳へられたものと見える。「續山井」(寛文七年刊)所載の芭蕉の句を讀むと、古事記・古今集・源氏物語・百人一首・謠曲等の古事に基いた句が出てゐるから、其頃芭蕉は是等の古典を讀んで居たやうにも思はれるが、一體芭蕉はいつからいつ迄季吟に師事したものか。師事した場所は仕官中伊賀在住の事か、或は亡命後上京中の事か、其點は判然しない。通説に亡命後洛に上り、季吟に師事したとあるが、蟬吟が季吟に師事した關係上、芭蕉も仕官中伊賀或は京都で季吟の教を受けたかも知れない。芭蕉が季吟に師事した事は事實で、其際連

歌・俳諧の式や普通の古典も教授されたものだらう。季吟の古典註釋を助けたといふ說に就いて、文曉の「俳諧芭蕉談」に、芭蕉が萬葉集は多くの人の家集を集めたものであらうと言つた說に、季吟が感服したといふ話が出てゐるが信じられない。「貝おほひ」の判詞に、萬葉集の長歌を引用した例も見えてゐるから、芭蕉は萬葉集は讀んでゐたらうが、年少な淺學な芭蕉が、敢て季吟の註釋事業を助けたなどといふ話は、あり得可からざる事かと考へる。それは芭蕉も季吟に向つて、時に自己の萬葉論を述べた事もあつたかも知れないが、それにより季吟の註釋を助けたといふ說は、少し誇張した傳說のやうに考へられる。季吟の執筆云々の說は、「一代錄」の寬文九年の條下（沼波氏年表寬文八年）に見えてゐるが、確證を知らない。たゞ「俳諧七車」の跋に、「筆執らしめける桃靑をのこ云々」とあつて、芭蕉は一時鬼貫の執筆をしてゐたやうにあるが、如何なる卷の執筆をしたものか、又はどこでしたものか詳かでない。高野幽山の執筆說も傳はつてゐるが（白亥の「俳諧眞澄の鏡」出）、恐らくそれは江戶へ下つてからの事だらう。福井久藏氏の「連歌の史的研究」（後篇）に、「寬文十一年六月二十七日、何路百韻（一卷）、昌程・跡波・宗春・道圓・賴勝・木哉・虛舟・種定・宗知・時伯・以春。執筆宗房。宗房は芭蕉の前名。云々」とあつて、芭蕉が連歌の執筆を勤めたやうにあるが、筆蹟を見ない中は芭蕉の宗房だかどうか分らない。昌程は里村昌琢の子で、昌琢は懷惠庵と云つて、松江重賴の連歌の師であるから、或は此宗房は毛吹草の宗房ではなからうかとも思はれる。若し果して之が芭蕉の宗房であるとすれば面白い發見である。

一、俳諧を西山宗因に學ぶ

政二の「俳道系譜」に、「翁初め俳諧を宗因に學び、後又道を季吟に學ぶ。云々」とあるが信じられない。芭蕉が談林の感化を受けたのは、江戸へ下つてからの事らしい。在京中或はそれ以前に、宗因に師事したとは考へられない。「續山井」の芭蕉の句風を見ても、談林らしい傾向はない。延寶へ入つて、桃青と號した時代の句に、談林の感化は著しいやうである。なほ宗因が一幽と云ひ、芭蕉は宗房と號した時、宗因に誘はれて筑紫太宰府に參詣したといふ說(「芭蕉談」後篇)、延寶七年宗因と始めて會つたといふ說(沼波氏「芭蕉年表」)、宗因と市村竹之丞の芝居で會見したといふ說(宗因が一日市村座を見物し、門人が子はまさりけり竹之丞といふ句の上五字に置き惱んだのを見て、直ちにおや〳〵〳〵と置いて門人に敎へたので、芭蕉その狂才に感服したといふ逸話。素外の「玉池雜藻」、吾山の「朱紫」に出)もあるが、確證に乏しいから分らない。併し芭蕉は宗因を尊敬してゐたやうで、士朗の「枇杷園隨筆」に、蕉翁鶣子良才之事といふ條に、芭蕉の眞蹟を載せて、「いまだ宗因ごときの興作なし。宗因ごときの惡句なし。云々」と言ひ、或は「去來抄」に去來の言として、「芭蕉常に宗因なくんば、我々の俳諧今以貞德の涎をねぶるべし。宗因はこの道の中興開山なり。云々」とある所を見ると、相當敬意は拂つて居たものに違ひない。

一、漢學を田中桐江に、詩を伊藤坦庵に、書を北向雲竹に學ぶ。

沼波氏の芭蕉年表には寬文七年の事としてゐるが、何によつて定めたものか明かでない。桐江は田中省吾、名は省。字を省吾、雪華道人と號する。物徂徠の詩友。徂徠と共に柳澤侯に仕へる。晩年姓を富、名を逸、字を春

叟、號を桐江と改める。寛保三年二月四日歿（「大日本人名辭書」摘要）。吉田鋭雄の「田中桐江傳」に云、

元祿十一年卽年三十一歳に至る間の事蹟に就いては資料の徵すべきものなし。……尙此間の事ならん。面白き逸事は、桐江が俳聖松尾芭蕉に莊子の講釋をなせし事是なり。芭蕉は元祿七年十月十二日年五十七（本ノママ）歳を以て沒したれば、江戸の芭蕉庵に住せる時の事ならん。桐江に半時庵說一篇あり。六十歳の時、俳人半時庵澹々のために作れるものなり。其一節に曰く、「老夫（桐江）武陵に在りし時、桃靑と云ふものあり、數々書齋を訪ひ、叩くに南華を以てす。歳月積む所文義頗熟せり。其の盧芭蕉と名づけり。（中略）老夫蚤く鄒魯を學び、嚴に異端を拒ぐ。後文を好み、凡そ文思を助くる者は、諸子百家傳奇小說を問はず、睫を接せざるはなし。況んや桃靑のために漆園を譚じ、今半時庵の說を作る。復何の妨ぐる事か之あらんや。（原漢文）」と半時庵澹々は僧獨麟の門人なれば、就いて此說を請ひしならん。實に世に隱れたる逸話と謂ふべし。云々。

とある。元祿十一年が桐江三十一歳だとすると、元祿七年は桐江二十七歳で、桐江は寛文八年に生れた事になる。之によると寛文七年頃芭蕉が漢學を桐江に學んだといふ說は誤で、少くともそれは芭蕉が芭蕉庵に入つた以後の事でなければならぬ。年長の芭蕉が後輩の桐江に漢學を學んだ所を見ると、桐江も若くして斯道に達して居つた事が分る。前慶應義塾圖書館長田中一貞氏は桐江の遠裔だといふ事である（小野機太郎氏の敎示に據る）。

伊藤坦庵と交のあつた事は、「蕪村文集」の芭蕉堂再興記に、「再興發起の魁首は自在庵道立子なり。道立子の大祖父坦庵先生は蕉翁のもろこしのふみ學びたまへりける師におはしけるとぞ。云々。」とあるし、洛外一乘寺村

金福寺の芭蕉庵の碑誌（淸田文興の文）にも、「坦庵集中有謝翁邀飮詩。亦可以想翁爲人矣。」とあるから慥かな事ではあるが、それが寛文中の事か確證を得ない。坦庵は伊藤氏。越前侯の儒官。名は宗恕。字は元務。京都の人。祖伊藤丹後秀頼に仕へ、大阪の役に戰死。坦庵父の業を受け、醫を江村專齋・曲直瀨玄理に學ぶ。事により冤罪を蒙り、越前に幽囚される事三年。後赦さる。寛文中業を儒に改める。儒は那波活所門。程朱の學を唱へる。寶永五年八月二十四日歿。年八十六歲。門人淸田氏を養つて嗣とする（「大日本人名辭書」摘要）。

雲竹に書を學んだのもいつの頃か判然しない。雲竹は京都の書家で、もと林氏。名は覩。或は正實。溪翁・太虛庵等の號がある。通稱八郎右衞門。細楷を善くし、書風高野大師に似てゐる。行・草も亦一家を作す。元祿十六年五月十二日歿。年七十二（「大日本人名辭書」）。「俳人芭蕉」に據ると、雲竹は筆道の名家甲斐流の祖藤木敦直の門人で、次の芭蕉の手紙がある。卽ち「御手本の風義に隨分認見候得共、下地が無器用のもの故にうつり兼申候。御直し可被下候。云々。」とある。其他芭蕉と雲竹の關係を知る手紙が、「眞蹟集」・「眞蹟拾遺」等に一通づゝ見えてゐる。

寶壽院と申僧今日上京候付申上候。愈御別條無之候哉承度候。さては先頃御頼申上候額字出來候はゞ此僧に御渡被下度候。委細は御噺可被申上候。偖々御世話に奉存候。さて又內々御たのみ申上候千字文來月中に御出來被下候樣內々御心がけ奉頼候。先樣より便之度每々せがみ遣候。云々

十一日　　はせを

北向雲竹様

○

北向雲竹老へ内々御たのみ申候屏風のおし繪、何とぞ今月中頃迄に出來候様、貴様より御たのみ可被下候。彼方法事も三月の末にはつとめ申さるゝやうに申來候。さ候へば夫迄は屏風共に出來上り不申候ては間合不申。自是も度々申越候へ共、とかく紺屋の挨拶にて、とむと埒明不申。云々

二十八日　　桃青

蔦崎屋十右衛門様

是等の手紙は元祿年中のもので、雲竹と芭蕉の親交を物語る資料とならう。紺屋の挨拶などは雲竹老の文人氣質が見えて面白いと思ふ。

一、醫術・神道・佛法を學ぶ。

去留の「全集」に、「醫術を三條の某に學び、神道を吉田家に受け、佛法を南禪寺の塔頭某和尚にきく。云々」とあるが眞僞未詳。通說では天和元年鹿島根本寺の僧佛頂に參禪、貞享三年常陸潮來の本間道悅に醫を學ぶ事になつてゐる。

一、東山の麓に住し、泊船堂桃青と號し、又宇陀ノ法師或は釣月軒宗茂とも云つた。

湖中の「略傳」說である。「一代錄」には、寛文九年宗房太宰府の天神へ參詣し、此後洛東の居を破して再び北

村氏に入りて執事したとある。この再びと言つたのは、蟬吟の遺髮を高野山に納め、京に上つて季吟に見え、歸國して遁世の念やみがたく、亡命して東山の麓に住み（洛東の居）、太宰府の天神へ參詣し、歸つて來て又季吟の許に厄介になつたといふ意味であるが、何に據つたものか確證を得ない。泊船堂桃青と號したといふ事も疑はしい。泊船堂といふ號は、李白の門泊東呉萬里船といふ詩句から出た言葉で、どうしても船着場とか、廣々した川の入口とかいふ所の、草庵の號でなくては理窟に會はない。山紫水明な東山の麓如きに、そんな感じの場所があるだらうか。素蓮の「春秋」も之を疑つて、「東都深川草庵ノ號ナルコト正シキ證アリ。虚栗 其角選 初冬部、赴泊船堂途中感「波はくろし夕日や埋む水に舟　揚水。「夕がらす見ん虹の假橋筑波山　同。○按、深川草庵ヲ泊船堂ト名ヅケタル事知ルベシ。云々。」とある。然るに許六は「宇陀ノ法師」に、「先師伊賀に住める比、釣月軒宗茂・泊船堂宗房など書なぐりの反故など拾ひて、云々」と言つて、之を伊賀在住の庵號としてゐる。釣月軒は寛文十二年の「貝おほひ」の序に見えてゐるから、伊賀在住の號とも思へるが、泊船堂は山國の伊賀在住の號とは信じられない。宗茂號に至つては、在京中の號だか、伊賀居住中の號であるか、諸書に徴して手がかりがない。桃青號は後章に詳說するが、要するに延寶三四年以後の命名らしく、季吟が安靜に與へた桃青改名の手紙、伏見の任口上人改名說・桐山正哲命名說などは確證がなければ信じられない。宇陀ノ法師號は素蓮の「春秋」に邪說なる事を極論してゐる。
（第一章、第三節參照）。

一、西國を遊歷する。天の橋立・伊豫の松山へ行く。淡路の福良に滯留する。

湖中の「略傳」に、「元祿三庚午加州の北枝への消息に、筑紫行脚ありしよしあり。其時予二十五歳と。云々。是を以見れば季吟に遊學中の事なるべし。然れども事跡未詳。」とあるが、「一葉集」中北枝宛の手紙で、筑紫行脚の記事あるものは一つだけで、二十五歳云々といふ記事は見えない。卽ち

春は西國望み御座候間、冬中調へ申度候。されども伊賀へ用事も御座候間、伊賀を先に可致も難計候。ちと親類内用にて捨がたき事に御座候。伊賀便り次第に心得可申候。西國へは何卒同行に致度候間、其御心得頼入候。左樣に候へば兩吟いそぎ申事もなく候。二十六七年以前太宰府へ參詣いたし候。連二人、我と三人にて步行候へども、知音もなく候て、見物所ばかり尋歸候。宗房時分の事に候へば、所々發句留候へども、をかしからず。とゝのはぬ事のみにて、一句も慚事なく候間、此度は吟じ直し度存念に候。云々

とあつた。「略傳」にいふ手紙は別のものであらうか。以上の手紙の記事は、芭蕉が松岡の茶店で北枝と別れる時、扇に書いてやつた句の訂正や、北枝が天爾波留の脇を附けた訓戒などを言遺つた文章の次に續くもので、瓊音の「芭蕉全集」は元祿二年の部に入れてゐる。元祿二年とすると、二十六七年以前は寛文三四年頃となり、芭蕉西國遊歷は二十歳か二十一歳頃、まだ蟬吟に仕へて居つた時分となるが、山崎氏の「俳人芭蕉」は之を元祿六年の事とし、西國遊歷を寛文七八年卽ち芭蕉上京中の事と考へてゐる。私は山崎說の方がよいかと思ふ。春は西國望みだの、伊賀へ先に寄るかも知れぬなどとあると、此手紙は元祿六年十月北枝へ宛てたものと推定されよう。卽ち芭蕉は寛文七八年頃西國へ遊歷したかと思はれる。併しそれには異說もあつて、「一代錄」は寛文九年宗房太宰府の

天神へ參詣したとあり、「一代集」の芭蕉翁傳は、「寛文五六年にや。太宰府參詣。」とある。なほ「俳人芭蕉」に、「淡路の福良舊記に、暫時福良に滯留せしこと見ゆ。云々」とあるが詳かでない。浪化の漫筆と傳へられる「俳諧正語抄」に、芭蕉昔肥後の山中を越えた時、夫婦の山樵に逢つて、その生活に感歎したといふ説を掲げてゐるが疑はしい。「正語抄」は信じられぬ書で、例へば「さま〳〵の事思出す櫻かな」の句を、芭蕉が西國行脚の際、二度古主に見えて感激して作つた句のやうにあるが、此句は探丸公の花見の席に招かれた時の句で、二度古主に見えて作つたかどうか分る事ではない。古主といふ名も變で、それは蟬吟の弟だから、主人格にはならうが、芭蕉は蟬吟に專ら仕へた者で、探丸は主人ではない。又「行脚怪談袋」に、芭蕉が伊豫の松山へ行つて、雪十二句を作つたといふ事も、他に聞いた事のない說で、勿論跡方もない話であらう。

一、妾があつたといふ說

壽貞尼の傳說で、嘗て洒竹・瓊音によつて唱へられた說であるが、眞僞は判明せぬ。其說は大略次のやうな根據によつて主張された。

イ、風律が野坡其他の人の俳話を書きとめた「小ばなし」といふ書に、淺生庵（野坡庵號）談として、「壽貞は翁の若き時の妾にて、とく尼になりしなり。其子次郎兵衞もつかひ被申し由。云々」とある。

ロ、元祿七年五月十一日、芭蕉が杉風に與へた手紙の一節、「猪兵衞病氣、桃隣無御油斷、被仰付可被下候。折々深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候。されども壽貞病人の事に候へば、しか〴〵茶をまゐるほどの事

も得致まじくと存候。云々」

ハ、同年六月三日、猪兵衞に與へた手紙の一節、「理兵衞細工無之時分、せめて煩ひ不申樣に御氣を可被付候。右之通り壽貞にも御申聞かせ可被下候。おふう夏かけて無事に候哉。樣子具に御申越可被下候。」

ニ、同年六月八日、猪兵衞に與へた手紙

壽貞無仕合もの、まさ・おふう同じく不仕合、とかく難申盡候。好齋老へ別紙可申上候へども、急便に候間、此書狀一所に御覽被下候樣に賴存候。萬事御肝煎御精御出しの段々、先書にも申來、扨々辱誠にふしぎの緣に候。此御人賴置候も、ケ樣に可有端と被存候。何事も〳〵夢まぼろしの世界、一言理窟は無之候。ともかくも能樣に御はからひ可被成候。理兵衞もうろたへ可申候間、とくと氣をしづめさせ、取亂し不申樣に御しめし可被成候。以上。（全文）。

ホ、同年七月（「次郎兵衞物語」に天和二年七月十二日相果とあるがどうか）。

尼壽貞が身まかりけるをきゝて

數ならぬ身となおもひそ玉祭り

ヘ、同年十月、伊兵衞宛遺言狀。

伊兵衞に申候。當年は壽貞事に付いろ〳〵御骨折、面談に御禮と存候處、無是非事に候。殘り候二人の者ども十方をうしなひうろたへ可申候。好齋老など御相談被成可然了簡可有候。

以上の根據に就いて、先づ淺生庵談とあるそれが、容易く信じられるものかどうかゞ問題であらう。風律と同門の風之が書いた「俳諧耳底記」に、芭蕉の正風は和歌から出たもので、あのくたら三みやく三菩提の歌、糸によるものならなくにの歌、此二首によつて正風を工夫したとか、或は芭蕉に俳諧の三鳥ノ傳(都鳥・鶯・時鳥)があつて、之が正風の根元であるといふ野坡說を述べてゐるが、それから類推すると野坡の話もうつかり信用は出來ない。次の四つの手紙は、「芭蕉翁眞蹟集」・「同拾遺」・「俳諧一葉集」・「芭蕉句選年考」其他に見えて信用は出來るが、材料として貧弱な感がある。はじめの杉風宛の手紙は、芭蕉が膳所から送つたもので、芭蕉庵の留守をあづけた壽貞尼が病人だから、お出になつてもお茶一つ上げられまいといふ文意、六月三日猪兵衛宛の手紙は、理兵衛・壽貞・おふうの事を心配したもの、六月八日のは壽貞の死を聞いて歎いたもの、七月のは壽貞魂祭の發句、數ならぬ身とな思ひそと言つた芭蕉の心持を想像すると、壽貞との關係も尋常一樣のものではあるまいと思はれて、最二人の關係を知る好材料のやうに考へられる。最後のは伊兵衛宛遺言狀。

「小ばなし」の淺生庵談が無くとも、私は芭蕉と壽貞の間に何か深い譯がありさうに思はれてならないが、今の場合以上の記錄以外に、二人の關係を語る材料が殘らないやうだから、確言を控へてゐる。壽貞は伊兵衛・杉風・桃隣などと知合ひのやうだから、是等の人の間に二人の情事を洩らすやうな秘記でもありさうに思ふがない。杉風には「杉風秘記」があるが、完全なものは殘らぬらしい。尤も芭蕉が妾を置からうが、情婦を持たうが、當時の俳人氣質としては深く問題にするほどの事でもない。其角の道樂は周知の事。嵐雪の妻は後に禪學に凝つたけれ

ど、根を洗ふと遊女である(「杜撰集」嵐雪の裴遊稿に、「彼はあそびものゝ果ながら、云々」とある)。桃隣は疝氣持ち(「刀奈美山」の引、「桃隣に疝氣とも逊さず。云々」とある)。あの律義な去來でさへ可南(かな)といふ妾があつた(許六の去來誄に、「思ふ人のなきにしもあらで、云々」、又丈草より潘川に送つた手紙の中に、「此人も昔は具足を賣て傾城にかゝり候とて、其角なども大ほめのよし。自身にも笑ひ申候。云々」とある)。元祿俳人の寛濶さはひとり芭蕉に限つたわけではない。「貝おほひ」を讀んだ者は若い芭蕉の遊蕩氣分に驚くであらう。我も昔は衆道好きの芭蕉が、全然女を知らぬ筈もなからうと思ふ。情婦があつたつて芭蕉の人格の下る譯はない。たゞどの程度迄遊んだかそれが分らない。洒竹は壽貞を藤堂家の侍女なりしならんと論じ、瓊音は壽貞との關係を京の季吟の許に居た頃だと言がれるが、確證を得ないからしかと言へぬ。私も芭蕉の遊蕩は主家亡命後上京中の事ではなからうかと推察する。壽貞尼との關係も或は其頃ではなからうかと考へる。

一體壽貞とは何者であつたか。野坡は妾だと言うてゐるが、「次郎兵衛物語」には芭蕉の乳母となり、竹人の「全傳」には、「伊兵衛・壽貞なほ尋ぬべし。」とある。乳母では戀愛問題も起るまいと思ふが、その乳母說も確證はない。次に寛文頃壽貞號の人は幾人もあつたらしく、どれが芭蕉の壽貞やら甚だ紛らはしい。例へば重賴の「佐夜中山集」にある一ノ宮壽貞(阿波住)、湖春の「續山井」にある杉本壽貞(山城國作者)、似仙の「落花集」にある壽貞(大阪)、一雪の「言之羽織」にある比丘尼壽貞(京住)等があつた。以上の中阿波の壽貞、大阪の壽貞、京の壽貞は、住所か違ふから、別個の人であらうと思はれ、山城の杉本壽貞は、或は京住の壽貞と同人ではなから

うかと思はれる。次に參考まで是等壽貞號の人の發句を示すと、

車百合ことに時めくあふひかな　一ノ宮氏壽貞
冷酒はきく人かんを催せり　同
前世の紙子が迷ふ地ござくら　同
舌鼓打やうたひのきり〳〵す　同
窓の竹や螢火ともす油筒　杉本壽貞
春の夜の闇はありけりかざめ取　大坂壽貞
しばらるゝ科ありやみの菱のつる　同

沼波氏は右の內一ノ宮壽貞を芭蕉の壽貞と推してゐるがいかゞ。

芭蕉の手紙の中に猪兵衛とあるは伊兵衛の事らしく、伊兵衛なれば白亥の「眞澄鏡」に、杉風の手代芭蕉の甥とあり、「湖東問答」の桃鏡の序にも、祖父伊兵衛晚號一道とあつて、松村伊兵衛であるやうに思はれる。理兵衛は何か細工を業とした者らしく、まさ・おふうと共に壽貞と肉親の關係でもありさうに思はれるが詳しく分らない。

第二節　「貝おほひ」論

一、概　説

寛文十二年正月、芭蕉は「貝おほひ」を作つた。芭蕉最初の著述である。「貝おほひ」は一名「三十番俳諧合」と云つて、伊賀上野天滿宮奉納の句合である。貝おほひとは王朝時代の貴族の戯技の名で、「増鏡」・「徒然草」にも見え、專ら女子の翫んで技であつた。許六の「ゐんふたぎ」・「へんつき」の名が、中古の戯技に基いてゐる事も、此「貝おほひ」の名を眞似たやうにも思はれる。書名は自序に示すやうに、合せて勝負を見るといふ意味から付けたのである。

〔參考〕、三冬の「俳諧歌異合」の序（米花庵田社）に、「貝おほひ・貝あはせ、其もと婦女のふたつの遊にして、その品ひとしからざるや。但西行上人の貝あはせとておほふなりけりとよみたまへるは、玉くしげふたみの浦の蛤なれば、ふたつをかよはせていふべきか。さはあれ堤の中納言の物語等に出たる所の小貝合といふものなん共はじめ久しかるべし。云々。」西行の蛤貝の歌は、「今ぞ知る二見の浦のはまぐりを貝あはせとておほふなりけり」で、流布本山家集に次のやうな詞書がある。「伊勢の二見の浦に、さるやうなる女の童どもの集りて、わざとの事とおぼしく、蛤をとり集めけるを、いふがひなきあま人こそあらめ、うたてき事なりと申しければ、

貝合せに京より人の申させ給ひたれば、えりつゝとるなりと申しけるに、」。芭蕉は或は西行の蛤貝の和歌から思付いて、「貝おほひ」の題名を與へたものかも知れない。

寛文十二年正月といふと、芭蕉はまだ江戸へ下らなかつた時である。序の署名に、「寛文十二年正月二十五日、伊賀上野松尾氏宗房釣月軒にしてみづから序す。」とあるが、此釣月軒が伊賀在住の號か、或は上京中の號か一定しないから、「貝おほひ」は伊賀上野に於て書いたものか、在京中に書いたものか詳かでない（鄕里の天滿宮に奉納した句合だから、大方伊賀で書いたものかとは考へるが）。横本「貝おほひ」（寫）の奥に、芝三田二丁目中野半兵衛開板・同庄次郎とあるから、江戸で出版したのである。

「貝おほひ」は當時の小歌・流行詞（はやりことば）を取入れた發句三十番の句合で、芭蕉はそれにいち〳〵小歌・流行詞を交ぜた判詞を下してゐる。序は芭蕉、跋は同鄕の横月、作者三十七人。即ち三木（二句）・義正（三句）・此男子（三句）・蛇足（二句）・露節（二句）・哉也（二句）・信乘母（三句）・和正（一句）・貞好（二句）・一友（二句）・正之（二句）・意見（一句）・龐尼（一句）・鋤道（一句）・指盞子（二句）・宗房（二句）・政定（一句）・和久（一句）・吉之（二句）・一意（一句）・義子（一句）・雫軒（二句）・適意（一句）・勝言（横、云ニ作ル）（二句）・甘入（一句）・三竿（一句）・城次（二句）・政輝（一句）・鼻毛（二句）・石口（一句）・蚊足（一句）・餘淋（二句）・政當（一句）・一入（二句）・吉勝（一句）・善勝（一句）・不屈（一句）であつた。以上の中義正（杉山氏）・意見（座頭）・吉之（中尾氏）・政輝（長佐和氏）・石口・横月等は、「續山井」・「續連珠」に見えた人々である。是等の作者は住所未詳の者が多いが、恐らく大方伊賀の人で、友人

も先輩もあらうと思はれる。

「貝おほひ」は實に破天荒の著と云つてよい。後の淸い隱者のやうな生活を送つた芭蕉の作として注目に價する書である。併し本書に就いては古人の研究もなく、註書にも乏しい事を遺憾とする。現存の書は種彥の書入本と横本の校正本（校者未詳、朱書入）と、なほ他に一本を藏する位であつた。

二、「貝おほひ」に於ける小歌・流行詞

芭蕉の序に、

小六[一]ついたる竹の杖、ふしぐ〵多き小歌にすがり、あるはやりことばのひとくせあるを種として、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかちて、つれぶし[二]にうたはしめ、其かたはらにみづからが、みじかき筆[三]のしんきはらしに、淸濁高下をしるして、三十番の發句あはせをおもひ、太刀折紙の式作法もあるべけれど、我まゝ氣まゝにかきちらしたれば、世に披露せんとにはあらず。云々

とある。併し之は可德獨吟、定與判、「淸十郎ついぜん　やつこ俳諧」（寬文七年正月刊）の序、

かはゆの淸十郎がなれのはて、いざ追善に俳諧の一卷をあつめん。尤よかんべいと思寄、地打の熊手にまかせ、ひつかきつゞると申せども、長刀のさしあひ、太鼓もちの打越に、あく女の去嫌もかまいないやつこなれ、めつたやたらにしちらし侍る俳諧ならし。云々

とある書方と共通した氣分が見える。

一、小六ついたる竹の杖。小六は慶長頃江戸赤坂に住んでゐた美男の馬方である。無双の小歌上手。小六生れは西の者、そだちは關東武藏野に住むと迄唄ひはやされた男。中村宗三の「糸竹初心集」(寛文四年刊)に、「小六ついたる竹の杖小六、もとは尺八中は笛小六、するは女郎衆の、それ實にほんにさて筆の軸、うたへ小六」とある。「淋敷座之慰」(編者未詳、延寶四年序、寛永から延寶迄の流行小歌七十種を集む。)にも、「小六ついたる竹の杖、本は尺八中が笛、うらはしほたん、ほんなあよをほん筆の軸、竹小六」ともある。其他「松の葉」にも替歌は多く載つてゐる。

二、つれぶしにうたはしめ。「淋敷座之慰」江戸まんざいの唱歌に、「おだんなへ金がまゐつた。つれぶしにまゐらう。」とある。共に唄ふ事。「一代男」・「若風俗」にも例はある。

三、短き筆のしんきはらし。拙い筆ではれ〴〵せぬ心を晴らすために書いたとの意。筆の心を辛氣の辛に取成。

一番

左勝

にほひある聲や伽羅ぶしうたひ初　　三木

うるはしい歌の節で謠初をやるのは、奥床しい上品な事であるといふ意だらう。

二番

左勝

紅梅のつぼみやあかいこんぶくろ　此男子

左のあかいこんぶくろは大坂にはやる丸のすげ笠とうたふ小歌なればなるべし。

横本、「こんぶくろとは小袋の事を小歌にこんとはねてうたひしなるべし。」と朱書入がある。大阪にはやる丸のすげ笠の唱歌未詳。菅笠は專ら婦人のかぶつたもので、加賀笠とも呼ばれる。

三番

左

なく聲やげに伽羅のはし匂ひ鳥　露節

右勝

藪にすむ鶯のうたやお竹ぶし　哉也

左、伽羅の橋をかきよいのとあるを、匂ひ鳥の嘴にとりなされたるは、げによくさえづられたる口ばしなれども、右のお竹ぶし藪にすむといふより、言葉の茂りもふかく、云々。

橋を嘴に取成して、鶯の聲の美しい事を賞めたのが左の句であるが、伽羅の橋をかきよいのといふ小歌の唱歌未詳。但し扇德の「落葉集」(元祿十七年刊)に伽羅の坂橋踊といふのがあるから、以前よりかゝる小歌もあつたと見える。右の句は鶯が竹の中で美しく啼いてゐる事を、お竹ぶしと洒落れたのだらうが、或はお竹といふ女があつて、特に小歌が上手であつた所から、お竹ぶしと兩方にかけて云つたものか。

四番

右勝

妻戀のおもひや猫のらうさいげ　　和正

右うた、猫のらうさいといふ小歌を、つま戀にとりあはされたるは、よい作にやきんにやうにや。云々

猫のらうさいといふ小歌未詳。らうさいは弄齋と書く所から、人名のやうに思ふ人もあるが、人名ではないといふ說もある。らうさいは勞瘵で、戀の病の事で、楳條軒の「よだれかけ」（寬文五年刊）卷之五に、「生れもつかぬ勞瘵のやまひまうけ、大賢・亞聖のいましめし放心者となり、云々」とあるやうに、又元隣の「寶藏」（寬文十一年刊）にも、醫者にも分らぬ病には、らうさいの一節が藥であると書いてあるやうに、元來戀の切なき思慕の情を訴へた歌曲が卽ちらうさいぶしであつた。秀松軒の「松の葉」（元祿十六年刊）に、くも井らうさいと云つて、切なる戀を時鳥に寄せた歌曲がある。之にも種々替歌があつて、猫のらうさいもかゝる種類の一つであらうと思ふ。横本に、「らうさいといふ歌、勞瘵のやまひにかけていへるにや。」と朱書入がある。句意は妻戀の思は猫の戀わづらひのやうであるといふ事を、らうさい節にかけて洒落れたのであらう。

五番

左持

牛馬の糞ふみわけて雪間哉　　貞好

左の句、雪間をふみわけしつめたさは、うき〳〵どつこい、うき世にすめば、うさこそまされとうたふはしかあるべし。云々

うき〳〵どつこいの歌未詳。

六番

左勝

一、きやん伽羅の香ににほへかし犬櫻　正之

右

見にゆかんと二つと山家のやま櫻　意見

左の句、伽羅の香ににほへとは、一句もやさしく、手ざはりもむく〳〵と、むく犬の尾もしろき作意なるに、右の句さのみ言葉のたくみも見えず。とつとやまがの、いよ古狸とうたふ小歌なれば、云々。

一、伽羅の事を小歌ではきやん伽羅と云つたものと見える。犬櫻だから、犬の打たれた鳴き聲を連想して、きやん伽羅と洒落れたのであらう。句意は伽羅の香のやうに好もしく咲けといふだけである。判詞、むく犬の尾をおもしろのおにかけ、おもしろを尾も白に取成したのである。右のとつと山家の唱歌未詳。

七番

左持

たぐりよせむか[一]ら絲ならばいと櫻　　簾尼

右

春風にな[二]れそなゝれそ江戸櫻　　信乗母

唐糸の句は、長太郎ぶしときこえよくいひかなへられて、云々。右、またこむろ節の江戸衆になれそといふを、はる風になれそとつくりたてられしは、云々。

一、長太郎節未詳。左、いと櫻だから唐絲を連想し、たぐり寄せようと洒落れたもの。二、小室節の江戸衆になれそといふ唱歌未詳。小室節は起源・名義詳かでないが、寛文二年刊の「吉原はやり小唄惣まくり」に、吉原へ通ふ馬の駄賃付があつて、「馬士二人小室ぶしうたふ。かざり白馬駄賃三百四十八文。」とあるから、當時小室ぶしを唄つて、吉原へから尻を引かせたものと見える。因に右の句は冷泉爲相の連歌に、

かねておもふもはるはをしきに
ちらぬより風になれそ山櫻　　前中納言爲相

とある附句に想がよく似てゐる。信乗母のは俳諧的であるのと、爲相のは連歌であるのとの相違である。

八番

左勝

うたへるや晩[一]鐘寺ぶしの暮の花　　鋤道

右

種ならばまかせておけろ花ばたけ　指盞子

左、種彦本に晩鐘寺のぶしとある。「新古今」能因法師の、「山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」の歌が謠曲に引用されてゐる所から、謠曲を唄ひながら、夕暮の花を賞する事を、晩鐘寺ぶしと洒落れたのであらう。右、畠だから種を蒔くと連想し、花の唉くに任せて置けと兩方に掛けたのであらう。「花の種をまかせが定なら、といて口說て、かたりてきかせ侍らん。」とある芭蕉の判詞、何となく小歌めいてゐる。おけろは置けの奴詞、後の歌曲の詞だけれど、「松の葉」やりをどりの唱歌中、「槍はぢよんぢよん、ぢよろぢよんぢよろさまに、持たせろまつかせ、持たせろまつかせ、まかせまかせ、まかせておけろの、云々」とあり、又「落葉集」お先鈍助踊の唱歌中、「から崎の、しててんやつこのぼつたてろ、まかせておけろの、よいやさ、云々」ともあつて、古くから小歌に用ひられた詞である。

九番

左勝

鎌できる音やちよいよい花のえだ　露節

右

きても見よ甚べが羽折花ごろも　宗房

左、花の枝たちよい〳〵とほめたる作意は、誠に俳偕の親々ともいはまほしきに、右の甚兵衛が羽折はきて見て我おりやといふ心なれど、一句のしたてもわろく、云々。

種彦本、甚べう衛が羽折はきて見ん我おりとある。左の句ちよい〳〵とは物を見、聲をきゝて、感じ賞める言葉、明暦より寶永頃迄の小説・物語に多く見える。例へば若衆かぶきや遊女の姿をほめて、雲慶の御作ちよい〳〵（「東海道名所記」）などといふやうな例である。句意は花の美しさをほめていふちよい〳〵を、鎌で草を刈る音に喩へたものであらう。右の甚べが羽折云々の句、小歌に似たれど出典を詳にしない。意味は花が美しいから、甚べや花色の衣裝を着て行けといふのだらう。甚べとは丈の短い尻の裂けた羽折である。

十番

左持

鳴さわげにほんづゝみの無常鳥　　政定

右

ゆかしきや山の尾常はなきやるもの　　年久

左は、日本堤の無常の烟も、たちのびたる句のすがたは、郭公のとりなりとよく見え侍るに、右の句は、空なきさうなおつれの顔も、ずんといやな氣なれども、左にひつぴけうんのめとうたふ小歌なれば、お常のしやくも捨がたくて云々。

種彦本の註に、「延寶年間の一枚繪、坊主小兵衛の肖像の上に題したる小歌。千住なるこつが原にたつ煙り、か

ねてめどのあるときくもの、ひつぴけ、うんのめ、さわぐこんだに。寛文七年知算獨吟［奴俳諧］、發句　ひつぴけさねも三味線の糸櫻。［松の葉］元祿十六年印本　三谷をどり「だてもうはきも命のうちよ、やがて死ぬ〳〵、ひつぴけ、うんのめ、あすをもしらぬ身に。」とある。左、無常鳥とは郭公の事で、こゝでは吉原へ通つてくる嫖客に見立（喩へる）てたのである。昔は千住こつが原に燒場があつたから、嫖客を無常鳥に喩へたのである。句意は人間僅か五十年、死ねば燒場の煙と化つて了ふ。命のある中、思ふ存分享樂を盡せといふのである。右の句は、山の尾をお常のおに掛け、左が無常鳥（つねなきとり）であるから、それに對してお常と洒落れ、女の常に泣く事に喩へたのである。

十一番

左勝

郭公谷から峯からこんゐをせい　　吉之

右

鶯の玉子ぢやとおしやるほとゝぎす　　一意

左は、きやりの音頭ときこえて、くどくこと葉の中のつな、さても見事にようそろうた云々。右の句、鶯のかひこの中の郭公といふ心をふくみ、聲のふしをあらせて、醫者に見すれば玉子ぢやとおしやるといふ小歌をかりかへられ侍る。伊勢のおたまが事に出れば、玉の句といはんに難なかるべけれど、云々。

「淋敷座之慰」、春駒くどき木やりの唱歌に、「狩場の鹿と申するは、あすをもしらぬ身を持て、たはぶれあそべ夢の浮世に、おひかけ中の綱、いかう見事ようそろうた。云々」。又同書、島くどき木やり唱歌に、「おひかけなかのつなからみんごとようそろた。云々。」ともある。「淋敷座之慰」には、何々くどき木やりと題して、すべて十二の唱歌が見え、皆中の綱云々といふ言葉が入つてゐる。之は後の「大ぬさ」の木遣の唱歌中にもある。こんゐをせいとは聲を出せといふ事だらうが、木遣の音頭の歌にかくある例を詳にしない。右の鶯の玉子の句は、「萬葉集」九之卷に、詠霍公鳥一首並短歌と題し、「うぐひすの、かひこのなかに、ほとゝぎす、ひとりうまれて、しがちゝに、にてはなかず、しがはゝに、にてはなかず、云々」とある句の意を、醫者に見すれば玉子ぢやとおしやるといふ小歌の語を借用して表したものだが、此小歌の出典未詳。なほ玉子から伊勢のお玉を連想してゐるそのお玉は、お杉・お玉のお玉で、伊勢ノ古市間の山で、三味を彈き、神宮詣りの人につきて、錢を乞ふ女乞食である。

十二番

左 勝

二小六方の木ざしや菖蒲かたなの身　　義子

右

菖蒲刀中三や檜の木のあらけづり　　雫軒

これさ爰許へ小六方とほざけだいたるでつちは、うるしいこんではあるではあるぞ。右の刀は源五兵衛おとゞの長脇

差の、さやは三文、下緒は二文、しめて五文の錢うしなひのやす物と見え侍る。云々

左の句は、端午の節句に子供が木刀を差して、威張つて歩くのは、六方のきざしであるとの意。木ざし(木刀)を萌しに取成(詞を掛ける)。六方とは萬治・寛文頃江戸の男達即ち鐵砲組・大小神祇組・鶺鴒組・唐犬組等の町奴・山の手奴を云ふ。彼等は常に無反りの長刀を帶び、ねぢり髭・立髮、頗る異風をなして、市中を横行した。そして言葉も六方詞即ち奴詞と云つて、荒い、下卑た、可笑しいきゝ方をした。行風の「後撰夷曲集」(寛文十二年刊)に、蕨の宿で馬方の喧嘩があつた。それを奴詞で詠んだ歌、「手を出せろ折つてくれべい馬鹿つらめどこさ蕨の宿の馬方」だの、後のものだが鷺水の「御伽百物語」(寶永三年刊)の附合、「髪水にあたまかつぱる氷かな」に「しやつつら寒き雪のあけぼの」と附けた事、なほ清十郎追善奴俳諧を見ても、よかんべい・ひんなすつておくりやれぢや・星のおやぢ(月)・ぢこぶ(山の下)・ぶつきれる・とつちめる・あんちうことか・くんのみ申した・むしつこくおもひなた(涙)がこぼるゝ・おもくろい(面白い)等、或は促音にし、片言にし、又は無理に長く言つたりするなど皆奴詞である。芭蕉も判詞に、ほざけ出いたる云々と奴詞を用ひて、六方をふむ者の言葉に合せてゐる。小六方といふ語は後の例だけれど、嵐吹の「姿記評林」(元祿十三年刊)に、「一振颯爲、二振頑、想像此前小六方」とある。右の句、中や檜の木のあらけづりとは、種彦の註に、

檜の木のあらけづりとは、源五兵衛といふ小歌どり也。判の詞にてもおほよそは聞えたれども、五人女(貞享三年印本)五の巻に、「世に時世歌源五兵衛といへるは、さつまの國かご島の者なり。云々。世をわたる業

とて、都にて見覺えし芝居事種となりて、伐に顔を作り髭、戀の奴の物眞似、嵐三右衞門がいきうつし、やつこの〳〵とはうたへども、腰さだめかね、源五兵衞どこへ行く、さつまの山へ、鞘が三文、下緒が二文、中は檜の木のあらけなき聲して、里々の子供をすかしぬ。云々」とあるにてらし合せてあきらかなり。そも〳〵おまん源五兵衞が事は、寛文はじめの街說にて、それを小歌に作り、今も人口に殘る。「源五兵衞どこへ行く。さつまの山へ。高い山から谷底見れば、おまんかあいや布さらす。」といふがもとの歌にて、さま〳〵の替唱歌あり。此檜の木のあらけづりといふも、その替歌のうちなり。「淋敷座之慰」にも多く見えたれど、こゝに引くべき歌は載せず。故に後のさうしながら「五人女」を證とす。

とある。

十三番

右　勝

ふすべられたはん半夜の蚊やりかな　　義　正

右の句、たはんはといふふしを言葉にことわられたるは、かやの木どくにおもひよられたり。云々

ふすべられたはんとはふすべられたといふ意か。松の葉を松の葉はんといふやうに、ふすべられた半夜といふ意だらう。

十四番

左持

かゝばやな小舞あふぎの織どの繪　　勝言

右

扇もや折ふし風が吹て來た　　廿入

左は、かの孫三郎が織手をこめし織ぎぬの、いとしほらしき舞振也。
右の句、折節かぜが吹てきたといふ小歌、扇にいひかなへられたれば、あなたのかたへからころひやう、こなたの方へはからころひよつと、云々

左、句意は扇繪を畫きたいものだといふだけであるが、織どの繪を織殿部にかけ、孫三郎の舞歌を連想し、小舞あふぎと云つたのである。「落葉集」、古來十六番舞籥歌第十三番、「おりどのへ」といふ舞歌に、「おりどのべの孫三郎が、おり手をこめたるおりぎぬ、云々」とある。なほ此籥歌の末に、「右此十六番舞の元は、往昔島の千歳・和歌の前舞はじめ、今に傳り、舞のいろはにて教へ初るなり。」とあるから、此織殿部の歌は寛文以前から子女の舞の初歩として教へられたものと見える。右の句種彦註に、

いかのぼり　へうたん節

あまりさびしさに、垣にへうたんつらせた。をりしも風が吹て、あなたのかたへからころひよ、こなたのかたへからころひよ。からころ〳〵。へうたんつらせたは、いよこのまことに、なによりもつておもしろい。

柳亭曰、此かへしの歌あり。それは二十七番越後布の條に引けり。此小歌をてらし合する時、句意、判の詞ともあきらけし。按ニ此小歌は「さらしな日記」たけしば寺の條によりて作りしものなるべし。

とある。これで句意・判詞明かである。

十五番

左 持

すだれごしの月やいよ此おもしろい　貞好

右

半夜させやあ此宵の月のかげ　指盞子

左は、いよこのとうたふを、伊豫にとりなされたるは、すだれのあみ目をおどろかし、何より以ておもしろい。右もまた、ゐやい踊の拍子と見えて、やあ此さいた長刀をぬきんでたる作意は、云々。

前條「いかのぼり」のへうたん節の文句に、「いよこのまことに、なりよりもつておもしろい。」とあり、又庄司勝富の「洞房語園」(異本、溫知叢書)にも、「寛文頃吉原にて太鼓持などの唄ひしもの。餘り淋しさに五丁町を見たれば、折しも籬々に、分けや口舌の高笑、あなたの方は三味線をひつぴいて、かんなくせんだは、いよこのまことに、何よりもつておもしろせうかの。云々。」ともある。句意はすだれ越しと云つたから伊豫簾を連想し、いよこのといふ小歌の文句を結付けて、月を賞めたのである。右の居合踊の唱歌未詳。

十六番

左勝

月の舟やこよひはどこがおとまりぢや　信乘母

右

月の雲間よい〳〵なんど出つ入つ　三竿

ひだりの句、はりまの國の書寫むしや寺がおとまりなれば、御法のふれにうたがひなく云々。右もまた、よひ〳〵なんどとをどろうちこそ佛なれとうたふ故にや、……地獄踊の小歌なれば、云々。

左の句は種彥の註に、

座之慰　しな物の歌

夕べ〳〵のしな者は、今宵はどこがおとまりぢや。播磨の國のしよしやむしや寺のおつきやがおとまりぢや。

とある。右の月は宵毎に雲から出入するといふ意味で、宵々を良い〳〵にかけ、地獄踊の文句を引用したのであるが、地獄踊の唱歌未詳。

十七番

左

ちよいと乘たがるやたれも駒むかへ　　吉之
右勝
むかふ駒の足をはぬるやひんこひん　　雫軒
左、伊勢のお玉はあぶみかくらかといへる小歌なれば、たれも乘たがるはことわりなるべし。
右、ひんこひんとはれまはるは、誠にあら馬と見え侍れども、人くらひ馬にもあひ口とかやにて、右の馬におもひ付侍る。云々

伊勢のお玉の小歌唱歌未詳。人くらひ馬、馬には騎つて見よといふやうな意か。

十八番
左勝
ほの上も大たばに出よ稻の束　　適意
右
かぶけるは稻のほのじぞ京女臈　　城次
左の句、大たばといふを稻の束にゆひまはされし事、云々
又右の京女郎にほのじは、たれもすきくはのかれ〳〵のぞむ事なれど、云々

大たばに出よとは大きく出ろといふ事で、稻の束だから大たばといふ縁語を持つて來たので、大きくうんと稻

の穗も伸びろといふ意。右は稻を京女郎に喩へ、稻穗をほの字（惚れる）にかけ、稻の穗が頭を傾けてゐるのは、京女郎が誰れかに惚れたしるしであると洒落れた意だらう。

十九番

左　持

鼻息もむせてくんのむ新酒哉　此男子

右

溫のめとあたゝめかゆる新酒哉　哉也

くんのむはぐん／＼飲む奴詞。うんのめはうんと飲めといふ之も奴詞であらう。右、溫をうんに（大に）掛け、あたゝめかゆると洒落れたもの。

二十番

左　勝

鹿をしもうたばや小野が手鐵砲　政輝

右

女をと鹿や毛に毛がぞろうて毛むづかし　宗房

左の句、小野が手鐵砲はおのが手に持つ鐵砲の取成。鹿に對して小野を連想したのは、源氏の夕霧大将が落葉

宮の許へ通つて行く小野の山莊の光景を想像したからであらう。右の句は、「座之慰」敷物揃くどき木やりに、「あまりてたらざる所には、敷いたる皮は何々ぞ。毛氈・虎の皮・豹の皮をばまつさきに、毛筋を揃へてしかれたり。云々」とあるから、是等唱歌の言葉を取つたものであらう。句意は女夫鹿の皮が毛筋を揃へて敷かれてある狀を氣味が惡いと云つたのである。毛むづかしを氣むづかしに取成。猥褻な感じのする句である。

二十一番

小歌も流行詞も余り引用されてゐないから畧した。たゞ右の句の判詞に、「左の發句にははるかにこえたやつさ。大いかい物とや申さん。云々」とある。

二十二番

左勝

とりやげばゞが右の手なりの紅葉哉　三木

右

もみぢぬも來てみよかしの枝の露　蚊足

右の句よくいひかなへられ侍れども、もみぢぬ樫を好まるゝは、異風なる物ずきにて、色にふけらぬ人なるべし。云々

横本、「もみぢぬと」とある。助詞のかしを樫に取成し、紅葉せぬ樫の木だけれど、枝に露の宿れる狀を見に來いと云つたので、そこが異風な物好きである。喜多村信節の「嬉遊笑覽」に、「洞房語園」の文を引いて、

男立深見十左衛門といふもの、延寶年中浪花の宗因江戸へ來りし時、十左衛門共社中に入る。それが發句に、「名月やきてみよかしの額際」といへり。額を廣くぬきあげたる故なり。その句の端書に、「上署治る御代の月は冴えて、仲のおほぢは艶色の最中、前から見えぬ額際を、來て見よかしとうたふはたぞ。深見十左衛門。」とあり。(其頃吉原にて小歌に唄ひしなり。云々。)

とある。右は此自休(深見十左衛門)の發句の言葉を取つたものだらうと思ふ。深見十左衛門とは寛文頃の町奴で、髭を長く生してゐるから、髭の十と異名を取つた男である。其頃町奴の間に、額を廣くぬき上げる風が流行つて(唐犬額も共一例)、自休も共一人であつた。紅葉せぬ樫を見に來る事も變つた物好きであるから、それに異風を喜ぶ町奴の唄の言葉を取合せたものであらう。左は紅葉の枝をとりあげ婆の右手に喩へたのである。宗房がかかる句を勝と定める所に、彼が當時の俳境もうかゞはれる。

二十三番

左勝

しつぽとやぬれかけ道者北時雨　餘淋

右

しぐる音やさつさやりたし蓑と笠　政當

左のぬれかけ道者は、ぼつとりもの〻しなもの〻、袖にしぐれの通りものとや申さむ。

右の句、さつさやりたしなんしゆんさまとうたへば、あつたものぢやないはさてといはまほしけれど、云々

左の句、しつぽとやはしつぽりとやの意。ぬれかけ道者は、しめやかに戀をしかける者といふ意味で、それが時雨にぬれて寺社へ參詣すると見立てたから、道者と云つたのである。ぬれは情を通ずる事と時雨に濡れる事と兩方に言掛けたのである。後の例だけれど、「松の葉」秋草の唱歌中、「萩の下葉の露にしつぽとぬれて、云々」、又同書あくしよ八景の唱歌中、「しつぽとぬれたがしやう〳〵の、云々」ともある。ぼつとり者の品者。ぼつとり者とは質素の中に品があつて、思ひやりの深い者を云ひ、しな者とは言語・服裝から動作に至る迄、身だしなみの深い者をいふ。「好色訓蒙圖彙」に詳說して、

品もの

さても世にいふなる品ものとは、いかなるをかいふぞといへば、風俗しやんとしてべたつかず。物いひ・いずまゐ・おびのしやう・衣裝・ふみのもんごんにいたるまで、こまかに心をつけておもわくをかけ、たゞ打ふすとてもすがたやさしく、ひとりありとても物のすきまなんどより、人のかいまみん事もやと、こゝろびまなくたしなみ、人の心をくむ事、見どほしの晴明そこのけにて、やさしきを品者といふなり。

ぼつとりもの

是は衣裝とてもけば〳〵しからず。無地の小袖に紋所、さては兩めんの茶などをこのみ、顏のやうだいしろくけはひなさず。たゞ底淸らに拭たて、物ごとしづかにして、こゑ高からず。あるかなきかにゐて、歌双紙

とてもはでなる物をこのまず。物見にいづるとても、人より跡に引しりぞき、いとけなきものなんど見てはさもあひらしく、めしつかふ人にもむつまじくなさけあり。さてもやさしきお氣立やと思ふなる、是ぼつとり様也。

ぬれもの

ぬれものとは身のかたぎ・やうす見るからしだるく、ちらと見たる眼もとにも、人の心をうごかすやうに、なるほど〱しほの眼もとにこぼるゝあひぎやう、打言ひたる言葉もおもわくをつくろひ、立居にも前ほらつかせて氣をもたせ、男なんどある障子一重のあちらなどにては、心をつけてせきばらひし、古歌なんどうちずし、又は持ちたる扇の端にも、おもわく深き歌を書き、文のもんごんにも色ふかくみせたる、これぬれ者なり。

其例は種彦の註に、「垣下徒然草」（寛文十一年刊）花崎左近の條、「雪の肌こまかにして、ぼつとりとかわゆらしきしなものなり。」とある。「淋敷座之慰」野郎まんざいの唱歌中、「ぬれ者・品者・ぼつとり者、云々」、又同書吉原太夫浮世たゝきにも、「ぼつとり者のあぢものゝ、云々」、「雨夜三杯機嫌」（元祿六年刊）中、萩野左馬之丞の評にも、「ぼつとりものしなもの奇妙〱」などとある。通り者。「洞房語園」に、京島原では粋といひ、江戸では通り者といふとあつて、諸分けに通じた氣の利いた風俗の人を云つたやうである。之も「訓蒙圖彙」に、

とほりもの

是は身の風當世のたゞ中を好み、何はにつけてもしだるき事はなく、しやんとしたるかたぎは、上手のさした立花のやうに、道具・衣裝にいたるまで、かろくしてしかも思ひいれを大事にふくみ、着物は表よりなほ裏に心をつけ、人のいふ言葉にも心をくみて、こなたよりいらへして氣をもたするを通者とは申なり。

とある。

右の句、さつさやりたしなんしゆんさまといふ小歌未詳。あつた者ぢやない。種彦註に、「東海道名所記」かぶきの少年の事をいふ下りに、「又あつたものではないと思はるゝに、云々」、「垣下徒然草」松島市之丞の條下、「いちの上あつたものではなら坂や、云々」などとある、是等は野郎の美しさをほめた言葉で、又と無いといふ意。何意は時雨が降つて來たから、蓑と笠を貸してやりたいといふ事で、それにさつさやりたしの小歌の語を借用したのである。種彦本、しぐるゝ音やとする。

二十四番

左持

酒の醉やすぢりもぢりの千鳥足　餘　淋

右

から臼の代のちんどり足をふめ　三　竿

ちんどり足は千鳥足の義。右、唐臼の杵の端をふむやうな千鳥足をしろといふ意か。

二十五番

左

しやうことがたまらぬものはみぞれ哉　鼻毛

右勝

見ぞれ酒元來水ぢやとおほしめせ　一入

右は、元來水ぢやといふ小歌を、みぞれ酒に作られたるは、桶のそこいふかくいひ立てられ、樽のかゞみともなるべき句なれば、かんなべのふた目とも見ず、云々

左、しやう事がたまらぬ（仕方がない）のたまらぬを、みぞれが溜らぬに掛け、それは仕方がないと云つたのである。右、種彦本おほじめせとある。句意はみぞれを見それに取成し、酒を水だと見捐つた事に、元來水ぢやといふ小歌の文句を借用したのである。此小歌の唱歌未詳。みぞれ酒は霰酒とも云ひ、麹が解けないで、霰のやうな糟の交つた酒である。

二十六番

左持

わる音はかんからめけるこほりかな　一本、云　勝言

右

そこでさせ氷のしたの月のかげ　　　　城　次

左の句、こがれのはしはかんからめくにといふ小歌を、わつつくどいつゐひ立てられたれば、云々。

右また居合踊のそこでさせといふを、氷にとぢあはされたるは、げによくおもひ月影の、ひかつた句作とも申すべければ、云々

種彦本、左勝はあやまり。かんからめく(一)、から〳〵いふ義。こがねの橋の小歌唱歌未詳。右の句、そこを底に取成し、氷の下は水だから、月影にそこでさせと云つたのである。居合踊の唱歌未詳。

二十七番

左

越後布か松の葉(一)はんの雪の色　　　　正　之

右　勝

降つもる雪やしら(二)藤こふじ山　　　　義　正

雪の色を越後布に見立られたる左の句は、げにも手きゝのしわざにて、云々。松のははんといふ事、小歌のふしはもつともながら、云々。

右はしら藤こふじを富士にとりなされ候事、誠に名高き不二にはいかでか肩をならべ侍らん。云々

左の句意は宗房の判詞でよく分る。右は藤を富士に取成し、降り積る雪は富士山のやうであると云つて、小歌の文句を借用したもの。種彦註に「紙鳶」の唱歌を引用して、

越後ざらしに、松のきんのつけて、松のえんだが、あちりな、こちりな、あちり、こちり、すじり、もじりて、えりくりえんじよの、松のきんのもとで、ふぢのはんながたよ〳〵と、藤はなにふぢ、しらふぢ、こふぢ、紫藤の、そもやみだれ〳〵たる、そんのきんのもとで、さすぞ盃、やつこのはつか、のめさ、よへさ、くだをまかんすな。

柳亭曰、前の十四番に引しへうたん節の末也。こゝには松の木とあれども、松の葉ともうたひしなるべし。松の葉を松のはは んとうたふは、こゝに松の木を松のきん、藤の花を藤のはんな、其木の本をそんのきんのもと、といふと同じ語勢也。

とある。

二十八番

左　特

炭の荷や付てうるしいこんだ馬　　吉　勝

右

炭頭けぶるやずんといやな木ぢや　　善　勝

左、炭をうるといひかけられたるは、げにうるしいこんだ馬のあしき所なく、云々

右の句、ずんといやなきとはあれど、氣のどくたんといひかなへられたれば、云々

左の句、種彦註によれば、うれしいをうるしい、當世の流言。ことだをこんだ、六方詞。うるしいのうるは炭を馬につけて賣るといふ事と、嬉しいといふ事と兩方にかけ、こんだは小荷駄にかけたもの。なほ「卜養狂歌集」に、

湯治土産に、木地の三ッ組の重箱をたまはり、かたぢに申つけたり。ぬりてつかへとありければ、當世はやりことばにてよめる。

たまはりし木地重箱の三ツ組はうるしい〳〵かたぢうけない

とある。右の句、ずんといやな木とは、前に空なきさうなお常の顏もずんどいやな氣なれどもとあつたやうに、木を氣に取成し、炭のけぶるのはずんといやな氣持がすると云つたのである。氣の毒たんと云々も小歌の文句らしい。

二十九番

左 勝

掃除して瓢箪たゝきや炭ほこり　　不屈

右

炭燒やおのが先祖はよくしつた　　一入

右はやらうざぶとく出申な、おのが先祖はよくしつたといふを、小野炭にとりなされたる事、大炭頭をかたぶけて感

じ入侍れども、云々。

種彥の註に「吉原失墮」(延寶二年刊)をあげて、

或歌に、「女郎めまんじそ。にしめが先祖を見かじつた。磯邊・澤邊で根芹を摘んだを忘れたか。」といふ事あり。野郎ざぶとく出申すなは、是と對の小歌なるべけれど、其唱歌の全きを未見。まんじそは自慢なす事なかれなり。にしはぬしなり。ざぶとくは今の俗語のずぶとくなるべし。

とある。おのれのおのを炭燒の名所なる小野に取成。

三十番

左　勝

犬の鈴やいきくびしやだんの神かぐら　此男子

右

舞衣やをかみの出立神樂神子　一友

左の犬の鈴の句誠に人作のおよぶ所にあらねば、いきくび社壇もうごき、御社のおやぢさまも御感淺からず云々。

種彥註に、

司長はすべて頭立つ者をおやぢといふのが例の奴詞なり。云々。寛永十九年元吉原細見記「あづま物語」に、おやぢとあるは庄司甚右衛門の事にて、娼家の長なればなり。御社のおやぢさまと判の詞に書しは則是なり

とある。

三、「貝おほひ」に表れたる芭蕉の遊蕩氣分

「貝おほひ」を讀んで二つの問題に想到した。一は如何に歌に和ぐ神心とは云へ、當時流行の六方詞や遊女・野郎の三味に合せる小歌にすがつて、かゝる遊蕩的な句合を奉納しなくともよささうに思ふ事と、他は「貝おほひ」述作の年代が、蟬吟の生前でもなければ、芭蕉江戸下り後の事でもなく、芭蕉が亡命し、上京六七年の歳月を經てからの事であつて、殊に江戸で出版してゐる事とである。此二問題が今私の想像を恣にさせる興味の焦點になつてゐる。

芭蕉の上京說は、確證に乏しいけれど、「貝おほひ」に特に小歌や流行詞の句合を試みてゐる所から考へると、當時の芭蕉は小歌に趣味を感じ、流行詞に浮き／＼した心をそゝられてゐた事は、事實と見るより外はあるまい。而かも「貝おほひ」の小歌や流行詞は、遊女・野郎或は嫖客の間に專ら流行つたもので、一時なりとも芭蕉が其境に出入しなくては、それほど迄に知る譯もなく、興味を感ずる次第もなからうと思ふ。且つ又芭蕉の判詞を味讀するに、合せた句以上に遊蕩氣分を助長させるものであつて、彼の遊女細見や野郎評判と共通した氣分があるから、どうしても芭蕉は一度は酒色の間に身を委ねた人のやうに思はれてならない。二十九歳の芭蕉は次のやうな事を言つてゐる。

浮世五十年、一寸もまだ伸びぬ花の枝、咲くまでのあひ遠なれば、まづ眼の前の晩鐘寺の今日の花見こそ尊

伊勢のお玉は鐙か鞍かと云へる小歌なれば、誰もけれ。云々

空なきさうなお常の顏も、ずんといやな氣なれども、……乘りたがるはことわりなるべし。云々

京女郎にほの字とは、誰もすき鍬のかねぐ望む事なれど、云々

もみぢぬ樫を好まるゝは、異風なる物ずきにて、色にふけらぬ人なるべし。云々

人生わづか五十年、伊達も浮氣も命の中である。死ねば燒場の煙と化つて了ふ。まゝよ好きな酒も飲み、惚れた女に唄はせて、此世を面白く暮らした方が得であるといふ刹那主義的快樂の欲求は、當時の遊蕩兒の人生觀で、若い芭蕉のそれに共鳴した事は、以上の言を以てしても想像が出來よう。試に之を後の芭蕉庵生活と比べて見たまへ。妻もなく子もない芭蕉、瓢然と江戸へ下つたものゝ、住むべき一定の家もなく、わづかのしるべを賴として、浮草のやうに、昨日はそこ、今日はこゝと、流れぐて來た末が深川の六間堀、杉風の別墅といへば豪氣なものだが、土地は低いし、場末ではあるし、一間しかない壁をぶちぬいて、出山の釋迦の像を定置し、瓢を花活けにも、米櫃にも使つたといふ貧乏生活、いつも茶の紬の八德を着て、其角や嵐雪がとこへいてくるぞやと言はれては、どら者の其・嵐殊の外氣が詰つて面白からず、俳席の外は大方逃げ歩いたといふも無理ならぬ事で、芭蕉自身でさへ時には昔の唄のさゞめき、なつかしい顏の思出に、うつとりとする夜半もあつたらうに、さりとは別人の感がするのである。伊勢のお玉に乘りたがつたり、京女郎にほの字では、芭蕉も其角の大酒を戒めたり、

路通の還俗を憤る資格はないのである。元祿前後には艶隱者ともいふべき者が方々にあつたらしい。芭蕉も過去の遊興を夢みながら、閑靜な場所へ引込んで、評判記でも書いてゐたなら、立派な艶隱者になつたかも知れない。併し眞面目に人生を深く考察する彼の性格は、理性や道德を圓熟させて、さうならなかつたのはよかつた。芭蕉の芭蕉庵入は延寶の末か天和の初年であらうから三十七八頃である。二十九歲の寛文十二年から、數へ年十年を經過して、芭蕉が深い內省と考察に入るやうになつたプロセスは、此破天荒な「貝おほひ」の著によつて、餘程考へさせる意味のものと見なければなるまい。それと同時に過去に遡つて、芭蕉の所謂遁世の原因に關する戀愛說にも可能的な疑問を抱かせる事にもならうし、京生活中壽貞尼といふ妾があつたといふ憶測、降つては江戸放浪中酒色に沈んだといふ異說（魯庵の桃靑傳に、喜多村信節の說として、「筠庭（信節號）の過眼錄に、芭蕉が官金を拐帶して、時の奉行所にて處分を受けし一事を掲げたりといへども、過眼錄は未だ窺はざれば實否を知らず。云々」とあるが、「續燕石十種」第一に收める過眼錄は著者未詳とあつて、かゝる記事は見えない。信節の過眼錄は別本であらうか。或は魯庵の記憶違ひか。）も、「貝おほひ」を中心として前後に構成される想像にならうかと思はれる。私には「貝おほひ」が芭蕉の一生を通じて、單に句作の上ばかりでなく、思想上劃期的たるべき著書のやうに感ぜられる。古人は芭蕉の變風の初めとして、「次韻」（天和元年刊）以前の集を取らず、多くは支考の「冬の日」以來の三變論に傾いて、寛文の俳諧に言及しない。若し論ずる者があるとすれば、古調といふ漠然たる言葉の中に、寛文・延寶の句を突込んで論ずるに過ぎない。「貝おほひ」は芭蕉自らの判であるといふ點から見て、

延寶五六の「江戸三吟」・天和の「次韻」に對して、句境の變遷を知る價値は大にある。古人が「江戸三吟」・「次韻」を論ずるならば、その前に寛文の俳諧を論ずる必要がある。寛文の芭蕉の俳諧を論ずるとしたらば、此「貝おほひ」を研究しなければならぬ。實は種彦の研究も滿足は出來ない。種彦は例の考古癖から、小歌や流行詞を考證しただけで、當時の芭蕉の氣分や生活を論評しない。元祿以降芭蕉の研究家は多かつたけれど、彼等は「貝おほひ」を究める事によつて、自己の偶像崇拜を傷けられん事を恐れた。或は「貝おほひ」が得道した芭蕉の人生觀・藝術觀の前に、重大なる意義を持たぬものと考へたか。更に何等の論評はない。ローマは一日で建設されたのではない。芭蕉の寂・栞は幾多の思想の流動を漕ぎ拔けなくては得られない。私は芭蕉の過渡時代の人生觀・藝術觀が、やがて眞正の境地を展いてくるものゝ準備として興味を感ずる點に於て、將來慥かな「貝おほひ」研究の出現を期待して止まぬ次第である。

次に注意すべき事は、支考の「露川責」(享保八年作)に、「昔西行・宗祇など、兼好も長明も、今日の芭蕉も、酒色の間に身を觀じて、風雅の道心とはなり給ふ。云々」とある事である。之は支考が世情分明の俳諧に遊興の經驗を持たぬやうではだめであると露川を攻擊した論であるが、之に對して露川は「相楔」といふ書で、酒盛・遊興に身を持崩して、風雅の道心となつてたまるものか。それは蓮二の我田引水論である。殊に兼好や長明が酒色に長じたなぞ、前代未聞の事である。虛を先にして、實を後にする術だらうと冷やかしてゐる。露川は芭蕉の郷里の人で、晩年の門人ではあるが、芭蕉も酒色の間云々といふ說の虛妄を辯駁しさうなものだが、しないのは

如何なる譯か。兼好や長明に就いて其虛妄を辯ずるならば、芭蕉に就いても大に辯ずべきであらうが、默つてゐるのは不思議である。露川も芭蕉の遊興だけは認めてゐたものか。尤も當時の俳人氣質は遊ぶ位は誰れしもやる事で、それを形式道德の上からとやかく批難する事は、俳人氣質を知らぬ人の論である。杉風でも誰でも、芭蕉は若い頃相應に遊んだ人である位は知つてゐても、師事した芭蕉の前に、先生の昔を論ずる事は、芭蕉の威嚴と德望によつて出來なくなつて了つたかも知れない。それを支考は何事によらず、言を芭蕉に假託して、自論の權威としようとした男であるから、遠慮なく公言して、返つて他人から我田引水論であると笑はれたのかも知れぬ。

第四章　芭蕉の江戸下り

第一節　江戸下りの時日と同伴者

芭蕉の江戸下りは諸書大方寛文十二年九月としてゐるが異説もある。

一、寛文十二年説

竹人の「全傳」に、「かくて蟬吟子の早世の後、寛文十二子の春（二十九歳）仕官を辭して甚七と改め、東武に赴く時友達の許へ留別。雲と隔つ友にや雁のいきわかれ。」とある。秀三の「一代集」の芭蕉翁傳にも、「寛文十二年三月江戸に至り、云々」とある。勝峯氏の芭蕉年譜は、「寛文十二年二月江戸に下る。云々」と斷じてゐる。此三月說は何によつて定めたものか明かでないが、勝峯氏の二月說は素蓮の說に從ひ、雁の別れが二月の季であるから、かく斷じたものと見える。秀三說も季題に據つたものか。

二、延寶四年說

素蓮の「春秋」に、

按、芭蕉東武下向ノ說、或ハ延寶四年トシ、又同六年トス。皆誤也。舊說寛文十二年ト云フハ其實ニ近シ。

故ニ暫此説ニ隨フ。草枕、江戸發足ノ砌、秋十とせかへつて江戸をさす故郷云々。此句ヲ以テ推スニ、貞享元年ヨリ正シク十一年ハ延寶三年ニ當レ共、文章ニ年ノ大數ヲ云フハ古今集ノ序例ナレバ、强チ三年ト極ムベカラズ。是ヨリ早ク延寶ノ初メニハ其角入門シ、同三年ニハ嵐蘭入門ス。云々

とある。私は延寶四年説の本の出典を知らないが、此説は誤であらう。延寶二年には其角入門し、同三年嵐蘭入門とある以上、東武下向はそれより以前であらねばならぬ。

三、延寶六年説

梨一の芭蕉翁傳に見えてゐるが、之も前の理由で信じられない。

芭蕉は伊賀から江戸へ下つたやうである。之は前の秋十年の句が示すやうに、故郷から出立したのである。「杉風秘記」・竹人の「全傳」等伊賀から下つた事になつてゐる。併し梨一の「芭蕉翁傳」・蓼松の「芭蕉翁行住略記」にはト尺が都へ上つて芭蕉に會ひ、東武へ伴つたとあるが、慥かな説ではないらしい。

江戸下りは芭蕉一人であつたか、連れがあつたか、種々説があつて詳かではないが、人に連れられて下つたといふ説が古來有力であつた。先づ梨一の「芭蕉翁傳」にはト尺が東武へ伴ひ下つたとある。去留の「全集」・五柳の「全傳」・蓼松の「行住略記」・山崎氏の「俳人芭蕉」・瓊音の「年表」等之に從つてゐる。次は採茶庵梅人の説で(「俳人芭蕉」の一説、但しその出典を詳かにしない)、藤堂佐渡守の家來向井八太夫ト宅が連立つた。次は其日庵に傳はつた説(魯庵の「桃青傳」に據る)で、中ノ郷定林院の默宗和尚が途中から同伴した。次は「一代錄」の

說で、寛文十二年季吟が江戸に召されて歌學所となり、それに從つて江戸へ下つたなどとある。

以上の說の中、卜尺に連れられて下つたといふ說が最も信じられてゐたが、梅人說も一寸考へさせる。其日庵の說はどうだらうか。寺院などには往々誤傳があるからうつかり賛成は出來ない。一代錄の說は全く誤である。季吟が江戸へ召されて和歌所となつたのは、元祿二年十二月二十一日であるから、季吟と連立つ道理はない。

第二節　最初の落着所

芭蕉が江戸へ來て、何處で初めて、草鞋を解いたか、それも種々說があつて一定しない。

一、小澤卜尺を頼つたといふ說

沾涼の「綾錦」(享保十七年序)に、「芭蕉翁東都に於て履を解かれしは古卜尺がやどりなり。云々」梨一の「芭蕉翁傳」にも、「梨一かつて東都に遊ぶ間、本船町のうち八軒町といふ所の長卜尺といふ俳士に交る事あり。彼者語りけるは、我父も卜尺を俳名として、其比は世に知る人もありき。一とせ都へ上りし時に、芭蕉翁に出會ひて東武へ伴ひ下り、……或は一說に本船町の長序令といふ者に誘れて下り玉ふとも云。云々」とある。五柳・寥松・素蓮・山崎氏・瓊音等皆此說である。樋口氏も此記事が實らしく思はれると言うてゐる。此說は梨一が二代目卜尺から直接に聞いたといふ事や沾涼の「綾錦」(沾涼は露沾門、綾錦を書いた頃は、まだ芭蕉の古い門人も生き殘

つてゐた時分であるから、僞ではあるまいといふ憶測。）に出てゐるといふ點から、多く後人の信用を得たものであらう。卜尺は小澤氏、通稱友次郎（「春秋」に太郎兵衞とあるが、「大系圖」に太郎兵衞を父得入の通稱としてゐる）、季吟門、はじめ孤吟と號し、後卜尺に改める（「大系圖」に「後蕉翁ノ門人トナリ、今ノ名（卜尺）ニ改ム。云々」とあるが、「談林十百韻」に小澤氏卜尺とあつて句が出てゐるから誤である）。父得入は江戸本船町の名主であるから、卜尺も父の業を繼いで名主であらう。去留の「全集」に、「かの小澤なにがし中風を病みけるに、翁の療治によりて其死は遁れたれど、なほ半身不隨は癒せざりければ、小澤の字の片を去り、俳名を卜尺とは號しける。云々」とあるが信じられない。舊家であり、名望家であつたのだらう。

二、杉風或は仙風を賴つたといふ説

竹二坊の「正傳」に、「寛文十二年子ノ九月東武杉風方へくだる。云々」、去留の「全集」に、「寛文十二年壬子二十九歲、九月小澤某を伴ひ、はじめて江戸に赴き、小田原町なる杉山市兵衞が家を主とす。市兵衞は家名を鯉屋と云ひ、御用の納屋をつとむ。俳諧を好み、號を仙風といふ。杉風が父也。云々」、秀三の「一代集」の芭蕉翁傳に、「寛文十二年三月江戸ニ至リ、小田原丁鯉屋市兵衞（杉風）ニ寄居ス。杉風日記ニ云、松尾甚四郎殿伊賀ヨリ初メテ此方ヘ落着候。云々」、山崎氏「俳人芭蕉」に梅人說として、「翁江戸へ參候節、旅行同道は藤堂佐渡守樣（高次）御家來向井八太夫卜宅一所に被參しが、直に小田原町杉風方へ同道仕候由、今孫向井八太夫某去酉の春咄被申候。卜宅長壽（九十六）、今の向井氏（七十餘也、用人役）卜宅咄にて御座候由相違あるまじく候。云々」な

どとある。此說も前說の如く有名な說である。杉風は深川の別墅に芭蕉を住はせたり、衣食を貢いだり、種々手厚い情誼を盡した人であつたから、其家の舊記も尊重され、此說に從ふ者も多かつたであらうが、卜尺說に就いては諸書記事の一致を見るに反し、杉風說に就いては記事の中に少し異同がある。卜尺の方は大方梨一の芭蕉翁傳に據つたから一致したのであらうか。要するに卜尺の家へ始めて着いたものか、杉風の家へ來たものか、其先後論は今遽に定める事は困難であるが、芭蕉の甥松村伊兵衛が杉風の手代であつたり、芭蕉の長い間の保護者が杉風であつたりした關係上、よしんば最初でなくとも、杉風の所へは他の家よりも早くやつて來ただらうといふ想像は許されよう。素蓮の「春秋」・五柳の「全傳」によると、杉風は卜尺の親族であるといふがいかゞ。杉風は杉山氏、通稱市兵衛・家號を鯉屋と云ひ、幕府の御納屋を勤めた人、芭蕉より三つ歲下であつた。生來多病で、晩年衰翁と號した。因に云、杉風は三代目で、皆市兵衛を通稱とし、父二代目市兵衛は俳號仙風と云つた。「春秋」に、「仙風ハ杉風ガ兄也。通稱未考。延寶・天和ノ頃ニ早世ス。」とあるが誤らしい。とにかく杉風は幕府の御用商人であるから、俠氣な有福な人であつたらうと思はれる。芭蕉と何處で懇意になつたか詳かでない。

三、芭蕉山桃青寺の說

素丸の「芭蕉百回忌（寛政五年）追善「濱木綿」の序に、「本所原庭桃青寺は翁東旅行馬おりの地なり。云々」とあつて、其日庵に傳はつた說である。卽ち芭蕉東海道を下る時、途に江戸中ノ鄕定林院の默宗和尙に邂逅し、禪を談じ、伴はれてこゝに下つたといふのである（魯庵「桃青傳」に據る）。震災前は桃青寺といふ寺は本所中ノ鄕

原庭町三十五番地にあつて、寛文三年默宗和尚の創立にかゝり、初は白牛山定林院と云つた。臨濟宗である。此寺の檀越に長谷川馬光（二世其日庵）といふ者あり、芭蕉歿後境内に芭蕉堂を建て（寛保三年）、小川破笠作の芭蕉像（破笠晩年の作で、高さ八寸五分といふ）、頓阿作の西行像、素堂の像を安置し、四時像前に風雅を手向けた。後文化中其日庵白芹再び桃青堂を修理した。延享二年峻岩和尚の際、舊事に因みて芭蕉山桃青寺と改稱し、其後火に逢つて灰燼に歸したが、寶曆中泰龍和尚中興し、東盛寺と改めた。併し明治二十五年再び舊號に復した。現在の芭蕉堂は明治二十六年十一月芭蕉二百回忌に建てられ、正面に芭蕉・素堂の二像を安置し、周圍に數多の芭蕉を植ゑた（堀由藏氏の「大日本寺院總覽」・山下氏の「大日本名所圖會」・宇橋の「茗荷集・野桂の「茗荷圖會」等に據る）。芭蕉が此寺へ落着した事に就いて、魯庵はなほ八世陽國和尚の記事を引用し、寛文年間芭蕉初めて關東に來り、草鞋を此地禪室の側にぬぎ、小庵を結び、朝暮に參禪した云々と言うてゐるが確證に乏しい。但し松浦靜山公の「甲子夜話」（文政四年十一月甲子の夜起筆）正編卷六十四に、

> 予が隱莊の北隣は東盛寺なり。その後に小篁あり。この處嘗て俳人芭蕉の棲みし跡と云。曰人の俳道にて傳聞せしは、芭蕉盤珪禪師に參禪して、專ら禪理を問ひしと云。是に由て予思ふ。此頃正眼國師は天祥公のために、天祥庵に往來ありしかば、芭蕉も隣をトして棲みしなるべし。天祥庵は今不動堂の所にして、かの小篁と相去る事纔に二十餘步。又今東盛寺の中に芭蕉の像を置く小堂あり。是篁中の舊庵を移せし所と云。又桃青の號を後に東盛に改めしとも云へり。

とあるから、芭蕉が東盛寺の傍に住んで居つた事は事實だらうが、そこがはじめ江戸へ來た時の落着所であつたかは分らない。山崎氏はこゝは再度若くは三度目の東下の時の事だらうと言つてゐるが慥かな根據もないやうである。山下氏の「名所圖會」に、「寺傳に寛文中默宗禪師の建立にて定林院といへりと。然れども延寶・元祿の諸圖に見えず。疑ふべし。此東盛寺芭蕉堂の事につきて、松浦侯の「甲子夜話」に一說あれども皆信ずべからず。」とある。或は芭蕉が江戸下り後、諸所放浪の際、一時的の寓居位の所ではなからうか。曰人說にはなほ以上の證左が欲しいものである。

四、芭蕉庫の說

太田南畝の「一話一言」に芭蕉庫の由來が詳說されてゐる。少し長いが引用して見る。

權俳友權田某なるもの、さい年雜談のあまりに、此駿河臺中坊某君の藩に、元祿の昔はせをの翁伊賀より初て大江戸へ來り給ひ、居をトせし藏ありと言ひしに、權も其頃は世のたつきひまなく、心にもとめざりしに、去年霜月の頃たま〳〵淺草へまかりしに、古本屋にて此はせをぐらの本をもとめ閱すれば、彼權田氏の言ひしと實に符合せり。此辰四月二十七日ものへまかりけるに、ふと思出して、中坊公のやしきへ立寄、舊相識服部仁左衞門央勝にたいめして、折から此はせをぐらの事を問へば、此仁左衞門言ひけるは、此三月頃よりはせをぐら修理にかゝり、昔の如く建て替へ、今大方作事出來すと言ひしによりて、其みくらを見たしと乞へば、服部氏自案內して見せけり。藏は長さ五間・二間計りのあしだか藏なり。今大工達こゝかしこをこし

へ居て　いまだ土をばぬらであり。則其みくらの古き材を乞得て歸り、一ツの聯にしけり。今御府内に樓川をつぐ宗匠なければ、江戸座古き宗匠萬葉庵平砂（二代目）年七十有餘、赤羽根の邊に庵しけるを行、かく此はせを藏の古き材へ、古池や蛙飛込の句を題書させて、西川藏珍とす。

又服部氏言ひけるは、はせを翁伊賀より來りし頃は、此屋敷の主人奈良御奉行にて江戸におはしまさず。明暦の災に此藏殘りてありしに、此藩中濱嶋（當時家老濱嶋市之進）とはせを翁と親類よしみありて、濱嶋にたよりしに、いまだ普請も出來ずありければ、此土藏の內にはせをしばらく僑居なせしと云。これより深川へ庵を結ぶとなり。花入と泰里の記文濱嶋氏より權方へも惠まれたり

旭和居士　當時中坊長兵衛樣より四代先讃岐守樣

樓川君　今小川町二千石。森喜右衛門樣也。長兵衛樣大伯父也。中坊より養子に御入被遊候。中坊御舍弟也。

中坊長兵衛樣御內

服部仁左衛門央勝（フサトシ）

權二三十年之舊相識也

西川權

文化六巳十一月五日

はせをぐら

神風や伊勢の桃所に鸚鵡藏あり。江戸の駿河臺に芭蕉藏あり。されば昔松尾桃青の頃、伊賀の上野より東都に赴かれし時の馬下りの地は中坊讃州公の藩中にして、馬見所に隣る塗込の內に假寐せられしを、杉風深川に草の庵を結びて呼びむかへしなり。偖彼のぬりごめは明暦の災にもかゝらで、今にめでたくときはかきはの文庫なるを、前の旭和主人はせを藏と名づけ、阿翁肖像をもおさめ給ふ。さるをことし三周の追福ながらに、孝子樓仙主人脇發の歌仙行及び桃さくらの句々を加へ小冊となし、先考に手向け給ふ。その趣を述べよとあるにいなみがたく、例のおろかなる老のくりことを樓川書。

いでや此藏びらきせん十二日　旭和居士
朝起の目のさめし白梅　樓仙
うぐひすの盛りに猫の聲かけて　樓川
紙ひら〳〵と干魚の上　鷄口
事繁く月になるまで物忘れ　兀子
水のまふけに虫はなしぬる　壺龍

右歌仙下略之。
發句等略。

その前に此ふた木のあるこそ風流の因縁なれ

桃さくら案内にたつやはせを蔵　　樓川

追加

ことし此月此日家の大人の靈前に小册をさゝげ侍りて

はや三とせたちはな月の忌日かな　　樓仙

安永戊戌（七年）

右はせをぐら册紙員七葉。右の板本は西川權藏書。

以上で芭蕉庫の由來は十分分らうが、なほ宇橋の「茗荷集」の芭蕉庫の記事を引用すると、

駿河臺中坊家にあり。抑此文庫は往昔慶長五年はじめていとなみ給ふとぞ。それより四十五年の春秋を歴て、明暦三丁酉の災に門舍閭房悉く烏有となりけれど、此庫ばかり幸にまぬかれたり。家君は公事ありて、久しく南都にとゞまり給へば、老臣濱島氏のみこの文庫に草庇さし出して、ひとり燒野の野守と過ごしぬ。これも亦二十五箇年ばかりとぞ。その頃にや芭蕉翁伊賀の國より來つてこゝに草鞋をとく。是我翁この都に風雅を殘し給ふ勝縁のはじめなりとぞ。さて此濱島氏もと伊勢の國阿濃津の藩より出でたれば、ひとかたならぬちなみの引く所にして、終に此文庫をしばらくの寢所としたまひたるを、かの杉風が情厚くして、深川の閑地に迎へられたまひしとぞ。かくて一百餘歳の後、文化己巳（六年）濱氏の孫寸松君命を蒙り、此ぬりご

めを補ひけるが、しきりにいにしへを慕ふ心起りて、やがてこまえの古竹を拾ひ、風流の器を作り、誰にかれに分ち與へしを、他の國にて古き家をこぼち、聖の史を得てしためしにたぐへて、辨阿坊深く是を稱せしよし、はせを庫と銘したる花入の記に見えたり。

「一話一言」引用の西川氏記事には、此辰四月二十七日中坊家訪問、藏修理の作事大方出來とあるが、「茗荷集」には文化己巳（六年）寸松君命を受けて藏修理とあつて、修理の時日に一年の差を見るのも變である。其他「茗荷集」の記事に就いては他にも腑に落ちぬ所がある。卽ち芭蕉庫は慶長五年初めて建てられ、それより四十五年を經て、明暦三丁酉の火事に免れたとあるが、慶長五年から四十五年は正保元年に當り、明暦三年迄にはなほ十三年の星霜を要する事となる。次に又濱島氏が燒跡の番人となつて、二十五年ばかり過ごしたとすると、明暦三年から天和元年頃まで番をした事となり、其頃芭蕉が初めて伊賀からやつて來た事も、他に記錄の無い事で、怪しむべき說と云はなければならぬ。愚案では、之もやはり桃青寺の傳說のやうに、芭蕉が江戸へ下つて諸所流浪の際の一時的寓居ではなからうかと考へる。或は深川の芭蕉庵へ入る少し前の住居であつたかも知れない。素蓮の「春秋」に、「延寶四年甲辰〇此年間芭蕉駿河臺ニ寓居ス。」とあるが、之は割註に、「友人予ニ云ツテ曰、明暦三年火災ノ後二十年、翁東都ニ下向シ、駿河臺中坊氏の留守居役濱島何某ヲ賴ミ、災後殘ル所ノ藩中ノ文庫ニ舍ル。云々」とあつて、「茗荷集」記錄の年數と相違がある。二十年後は二十五年後の誤か。或は二十年後とも傳へられたものか。

芭蕉が江戸へ來て、何處ではじめて草鞋を脫いだものか、今たづぬる術もないが、恐らく親族・知己の間を轉轉として泊り步いたものであらう。とにかく九年間の放浪であるから、隨分芭蕉も難儀された事と思はれる。「一代集」の芭蕉翁傳に、深川居住以前小石川水道橋邊に居つたといふ說、「俳人芭蕉」に、杉風方へ落着いた後、本鄕にも、濱町にも、本所高橋邊にも居られた、此義は杉風弟の家鯉屋庄兵衞の物語であるといふ說のある所を見ても、諸所をうろ付いて居たものらしい。

一體芭蕉は何の目的あつて江戸へ下つて來たものだらうか。此點先哲の說は餘り見ないやうだが、山崎氏は「俳人芭蕉」に、「學既に成り、靑雲又攀づ可しとなし、再び出世の希望を起しゝものにはあらざるか。云々」と言うてゐるが、私はさうは考へない。主人の逝去に感動して、一度伊賀を退居した芭蕉、而かも主人に寵のあつた芭蕉が、何のために江戸まで下つて立身出世しようなどといふ野心を起す筈があらうか。出世しようとしたら、君寵があつたのだから、伊賀に於て相當な武士になれない事はなからうと思ふ。若し又伊賀に居れない事情があつたとしても（蟬吟の死、戀愛問題の如き）、「貝おほひ」の氣分では武士を捨てたと見る方が自然ではなからうか。關口水道の修成を芭蕉の出世問題に附會しては困る。それには奉行役だとか帶刀だつたとかいふ異說もあるが、私には工夫の監督位にしか思はれないから、たいした仕事でもないやうである。それも成功したかどうか分らないではないか。且又小澤卜尺にせよ、松村市兵衞にせよ、出世しようと思つて出て來た芭蕉を、例へ小祿にせよ元は武士であつた芭蕉を、かゝる微役に世話する譯もなからうかとも考へる。私の憶說では堅苦しい考ではなく、

上方も面白くない、郷里に近いし、既に主家を脱退した身には、何かと都合がわるい。江戸へでも出て見ようか位の所ではなからうか。或は若い芭蕉の事だから、江戸で俳諧の一風を拓かう位の野心はあつたかも知れない。「貝おほひ」を江戸で出版してゐる所に、何かかうした意味がありさうにも考へられる。古風は廢つた。江戸談林は名をなす餘地があらう。奴詞や流行小唄の句合をお土産にして、江戸で一旗上げて見よう、などの意氣はありはしまいか。私の說は大膽な憶說だけれど、社會に出世しようといふやうな俗な考で下つたのではあるまいといふ點に多少自信はある。

第三節　關口水道工事

一、江戶水道の由來

江戶水道は元神田明神の山岸の水を北東の町へ流し、山王山本（溜池）の水を西南の町へ流し、此二水を江戶の町々へ給與したのである。神田明神の山岸の水卽ち此神田上水は、御入國以來水上猪ノ頭の水を上水道に定め、町奉行支配の下に、其用向を町年寄に命じ、關口・小日向・金杉三箇村から、町年寄代官として年貢を取立てゝ來た。又玉川上水の方は玉川淸左衞門・庄右衞門といふ者承應二年四月から堀始め、明曆元年に至つて成就し、寬文年中玉川水上羽村から代々木・千駄ケ谷村まで十三里の所、水道兩端三間づゝ取立て、水道の南は喜多村彥

兵衛、北は奈良屋市右衛門拜領し、自己の費用を投じて松・杉を植付けたといふ事である（「過眼錄」、「武江年表補正略」に據る）。芭蕉が水道工事に從つたのは此神田上水の事であつた。

二、水道工事の時日

芭蕉が關口水道の工事に從つた時日に就いて、寛文十二年說（「略傳」・「奇人談」・「行住略記」・「芭蕉翁全集」等）、延寶元年說（「春秋」）、延寶八年說（「風俗文選」の作者列傳、「役所日記」）とあつた。併し何れが正しきか詳かでない。松本捌太郎氏（三井文庫主任）の說には、芭蕉は寛文六年九月か十月頃、藤堂家水道工事のため江戶へ下つたとあるがどうか。或は其頃幕府が藤堂家に命じて、關口水道の修理を司らせた記錄でもある事だらうか。舊說は一般に寛文十二年以後の事になつてゐるが、芭蕉が江戶へ下つて直に水道工事に從つたとも考へられないから此說はどうかと思ふ。

三、工事に關する諸說

工事に關する事情に就いても諸說多く、之れ又何れが正しきか迷はざるを得ない。

イ、礫川の水道修成傭夫となり、功を終る比薙髮して風羅坊といふ。

玄玄一の「俳家奇人談」（文化十三年刊）の說。併し傭夫はどうだらうか。卜尺の口入れにせよ、松村市兵衛の口入れにせよ、元は苗名・帶刀の武士であつた芭蕉を、日傭・人足のやうな者に世話をする筈もなからうではないか。且又傭夫となつて功を終るも聊か滑稽な書方である。傭夫如き賤役に功を終るも何もいつたものではなか

ららぢやないか。

ロ、世に功を遺さんため、武の小石川の水道を修め、四年に成る。速に功を捨てゝ、深川芭蕉庵に入り出家
する。年三十七。

許六の「風俗文選」の作者列傳の說であるが、世に功を遺さんがためが疑問である。當時の芭蕉にかくの如き俗な功名心があつたであらうか。芭蕉の境遇は既に主家を亡命してゐる。浮き〳〵どつこい、浮世に住めば、うさこそ勝れと言うてをる芭蕉ではないか。四年に成るも怪しい說である。四年といへば大破と見るべきで、玉川上水の開通だとて二年ほかかゝらないのに、既に堀割の出來てゐるものが四年もかかつたとすると、直せば壞れる、直せば壞れるといふ風に、四年もかかつた事となつて、そんな難工事なら特に當時の記錄に見えさうなものであるが、見えないのは不思議である。許六說は芭蕉を立派な武士として始終させようとする。且つ又一方から考へると、功が成つて速に出家するも可笑しな話である。功を遺さうといふ心があるなら、木の端のやうな坊主になる必要もあるまい。

ハ、藤堂家小石川上水堀割の役を蒙つた時、其主人新七郎良精物奉行として、小石川の邊に出張。芭蕉之に從ひ、今の目白龍隱庵の邊に止宿した。

神田上水御再修の時、藤堂家から御手傳として、松尾忠左衛門堀割の普請奉行となる。

前半は去留の「全集」の說、後半は齋藤月岑の「武江年表」(嘉永三年刊)の說である。之もどうだらうか。既

に主家を亡命した芭蕉が、藤堂家から堀割の奉行を仰付かる譯もない。尤も仕官時代の出來事とすれば理窟には合ふが確證を得ない。

ニ、關口水道工事の奉行は中坊氏で、氏は幕府の命を受けて、芭蕉に設計させた。

之は原の出典を詳かにしないが、魯庵の「桃青傳」・山崎氏の「俳人芭蕉」の說であるが誤傳かと思ふ。芭蕉庵の說によれば、芭蕉が伊賀から來た頃は、此庫の主人中坊氏は奈良奉行で、江戸には居ない。老臣濱島氏が留守居役で、芭蕉を燒け殘りの庫に住ませたといふのだから、當時中坊氏が水道工事の奉行を勤める譯はない。

ホ、松村市兵衞と云つて、幕府の普請方を司つた。今猶其家普請方を司つて兩家ある。位牌・印譜・反故などが殘つてゐる。

之は湖中の「略傳」の說である。湖中はなほ割註して、「藤堂家を憚りて、松尾を更めて、松村と稱し給ひしものか。又松村家は素よりありて、其食客に侍りしを、芭蕉の才能を借りて、水樋の功をなしたるものか。しかれども位牌・印譜の存在するを以て見れば、一說實事を得たるものか。云々」と言つてゐる。白亥の「眞澄の鏡」に、「但し鯉屋手代伊兵衞は桃靑翁の甥なり。幻世世話して小普請手代になし、松村眞左衞門と名乘る。云々」とある。そこで考へるに、松村伊兵衞と松村市兵衞の關係であるが、此兩家は親族であるか、他人であるか詳かでないし、芭蕉の位牌・印譜等が市兵衞の家に殘つてゐるのか、伊兵衞の家に殘つてゐるのか、そこも詳かでないのだから、松村に兩家ありとするも、どつちの松村の食客であつたか紛はしい。尤も野桂の「祖翁埥塋集」には、

「右者（芭蕉位牌）東都下谷二丁町小藤堂侯の後背にて、江城紅葉山火之番松村太七郎方にあり。翁在世の時松村は姪の家なる因にて、右位牌並手澤の手道具等有之しが、池魚の災に滅ず。今なほ存するものは位牌と翁肖像・印章二顆也。云々」とあつて、芭蕉の位牌其他が松村伊兵衛の家に傳はつてゐるやうにあるから、或は芭蕉は松村伊兵衛の食客として、松村市兵衛と假稱し、伊兵衛の普請方の手傳をして居たものかも知れない。從つて伊兵衛の周旋で水道工事に從事したのかも知れない。要するに此說は比較的有力らしいけれど、市兵衛と伊兵衛の關係がよく分らないのが遺憾である。

へ、小澤卜尺が許に居て、水道工事の指圖をした。

之は喜多村信節の「筠庭雜錄」の說である。卽ち「桃青江戸に來りて、本船町の名主小澤太郎兵衛（卜尺と號す）が許にしばらく居しかば、日記など記させたるが多くありしとなり。其頃の事にてもあるにや。水道普請にかゝれる事見えたり。そのかみ神田玉川兩水道ともに、町年寄支配なれば、彼者さやうの事工夫者なりしかば、試に差圖を計はせしなるべし。云々」とある。芭蕉が卜尺の厄介になつて居れば、日記を附ける位の事はありさうである。且つ神田上水の修理工事は町年寄の係りであるから、卜尺の手でやる場所も極つてゐようし、それに居候の芭蕉を使ふ事も尤な話である。信節はなほ次に延寶八年庚申六月町々へ觸れ書きした役所日記をあげて、

覺

一、明後十三日、神田上水水上惣掛有之候間、致相對候町々は、桃青方へ急度可申渡候。桃青相對無之町へ爲

行持、明十二日早天に杭木・かけや水上に致持參、丁場請取可申候。勿論十三日中は水きれ申候間、水道取候町町は、左樣相心得可相觸候。若雨ふり候はゞ、物掛相延候間、左樣相心得可申候。

六月十一日

○

一、明二十三日神田上水道水上惣掛有之候間、桃青方へ相對致候町々、急度可申候。相對無之町々者、人足に道具を爲持、明早天に水上へ差出可申候。勿論明日中水きれ可申候間、町中不殘可相觸候。

六月二十二日

信節は有名な考證家で、其該博な知識は後人を驚歎せしめるものがあるから、如何はしい日記や文書を輕々しく信ずる筈もあるまいと思ふが、かゝる日記の斷片だけでは確證に乏しい。此說によると延寶八年の事となつて許六說と一致するが、之では工事の監督、人足の頭のやうなもので、立派な武士とは思へない。食客とすればいづれそんな所の役であらう。とにかく有力な說としてあげて置く。

ト、本船町の中八軒町の長ト尺の口入れで、しばしが程のたつきにと水方の官吏とした所、風人の習俗事にうとく、其任にたへず、やがて職を捨てゝ深川にかくれ、云々

此說は二代目ト尺が父ト尺から聞いた話を梨一に物語つたもので、梨一の「菅菰抄」の芭蕉翁傳に見えてゐる芭蕉も他家の食客となり、ぶら〳〵してゐるのも退屈だらうから、ト尺が水道の役人に周旋したのだが、風人の

習俗事にうとく、仕事をやらせて見てもうまく行かない。當人もいやになつて止めて了ふ。そこいらが亡命詩人の俤があつて、實に近くはなからうか。素蓮も山崎氏も此說のやうであるが、私も此說を採りたいと考へる。
芭蕉は水利の才があつたので、關口水道惣掛の役人になつたやうに諸書見えてゐるが、元來水利の才があつた譯ではなく、他人のやるのを見習つてやつたものかと考へる。瓊音の「芭蕉全集」の卷末に、「藤堂新七郎の隣家に、新七郎の親戚たる西島八兵衞住めり。水利土木の事に詳しく樣々功績あり。ために今上御大典の砌贈位になりし人なり。新七郎邸に出入せし芭蕉は、自然西島のなす所を見、それが江戸水道工事にたづさはる因となりしならむと田中善助氏の說なり。」とある。或はさうかも知れない。

四、關口の龍隱庵と五月雨塚

野桂の「廣茗荷集」（文政九年序）によると、此地は昔關口上水の修理を藤堂家へ命ぜられた時、芭蕉此事を司り、日々來つて憩うた舊地（去留の「全集」には止宿した所とある）であると。龍隱庵は上水堀の端にあつた。昔は眞言宗で安樂寺と云うてゐたが、元祿十年黃檗宗に改め、洞雲寺の持となつた。本尊は正觀世音、慈覺大師の作と傳へられてゐる。こゝは風光明媚の地で、東は關口の淸流を聽き、西に富士の白峯を仰ぎ、南に早稻田の廣野を眺め、北は目白の高臺を負ひ、月の夕、雪の朝、絕景な眺望を持つた所だつた。今日はかゝる趣は少しもないが、私の子供の時分迄は未だそんな感じはいくらか殘つて居つた。殊に此流に假橋（駒留橋）を架した趣が、彼の近江の瀨田の長橋に似て居ると云つて芭蕉が愛されたといふ說もあるが、之は恐らく後年中川宗瑞や長谷川

馬光がこゝを瀬田の義仲寺に擬して、五月雨にかくれぬものや瀬田の橋といふ芭蕉の短冊を埋めて、五月雨塚を作つた事が、芭蕉に飛んで行つて、芭蕉遺愛の地であると附會されたものかと考へる。

五月塚は龍隱庵の園中にあつた。寛延三年八月夕可庵馬光門人露什・芬露の建立である。正面芭蕉翁之墓(馬光書)、碑蔭芭蕉瀬田ノ橋の吟を彫り、あさみだれ塚と呼ばれてゐた。「江戸名所圖會」の挿繪を見ると、五月雨塚は龍隱庵構内の北丘の上にあつて、はせを堂・金比羅堂よりも奥にある。其側の芭蕉堂には芭蕉の像を入れて置いたが、人に奪はれ、久しく空堂となつたのを、不白といふ者手づから土像を作つて崇め置いたが、文化中又廢堂となつたので、像ばかり庵中に移し、咫尺齋の社中專ら之を守つて居たさうである。野桂は文政八年二月十二日碑に詣で、

曲り形りに野梅だけなる薫哉

といふ句を手向けた。五月雨塚も其頃は余程荒れたものか、後嘉永三年頃閑月庵如萍之を再建し、五・十の日毎に文臺を開いたといふ事である。

第四節　剃髮と改號

芭蕉の剃髮に就いても異說多く詳かでない。但し芭蕉が水道工事に關與した時は、俗體であつたらうといふ推

定は一致してゐるやうだけれど、水道工事後に至つて說が分かれるのである。それも素宣說と風羅坊說とあり、又芭蕉庵に入つて剃髮したといふ說と、芭蕉庵に入らない以前に於て剃髮したといふ說とあり、又其剃髮した時日に就いても、寛文六年・寛文十二年・延寶元年・延寶二年・延寶四年・元和元年の諸說があつて一定しない。

イ、寛文六年說

「次郎兵衞物語」寛文六年の條下に、「任口悅び、此師よりも佛頂師に添書あり。其上にて帶刀にては人怪しむべし。出家せよとのたまひし故、我望む所なりと一衣一體の境界となり、云々」とあるが、此物語は小說めいてゐるから信じられない。

政二の「俳道系譜」に、「寛文六年主人早世に付、同年の秋二十三歲官を辭し、江戸に下り剃髮。云々」とある。寛文六年秋江戸に下りは甚しき異說で、剃髮の時日も覺束ない。

ロ、寛文十二年說

素外の「古池蛙之詞原」(文政二年作)に、「同壬子の歲(寛文十二年)深川に下りて庵を結べり。時に二十九歲。薙髮して風羅坊と改號す。云々」とあるが、寛文十二年深川に下つたとは考へられない。從つて其歲の薙髮も信じられない。

梅人の「杉風句集」中の「杉風秘記拔書」に、「松尾甚四郎殿伊賀よりはじめ此方へ被ㇾ落着ㇾ候。剃髮して素宣と改められ候時、衣更着は十德をこそ申すなれ、杉風。かく申送りぬ。其後此方深川元番所生洲の有ㇾ之所に移

す。時にばせを庵桃青と改められ候。云々」とある。此說によると剃髮は芭蕉庵入庵以前に行はれたものゝやうであるが、芭蕉の「六番句會」・「十二番句會」(延寶六年十月)の末に坐興庵桃青とあつて、傍に素宣と捺印せる所を見ると、其頃既に剃髮して素宣と云つて居たものかとも思はれる。併しそれだけでは深川の坐興庵へ入つて剃髮した確證にはならない。坐興庵桃青といふと坐興庵に居た時の號のやうであるが、後に生洲のある所へ移つて、芭蕉庵桃青と改めたとあると、坐興庵は一時的の號であり、寓居であつたやうである。尤も坐興庵は芭蕉庵と云はなかつた前の庵號であるとすれば(雀志の「玄峯集」の註に據る)、坐興庵も芭蕉庵も同じ草庵で、芭蕉庵入庵は延寶六年頃となるが、之はなほ後章に詳說する。

ハ、延寶元年說

去留の「全集」に、「延寶元年三十歳春、居を深川に移し……剃髮して名を素宣と更む。其頃杉風は多病にして、常に深川元番所の別莊に住せしかば、翁剃髮の時にも、更衣着は十德をこそ申すなれと申送りぬ。云々」とある。此說は頗る曖昧な書方で、先づ深川元番所の別莊といふと簄(イケス)のある芭蕉庵の事だらうが、そこに病杉風が住むとすれば、芭蕉の移つた深川の居は何といふ草庵であらうか。深川の居は芭蕉庵の事だらうが、さうすると元番所の別莊が分らなくなる。若し元番所の別莊を芭蕉庵とすれば、深川の居は坐興庵か採茶庵となつて、芭蕉庵と坐興庵とは別の草庵となつて了ふ。或は元番所の別莊を採茶庵とすれば、深川の居は坐興庵卽ち芭蕉庵となつて、理窟には合ふけれど、採茶庵は平野町にあるのだから、元番所とは場所が違ふ。一向に要領を得ない。從つて延

寶元年入庵、素宣改號說も當にならなく思はれる。

ニ、延寶二年說

湖中の「略傳」に、「延寶二甲寅（行年三十一）の歲薙髮し給ひ、風羅坊といふ。杉風志厚くして、深川に庵を結びて入れまゐらす。云々」とある。古來此說に從ふ者が多いやうだが、一體湖中は何に據つて此說を樹てたか、確證を得ない中は信じられない。當時の文書に風羅坊を剃髮號としたものでもあつたのだらうか。常陸の本間家に傳はる「醫家年鑑」にも、「延寶二秋宗房除髮」とあるから確證でもある事か。

ホ、延寶八年說

許六の「風俗文選」作者列傳に、「速捨レ功而入ニ深川芭蕉庵一出家年三十七。云々」とある。併しそれ以前に素宣といふ剃髮號が傳はつてゐるから、延寶八年出家說は詳かでない。

ヘ、天和元年說

素蓮の「春秋」天和元年の條下に、「再按、芭蕉薙髮ノ事諸說一ナラズ。然レ共正シキ考證ナシ。前ニ引用ナシタル支考ガ說ニ據レバ、天和元年深川居住アリシ頃カ。或ハ世ヲノガレ、或ハ隱遁スト云。深ク此一言ヲ信ズレバ、今年薙髮セシトシテ穩也。後人是非ヲ定ムベシ。」とある。支考が說とあるは、天和の初めならん、深川に隱遁しとか、或は年いまだ四十の老を待たず、武陵の深川に世を遁れて云々（「俳諧十論」。「本朝文鑑」碑銘ノ序）といふ說であるが、支考の說は時代の前後によつて變るから、これだけでは信じられない。

宗房改め桃靑に就いては、寛文改號說と延寶改號說とある。地方別にすると、京住時代と江戶住時代とあり、寛文說は在京中の改號、延寶說は江戶下り後の改號となる。

イ、寛文六年說

「次郎兵衞物語」によれば、伏見の任口上人が芭蕉に、「木の葉以後苔の衣や木入道」といふ句を贈つて、その時から桃靑と改號したとある。勿論京での改號である。併し此說は信じられない。寛文六年に改號したならば、寛文七年の「續山井」にも、或は寛文十二年の「貝おほひ」にも、宗房と言はず、桃靑とあるべきであるが、延寶四五年の頃になつて、初めて桃靑の名あらはれ、それ以前は宗房となつてゐる事がいぶかしい。

湖中の「略傳」に、芭蕉在京中東山の麓に住し、泊船堂桃靑と號したとあるが信じられない。桃靑改號が在京中の事であるとしたら、寛文七年以降の集に桃靑とあるべきであるが、宗房となつてゐるのはあやしむべきである。泊船堂號の在京名の怪しい事は既に論じてゐる。

ロ、寛文十二年說

卓朗の「俳諧道の杖」に、季吟より安靜に與へた手紙がある。それによると、卓朗は改號を寛文十二年芭蕉在京の事とする。卽ち

今夕かたより愚亭にて相催候間、

昨夕いがより宗房上京致候。桃靑と改名いたし申候由、其名かへの誹諧致御來臨可被下、桃靑も相待被居候。

呉候様申候間申入候。御覽可被下候。

名をかへてうづらともなれ鼠どの　季吟

安靜丈へ

併し此手紙は疑はしい。第一芭蕉は寛文十二年春伊賀を去つて、江戸へ下つてゐるから、寛文十二年京に居る筈はない。尤も江戸へ下る前に上京してゐたと見ればよいやうであるが、それならば改號は京でなく、伊賀で改めた事となり、卓朗說に矛盾しよう。次に「春秋」の素蓮の說によると、安靜は寛文九年十月五日に歿してゐる。若し改號のための上京を寛文十二年とすると、既に死んでゐる安靜へ季吟が手紙をやる理窟もなく、全く此手紙は僞物となつて了ふ。尤も安靜の歿年に就いては、季吟の「續連珠」(延寶四年刊)に、

安靜追悼に

かれてうきや弟子兄弟の弟草　季吟

といふ句が出てゐるから、延寶四年歿のやうにも考へられる。なほ一說(「俳人芭蕉」出)によると、延寶五年の「六百番俳諧發句合」(風虎子)に、

門松やおもへば一夜三十年　　　　松尾桃青

とある句の三十年目は延寳元年で、その前年は寛文十二年であるから、桃青號は在京中の名であらうといふが、此句の製作年代を延寳五年とすれば、三十年が數に於て不足であるし、之を延寳元年の吟とすれば、寛文十二年改號説に都合はよいが、果して此句が延寳元年の作であるか詳かでないから、確定的ではない。延寳五年には桃青の名は既に他の撰集にも見えてゐるから、若し此句が延寳元年の撰集に出てゐるものならば、寛文十二年改號説に有力な證左ともならうが、延寳五年作では問題にならない。

ハ、延寳四年説

延寳四年説と云つて特に定説のあるわけではないが、次の考證の結果私の假に設けた一説である。そして本文中に伊季吟の「續連珠」（延寳四年霜月十八日刊）に、武藏國作者　松尾氏本住伊賀號宗房　桃青　付句四發句六　とある。そして本文中に伊賀上野宗房・伊賀上野松尾宗房・伊州上野松尾桃青・江戸松尾桃青などとあつて一定しない書方をしてゐる。但し之は一寸考へさせる書方であらう。芭蕉は寛文十二年江戸へ下つてゐる。「續連珠」作者國分けの條下桃青の肩書に、松尾氏本住伊賀號宗房とあるから、延寳四年には芭蕉は既に江戸住で、桃青と改めてゐた事が分る。即ち芭蕉は伊賀に居つた時は宗房、江戸へ來て桃青と改めたやうに思はれる。尤も本文中の肩書伊州上野松尾桃青が少し變であるが、古人の編輯風は卷末の句數と實際取つた句數と合致せず、作者の肩書も同人であつて、或場合は國名だけをあげたり、或場合は國名と町村名をあげたり、或は國名を漢字で書き、假名で書き、甚しきは訓が同一で

あれば文字を違へて書くといふ風であるから、伊州上野松尾宗房とあるべきを、伊州上野松尾桃靑と書いて居たかも知れない。又蝶々子の「誹諧當世男」（延寶四年八月序）にも桃靑といふ名で六句載つてゐる。要するに桃靑の名の古く撰集に見えたのは延寶四年である。そこで憶說をいふと、芭蕉は寛文から延寶元・二の頃迄は宗房と稱し、延寶三・四の交に於て桃靑と改號したのではなからうか。素蓮の「春秋」には、「按、芭蕉宗房ノ號ハ、寛文年間伊賀在國中ヨリ京地遊學ノ頃古風ノ名（古風中ハ多ク實名ヲ以テ別ニ俳名ナシ）ニシテ、東武來住ノ後ハ桃靑ヲ以テ俳名トシ、號ヲ天々軒ト云。且桃靑ハ終身更メズト雖、天和・貞享ノ際正風ヲ開キテヨリ、我人共ニ芭蕉ト稱シテ標號トス。云々」とある。山崎氏も素蓮說で、延寶四・五の交の命名としてゐる。但し本間家の「醫家年鑑」は延寶二年の改名としてゐるが詳かでない。

第五節　桃靑と名けた理由

桃靑命名の理由は大體四說にまとまるやうであるが、何れも桃靑といふ文字からの推測であつた。

一、芭蕉、先祖の姓氏による

此說の起源は支考の「十論爲辨抄」（享保十年刊）であらうか。曰く、「桃姓のひびきより、桃靑ともいへりけるは、梅子不ㇾ熟の意なりとや。思ふに家名を遂げざるの謂ひならん。云々。」、宗瑞の「桃三代」（明和五年刊）

の序に、「我祖翁は其先桃地の黨なりとて、桃靑の二字を稱せしは、梅子不熟の心ならむとか。云々。」、「俳諧正語抄」(文政十二年序)にも、「其始は桃地黨の姓松尾氏にて、桃靑と號す。云々」などとあるが信じられない。桃地黨だから桃を持つて來たのはよいとしても、靑と置いたのは梅子不熟の義で、家名を遂げないといふ意味だらうは、穿ち過ぎた憶說である。

又「類聚名物考」に、「翁は初は桃井を名乘られたり。……故ありて後に松尾氏となられしが、後に桃井の昔を忘れずして、桃靑と號せしとなり。云々」。此說も信じられない。恐らく之は桃地黨說の誤傳であらう。

二、佛頂參禪に附會した說

去留の「全集」に、「和尙庭前の桃を指して笑ふ。翁たゞちにその意を悟る。然れどもおのれの未熟なるをいましめ、名を桃靑と更めらる。云々」。魯庵の「桃靑傳」に、「佛頂和尙に參禪し、剃髮せし時、梅子熟せざるの意を取りて、桃靑と號せしとも云ひ、……佛頂和尙より汝が佛道桃の靑きが如しと呵せられしより號せしともいふ。云々」とある。芭蕉が佛頂に參禪したのは、芭蕉庵に入つてからの事で、天和のはじめと考へるのが普通であるから、此說は信じられない。野桂は「茗荷集」に、桃靑の號は支考がいふ梅子未熟の意ではなからう、麻布に靑桃院といふ寺があるから、必ず禪錄などに據つたものだらうと言うてゐるが、之れなら佛頂參禪に附會しないだけまだよい。

三、詩經の桃夭篇によつて名付けた

「類聚名物考」に、

黒露（素堂が甥、葦齋）が云、桃青の名は昔京師の儒醫に桐山正哲といふ者ありしが、それへ桃の字を名付給へと翁の賴まれしかば、詩經の桃夭の篇より桃青と名付けたるとかや。この正哲は俳名も知機と云ひて、長崎の大通事榮木仁左衞門が弟なりといへり。支考が十論にも梅子未熟の心とかや記せしが、それよりは手近にして、誠にさもあるべき事かと思はるゝ由、此頃素堂語りき。云々

去留の「全集」の一說にも、

按、桃青の字は詩經ニ桃之夭々其葉青々とあるより出でたれば、未熟の義ニあらず。外家桃地の黨なる故、其末葉といふ意なるべきにや。猶尋ぬべし。

とある。其他五柳の「芭蕉全傳」も黒露說をあげてゐる。素堂の甥黒露の素堂から聞いた話だとすると、相當根據のある說のやうではあるが、京の儒醫から名付けられたといふと、桃青改號は寛文年中京在住の話となつて、未だ研究の餘地のあるやうに思はれる。從つて詩經桃夭篇の說はどうかと考へる。

四、李白に對して桃青と附けた

之は鳩巢の「兼山麗澤秘策」に詳しく出てゐるさうであるが、「茗荷集」にも、「李白に對しての桃青ならむ。翁常に李・杜・寒・拾を慕ひ申されたれば、必ず是ならむとも言へり。云々」。又田宮仲宣の「愚雜爼」にも、「此桃青は已を唐の李白に比し、桃紅李白の熟字を以て、紅を青とは轉じたり。云々」とある。其他玉晁の「俳諧百

人一句抄」・「俳人芭蕉」等之に從つてゐる。私も此說が穩かでよいかと思ふ。桃紅に對して桃靑の一轉は、恰も杜甫が春望ノ詩の城春草木深を、城春にして草靑みたりと換えた手段と同一で面白いと思ふ。或は自分の先祖の一黨に關する連想や禪語の連想などもあつたかも知れないが、先づ桃紅・李白の一轉といふ事が芭蕉にありさうな俳諧手段ではなからうかと考へる。

第六節　延寶の芭蕉の俳諧

一、概　說

寛文十二年から延寶の末迄、卽ち芭蕉が杉風の芭蕉庵に入るまで、九年の間彼は江戶市中に放浪したのである。其間延寶二年榎本其角入門し、同三年松倉嵐蘭入門し（其角「年立」による）、同六年既に予が門葉杉風あり（「六番句合」・「十二番句合」判詞）、同八年「桃靑門弟獨吟二十歌仙」には桃靑門下二十人卽ち杉風・卜尺・巖泉・一山・綠系子・僊松・卜宅・白豚・杉化・木鷄・嵐蘭・揚水之・嵐亭・螺舍・巖翁・嵐窓・嵐竹・北鯤・岡松・吟桃及び追加館子の名を列ねてゐる。又「江戶鹿子」俳諧師の部に、才丸・幽山・不卜等と並んで、桃靑の名の見えてゐるのは、當時既に一とかどの俳諧師として、其地位を認められてゐたからであらう。

延寶の初年は芭蕉も未だ談林の感化が著しくなかつたやうである。安靜の「如意寶珠」（延寶二年刊。書中宗房

の句六句見え、内四句は寛文七年の「續山井」、寛文十二年の「時世粧(いまやうすがた)」に出。）や季吟の「續連珠」（延寶四年刊。宗房・桃青と書分けがしてある。私の憶說では宗房とある句古く、桃青とある句新しいかと思ふ。）の句を見ても、談林の感化は少いやうに思ふ。但し同四年の蝶々子の「俳諧當世男」の芭蕉の句は談林の感化があつた。つゞいて信章との兩吟「奉納二百韻」の風調は全く談林化してゐる。卽ち芭蕉は延寶四・五・六・七年に涉つて談林にかぶれ、八年頃やゝ傾句を異にした一風を興したものゝやうである。

總じて延寶の芭蕉は貞門から談林に入つた時代である。貞門の生溫い滑稽に飽き、談林の放膽的な奇拔な風調に動かされた時代であつた。此期の芭蕉は先づ自己の撰集として、「奉納二百韻」（延寶四年作）、「江戸三吟」（同五年冬より同六年春）、杉風との「兩吟百韻」（同七年作）、「次韻」（同八年秋作）等を出し、句合には、「六番句合」、「十二番句合」（延寶六年十月判）、其角の「田舍ノ句合」（延寶八年判）、杉風の「常盤屋ノ句合」）（同年判）を試みてゐる。又他の撰集・句合にも、卽ち延寶二年安靜の「如意寶珠」、同四年季吟の「續連珠」、蝶々子の「俳諧當世男」、同五年風虎の「六百番俳諧發句合」、同六年不卜の「江戸廣小路」、言水の「江戸新道」、幽山の「松島歌仙」、同七年言水の「江戸蛇(ジャ)の鮓」、才丸の「坂東太郎」、同八年言水の「東日記」等に自己の發句・附句を發表してゐる。

一體江戸談林は田代松意の努力によつて弘まつた。松意の「談林十百韻」（延寶四年刊）は西山宗因の江戸下り（延寶三年）を迎へて興行したものである。卷頭の百韻は梅翁・雪柴・在色・一鐵・正友・志計・一朝・松臼・

ト尺・松意の十吟で、其他の卷は六・七回の運座で出來たのである。宗因一派の調を談林と號したのも、松意の序にある「俳諧談林とこそ申すべけれ。云々」と戲に言つた事から起つたといふ說さへある。卷頭吟、

されば爰に談林の木あり梅の花　西山氏 梅翁

世俗眠をさますうぐひす　雪柴

梅の花に對して鶯は少し古い附けであるが、世俗ぬむりをさます新風樹立の意氣は沖天の慨がある。當時貞門の古老、卽ち池西言水（重賴門）・高野幽山（同上）・富尾似船（安靜門）・伊藤信德（梅盛門）・山口來雪（季吟門、古老でもないが）・小西似春（同）・靑木春澄（貞恕門）・岡村不卜（未得門）等は全く師風を變じてゐる。貞門末期の鬪將中島隨流が如何に似船を異風・異形の島者と罵つたとても追付くものでない。延寶六・七・八年の俳書の外題に江戶といふ名を冠らせる事が流行つた。例へば「江戶新道」・「江戶廣小路」・「江戶八百韻」・「江戶十歌仙」・「江戶三吟」・「江戶蛇の鮓」・「江戶辨慶」・「江戶大坂通馬」等續々と現れた。之は江戶の氣運新に勃興し、男達・奴詞、ひつぴけ・うんのめの享樂世界が、上方の耳目を驚かすやうになつたからである。が、一は上方談林に對抗して、江戶談林といふ新風鼓吹の宣傳のためでもあつたらうと思はれる。延寶七年はじめて芭蕉が宗因と會見したといふ說は確證を知らないが、「去來抄」などによると、芭蕉は宗因を崇拜してゐたやうで、それには信德や素堂の感化もあつた事であらう。素堂は芭蕉と同年であつて、後には蕉風に化せられたが、當時は信章とも來雪とも云ひ、談林の徒と交深く、言水の句集「初心毛登柏」にも、「卯の花も白し夜半の天河、江戶八百韻とい

ふ集選み侍りける時、素堂と打連れ歸るさの夜いたく更けぬ。所は本所一錢が許、家まばらにして垣根卯の花咲けり。」とあるから、言水と親しく、江戸談林一方の大將株であつたと見える。此八百韻は江戸新風の代表撰集で、言水は同書の序に、「中比は難波道、江戸道の八百韻。云々」と言つてゐる。其撰に素堂が關係してゐるやうでは、芭蕉より勝れて居たに違ひない。信德は芭蕉・素堂に十一歳の年長者で、貞門に於て既に令名あり、談林に感染したものの、斯道の修行は芭蕉より深かつた。「誹家大系圖」信德の條下に、「每ニ家事務アリテ東府ニ往反シ、シバ〳〵檀林ノ徒ニ會ヒ、師風ヲ變ズ。故ニ句異體多シ。又蕉翁ニ親シム事深シ。翁東府ヨリ書ヲ洛ニ寄セテ曰、近上都ノ風體何如ント。信德、和及・我黑ノ數人ト日々相會シテ討論ス。不レ覺至レ飮二酒數斗一。終ニ「雨の日や門提げて行くかきつばた。此句ヲ作リテ以テ贈ル。云々」とある。併し「去來抄」に據ると、「大年をおもへば年の敵かな」(凡兆)の上五字を、戀さくらと置いたらどうかといふ信德の意見に就いて、去來が芭蕉に批判を乞ふと、そこらは信德の知る所ぢやないと芭蕉に一蹴されたやうであるから、後には蕉風の感化はあつても、物の數ともされなくなつて了つたと見える。

二、桃靑二十歌仙に就いて

「桃靑二十歌仙」は一に「延寶二十歌仙」とも云はれてゐた。延寶八年の刊行で、題簽に「桃靑門弟獨吟二十歌仙」とある。淡々の「十七回」中其角自筆の「年立」に、「十七歲、桃靑廿歌仙」とある。其角十七歳は延寶五年に當るから、「廿歌仙」は延寶五年編成と見える。永機の「俳諧みゝな草」にも、「延寶五丁巳十七歳桃靑廿歌仙成る。」と

ある。之によつて考へると、「二十歌仙」は其間寫本で傳はつたものであらう。許六の「歷代滑稽傳」(正德五年成)に、

芭蕉翁桃靑は伊賀の產。江戶に居して俳諧に鳴る。桃靑二十歌仙といふ俳書を著す。

二十歌仙獨吟の内

艣聲波をうつて腸氷る夜は涙

子をおもふ鯨の共聲かなし

第一第二の絃はじよき〳〵として午房を刻む

下女廟の花はもみよりも紅なり

前後名を出したる撰集は二十歌仙一部なり。云々

とあるが、二十歌仙獨吟の內として許六のあげた芭蕉の句は、延寶版の二十歌仙にはどこにも出てゐない。恐らく許六は寫本の二十歌仙を見て言つたものであらう。卽ち二十歌仙には芭蕉の獨吟の入つてゐるものと、入らぬものとあつたのではなからうかと思ふ。なほ言へば芭蕉の獨吟の入つた二十歌仙が最初のもので、刊本はそれを除去して、餔子の獨吟を追加したのではあるまいか。去留の「全集」に、

四月(延寶八年)江戶二十歌仙成る。杉風・卜尺・巖泉・一山。緣系・仙松・卜宅・白豚・杉化・木鷄・嵐蘭・揚水・治助・螺舍・巖翁・嵐窓・嵐竹・北鯤・岡松・吟桃。今梓行する本は天明七年丁未尾張の曉臺序

する所也。翁の獨吟には館子といふ別號を記されて追加とす。發句、春もなし踏てをしまぬ蠋のから。

とあるが、勝峯氏の「芭蕉年譜」によると、追加の館子は「武藏野集」の編者館氏意行であるといふ。又乙彦の「對梅宇日渉」第五篇（明治三年序）に「時と代」といふ寫本の說を引用して、「卜宅假號の獨吟、猫の妻夫婦といがみ給ひけりの卷を擧げて曰、二十歌仙の中此猫の妻蕉翁の獨吟也と聞く。云々」とあるが之も信じられない。「桃靑二十歌仙」の名は其角自記の「年立」や許六の「歷代滑稽傳」にあるのだから古くから言はれてゐる名で、其集に桃靑の獨吟の見えないのはあやしむべき事であるといふ理由の下に、或は館子の獨吟を芭蕉に擬したり、又は卜宅の獨吟を芭蕉にしたりする說が起つたもので、無理ならぬ事と考へる。私は何か其間に芭蕉の獨吟のあるものと、無いものとの二種の二十歌仙があつたのぢやなからうかと推測するのである。殊に「滑稽傳」に、「前後名を出したる撰集は二十歌仙一部なり。」と許六の特に斷つた語氣から考へると、艣聲以下の句は許六の書き誤とはどうしても思はれない。許六の見た二十歌仙には芭蕉の獨吟が必ず入つてゐたものであらう。「桃靑門弟獨吟二十歌仙」といふ題號で、師たる桃靑の獨吟の無い事も少し變である。たゞ私は芭蕉と館子との關係を詳にせぬ事を遺憾とする。天明七年に覆刻した曉臺の「桃靑二十歌仙」は、延寶版に比べて、寫誤・脫漏が少くないと云はれてゐるから、曉臺の覆刻本は寫本に據つたものだらう。曉臺當時旣に延寶版が稀であつたのだから、素蓮が「春秋」（嘉永六年作）に、「愚久シク卄歌仙ヲ求ムル所、世ニ稀ニシテ其全書ヲ不レ見。云々」と言つた事も當然の事で、覆刻本すら少なくなつたのであらう。ましてや延寶八年以前の寫本の如きは全く湮滅して了つたのであらう。

次に「延寶二十歌仙」といふ題號であるが、之もかなり古くから云はれてゐた書名である。其角の「若葉合」(元祿九年刊)の山夕の跋に、延寶二十歌仙は芭蕉翁の花也。云々」とある。乙彥の「對梅宇日渉」第五編に、「桃靑廿歌仙は一說に延寶二十歌仙也。桃靑二十歌仙とは曉臺が上梓せし時の題號也といへり。云々」とあるが、此一說は前述の其角「年立」、許六の「滑稽傳」などの記事に徵しても誤である事は知れよう。樋口氏は「芭蕉硏究」に、「寶延二十歌仙」と「桃靑二十歌仙」とを別の書のやうに取扱つて居るやうだが、慥かな根據もなささうである。之は「桃靑二十歌仙」といふ稱號が古く、後に「延寶二十歌仙」とも呼ぶ人が出來たといふ位に考へたらどうか。延寶八年頃は芭蕉も相當覇氣があり、野心もあつたやうだから、題號に桃靑門弟獨吟二十歌仙と書く位は驚く可き事でもないと考へる。

山夕の「延寶二十歌仙は芭蕉翁の花也。」と言つた語は、後世に少からざる影響を與へた。それは延享の年の花として、深川巽窓の「江戶廿歌仙」(一名延享二十歌仙。延享二年刊)の出現である。作者は江戶座の宗匠湖中・存義・平砂・買明・樓川等二十名の獨吟歌仙二十卷を輯めたものである。之に對して蓼太の「俳諧雪おろし」(寶曆元年序)といふ難書もあり、又蓼太の說を駁した江戶座の宗匠雁宕の「蓼すりこぎ」(明和八年刊)其他の辨難の書が出て、當時の俳壇を賑やかにした。曉臺は「桃靑二十歌仙」の序に、「桃靑二十歌仙」は畫龍である、「冬の日は眞龍である、世上今畫龍を見ずして、何の所にか眞龍を求めむ。云々と稱揚してゐる。曉臺の二十歌仙覆刻の理由はこゝにあつた。

三、句合

延寶六年十月、芭蕉は「六番句合」・「十二番句合」の判を書いた。之は何人の發句を合せたものだか詳かでないが、奥書に芭蕉自ら「前後十八番の句合、やつがれ馬頭になりて、物定の博士にさゝれ侍る。云々」とあるから、人の需に應じたものと見える。美濃大の薄樣十二枚に書かれた寫本である。はじめは「六番句合」（初春・花・子規―夕顔・立秋―月・菊―秋暮・雪―炭）、後は「十二番句合」（水祝―殘雪・待花・花―暮春・郭公・五月雨・七夕・名月雨・木實―秋暮・時雨・同・火燵―霜・霰―歳暮）である。句風は談林風である。判詞は「貝おほひ」と異り、中古風の雅文である。內に西行の歌を引いたり、「予が門葉杉風、云々」などと一寸注意させる文字が見える。又奥書の署名に座興庵桃青とあり、傍に素宣といふ白字の捺印があつて、芭蕉庵入庵時日の一參考となる。

延寶八年八月、芭蕉は「田舍之句合」の判を書いた。之は其角がねりまの農夫とかさいの野人とに分けて合せた二十五番の句合である。嵐亭治助（ハルスケ）（嵐雪）の序に、「桃翁栩々齋にゐまして、ために俳諧無盡經を說く。東坡が風情、杜子がしやれ、山谷がけしきより、初て其體幽になだらかなり。云々」。三十七歳の芭蕉を嵐雪は翁と言つてゐるのは尊敬の意味だらうが、實際ふけても見えた事であらう。蘇東坡・杜甫・黃山谷などの集は當時の芭蕉の讀み耽つた書であらうか。芭蕉は漢詩・漢文の句法を俳諧に應用して、新生面を開からうとした。幽玄體の一例。

左　持

德利狂人いたはしや花故にこそ

右

櫻狩けふは目黒のしるべせよ

德利をいだいて花にたはふるゝ狂人深切也。又目黒が原の遠のさくら尤やさし。上野谷中の櫻を見つくしたる體、言葉の外にあらはれたり。兩句幽玄差別なし。

勝句を少し抄出する。

今案ずるに寒食の家には自身番　　野人
鳶に乘て春を送るに白雲や　　同
鐘カン〳〵驚破(ソヨヤ)ほとゝぎす草の戸に　　農夫
月日の栗鼠葡萄かつらの甘露有　　同
詩人ゆるせ松江の河豚といはんに　　同

芭蕉の判詞に「寒食の自身番珍らし。云々」、「昔は鱸、今はふぐ。古風は鱸を愛して河豚を知らず。云々」などとある。即ち上野谷中の花見よりも、目黒の原の花見の方が變つてゐて珍らしい。自身番の佗住居を表すのに、寒食の自身番の方が奇拔で珍らしい。雲のたゞずまひを見て春を惜しむといふより、鳶に乘つて春を送ると云つた方が、列仙傳の俤があつて面白い。鐘が急に鳴つて鳥が驚いたといふより、時鳥が驚いて草の戸に入つたと云つた方が變つてゐる。月日の鼠と云つては平凡である。栗鼠(リス)と云つたので葡萄・桂がよく利く、松江の鱸では普通事

である。河豚とした方が新しく變つてゝよいといふやうに、珍奇な趣向を立てゝ、之を幽玄と名けてゐた。只一句、「凩となりぬ蝸牛の空せ貝　野人」といふのは偶然にも寂びた心持がよく出てゐる。判詞にも「うつせ貝さびたり。」とある。尤も之は蛤の空貝では面白くないから、蝸牛の殼といふ奇拔な文字を持つて來たので、そこが例の幽玄調であらうが、正風の芽はかすかながらほの見えてゐる。

同年九月、芭蕉は「常盤屋之句合」の判詞を書いた。本書は杉風の撰で、青物を題とした二十五番の句合である。芭蕉の跋に、「まことに句々たをやかに、作新しく、見るに幽なり、思ふに玄也。是を今の風體といはんか。云々」とある。勝句の中から幽玄體の新風を抄出して見よう。

青わさび蟹が爪木の斧の音

あへて此箒木のほろ〳〵と成て只

朝顔の夏日影待つ間の豆腐哉

薯は山を奪て金輪際に自然生

茶僭月を見るに梅干の影の如くに來り

橙を蜜柑と金柑と笑て曰く

麩といふものあり性水を好て氷に遊ぶ

葵の生へてゐる所へは蟹が必ず來るさうであるから、葵に蟹を持つて來たのである。そして杣といふべきを蟹にし

て、蟹が爪木の音丁々たりとやつたのである。意味の通じない所が幽玄なら議論の餘地はない。箒木の破れてゐる事をほろ〳〵あへに掛けて、箒木のほろ〳〵あへと句作したのだらうが難解である。槿花一日榮の槿花を豆腐の崩れに喩へたとてつまらぬ洒落である。薯がはびこつて山を奪つたのだから、金輪際に自然生と云つたので、緣語のつまらぬ謎である。僧の姿を梅干の影に喩へたのも奇拔な見立であるし、橙と蜜柑・金柑の論も莊子の寓言を眞似た駄洒落である。麩と水はつき物、麩に氷麩といふものがあるから、氷に遊ぶと洒落れたので、駄洒落もかうなると噴飯の至である。

一體古風を打破して、新奇な一風を興す事はよいけれど、幽玄の意味をかゝる拮屈な表現と謎のやうな怪異な思想の上に轉化せんとする事は、時代の幼稚と云はうか、趣味の低劣と云はうか、實に不思議な感に堪へない。和歌の幽玄は歌の心・詞かすかにたゞならぬ樣である（三五記）。長明は「無名秘抄」に之を面白く喩へて、霧の絕間から秋の山を眺めると、見える所はぼんやりしてゐるが、何となく奥床しく、どれ位後の方が一面に紅葉渡つて居りはしないだらうかと思はれる。その心持が幽玄であると論じてゐる。芭蕉は古風を打破して、新生面を開かうとするのであるから、勿論和歌の古い幽玄趣味に囚はれる必要もないけれど、それにしても幽玄の本質たるかすかな心持は、其表現や情趣の上に失ひたくないと考へる。德利狂人・寒食の自身番・松江の河豚・蟹の爪木・箒木のほろ〳〵あへ・精進あげの三位入道などと云つたつて、奇拔な怪異な感はあつても、詩のデリケートな感じは少しもありはしない。芭蕉の幽玄は謎と駄洒落の荒つぽい卽興である。觀照に落着きのないのは覇氣の

あつたためだらうが、幽玄も馬鹿氣た意味に利用されたものである。

四、延寶の芭蕉の發句・附句

延寶の諸集から抄出する。

植る事子のごとくせよ兒櫻（續連珠）　桃靑
我も神のひざふやあふぐ梅の花（續連珠）　同
天秤や京江戸かけて千代の春（當世男）　同
此梅に牛も初音と鳴つべし（奉納二百韻）　同
門松やおもへば一夜三十年（六百番發句合）　同
大比叡やしの字を引て一かすみ（同）　同
先しるや義竹が竹にはなの雪（同）　同
猫のつまへついの崩より通ひけり（同）　同
庭訓の往來誰が文庫より今朝の春（江戸廣小路）　同
太裏雛人形天皇の御宇とかや（同）　同

不卜亡母追悼

水むけて跡とひたまへ道明寺（同）　同

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍（江戸蛇の鮓）　桃

雨降りければ

草履の尻折りて歸らん山ざくら（同）　同

雲を根に富士は杉なりの茂かな（續連珠）　同

上巳

龍宮もけふの鹽路や土用干（六百番發句合）　同

端午

あすは粽難波の枯葉夢なれや（同）　同

五月雨や龍頭あぐる番太郎（同）　同

またぬのに菜賣は來たか時鳥（同）　同

近江蚊屋汗やさゞ波夜の床（同）　同

梢よりあだに落けり蟬のから（同）　同

五月雨に鶴の足みじかくなれり（東日記）　同

愚にくらく棘をつかむ螢哉（同）　同

闇(やみの)夜(よる)きつね下はふ玉眞桑（同）　同

桂男すまずなりけり雨の月（如意寶珠）　桃青
見るに我もをれるばかりぞ女郎花（續連珠）　同
けふの今宵寢る時もなき月見哉（同）　同

鹿

武藏野や一寸ほどな鹿の聲（當世男）　同

重陽

盃の下ゆく菊や朽木盆（同）　同

立秋

秋來にけり耳をたづねて秋の風（六百番發句合）　同
唐きびや軒端の荻のとりちがへ（同）　同
今宵の月磨出せ人見出雲守（同）　同
木を伐て本口見るやけふの月（江戸廣小路）　同
雨の日や世間の秋を堺町（同）　同
實にや月間口千金の通り町（江戸通り町）　同
色付や豆腐に落て薄紅葉（兩吟百韻）　同

盃や山路の菊と是を干す（坂東太郎）　桃

蒼海の浪酒臭しけふの月（同）　同

波の花と雪もや水にかへり花（如意寶珠）　同

あら何ともなきのふは過て河豚汁（六百番發句合）　同

行雲や犬の欠（かけ）尿（ばり）むらしぐれ（同）　同

富士の雪盧生が夢をつかせけり（同）　同

白炭や彼うら島が老のはて（同）　同

成にけり成にけりまでとしのくれ（同）　同

霜を着て風を敷寝の捨子哉（坂東太郎）　同

今朝の雪根深を薗の枝折哉（同）　同

よるべをいつ一葉に蟲の旅ねして（東日記）　同

花むくげはだか童のかざし哉（同）　同

後名月

夜ル竊ニ蟲は月下の栗を穿つ（同）　同

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮（同）　同

いづれ霙（みぞれ）傘を手にさげて歸る僧（同）　　桃青

富家ハ喰（クラヒ）二肌肉ヲ一、丈夫ハ喫（キツス）二菜根ヲ一、予ハ乏し

雪の朝獨り干（から）鮭（ざけ）を嚙得たり　　同

○

松の梢にうつる日の入

飾竹のよは夢よつゐ年の果。　　同

川風寒き夜半の雪隱

都出てけふみかのはら痛むらし。　　同

たまのちぎりに玉ぞとらるゝ

さりとてはあうて別のうかりひよん。　　同

むつくりとしてどこやらはかどあらを

寢てねごゝろもよいはりまくら。　　同

草の庵夏を一種のたのしみに

茄子の資物やまほとゝぎす。　　同

月の中の桂は凡何程ぞ

かねにてかかはん雲の一むら。　桃青
焼亡はきのふと過て葛城や
あな藏のふたあくる侘しき。　同
（「續連珠」・「當世男」）
此梅に牛も初音と啼つべし　桃青
ましてや蛙人間の作　信章
春雨のかるうしやれたる世の中に　同
酢味噌交りの野邊の下萠　桃青
擂鉢に若紫のすりごろも　同
庭働の男置きけり　信章
胝（あかゞり）のひらけかゝりし二日月　同
爪立て行く足曳の山　桃青
（「奉納二百韻」表）
あら何ともなやきのふは過ぎてふぐと汁　桃青
寒さしさつて足の先まで　信章

居あひぬき霰の玉や亂すらむ　信徳
拙者名字は風のしのはら　青
相應の御用もあらば池のほとり　章
海老ざこまじり折節は鮒　徳
醬油の後は湯水に月澄て　青
更けてしば〳〵小便の露　章
（「江戸三吟」表）

のまれけり都の大氣江戸の秋　春澄
詞のかはせ千金の月　似春
菊やどの家に久しき雁鳴て　桃青
酒舟あれば汀浪こす　澄
碓の音いそがしの松の凪　似春
與作あやまつて仙境に入る　青
（「松島歌仙」表）

色付や豆腐に落て薄紅葉　桃青

山をしぼりし榧の下露　杉風
手みづ桶雲の廣袖月もりて　同
こぬか亂るゝ風の夕暮　桃青
或時は餅に詠る雪の空　同
猿子をだいて峯の松原　同
朝日影岩根の床のわき虱　風
熱湯をながす末の白浪　青
（芭蕉杉風兩吟百韻、表）

因に云、「奉納二百韻」（「一葉集」に延寳五年春の作とあるが、種彥校合「江戸三吟」には延寳四年二月とある。種彥說がよいかと思ふ。）は別に百韻あり、「江戸三吟」も他に二百韻、「松島歌仙」も他に一歌仙あるが、すべて煩を避けて、最初の卷の表だけ抄出する事にした。其他「一葉集」に據れば、延寳六年似春・四友・桃青の三吟百韻二卷、桃青・二葉子・紀子・卜尺の四吟歌仙一卷、同七年桃靑・千春・信德の三吟歌仙一卷、桃靑・杉風・仙風・䶒・惣代・而已の夢想俳諧表八句、延寳六年短連句二十四句があつた。

此時代の發句は寬文頃流行した掛詞は少くなり、比喩・緣語は奇拔になり、故事を取つても、多く下世話な詞にもぢつてゐる。又寬文時代は一句の意味の通らぬものが多かつたけれど、此時代になると、まとまつた思想の上に、

或情味を表さうとするやうになつた。例へば五月雨や龍頭あぐる、梢よりあだに落ちけり、雨の日や世間の秋、阿蘭陀も花に來にけり、花むくげ裸童、枯枝に烏、雪の朝獨りなどといふ句は、慥かに前時代の言語遊戯の句に比して一進歩であると思ふ。中にも枯枝に烏の句は、古來茶話口傳の句として尊重された。此句は言水の「東日記」中の句で、後元祿二年の「曠野」に、中七字をとまりけりと改訂して出した。茶話口傳とは吏登の「或問珍」(享保十七年刊)に、

梅翁なんど檀林の棟梁として、枝に生疵絶えなんだの最中に侍りしを、季吟も歎かしがられ、桃青・素堂と閑談ありて、今の俳風和ぐる方もやと、三叟神丹を煉りて、桃青その器にあたる人と推して進められしによりヽ然らば斯くの趣にもやと、枯枝に烏のとまりたるや秋の暮と一句を定められし。是を茶話の傳と申すなり。云々

とある。なほ蓼太の「芭蕉翁句解」にも、「此句は季吟・芭蕉・素堂一派、新派の茶話口傳の一章なり。云々」とある。併し素丸の「說叢大全」には之を難じて、

季吟・芭蕉・素堂新立の茶話口傳といふ事いぶかし。素堂と季吟との對面はなき事なり。黑露に聞きしが是も右の如く答へし。季吟俳諧を業とする時はいまだ洛に住す。關東へ召さるゝ節は、芭蕉に俳諧をゆづりて、其身は歌學を專として、俳諧を捨てたり。季吟と芭蕉は師弟の事なれば、口傳の茶話もありたるなるべし。素堂江戸深川に居て、何ぞ是にあづからんや。思ふに、翁江戸に來りて、素堂と隣家たり。なほ風雅に交

る。よつて此句の相談もありて、正風體一派新派の誓盟あり。云々

とある。季吟と素堂の對面なき事は素丸の說のやうであるが、芭蕉と素堂が相談して、此句によつて正風體一派新派の誓盟があつたなどといふ說は信じられない。芭蕉歿後は知らず、芭蕉生前に於てかゝる野心は元祿以後芭蕉にあり得可くもないのである。蓋し枯枝の句は當時談林異風の時代に於ては傑作で、滿目凄慘の秋の暮、枯木に寒鴉の寂しく止まれる情景、閑寂の趣深く、後人の傳說を揑造するには好都合の句であらう。

連句も延寶初年は附方寛文時代と餘り變らず、或は前句の緣語を辿り、或は掛言葉を用ひ、又は古歌のもぢりを表してゐたけれど、延寶四年以降の長連句になると、野邊の下萠を酢味噌に見立てたり、胝を二日月に喩へたりする內はまだよいが、遂には、

朝夷の三ぶ様四郎様五郎様の　　信徳
地獄やぶりや芝居やぶりや。　　桃青
（江戸三吟）

火神鳴たゝらかふんで響くらむ　　信徳
菅相丞も本庄の末。　　靑
（江戸三吟）

焼鳥の鶉啼なる夕まぐれ　　二葉子
精進あげの三位入道　　靑
（桃青　二葉子　紀卜尺　四吟歌仙）

などと、道化た輕口を叩いて、讀者を笑はせてゐる。

五、變風初期の撰集（次韻）

延寶八年「次韻」が成つた。淡々の「十七回」其角年立によると、編成は延寶八年で、上木は同九年秋であつた。「次韻」とは信德の「七百五十韻」に次いだもので、「七百五十韻」は信德・正長・如風・政定・春澄・仙庵・常之・如泉が各自發句を出して、一卷づゝ作つた百韻七卷及び五十韻一卷を輯めた撰集である。「次韻」の詞書に、

「晋ノ伯倫傳フニ酒德頌ヲ一、樂天繼ニ以ス酒功讃ヲ一、青醉テレ之續グニ信德ガ七百五十韻ヲ一。二百五十句」

挨拶を爰では仕たい花なれど

又かさねての春もあるべく

とある。即ち「次韻」は「七百五十韻」第八ノ巻の末を繼いだもので、挨拶を云々の句は第八ノ巻、二ノ裏十三句目正長の句、又かさねての云々の句は、同じく十四句目常之の句である。從つて「次韻」芭蕉の發句、「鷺のあし雉子脛長く繼そへて」は前句の春を受けて春季にしたのである。「次韻」の作者は芭蕉・其角・才丸・揚水の四吟で、五十韻一卷、百韻二卷、合せて二百五十句である。次にその表だけあげて見る。

鷺の足雉脛長く繼添て　桃青

這句以テ荘子ヲ可シ見ツ矣　其角

禪骨の力たわゝに成るまでに　才丸

しばらく風の松にをかしき　揚水

夢に來て鼾を語る郭公　角

灯心うりと詠じけむ月　青

微雨行く麻から山の木の間より　水

粟に稗さく黍原の守り　丸

○

鴈にきけといふ五文字をこたふ

春澄にとへ稻負鳥といへるあり　其角

ことし此秋京を寢覺めて　才丸

月を連に坐烏帽子をかぶるなり　揚水

笹に德利を折かたげしや　桃青

おぼこさす川添草の葉をしごき　丸

卑山路に錢とらせきる　角

夕こゆる鬭をかますにかくれ來て　青

夜盜松風の音を相圖に　水

○

世に有て家立は秋の野中かな　才丸
詠置月にかぶ萩を買ふ　揚水
あはれとも茄子は菊にうら枯れて　桃青
鮎さびすたり海鼠漸く　其角
雪の客霙の客とふるまへば　水
蘇鐵の亭に題を設くる　丸
樂やつこ隱れて風流林と呼ぶ　角
樽に羽織を着せてあふぎし　青

修辭・附方・氣分、藝術的進歩驚く可きものがある。「江戸三吟」時代は表から前句の縁語にすがつて、奇抜な比喩を弄したけれど、「次韻」になるとかくの如く穩になり、深みが出來て、幽玄調の進化もうなづかれるが、先へ行くとまだ〳〵駄洒落や道化た比喩が續出してくる。例へば

白親仁紅葉村に送ㇾ聟ヲ　桃青
漁の火影鯛を射る　其角
師魚は諫め鰻は胸を割かれける　才丸

○

渾沌翠に乘て氣に遊ぶ　青

朝咲しらむ馬鹿々々の山　湯　水

雪の別れ女房に髭のある有りけり　角

○

富の屋を德明王の守ります　丸

摩訶右衛門若奈國に生る　角

愛を捨子を捨毗盧遮阿毗羅吽　青

○

夢の身を何と鰹にさめかねて　角

我聞俗は口にきたなき　丸

生づらを蹴折かれては念無量　水

泥坊消えて雨の火青し　青

○

迷ひしれ恨が原の目かけ塚　青

横雲別之助修行し暮て　角

今宵月に村風と申す三味線を　水

鰤魚と鰻が紂王を諫めて忠臣になつたり、翠に遊ぶ馬鹿々々の山だの、横雲別之助が三味線を見付けたとか、摩訶右衛門が佛になるなど、全然輕口・道化である。殊に「次韻」には妖怪趣味が全卷を壓してゐる。例へば「幽靈を世に反す」・「血摺のねまき」・「むくろは起つ」・「魂の魄」・「白骨のかね付けて」・「山彦嫁をだいて失せけり」・「ほむらにたえで蛇児と化」・「雨の火青し」・「卒堵婆の男」・「骨刀土器鎊」・「雷の斧」・「石が曰く」・「木玉にかなで」・「人のぬけがら」・「風太刀を折る」・「蛇の氣立」等奇怪な感情が隨所に表れてゐる。幽玄も妖怪趣味に變化したものか。

「次韻」は古來時代を劃すべき撰集として見做されてゐた。「俳諧問答抄」に、去來が其角に與へた手紙の中、「師の風雅見およぶ所次韻に改り、云々」とか、或は許六の問難に答へた文にも、「先師の次韻起りて、信徳か七百韻おとろふ。云々」とも見えてゐる。又去來の「旅寐論」によると、芭蕉はみだりに法式を破りはしない、十中八九古實に據つてゐるが、「次韻」の頃迄は多く法式を破つた。併し今はもとに返つたなどとある。併し「次韻」を當流開基の集と見る者もあつて、例へば越人の「不猫蛇」の如き、「當流開基の次韻もしらぬ故……汝等は當流開基の次韻といふ二百五十韻の集は知らぬか。信徳が七百五十韻までは色々知りても古風なり。其次韻二百五十韻よりが當流ぞ。云々」とあるが、之は支考が「冬の日」を以て正風開眼の集と定めた事を罵つたのであるが、私は

それを正風に忠實な撰集とは考へてゐない。談林感化の桔縮贅芽な風調はやゝ收まつたけれど、道化・輕口が句作の主要な目的となつてゐる以上、正風の眼は容易に開かれさうもないのである。多少の落着きはあるが、なほ進展すべき過渡時代の集たるを免れない。それは「奉納二百韻」や「江戸三吟」頃の風調に比ぶれば一生面を開いたもので、芭蕉一代の變風の或時期を劃すべきものではあるが、「次韻」によつて正風の礎が定まつたとは考へられない。「虛栗」が出れば「次韻」は衰へるのである。

第五章　芭蕉庵時代

第一節　深川の芭蕉庵

一、深川の由來

深川は元海濱の萱野で、人家も畑もなく、はじめ深川八郎右衛門といふ者、攝津から下つてこゝに住んでゐた。家康が此邊遊獵の際、八郎右衛門を呼んで、地名を尋ねたけれど、定まつた地名もないので、以後深川の苗字を以て村名とする事を命じ、慶長元年新開地となし、深川村と唱へ、年と共に村落も殖え、彼の八郎右衛門代々當村の里正となつた。後七代の孫八郎右衛門の時、寶暦七年故あつて斷家となつた。寛文年中武家・寺院の賜地などが出來た。古の深川村はその西北なる元町・六間堀・高橋・海邊町あたりであつた。

二、芭蕉庵の附近

芭蕉庵は深川區西元町にあつた。彼の有名な古池は下宿屋の庭中に、井戸のやうな形となつて、わづかに殘つてゐた（大正十二年關東大震災以前）。西元町は舊元町の一つで、最初に市廛を開いた所、今は西に大川を距てゝ濱町や中州に向ひ、北は安宅町・八名川町に接し、東は六間堀に沿うて常盤町に通じ、南は小名木川を距てゝ大

工町に向つてゐる。つまり大川・小名木川の出會ふ北角の一廓を領してゐる。「江戸名所圖會」に、「芭蕉庵は萬年橋の北詰松平遠州侯の庭中にあり。」とし、長慶寺の鵜殿士寧の「芭蕉翁句冢碑記」には、「庵二於猿兒橋畔一云々」ともある。萬年橋とは小名木川に架し、小名木川が大川に注ぐ口に寄つた小橋で、北は西元町、南は大工町に通じてゐる。猿兒橋とは六間堀(常盤町の西に沿うて、南小名木川に通ずる堀割)に架し、西元町から常盤町一丁目と東六間堀町の間に通ずる小橋である。

一體深川は景勝の地であつた。春は永代寺の花、夏は洲崎の涼み、秋は木場・小名木川の鮒釣り、海魚釣り、月見、冬は二軒茶屋の雪景色等、四時の風客絶えざる地であつた。殊に小名木川が大川へ出る口などは、元祿の昔から遊興の眼を恣にさせた所であつた。但し「續江戸砂子」に、江戸内外分傍示の場所と題し、元祿十一年標木を立てた雛形を載せ、「此杭より内小荷駄馬、口附之者不レ可レ乘者也。」とあつて、其場所を列記せる中に、深川では高橋・扇橋・萬年橋をあげてゐる所を見ると、萬年橋の南は江戸市外であつた事が分る。なほ「增補江戸大繪圖」(天和三年刊)を見ると、今の深川西元町は北東は太田攝津・松平七郎、西南は松平右衞門・伊奈半十、中央は尾張中納言殿の屋敷となり、今の八名川町は大部分大川に通ずる大きな堀割があり、昔あたけ丸といふ船をつないで置いた所らしく、安宅町あたりは御船藏になつてゐたやうである。とにかく芭蕉庵附近は場末の新開地で、杉風が芭蕉庵眺望と題して、「葛飾の郡はなれし花の雲」と詠んだり、芭蕉が「草の戸や芭蕉を富士にあづけ置く」・「花の雲鐘は上野か淺草か」と詠んだ所から考へると、此邊一體家少なく、田圃つゞきの、廣々した土地で

あつたらしい。たゞ水郷であつたため、土地低く、堀割多く、じめ〳〵した不健康地を免れなかつた事と思ふ。

小名木川が大川へ出る所に船番所があつた。之は江戸から下總行德へ往來する船を改めた所である。故に萬年橋を一名元番所橋と云つた。小名木川は俗に行德川と呼ばれてゐた。之は行德船の往來がはげしかつたからであらう。山下氏の「大日本名所圖會」に、「府內備考」其他の書を引いて、小名木川は西は萬年橋の下から、東は中川御番所前まで、川長凡一里十町、川幅二十間餘、正保頃の地圖に、「うなぎさやほり」と記し、延寶・貞享・元祿の諸圖に、宇奈岐澤（ウナギザハ）とし（延寶の「江戸雀」女木（ヲナギ）に作）、文政六年江戸圖うなぎ川と記してゐると說いてゐる。素堂の草庵は此川下にあつた。素丸の說に、「翁江戸に來り、素堂と隣家たり。云々」とあるが、隣家だとて芭蕉庵とは數町はへだたつてゐた事だらう。此一語でも芭蕉庵の附近家少なく、廣々した土地であつた事が分らう。又芭蕉が常陸の自準亭（本間道悅の庵）を訪れたのも、此川を下つての事であつた。小名木川の南岸大工町は船大工が多く住んでゐたので、かく名づけられたものださうだ（「深川珍者錄」・寶曆十年序に出）。芭蕉が佛頂に參禪したといふ臨川寺は、西大工町の引込横丁にあつたけれど、天和三年の繪圖を見ると、ヒツコミ丁といふはあるが、寺の名は見えない。恐らく當時は寺でなく、草庵であつたのだらうと思ふ。

三、芭蕉庵といふ號に就いて

芭蕉庵の由來に就いて古來二種の說が傳はつてゐる。一は湖中の「略傳」說で、卽ち杉風志深く、深川に庵を結んで入れた。門人李下一株の芭蕉を植ゑた所、それが繁茂して、世人呼んで草庵の名とした。「はせを植て先に

くむ荻の二葉かな」。他の一説は曰人や梅人の説で、卽ち曰人説は杉風は代々御納屋御用を勤めたので、鯉屋〳〵と呼ばれた。末には其鯉屋をうるさがり、藤右衞門といふ者に株をくれて、自分は別家の如く出入した。小田原町に住み、後は深川平野町に住んだ。六間堀元番所といふ所が杉風の別莊で、鯉の籞があつた。其籞も藤右衞門に讓つて用ひなくなつたから古池同然になつた。そこへ芭蕉を置いたのである。折々芭蕉庵杉風と云つたのは庵の地主だからであらう。云々。又梅人説には籞の古池の傍にはせを庵があり、其側に採茶庵があつた。之は杉風の庵であるといふ。以上曰人説は「蕉門諸生全傳」に見え、梅人説は「俳人芭蕉」に引用されてゐるが、私はもとの出典を知らない。たゞ芭蕉庵の側に採茶庵があつたといふと、何となく芭蕉庵と採茶庵とが一つ地所内にあつたやうに思はれるが、採茶庵の方は平野町にあつて、多少離れてゐたものだらうと考へる。併し通説は湖中說のやうに、芭蕉が居を深川に移す時、門人の李下から一株の芭蕉を貰つて植ゑたら、それが地味に叶つて繁茂し、結局有名になつて、世間から芭蕉庵と呼ばれるやうになつたといふのである。前章に一寸述べたが、芭蕉庵の前名を坐興庵と云つた。坐興庵桃青といふ名も見える位だから、芭蕉は先づ坐興庵へ入つて、後に芭蕉を植ゑて有名になつて、人から芭蕉庵と言はれるやうになつて、自分も芭蕉庵桃青と呼ぶやうになつたものと見なければならない。杉風が芭蕉庵杉風と號したのは大びらの名ではあるまい。庵の地主だから、時にはさう呼んだ事もある位の程度であらう。芭蕉庵杉風といふと、芭蕉が李下から貰つた芭蕉を植ゑる前に、芭蕉庵に芭蕉が生へてゐたやうにも考へられるが、恐らく芭蕉庵の芭蕉は以前からあつたのではなく、李下から貰つてはじめて生へたもの

であらう。坐興庵が芭蕉庵と改まつたのは、李下の芭蕉が繁茂したためであらう。

四、芭蕉歿後の芭蕉庵

芭蕉歿後の芭蕉庵は、杉風の皆忘れぬ志によつて、月々の供養は手厚く行はれたやうであつた（芭蕉七回忌「冬かつら」の序）。併し芭蕉の古池は元祿丁丑十年夏尼ヶ崎侯松平遠州別業の地中となり（素外の「蛙之詞原」）、芭蕉庵は元祿十一年外へ引移る事となつて（杉風秘記抜書）、次第に荒廢に歸した。そこで雪中庵蓼太之を歎き、芭蕉七十回忌卽ち寳暦十三年十月十二日、菩提所なる深川六間堀要津寺に俤塚を建て、芭蕉の自畫を埋め、木像を彫つて位牌堂に納め、二萬句を興行し、百回の法會を執行した。其後蓼太は明和八年に至り（再興供養四月二十五日、吏登十七回忌追福執行の日、一萬句興行、出座惣連三百二十餘輩と云）、江都の人々を始め、社中の力を合はせ、要津寺の門前引入つた所に、再び芭蕉庵を造立し、附近に池を掘り、古池の形を寫し、砌に小堂を建て、觀世音と木像を安置した。此觀世音は芭蕉遺愛の品で、芭蕉歿後松村桃鏡の手に落ちたのを、此度乞うて小堂の本尊としたのである。芭蕉庵には芭蕉翁自畫讃・二見形文臺（松村桃鏡）・芭蕉翁杜國兩筆紀行一帖（森田白翅）・芭蕉翁眞筆嵐蘭追悼句入縣物（雪中庵蓼太）・駿河原松陰寺遂翁和尚筆芭蕉庵三大字額（同）・石川幸元筆芭蕉翁肖像石摺（同）・吏登所持の埋杉文臺・竹の硯箱（同）・人丸尊像一軸（恒川友鷗）・重硯（堀白門）・青磁置花生（射和祖山）・聯二枚（子規亭吐月）・龍水寫四山瓢（橘庵六窓）等が收められた。小堂は芭蕉堂と云はれ、其他池邊に蛙塚といふ句碑もあつた。之は碑面に古池やの吟を彫り、青石凡四尺許りのもの。安永二年四月十二日、普

成・龜求・子交の造立、深川親和七十三歳の書である。蓼太の「芭蕉庵再興集」の口繪を見ると、木戸を入つた左側に芭蕉庵があり、右側前に蛙塚、傍に芭蕉を植ゑ、其後に芭蕉堂、傍に柳を植ゑ、中央は帶のやうな流がめぐつて、池らしい形も見えないが、或は此流が池であらうか。釋敬順の「遊歴雜記」(文化十二年七月序)二編巻之下に、

東武深川六間堀芭蕉庵の舊跡は酒店のうらにあり。……又傍に池あり。大さ漸く五六間四方、こればせを翁の古池の吟の古跡なりといふ。……汀に建てし青石は蛙のうづくまりし形に彷彿たりとて、桃青翁常に愛せし石となん。後年雪中庵蓼太は此石に古池の句を鐫ち付け置きぬ。……此方の汀に生茂りし柳は、芭蕉翁奥筋遍歴の節、彼西行のみちのくの清水流るゝ柳影と詠ぜし遊行の柳の枝を翁折來り、手づからさし樹にせし一株なりといひ傳ふ。川池の向ふにばせを堂あり。此方には侘びたる庵堂を構へて、實に市中の閑居といふべし。此庵は昔ばせをより嵐雪に譲りて、今雪中庵四世完來の持となり、折々完來はじめ社中の人々爰に集會し雅宴をたのしむとぞ。云々

とある。之は要津寺門前の芭蕉庵の記事らしく、それも誤傳交り、附會甚しき説もあつて信じられぬものであるが、後には元の芭蕉庵の內情と蓼太の建てた芭蕉庵の記事と混同し、種々の憶説が生れたものと見える。併しその要津寺門前の芭蕉庵も後年大破し、荒廢に任せて來たので、明治になり雪中庵梅年、形のみ殘る小堂を深川富岡八幡宮の境內に移し、芭蕉祠と名づけ、木像は盜難を恐れ、鏡を以て神體とした。元の古池は文政二年に至り、

尼ケ崎老侯松平遠江守（一櫻井驪文と號し、談林派の人）之を修理し、句碑を建て、谷素外に命じて碑文を作らせた（野桂の「江都祖翁墳塋集」古池の條下に、古池の句碑の圖見え、裏に素外の「古池蛙之詞原」といふ撰文がある。）又俳誌「ホトトギス」第十二巻四號の口繪に、中村不折氏が天保年間祖父庚建翁の見取圖と自分が幼時に聞いた談話を本として描いた芭蕉庵の圖が出てゐたが、氏の說明によると、それは燒失した後舊型によつて再建したもので、方九尺外三尺の緣付であると。山下氏の「名所圖會」に、文久二年の切繪圖に紀伊殿とあつて、「芭蕉庵の舊跡庭中にありと記せし所是なり。」とあるが、後に紀伊家の邸内に變つたものらしい。

五、芭蕉庵入りの時日

芭蕉が芭蕉庵に入つた時日に就いては諸說頗る多く紛らはしい。

イ、寛文六年說（芭蕉二十三歲）

政二の「俳道系譜」の說である。此說は寛文六年秋の記事につながつてゐるからあげたので、或は時日に距りのある事を、前文につゞけて書下したのかも知れないが、信じられる說ではない。寛文六年は蟬吟逝去の歲、芭蕉の遁世さへ傳はつてゐる歲で、芭蕉庵入りどころではない。

ロ、寛文十二年說（芭蕉二十九歲）

竹二坊の「正傳」の說である。併し之も前說の如く或は時日に距りのある事を、前文につゞけて書下したのかも知れない。寛文十二年は江戶へ下つた歲で、下るとすぐ芭蕉庵へ入つたとは考へられない。

ハ、延寳元年說（芭蕉三十歲）

去留の「全集」の說である。之も前の如き理由で信じられない。

ニ、延寳二年說（芭蕉三十一歲）

湖中の「略傳」の說である。五柳の「全傳」・魯庵の「桃青傳」之に從ふ。併し江戸へ下つて、芭蕉が諸所寄寓した點から考へても、又は水道工事に從つた事實から見ても、江戸下り後間もなく深川へ入庵したとは思はれない。其間相當な年月を經過してからの事と考へるのが普通ではなからうか。

ホ、延寳六年說（芭蕉三十五歲）

梨一の「菅菰抄」中「芭蕉翁傳」の說である。但し同書に、「此時延寳六年にて、年二十三と云。」とあるは誤である。「杉風句集」（天明五年刊）の「杉風秘記抜書」に、

私ニ曰、許六の書に翁ばせを庵に入年三十七、支考の書に三十六。兩說相違なるや。延寳六戊午年翁春帖予所持ス。其年翁三十五也。考るに、ばせを庵に入り給ふは、夫より前なるべし。云々

とある。「杉風句集」は採荼庵四世梅人の編で、「杉風秘記抜書」に私ニ曰とあるは梅人の說であらう。梅人が延寳六年の芭蕉の歲旦帖を引合ひに出してゐるのは、其中に或は坐興庵桃青とでもあつて、何か六間堀の杉風の庵に住んで居た證據になるやうな記事が見えて居たからであらうか。若しさうだとすれば、此說は有力にならうが、詳かでないのは遺憾である。尤も延寳六年十月の「十八番句合」の奥に坐興庵桃青とあるし、延寳五年編成の「桃

青二十歌仙」芭蕉獨吟の内、「艪聲波をうつて膓氷る夜は涙」とあつて（許六の「滑稽傳」出）、深川芭蕉庵の光景の句らしく思はれるから、入庵は延寶五年頃と推定されようが、一方に「柴の戸に茶を木の葉かくあらし哉」といふ芭蕉の句の前書に、「こゝのとせの春秋市中に住佗びて、居を深川のほとりに移す。云々」といふ記事がある以上、今遽に斷定も出來ないのである。この艪聲の句は天和二年の「武藏曲」に夜やなみだとあるし、梅人の「續深川」（寛政二年刊）に「深川冬夜ノ感」と前書があり、松雨の「夢三年」（寛政十二年刊）には「寒夜辭」と題して、「深川三またの邊りに草庵を侘て、云々」といふ前書が附いてゐるから、深川居住の句である事は慥かのやうである。なほ寥松の「行住略記」（天保三年刊）も、梨一說を取つて、「此說然るべきか。」と言うてゐる。以上の典據によれば、此說は有力で無い事もないが、しばらく後考を俟つ事とする。或は芭蕉庵へ落着く迄の一時的居住であつたのであらうか。

へ、延寶七年說（芭蕉三十六歲）

支考の「十論爲辨抄」に、「深川の芭蕉庵に隱遁ありしは三十六の年なりとぞ。云々」とあるが、「俳諧十論」には、「天和のはじめならん、武江の深川に隱遁して、云々」ともあつて曖昧である。「一代錄」は此說である。

ト、延寶八年說（芭蕉三十七歲）

許六の「風俗文選」作者列傳の說で、「入二深川芭蕉庵一出家。年三十七。」とあるが、梅人說では此說を前說と共に誤つてゐるやうに言つてゐる。併し「續深川」の芭蕉の句、「しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉」の前書、

「こゝのとせの春秋市中に住侘て、居を深川のほとりに移す。長安は古來名利の地、空手にして金なきものは行路難しと云けむ人のかしこく覺え侍るは、この身のとぼしき故にや。」といふ九歳云々の年數から推定すると、入庵は延寶八年冬となる（「眞蹟拾遺」に、冬日江戸に居をうつし、寒を佗る茅舍の三句と題し、柴の戸の句及び他の二句出）。句の前書といふものは往々編者の手に成る場合もあるが、此前書は筆力芭蕉らしく、梅人の作爲ではあるまい。私はまだ多少の疑問はあるが（延寶五六年入庵説など）、從來諸説の中此説が最も眞に近いのではあるまいかと考へる。なほ次項の論を參照して貰ひたい。樋口氏も此説を最も有力視してゐる。

チ、天和元年説（芭蕉三十八歳）

素蓮の「春秋」の說で、山崎氏の「俳人芭蕉」・沼波氏の「芭蕉年表」・勝峯氏の「俳句定本」等此説に從つてゐる。先づ素蓮の考證を讀むと、素蓮は「九のとせの春秋市中に住み佗びて、云々」といふ芭蕉の前書「予又市中を去る事十年ばかりにして、五十年やゝ近き身の、云々」といふ芭蕉が「幻住庵記」（元祿三年作）の一節「天和のはじめならん武江の深川に隱遁し、云々」といふ支考が「俳諧十論」の說、「年いまだ四十の老を待たず、武陵の深川に世をのがれて、云々」といふ支考の「本朝文鑑」碑銘序の說等を根據として、

此年曆ヲ推スニ、元祿三年ヨリ前ニ十年ハ天和元年ニテ、同年ヨリ前ニ九年ハ延寶元年也。然レバ芭蕉寛文十二年江府ニ來テ、小澤卜尺ガ家ニ止リ、翌延寶元年ヨリ天和元年迄九年市中ニ居シ、天和元年初テ深川ニ卜居セシコト明ケシ。云々

と論じてゐる。併し私にはまだ疑問がある。先づ「幻住庵記」の「市中を去る事十年ばかり」は果して正確な數であるだらうか。十年ばかりといふ書方が既にぼんやりしたもので、學者の斷定を下す資料に安心して使へる事は出來ない。又九年の春秋云々といふ前書の年數を假に信用出來る數と見ても、芭蕉は寛文十二年に江戸へ來たのであるから、寛文十二年の江戸住も計算の中へ入れなければ理窟に合はない。寛文十二年江戸住を除き、翌延寶元年から計算して、市中の佗住居を九年と數へたのはどういふ譯であらうか。此前書を活かすとしたら、九年目はどうしても延寶八年で、天和元年となるわけはない。又支考の天和のはじめならん云々といふ記憶は當になるものではない。正德四年の「俳諧十論」にさう言つてゐるかと思ふと、享保十年の「十論爲辨抄」には三十六歳卽ち延寶七年入庵の事を述べてゐる。山崎氏は素堂の「葛飾ノ序」に、「今は昔の友はせをの翁十暑市中に風月を語、云々」とある所から、天和元年入庵說を正しいと考へてゐるやうだが、十暑といふ語が正確な數の意味を表してゐるかは疑問である。なほ一つ私は天和元年入庵論者に聞きたい事は、入庵を冬と定めた事である。勿論之は例の前書付きの柴の戸の句が冬であるからであらうが、さうすると天和二年三月刊行の「武藏曲」の、

茅舍ノ感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉　芭蕉

とある句はどうしたものだらう。此句は明かに芭蕉庵の野分の景で、野分は秋だから、「武藏曲」にも秋の部に入つてゐる。卽ち芭蕉の入庵は天和元年としても、秋かそれ以前でなくてはなるまい。且又芭蕉が野分する程に伸

びて居るものなら、此芭蕉は以前から植つて居た芭蕉であるとも考へられよう。なぜかといふと天和元年冬入庵とすると、李下から貰つた芭蕉は天和二年春植ゑた事になり、その芭蕉が野分するには天和二年の秋にでもならなければ出來ない事になる。「武藏曲」は天和二年三月上旬刊であるから、天和二年秋の芭蕉野分の句を出す譯はないから、どうしても天和元年冬入庵とすると、此芭蕉は李下から貰つたものでなく、以前から植ゑてあつたものと見るより外はない。此點は天和元年冬入庵論者はどう解決するか。樋口氏は延寶八年入庵、天和元年春芭蕉を植ゑ、秋になつて野分の句を作つたといふが、之は延寶八年入庵とすれば、天和元年春芭蕉を植ゑるより外に、芭蕉の持つて行き場がないからさうしたので、私もやはりさう考へるより途はない。

六、芭蕉改號説

芭蕉といふ號は芭蕉が芭蕉庵に入つてからの號である。入庵を延寶八年冬とすれば、それ以來の號である。桃青を改めて芭蕉としたのではない。芭蕉庵桃青の芭蕉庵が有名になり、人も呼ぶし、自分も言ふといふ譯で、自然と芭蕉と書くやうになつたのだらう。書物に見えたのは天和二年千春の「武藏曲」が始めてであらう。

然るに宇橋の「栗本雜記」に、

きのふ松尾うし桃青來りて改名を乞ふにいなみがたく、八雲抄の俳諧歌に習うて、はせをとよび侍る事しかり。

月花のむかしを忍ぶはせをかな　　拾穗軒季吟

愚意判

右ノ反古、季吟門芥舟傳來而、今江州水口小坂町煙草屋久右衛門(俳名梨風)所持ト云。案ニ芥舟ハ翁ノ門成ベシ兀峯ガ桃實集ノ序者也。

とあつて、前に宗房が桃青と改號した時、季吟が披露の俳席を催してやつた說と對照させて居るが信じられない。一體桃青が來て改名を乞うたとあるのは、季吟がどこに住む時やつて來たものかそれが詳かでない。季吟が江戸へ來たのは元祿二年で、延寶の末頃は未だ在京中であつた。江戸住の芭蕉が京住の季吟の許へ來て改名を乞ふ理由もなし、又其頃芭蕉が上京したといふ記錄も見ないし、頗る怪しむべき說と云はなければならぬ。殊に桃青が芭蕉と改名したといふ見方が惡い。桃青は死ぬ迄用ひて居た號で、何も芭蕉と改めて桃青號を捨てたといふ譯ではない。「武藏曲」には季吟の序が出てゐる。「武藏曲」にはじめて芭蕉翁桃青とある。季吟は芭蕉の師である。さういふ點から想像して、芭蕉が改號を季吟に乞ひ、芭蕉翁桃青となつたのであらうといふ臆說が、かゝる文書を捏造させた原因となつたのではなからうかと考へる。

七、芭蕉庵の生活

芭蕉庵は五度結んで五度破つてゐる。それに火に逢つて天和三年再建したり、元祿五年舊庵の傍に新築したりしてゐるから、內部の狀態も或は元のとは多少變つてゐる所があつたかも知れない。併し大體の樣子は市川柏莚の日記「老の樂」にある小川破笠の物語で分らう。破笠の物語つた芭蕉庵は貞享二三年頃のもので、燒失後再建した芭蕉庵の事らしい。卽ち深川の芭蕉庵はへつい二つ、臺所の柱に瓢がかけてある。米二升四合も入るやうな

大さである。杉風・文鱗などの貢で、米が無くなると入れて置く。若し弟子から米の來るのが後れると、自分で米を買ひに出た。其頃芭蕉は四十二三の人かと思ふが、六十過ぎの老人に見えた。常に茶の紬の八德ばかり着て居た。佛壇は壁を丸く掘り拔き、内に砂利を敷き、出山の釋迦の像を安置されたなどとある。此瓢は天和三年芭蕉庵再建の折石川北鯤の寄附したものであらう。四山と號し、素堂の銘があるので有名である。「隨齋諧話」に、「大瓢の文章は文集等に出でざれば、眞蹟のまゝに寫し出す。云々」とあつて、芭蕉の瓢之銘が載せてある。卽ち

瓢之銘

一瓢重黛山　　自笑稱箕山
莫慣首陽餓　　這中飯顆山

顏公のかきほにおへるかたみにもあらず。惠子がつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさごあり。是をたくみにつけて、花入る器にせんとすれば、大にしてのりにあたらず。さゝえにつくりて、酒をもらんとすれば、かたちみる處なし。あるひとの曰く、草庵のいみじき糧入つべきものなりと。まことによもぎふのこゝろあるかな。やがて用ひて、隱士素翁に乞うて、これが名をえさしむ。其言葉は右に記す。其句みな山をもておくらるゝが故に、四山とよぶ。中にも飯顆山は老杜の住める地にして、李白がたはふれの句あり。素翁李白にかはりて、我貧をきよくせんとす。かつむなしき時は、ちりの器となれ。得る時は一壺も千金をいだ

きて、黛山もかろしとせんことしかり。

物ひとつ瓢はかろきわが世かな　　芭蕉桃青書

併し「一代錄」記載の文には、少し異なる點があるので、參考迄引用しよう。

顏公ちまたに生るかたみにもあらず。惠子孔が傳ふ種にも非ず。我垣根に嫩生出てより、軒端這まとはりて、終に花咲實を結ぶ。大きさ五升斗也。是を工に付て、花入うつはにせんとすれば、其器にあたらず。さゞえに作りて酒を求んとすれば、かたち見る所なし。或人曰、草の戸のいみじき糧入べき物也と。かしこくもいひけん。みづからよもぎの心ある哉。やがてもちひて、隱士素翁にこうて、是が銘をもとむ。其言葉は右に有。句皆山をもて贈る故に四山と呼。飯顆山老杜の住る地にして、李白が戲談の句有。素翁李白にかはりて、我貧山を淸くせんとす。且六かしき時は塵の窓となれ。得る時は壺も千金を抱きて、泰山もかろしとせん事しかり。

芭蕉

（こゝに瓢之銘の詩句あれど畧す）

物ひとつ瓢は輕き我世かな

とある。瓢の大さに就いては、「一代錄」、大きさ五升ばかりとあり、越人の「鵲尾冠」（享保二年刊）にも、

歲旦

越人曰、此發句は芭蕉江府船町の囂に倦、深川泊船堂に入られ、つぐる年の作なり。堂のうち、茶碗十ヲ・菜刀一

枚・米入るゝ瓢一つ、五升の外不入、名を四山と申候。

似合しや新年古き米五升　芭蕉

とある。此句は貞享元年正月の吟で、當時の芭蕉庵の內部の一端が窺はれて面白い。魯庵の「芭蕉後傳」に、「曾て是眞が原形の大きさのまゝ寫生せしを見たるに、高さ二尺三四寸・直徑五寸ほどの細長き形にして、素堂の銘は朱漆にて認められ、其背部に黑漆を以て塗りたる鐵環あり。其圖は寸錦雜綴に見えたり。」とある。「一代錄」の縮圖を見ても、やはり細長い形のもので、上に四山とあり、下に銘が二行に書かれ、一瓢重泰山　自笑稱箕山　莫習首陽山　這中飯顆山　上のくびれた右脇に、「此所に手垢有。」とあつて、「右傳來、柏莚・五粒へ傳へ、今三升に傳る。」とある（「寸錦雜綴」の芭蕉翁米櫃の圖も同じ）。「隨齋諧話」には眞蹟の寫しだと云つて、銘の三句目を「莫慣首陽餓」と記してゐるが、「一代錄」・「寸錦雜綴」・「芭蕉庵再興集」（庵中器財の品々中、三升に傳はつた四山瓢を、書家龍水の寫したものによる。）には、何れも莫習首陽山とあつて、實物に相違のあるのも變である。併し之は「其句皆山をもて送らるゝが故に四山と呼ぶ。」と芭蕉も言つてゐるから、莫習首陽山の方が正しいと思ふ。又瓢の大さに就いても異說があつて、素堂の「芭蕉庵六物の記」（一、文臺　二、大瓢　三、小瓢　四、檜笠　五、畫菊　六、茶羽折）には、「長さ三尺にあまり、めぐり四尺にみつ。云々」とあるが、五升入りが限度とすれば、少し誇張した言ひ方ではなからうかと思ふ。なほ同書に「大瓢　米入號四山　濃州大垣住中川濁子にあり」とあるから、柏莚に傳はる前に濁子の許に傳へられたものと見える。小瓢、之も同書に、「帶にはさみ、東都松木紋水にあり。」とある。

出山の釋迦の像とは、「花屋日記」に、「出山佛御長一寸一分」とあるそれであらうか。「續深川」に、

文鱗生出山の御かたちを送りけるを安置して

なもほとけ草のうてなも涼しかれ

とは之である。貞享二年頃貰つたのだらう。

文臺、二見と號し、芭蕉歿後曾良が傳へてゐる。「六物の記」に、「西行法師二見の浦にて、くぼかなる石を拾うて硯となし、扇をしきて文臺とじたまふにより、ばせを庵の文臺に扇を繪きて、是をふた見とよぶ。云々」とある。此文臺は「一代錄」に圖示され、「二見形、芭蕉自畫、裏書なし。」とある。即ち長サ一尺七寸、幅一尺六分、桐の一枚板、筆返し竹二ツ割、鐵鋲三本打、足高サ二寸七分、筆返しの竹外二分除る、表面に二見の浦と扇の繪が畫かれてゐる。なほ此文臺のまがひ物らしいのに、支考の「二見とは松の旭に梅の月」と裏書きした長サ一尺七寸、幅一尺一寸五分、筆返し紫竹二ツ割、節三ツゴメ、表面に二見ノ浦と扇の繪を畫いたものもある。

檜笠、之は芭蕉の「笠張ノ說」にある澁笠とは別物であらうか。「六物の記」に、

甲斐の山人にこひもとめて、行脚に出る時、宗祇法師の、世にふるもおなじ時雨のやどり哉といふ句を書て、ついに難波の浦にて、時雨のころに終りぬ。予洛陽のかへさに、膳所にやどりける頃、珍夕たづさへ來りて、銘あらむことを求らるゝにより、銘して曰、

一笠一天地。　一身一葉心。

江山皆舊友。　仰月臥花陰。

芭蕉は天和二年冬草庵のつれ〴〵に、雨の侘笠を張つて慰めた事があつた。そして「笠張ノ說」を作つてゐる。

草扉にひとりわびて、秋風さびしき折々、竹取のたくみにならひ、妙觀が刀をかりて、みづから竹をわり、竹を削て、笠つくりの翁となのゐる。心しづかならざれば、日を經るに物うく、工みつたなければ、夜をつくしてならず。あしたに紙をかさね、夕にほして又かさね〳〵澁といふものをもて色をさぼし、ます〳〵かたからんことを思ふ。二十日過るほどにこそやゝいできにけれ。其かたちうらのかたにまき入、外ざまに吹かへりなど、荷葉のなかばひらくるに似て、なか〳〵をかしきすがたなり。……あられにさそひ、時雨にかたぶけ、そゞろにめでて殊に興ず。興のうちにして俄に感ずることあり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、かりのやどりに袂をうるほして、みづから笠のうらに書つけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉　（「一葉集」）

芭蕉が笠の裏に宗祇の句を書付けた事は、宗祇の漂泊的な侘しい人生觀に共鳴したからである。自作の澁笠は細工こそ拙いが、その不恰好な所に興味があると、淡いユーモアを見せながら、併し面白く思ふ中にも感ずる事がある。宗祇の時雨ではないが、假のやどりに袂をうるほしてなどと、急に感傷的な心持になつて、周圍を見廻してゐる。芭蕉の言葉にはしみ〴〵する嚴肅さがある。丁度深い水の底に沈んで、もがき〳〵やうやく水面に浮み上つて來た人のやうな、生活苦の深い經驗と倦れたやるせない心の殘像が微に動いてゐるやうに思はれる。此文

は支考の「和漢文藻」（享保十二年刊）に、「笠張銘並序」と題して大同小異の文となつて出てゐる（草扉を草の扉、竹取のたくみにならひの句なし）。世にふるはの句は宗祇の「世にふるもさらに時雨のやどりかな」から出た事は明かであるが、之に就いて古來種々の說があつた。卽ち芭蕉の句は「吉野拾遺」にある後村上天皇の御製、「世にふるはさらに時雨のやどりかな」の擬作である（「愚雜俎」）とか、或は「新古今集」二條院讃岐の「世にふるは苦しきものをまきのやに安くもすぐる村時雨哉」の和歌から脫化したのであらう（杉雨の「發句評林」）などと論ぜられてゐるが、それはしばらく措き、「虛栗」には世にふるも云々、「泊船集」には「世にふるも更に宗祇の時雨かな」、支考の「笈日記」には世の中は云々、杉風所持の短冊に、自筆にて世の中は云々とあり、世にふるはは連歌、世の中はは俳諧の利口である（素丸の說叢の說）などと傳へられてゐる。併し擬作說は酷で、擬作と云へば宗祇の句が既に其難を蒙るべきである。

深川區東森下町に長溪（慶トモ）寺といふ寺がある。こゝは芭蕉の參禪した寺と傳へられて有名である。そこに時雨塚或は短冊塚と云つて、世にふるはの芭蕉の自筆短冊を埋めた石碑が建つてゐる。卽ち杉風が芭蕉歿後ここへ短冊を埋めて供養した塚である。史邦の「小文庫」（元祿九年刊）の序に、

さるをむさし野のふるき庵ちかき長溪寺の禪師は、亡師としごろむつびかたらはれければ、例の杉風かの寺にひとつの塚をつきて、さらに宗祇のやどりかなと書置かれける一紙を壺中に納め、此塚のあるじとなせり。たれ〳〵もかれに志をあはせて、情をはこび句をになふ。なほ師の恩をしたふにたらず。霜落葉かきの

けて、かたのごとくなる石碑を建て、霜枯の芭蕉をうゑし發句塚と杉子がなげきそめしより、愁腸なほあらたまりて、

日の影のかなしく寒し發句塚　史邦

「笈日記」にも、

十二日（元祿八年三月十二日）は阿叟の忌日つとむるとて、桃隣をいざなひて、深川の長溪寺にまうで侍る。是は阿叟の生前に賴み申されし寺也。堂の南の方に、新の一簣の塚をきづきて、此塚を發句塚といへる事は、

世の中はさらに宗祇のやどり哉　翁

此短冊を此塚に埋めけるゆゑなり。此ほつ句ははせを庵の一生のむゐなるべしと杉風のぬし語り申されし。

云々

是等の記事によれば、時雨塚ははじめ發句塚と云づて居つたやうである。時雨塚とは宗祇の時雨に感じて作つた句を埋めたので、後人の名けたものであらう。短冊塚は自筆の短冊を埋めた所から云はれたのであらう。山下氏の「大日本名所圖會」に「府內備考」の說を引いて、芭蕉の落齒も埋めたやうにあるが詳かでない。時雨塚は長溪寺の本堂西の墓地內にあつた。私の見た所では門を入つて、本堂の左の中庭少し高くなつた所にあつた。塚は東に向ひ、碑面、芭蕉翁桃靑居士（佐々木文山書）、碑陰、元祿七甲戌年十月十二日とある。なほその左に寶晋齋其角墓、右に玄峰嵐雪居士の墓もあつた。之は寛保三年芭蕉五十回忌に際し、眠柳居麥阿の建立であつた。其他

乙由・眠柳の碑、木戸の入口に霜後・大蕪の碑もある。

畫菊、「六物の記」によれば、素堂の家に藏した水仙と菊の畫中、菊の畫だけ芭蕉に贈つたのである。一體蕉門には畫家が多かつた。許六は畫を狩野永眞安信に學び、狂畫多しと云はれてゐる。破笠は象眼・蒔繪の妙手で、畫は師傳を詳にしないが、狩野派の筆致を備へてゐる。去來は芭蕉の半身像を畫き、氣韻少からず、最も清雅であつた。炭俵の作者櫻井兀峯も畫を狩野永眞憲信に學んでゐる。素堂も畫を好み、狩野家の風があり、畫法を許六に學んだといふ事である（「扶桑名畫傳」）。芭蕉の畫は餘技であつたけれど、「柴門ノ辭」に、「畫はとつて予が師とし、風雅は教へて予が弟子となす。」とあるやうに、許六に學んでゐる。「近世逸人畫史」によると、專ら粗畫で、多くは畫讃であつたさうだ。「翟巣雜纂」に杉風の子孫所藏の芭蕉遺墨の抄錄を載せて、それに萩と月の自畫讃、一蝶畫芭蕉讃（朝顏の畫、朝顏にわれはの句）、許六畫芭蕉讃（瀧に山吹の畫、ほろ〳〵と山吹散るかの句）等が見えた。「書畫便覽」に、「芭蕉畫を能すと。此は門人許六の備筆也。」とあるが誤である。「竹の子や幼き時の繪のすさび」とあるから、芭蕉は幼時より繪を畫いたものと見える。路通の「行狀記」にも、「三七日開ニ翁自畫之像乙州宅ニ云々」とある。素堂の畫菊は何時頃芭蕉に與へたものか、歿後誰の手に渡つたものか詳かでない。序にいふが、芭蕉は書に就いても趣味を持つてゐた。芭蕉が書を北向雲竹老に學んだ事は既に述べた通りで、人から賴まれゝば短冊も書き、畫讃もやつた（許六の「韻塞」の前半に、許六が歸國する時、次郎兵衛を使として、挨拶の手紙や色紙・短冊・繪讃の類を持たせてやつた事が出てゐる）。芭蕉の筆蹟を知るには、蓼太の「芭蕉翁眞

蹟集」・五明の「芭蕉翁三等之文」・成蹊の「栞集」・介我の「風俗文選犬註解」・湖中の「芭蕉翁略傳」・白亥の「俳諧眞澄の鏡」・江三の「むつのゆかり」・大喬の「筆の跡集」、其他「甲子吟行眞蹟本」・「芭蕉翁眞蹟幻住庵記」・「蕉翁さらしな紀行眞蹟敷寫」、雪中庵・松宇文庫に傳へられた短冊・書簡・畫讃等があるが、中には疑はしいものも多く入つてゐて、今日では斯道の特別な鑑定家を要する狀態にあると云つてよい。近頃二三の書の口繪に取られてゐる俗に「朗詠切」といふ芭蕉が素堂の需に應じて、貞享年間和漢朗詠集を淨寫した肉筆物があるけれど、これさへ或人の說には疑はしいと睨まれてゐる。併しとにかく之には古筆了悅の極書まで附せられて、嘉永頃拓本として刊行された。若し之が眞蹟であるとしたら、淨寫は芭蕉庵で行はれたものであらう。香取の本間家に傳はつてゐる著聞集の拔萃も、貞享かそれ以前、芭蕉庵に於ける書寫であらう。本間家の記錄には、芭蕉が「古今著聞集」を讀んだ時、有用の部分を書拔き、本間家へ預けて置いたもので、初は五十枚ほどあつたけれど、追々人に與へて一枚になつた。それも今日はないさうである。句集に、

朝な〳〵手習すゝむきり〴〵す　芭蕉

とあつて、實に草庵の寂びた靜かな空氣が表れて、捨てがたき風韻に富んだ句ではあるが、「一葉集」・「俳句定本」等年代不明の部に入れて、芭蕉作を疑つてゐるやうで詳かでないが、とにかく芭蕉は草庵のつれ〴〵に、讀書もするし、古書も寫すし、習字もやつた事だらうと思はれる。

茶ノ羽折、「六物ノ記」に、

此翁行脚のころ、身にしたがへる羽折あり。五十三驛ふたゝび往來、さらぬ野山をもわけつくし、あるは越路の雪にさらし、あるは八重のしほ風にしみて、離妻が目にも色をわかちがたく、龍田姫もそめかへすによしなからんのみ。これを故郷の錦にもなしけるやとをかしくまたあはれならずや。勢州山田が原の三四とかやひとたび見て、素堂素ならず、眼くろし。茶の羽折とはよくも名づけける。茶とも何とも名づくべきもんたひなしとて與に入ぬ。云々

とある。隨分よごれくさつた古羽折だつたと見える。一體芭蕉は茶色を好んだやうだ。「老の樂」に茶の紬八徳を着た事があり、「花屋日記」に淨衣を智月と乙州の妻が縫ふ條下に、「翁はいかなる事にや、兼て茶色衣裳こそよけれと、すべて茶色を召されければ、云々」ともある。「隨齋諧話」に、「越後國高田今町聽信寺一向宗に芭蕉行脚の頃の常服を藏す。地は紬のやうにて鼠色、云々」とある。茶の羽折も恐らくかゝる類の服であらう。なほ芭蕉は伊賀上野梢風尼から俳諧袖（「隨齋諧話」出、右の袖左より一寸短し。）といふ衣服を作つて貰つたり、嵐雪の妻から小袖を贈られたり（句集）、杉風から夏衣を貰つて嬉しかつたり（句集）、衣服・調度すべて人から贈られたのであるから、此羽折も誰れかに贈られたものであらう。

芭蕉庵は一間のやうであつた。六疊（支考の「續五論」に、「ばせを庵六疊敷の冬ごもりと見え侍るか。云々」とある。）と傳へられてゐる。「俳人芭蕉」に、「深川の邊に淨求といへる道心あり。愚智文盲にして、正直一遍の者也。常に翁に仕へて、小さき庵を得たり。朝夕芭蕉庵の茶を煑ること妙なり。云々」とあるが詳かでない。淨

求の名は許六が芭蕉に入門する時、「一座に桃隣・淨求法師なり。云々」とあるから慥かであるが（俳諧問答抄自讃之論上）、常に芭蕉の許に仕へたかは明かでない。「俳諧十論發蒙」（寫本。撰者未詳。俳諧十論の註書。奥書に明和六丑の夏四月於東山岡崎の庵にて蝶夢書之とあるが疑はしい。蝶夢の二字を後から筆でなすつてあり、且つ署名捺印が蝶夢とは讀めない。それに書中芭蕉の素生を云うてゐる條下の註に、「三十歳の年孫太夫といへる傍輩に短冊を殘し出奔す。云々」とあるが、三十歳といふと延寶元年に當り、「繪詞傳」の寛文六年秋の末の出奔と記事が合はない。なほ註に、年を經て探丸罪を許し、對面の時、樣々の事思出す櫻かなの句に、翁腸して、春の日長く云々と言つたとあるが、之も「繪詞傳」には、罪を許すなどといふ記録はなく、樣々の櫻の句が芭蕉ので、探丸が、春の日早く云々と附けた事になつてゐる。）に、十論の文、「此論をも朝暮三が評のまゝに、云々」とある註に、「芭蕉庵の小童也。名は莊子狙公の朝三暮四の事也。童子發句あり。「も一臼聞て寢ばや餅の音、翁賞給ふ。」とあるが、果してかゝる小童を使つて居つたか詳かでない。其角の「五元集」に、「芭蕉庵の沙彌かけものほしかりて、繪讃を乞けるに、せめてもの貧乏柿にうめの花」とある所を見ると、小童を使つてゐたやうにも思はれるが、支考の朝暮三は假託の名らしく、或は芭蕉の沙彌を朝暮三といふ假名にして、十論の註者に捏造したのかも知れない。「雪丸げ」に、「曾良何がしは、此あたり近くかりに居をトて、朝な夕なに訪つどはる。我くひ物いとなむ時は、柴折くぶるたすけとなり、茶をにる夜は來りて軒をたゝく。性陰閑を好む人にて、まじはりこがねをたつ。ある夜雪にとはれて、君火たけよき物みせむ雪丸げ」とあるから、曾良も臺所の手傳ひに來たものと見え

る。之は貞享三年頃の事であらう。又其頃深川八貧と題して、芭蕉・依水・苔翠・泥芹・夕菊・友五等相寄り、各自題を探り、閑談に耽つた事もあつた。

米買に雪の袋やなげ頭巾　芭蕉
雪の夜はとりわき佐野の薪買はん　依水
さけやよき雪ふみたてし門の前　苔翠
炭一升雪にかざすや山折敷　泥芹
雪にかふはやしごとせよちやん袋　夕菊
手にすゑし豆腐を照せ雪の月　友五

雪の夜の買物もつらいが、情景手に取るやうに見えて面白い。蕪村がこれを眞似て、貧居八詠を作つてゐるが、實情の素朴さが表れてゐないから、佗しい生活が迫つて來ない。

芭蕉は酒を飲んだ。それは句集・手紙其他を見ればよく分る。例へば

憂方知二酒聖一貧始覺二錢神一

花にうき世我酒白く食黒し　（天和三）

元起和尚より酒をたまはりけるかへしにたてまつりける

水寒く寝入かねたるかもめかな　（貞享三）

○

只今田舍より脩達二三人參候。俄に出し可申貯無之候。さふく候故にさうめんいたし可申候。そうめんは澤山有之候。酒二升御こし賴入候。さかなはつぶ納豆茶碗ニ入、貴樣御出候而世話賴入申候。其次手ニ引合せ可申候。はや〳〵御出まち入候。以上

二日　　　　はせを

かふじや茂作樣

（「一葉集」、年代未詳）

○

宵のとし空の名殘をしまむと、酒のみ夜ふかして、元日寢わすれたれば、

二日にもぬかりはせじな花の春　（貞享五）

尾張の人より淡酒一樽、木曾の獨活茶一種送りしを、門人にひろむるとて、

飲明て花生にせむ二升樽　（元祿四）

○

唐の蒔繪書たる五重の器に、さま〴〵の菓子を盛り、名酒一壺、盃そへたり。（元祿四、「嵯峨日記」）

併し其角の大酒を戒めた「飲酒一枚起請」（天和二）も傳はつてゐる位だから（僞作說もある）、大酒ではなかつ

た。これは體が弱いためでもあらうが、一面には愼み深かつたのである。酒を飮むと寢られない夜もあつた。支考の「本朝文鑑」に、閑居ノ箴と題して、

あら物ぐさの翁や。日比は人の訪ひ來るもうるさく、人にまみえじ、人をも招かじと、あまたび心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ、友の慕はるゝもわりなしや。物をも言はず、ひとり酒飮みて、心に問ひ、心に語る。庵の戶押明けて雪をながめ、又は盃を取りて筆を染め、筆を捨つ。あら物ぐるほしの翁や。

酒　飮　め　ば　い　と　ゞ　寢　ら　れ　ね　夜　の　雪　（貞享三）

などとある。最後のは芭蕉庵の雪夜である。

初雪を喜んだのも其頃であつた。「續深川」に、

我草の戶の初雪見むと、よそにありても空だにくもり侍れば、いそぎ歸ることあまたびなりけるに、師走八日初て雪ふりけるよろこび、

は　つ　雪　や　幸　庵　に　ま　か　り　在　り　　芭　蕉

芭蕉は童心の持主であつた。此無邪氣さ、此純眞さが詩人に尊いのである。其他草庵生活を表すべき句を少しあげて見ると、

芭　蕉　野　分　し　て　盥　に　雨　を　聞　夜　哉　（天和元）

艪　の　聲　波　を　打　て　腸　氷　る　夜　や　な　み　だ　（同　）

朝顔に我は食くふをとこ哉　（天和二）

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり　（同　）

古池や蛙飛こむ水の音　（貞享三）

觀音のいらかみやりつ花の雲　（同　）

年の市線香買に出ばやな　（同　）

花の雲鐘は上野か淺草か　（貞享四）

蓑蟲の音を聞にこよ草の庵　（同　）

名月や池をめぐつて夜もすがら　（同　）

蕣や晝は錠おろす門の垣　（元祿五）

侘しい生活だが、悠々自適の樣はよく表れてゐる。如何に芭蕉は物質生活に欲望が少なかつたからと云つても、住居から衣服・調度・食物・金錢に至る迄、他人から貰つて置きながら、着物を洗つてくれ、糊を少し附けてくれ、人が來てむだ書したから、紙を屆けてくれ、次手に酒も賴む、旅行したいから金を借せ、但し返せないかも知れぬから承知してくれなどと、隨分放縱な勝手な事を言つてゐる。今日の社會意識から見れば乞食である。之には芭蕉も感慨無量だと見え、

乞て喰、貰うてくらひ、さすがに年のくれければ、

めでたき人の數にもいらむ老の暮　（貞享二）

栖去之辨

こゝかしこうかれありきて、橋町といふ所に冬ごもりして、睦月・きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢむとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや。風雅の魔心なるべし。なほ放下して栖を去り、腰にたゞ百錢をたくはへて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情終に菰をかぶらんとは。（小文庫、元祿五年作か）

と述懷してゐる。芭蕉だつて、「金なき者は行路難しといひけむ人のかしこく覺え侍る。」とか、或は「貧始覺二錢神一」とか言つてゐるのだから、つくぐ貧乏はいやに思うてゐるものゝ、此一筋につながつてどうもならず、社會生活を捨てゝ、自己の感情生活に殉じて了つたのは、傷ましくもあるが、又尊い氣もするのである。

芭蕉庵の食物、之又簡素恬淡であつた。山店が閑居のつれぐを慰むべく芹の飯を持つて來た事は句集に見えてゐる。又黑豆・納豆などを人に請求した事も手紙の中にある。餅も菓子も蒟蒻も好きのやうだつた。闌更の「俳諧世說」によると、加賀の金澤の小春亭に夜會があつて、その席の饗應山海の珍味を並べたので、會後芭蕉は大名のお成りのやうで、風雅の寂びがないと一同を戒めたとあるが、芭蕉の言ひさうな事である。「隨齋諧話」に、元祿七年八月十五日、芭蕉の家兄松尾氏の後園に無名庵を營んで、その入庵の献立の寫しが出てゐるが、即ち

八月十五夜

煎物　生姜
　　　麩
　　　蒟蒻
　　　木茸
　　　里いも
　　　　　　　　吸物　ゆつかみ豆腐
　　　　　　　　　　　しめじ
　　　　　　　　　　　茗荷

中猪口　もみうり
　　　　くるみ
　　　　しぼり汁
　　　　すしやうゆ
　　　　すり山の芋

肴　人参
　　やき松茸
　　くわし　柿

吸物　松だけ
冷飯　とり肴　芋煮入
さけ

とある。二汁、五菜に點心が添へてある所は、芭蕉の會食としてはけだし最上の料理であつたらう。

芭蕉は德の人であつた。德望があつたからこそ、人も許し、自分も勝手に振舞へたのである。芭蕉は古今獨步である。

第二節　芭蕉の參禪

一、根本寺と鹿島神社の訴訟事件

芭蕉と根本寺の住職佛頂禪師との關係に就いて、山崎氏は臨川寺の寺說を引き、佛頂は根本寺と鹿島神社の爭論解決のため、延寶より貞享に至る迄、凡十二年間深川に滯留した。芭蕉の參禪はその頃であると論じてゐるが、大正二年七月「にひはり」に、樋口氏の「根本寺と佛頂和尙」といふ論文が出て、此關係はやゝ明かになつた。氏の論は「佛頂和尙出入留寫芭蕉翁眞筆」といふ寫本によつて、（原本は根本寺にあるさうで、それを京都東山雙林寺芭蕉庵主岩井氏か人をして寫させたもの）考證したのである。其說の大要は次のやうである。

訴訟の主意は大宮司家と根本寺との權衡爭ひである。寺記によると、根本寺は推古天皇の頃聖德太子勅を奉じて建立した寺であつた。德川以前は常陸の國主佐竹氏から寺領として二百三十石を貰つて居つた。その當時鹿島神社は五百石を領してゐた。根本寺は其後一時無住となり、維持困難に陷つたが、南化國師の時鹿島神領の內から百石だけを根本寺領として貰ふ事になつた。南化國師の弟子天柱なる者が住職になつた時、寺領を神領の外から貰ひたいと出願したが許されなかつた。佛頂の前住冷山の時になると、大宮司から社下の各寺の住職は轉任の際、後住を自分で定めてはならぬ、年頭節句には各寺から社家に出仕し、且つ何事も社家の下知を受ける事とい

ふ條件を呈出されたが、冷山は之を斷り、その旨幕府へ訴へた。其結果根本寺は別に建ち來つた寺であるから、先規通り自今以後やつて差支へないといふ判決があつた。冷山は延寶二年十月十八日遷化された。然るに其後任に佛頂がならうとした時、大宮司家から拒絶して來た。そして大宮司は直に江戸へ上り、裁許を仰ぎ、十一月九日根本寺領を半知の五十石に減らさせて了つた。佛頂大に憤り、其理由なき旨を幕府へ訴へたけれど却下された。併し佛頂之にひるまず、再三再四愁訴し、遂に天和二年六月二十七日の判決により、大宮司は三百六十石の內百六十石召上げられ、根本寺は本知百石に復する事になつた。之は半知に減ぜられた延寶二年から九年目である。佛頂は訴訟事件が片付くと、後住に龍鐵といふ人を推し、飄然として隱居して了つた。

芭蕉翁眞筆といふ出入留が、どの程度迄信じられるか分らないが、大體佛頂の江戸へ來た事情は分らうと思ふ。

二、芭蕉と佛頂

一體佛頂號の僧には古來四人あつた。卽ち行嚴(天台宗)、佛頂房、永承頃の人。賴舜(眞言宗)、佛頂房。一絲(禪宗)、江州永源寺の住僧。岩倉具堯の三男。加茂の靈源寺、丹州法常寺の開基。澤庵に參し、後京の愚堂に見え、印記を受く。後水尾法皇の寵を蒙り、壯年にして在世佛頂國師の號を賜はる。正保三年三月十九日寂。年三十九。次は根本寺の佛頂である。然るに後世多くの學者は根本寺の佛頂を永源寺の佛頂國師と誤信してゐるやうであつた。猿左の「竹原ひじり」(寬政八年山露庵文兆跋)の序に、

今世海內言俳諧者、莫不以翁爲師、翁參佛頂國師一絲和尙、頗有得于禪、故其片言隻句亦自然有餘味。云々

とあるは其一例である。正保三年に死んだ佛頂に、正保元年に生れた芭蕉の參禪する道理はない。芭蕉の佛頂は佛頂國師一絲和尚でない事は明かである。吉田氏の「大日本地名辭書」にさへ芭蕉の佛頂を永源寺の佛頂と誤まられてゐる。

前章に述べた如く、芭蕉は佛頂に師事せぬ前に、江戸中ノ鄕定林院の默宗和尚に參したり、盤桂禪師が天祥庵に往來した時、隣をトして棲んだとか、或は在京中佛法を南禪寺の塔頭某和尚に學んだとかいふ異說があつた。是等の說の眞僞は今しばらく措き、芭蕉が佛頂に學んだ關係に就いても頗る說が多かつた。魯庵の「桃靑傳」は次のやうな說をあげてゐる。(イ)、芭蕉は默宗の紹介で、臨川寺の佛頂和尙に敎を受けた(桃靑寺日記)。(ロ)、佛頂しば／＼江戸へ來り、深川陽岩寺に留錫した時、はじめて芭蕉が參禪した。(ハ)、臨川寺開創の後芭蕉が參禪した。(ニ)、參禪は佛頂が深川長慶寺在住の時である。(ホ)、臨川寺はもと臨川庵と云つて、芭蕉所住の庵號である。其頃根本寺に九年間繼續した訴訟事件があつて、佛頂は之がためしば／＼上府し、毎に芭蕉の臨川庵を旅宿と定めて禪を談じた。以上の說はその原の典據を詳にせぬものが多いけれども、(イ)は默宗と佛頂との關係が詳でない以上信ずる譯には行かない。(ロ)は陽岩寺といふ寺は深川にはないやうである。陽嶽寺なら富岡橋の北詰にあつて、妙心寺派の禪寺である。併し佛頂が陽嶽寺に住んで居た記錄は他に見當らないから、之も遽に信じられない。若し又之が靈岸寺の誤であるとしたら、靈岸寺は天和の繪圖にも見えて、淨土宗關東十八檀林の一で、禪宗ではないから、佛頂の掛錫はなほ更信じられない。(ハ)の說もどうかと思ふ。天和の繪圖を見ても、ヒ

キコミ丁あたりに寺らしい家は見えない。恐らく當時は草庵であつたのだらう。「大日本寺院總覽」に、東京案內を引き、「臨川寺は正德三年僧佛順の開基する所、云々按ずるに僧佛順は中興せしものなるべく、云々」とあるが、之は中興ではなく、寺になつたのが正德三年で、佛順の開基であつたのだらうと考へる。(ニ)は史邦の「小文庫」の序にも、「長溪寺の禪師は亡師年頃睦び語らはれけるが、云々」、支考の「笈日記」にも、「是は阿叟の生前に賴み申されし寺也。云々」とあつて、長慶寺と芭蕉との關係の深さを物語つてゐる。或は史邦のいふ長慶寺の禪師とは佛頂を指したのではなからうかと思はれる。卽ち佛頂は臨川庵にも居たり、長慶寺にも住まはれたものと見える。長慶寺は深川區東森下町三七にあつて、蟠龍山と號し、曹洞宗で、越後岩船郡村上耕雲寺の末であつた。寛永七年の創立。開基は德山重政、開山は一空和尚。臨川寺は深川區裏大工町九、本誓寺の西裏、瑞甕山と號し、臨濟宗で、妙心寺派の末である。今は寺內に「道 無心是道 有心是佛 喝」と書いた佛頂の額、飯田海山作の芭蕉木像がある。長慶寺も根本寺も禪宗であるから、佛頂の掛錫はあり得る事である。それに長慶寺は芭蕉庵と程遠くない所にあるから、芭蕉も時折出掛けては禪師と佛道を語つた事もあらう。(ホ)、臨川庵が芭蕉の草庵で、佛頂の旅宿であるといふ說は、未だ他に聞いた事のない說で信ぜられない。臨川庵が芭蕉庵の近所にあり、時には佛頂が芭蕉庵に泊つたり、芭蕉が臨川庵に泊つたりした事などから、かゝる誤傳が殘されたのではあるまいか。

要するに芭蕉が臨川庵や長慶寺に往來して佛頂に禪を學んだ事は事實であらう。士朗の「枇杷園隨筆」に、佛頂に關する芭蕉の手紙(眞蹟松兒にありと)を載せてゐるから參考迄引用しよう。

早春佛頂和尙へ御狀被遣候を、則愚庵へ爲御持越微熟覽仕候處、木兎の角あるけしき先感心仕候上、病床に病と組で勝負を御あらそひ、終に大眼悟哲の勢ひ驚入奉存候。和尙の肝腸いまだしかと探られず候間、重而評判可申進候。和尙にも舊臘は寒ぬるく候故、御持病もこゝろよく、愚庵まで手をひかれて一夕御入、大道の咄し止て、俳諧にて到半夜候。

梅　櫻　み　し　も　悔　し　や　雪　の　花

と御申候、感心致事に候。云々

眞蹟だとすれば面白い材料である。佛頂も俳諧をやり、持病があつたと見える。支考の「爲辨抄」に、「此和尙の在世は天和・貞享の比なり。播磨に盤珪禪師といひ、江戶に佛頂和尙といふ。天下に龍虎の名知識なり。いづれも風雅を稱し給へりとぞ。武城の深川に禪刹ありて、芭蕉庵もそこに近し。」とあるが、佛頂を盤珪と比べて、龍虎の知識と云つた所は、佛頂が芭蕉の師である所から稱揚したもので、實際は佛頂は盤珪ほど有名でなく、むしろ隱れたる知識であつた。何となれば臨川佛頂の名は高僧傳にも佛家人名辭典にも見えないからである。若し佛頂が網干の盤珪のやうに知名な人であつたなら、そんな筈はなからうと思ふ。又臨川佛頂が有名な僧であつたなら、後人が之を永源寺の一絲和尙と誤るわけもあるまい。佛頂は根本寺では有名な僧であつたらうが、社會一般には隱れたる野衲であつたらしい。

退隱後の佛頂はどうしたかといふと、貞享四年秋芭蕉が鹿島へ月見に行つた時、「根本寺のさきの和尙、今は世

をのがれて、このところにおはしけると云をきゝて、云々」とあつて、其時は未だ鹿島に居た。「奥の細道」に、「奈須の雲岸(巖止シト)寺の奥に佛頂禪師山居の跡あり。云々」とあるが、何時こゝへ來たものか分らない。梨一の「芭蕉翁傳」に、「後此雲岸寺に來て、山中に隱栖す。云々」とある。是等に據れば、佛頂は根本寺退隱後しばらく鹿島に居て、後奈須の雲岸寺へ來たやうである。「奥の細道」に、「竪横の五尺に足らぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせばと、松の炭して岩に書き付け侍りと、いつぞや聞え給ふ。云々」とあるから、こゝから芭蕉に便りがあつたと見える。芭蕉が雲岸寺を尋ねた時、佛頂は居なかつた。積翠の「句選年考」木啄も庵はやぶらず云々の句の頭書に、「臨濟派、佛頂和尚は芭蕉の參禪の師、鹿島根本寺の開山也。始は東武深川長慶寺に住す。此等芭蕉參禪佛頂和尚二度此庵に歸りて、正德五年十二月十八日寂す。八十七歲。」とある。之に據ると奈須雲岸寺の庵で死んだと見える。井泉水の「奥の細道贅註」に、師献といふ人の畫いた佛頂の畫像が、雲岸寺に保存され、その贊に「化雲巖精盧」とあるから、雲巖寺で佛頂は入滅されたらしいと言つてゐる。又氏は佛頂の顏を目のしよぼ〳〵した氣むづかしさうな爺さんであると言うてゐるが、晋風の記事によれば、根本寺に保存された佛頂の畫像は眉目清秀な僧であつたと。但し佛頂面といふ語の起源を、此佛頂に附會する說はどうかと思ふ。

第三節　芭蕉庵の燒失

一、燒失の時日

燒失の時日に就いて古來天和二年冬説と天和三年冬説とあつた。天和二年冬説は「菅菰抄」・「芭蕉翁傳」・「一代錄」・「行往略記」・「句選年考」・「次郎兵衛物語」、其他近頃の芭蕉傳悉く之を是とし、天和三年冬説は其角の「枯尾華」の記事を本として、「略傳」・「芭蕉翁全集」・「春秋」等之に從つてゐる。私はやはり天和二年冬説がよいかと思ふ。「武江年表」に據ると、此火事は天和二年十二月二十八日駒込大圓寺から出て、本郷・下谷・神田・日本橋・淺草・本所・深川に迄延燒した大火であつた。「虛栗集」に、

烟の中に年の昏けるを

かすむらん火々出見の世の朝渚　似春

とあるは、卽ち天和二年十二月の火事の慘害を云つたものである。似春は小西氏、當時恐らく本町に住んでゐたものだらうから、其附近の河岸の狀況を詠んだのであらう。天和三年冬燒失とすると、第一芭蕉庵再興の天和三年九月の素堂勸化文が變になる。次に燒失後甲斐へ行つて、五月江戶へ歸つて來た事も貞享元年となり、同八月には甲子吟行と出かける事になつて、芭蕉庵再興の時日と合はぬばかりでなく、否芭蕉庵へ入らぬとしても餘り

あはたゞしくて信ぜられない。「枯尾華」の文章は其角の闊達な氣象で、事實の校合などは考へて居ないやうだから當にならない。例へば芭蕉野分の句は天和二年三月刊の「武藏曲」に出てゐるに拘らず、其角は之を貞享元年秋の句にして出してゐる。寥松の「行住略記」にも、「今年(天和二年)冬十二月芭蕉庵燒亡す。此回祿の事は其角が終焉の記に三年と出しより大方の書三年とす。しかれども二年たる事正しき證有。こゝに略す。三年と書しは其角が誤也。」と斷じてゐる。素蓮は「春秋」に之を駁して、「恐ラクハ寥松・梨一等ノ誤說也。天和元年草庵造立シ、同三年燒亡アリテ、芭蕉ノ薄命ノ程モ知ラレ、實ニ玉ノ緒ノハカナサモ思ヒ遣ル。云々」と論じてゐるが、之は其角の美文を過信した結果であらう。

二、悟發といふ說

草庵燒失には芭蕉も余程困つたと見え、北枝の火難に同情した手紙にも、「池魚の災承り、我も甲斐の山里に引うつりさまゞゝ苦勞いたし候へば、御難儀のほど察し申候。云々」とあるのでよく分らう。「次郎兵衛物語」に、芭蕉の直話として、川に飛込んだ所、火が波の上を這つてくるので、流れ寄つた古菰を以て火を拂つてゐるうち、菰に火が附いたので捨てゝ了つた。頭だけ出してゐると、顏に火が吹きかけるので、頭を出したり、浸けたりした。はじめは寒さを感じなかつたが、後には凍へ死にさうになつた。やがて下火になつて來たから、淺い所へ寄らうとすると、足がフラゝゝして步けない。後先を見廻すと、道具や人が澤山流れて來る。自分は首にかけた出山の佛を念じ、觀音經を誦してゐると、大い櫃のやうなものが二つ三つ流れて來たので、それにつかまり、やう

やく淺みに這上つたら、誰れかが引上げてくれたとあるが、うまく想像化したものである。魯庵の「桃青傳」によると、天和三年春正月、江戸に霖雨・大洪水があつて、葛飾は一圓湖水となつた。芭蕉は前年火に會ひ、更に此水害に苦しめられたとあり、「次郎兵衛物語」にも、去年（天和三年）の水難以來芭蕉は癪氣なほ又起り云々とあるが、例へ水難があつたにせよ、芭蕉は葛飾附近に居る筈もなからうから、それがため苦しめられたとか、或は病氣になる譯もあるまいと考へる。「枯尾華」に、芭蕉の火難に就いて、「是ぞ玉の緒のはかなき初め也。爰に猶如火宅の變を悟り、無所住の心を發して云々」と巧に書いてゐるが、是が玉の緒のはかなき初めであるかどうか分るものでもなければ、今更眼の覺めたやうに、猶如火宅の變を悟り、無所住の心を起して、旅立つやうな芭蕉でもあるまいと思ふ。當時たま〳〵芭蕉が佛頂會下に參し、正念工夫を凝らして居つた時だから、其角が猶如火宅云々の法語を以て、芭蕉の心理を美文的に想像したのであらう。山崎氏は甲州行を此悟發に基くものと考へて居るやうだが、それは其角の想像を正直に取つた謬見であらう。今頃悟發などといふべき苦勞の足りない芭蕉とは考へられない。芭蕉の甲州行は宗教的の悟發でなく、物質的に困り切つた結果である。今迄世話になつた卜尺や杉風の家も燒けて了つた。それに又暮の事で、燒出された人の世話にもなつて居られないといふやうな所から、甲州へ一先づ立退く事にしたのであらう。「次郎兵衛物語」によると、次郎兵衛が江戸の大火を聞き、天和三年正月六日伊賀の上野を出立し、十一日の暮江戸へ入つて深川へ來て見ると、殘らず燒けて了つてゐる。芭蕉庵は何處だらうと人に問うたけれど知る者はない。あちこち探してる中に醫者らしい人に逢つた。聞くと、芭蕉翁の事な

ら二本榎の上行寺に避難してゐると教へてくれたなどと面白く作つてゐる。醫者に逢つたと云つて暗に其角を利かし、その菩提所なる二本榎の上行寺を捻出する所など、脚色も巧なものである。

三、甲州行

燒け出されてすぐどこへ避難したものかそれは分らない。又そのまゝ甲州へ赴いたものか、或はしばらく知人の厄介になつてゐて、春になつて甲州へ行つたものかそこも分らない。去留の「全集」によると、駿河臺中坊家の屋敷に寓居したのは此時であらうとあるが、恐らく之は芭蕉庫の記事中の年數によつて推定したのだらうが詳かでない。湖中の「略傳」に、「此年(天和三年)の冬深川の草庵急火にかこまれ云々。其次の年佛頂和尚の奴六祖五平といふものゝ情にて甲斐に至り、かの六祖が家に冬より翌年の夏まで遊ばれしとぞ。」とある。此文意は天和三年の冬から貞享元年の夏迄滯在といふ事であらうが、此年の冬云々と云つて、其次の年とあると、天和四年(貞享元年)五平の情で甲斐に至り、同年冬から貞享二年の夏迄居たやうに思はれて、甚だ紛らはしい書方と云はなければならぬ。「春秋」には、「五月甲斐ニ行脚シ、六祖五平ガ家ニ止錫。」とある。之は「枯尾華」の、「其次の年(天和四年)夏の半に甲斐が根にくらして、富士の雪のみつれなければ、云々」とある文から推して、旅行を夏としたやうであるが、諸書五月迄滯在とあつて、五月行つた事にはなつてゐない。例の「次郎兵衛物語」は甲州行とせず、天和三年朝鮮人來朝の事があるので、燒失した神社・佛閣・武家・町家の造作を急ぐやうに申渡され、深川邊は五六十日で大半建直つた。芭蕉庵も四十四五日には引越された。併し芭蕉は中橋の沽徳、茅場町の其角、

本所の素堂、堀江町の不卜、呉服町の調和、濱町の嵐雪等へ招かれ、庵に歸る事は稀であつた。自分(次郎兵衛)も庵の留守をつとめ、四月伊賀へ歸り云々とあるが、小說らしく信じられない。

甲州行は何人を頼みにしたか、異說多く一定しない。通說は六祖五平を頼つたとある。成美の「隨齊諧話」に、

> 芭蕉深川の庵池魚の災にかゝりし後、しばらく甲斐の國に掛錫して、六祖五平といふものをあるじとす。六祖は彼もののあだ名なり。五平かつて禪法をふかく信じて、佛頂和尙に參學す。彼者一文字だにしらず。故に人呼で六祖と名づけたり。はせをも又、かの禪師の居士なれば、そのちなみによりて、宿られしと見えたり。云々

とある。之に據れば五平は甲斐の產と見える。佛頂の奴僕とあるから、臨川庵往來の時、芭蕉と知合ひになつたのだらう。又湖中の「略傳」に一說として、

> 一說に、甲州の郡內谷村と初雁村とに久しく足をとどめられし事あり。初雁村の等力山萬福寺といふ寺に、翁の書れしもの多くあり。又初雁村に杉風が姉ありしといへば、深川の庵燒失の後、かの姉の許へ、杉風より添書など持れて行れしなるべしと云。

とある。郡內とは「略傳」に、自書云、甲斐の國郡內と云所に至る途中の苦吟、「夏馬ほく／＼我を繪に見るこゝろ哉」とあるから、此時の旅中吟と思はれるけれど、「句選年考」に、或人の家藏眞蹟の書翰にとあつて、「木曾路にて發句の事、此度は日數の間も無之故、發句も二三句ならでは致さず候。其くせ不出來に候。漸く淺間邊に

て・馬ほく／＼我を繪に見る夏野哉・此句ばかりかと存候。云々。柏水丈　はせを」の文を掲げてゐる。又松琵の「水の友」（享保九年刊）には畫讃と題して此句が出てゐる。考へると郡内途中の吟を直して、後に淺間旅行の吟にして了ふ事も變だし、甲州行の次手淺間へ廻つた證左もないし、かた／＼郡内途中吟があやしくなる。畫讃の方は昔作つた句を繪にあてはめて題する事もあらうから、年代に關係もなからうが、旅中吟はさうは行かない。因に此句は「赤双紙」に、「はじめは夏馬ほく／＼我を繪に見る心かな」とあり。後直るなり。云々」とあるが、「一葉集」には、夏馬の遲行我を繪に見る心かなとある。白亥の「眞澄の鏡」に、高山麋塒の子の記として、「亡父幻世（高山傳右衛門繁文、俳名麋塒、後に幻世と改）懇にて、甲州郡内谷村へも度々參られ、三十日或は五十日逗留す。又ある時は一晶など同道す。云々」とある。之に據ると郡内は麋塒の郷里であつたやうに思はれる。「一葉集」に麋塒・一晶・芭蕉の三吟歌仙が二卷出てゐるが、之は芭蕉庵燒失後郡内へ行つての作であるか、或はそれ以前の作であるか分らないが、郡内が芭蕉とかゝる關係の土地であるとすると、甲州行は郡内の高山氏を便つたとも考へられよう。初雁村に杉風の姉がゐるといふ說は詳かでないが、若しさうだとすれば、燒け出された後の一時の寓居には都合のよい所であらう。又「一代録」に、「甲州都留郡郡内谷村と云所に、白瀧とて名高き名所有。久住といふ人にいざなはれて、彼所に寓す。勢ひあり山家も春の瀧津魚　芭蕉。久住は磯部源左衛門と云御旗本也。知行四百八十石。爰に枕して遊歴ありとなん。云々」ともある。郡内には多く知人があつたと見える。去留の「全集」に、「七月（延寶九年）再び富士に登り、冬の半まで吉田谷村に滯留し、甲斐國を遊歴あり。富士の自

畫讃に、雲霧の暫時百景を畫きけり。甲斐に遊び、山中にて、山賤のおとがひ閉るむぐらかな。谷村の白瀧、勢ひあり氷柱消ては瀧の魚と聞えたるは此時の事にや。」とある。雲霧の句は「芭蕉句選拾遺」に、百景をつくしけりとあり、勢ひありの句は麥水の「新虚栗」に、氷消てはとある。山賤の句は甲斐山中と題して、「續虚栗」に出てゐるから、貞享二年夏甲子吟行の歸途甲斐遊歴の吟であらう。

四、芭蕉庵再建

天和三年五月芭蕉は江戸へ歸つて來た。山崎氏・樋口氏は芭蕉の歸庵を其角の招請によるやうに言うてゐるが詳かでない。江戸へ歸つた芭蕉は直に芭蕉庵へは入らなかつたやうだ。越人の說(「鵲尾冠」、新年ふるき米五升の芭蕉の句の說明)に、「芭蕉江府船町の囂にうみ、深川泊船堂に入られ、云々」とあるのは、一時本船町のト尺の許に厄介になつて居た事を示すものではあるまいかと思ふ。芭蕉が燒野の舊草に庵を結ぶやうになつたのは九月過ぎであらう。成美の「隨齋諧話」に、「上野館林松倉九皐が家に、芭蕉庵再建勸化簿の序、素堂老人の眞蹟を藏す。所々蟲ばめるまゝをこゝに寫す。九皐は松倉嵐蘭が姪孫なりとぞ。」とあつて全文を出す。

〇〇(虫クヒ)を庵裂て、芭蕉庵を求〇(虫クイ)を二三生にたのまんや。めぐみを數十生に待んや。廣くもとむるは、〇(虫クイ)つて其おもひやすからんと也。甲をこのまず、乙を恥ル事なかれ。各志の有所に任スとしかいふ。これを淸貧とせんや。はた狂貧とせんや。翁みづからいふ、たゞ貧也と。貧のまたひん、許子の貧。それすら一瓢・一軒のもとめ有。雨をさゝへ、風をふせぐ備なくば、鳥にだも及ばず。誰かしのびざるの心なからむ。是草堂建立の

より出る所也。

天和三年秋九月、緇波願主之旨、濺筆於敗荷之下、　山素堂

次に寄附した五十三人の芳名、金高、物品等を列記する。併し此文は「素堂文集」掲載の文と少しく異なつてゐる。今参考迄にあげる。

芭蕉庵裂て、芭蕉庵をもとむ。力を二三生にたのまんや。めぐみを數十生に待んや。おもふに廣くもとむるはかへつて其おもひやすからんと也。甲をたのまず、乙を恥ることなかれ。各志の有所に任すとしかいふ。堂なるの外また何をか求めん。これを清貧とせんや。はた狂貧とせんや。翁みづからいふ、たゞ貧也と。貧のまた貧、許子の貧。それすら一瓢・一軒のもとめ有。雨をさゝへ、風をふせぐ備なくば、鳥にだも及ばず。誰かしのびざるの心なからんや。是草堂建立のより出る所なり。

天和三年秋九月、潜波願主旨、濺筆於敗荷下　山素堂

とある。轉寫の誤であらう。文は素堂の筆らしく、僞作とは思はれないが、寄附者中不卜・嵐雪・嵐蘭・文鱗・山店の名は見えても、卜尺・杉風の見えないのはどうした事か。嵐蘭の破扇一本、山店の二尺四五寸の竹などは振つてゐるが、零細の物でも平氣で出してる所は面白い。勸化薄の內容は瓊音の「芭蕉全集」の口繪に出てゐるから略した。又芭蕉庵の內部の狀に就いても省筆した。

第四節　天和に於ける芭蕉の俳諧

一、武藏曲(むさしぶり)と虚栗集(みなしぐり)

天和二年三月千春の「武藏曲」が出た。季吟の序に、五條の翁とあるから、季吟さへ芭蕉を翁と言つて尊んだといふ説もあるが、それは貞德の事で、芭蕉ではない。

「武藏曲」はやはり前時代の風を踏襲してゐる。即ち前時代に於て桔窟・晦澁な漢語調を見るやうに、古事の奇拔な飜案を見るやうに、物附の道化た洒落を見るやうに、神仙・妖怪の幽玄趣味を見るやうに、「武藏曲」に於てもまだ其域を脱してゐない。例へば

風の愛三線の記を和らげて。　卜尺
梧桐の夕孺子を抱イて　似春
孤村遙に悲風夫を恨ムかと。　昨雲
無レ情(カラン)人秋の蟬(ぬけがら)　嵐蘭

の如き漢語調の句があるかと思ふと、

捨杭の精かいとり立り　素堂

行脚坊卒都婆を夢の草枕。　芭蕉
陽炎の形をさして神なしと　麋塒
紙鳶に乗て仙界に飛。　暁雲
猫口ばしる荻のさは〳〵　素堂
朝顔に齋まつりし鼬姫。　言水
城主に靈の蜜柑献する　嵐蘭
或卜に火あての鰹生かへり　峡水
旅小刀の吼脫けて行。　暁雲
今其とかげ金色の王　峡水
袖に入る蟷螂夢を契りけん。　芭蕉

などの奇々怪々の幽玄句もあり、又

豊さわぎ院に日待をもよほされ。　芭蕉
雪ものぐるひ筆を杖つく。　卜尺
松髪の祖父蔦上下に出立て。　麋塒

の如き比喩やもぢりのふざけた洒落も交つて、要するに正風には距離の遠い過渡時代の観がある。

書中芭蕉の發句六句を見る。

梅柳さぞ若衆哉女かな　芭蕉翁桃青

郭公まねくか麥のむら尾花　同

夕顔の白ク夜ルの後架に紙燭とりて　同

侘てすめ月侘齋がなら茶歌　同

茅舍の感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉　同

深川冬夜の感

櫓の聲波をうつて腸氷ル夜やなみだ　同

桔窟な弊はあつても、前時代のより餘程落着いて來たやうである。野分でも、櫓の聲の句でも、生活の侘しさはよく表れてゐる。

本書は藤匂子・千春・其角の三吟歌仙一卷、千春の獨吟歌仙一卷、麋塒・千春・卜尺・曉雲・其角・芭蕉・素堂・似春・昨雲・言水等の百韻一卷及び發句五十余句を收めてゐる。百韻の表だけあげて見る。

錦とる都にうらん百つゝじ　麋塒

壹花ざくら二番山吹　千春

風の愛三線の記を和らげて　卜尺
雨双六に雷を忘るゝ　曉雲
宵うつり盞の陣を退りける　其角
せんじ所の茶に月を汲　芭蕉
霧輕く寒や溫やの語ヲ盡ス　素堂
梧桐の夕孺子を抱イて　似春

（下略）

天和三年五月其角の「虛栗集」が出た。序は其角の貧交行の戲序、跋は芭蕉鼓舞の書である。卷中發句四百餘、其角・藤匂子・嵐雪・杉風・嵐蘭・李下・楊水・才丸・芭蕉等の句が目に付く。宗因の句も二句出、素堂の荷興十唱も見える。連句は芭蕉・一晶・嵐雪・其角・嵐蘭歌仙一卷、藤匂子・其角兩吟歌仙一卷、千之・其角兩吟歌仙一卷、擧白・其角・松濤二十五句一卷、翠紅・才丸・一晶・其角・罔兩歌仙一卷、嵐雪・其角兩吟歌仙一卷、楓興・其角・柳興・長吁歌仙一卷、才丸・子堂・其角三吟歌仙一卷、李下・其角兩吟歌仙一卷、其角・芭蕉兩吟歌仙一卷、其他三ツ物、漢句等を收める。

發句は大體次のやうな調である。

改正

禮者敲レ門ヲしだくらく花明か也　幻吁

花申せ吉野三味線國栖鼓　才丸

在原寺ニて

美男村の柳はむかしを泣せけり　鼓角

雨花ヲ咲て枳殻の怒ル心あり　欒堺

山彦と啼ク子規夢ヲ切ル斧　素堂

我句人しらず我ヲ啼クものは子規　其角

醉登二階一

酒ノ瀑（タキ）布冷麥の九天ヨリ落ルナラン　同

人何ヲカ土（ナマ）肉（コ）の無（ヌ）爲（ラリ）ナル貌（カタチ）　楊水

前時代の枯寤な漢語調は、依然として全卷を覆ひ、自然の擬人化は、一層艶な洒落に進んでゐる。併し中には稀に見る佳作も入つてゐる。例へば

傘にねぐらかさうやぬれ燕　其角

惜レ花不レ拂レ地

我が僕（ヤツコ）落花に朝寐ゆるしけり　同

蚊をやくや褒姒が閨の私語　　同

一品の宿坊にて

日蓮よ梢に蟬の鳴時は　　同

月を語レ越路の小者木曾の舟　　同

松風の里は籾するしぐれかな　　嵐雪

はぜつるや水村山郭酒旗風　　同

十月ノ蟋

きり〳〵す鼠の巣にて鳴終りヌ　　同

浮葉巻葉此蓮風情過たらん　　素堂

冬枯の道のしるべや牛の屎　　卜尺

芭蕉の發句をあげる。

ほとゝぎす正月は梅の花咲り　　芭蕉

うぐひすを魂にねむるか嬌柳（タヲヤナギ）　　同

青さしや草餅の穂に出つらん　　同

雪の鰒（フク）左勝水無、月の鯉　　同

椹や花なき蝶の世すて酒　同

和ニ角蓼螢ノ句一（草の戸に我は蓼くふ螢かな　其角）

あさがほに我は食くふをとこ哉　同

三ケ月や朝顔の夕べつぼむらん　同

憶ニ老杜一

髭風を吹て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ　同

手づから雨のわび笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどり哉　同

貧山の釜霜に啼聲寒し　同

夜着は重し呉天に雪を見るあらん　同

茅舍買レ氷

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり　同

芭蕉はしみ〴〵する感情を持つてゐた。自己の侘しい生活を表現すべく、未だ漢土の古典趣味に囚はれた點はあつても、花なき蝶の世捨酒と觀じたり、或は朝顔に活きる寂しい男だと言つたり、更に宗祇のやどりかなと歎いたり、いつも主情的に自己や周圍を省察してゐる。此傾向は後の幽玄・閑寂の詩境に自己を導き入れる階梯で

あらうかと思はれる。

「虚栗」の連句は、前時代に比して輕口のやうな句が少なくなつてはゐるが、その代り漢土の古事の道化た飜案が著しくなつた。例へば

山ン野に飢て餅を貪(ムサボ)ル　　嵐蘭
盜(ミ)井の月に伯夷が足あらふ。　　芭蕉
有(下)朋(トモ)自(リ)(ニ)遠方(一)來(レルコト)(上)　　千之
花に粮空嚢に錢をはたくらん。　　其角
金谷ノ泪ヲかたびらにそゝぐ　　一晶
荒しや姑蘇の風呂臺に入。　　其角
顏淵が麥食愛のひとつにて　　才丸
蓼も藜も露ふかき庭。　　子堂
げに杜子美湯治山中一夜ノ雨　　楓與
肴なき爐に三線ヲ賁ル。　　其角
月兮(ナレヤ)月兮西瓜に劍を曲(ナナ)ケル。　　其角
弓張角(サヽ)豆(ゲ)野に芋ヲ射ル。　　藤匂子

呉の旅衣酒をかたしく　其角
水糒西施が影をこぼすらん　千之

又怪奇な想も依然として全卷を占めてゐる。例へば

雷鳥のはつねは觜ヲ鳴ルならん　芭蕉
汐てる海に鰹孕る。　嵐雪
蚤は私の盞をのむ　嵐蘭
櫛入ぬ影は六十の荊にて。　其角
粽をしばる鬼の尸　同
龍よぶ白雨乞の跡荒て。　松濤
鏡刻時の斧取申ける　才丸
八十萬箕の靈とあらぶる。　一晶
荒しや姑蘇の風呂臺に入　其角
亂往昔古首つるべより上る。　才丸
魔鏡の月を睨かへして　同
山彦と碁をうつ風の古寺に。　子堂

かうろぎは書ヲよみ明ス聲　李下
百ヲふる狐と秋を慰めし。　同
ねみだれかもじ蛇と成夢。　李下
笛による骸骨何をその情。　其角
寸ン法師切レの衣のみじかきに　芭蕉
昔を力む卒都婆大小。　李下
餅名にたつと云題を責けり　其角
ほとゝぎす怨の靈と啼かへり。　芭蕉
黒鯛くろしおとく女が乳　同
枯藻髮榮螺の角を卷折らん。　其角
魔神を使シトス荒海の崎　芭蕉
鐵クロガネの弓取猛き世に出よ　其角
虎懐に姙るあかつき。　芭蕉

是等は幽玄を曲解した前時代の遺調である。尤も中にはやゝ醇正な幽玄に近付きつゝある作品もあつた。例へば

琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし　一晶

朝にえぼしをふるふ紙衣。　芭蕉
暁の寐言を母にさまされて　嵐雪
ついに發心ならずなりけり　芭蕉
鰥々として寢ぬ夜寢ぬ月　其角
翠入りの近づくまゝに初砧　同

などは調も穩かだし、附方も程よく離れてゐる。なほ卷末の其角・芭蕉の兩吟歌仙表だけあげて見る。

酒債尋常往處有　人生七十古來稀

詩あきんど年を貪ル酒債哉　其角
冬湖日暮て駕ルノス馬ニ鯉　芭蕉
干鈍き夷に關をゆるすらん　同
三線人の鬼を泣しむ　角
月は袖かうろぎ睡る膝のうへに　同
鳴の羽しばる夜深き也　蕉

因に云、本書中芭蕉・一品・嵐雪・其角・嵐蘭の五吟歌仙（花にうき世の春）に批點を加へた「天和四歌仙」といふ書を打返したものに、干滿子の「誹諧明石のうら」（北總成田の人、胡蝶老翁とも云。天保頃の作らしい。寫

本）がある。天和四歌仙といふ題名は詳かでないが、天和四年の歌仙といふ意味か、天和の四歌仙といふ意味か分らないが、四歌仙と題しても、前述の五吟歌仙だけの批點であるから、或は天和四年の歌仙とも思はれるが、それにしても題名が既に誤つてゐる。「明石のうら」に云、

或人の許にて、天和四歌仙の一小冊を得たり。愚老が得たるは寫本なれども、京都にて開板せし趣なり。扨此四歌仙は江戸表にて巻たる冊を、其角方よりたよりして、明石居士に點を乞し也。此老人は播州などより京都に出てはいかいの點者になり、其名も時に乘じて高かりけん。其角が點を乞し人なれば、通途の宗匠には有べからず。……此四歌仙の趣を見るに、其時代の風調にて、今の江戸座の誹諧也。其中此四歌仙の巻頭は芭蕉・一晶・其角・嵐雪・嵐蘭の五人也。此人々はいづれも〇（虫クヒ）倫絶類の英才なるに、彼居士なるものゝ引墨にては、世に聞えて外聞あしき非言過言、見るに怒を生じ、讀むに涙のこぼるゝばかり、愚老が心にも扨々淺間しき蕉門の瑕瑾かなと思はる。天和年中より今に至り百五十年、蕉門に博物の先生達も數多ありつらんに、など此書の可否を論ぜざるや。但し論ぜし書の世にありつらんを、愚老が眼の及ばざるか。又非言に愕きて口を閉られしか。愚老は此書の眼に遮りしより、寐ても寤ても忿懣の氣止事なく、蕉門一族の旗を揚げて、此逆賊を征伐せんとす。翁に志あらん人々は馳集りて、我一陣を助け給へ。云々

明石居士とは如何なる人であるか詳かでないが、其角が貞門系らしい明石居士に點をかけて貰ふといふやうな事は信じられない。又天和四歌仙といふ難書が、當時出版されたものかそれも詳かでない。出版されたとしたら後

世の事だらうし、點を乞ふとしたら後世の某氏が其角に關係なく勝手に迯つたとも考へられよう。百五十年も經つた天保頃になつて、天和の俳諧の難書に憤慨して見たとて仕方のない話で、それがために蕉風の旗色が惡くなる道理もあるまい。それはとにかく明石居士の批言は三十句だけで、名殘ノ表四句目から六句だけ拔けてゐて、「浪のさゞれにたなご釣影」、「浪人の戀するを話おぼしめす」、「汐てる海に鰹孕る」、「つくししらぬひの松浦片撥」、「蚤は私の盞をのむ」、「山ニ野に飢て餅を貪ル」、「見ぐるしき艶書をやくや柴梔」、「曉の寐言を母にさまされて」が平點、「ついに發心ならずなりけり」が長點であつた。判詞は極めて簡單で、句意聞えずとか、詞の去嫌の非難であつた。

「虛栗集」は古來芭蕉變風の代表的撰集の一として認められた。「俳諧問答抄」に、去來が贈晋氏其角書の中に、「去來問云、師の風雅見及ぶ所次韻にあらたまり、みなし栗にうつりてより以來しば／＼變じて、云々」とあり、又答許子問難辨の中にも、「去來曰、先師變風に於けるも、みなし栗生じて次韻枯れ、冬の日出でてみなし栗落。云々」とある。曲齋の「七部婆心錄」に、「抑正風の始は延寶五の兩吟より起り（草體）同九の次韻に流行し（草中の草）天和三の虛栗に一變し、云々」とも見えてゐる。加賀の堀麥水は虛栗を特に推稱し、之を七部集（後至詳述）の內に數へてゐる。實に麥水は「新虛栗」（安永五年刊）に於て虛栗調を復活させようと努力した。彼が「蕉門一夜口授」（安永二年刊）に、

みなし栗は奇書なり。人をして活達ならしむ。卷中に氣凱高致の吟多し。云々

氣凱、我句人不レ知我を鳴ものは子規　其角

高致、花にうき世我酒白く食黒し　はせを

其外其角詩人ノ吟、是より翁と兩吟の歌僊聞ぎがたきに似たりといへども、よく味へば手を打て感嘆するに至る。是を捨るは形にのみかゝはるの人なり。只常の暇(イトマ)にも蕉翁の發句を取つて其淸意味に馴れ給へ。

とある。卽ち去來を始め麥水・曲齋皆本書を以て芭蕉變風の一時代を劃すべき撰集と考へてゐた。

「虛栗」は新風樹立の意氣揚々として、皷舞踊躍の書であつた。其跋に云、

栗とよぶ一書其味四あり。李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る。これに仍而其句見るに遙にして聞に遠し。侘と風雅のその生(ツネ)にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗(ムシクヒ)也。戀の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顔(カンバセ)、黄金は鑄ルニ小紫ヲ。上陽人の閨の中には、衣桁に蔦のかゝるまで也。下(シモ)の品には眉でもり、親そひの娘、娵姑のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。其ノ如震動虛實をわかたず。寶の鼎に句を煉(ネツ)て、龍の泉に文字を冶(キタ)ふ。是必他のたからにあらず。汝が寶にして後の盜人ヲ待。

天和三年癸亥年仲夏日　芭蕉洞桃青皷舞書

以上芭蕉の主張は李白・杜甫の詩書を探り、寒山・拾得の禪味を加へ、典雅な戀、卑俗な戀、上品・下品を問はず、すべて之を俳諧の平話に案出したといふのであるが、枯痛贅牙な表現は意味の難解をすゝめ、奇怪な想、放

縱な道化は、却て本來の情趣を失ふだけであつた。見るに遙かにして、聞くに遠しとは、心の幽玄でなく、言語技巧の幽玄である。人の拾はぬ蝕栗を、うまく食はせようとしたとて、無理である。新風鼓吹の意氣は嘉すべきであるが、まだ／＼正風に醇正なものではない。「冬の日」が出れば、虚栗は落ちるのである。

二、其他の撰集に於ける芭蕉の句

餅を夢に折結ぶしだの草枕（東日記）　芭蕉
藻にすだく白魚やとらば消ぬべき（同　）　同
盛じや花に坐浮法師ぬめり妻（同　）　同
山吹の露菜の花のかこち顔なるや（同　）　同
摘けんや茶を凩の秋ともしらで　同
くれ／＼て餅を木魂のわびね哉（歳旦發句牒）　桃靑
武藏野の月の若ばえや松島種（松島眺望集）　芭蕉

連句は「一葉集」に、天和年中として、杉風・芭蕉の兩吟歌仙一卷があるが、天和調でもないらしい。

時節さぞ伊賀の山越花の雪　杉風
　身はこゝもとにかすむ武藏野　芭蕉
店賃の高き軒端に春の來て　同

（下　略）

又芭蕉・麋塒・一晶の三吟歌仙一巻があるが、芭蕉庵燒失後甲州郡內へ行つての吟であるか、それ以前のものであるか、詳かでない。

夏馬の遲行我を繪に見る心かな　芭蕉
變手ぬるゝ瀧凋む瀧　麋塒
蕗の葉に酒灑竹の宿徹て　一晶
（下　略）

胡（ヘボチ）草（グサ）垣穗に木瓜も無家かな　麋塒
笠をもしろや卯の實むら雨　一晶
散ほたる沓に櫻を拂らん　芭蕉
（下　略）

なほ「一葉集」に、伊賀御集物と前書して、青府・一晶・桃青の三吟表三句をあげてゐるが、延寶初年のものらしく、詳かでない。

第六章　東西行脚時代

第一節　東海・近畿・濃尾地方の旅行

一、東海道を上る

貞享元年秋八月、芭蕉は江戸深川の草庵を出立した。目的は歸鄕であつた。千里(チリ)（知里トモ）を連れる。千里は通稱油屋喜左衛門、大和國葛下郡竹ノ内の產。常に莫逆の交深く、朋友に信ある哉此人と芭蕉が賞めてゐるから、貞實な人だつたと見える。

野ざらしを心に風のしむ身哉

秋十とせ却て江戸を指す古鄕

深川や芭蕉を富士にあづけゆく　　千里

此行に李下の餞別吟があり、芭蕉も脇を附けてゐる。

芭蕉野分其句に草鞋かへよかし　　李下

月と紅葉を酒の乞食

（「俳諧一葉集」、「一代録」、「春秋」出）

去留の「全集」に、「宗周云、鎌倉より江島など一見、此時ならん。」とある。

箱根の關を越える日は雨が降り、山皆雲にかくれる。

霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き

富士川の邊で捨子をあはれみ、汝が性のつたなきを泣けと因果を含ませる。「野ざらし紀行」の素堂の序詞に、「富士川の捨子は惻陰に見えける。云々」とある。支考の「本朝文鑑」の「憐捨子辭」は、芭蕉庵とあるけれど、支考の僞作である。

猿を聞人捨子に秋の風いかに

大井川を越える日は終日雨に降られ、

秋の日の雨江戸に指をらん大井川　千里

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

素堂の序詞に、「山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ此吟行の秀逸なるべけれ。云々」とある。又許六の「滑稽傳」に、「談林の時俳諧に長じ、日々向上にすり上げ、終に談林を見破り、はじめて正風體を見届け、躬恒・貫之の本情を探りて、始て道野邊の木槿は馬に喰れたりと申されたり。天下擧げて俳諧中興の開祖、正風の翁と稱

し侍る。云々」とあるが、之は支考が古池やの句を以て正風開眼の句であると宣傳した論と同一である。たゞ此句は紀行中の秀逸であるといふだけで、何も此句によつて天下擧げて正風の翁と稱揚したわけではない。古來けり、たりの論のあつた句で、或は出る杭は打たれるといふ戒の句だとか（杉雨の「芭蕉發句評林」云、槿も道端に咲かずば、馬にも喰はれまじを、道端故にこそ、人にも折られ、馬にも喰はるれ。たゞ出る杭の打たるゝといふの戒なるべし。云々）、或は木槿は朝顏であるとか（西戒閑人の「師走袋」云、此句は木槿を朝顏となして、午時の日にしをれしは馬に喰はれしよとの作意妙なり。云々）、又は素丸の「說叢大全」中の一說として、佛頂が道の邊の木槿を指して一句せよと言つた時の卽吟で、禪意に叶つてゐるものであるとか、種々附會の說を生んだ句である。蓋し此句はその場合の侘しい光景を云つたもので、別に寓意のあつた句ではあるまい。

二十日餘りの月を見て、小夜の中山を越える。

馬に寢て殘夢月遠し茶のけふり

伊勢に至り、松葉屋（庵トモ）風瀑を訪れ、十日ばかり足をとゞめる。風瀑は一晶門人。

暮れて外宮に詣る（「春秋」に晦日とある）。一の華表の陰ほのぐらく、御燈所々に見えて、また上もなき峰の松風身にしむばかり、深き心を起して、

みそか月なし千とせの杉を抱あらし

西行谷で女の芋洗ふを見て、

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

山田住の雷枝といふ人此句に和して、

宿まゐらせむ西行ならば秋の暮　雷枝
芭蕉とこたふ風のやれ笠　翁

（「一葉集」）

又同住勝延も句を寄せる。

花の咲身ながら草の翁かな　勝延
秋にしほるゝ蝶のくづをれ　翁

（「同　書」）

其日の歸途（芋洗ふ女を見た日のかへり）或茶店に立寄り、蝶といふ女から句を求められ、書き與へる。其句、

蘭の香やてふの翅にたき物す

「春秋」に、「愚所藏寫本草枕ト、前ニ引用ス板本野晒紀行ト參考スルニ、此一段草枕（寫本）野晒（板本）ト大異ニシテ、草枕（寫本）ト赤双紙ト小異也。云々」とある。即ち本文には、茶店に立寄つた所、てふといふ女があつて、自分の名に發句してくれと、白絹を出したから、書付けてやるといふのであるが、「赤冊子」には、或茶店の傍に休んでゐると、妻女に内に招待され、料紙を持出されて句を乞はれた。妻女のいふに、自分はもと此家の遊女であつたが、今は

主人の妻となつてゐる。先の主人もつるといふ遊女を妻にした。その頃難波の宗因がこゝへ來たのを見かけて、句を書いて貰つたと、風流な事までいふので、否みかねて、宗因の「葛の葉のおつるの恨夜の霜」といふ句を前書して、此句を與へたとある。「野晒紀行」は稿本で傳はつて來たのであるから、寫本には異同もある事と思ふ。

閑人の茅舍を訪ひて、

蔦 植 て 竹 四 五 本 の あ ら し か な

支考の「笈日記」伊勢の部に、盧牧亭と前書がある。「春秋」に、「盧牧ハ伊勢人也。其姓氏ヲ知ラズ。斗從・園友ノ徒ト芭蕉ノ死ヲ悲シミ、吟ヲ四七日ニ粟津ニ送ル。」とある。湖中の「略傳」には、西行谷の麓を過ぎて、芋洗ふ女の句を作つた次に、山田の雷枝を訪れ、雷枝の句に脇を附け、其夜は雷枝亭に泊り、翌日嗒山を訪れ、嗒山の句に脇を附けたとあるが、嗒山を訪れたのは十月であらう。

九月のはじめ故郷に歸り、守袋の母の白髮を拜み涙を流す。

手 に と ら ば 消 ん な み だ ぞ あ つ き 秋 の 霜

「春秋」に、其角の「枯尾華」の文を引き、「故郷ニイサヽカ忍バルヽコトアリト云ハ、恐ラク母ノ年忌ナルベシ。但芭蕉ノ父ハ早ク卒シ、母ハ後ニ命終セシ事、紀行ノ辭ニ明也。然レ共今年月不考。云々」とある。去留の「全集」に、「一說に無名庵を結ぶは此時の事なりといふ。」又湖中の「略傳」にも、「此時伊賀に無名庵を結ぶ。後再形庵といふ。是なり。」とある。因に云、芭蕉が伊賀で假寐した草庵に五つあつた。所謂伊賀の五庵である。即ち

無名庵（後再興して再形庵と號する。兄半左衛門の邸內にあつた）、蓑虫庵（土芳の庵）・瓢竹庵（大須賀屋次郎右衛門の庵。苔蘇庵）、東麓庵・西麓庵（共に猿雖の別墅。勝峯氏の說によると、其名ばかりで庵を構へるに至らなかつたと）である。なほ「春秋」に、「止鐸中土芳ガ家ニ至。」とある。土芳は服部氏。半左衛門。伊賀上野之士。はじめ些中庵、後蓑虫庵と號する。「三冊子」の著で有名な人。

大和國に行脚し、葛下郡竹の內といふ千里の故鄕にとゞまり足を休める。藪より奥に家がある。

わた弓や琵琶になぐさむ竹の奥

素堂の序詞に、「大和廻りすとて、わた弓を琵琶になぐさみ、竹四五本の嵐かなと隱家によせける。此兩句をとりわけ主人もてはやしけるとなり。云々」とある。

二上山當麻寺に詣で、庭上の松を見て、深く感じ、

僧朝顏幾死かへる法の松

獨芳野の奥にたどり、唐上の廬山に比し、或坊に一夜を借りて、

砧打て我にきかせよや坊が妻

素堂の序詞に、「麓の坊にやどりて、坊が妻に砧をこのみけん。云々」とある。

西行山居の跡を尋ね、とく／＼の淸水を見て、

露とく／＼心みに浮世すゝがばや

秋の日も暮れかゝつたので、名ある所々を見殘し、先づ後醍醐天皇の御廟を拜み、

御廟年を經て忍ぶは何をしのぶ草

大和から山城を經、近江に入り、美濃路に至る。今須山中を過ぎ、常盤の塚を見る。伊勢の守武の句を思出す。

義朝の心に似たり秋の風

不破

秋風や藪も畠も不破の關

大垣に至り、木因が家をあるじとする。

死にもせぬ旅寐の果よ秋の暮

「春秋」に、常盤駿河守の古墳といふ一說をあげてゐるが、それでは芭蕉の文意に添はない。木因は谷氏。通稱善太夫。大垣の人。木端・白櫻叟と號し、船問屋である。芭蕉より杭瀨川の翁と尊敬された。歌學に明るい人であつた。初め季吟門。後芭蕉門。「蒜のまがきに蔦をながめて」の前句、「蔦のゐる花の賤屋とよみにけり」の附意を芭蕉に問はれた話は有名である。「春秋」に、「十月、嗒山一句ヲ寄。」とある。

師の櫻むかし拾はむ木葉かな　美濃大垣 嗒山

すゝきに霜の髭四十一　翁（「春と秋」）

同書に又、「如行亭ニ泊。」とある。如行・荊口此頃入門か。

美濃大垣　如行

霜の宿の旅寐に蚊屋を着せ申す

古人がやうの夜のこがらし　（同）　芭蕉

如行は近藤氏。美濃大垣の人。戸田侯の臣。後武を辭して漂泊する。「千鳥掛集」に尾城とあるは、晩年移住したものらしい。許六の同門評判に、「如行元來懦弱也。彼常に師に隨ざる故に、自己の善惡を辨る事を知らず。勿論血脈も正しからざる故に、とほうもなき事をいへり。云々」とある。荊口は宮崎氏。美濃大垣戸田侯の臣。此筋・千川・文鳥の父である（山崎氏説に嗒山を荊口の子としてゐる）。後致仕して名を東子と改める。同門評判に、「荊口老人老功の門人也。……よき子供を持て、手を引かれ、腰を押れて、漸く流行するに似たり。」とある。

桑名本當（統トモ）寺にて、（今は無いさうである。現今の桑名は大に相違し、四五十年前は地藏堂の在つた所は海だつた。）

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

「笈日記」、桑名部に、古益亭とあつて此句出。

朝暗いうちに濱の方へ出て、

明ぼのやしら魚白きこと一寸

「春秋」、野晒の寫本に、「地藏堂の柱に書つく（板本ニ闕リ）」とする。此地藏尊左甚五郎の作と傳へられる。「笈日記」に、「おなじ比にや、濱の地藏に詣して、」とあつて此句出。

熱田神社に參詣する。

しのぶさへ枯て餅かふやどりかな

扇川堂東藤の「皺筥物語」(元祿八年跋)に、神前の茶店にてとあつて、

しのぶさへ枯て餅買ふ舍かな　翁

しわびふしたる根深大根　桐葉

とある。なほ同書に、「此熱田に來れるはじめは、貞享初のとしの冬、桑名より眞帆しづかに船中の卽興ものにかきつけて、」と記して、

桑名にあそびてあつたにいたる

あそび來ぬ鯀釣かねて七里迄　芭蕉

旅亭桐葉の主心ざしあさからざりければ、しばらくとゞまらむとせしほどに

此海に草鞋すてん笠じぐれ　芭蕉翁

むくも佗しき波のから蠣　桐葉

凩に冬瓜ふらりとふらつきて　東藤

三吟一巻に滿ちぬ。次の日、

馬をさへ詠むる雪の朝かな　翁

木の葉に炭を吹おこす鉢　閑水

はた〳〵と機織音の名乘來て　東藤

とある。「笈日記」、悼芭蕉の文に、「木枯の格子あけては、馬をさへ詠る雪といひ、云々」とある。桐葉は林七左衞門。熱田市場町の宿屋で、臨高庵・元竹庵の號がある。鳴海の下鄕知足と親類だといふ（桐葉の妻は知足の女）。

名古屋に入る途中風吟。

狂句木枯の身は竹齋に似たる哉

草枕犬もしぐるゝか夜のこゑ

こゝは紀行の記事が前後してゐるのではなからうか。芭蕉は大垣を十月に立つて、桑名へ來たのも同じ月だらうし、そこから船に乘つて熱田へ入つたのもやはり十月かと思ふ。それはしのぶさへ枯れての句も、鯀釣りかねての句も季は十月だからである。「春秋」に、「十一月尾陽ニ至、於同所冬日集成。云々」とあるが、名古屋へ入つたのは熱田からでなく、大垣から桑名へ行く途中名古屋へ立寄つたものと見るべきではあるまいか。狂句木枯の句の季は十月であるし、其句の前書を見ても、餘程旅やつれして、窮し果てた旅のやうに思はれる。若し此句を熱田から名古屋へ入る途中の吟とするならば、厚遇した桐葉が芭蕉の身のまわりや旅費位は面倒を見てやらない筈はあるまい。さうだとすれば、芭蕉が自分の境遇を敢て落魄した藪醫者竹齋老に喩へる譯もあるまいと思ふ。且又「皺筥物語」に、海暮れて鴨の聲云々の句の前書に、「尾張の國熱田にまかりける比、人々師走の海見んとて

船さしけるに」とあるから、熱田の桐葉亭には十二月迄滯在してゐたものらしく、十一月尾陽に至るは理窟に合はなくなる。海暮れての卷は芭蕉・桐葉・東藤・工山の四吟歌仙で、卽ち

海くれて鴨の聲ほのかに白し　翁
串に鯨をあぶる盃　桐葉
二百年吾此やまに斧取て　東藤
（下畧）

桐葉は芭蕉をよく歡待した。芭蕉が熱田に長く留まつたのはそれがためであり、且は此地方の風光が芭蕉をいたく喜ばせたためでもあつた。「笈日記」に、悼芭蕉翁、尾州熱田連中として、

芭蕉翁十とせあまりも過ぬらん。いまそかりし比、はじめて此蓬萊宮におはして、「此海に草鞋を捨ん笠時雨」と心をとゞめ、景淸が屋敷も近き桐葉子がもとに、頭陀をおろし給ふより、此道の聖とはたのみつれ。云々

とあるので、其間の消息はよく分らう。當時の歌仙三卷は、後曉臺が「熱田三歌仙」と題して出版した(後條詳說)。

これより芭蕉は美濃路へ赴かうとして、桐葉・東藤等と別を惜しんだが、伊賀へのたよりがあつたので止めにした。「皺筥物語」に、

翁是より美濃路へうち越んと聞えければ、

檜笠雪をいのちの舍り哉　桐葉

稿一つかね足つゝみ行　　翁

としたまひけるに、伊賀へのたよりありとつげ來れば、消息し給ふとて止む。

冬の空やのし行鶴をめかれせず　　東藤

かくいひて別ををしみけるに、云々

とある。

爰に草鞋を解き、かしこに杖を捨て、旅寐ながらに年を暮らして、

年暮れぬ笠きて草鞋はきながら

大和・山城・近江・美濃・尾張と遊歴した述懐であらう。

山家に年を越して、

誰が聟ぞ齒朶に餅おふうしの年

「春秋」十二月條下に、「日未詳、再舊里ニ歸テ越年。」とあつて、此山家を伊賀の舊里と見てゐる。竹人の「全傳」に、「尾張・伊勢路を經て、末の冬二十五日又伊賀にあり。此間當麻・芳野・近江・美濃、再び尾張旅行、「年暮ぬ笠着て草鞋はきながら」。同じく二年丑の二月中旬迄故鄕に遊び、新能の頃奈良に赴き、云々」とあるが、「次郎兵衞物語」には、「翁は十二月二十五日に出立し給ひけるとなむ。東藤・桐葉に別れて、工山が導きに奈良に出給ひて、わびしき山家にて年を越え給ひて、笠も草鞋もぬがず、年とりてをかしがり給ひしと、便りし給ひけるゆ

ゐに、云々」とあつて、越年を奈良行の途中の山家としてゐるがどうか。

奈良に出る途中、

　春なれや名もなき山の薄霞

「略傳」に、「奈良七重七堂伽藍八重櫻」の句をあげてゐる。「泊船集」・「古今抄」には芭蕉の句としてゐるが、介我の「俳諧あやめ草」には椎本才丸の句と斷定してゐる。

二月堂に籠りて、

　水とりや氷の僧の沓の音

瓊音の「全集」に、「籠の僧なるを當時訛りて、コーリの僧と云ひならはしたるを、其儘に使ひたるならむか。」とある。「春秋」に、「十二日東大寺二月堂ノ行法ヲ拜。」とある。梨一の「翠園抄」に、「本尊は觀音なり。若狹の井あり。若狹の國遠敷明神閼伽を奉り給ふといふ。一とせ旱して水なし。衆僧井のほとりにて、若狹の方に向ひ祈りしかば水出でたり。毎年二月十二日夜なり。二月の瀧といふあり。垢離場なり。」とある。

京に上りて、三井秋風が鳴瀧の山家を訪ふ。

　　梅林

　梅白し昨日や鶴を盜れし

　樫の木の花にかまはぬ姿かな

「熱田三歌仙」に、

みやこにあそびて、

題秋風子之梅林。

梅白しきのふや鶴を盗れし　芭蕉

杉菜に身する牛二ツ馬一ツ　京 秋風

山家

樫の木の花にかまはぬすがたかな　芭蕉

家する土をはこぶつばくら　秋風

(「春と秋」)

秋風・芭蕉・湖春の三吟もあつた。恐らく芭蕉は京へ上つて、北村季吟を新玉津島社に訪れ、其子湖春を連れて、秋風の庵を尋ねたものであらう。

わか櫻鮎割く枇杷の廣葉哉　京 秋風

筧にうごく山藤の花　鳴瀧 芭蕉

日の霞夜銅の氣をしりて　湖春

(「春と秋」、「一葉集」)

素堂の序詞に、「洛湯に至り、三井氏秋風子の梅林をたづね、きのふや鶴をぬすまれしと、西湖にすむ人の鶴を子とし、梅を妻とせし事を思ひよせしこそ、すみれ・むくげの句の下にたゝん事かたかるべし。云々」とある。此句も當時稱揚されたものと見える。秋風ははじめ宗因門。然るに宗因の晩年風儀を亂すやうな事があつて、宗因は犬櫻の句を作つて初學を戒めた。（素外の「梅翁宗因發句集」の序）。即ち「當世の風體、年々日々所々にうつりかはる新しく珍らしく、かなはぬ老の耳にだに、おもしろくうらやましながら、初學の人いづれをよしとおもひさだむるかたなくやとおぼえて、今つくばや鎌倉宗鑑が犬ざくら。」（「梅翁宗因發句集」）とある。風儀を亂すといふ事は、如何なる事情であるか詳かでないが、とにかく宗因の感情を害した事は事實らしく、後遂に蕉風を學ぶやうになつた。「去來抄」に、

去來曰、古藏集に此句（梅白しの句）をあげて、先師の事を詰り、此句へつらへりといへり。是等は物の心を辨へずして評せり。秋風は洛陽の富家に生れて市中を去、山家に閑居して詩歌をたのしみ、騷人を愛すと聞て、彼に迎へられ、實に彼を風騷の隱逸人と思ひ給へる文作ありしが、いかゞありけむ、其後招けども行給はず。今や此評を見るに、彼が佞諂なることを知れり。

とある。併し此去來の言は詳でない。それは元祿二年（?）芭蕉が秋風に宛てた手紙に、「此ほど愛宕の下へ參申候。二三會も興行有之、江戸衆も參り、上手になられ悦び申候。蛤にけふは賣かつゐわか菜哉。右の句を元にして百韻いたし、其節其角なども參りおもしろく慰み申候。貴丈事噂申出候。猶追々可申入候。廿三日。はせを。秋

風丈。」とあるので、貞享二年以後も秋風と交際のあつた事は分る。但しこゝに疑問とすべきは、蛤に云々の句は芭蕉一週忌追善集なる嵐雪の「若菜」（元祿八年刊）に、蒟蒻に云々とあつて、嵐雪との兩吟歌仙の發句である。此運句は元祿二年正月江戸に於ける興行であるが、手紙のは百韻興行で、其角なども來たとあるし、京に於ける興行らしい。元祿二年正月は其角は前年より上方行脚に出てゐるから、かゝる會にも出席出來ようが、芭蕉は江戸に居て、まだ旅へは出かけない。歌仙・百韻どちらが先であるか、其間の事情がよく分らないから、此手紙が果して元祿二年のものか判斷が付かない。とにかくそれは後日の研究として、話を前へ戻すが、竹人の「全傳」には、「京に入て三井秋風が別墅にある事半月ばかり、云々」とあるし、「次郎兵衞物語」には、「二月三日京に御供して、伏見の西岸寺に一夜、鳴瀧の三井が隱宅に一夜、夫より長者町の去來方に三月十七日迄居給ひ、云々」とある、此頃洛下六條の旅舍に於て千那入門。「春秋」に、「千律師遠忌ノ文」（不角作）を引用して云、

爰にはせをの翁桃靑と稱して、始て錫を坂西に曳の候、洛下六條の旅舍に會して、正風の奥儀を丁寧に尋正し、卽時に向上を悟して、既往の俳諧みな侫言なる事を知り、忽蕉師の門に入て寢食を忘、これを鍛磨し、終に其神精に入り得たり。されば古翁生涯の門人數千、師は其一老なりき。坂西に千那、東關に其角といひては、頭をあぐるものなし。云々

とある。千那は近江堅田本福寺の住僧。法號感應院。名は妙式。俗姓三上氏。嘗て律師に任ぜられる。初め俳諧を惣本寺高政に學び、宮山子と號し、尙白・靑亞と親しかつた。皆高政の高弟である。蕉風に歸してから千那と

改め、葡萄坊と云。寶永五年三月江戸に下り、不角が自娯堂に掛錫する事三年。後奥羽信の諸國を遊歴して近江に歸り、享保八年寂。年七十三。許六の同門評判に云、「千那上方の高弟にして、器も勝てよし。論ずる時は尙白が器は鈍にして重し。千那が器はすぐれて行き過ぎたるなり。花實は花過たり。とりはやしも得られたり。云々」とある。

伏見西岸(サイガン)寺任口上人に逢ひ、

　我がきぬにふしみの桃の雫せよ

「春秋」に、「三月、日未詳（八九日頃）、伏見西岸寺ニ至、僧任口ニ對ス。」とある。任口略傳前出。

大津に至る道山路を越えて、

　山路來て何やらゆかしすみれ草

　　湖水の眺望

　からさきの松は花より朧にて

二句共に當時稱揚された句である。「笈日記」、悼芭蕉翁文の中に、「白鳥山に腰を押してのぼれば、何やらゆかしすみれ草となし、云々」とある。辛崎の松の句は大津尙白亭の吟である。すみれ草の句は、「赤冊紙」によると初めは何とはなしに何やらゆかしと置いたのであるが、後にそれを山路來て何やらゆかしと直したのだらうとある。

此句に就いて千梅は、「わくかせわ」に、箱根山中にての吟としてあるが誤である。其角の「新山家」に、箱根木

賀温泉入りの時の吟のやうに引用してゐるが、それは積翠の言ふやうに、其時思出したまでの事であらう。「去來抄」に、

湖春曰、菫は山によらず。芭蕉俳諧に巧みなりといへども、歌學なきの過也。去來曰、山路にすみれを詠みたる證歌多し。湖春は地下の歌學者なり。いかでかくは難じられけむ。いとおぼつかなし。云々

とある。支考の「葛松原」にも、匡房の和歌、「箱根山うすむらさきのつぼすみれ二しほ三しほ誰かそめけむ」(堀川百首)を例證に出して辯護してゐるが、かゝる說から箱根山吟の說が誤傳されたものであらう。私には疲れた心持の見える句で、さほど秀逸とも感ぜられない。古人は古歌に例があるかないかを檢討して、句の價値を定めようとしてゐるが、古歌に例があるだけ、創意といふ生命に乏しくなる。これも時代の文學價値論の標準であるからこゝでは論じない。辛崎の句は、其角の「雜談集」(元祿四年刊)に、

伏見にて一夜俳諧催されけるに、かたはらより芭蕉翁の名句いづれにてや侍ると尋ね出でられけり。折ふしの機嫌にては、大津尙白亭にて、

辛崎の松は花より朧にて

と申されけるこそ、一句の首尾言外の意味近江の人もいまだ見殘したるなるべし。其景色こゝにきら〱とうつろひ侍るにやと申したれば、又かたはらより中古の頑作にふけりて、是非の境に本意をおほはれし人さし出て、其句誠に俳諧の骨髓得たれども、慥かなる切字なし。すべて名人の格的にはさやうの姿をも發句と

許し申すにやと不審しける答に、哉どまりの發句に、にてどまりの第三を嫌へるによりて知らるべきか。おぼろ哉と申す句なるべきを、句に句なしとて、かくは云ひ下し申されたるなるべし。朧にてとすゑられて、哉よりも猶徹したるひゞきの侍る。……此論を再び翁に申し述べ侍れば、一句の問答に於ては然るべし。但し予が方寸の上に分別なし。いはゞ「さゞ波やまゝの入江に駒とめて比良の高根の花を見る哉」只眼前なるはと申されけり。

とある。支考の「俳諧古今抄」にも、

此句は五絶の一章にして、芭蕉門の秘授なるが、是はまさしく哉の治定を恐れて、にてと心を返されけむ。しからば心詞の殘る所は、下の五もじの句絕にして、是を下段の切とやいはむ。……是はさゞ波に駒とめて、比良の高根の花を見しよりも、辛崎の松は朧にて面白からんかと、心を返して哉とは決せず、にてと疑へり。

云々

と勿體を付けてゐるが、にて・哉の治定論は別として、眼前の叙景とはいへ、神韻漂渺としてなつかしい幽かな心持はよく表れてゐる。尚白は鹽川氏。大津の人。通稱虎之助。醫を業とし、江左三益と云。初め貞室門、談林勃興するや高政門となり、次で田中常矩に學び、此地方の先輩であつた。乙州・正秀・洒堂・曲翠等はじめ尚白に師事した。木翁とも號し、能筆であつた。享保七年七月十九日歿、年七十三。許六の「同門評判」に、「師說に久しく絕えたり。いよ〳〵舊染の病再發したり。彼が器鈍にして重き所に、一風面白き胴切たる所あり。云

云」とある。

近江の水口驛で、二十年を經て故人に逢ふ。

命 二 つ の 中 に 生 た る 櫻 か な

之は尾張へ向ふ途中の吟である。風國は「菊の香」(元祿十年刊)に、此句をあげて、芭蕉の俳風の變化・流行を知らなければ血脈は得がたい。芭蕉の跡を慕うて其門に入る徒は、新古の分別に注意すべきであるなどと論じてゐるが、許六は「自得發明辨」に、芭蕉庵で借りた「草枕」に、のの字が入つて居た。のの字が入つて見ると夜の明けたやうである。知らないのは仕方がないと冷やかして居る。故人に逢ふの故人は誰れであるか詳かでないが、竹人の「全傳」に、

些中庵土芳其頃は蘆馬と稱す。此春(貞享二年春)播磨にありて歸る頃、翁ははや此國(近江)に出られければ、跡を慕ひて京に上る。水口の驛に往あひて、同じ旅寐の夜すがら語りあかすとて、

命 ふ た つ 中 に 活 た る 櫻 か な

翌日朝、中村柳軒といふ醫の許に招かれ、此句にて、二十年來の舊友二人に、おなじ句を以て挨拶したりと一興。其里の蓮華寺・伊賀の大仙寺・嶽淵各四五日對話。歌仙などあり。云々

とあるから土芳に逢つたのだらう。「泊船集」に、辛崎の松の句の次に、

晝の休らひとて、旅店に腰を懸て、

つゝじいけて其陰に干鱈さく女

吟行

桒畠に花見顔なる雀哉

の二句を入れて居る。是等の句も其途中の吟であらう。

尾張へ來た芭蕉は熱田へ入つて、前年厄介になつた桐葉亭に草鞋を脱いだ。「皺筥物語」に、「おなじく二年の春又わらんじをときて、景清が屋敷をとぶらひ、頼朝誕生の舊跡見んとのたまひければ、人々それに應ず。道のほとりにて、

つく〴〵と榎の花の袖にちる　　桐葉

ひとり茶を摘む藪の一つ屋　　翁

とある。なほ二十七日（三月）桐葉亭で、「山路來て何やら床し」の句を立句として、芭蕉・叩端・桐葉の三吟歌仙もあつた。

何とはなしに何やら床し菫草　　芭蕉

編笠しきて蛙きゝ居る　　叩端

田螺わる賤の童のあたゝかに　　桐葉

（「熱田三歌仙」に、右蕉翁眞蹟有暮雨庵とある。）

榎の花の巻は桐葉・芭蕉・叩端・閑水・東藤・工山の六吟歌仙であつた。
伊豆ノ國蛭が小島の僧、芭蕉の名を聞き、道連れにもと、尾張ノ國まで來る。

いざともに穂麥喰はん草枕

「春秋」に、「四月、雲水ノ僧、芭蕉ガ桐葉亭ニ止鐸ヲ訪フ。」とある。
此旅僧から圓覺寺の大巓和尚の訃を聞き、其角に文通する。

梅こひて卯の花拝むなみだ哉

其角の「新山家」に、芭蕉が其角に與へた大巓和尚追悼の文がある。

草枕月をかさねて、露命恙もなく、今ほど歸庵に赴き、尾陽熱田に足を休る間、ある人我に告て、圓覺寺大巓和尚、ことし睦月のはじめ、月まだほのぐらきほど、梅の匂ひに和して、遷化したまふよし、こまやかに聞え侍る。旅といひ、無情といひ、かなしさいふ限りなく、折節の便りにまかせ、先一翰投机右而已。

梅戀て卯花拝ムなみだかな　はせを

四月五日

其角雅生

とある。其角は貞享二年五月三日、枳風を連れて木賀の溫泉に赴き、文鱗の旅舍を訪れた。それより鎌倉に遊び、圓覺寺に至り、大巓和尚の位牌を拜し、追悼句を捧げてゐる。「新山家」に、

彼和尚いまそかりける世を思へば、開山より百六十三世となり。十三にして業徳の名あめが下に擅に、一箇無心の境に遊て、詩は盛晩の異風を壓し、且つ俳諧自然の妙を傳へ、予が手を牽て、鼓打ち舞しめ給ふよりぞ、萬たふとき御事に耳にふれ侍る。……ことし貞享二年正月三日いそぢ七とせにして、柴屋の雪の中に消かくれたまふ。……愚集みなし栗に幻吁ととゞめたる御句をしたへば、涙いくそばくぞや。云々

と悲しんでゐる。

芭蕉は熱田の桐葉亭から、鳴海の知足の許へ赴いた。知足の「千鳥掛」（正徳二年刊）に、芭蕉・知足・桐葉・叩端・業言（ボクゲン）・自笑・如風・安信・重辰の九吟歌仙（二十四句）が見えた。

杜若われに發句のおもひあり　芭蕉
麥穗なみよるうるほひの米　知足
二つして笠する烏夕ぐれて　桐葉
（下略）

芭蕉行脚のころ

夏草よあづまぢまとへ五三日　知足
笠もてはやす宿の卯の雪　桃青

「春秋」に、「夫知足芭蕉ノ歸路ヲ止メテ、夏草ノ東路マドヘ五三日ト吟ジタル句意明也。然レバ芭蕉東海道ヲ夏

東ニ下リシコト前後ニナケレバ、今年ト定メテ疑ナシ。又此杜若ノ發句ハ八橋ノ古跡一見ノ時トス。サモアランカ。八橋ノ古跡ハ三州岡崎ヲ八丁入テ、八橋山無量寺ト云寺アリ。其邊ヲ彼ノ古跡トス。鳴海ノ驛ヨリ六里ニ不レ足ノ道ナレバ、同驛ヨリ八橋ヲ尋テ、又知足亭ニ歸テ、此俳諧アリシカ。今知ルベカラズ。云々」とあるが、果して素蓮の說の如く、芭蕉は鳴海から八橋に行き、又知足亭に戻つて、此俳諧を殘したものか詳かでない。本文に再び桐葉子の許にあつてとあるから、熱田から鳴海へ行き、再び桐葉の許へ歸つて來て、別を告げたと見るべきではなからうか。勝峯氏の「俳句定本」揭出の句には、「千鳥掛」と出典を示して、前書に、「知足亭庭前」とあるが、「千鳥掛」の原本には此前書は見えない。

杜國におくる

白けしにはねもぐ蝶の形見哉

杜國に別れの吟を書き送つたのだらう。

再び桐葉子の許にあつて、東に下らんとする時、

牡丹蘂ふかく分出る蜂の名殘哉

「皺筥物語」に、

翁これより木曾に赴、深川にかへり給ふとて、

思ひ出す木曾や四月の櫻狩

京の杖つく岨は青麥　東藤

これも略す。また桐葉にかきつけてたびける句、

牡丹蘂分て這出る蜂の名殘哉

こたへて、

うきは藜の葉を摘し跡の獨かな　桐葉

としけるに、打笑みたまひて、みな〳〵別れぬ。餞の句どもあれど略す。云々

とある。芭蕉は木曾を廻つて、江戸へ歸らうとしたやうだけれど、木曾へ廻つた形跡も見えないやうだから、中止したものか。或は木曾路から甲斐へ赴いたものか詳かでない。木曾や四月の句は（「一葉集」に、おもひ立とある）芭蕉・東藤・桂楫・叩端・桐葉・工山・閑水の七吟歌仙（十二句迄）である。

甲斐の山中に立ちよりて、

ゆく駒の麥に慰むやどり哉

「春秋」に、東海道を甲斐へ至る道筋を示してゐるが、東海道を下つて甲斐へ入つたものか、木曾から廻つたものか詳かでない。

四月の末江戸の芭蕉庵へ入つた。

夏衣いまだしらみをとりつくさず

史邦の「小文庫」に、「卯月のはじめ庵にかへる。」は誤である。

此旅行は貞享元年八月江戸を立つてから九ヶ月の日子を費してゐる。熱田・名古屋を中心として、その周圍に蕉風の勢力を扶殖し得たのは、旅行の大なる收穫であつた。「枯尾華」に、「隱れかねたる身を竹齋に似たる哉と凩の吟行に、猶々德化して、正風の師と仰ぎけるなり。云々」、又「雜談集」に、「翁尾張にて、宮守が油さげ行く小夜更けてといふ句を付け合せられければ、熱田の宮のいまだ造營なかりし年にて、人々の心も神さびたる折ふしにかなひて、皆俳諧の眼を付かへしは、冬の日といふ五歌仙にてひゞらぎ侍り。」とあつて、此旅行が如何に蕉風弘通の因を作つたかは推するに難くない。尤も宮守の句は「熱田三歌仙」に出て（つく〴〵と榎の花の巻）、匂の花の句で、「宮守が油さげつも花の奥」とあるのが正しいが、それはともかくとして、芭蕉の俳諧もいよ〳〵その勝れたる價値を認められて來たのである。

二、野ざらし紀行に就いて

以上の旅行記は古來「草枕」・「芭蕉翁道の記」・「野ざらし紀行」・「甲子吟行」・「甲子紀行」などと呼ばれてゐた。「草枕」とは許六の自讃之論下（元祿十一年）に、芭蕉の「命二つ中に云々」の句を論じた條下に、「予はせを庵にて借用の草枕に、云々」とある記事によつたものである。素蓮は「草枕」が紀行の本名であるから、自分は野ざらし以下の表題を取らないと言うてゐる。併し野ざらしといふ題號も古い。之も許六の自讃之論下に、「風國が文章にのざらしの集など云へる事あれば、云々」とあるし、「滑稽傳」（正德五年編）にも、「野ざらしの紀

行の時なり。云々」とあるから、當時野ざらしの紀行とも呼んでゐたと見える。此題號は巻頭の、「野ざらしを心に風のしむ身かな」から附けたものであらう。「芭蕉翁道の記」とは、風國の「泊船集」(元祿十一年十一月刊)にある題號で、巻末に、「後へに所々酬和の句、素堂の跋あり。今略之。」とある。

「野ざらし紀行」は、はじめ草稿のまゝで傳はつて來たので、其題號も定まらず、從つて轉寫の誤も多く、異本も出來たやうである。刊本は元祿十一年の「泊船集」が最初のものであらう。蘭亭白翁の「よしなし草」(文政十一年刊)に、

この紀行を甲子吟行とありて、其頃印刻なければ、人々書寫してあやまり傳へたる多し。既に明和五年月下といふ人、甲子吟行の寫本を持てりけるにや、上木して標題を野ざらし紀行とせし小冊子を出せしが、あやまり多く、句はもとより祖翁の門人の名さへ書違へたる多し。其冊子に山路にて何やらと誤出せり。云々

去留の「全集」に、瀾潤云、「安永九年庚子多少庵秋瓜が門人波靜が刻せし眞蹟には甲子吟行と題す。翁の眞跡を模し、繪は略して、此所山あり、此所川などとしるす。」とある。即ち此紀行には月下の「野ざらし紀行」(明和五年刊)と、波靜の「甲子吟行」(安永九年刊)とあつた。なほ中川濁子の畫いた「甲子吟行」もあつて、文字も濁子らしく、現今大橋新太郎氏の珍藏に係つてゐる。

今芭蕉自筆模刻の「甲子吟行」と、「泊船集」中の「道の記」とを比べて見ると互に異同がある。例へば「泊船集」では、「腰間に寸鐵をおびず。云々」・「神前に入事をゆるさず。」迄の文が、「みそか月なし云々」の句の次に

入つてゐるし、「甲子吟行」には、「晝のやすらひ云々」、「茶ばたけに花見顏云々」迄が缺けてゐる。又「甲子吟行」と「一葉集」・「袖珍抄」・「七部拾遺」・「俳諧四部錄」等所載の文と比べて見ても、相互に語句の相違がある。例へば「七部拾遺」や「四部錄」には、「深川やはせを云々」の句の次に、「大井川越る日云々、道のべの木槿云云」迄の文が出てゐるが、眞蹟模刻には是等の文は、「汝が性のつたなきを泣け。」の次に來てゐる。又「泊船集」の文と是等類本とを比べて見ても違ふし、類本相互の間に於ても語句の相違、文次の前後を見るのである。尤も「一葉集」と「袖珍抄」との文は大部分同一であり、「七部拾遺」と「四部錄」の文も大部分同じである。但し「四部錄」に、「甲斐の山中に立よつて」以下の句を落してゐるのはどういふ譯か。其他「野ざらし紀行」は蝶夢の「芭蕉翁文集」、鱸魚都里の「玉田集」(?、寫本)、素水の「芭蕉翁一代集」等にも收められてゐる。因に、「春秋」所記の一本に、芭蕉が蝶といふ女の需によつて、蘭の香やの句を白紵に書いてやつた條下の文が、「赤册紙」の所記に似て詳記されてゐるとあるが、此所の文辭は何れの刊本を見ても大差がないから、素蓮所藏の寫本は特別の異本と見るべきで、後人の竄入によるものと云はなければなるまい。

「野ざらし紀行」の註本は、石河積翠の「野ざらし紀行翠園抄」の外に餘り見ないやうである。尤も輕花坊の「泊船集注解」、錦江の「泊船集解說」といふのもあつて、その中に野ざらしの註釋も入つてゐる。輕花坊の註は極めて簡單ではあるが、發句を口語で分り易く、句の傍に說明してゐる點は便利である。「翠園抄」は有名な割に親切でない。明治になつて俳諧文庫の「俳諧紀行全集」中に收められてゐる。之は佐藤飯人の補正したもので、

原抄よりはよくなつてゐる。

三、冬の日に就いて

芭蕉は貞享元年冬名古屋に至り、野水・荷兮・重五・杜國・正平・羽笠等を導き、歌仙五卷・追加表六句を殘してゐる。之を「冬の日」、一名「尾張五歌仙」と云つて、同年京寺町二條上ル町井筒屋庄兵衞の開板である。撰者は未詳であるが、「花見車」(元祿十五年刊)に荷兮の撰になつてゐるから、撰者は山本荷兮であらう。井筒屋の「誹諧書籍目錄」に、「一冬の日　一匁六分　同年　蕉翁撰　一冊」とあるが誤であらう。芭蕉は指導こそすれ、自分で撰集を作る筈はない。内容は芭蕉・野水・荷兮・重五・杜國・正平の六吟歌仙一卷、野水・杜國・芭蕉・荷兮・重五・正平の六吟歌仙一卷、杜國・重五・野水・芭蕉・荷兮・正平の六吟歌仙一卷、重五・荷兮・杜國・野水・芭蕉・羽笠の六吟歌仙一卷、荷兮・芭蕉・重五・杜國・羽笠・野水の六吟歌仙一卷、追加、羽笠・荷兮・重五・杜國・芭蕉・野水の表六句より成つてゐる。

撰者荷兮は山本氏(竹人の「全傳」に森田氏とある)。通稱武右衞門、又は太一。或は八郎右衞門。尾張熱田の人。名古屋堀詰町に住し、尾州藩士とも醫者とも傳へられる。橿木堂・撫贅庵と號する。貞享時代が全盛期で、元祿以後餘り人から注意されなくなつた。「木枯に二日の月の吹き散るか」といふ名句を吐き、木枯の荷兮といふ異名を取つた。享保元年十二月歿。行年未詳。許六の「歷代滑稽傳」に、「踏通・荷兮・野水・越人・木因等は勘當の門人なり。云々」とあるが信じられない。それは芭蕉が遷化の年名古屋へ立ち寄つて、荷兮と歌仙を卷いて

ゐる事でも分る。去來の「答許子問難辨」に、

尾陽の荷兮一書を作る。書中所々先師の句をあざけると聞けり。我いまだ此書を見ず。この荷兮や先師世にます內ひたすら信仰す。一とせ故有て野水・凡兆と共に先師に遠ざかる。先師その恨をすてゝ、遷化の年東武より都へ赴給ふ道名古屋に至りて、彼が柴扉をたゝきて、一二日親話したまふ。彼またこれを崇め尊ぶ事舊日の如し。翁遷化の時、東武の其角・嵐雪・桃隣等東山に於て追悼の會をなす。かれ蕉翁の門人の數に加りて着座す。今書を作りて翁をあざける。もつとも惽むべきの甚しきものなり。彼が心操をかへりみるに、翁います時は、先師を賣ておのれが浮世のたよりとし、先師歿し給ひては、また先師を賣て、初心の輩に今は先師に勝りたりと欺き導んためなるべし。云々

とあるが、私はまだ荷兮の作つた一書なるものを詳にしないから分らないが、或人は荷兮の「橋守」(元祿十年刊)が其禍をなしたといふ。去來の文意を推すと、其一書は芭蕉歿後のものらしく、それでは勘當說に當らない。「一歳故あつて遠ざかる」といふは、「曠野後集」(元祿六年刊)出版のためであらうか。同書は舊風に純でなく、他門の句迄取入れてゐるから、そこが芭蕉の不快を買つたものか。尤も芭蕉はそんな事で怒るやうな人でもなからうから、或は支考あたりの蔭口を許六が眞に受けて、勘當說を流布した結果でもあらうか。「曠野後集」や「晝寢の種」(元祿七年刊)以後になると、荷兮も昔日の俤なく、流行には後れるし、句風は衰へて來るし、自然と芭蕉と遠ざかるやうになつたのであらう。併し溫厚な去來が憤るやうでは、荷兮に輕薄な行爲があつたものと見なけ

ればなるまい。

杜國は坪井氏。通稱南彦右衞門、名古屋伊勢町の米屋であつた。屋號を飾屋彦兵衞と云つた。空米賣買の科によつて、伊良胡へ流され、そこで死んだと傳へられてゐる。元祿三年五月五日歿。行年四十餘歳。文曉の「芭蕉談」によると、杜國は伊良胡の漁師の子で、伊良胡の犬獵神社の告子、幼名を萬菊と云ひ、幼時より神才があつた。後東都の林家の門人となり、詩文を學び、又尾張熱田の神官に就いて神學に志し、荷兮に邂逅して風雅に交つた。芭蕉云、杜國は俳諧を我に學び、我よりも利い。一を聞いて、十を悟る。我又神學を杜國に聞き、杜國より鈍い。十を聞いても一も悟らない。冬の日の卷々一句も杜國が句に斧を入れた事がない。其後吉野行を約したが、時をたがへず、五年の後我鄕の蓑蟲庵を訪れた。性質として妄語・綺語を言はない。人の短を說かない。閑雅・柔和で、我道の助と思つた所、計らず不幸短命にして死せりと聞く云々と歎いたとあるが、芭蕉談の說だから悉くは信じられまいが、越人の「鵲尾冠」に、「杜國子は予が羇客たるを憐み、旦暮懇情を盡さる。彼は富めり。我は貧なり。與へて報を思はず。同志斷金の情淺からず。更に予が俳諧の手を引き、泣み笑みせしも、去て三紀に近し、……彼人不幸に沈み、舊里を辭せしを、芭蕉老人江府に聞き、甚だ憂へて、踏ㇾ鞋鳴海に來りて、予に消息して其道路を問ふ。先登して枯藤を引き、杜國が草堂に至り、三人燒ㇾ桒夜を明かし、同じく馬を並べて、伊良古崎に逍遙せり。云々」と記す所によれば、實直な人物のやうには思はれる。「嵯峨日記」にも、「夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺る。云々」とある。芭蕉は彼が篤實な性格を愛して、思が深かつたのであらう。一

・說に芭蕉は杜國の念者であるといふが信じられない。昔は衆道好きの芭蕉でも、芭蕉庵へ入つてからはそんな形跡はあるまいと思ふ。どら者の其角・嵐雪が氣がつまつて面白くない芭蕉である。勝峯氏は「年輩が同一であつたしするので全然虛妄である。」(「蕉門分布史觀」)と言つてゐるが、單に年齡の問題でなく、道德的に餘程內省されたものと見るべきである。

芭蕉は寬文に古風、延寶に談林、天和に新風を鼓吹し、貞享に「冬の日」と移つて來た。卽ちそれ以前に於ては正風の萠芽はあつたにせよ、醇正な正風確立は此集以後と見るべきである。許六の自讃之論」に、「愚老（芭蕉）が俳諧は五歌仙に至らざる人一生涯成就せず。大事なり。覺悟せよといへり。云々」とある語を以てしても、「冬の日」は芭蕉の血脈を見出し得たる自信ある撰集と思はれる。殊に此集の風聞は京・江戸に響き、獨り尾張地方にとゞまつたのではなかつた。それは各門人の說、例へば其角は、「冬の日といふ五歌仙にてひゞらぎ侍り、云々」(「雜談集」)、風國は、「連歌は冬の日といふ五歌仙にひゞき、云々」(「泊船集」序)、去來は、「先師の變風に於ける、虛栗生じて次韻枯れ、冬の日出でて虛栗落ち、冬の日は猿蓑におほはれぬ。云々」(「答許子問難辨」)、支考は、「冬の日・春の日の二集に正風の門を斷てり。云々」(「發願文」)、嵐雪は、「全體は三度程の流行ぢや。云々」(「七部さがし」)などの言を見ても想像されよう。從つて本集は芭蕉變風の一時代を劃すべき撰集として古來尊重された。こゝに注意すべきは本集が安永・天明の新興俳人に非常な衝動を與へ、當時の俳壇を動搖させた事であつた。それは尾張の曉臺一派の鼓吹であつた。曉臺は「冬の日」の調を好み、それより自己の新風を開拓し

ようと努力した。彼は「熱田三歌仙」(安永四年刊)の序詞に、

さきに名古屋五歌仙・熱田三歌仙は一雙のえらびとや。冬の日撰成り、次で顯れ出づべきを、卷のしりへとゝのはざる間に〳〵、とくも春の日の卷の世にもれ出しより、此撰びかひなくやみたりなと覺ゆ。世上冬・春のふた卷をもつて、左右の如くなし侍るもいかゞあらむ。我徒らには熱田の卷を五歌仙に合せて學びさしむ。云々

又「桃靑二十歌仙」の序にも、「桃靑二十歌仙は畫龍也。畫龍ありて後眞龍あり。冬の日五歌仙これなり。云々」などとあつて、貞享元・二の調に準據して、一方の覇を唱へようとした。几董の「明烏」の序(安永二年)を見ても、「既に尾張は五歌仙に冬の日の光を挑んとす。云々」と云うてゐる位だから、曉臺が如何に五歌仙に私淑したかが分らう。

蓋し安永・天明の新派俳人が天和・貞享の調によつて、各自一流を樹立しようとした考は肯かれる。彼等の好む所は自然生活の表現でなく、生活を美化し空想化した境地に自己を置かうとするのであるから、猿蓑のやうな質實さでは滿足出來ず、炭俵のやうな脫落さでは物足らず、やはり、「冬の日」・「三歌仙」・「初懷紙」と云つた所に、彼等の感歎があり、根據があつたのであらう。「冬の日」も創作態度が、比喩とかもぢりとか云つた言語の遊戯を脫しかけた點は一段の進步であるが、曲齋の言ふやうに、趣向に巧を求め、句作に紅粉を施す所は、私共からいふと、一種の美しい世界を空想して、その滋味にあこがれようとする風で、自己の生活を外的に取扱つてゐる

かの觀がある。從つて「冬の日」時代の調にはしみ〴〵する味がない。人生の深刻な味にふれてゐない。想の空想化は巧である。美化した世界も藝術的に表現されてゐる。併しその想は自己の實人生の感情の動搖ではない。餘りに花々しい。餘りに面白さうである。芭蕉の正風は「冬の日」で盡きては居ない。「冬の日」が猿蓑で覆はれる時代はやがて到來するのである。

併しそれは別として五歌仙中最初の卷が一番よく出來てゐるかと思ふ。二ノ表の二句目あたり、

いまぞ恨の矢をはなつ聲　荷兮
ぬ。す。人。の。記念(カタミ)の松の吹をれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜國
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水
しら〳〵と碎けしは人。の。骨。か。何。　杜國
烏。賊。は。え。び。す。の。國。の。う。ら。か。た。　重五

想も巧だし、變化も鮮かで面白いが、やゝともすると新奇な空想に耽らうとする。

次の歌仙、初裏三句目あたり。

床ふけて語ればい。と。こ。なる男　荷兮

緣さまたげの恨みのこりし　はせを
口おしと瘤（フスベ）をちぎるちからなき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五

寐物語に氣がつくと、緣談をさまたげた從弟だつた。瘤があるから破談になつたなどと、奇拔な事を云うて居るが、此位なら未だ面白く讀める。併し次の歌仙、二ノ表七句目あたりへ來ると、變つた趣向を立てようとして、ぎごちない言語表現を弄してゐる。

雪の狂呉の國の笠めづらしき　荷兮
襟に高雄が片袖をとく　はせを
あだ人と樽を棺に呑ほさん　重五
芥子のひとへに名をこぼす禪　杜國

是等は「虛栗」の舊染のむし返しである。次の歌仙は表から難しい事を云つてゐる。

炭賣のをのがつまこそ黑からめ　重五
ひとの粧を鏡磨（トギ）寒（サム）　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜國

何の事だか一寸考へた位では分らない。かゝる重苦しい曲節を凝らさずともよささうな氣がする。

「冬の日」の註書は升六の「冬の日注解」が最精しい。刊行は文化六年正月だが、後には少なくなり、「婆心錄」に、「今坂木全からず。」とある。闌更の「俳諧七部解」(寛政六年刊)、之は北枝・東花坊・麥林・去來の聞書、又は希因・幾曉の兩說をも合せたもので、元來は七部集全體の注解を出さうとしたのだけれど、出たのは冬の日の解だけであつた。之も曲齋は「板木全からず。」と言うてゐる。虬戸庵素綾の「七部木槌」(寛政七年序)、素綾の序に、「寛政卯のとし泉松山聖廟の麓、礫川の流に短きあしがきの筆を濯ぎ、虬戸の窓の螢火に對し、先冬の日の影を仰、七部木槌と題して、云々」とあるから、稿成は寛政七年だつたと見える。なほ次篇も出す考でゐたらしいが、之も冬の日以外は存しないやうだ。刊行は寛政九年か。註は大體簡單で、たいして參考にもならない。先年岩波書店から露伴學人の「冬の日抄」が出た。

四、熱田三歌仙に就いて

芭蕉は貞享元年冬、同二年春熱田に遊び、その地方の人々桐葉・東藤・工山・叩端等と附合つた。併し其歌仙は「冬の日」・「春の日」の名聲に壓倒されて、刊行する機會を失つた。暮雨庵曉臺之を歎き、我徒には熱田の卷を冬の日に合はせて學ばせると言つて、此三歌仙に脫錐の時を與へたのが、安永四年五月であつた。收める所發句四十四、歌仙四卷(附錄一卷)・三ツ物四・附句六、他に曉臺門の四季混題の發句百二十七を入れてゐる。前條旅行吟としてあげた中の芭蕉の發句・連句はこゝでは略する。

「三歌仙」の調は「冬の日」と甚しき相違を見ない。但し「冬の日」ほど巧な句がつゞいて出ないやうである。

一輪咲し芍藥の窓　東藤
碁の工夫二日とぢたる目を明て　芭蕉

閑寂な趣を巧に捉へて、天明俳人の喜びさうな句であるが、次の附句に、

周に歸ると狐なくなり　桐葉

と奇怪な空想趣味の句を出して、折角な情趣を途切らしてゐる。「三歌仙」には一體に怪異な空想趣味の句が多く出てゐる。例へば、

秋の烏の人喰ひに行。　芭蕉
浪よする鯨の骨に花植て。　東藤
鶺鴒の尾を蜘の圍にかけられて。　叩端
韃靼の東の寺の月凄く。　東藤
舍利とる瀧に朝日うつろふ。　芭蕉
蝦夷の聟聲なき蝶と身を佗て。　芭蕉

是等は皆前時代の遺調である。五明の「小夜話」に、眞の調として、「初懷紙」・「冬の日」・「熱田三歌仙」をあげてゐるが、此内で三歌仙の連句が劣るかと思ふ。曉臺の鼓吹は曉臺が尾張の人であり、「冬の日」・「春の日」の流行に連れて、三歌仙が餘り知られてゐないといふ所から、拾ひ上げて出版したのであらう。作の價値は「冬の

日」・「初懐紙」の方が上である。暁臺はなほ三歌仙の序詞に述べて、「かくて其巻のはし〳〵を摘、こぼれたるをつゞりて、蓬がしまといひ、皺箱といひ、右はこれ後のわざにて、巻のつら物語に書なしつ。其終もたしかならず。廣くは世に知られずなりぬ。云々」とあるから、「蓬が島」・「皺筥物語」は是等の補遺と見られてゐた。

五、歸庵（貞享二年四月――同四年八月）

六月二日、東武於小石川百韻興行。連衆は淸風（略傳後出）・芭蕉・嵐雪・其角・才丸・コ齋・素堂である。

涼しさのこりくだくるか水車　淸風
靑鷺草を見こす朝月　芭蕉
松風のはかた箱崎霧けくて　嵐雪

（「一葉集」下略）

九月十五日、其角芭蕉庵に來り、「松原のすきまを見する時雨哉」といふ夢想吟を語り、芭蕉から、「現にはかかる口淸き姿は及ぶまじ。」と賞められた（「雜談集」）。その芭蕉が乞うて食ひ、貰うて食ひ、さすがに年の暮れければと述懐して、

めでたき人の數にもいらむ老の暮

と淋しく笑つてゐる。

歳が明けて貞享三年、芭蕉四十三歳となつた。

伊勢が賣家にも來たり千代の春

正月、其角・文鱗・枳風・コ斎・芳重・杉風・仙化・李下・擧白・朱絃・蚊足・千里等と百韻滿尾。此卷を「丙寅初懷紙」と云つて出版された（次項參照）。

三月二十日、芭蕉庵に於て清風・擧白・曾良・コ斎・其角等と歌仙興行。

花咲て七日鶴見るふもと哉　　芭蕉
懼（オヂ）て蛙のわたる細はし　　清風
足踏木（アジロギ）を春まだ氷る筏して　　擧白

（「一ツ橋」下略）

三月某日、草庵に於て古池やの名句を吐く。支考の「葛松原」（元祿五年刊）に、

春を武江の北に閉給へば、雨靜にして鳩の聲ふかく、風やはらかにして花の落る事おそし。彌生も名殘をしき比にやありけむ。蛙の水に落る音しば〳〵ならねば、言外の風情この筋にうかびて、蛙飛こむ水の音といへる七五は得給へりけり。晉子が傍に侍りて、山吹といふ五文字をかふむらしめむかとおよづけ侍るに、唯古池とはさだまりぬ。しばらく之を論ずるに、山吹といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして實也。云々

とある。古池やの句を作つた草庵の情景誠に面白く説かれてゐる。支考は「俳諧十論」に、「天和のはじめならん、

武江の深川に隱遁して、「古池や蛙飛込む水の音」といへる幽玄の一句に自己の眼を開きて、是より俳諧の一道は弘まりけるとぞ。云々」と言つて、古池やの句が正風開眼の吟であると斷じてゐる。然るに越人は「不猫蛇」に之を駁して、「當流開基の次韻も知ぬ故、蛙飛込の句より翁は眼を開き申さるゝの、夢想に滑稽の傳を傳へられしなど妄言を申。蛙飛込の發句は、次韻より十年も後に、予が所へ書越されたる發句なり。其角が脇あり。芦の若葉にかゝる蜘の巢といふ脇なり。云々」と論じてゐる。若し此句を越人が「次韻」より十年も後の作であると考へたならば、それは誤である。古池の句は貞享三年仲秋下浣の「春の日」に出てゐるから、貞享三年春の吟と見るべきで、越人の許へ「次韻」より十年も經つて書き送つたとしても、作は貞享三年でなければならない。又此句が正風開眼の句であるとか、「次韻」が當流開基であるとかいふ論も、支考や越人の獨斷で、信じられる事ではない。若し延寶八年に枯枝に烏云々の句があつたから、其歳の作なる「次韻」が當流開基の集であるとしたならば、延寶五年に梢よりあだに落ちけり云々の句があるから、延寶五年の「江戸三吟」が正風の始めだとも云へようし、延寶七年に夏の月御油より出て云々の句があるから、延寶七年の杉風との兩吟百韻も當流開基の集とでも云へさうだがさうは行かない。正風の萠芽は延寶五年にでも八年にでもあつたけれど、それは單なる芽生であつて、一般に熟して居ない。芭蕉の詩境は漸々進展し來つて、「次韻」より「冬の日」の方が餘程正風的になつてゐる。此點からいふと、越人より支考の説の方が卓見であるやうだが、何も此句によつて正風を開眼したわけではない。支考も積翠園の説の如く、古池の吟に今の俳諧の風姿をはじむ、とでも言つたならば穩健かと思ふ。併し支考は

さうは言へない男だから、私共は正風開眼にごまかされず、それ以前の歴史的研究を怠つてはいけない。

其角が上五文字を山吹やと置き換へたといふ說は、「句選年考」によると、尾州鳴海の千代倉次郎八所持の芭蕉眞蹟に、

山(古)吹(池)や蛙とびこむ水の音　芭蕉

蘆の若葉にかゝる蜘の巣　其角

文通に曰、貞享二年春、先達而之山吹の句、上五文字此度句案かへ候て、別に認遣し候。初めのは反古に被成可被下候。此度其角上方行脚致候。是又御世話賴入候。知足樣　芭蕉。

右眞蹟其角筆にて古池と直し、幷脇の句其角自筆にてありと、或行脚僧語り候。信僞は未だ知らず。

とある。之によると初めは山吹やと置いたのを、後に古池やに直した事になる。又芳山の「曉山集」(元祿十三年刊)に、山吹や蛙飛こむ水の音ならば、行の心に叶ふだらうが、一說に古池やといふのでは、行の姿に叶ふやうにも思はれないとある。併し千代倉次郎八所持の芭蕉眞蹟の手紙はどうも疑はしい。第一貞享二年春といふ年號が信ぜられない。貞享二年春は芭蕉が甲子吟行中の事である。且つ又其角の上方行脚は貞享元年二月發足で、秋の末歸庵して居る。貞享二年は其角は病氣で、庵を分ち深川に住み、旅行の樣子はない。殊に古池やの吟は貞享三年春の吟で、貞享二年春の作ではない。又こゝに異說がある。それは甲斐國巨摩郡鳥澤・犬目兩村の間に、三家坂といふ坂があつて、その坂の上桑畑の側に小池がある。口碑によると、こゝで芭蕉が古池やの句を詠んだの

であるといふが、之も信ぜられない（啓庵の「桃青傳」出）。口碑などは當にならないのが一般である。
一體此句は仙化の「可般圖」（蛙合、貞享三年三月刊）の卷頭に出た句である。此書は芭蕉の門人が深川の芭蕉庵に會し、各蛙の句を衆議判にかけた句合で、仙化・素堂・文鱗・嵐蘭・孤屋・李下・去來・嵐雪・破笠・ちり・山店・杉風・蚊足・曾良・其角等二十番の興行であつた。即ち卷頭一番に、

左

古池や蛙飛こむ水のおと　　芭蕉

右

いたいけに蝦つくばふ浮葉かな　　仙化

此ふたかはづた何となく設けたるに、四となり、六と成て、一卷にみちぬ。かみにたち、下におくの品、おの〳〵あらそふ事なかるべし。

とあつて、判の文字は何とも記されてゐない。恐らく古池やの句が秀逸で、周圍の門人を驚かしたので、此句を卷頭に置いて、書記役の仙化の句と假に合せて、皆が蛙の句合を試みたものであらうと思ふ。持といふ譯ではない。これだけは衆議判を避けたものらしい。それだから判の字が無いのであらう。仙化の句は芭蕉の句に比して、情趣と云ひ、氣品と云ひ、全く劣つたものであるが、芭蕉の句に合はせたのは、撰者であるためであらう。古池やの句は後世一部の人から不出來の句だとか、或は調が整はないなどと云はれたけれど、それは此句が尊崇の限

を盡された反動と見るべく、その當時既に稱揚された事は、「蛙合」の作があつたのでも分らうと思ふ。又和及の「俳諧番匠童」(元祿四年刊)にも、有體に云つておのづから風情おもしろき發句の中に數へられ、去來からも絕唱中に數へられ、「先師の傍にある思をなし侍る。云々」(芭蕉談中の說でどうかと思ふが)とまで言はれてゐる。蓋し此句が名句である事は、芭蕉歿後久しからずして喧傳されたらしく、そは許六・野坡の論難狀を集めた嘯山の「雅文せうそこ」(天明五年刊)を見れば、一層明白な理解を得る事であらう。即ち

翁の古池の句いかゞ御聞候や。おそらく此句を會したるは我ならでであるまじく候。其角も山吹のまよひ、嵐雪も上京の時分、五老井に來りし比、せめ申候に埒明不レ申候。李由・正秀など日々問ども今に答へず。加賀に北枝ありと翁の譽め給ひしも、あか〳〵の句を聞たる故ながら、中々古池は心得なく、去來・凡兆・丈草とても翁の微笑し給ふ事不レ承候。我のみ汝は聞得たりとて、芭蕉庵に於て稱美ありし。貴丈いかゞにや。意は差置、蛙の聲ともいはず、蛙の飛を發句にして、いかなる所が名句にや。名句〳〵と唱へて味ひたる者はなし。云々(九月廿日、許六より野坡宛の書狀)。

○

翁の古池の句貴丈ならでは聞得るもの天下になかるべきよし。然るを今天下に名句といふ事は、俳諧せぬ者も申候。素堂も四句の名句の內に撰出し候事、集御覽にて御存あるべく候。翁みづから名句とふれ給ふにや。又其許が名句と聞てから天下に觸れられ候や。不審に候。翁の口よりも此句名句也と承らず。其許よりも承

らず。かく日々に文通致候拙者かくのごとくに候へば、諸國の人猶更の事に候。さるを天下に聞ものなくて、誰か名句といはんや。此句の意は翁によく承り置候事、先年共許へ物語申候。されどいかゞ翁の說れしやとも御尋もなく候。もとより我も翁の稱美にあづかりしとも御咄なく候。定而たかぶり、我をおとし入れ、句意を書あらはさば、我ものにせむとの謀と存候。其角・嵐雪をはじめ素堂杉風其外此句を聞得ざるものは、翁に句解を聞、きゝ得る者は稱美せられ候。江戸の門人など一人も合點いたさゞる者はなく候。北枝も先年のぼりし比、咄合候に、能々聞得申され候。李由も翁に聞申され候よし。共許はいまだ聞給はざる事明白に候。さればこそ聞得たる人を知り給はず候。何を聞き、是也と極め置かれ候や。甚だ覺束なく候。一分は格別、門人衆中へわけもなき事など傳へられまじく候。翁の名玉に瓦の土ごしらへを說に同じうして、罪深かるべく候。(十月五日、野坡より許六宛の書狀)

蕉門の諸弟が爭うて此句の眞意を知らうとした所を見ると、餘程魅力を持つた句だと見える。そこで名句として喧傳されたのであらう。慧眼な支考はこゝに着目して、此句を正風開眼の句と宣傳したのかも知れない。後世に至る程崇拜は甚だしくなつた。二三例をあげると、康工は「俳諧百一集」(明和二年刊)に、芭蕉像の贊として、「いかなる意味や有けん、吟じて涙を流し、唱てさびしみ自然とあらはる。中々申までもなし。凡慮の及ぶ所にあらず。玄々妙々にして獨步也。信ずべし。仰ぐべし。」とあり、鼻中庵三力の「俳諧第一義集」(天明三年序)には、「轉る所實に能迷(カスカ)なり。意味說々ありといへども、道體の句悉く自得して、心眼を開くにあらざれば、正諦第

一義明かならず。蕉翁枯野の末に歸し給ふといへども、日夜眼前在せり。とく對面して微笑せよ。云々」とある。「俳諧芭蕉談」に、「芭蕉は俳諧の達磨なるは。」と丈草から言はれたとあるが、古池の句は後には禪の公案のやうに取扱はれて、禪僧の着語を求めるやうになつた。春湖の「古池眞傳」（慶應四年刊）の如きはそれである。本書は何人の筆錄か詳かでないが、久しく以前よりあつたもので、それを春湖が書寫して出版したもので、此句を佛頂との問答に附會して、一日佛頂が六祖五平と共に芭蕉庵に至り、近日何所有といふと、芭蕉答へて雨過洗青苔といふ。和尚、如何是青苔未生前といふや、池邊の蛙一躍して水底に入る。芭蕉音に應じて、蛙飛込む水の音と答へたら、佛頂莞爾として珍重々々と唱へ、偈を認めて歸つた。嵐蘭曰、冠の五文字を定めたまへ。桃青曰、諸子の高論を聞かう。門人各首を捻り、杉風は宵闇やとする。嵐蘭は淋しさにと案ずる。其角は山吹やとする。桃青いち〳〵聞き、我はむしろ古池やと置かうと言つたので、衆皆あつとばかり感歎したといふのである。芭蕉研究の大家たる何丸までも「句解參考」に、「不可稱・不可說・不可思議の一句なり。つら〳〵思ふに、風聲・水音萬物のこもる意あり。されば此水の音には萬物こもる。萬物一に歸す。一は空也。空々・寂々たる水の音を、他より評するは僭上の沙汰にして、玉に漆をぬり、黄金に箱をするの說に等し。云々」と禪學者のいふやうな事を言つてゐる。

蓋し古池の句は音が主眼であらう。音と云つた所に、觀念的な氣持が籠り、意味深長に聞える。其場合の光景は春雨の雫の乾かない靜かな夕暮だらうが、或は月光朦朧たる春の夜だらうが、句の鑑賞に重要な關係を持つま

いと考へる。たゞ蛙が飛込む。ぽちやんと水音がする。後がシーンとなる。咲き過ぎた花がハラ〳〵と散りかゝる。芭蕉は音する方を見やつて、じつと思に耽ると云つた心持が、幽玄・清寂でよいのだらう。芭蕉の叙景句としてはむしろ平凡ではあるまいか。叙景でなく、氣分の象徴である。そこに魅力のある句だと考へる。麥水の「蕉門一夜口授」（安永二年刊）に、

古池の句に無形の珠ありとはいかん。

答曰、此句初心蕉門の人は名吟・秀逸のやうに思へるもあり。さにあらず。只是翁常の吟にして、強ていはば少は不出來なる方ならんとも思へり。然れども貞享の頃の門人も、此句より正風の心を知る。今の人我輩の如きも、此句より高情を悟る。誠に芭蕉の梯階なるべし。門人一論ありて、此五文字山吹やとあらば如何にと。然れども忽ヶ悟ッて古池に服すとや。……さらば強て此句論を云はゞ、五文字山吹にもせよ、藤にもせよ、上に見るものあれば、景の句にして、形の吟也。世人多くは閑靜を賞するとし、或は侘、或は寂、只此細々と稱すれども猶さにあらず。是は只音を聞クの吟也。古池は音の蛙なるべき理をいはむとのみ。形にあらず。蛙飛込と云ふも蛙を見たるにはあらず。音の理をいふ。水も亦同じ。然れば音といふ字のみにして、音といふ時ははや第二義なり。我等好き者音の句を案じなば、蛙飛込ム音淋しとかすべし。句弱ク理淺ク聞べからず。云々

此論は當時の俗論の反動と見るべきであらうが、音を主眼として、叙景の善惡を論じない所は、さすがに一隻眼

を持つて居る。

古池の德は廣大無邊であつた。芭蕉の人格が崇拜されゝばされるほど、其追隨者は古池の德化を說いて止まなかつた。芭蕉は遂に朝廷から飛音明神といふ神號を賜はつた。「久夢日記」（文化三年成か）に、「芭蕉多年の俳德の御褒美として、碑によつて雲上より下し給はる號、飛音明神となり。そのもとに、古池や蛙飛込む水の音。」とある。古池の傳說化もこゝ迄行けば無上の光榮である。

此春（三月）、芭蕉は病んで、草庵に籠つた。

觀 音 の い ら か 見 や り つ 花 の 雲

其角の「いつを昔」に、「病起の眺望なるべし。」とある。芭蕉は元來病弱であつた。句集を見ても病氣を述べた句もあるし、門人から旅行の際病軀を氣遣はれた事もあつた。痔があり、胃腸も惡るかつたやうだ。殊に貞享三・四の交は病氣勝ちであつた。

四月、常陸の潮來本間道悅に醫を學び、起請文を出したと傳へられる。之は物部(モノベ)道意といふ人と連名で、確かなものだらうとは思ふが、二三の學者は之を疑つてゐる。起請文は成美の「隨齋諧話」其他に見え、今は「ひろはの風」といふ卷物の一部となつて、本間家に傳はつてゐる。（卷末補遺其一參照）

相傳醫術啓迪院一流、秘書秘語邪豈漏佗乎。若於違背者、大小神祇、別而生緣氏神、可蒙御罰者也。仍而起請文如件。

物部道意 □

貞享三年 丙刁 四月十二日

　　　　　　　　　　　荢尾桃青 □

本間道悅様

（「ひろはの風」に據る）

本間家の記録によると、初代道悅・二代道因・三代道仙・四代道意・五代玄琢・六代益謙・七代棗軒以下連綿として今日に及んでゐる。初代道悅は武門を遁れて江戸に來り、啓迪院岡本玄冶に醫を學び、芭蕉は小田原町に旅宿し、自分は靑物町に寓居し、川一つを距てゝ住んで居たので、常に親しく面を合せて居たが、其後芭蕉は深川に、道悅は常陸に居を移し、往來も疎遠になつた。然るに芭蕉は貞享卯年（四年）歸鄕の別を告げ、且は鹿島の月見がてらに自準亭（道悅亭）に來り、時雨降る頃迄杖を留めた。又餞別の俳諧・詩歌をまとめ、伊賀餞別と題して、江戸から贈られた（「伊賀餞別」、自準亭六世義香の序に據る）。四代道意は道仙の實子で、醫を南臺先生に學び、俳諧を麥林舍乙由に受け、墨齋左右と稱し、柳居・烏醉・秋瓜等と名を均しくしたといふ。其頃閣老阿部能登守吐花と號し、俳諧に高名だつた。或時左右共邸に召され、俳談の末、常陸のくすし本間左右に初めてあふと前書して、「うはさいうた是も常陸の友千鳥」といふ句に、千鳥を末に書いた一軸を賜はつた。其後もしば〳〵

召されたが、家藏の蕉翁眞跡を所望されたので、止むを得ず、鹿島詣の草稿、山口素堂十三夜の文を芭蕉の淸書したもの、其他一品都合三點を吐花侯へ進上した。なほ本間家には伊賀餞別一卷・深川ノ夜・芭蕉及び越人の附句一卷（「曠野」出）・阿彌陀坊前文發句一幅（關切の名印がある。芭蕉遷化前の書で見事なもの。併し水戸侯小川村御巡行の節、蕉翁の眞跡御覽遊ばされ、旨命あつて家藏殘らずお目にかけ、此一幅を献上し、其後は水戸城内御納戸に收まる。）・素堂亭集殘り發句一幅・著聞集拔萃（之は芭蕉が著聞集を讀んだ時、有用な個所を書き拔き、本間家へ預け置いたものだらうで、はじめは五十枚ほどあつたが、追々人に讓り、一枚殘る。それも今は無いさうである。）・日暮漢宮手本二行・「花すゝきあまりまねけばうら枯て」といふ「ひさご集」の附句を、紙の裏表・横竪に手習ひたる紙一枚（分家にて紛失）・翁椀六個（筥のふたの裏に、此食器は古芭蕉翁貞享年中鹿島行かひのいりの寄宿として、常に用ひ給ひし器なり。今文化壬申（九年）のとし改て收め畢。墨齋藏。と書く）・芭蕉と道悅の畫像（本間家六代本間益謙贊、物いはぬ草木を友や初時雨、七代贈從四位本間棗軒畫）などが傳へられた。去留の「全集」にも、

本間自準は常陸國茨城郡小川村の醫にして道悅と云。翁の醫の師にて、貞享三年丙寅四月十二日物部道意といふものと連名の誓詞あり。今其家に藏す。又鹿島詣の時止宿ありし事は數日なりと云。其時翁の用ひられし四ツ椀をも揃つどふ。椀の模樣はしのぶ草をつけたり。道悅俳諧は翁に學び、俳名松江と云。道悅より五代、今玄琢と云。其外にも翁の遺物多くたくはへしに、今は鹿島詣・あみだ坊の句・殘菊の宴の句・越人と

兩吟・ふか川の夜と題せる卷・伊賀餞別の詩歌發句・自筆の古今著聞一冊のみ殘れりとなん。

とある。私の見た翁椀は黑塗の立派な器で、ふたに草の模様が付いてゐたやうに記憶する。一茶が文化十四年五月廿二日本間家を訪れて、親しく芭蕉の遺物を見て、「したはしやむかししのぶの翁椀」といふ句を殘してゐる所を見ると、椀は確にしのぶ草の模様である。

本間家は代々俳人を出した。道悅は松江と號し、道因は友五とある。松江の句は「續虛栗」に一句見え、友五と芭蕉其他の人との連句は「一葉集」に見えてゐる。芭蕉の潮來往來は貞享四年以前からあつた事だらう。芭蕉も道悅に醫を聞き、道悅も俳を芭蕉に問ふといふ交であらう。たゞ物部道意の何人であるかに就いては、從來の芭蕉傳一も言及して居ない。私は昭和二年二月偶然物部道意の一族なる信道の子孫片山粂城氏の訪問を受け、其大體を知る事が出來た。氏は當時鹿兒島市草牟田町に住し、鹿兒島縣立工業學校に勤務されて居たやうだ。實に篤實な人で、親しく鄕里の文獻を調べ、若輩未知の私に教示してくれた事は、感謝に堪へぬ次第である。次に其大略を言はう。

來書の中に元祿七年三月と同年五月廿八日附の古文書二通があつた。前者は道意と片山惣兵衞なる人との關係を主に述べたもの、後者は道意家と片山信道との關係を敍したもので、何れも道意の孫信親の記せる所である。この文書は餘り能筆ならず、誤字も多く（粂城氏の言）、文意十分判明しないが（之も粂城氏の言、余も同感）、大體は分る（原文漢文）。先づ前者の記錄によると、眞田彈正守の家臣で、少身ではあるが、知行を貰ひ、譜代の者

に片山惣兵衛親宗といふ人があつた。隱居して醫術を尊んだ。親宗の友人に小三郎吉親（入道謂ニ道意一）といふ人があつて、親宗と親しく、兄弟の契約を結んだ。親宗が本間某の傳受を承けたのは、吉親が物部の住太夫の子孫であつたからである。吉親の先物部氏は久しく土民の中に落ちて居たので、系圖を疎にした。吉親は道悅居士の情で、江戸の町醫・屋敷醫・典藥頭となつた。併し姓氏が無いので、親宗の氏を取つて片山氏と云つた。そして常に酸漿（カタバミ）の紋を用ひてゐた（今に龜甲に酸漿を常紋とする由。）云々とある。吉親即ち道意の鄉里は近江國伊香郡西物部村で、こゝにあげた片山惣兵衛と鄕里を同じくしたものか詳かでないが、恐らく惣兵衛も西物部村の人であつたのだらう。

道意は何歳で歿したか詳かでない。歿年は同村雙林寺の過去帳に、

妙照　寶永八卯正月五日　ちよろ、道意伯母

道意　享保十四酉十二月十四日

　　　寂意　享保十二未二月二十日　道意息

妙貞　享保十六亥六月十五日　道意妻

とある。併し道意屋敷（道意が住んで居つた西物部村の屋敷跡か）の所有者片山政治郎氏の內佛掛けの法名には、

法名　釋道意

享保四巳亥稔八月十四日

釋一應

ともある。粂城氏の說には、此內佛掛け圖は釋道意の入寂の日を缺いてゐるから、享保四年八月十四日は釋一應の歿年ではなからうか。併し雙林寺過去帳の享保十四年十二月十四日歿では、道意が餘り長命に過ぎるやうだから、或は享保四年歿の方が眞であるかも知れないとある。若し享保十四年歿だとすると、道意は芭蕉の歿後三十五年も生きて居た事となり、道意が貞享三年道悅に起請文を入れた時は、芭蕉よりずつと年下のやうに思はれて、道悅に出した起請文の芭蕉は、諸人といふ意味の連名らしくも思はれる。

道意屋敷所有者片山政治郞氏方には、道意の所持した人體圖や醫術に用ひた器物、東皐心越禪師の書いた竹の字の幅（中央に大きく竹の字を書き、右に東皐大莽夫書、左に「何一日可無此君哉。附與本間翁」とある。粂城氏の來書に、「此幅の本間翁とあるは、道意か、又は其師道悅かを知らず候へ共、若し道意なりとすれば、後にかゝぐる我が宗家の古文書（元祿七年）に、道意の孫信親とあると符合し、云々」とある。道意は本間姓を名乘つて居つた。それは道意の印象を見ると、周圍に本間、道意、印面に希志とあるし、又他に一つ道意屋敷から發掘した石印にも本間希志とあるから、心越から附與された竹の字の幅は、道意に與へられたものであらう）。芭蕉から道意に與へた「山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ」の色紙（これは政治郞氏の先々代か、或はもう一代先きの作平といふ人が、金五兩で賣拂ひ、その金で道意追善のため、雙林寺の本尊の臺座を寄進した。その臺座は今に殘つてゐる。）

などがあつた。其他芭蕉の眞筆草稿もあつたが、女世帯の時散逸した。但しその中の一片たる「いづくしぐれくさを手にさげてかへる僧　たうせい」とあるものは、奥田休七氏方に秘藏されて居る。

なほ粂城氏の宗家次之助（現戸主か）氏方に傳はる元祿七年の古文書に據ると、當時道意の孫片山小三郎信親は常陸國行方郡板久村（潮來）に住んで居た。卽ち道意は江戸に出て、後鄕里へ歸つて歿したものと見えるが、粂城氏の說には、道意は子（寂意）の代迄江州に在り、孫（信親）の代は板久村に歸つたとある。道意の孫が板久へ住んだとあると、何か道悅と道意一家の間に、特別な關係でもありさうに思はれるが、それは明白でない。又道悅が潮來に住んで居たので、道意も潮來へ來たものか、どこで妻を貰つて子を生んだか、いつ頃鄕里へ歸つたものか、その點も詳かでない。古老の言に據ると、道意屋敷には井戸も殘つて居り、且つ道意は殊の外水仙を好み、近年迄多く屋敷に水仙があつた。道意は井伊侯から五十石で抱へようと言はれたが辭退したと。

道意は俳人であつた。許六の「正風彥根躰」に、

梟の世を晝にして月見かな　西ものべ　希志
梅折て箸おもひ出す手の匂ひ　同
ふきみそは甘からぬとや尼が庵　西ものべ　有近
初時雨馬もなづむや鈴のおと　西ものべ　信道
猫もゐぬ林竹藪のあられ哉　同

といふ句が見える。この希志は卽ち道意である。恐らく道意ははじめ俳諧を芭蕉に學び、後許六に就いたものだらう。有近は同村ではあるが、何人であるか今に不明である。信道は糸城氏の宗家の人で、同族或はそれでない迄も相紛るゝ程親しい間柄であつたと氏の書狀にある。現に宗家次之助氏方に傳はる古文書の一通に據ると（信親より片山治兵衛に宛てしもの、本文片山治兵衛殿の右脇に、物部村住三良四郎子孫末信道とあるから、治兵衛が信道であらう。）、治兵衛の先祖は種村氏で、天正の頃高名があつたけれど、其後退轉し、土民の中に入り、名主役を勤めて居た。が久しく其姓氏を用ひなかつた。そこで今自分とは別に、片山氏を信道に讓る云々とあつた。卽ち片山家又は道意家と信道家とがある事になる。尙次之助氏方に許六筆の信道還曆祝賀の歌仙が傳へられてゐる。卽ち

隊々として春に耕し、秋の落穗をひろひて、野菊の霜枯たるをとぶらふわたり鳥の四十雀さへ老の名のありけるを、五十雀の名さへもれて、六十からの數にはいりぬ。すゞめは百になりても踊ときけば、世のなみ〱にわたりたるもあはれと見るべし。□□

生垣や外まで菊の香の餘り　　信道

六十雀も世にわたる聲　　菊阿

朝の月雁も團子も茶を吞て　　紀達

とある。

以上衆城氏の教示であるが、こゝにいぶかしきは古文書中の「入道謂道意」といふ註である。貞享三年の起請文に物部道意とあるから、道意號は早くから用ひたもので、匿名と見るべきであらう。

六月、素堂と和漢連句があつた。之は支考の「三日月日記」（享保十五年刊）に出てゐる。即ち

納涼の折々いひ捨てたる和漢、月の前にしてみたしむ。

破風口に日影やよわる夕涼　　芭蕉

焚レバ茶ヲ・蠅避クレ烟ヲ　　素堂

（下略）

「春秋」に、「元祿五年八月八日歌仙滿尾ス。云々」とある。支考の「和漢文操」卷之三、大和聯句ノ序に、

其ノ後元祿之始メナラン也焉。在リテ二武江之芭蕉庵一、而素堂與ト二故翁一夜話之次ツイデニ、撰ブテ二三日月日記一迚、往古評シテ二漢和之爲ナルヲ一不自由一、當時論ジテ二聯句之爲ルヲ一不吟味一、而其夜試ニ有リ二一聯之隔對一。「唐土有ラバ二芳野一、櫻將ニレ妬マント二海棠一。　山素堂　「楊州無ケン二伏見一、桃被レ惡マル二山薑ニ一。　白龍子

とあるが、かゝる句は素堂のにも芭蕉（支考云、白龍子とは先師の聯句名なりと。）のにもない。例の僞作らしく、素堂と芭蕉との夜話も疑はしくなる。「泊船集」に、「唐破風の入日や薄き夕涼み」とある。

八月下旬「春の日」梓行（次項詳說）。

九月、清風の「一つ橋」成。清風は羽前尾花澤の人。鈴木氏。通稱八右衛門。紅花ベニ商人である。家富み、芭蕉

も奥細道の際立寄つてゐる。延寶頃談林風で、惣本寺高政の「中庸姿」（延寶六年刊）に其名が見えてゐる。貞享の始め芭蕉門に入り、芭蕉との逸話が傳へられてゐる（奥細道の條下参照）。本書は商用のため上方・江戸に旅行して、當地の名ある宗匠と附合つた歌仙十卷を出版したものである。友靜の序に、貞享三年九月六日とある。卽ち湖春・淸風兩吟歌仙一卷、才麿・淸風兩吟歌仙一卷、言水・淸風兩吟歌仙一卷、立志・淸風兩吟歌仙一卷、一晶・淸風兩吟歌仙一卷、信德・仙庵・淸風三吟歌仙一卷、淸風・其角兩吟歌仙一卷、仙庵・淸風兩吟歌仙一卷、調和・淸風兩吟歌仙一卷、如泉・湖春・言水・仙庵・信德其他五十韻一卷と前述の芭蕉等との歌仙一卷を含む。

蛤のロしめて居る暑かな

初雪や水仙の葉のたわむまで

しぐれ行や船の帆づなに取付て

すゝはきや暮ゆく宿の高鼾

年忘三人寄て喧嘩かな

うかうかと年よる人やふる暦

深川八貧や獨居ノ箴は此冬の事である（省略）。

六、春の日と初懷紙

貞享元年の「冬の日」に次で、貞享三年「春の日」が刊行された。撰者の記載はないけれど、荷兮であらう。

書林は京堀川通錦小路上ル町、西村市郎右衞門。井筒屋の書籍目錄に蕉翁撰とあるが誤である。徹士の「花見車」に、「天滿の宗因、深川の桃青、一生の中編集せず。いひ出せる句はよしあし共に、門弟又は連衆より板行して世にあり。云々」とある。「春秋」に、「愚云、此一事(春の日梓行)芭蕉ニアヅカラズト雖、世ニ七部集ト稱スル一書ナレバ、爰ニ其板行ノ時ヲ記スノミ。此一集ヲ七部ノ其一ニ加ヘシハ故人ノ誤ナリ。云々」とあるが、全く芭蕉の關知せぬ集とも考へられない。なぜといふと、例へ芭蕉の入つた連句がないにせよ、荷兮・野水等重立つた者は當時芭蕉の指導を受けつゝある者共で、芭蕉風の感化は十分あつた事と思はれる。其等の仲間から撰集が出たとて、蕉門の撰集でないとも云へまいし、芭蕉が風馬牛に考へる譯もなからうと思ふ。たゞ小冊子であり、荷兮・野水周圍の撰集で、努力も少なく、いはゞうちばの集のやうに思はれて、あつけがないから、芭蕉の代表撰集として、物足りなさを感ずる事は確である。

「春の日」收める所、二月十八日附の荷兮・重五・雨桐・李風・昌桂の歌仙一卷。三月六日野水亭にて、旦藁・野水・荷兮・越人・羽笠の歌仙一卷。三月十六日旦藁が田家にとまりて、野水・旦藁・越人・荷兮・冬文(今宵は更けたといふ譯で、十二句で止め、同十九日荷兮室で打次ぐ。)追加、三月十九日舟泉亭、越人・舟泉・聽雪・釜髭・荷兮歌仙表六句。及び四季混題發句五十九(芭蕉の句三句入り)。二番目の連句表六句をあげる。

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重さくら　旦藁

おもしろうかすむかたくの鐘　野水
春の旅節供なるらん袴着て　荷兮
口すゝぐべき清水ながるゝ　越人
松風にたをれぬ程の酒の醉　羽笠
賣のこしたる虫はなつ月　執筆

發句

元日の木の間の競馬足ゆるし　重五
舟〻の小松に雪の殘けり　旦藁
古池や蛙飛こむ水のおと　芭蕉
郭公さゆのみ燒てぬる夜哉　李風
うれしさは葉がくれ梅の一つ哉　杜國
蓮池のふかさわするゝ浮葉かな　荷兮
山寺に米つくほどの月夜哉　越人
瓦ふく家も面白や秋の月　野水

待戀

こぬ殿を唐黍高し見おろさん　荷兮

一體に調が穩かになつた。越人や荷兮の句には曲節ある情緒的な風も見えるけれど、他は概して平淡である。「七部さがし」に、東登は「冬の日に春の日はこもり。云々」と言うてゐるが、私は冬の日と「春の日」は比較すべきものでないと考へる。蓼太は「雪おろし」のはじめに、「尾張五歌仙に談林風の古體を破り、續いて春の日に光りをかゝげ、云々」と言うてゐる。實際冬の日の印象と春の日とはまるで違ふ。冬の日の調は情緒が激越してゐる。技巧を凝し過ぎて險奇な表現に終つてゐる所もある。春の日は溫藉である。平淡である。多少敍法の詰つた冬の日調も見えるが、大體にゆるやかである。冬の日の美點は朗々誦すべき句に少くないが、春の日の方はよい句も特に目立つて見えない。「婆心錄」に、「卷の調子は冬の日に異なりていと寬なり。云々」とあるがその通りである。許六の「歷代滑稽傳」に、芭蕉の撰集として十一部を示してゐるが、「春の日」も亦その一つになつてゐる。支考の五變論・三變論皆「春の日」を「冬の日」と合せて、その時代の芭蕉の代表的撰集としてゐる。「春の日」は芭蕉の關知せざる集であるといふ說があつても、「春の日」は古くから注目され、賞讚されてゐた。詳しくは侚七部集論の條下に述べる。

「丙寅初懷紙」(鶴の步み・鶴百韻・春の曉集とも云)は貞享三年初春江戶にての作である。鶴齡堂の序に、「先哲の才をたくみにつゞりおけるものから、彩筆といふ計なくめでたしと見ゆ。云々」ともあつて、卷中力ありといふわけで、古來稱譽されたものである。刋本は寶曆十一年八月鶴齡堂主人の上木したものが流布されてゐる。

此集の前五十句だけに芭蕉の註がある。それは闌更が寶暦十三年に、「花の故事」と題して刊行してゐるが、書寫の誤り少くないので、後明和八年「落葉考」と題して訂正出版した。

本書の內容は其角・文鱗・枳風・コ齋・芳重・杉風・仙化・李下・擧白・朱絃・蚊足・千里・芭蕉（ニノウ十三句目より揚水入、三ノオ七句目より不卜入、名殘ノ表五句目より峽水入。「七部拾遺」中の初懷紙に據る。）の百韻である。但し本書は七十六年の寫傳（享保十九年のものありとすれば四十九年）であるから、寫誤もかなりあるらしく、作者號を調べて見ても、表五句目の芳重は「落葉考」では芳里となり、又「春秋」の一本によると、不卜出席して九句成の次に、「千春出席シテ十七句成」、「峽山出席シテ百韻成」とあるが、鶴齡堂の「初懷紙」には、千春でなく、芭蕉になつてゐる。「落葉考」でさへ寫誤を改めたと云つても、尙誤があるかも知れない。又「落葉考」の芭蕉自注と傳へられるものの末に、「當時の俳道意味心得がたし。願くは句解したまはらんやと侍りければ、卽興に加筆し給ふ。終日の席はせを翁の持病快からず。五十韻にして筆をたち給ふ。」とあるが、之は芭蕉の口授を傍にゐて筆記した門人の附記であるか、或は闌更の附記であるか分らない。なほ一歩進んで云ふと、此註は果して芭蕉の自註であるかそれも分らない。樋口氏は芭蕉の自註でないと言うてゐるが、或はさうかもしれない。例へば自分の句を註するに、付やう輕くてよしなどと、如何にも人の句であるやうな態度で論じてゐる。併し此註は實によく出來てゐる。簡明で、親切で、初學には好參考である。表三句の註だけ引用する。

日の春をさすがに鶴の歩みかな　　其角

元朝の日のはなやかにさし出て、長閑に幽玄なる氣色を、鶴の歩みにかけていひつられ侍る。祝言外にあらはる。流石にといふ手爾葉感おほし。

砌に高き去年の桐の實　文鱗

貞徳老人の云、脇體四道ありと立てられ侍れども、當時は古くなりて、景氣を云ひそへたるをよろしとす。梧桐遠く立ちて、しかも木枯のまゝにして、枯れたる實の梢に殘りたるけしき、言葉こまやかにして、桐の實といふは、桐の木といはんも同じ事ながら、元朝に梢は冬めきて、木枯の其まゝなれども、ほのかにかすみ朝日にほひ出てうるはしく見え侍る體なるべし。但桐の實と付けたる新しみ、俳諧の本意かゝる所に侍る。

雪村が柳見に行棹さして　枳風

第三の體。長高く、風流に句を作り侍る。發句の景と少しかはりあり。柳見に行くとあれば、いまだ景に不レ對也。雪村は畫の名筆也。柳を書くべき時節、その柳を見て畫人と、みづから舟に棹さして出でたる狂者の體珍重也。桐の木立詠やう奇特に侍る。付様大切也。

蜑が爪木の斧の音、箒木のほろ〳〵あへ、茶僧梅干の影の如く來りなどといふ風體を、見るに幽なり、思ふに玄なりと考へた延寶八年以來の幽玄論も隨分變つたものである。それから七年經つと芭蕉も、日の春の句を長閑に幽玄なる氣色とほめて、長明が言つたやうな、普通の幽玄論にしてしまつてゐる。併し桐の木と云つてよい所を、桐の實と云つて新し味を出した所には感服出來ない。尤も之れ位な新しみなら、「次韻」・「武藏曲」・「虛栗」に見るやうな、怪奇な新味でもないから、まだ我慢も出來る。一體本書の調は「冬の日」に近い。「冬の日」の無理な

技巧によつて、語句の險奇な晦澁に陷つてゐる點を取除いた點が、本書の進歩である。貞享二年の春の日のやうな穩やかな調は本書には見えない。むしろ全體の情調は堅苦しく、句々に相應な巧をつくしてゐる點は、冬の日調に屬させてよいと思ふ。

念佛に狂ふ僧いづくより　朱絃
淺ましく連歌の興を覺すらむ　蚊足
敵よせ來るむら松の聲　千里
有明の梨うち烏帽子着たりけり　芭蕉
うき世の露を宴の見納め　執筆
惜れし宿の木槿の散たびに　文鱗

初裏二句目よりの移りであるが、なか〳〵巧なものである。梨打烏帽子の句は、前句の拍子に乘つて附けたのでゐるとか（石兮の「附合評註」）又は前句の勢に移つて附けたのであるとか（「三冊子」）と云はれてゐる。宜麥の「淺川早引集」には、中の調子の句としてあげてゐる。又二ノ表へ行つて、

殘る雪のこるかゝしの珍しく　絃
しづかに醉て蝶をとる歌　白
殿守のねふたがりつる朝ぼらけ　里

兀たる眉をかくすきぬ〴〵　　蕉
罌子咲て哀(イ情)に見ゆる宿なれや　　風

なども古來有名な附合になつてゐる。安永・天明の中興俳人が、天和・貞享の芭蕉の俳諧に私淑して、各自詩境を拓いたことは前條に於て少しく述べた。「初懷紙」の調も蕪村一派の人々から尊重され、彼等の俳諧に多大なる影響を與へたやうである。安永二年の「明がらす」の几董の序に、「夜半の叟（蕪村）常に我にいへらく、今遠つ國〴〵の、もはら蕉門といひもてはやす、やゝ翁の皮肉を察して、其粉骨をしらざるものなり。たとはゞ附句に、敵よせ來るむら松の聲、有明のなしうち帽子着たりけり、これらの意を味ふの徒希也。云々」とあるを見ても明らかであらう。

本書は許六があげた芭蕉撰集十一部の一となり、「芭蕉翁俳諧口決」（北枝傳）にも、「我門の風流を學ぶ人は、鶴の歩百韵・冬の日・春の日・曠野・瓢・猿蓑・炭俵等を熟覽すべし。云々」とも云はれてゐる。かうした譯で何丸如きは、七部集に「續猿蓑」を除いて初懷紙を入れ、「大鏡」の序に、大江丸は「初懷紙後補の義御尤の事に候。」と言つてゐるし、成美は同じ序に「初懷紙の附句を加ふ。是又家說ある事也。云々」と說いてゐる。之も後章に詳說する。

七、鹿島の月見

年があけて貞享四年となつた。嵐雪から贈られた正月小袖を着てよろこび、

誰やらが姿に似たり今朝の春

とする。三月、草庵吟、

花の雲鐘は上野か淺草か

「略傳」に、「病ることありて、庵にこもり給ひ、云々」とある。「春秋」に、「此句初ハ花曇ト句作アリシヲ、後ニ花ノ雲トハ定リシ也。云々」とある。「續虛栗」に、

草庵を訪ける比

永き日も囀たらぬひばり哉　芭蕉

原中や物にもつかず鳴雲雀　同

と聞えけるに、次で申侍る。

啼く〳〵も風に流るゝひばり哉　孤屋

烏帽子を直す櫻一むら　野馬

山を燒有明寒く御簾卷て　其角

去來が東都に下向して

久方やこなれ〳〵とはつ雲雀　去來

旅たる友をさそひ越す春　芭蕉

からばかす櫻の庇掃過て　其角
よろしく長き一瓢の酒　嵐雪

（「無底籠」下略）

と四吟歌仙があつた。

「春秋」に、

「按、去來ノ東都下向ハ、故人モ是非ヲ說カザル所也。然レ共此俳諧世ニアルニ於ハ後學者ノ說ヲ待ツコト不能。故今考フルニ芭蕉脇句「旅なる友をさそひ越す春トアレバ、去來ノ東都下向アリシコト明ナレ共、年月亦知ルベカラズ。サレ共愚ガ今年ト定メタルハ、續虛栗集ノ內今年五月十三日其角ガ母ノ五七日追善各悼中ニ去來ガ一句アリ。但其集ニ各悼ト題シタルハ、文音ノ唫ニアラデ、正シク一座ナシタルヲ知ルベシ。然レハ今年三月東都ニ下リ、同シク五月迄逗留セシニ極レリ。云々」

とある。此時はじめて去來入門。伊勢紀行の芭蕉の跋に、「其角ひとゝせ都の空に旅寐せし頃、向井氏去來のぬしむつまじき契り有て、云々」とあるが、其角の上京は貞享元年二月のことであるから、去來と其角とは舊知と見える。此度の江戸下りも或は其角の手引であらう。五月其角が亡母（四月八日歿）の五七日追善會をひらき、

卯花も母なき宿ぞ冷じき　芭蕉
香消のこるみじか夜の夢　其角

色々の雲を見にけり月澄て　嵐雪

（「續虚栗」下略）

其の他露沾・枳風・沾德・擧白・嵐雪以下すべて十人の追悼句がある。

八月十五日、其角・仙化草庵に來り、芭蕉と共に三股の月を見る。

名月や池をめぐりて夜もすがら

事は其角の雜談集に詳しい。仙化の僕半四郎、舳の方に酒をあたゝめてゐたが、秀句を吐き、衆を驚かし、吼雲といふ號を貰つたとある。去留の「全集」によると、此句は本所小名木川松平阿州侯下屋敷の士何がし、芭蕉の弟子で、名月の夜芭蕉を招き、その園池に宴した時の句で、其短冊今なほ何某の家に傳へられるといふ。

同月曾良・宗波を携へて鹿島に月を見る。

「次郎兵衛物語」には、鹿島行きを貞享二年八月三日、河合宗五郎を連れて立たれたことにして、其年は江戸も雨しげく、常陸邊も雨ふりつゞきて、月の興もなかつた。九月朔日にはかへり給ふとある。

鹿島紀行に云、伴ふ人ふたり、浪客の士一人、之は曾良である。一人は水雲の僧、之は宗波である。宗波は墨の衣に三衣の袋をかけ、出山の尊像を厨子に入れ後にせおひ、芭蕉自らは僧にもあらず、俗にもあらずといふいでたちで、前の堀から舟にのつて、行德に行つた。そこから徒歩になり、冬甲斐の國人から貰つた檜笠をかぶつて、やはたと云ふ里をすぎ、かまかいの原に出る。秦甸の一千里とも思はれる廣野で、向うに筑波山が見える。

嵐雪の句を思出す。こゝは萩・桔梗・女郎花・刈萱・尾花亂れ合ひ、小男鹿の妻戀ひ渡るさま、野馬のむれ歩くさまとり〴〵に面白い。日暮利根川の邊布佐と云ふ所につく。宵の內は漁師の家へ入つて休む。月が隈なく晴れたから夜舟を下して鹿島へ來た。所が生憎午から雨が切に降つて、月を見ることも出來ない。此麓に根本寺の先住、今は世を遁れてこゝにゐられると聞いて訪れて泊つた。實によい所で、人をして深省を發せしむといふ趣がある。明方に空が少しはれたので、和尙に起された。月の光雨の音たゞあはれなる氣色のみ胸に滿ちてと云つた芭蕉の雅懷想ふべしである。

をり〳〵にかはらぬ空の月かげも　ちゞのながめはくものまに〳〵　和尙
月はやしこずゑはあめを持ながら　桃青
てらにねて天まこと顏なる月見哉　同
あめにねて竹起かへる月みかな　ソラ
つきさびし堂の軒端の雨雫　宗波

卽興である。中で月早しの句が巧である。鹿島神社に參詣。

神前
この松のみはへせし代や神の秋　桃青

野

はぎはらや日とよはやどせ山の犬　同

田家

かりかけしたづらのづるやさとの秋　おなしく

賤のこやいね摺かけて月をみる　桃青

いものはや月待さとの焼はたけ　同

歸路自準(準)に宿す

塒せよわらほす宿の友すゝめ　あるし

あきをこめたるくねの指杉　かく

月みむとしほひき登るふねとめて　ソラ

自準とあるは自準亭で、本間道悦の亭である。「一葉集」には、あるじを松江、かくを桃青とする。八月二十五日紀行終る。

此紀行を鹿島紀行と云。鹿島紀行には採茶庵梅人の上木した「かしま紀行」(寛政二年序)と松籟庵秋瓜の梓行した「鹿島詣」(寶暦二年壬申秋八月刊)とある。前者は祖翁百回忌の追善記念として採茶庵に傳つた芭蕉自筆のかしま紀行(模刻、拓本)と同志の連句發句を附加したもの、後者は常陸の潮來邑なる本間自準(道悦)の家に

傳つたもので、自準歿して三代目の孫畫江（柳居門）の世に至り、畫江の詮索切なる「證治準繩」と云へる醫書と交換して、秋瓜が模寫上木した。その事は秋瓜の序に詳説されてゐる（序の年月日に寛保辛未年中秋月とあるはあやまりであらう。寛保元辛酉と云ふ歳はあるけれど、寛保に辛未の歳はない。寳暦元年ならば辛未である。寳暦元年は寛延四年であるから、寛保は寛延未のあやまりかと思ふ）。之には芭蕉の像も入り、附錄として名月の句が載つてゐる。

秋瓜の句に

はからず良夜に此一軸を得て、畫子が家を立出ぬ。此邑より根本寺へは船の通ひも這ひわたる程なれば、そこの大船津に宿借りて、淸光に立盡す。鹿島か崎つくば山いづれか奇絕ならざるはなし。

出汐から見ればや月の根本寺　　秋瓜

とある。「春秋」に、

布佐ハ利根ノ水鄕ニシテ、木下・布施・布佐ト鼎足ノ如シ。皆潮來ニ舟ヲ出スノ地、尤木下今ハ盛也。潮來迄水路九里。同所ヨリ陸道鹿島迄三里也。

とある。

梅人本と本間家本を比べて見ると、前者は細く美しく書かれ、後者は墨次ぎの跡鮮かに、如何にも風雅な書方のやうに見られる。而かも兩者の間に多少語句の相違がある。又本間家の記錄によると、

鹿島詣、一卷

是は鹿島の歸路自準亭を訪はれ、永く逗留なされ、余が家にて筆を採られしものなれば、是を家寶の第一とす。云々

鹿島詣の草稿、半切紙へ書きて所々に墨消しあり。末の詞書に歸路自準がり宿す。又主人客とあるを、松江桃青と書したり。其後此幅は賣出され、本町大坂や孫八の家藏となりたり。

とある。秋瓜模寫の本間家本は墨消しもなければ、主人、客を松江・桃青とも書いてゐないから、此草稿でないことは明らかである。且つその草稿は四代道意（道仙の實子）の時、閣老阿部能登守へ献上したと云ふのだから、三代書江（道仙）が秋瓜にくれた芭蕉の自筆本は別の一本であらう。

芭蕉が草庵に蓑蟲をきゝに來いといふ句を作つたら、嵐雪がやつてきて、聲をきかずがつかりして歸るといふ話も此秋である（「春秋」九月とある）。嵐雪の蓑蟲をきゝに行く辭、素堂の蓑蟲の說などがある。

其頃去來・千子の伊勢紀行（八月二十日あまり出立）の草稿を去來より贈られ、それに跋文と發句とを書く。所々添削がある。嘉永三年の刊本には、卷頭に去來の書いた馬の扇面が出で、「右扇頭大書馬字、係去來先生寛文十年所作。蓋齡二十有餘。其末入俳門也。勤文藝講武事。是出其餘暇者也乎。」といふ識語もある。古筆了仲の極書迄附いてゐる。一說に此紀行の跋は貞享三年秋作のやうにあるが、貞享四年十一月の「續虛栗」に、「伊勢までのよき道づれよ今朝の雁。千子」の句が出てゐる所を見ると、貞享四年秋の紀行であつて、跋文の「西東あはれさ

おなじ秋の風（刊本には、東西のあはれさひとつ秋の風。）といふ句も亦同年秋の作のやうにも考へられる。支考の「笈日記」に、「いづれの時の秋にや。去來千子が伊勢まうでの比、道の記かきて深川に送りけるに、奥書に褒美ありて、」と前書して、西東の句が出てゐる。又「句選年考」の頭書に、「篇突難陳にも、伊勢紀行一卷深川に送る。先師たゞ一巻を賞して、文章並に發句を結び、句々善惡の沙汰なしとあり。」とある。

不卜の「續の原」に、冬の句十二番の句合の判を書く。本書は素堂・調和・湖春及び芭蕉が判者となつた。冬の句合の芭蕉の跋に、「貞享卯のとし筆を江上の潮にそゝぎ、つゐに蕉庵雪夜の燈に對す。」とあるが、貞享卯年は貞享四年で、十月故郷へ旅立ち、翌年即ち元祿元年秋の末江戸へ歸つて來たのであるから、蕉庵雪夜といふのはちと腑に落ちない。本書の勝句を左にあげて見る。

親と子の霜夜をかこふ野馬かな　溪石
松苗も枯野に目だつ嵐かな　枳風
破れ葉のつはに顏出す鼬かな　調柳
鈴鴨の聲ふり渡る月寒し　嵐雪
門閉て閑居をしゆる氷柱哉　琴風
御神樂や火を燒衛士にあやからむ　去來
山里や頭巾とるべき人もなし　觀水

煤とりて寺はめでたき佛哉　不卜

野馬の句は、「ものいはぬよものけだものすらさへもあはれなるかなや親の子を思ふと詠たまひしこの歌に便して、……野馬の子を思ふさませつなり。云々」、枯野の句は、「寸松虹梁のすがたを含て、一句たけ高く、云々」、「鈴かもの聲ふりたつる秀句かぎりなし。一句やすらかにして嚴寒のけしき盡たり。」云々、「目にふれぬ山中の客もそゞろに愛せらるゝ楓林もあるか。云々」などとある。句評は簡單でたいしたものでもない。鈴鴨の句を賞美するやうでは、芭蕉の句境もまだ幼稚なやうな氣がする。本書は「俳諧落葉考」（明和八年刊）・「七部餘錄」（文政十二年刊）・「一葉集」・「袖珍鈔」等に收められる。

八、故郷へ歸る、大和行脚

十月芭蕉は故郷伊賀へ歸らうとした。これで三度の歸郷である。九月、內藤露沾の遊園堂に於て餞別句會がひらかれた。連衆は露沾・芭蕉・沾蓬・其角・露荷・沾荷の六吟歌仙で、十九句成。沾德一句ノミ出席。

旅泊に年をこして、芳野の花にこゝろせん事を申す。

時は秋よし野をこめし旅のつと　露沾
雁をともねに雲風の月　翁
山かげに刈田の顏のにぎはひて　沾蓬

（「一葉集」下略）

露沾は奥州岩城の城主內藤義泰侯（風虎子）の嫡子義英である。遊園堂・傍池亭と號。初め宗因門、後芭蕉門。沾蓬は寶生氏、能ノ太夫である。露荷・沾荷等は內藤氏の家士であらう。

十月、濁子・芭蕉・嵐雪・其角の餞別興行がある。これは半歌仙である。

江戸ざくら心かよはんいく時雨　濁子
　薩埵の霜にかへりみる月　翁
貝ひろひ〳〵ゆく磯なれて　嵐雪
　醉ては人の肩にとりつく　其角

（「一葉集」下略）

擧白・芭蕉・溪石・コ齋・其角・卜千・嵐雪の餞別もある。十句だけ。

餞別

時雨〳〵に鎰かり置ん草の庵　擧白
　火燵の柴に侘をつく人　翁
松風にそれたる鵙を見のがして　溪石

（「一葉集」下略）

潮來の道悅の連中からも餞別の句會が開かれた。之も一順九句で止める。連衆は松江・芭蕉・曾良・依々、泥

芹・水萍・風泉・夕菊・苔翠である。

しろがねに蛤をめせ霜夜の鐘　　松江
一羽わかるゝ千鳥一むれ　　芭蕉
枯草にいよ〳〵松のみどりして　　曾良

（「句餞別」下略）

十月十一日、其角亭に於て餞別會をひらく。芭蕉・由之・其角・枳風・文鱗・仙化・魚兒・觀水・全峯・嵐雪・十吟二十一句成。擧白出席四十四句成。

旅人と我名よばれん初霰　　芭蕉
亦さゞん花を宿〳〵にして　　由之
鶺鴒の心ほど世のたのしきに　　其角

（「續虚栗」下略）

卯辰紀行に云、

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人とわが名よばれん初しぐれ
また山茶花を宿〳〵にして

岩城の住長太郎といふもの此脇を付けて、其角亭に於て餞送りせんともてなす。

とあるのは此十月十一日の送別會のことである。

いよ〳〵芭蕉は十月二十五日に故郷へ出立することになつた。舊友門人等の送る所のもの、詩九首・和歌三首・俳句三十五句、其の他草鞋代を包むもの、紙布・綿入・帽子・靴下なぞを惠むもの、實に盛であつた。去留の「全集」に、「折から杉風は持病に閉られて、音づるゝ時雨や我が病まくらと吟じ羨みしが、翁のほどなく旅立れけると聞、送別の句に、

鳴　千　鳥　富　士　を　見　返　れ　汐　見　坂

となん。云々」とある。

紀行に云、

時　は　冬　よ　し　野　を　こ　め　ん　旅　の　つ　と

此句は露沾公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけのはじめとして、舊友・親疎・門人等、あるは詩歌・文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包て志を見す。かの三月の糧をあつむるに力を入ず。紙布・綿子など云もの、帽子したうづやうの物、心々に送りつどひて、霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小船をうかべ、別墅にまうけし、草庵に酒肴たづさへ來りて、ゆくへを祝し、名殘を惜みなどするこそ、故ある人の首途するにも似たり。云々

芭蕉の歸鄕は、延寶四年父の病を聞いて歸つたのを入れると、これで三度であるが、此度はどうしてかくの如き盛なる送別を受けたのであるか。門人等の思慕の情が厚かつたといふなら、貞享元年の歸鄕に於ても盛でありさうなものだが、こんなではなかつた。之は恐らく貞享三・四の交に於て、芭蕉がとかく病がちであつたため、門人等の懸念が手傳つたものではなからうかと思ふ。それに一つは芭蕉の名聲が年毎に高まり、その德化が普く弘まつたためでもあらう。「次郎兵衛物語」によると、芭蕉が此旅行は丸一年かゝるだらうと言つたら、杉風・其角・桃隣が露沾公に話して、せめて春中には歸つて來て貰ひたいものだと賴んだので、公、事の外心を傷め、自身お忍びで芭蕉庵へ行つて、このことを告げたので、芭蕉も思ひ直し、冬の中から出て、春中夏初にはかへらうと言つた。そこで餞別句會も公其角亭へ御出座で、十月五日にはじまり、それより日夜打つゞき十月十日（一書に、二十日）に出立した云々とある。併しそれが貞享二年の事になつてゐるから、以上の說も信じられまい。

餞別の詩歌俳を少しあげる。

餞　別

くさまくらねざめ〳〵のつもりてや伊勢までとほく雪にたどらむ　　安　適

翁の故鄕に歸給ふを送りたてまつる

我　ち　か　ら　裳　し　ぼ　ら　ん　雪　の　道　　嵐　蘭

なほたらず、唐うたの古風をかりて俳諧をのぶ

送君小橋側、分袂隔東西、動風岸上柳、散霜宿下楓、遙想多病軀、長路豈無忡、瓢然一嚢子、句夫任天工、顔笻萬里雪、破笠孤村霖、筥根山巖々、大井川洪々、登嶮强莫歩、臨水又乗驄、無事到故園、先傳平安裏、佳景幽勝地、只恐久認蹤、從今花與月、獨吟望蒼穹、

思慕切々たるものがある。

留守の中猶痩ぬべし冬のきく　　不卜

烏巾をおくる

もろこしの芳野の奥の烏巾哉　　素堂

素堂の詩は三章あるけれど、餘り旨く出來てゐない。

木枯の吹ゆくうしろすがた哉　　嵐雪

鳴千鳥富士を見かへれ鹽見坂　　杉風

冬枯を君が首途や花の雪　　其角

是等の餞別の連句・發句・詩歌を集めた芭蕉自筆の草稿を、句餞別と題して、寛保四年祇徳が出版してゐる。「句餞別」はもと「伊賀餞別」と題し、潮來の本間家へ芭蕉が贈つたものである。本間家の記録によると、後門人増捐し、句餞別と題し、内附合一卷は五代玄琢先生の時、近村沖洲村松や榮次郎へ、又一卷は柳屋次郎兵衛へゆづられたさうである。

冒頭に芭蕉は社會生活の欲望と詩的生活の苦惱とを叙して、終に無能無藝にして此一筋につながるといふ、自己內省の痛しい數を告白してゐる。けだし宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休の茶に於ける、貫通する精神は一つである。風雅に於ける、たゞ之れ造化の信順である。見る所花にあらずといふ事なく、思ふ所月にあらずといふ事はない。造化に從つて造化にかへる。之れ芭蕉の大自我への信順であり、人生の歸趨であつた。

次に芭蕉は道の日記に就いて論じ、土佐日記・十六夜日記の餘は皆倣似通ひて、その糟粕を改むることあたはずと斷じ、ひそかに己が文の創意ある所をほのめかしてゐる。之も詩人としては、此位な識見を持つて居なければならぬ事で、立派な態度である。

此行芭蕉は風羅坊と號した。紀行に云、「百骸九竅の中に物あり。かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすものの風に破れやすからん事をいふにやあらん。云々」。支考の「本朝文鑑」、庚午紀行の註に、「此篇に風羅坊とは故翁二三個の狂名ながら其後も此號あり。云々」ともある。

先づ尾張鳴海の知足亭に泊る。

知足は下郷氏。名吉親。屋號を千代倉と云ひ、酒造家である。通稱勘兵衞。寂照庵・蝸廬亭と號。寶永元年四月十三日歿。六十六。母を永參、男を蝶羽、女をつね、孫女をしゆん、蝶羽の妻共に「千鳥掛集」の作者である。

星崎の闇を見よとや啼ちどり

之を立句として、芭蕉・安信・自笑・知足・(ボクゲン)菐言・如風・重辰の歌仙がある。「皺筥物語」に、「寐覺は松風の里、

呼續は夜明てから、笠寺は雪のふる日。」と前書がある。蝶羅の「合歡のいびき」(明和六年刊)に、「十一月四日、小雨降、松尾桃靑老江戸より御越御泊。」とあるから、十一月四日に鳴海の知足亭へ到着したと見える。

船調ふる蜑の理火　安信
築山のなだれに梅を植かけて　自笑
あそぶ子猫の春に逢つゝ　知足
(「千鳥掛」下略)

「千鳥掛」素堂の序に、「鳴海の何がし知足亭に、亡友芭蕉の翁やどりける頃、翁おもへらく、此所は名古屋・熱田に近く、桑名・大坂へも亦遠からず。千鳥掛に行通ひて、殘生を送らんと、星崎の千鳥の吟も此所のことになん。云々」とある。蝶羽の「笈銘」(「千鳥掛」出)の序にも、「あが軒端に立寄、笈さしおろし、からかけの紐打とけて、そこゝの物語に日を忘れける。云々」とある。

同亭に、如風芭蕉を訪うて歌仙成。「春秋」に、「按、冬園扇集ニ、はせを翁を知足亭に訪ひ侍りてト詞書有テ、歌仙ノ全巻ヲ出ス。云々」とある。「千鳥掛」には表六句のみ掲げる。

めづらしや落葉のころの翁草　如風
衞士の薪と手折冬梅　芭蕉
御車の暫とまゝる雪かきて　安信

（「千鳥掛」下略）

本陣寺島氏菐言亭に至り、（十一月五日か。「合歡のいびき」に、「十一月五日、天晴、菐言にて俳諧興行有。」とある。）飛鳥井雅章公の和歌を見て、

京まではまだ半空や雪の雲

の句を作。之を立句として、芭蕉・菐言・知足・如風・安信・自笑・重辰の七吟歌仙成。

千鳥しばらく此海の月　　菐言

小蛤ふめどたまらず袖ひぢて　　知足

酒氣さむればうらなしの風　　如風

（「千鳥掛」下略）

菐言は寺島氏。通稱伊右衛門。元文元年歿。九十一。

三河の國保美といふ所に、杜國の忍んでゐるのを訪れようと、越人に手紙を出して、鳴海から二十五里ひきかへし、（「春秋」に、十五里とある。二十五里アヤマリナリとある。）吉田に泊る。

寒けれど二人ねる夜ぞたのもしき

此行には、杜國、萬菊丸と稱し、吉野行脚に扈從する。伊良古崎は三河西南の果で、吉田から田原へ五里、田原より伊良古崎へ七里、畑ケ村・保美・龜山と村がつゞいてゐる。

あまつ縄手の吟、

冬の日や馬上に氷るかげぼうし

芭蕉・越人・野人（杜國改め）の連句がある。

麥蒔てよき隱家やはたけむら　翁
冬をさかりに山茶咲也　越人
晝の空蚤かむ犬の寢返りて　杜國改 野人

（「一葉集」下略）

伊良古崎一見、たま／＼鷹を見付け、

鷹ひとつ見つけてうれしいらこ崎

越人に「伊良胡紀行」といふのがある。眞僞は分らないが、之によると十月七日、杜國の導きであつた。（「合歡のいびき」に、「十一月十日、晴天、桃青老・越人昨夜宮より御越。今朝三州へ被參候。」とあるから、十月七日は誤であらう。十月廿五日に江戸を出立したものが、十月七日に伊良胡へ行くわけはない。）杜國の家につくと、海邊皆濱庇と云ふものをかけて浪を防ぐ。汐煮した芋頭を山の如く盛立てゝ芭蕉に食はせる。焚火に寄つて寢たが、浪音耳の底に殘り寢れなかつた。八日、杜國に對してと題し、鷹一つ……の句と、

いらこ崎似るものもなし鷹の聲

の句を作る。又伊良胡神社の神送りを見て、

　梅椿早咲ほめん保美の里

とある。その暮より天氣かはり、雨風はげしく打付け、師の曰、罪なくして配所に罪せられたる心地ぞせらると
あつて、麥はへて……の三吟がある。九日歸途につく。暮方橿木堂にかへる。師の曰、世に珍らしきものを拾ひ
得たり。荷兮云、何を拾ひ給へり。師の曰、伊良胡の濱にて命を拾ひ得たりと興じ給ひけり。とある。

　　芭蕉宗師を尾の名護屋まで送り參らせてかへる時、

　此ころの氷ふみわる名殘かな　杜國

　　いたわりて、新井までの間を、杜國に送られ行けば、かちよりもおそろし。

　すくみ行や馬上に氷る影法師　翁

伊良古から歸つて知足亭に至る。十一月十六日か。「合歡のいびき」に、「十六日、晴天、芭蕉翁・越人三河より
此晩御歸御泊。」とある。「千鳥掛」に、

　　芭蕉翁もと見し人を訪ひ、三河國に越え、序おもしろければ、伊良古崎見んと、白浪よする渚をつたひ、からう
　じて歸給ひし旅の哀を聞て、

　燒飯や伊良古の雪にくづれけん　知足
　砂さむかりし我あしの跡　芭蕉

松をぬく力に君が子日して　越人

（「千鳥掛」下略）

六句にて止。前の「伊良古紀行」には、荷兮の所へ歸着したやうにあるが、「春秋」によると、知足亭に再宿とある。今「千鳥掛」の前書より推して、知足亭へ泊つたものかと考へる。

笠寺奉納歌仙、芭蕉・知足・如風・重辰・安信・自笑・業言の七吟

歌仙

奉納

笠寺やもらぬ崖（イハヤ）も春の雨　芭蕉桃青

旅寐を起すはなの鐘撞　知足

月の弓消ゆくかたに雉子啼て　如風

（「千鳥掛」下略）

十一月十七日か。「合歡のいびき」に、「十七日、晴天、笠寺奉納はいかい。今日私宅にて桃青翁と共に連衆七人にてする。」とある。尙「千鳥掛」に、

寂照庵知足子の許へはせを翁を尋來て

幾落葉それほど袖もほころびず　荷兮

旅寐の霜を見するあかゞり　　芭蕉
今朝の月替る小荷駄に鞭當て　　知足
里の踊に野菊折ける　　野水

とある。荷兮・野水が知足亭へ來て、俳諧興行のあつたのは、十一月八日であらう。「合歡のいびき」に、「十八日、天晴、荷兮・岡田野水・桃靑翁御見廻に御こし、そば切打てはいかい有。」とある。之でも伊良古紀行の記事の信ぜられない事が分る。其他「千鳥掛」に、

寂照庵に旅寢して、

置炭や更に旅ともおもはれず　　越人
雪をもてなす夜すがらの松　　知足
海士の子が鯨を告る貝吹て　　芭蕉
（下略）

鳴海の鍜冶氏雲亭にて俳諧興行、十一月廿日。「合歡のいびき」に、「廿日、天晴、出羽守自笑にてはいかい有。」とある。「千鳥掛」に、

鳴海出羽守氏雲宅にて、

面白し雪にやならん冬の雨　　芭蕉

氷をたゝく田井の大鷺　　自笑
船繋ぐ岸の三股荻かれて　　知足
(下略)

とある。芭蕉の發句に自笑が脇を附けてゐるのだから、自笑は鍜冶出羽守だらう。今に鳴海には氏雲の家名があつて、小刀鍜冶であると「春秋」云。

尾州熱田宮に詣でる。「春秋」・「一代錄」に、十一月二十四日とあるが、二十一日か。「合歡のいびき」に、「廿一日、桃青翁宮桐葉へ御越。」とある。「卯辰紀行」に、

熱田御修覆

磨直すかゝみも清し雪の花
石しく庭の寒きあかつき　　桐葉
(「皺筥物語」)

とある。

同所滯留中、美濃の如行來り、俳諧興行。如行・芭蕉・桐葉の三吟一折。

旅人と我名はやさん笠の雪　　如行
盃寒くうたひのむなり　　芭蕉

其頃芭蕉箱やうの笈を桐葉に與ふ。「千鳥掛」に、蝶羽の「笈銘」がある。その中に、

其比翁が許よりして、熱田の桐葉がかたに往しが、また難波の春におもむかんとて、いかにおもひしや、自負し箱物を殘し、猶行先の霞とも消なん後のながめにもせよといひ置て出行しが、……此卷もと翁の句より與りしなれば、せめて其俤に此笈の見まくほしく、桐葉の花も紫のゆかりなれば、かくおもふよしをいひやりてこひけれど、はせをの露のかた見、いかにし侍らんや。我もし一葉の秋にもあはゞ、それまた我が名殘りにもみせんなどいひしが、去年の五月雨に秋をも待たぬ花と散りて、哀添つゝ送おこせたり。其形はさながら婦女の玉櫛笥に似て、おほいさもさる物なれ、高麗人の工みと見えしが、黒う塗りこめたるに、金泥の畫のこまやかなるもはげうせて、見るかげのあるかなきかに氣色して物ふりたり。云々

とある。蓬左(熱田)の人々に迎へとられて、しばらく休息してゐる中に、

箱根こす人もあるらしけさの雪

ある人の會

ためつけて雪見にまかる紙衣哉

いざゆかん雪見にころぶ所まで

或人興行

香を探る梅に藏見る軒端哉

「あら野集」の芭蕉の序に、「尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て、云々」とある。家藏本に朱書入の頭註、「俗傳謂熱田ノ宮爲ニ蓬萊宮ト。蓬萊ノ左ニテ、卽チ荷兮ガ住ル地ヲサス。」とある。

此間大垣・岐阜のすき者訪ひ來りて、歌仙或は一折など度々に及ぶ。卽ち箱根こす人もの句には、

舟に焚火をいるゝ松の葉　聽雪

如行・野水・越人・荷兮・六吟歌仙。ためつけての句には、

凍いる土に捨られぬ塵　晶碧

或人の會とは晶碧亭に招かれてゞある。芭蕉・晶碧・龜洞・荷兮・野水・聽雪・越人・舟泉、八吟歌仙。香を探るの句には、「春秋」に、「防川亭ニ至」とある。脇以下があつたのだらう。其の他如行・夕道・荷兮・野水・芭蕉の五吟六句もある。

霰かと聞ほどうれし笠舎　如行
夜の更るまで竹冴る聲　夕道

（「一葉集」下略）

「春秋」に云、

按、紀行ノ本文ニ據ル時ハ、名古屋止錫中美濃ノ門人來訪シ、歌仙及一折ナドアリトシテ、芭蕉美濃行脚ハナシ。然ルニ諸書紀所、芭蕉ノ唫跡亦如此。故ニ本朝文鑑ニ出タル庚午紀行ト參考ナス所、同文ニハ芭蕉正

シク美濃ニ至レリ。云々

とあつて、「翁美濃路へ赴かんと聞えければ、檜笠雪を命のやどりかな　桐葉。」をあげ、あられかとの句を濃州大垣如行亭に至ての興行とし、香を探るの句を、同所防川亭に至りての興行とする。又芭蕉が夕道に與へた紙片に「いざ出むゆきみにころぶ所まで」とある。之は也有の「鏡裏梅」（うつら衣後篇拾遺）懷舊辭の中に見えてゐる。卽ち、

六林いはく、風月堂は尾府本町書林なり。此家に芭蕉翁行脚の比立よられて一句を殘されし眞蹟あり。今此に模寫す。

印

書林風月とき丶しは、名もやさしく覺えて、しばし立寄てやすらふ程に、雪の降出ければ

はせを印

いさ出む
ゆきみに

ころふ所まで

丁卯臘月初
夕道何かしに送る

縦九寸五分斗、横一尺四寸五分斗有。今横物の一軸とす。是貞享四年丁卯冬の事なり。今天明八年戊申に至て百二年なり。夕道は今の風月堂孫助が曾祖父にて、あら野集の作者なり。

十二月十日餘り、名古屋を出て、故郷へ入らうとする。

旅寐して見しや浮世の煤はらひ

日永の里から馬を借りて、杖つき坂を上るうちに落馬する。

かちならば杖つき坂を落馬かな

支考の「笈日記」に、

桑名より處々馬に乘て、杖つき坂引きのぼるとて、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。ものゝ便なきひとり旅さへあるを、まさなの乘手やと馬子には叱られながら、

かちならば杖つき坂を落馬哉

といひけれども、季の言葉なし。雜の句といはんもあしからじ。

はせを

そののち伊賀の人々に此句の脇して見るべきよし申されしを。

角のとがらぬ牛もあるもの

土芳

とある。「赤冊紙」によると、落馬の句に各さまざま附句したけれど、芭蕉感服せず。土芳がから脇を附けたら賞められたとある。又、「句選年考」の頭書に、「日永の里、四日市より石藥師の間にあり。杖つき川・杖つき坂、日永の里より、石藥師へ行く道にあり。」とある。

故郷へかへり、

舊里や臍の緒に泣としのくれ

「次郎兵衛物語」に、「臘月二十五日漸く上野玄蕃町に入給ふ。云々」とある。「千鳥掛」には、代々の賢き人々も、故郷わすれかたきものに、おもほえ侍るよし。我今ははじめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまたよはひかたふきて侍るも、見捨てかたくて、初冬の空のうちしぐるゝ比より、雪を重ね、霜を經て、師走の末、伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈

愛のむかしも悲しく、おもふ事のみあまたありて、

とあつて此句を出す。此文によると當時芭蕉の父母は既に亡くなつたものと見える。

「皺筥物語」に、「この年の下に、膳所に登り、程なく幻住庵を見捨、武陵に赴たまふ折、支考桃林の二法師ともなひて、梅人子か許におはして、「水仙やしろき障子のとも移り」(梅人・支考・湘水其他九句)、これまた一巻になして、しのゝめに星崎まで送しが、是ぞまことのわかれとはなりぬ。」とあるが、これは誤りである。水仙やの句は元祿三年冬の吟である。支考の「笈日記」に、「元祿三年の冬神無月二十日ばかりならん。あつ田梅人亭に宿して、塵寰の閑を思ひよせられけむ。九衢齋といへる名を殘して」、と前書あつて此句が出てゐる。且つ又諸集に此冬江戸越年のことは見えない。

元祿元年芭蕉四十五歲、宵の年空の名殘を惜しまんと、酒飲み夜更して、元日寢忘れたので、

二日にもぬかりはせじな花の春

といふ句を作る。

初春

春立てまだ九日の野山かな

枯芝やや ゝ陽炎の一二寸

右の中春立ての句は小川風麥亭に至りての吟である。

伊賀の城下うにと云ふものを産する。わるくさき香がする。竹人の「全傳」に、「伊賀の古山といふ所にうにといふ物あり。土にあらず。木にあらず。くさき香して、本草にいへる石炭の類ならんと、高梨野也考有。其句を案じ置けりとて、蓑蟲庵にての吟、香に匂へ云々」とある。

香にゝほへうにほる岡の梅のはな

伊賀の國阿波の庄と云ふ處に、俊乘上人の舊跡がある。護峰山新大佛寺といふ。伽藍は破れ、礎を殘し、坊舍は絕えて、田畑となる。丈六の尊像は芝に埋もれ、御首のみ現然と拜まれる。

丈六に陽炎高し石の上

此所「卯辰紀行」の文と、史邦の「小文庫」の文と少し異なる。「小文庫」には、「舊友宗七・宗無ひとりふたりさそひものして、彼の地に至る。云々」とある。竹人の「全傳」に、阿波の國大佛寺にて、

陽炎の俤つゞれいしのうへ

此句後に丈六に陽炎高しと改めるとある。「小文庫」に、丈六の云々とある。「伊水溫故」に、「新大佛は富永村にある。本尊阿彌陀佛長サ二丈五尺、左右藥師觀音長サ二丈三尺……寬永の末本堂破壞し、本尊の御首から銀像の阿彌陀舍利塔、箱入の經卷一ツ出る。銀佛は正保の頃失せる。……俊乘坊は當國馬野の產。阿波俊乘坊重源。云々」などとある。

猿雖に對し、

もろ〳〵の心柳にまかすべし

卓袋亭に招かれ、

月待や梅かたげゆく小山伏

是等の句も此春の吟である。

二月、伊勢神宮に參詣、

何の木の花とはしらずにほひかな

紀行には伊勢山田と題する。「枇杷園隨筆」に、鶯亭夜話と註して、次の文がある。

貞享五とせ如月の末伊勢に詣づ。此御前の土を踏事今度五度におよび侍りぬ。さらに年のひとつづつ老行まに、かしこきおほむひかりも、たふとさも、猶思まされる心地して、かの西行のかたじけなさにとよみけん涙の跡もなつかしければ、扇うちしき、砂にかしらかたふけながら、

何の木の花とはしらず匂ひかな

これは芭蕉の筆であるかどうか分らない。芭蕉の參宮は五度とあるが、書に見えた所では、貞享元年八月一度、今年で二度である。其外の三度は伊賀仕官時代のことか明かでない。又如月の末とあるが、此句と並記された、

裸にはまだきさらぎのあらし哉

と云ふ句は、嵐雪の「其袋」によると、「二月十七日神路山を出るとて、」と前書があり、「泊船集」にも、「二月十七日神路山を出るとて、西行のなみだをしたひ、僧（增カ）賀の信をかなしむ。」と前書して、裸の句が出てゐる。併し之は神路山の句は二句であつて、西行の涙は何の木の句の事、增賀の信は裸にはの句に關した事であらうと思ふから、神宮參拜は少くとも二月十七日以前で、末日ではないやうである。

紀行に、神垣の內に梅が一本もないのはどういふ理由であるかと、神主にきいて見たら、たゞ自然となくなつたのであるが、子良の館の後に一本あるさうであると云、

　お子良子の一本ゆかし梅の花

　神垣やおもひもかけず涅槃像

お子良子の句は、「略傳」に、「伊勢に往山田に詣で云々」とある。「赤丹子」を見ると、芭蕉の自慢した句で、昔からこゝに連誹の達人多く句を止めるけれど、終に此梅の事を知らない。自分丈これをきゝ出したのはうれしいとある。神垣やの句は、「笈日記」には、「おなじ春ならむ。なにがし寺に詣して」とあり、「春秋」には「十五日涅槃會ヲ拜ム」とある。

菩提山に於て、

　此山の悲しさ告よ野老ほり

「笈日記」に、山寺のとある。「略傳」には、「菩提山神照寺」とある。

龍尙舍に於て、

物の名をまづとふ蘆のわかば哉

「句集」には、龍ノ尙舍に逢ふとあつて蘆を荻に作る。「句選年考」に云、「護法資治論曰、近年伊勢有龍尙舍能研神道之學而倶信佛法」。「略傳」に、「神職也。龍太夫と號す。博學の人。尙舍表得也。」とある。

網代民部の雪堂に會す。

梅の木になほやどり木や梅の花

「曠野集」に、「網代民部の息に逢て」とある。「笈日記」に、「胡來亭」とあつて、「是はその父弘氏のぬし、此道の風流に名あるゆゑなるべし。」とある。許六の「滑稽傳」に、「伊勢足代民部弘氏は神職の人也。談林の時上手の名あり。……句作は宗因に等し。云々」とある。「略傳」によると、胡來は網代民部の男とある。

草庵の會、

芋植て門は葎のわか葉かな

前にあげた何の木の花とはの句を立句として、芭蕉・益光・又玄・平庵・勝延・淸里の六吟十二句成、野人(杜國)入つて二十句成、正永入つて一歌仙を卷いてゐる。「春秋」には、「於山田俳諧興行」とある。

何の木の花とはしらずにほひ哉　翁

鐢に朝日をふくむ黃鳥　益光

春深き柴の橋守雪はきて　　又玄

（「一葉集」下略）

「讀老庵日札」に、芭蕉行脚と題し、

芭蕉翁勢州行脚の砌歌仙興行あり。立句は何の木の花ともしらぬにほひかな、山田館町泉館牛太夫の家にての事なり。今歌仙興行連衆は七人也。益光・又玄・平庵・勝延・清里・正永・桃青なり。云々

涼菟の「一幅半」（元祿十三年刊）に、芭蕉・乙孝・一有・杜國・應宇・葛森の六吟歌仙表六句をあげ、

紙衣のぬるとも折む雨の花　　芭蕉
すみてまづ汲水のなまぬる　　乙孝
酒賣が船さす棹に蝶飛て　　一有

（下略）

初裏二句目から芭蕉の附句のみを掲げてゐる。併し「一葉集」には「幽蘭集」を引いて、十八句目から芭蕉の附句だけを示してゐる。すべて二十三句。支考の「笈日記」には、路草亭と前書して、此句を出す。「一幅半」の涼菟の序に、「今はむかしはせをの翁、一幅半の袖をひるがへし、杖をひきずりて、路草亭にとどまり、やや雨の花を興じ給ふ。その如月の跡なつかしく、ことし元祿庚辰の春、この卷の始めになして、ほのかに行脚の面影を見る。あるじ路草の主は是今の乙孝子。」とあるから、路草亭に來たのは二月だつたと見える。

三月、伊賀へ歸省。故主蟬吟の別業に於て、弟探丸子に見え、

さまざまの事おもひ出す櫻かな

春の日はやく筆に暮ゆく　探丸子

三月半過ぎ、芳野の花を見ようと、豫て約束した杜國と伊勢に逢ひ、杜國は戯に萬菊丸と稱し、師の勞を助ける。笠の内に落書。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠

よし野にて我も見せうぞ檜木笠　萬菊

芭蕉は杜國を連れて、伊勢から鄕里へかへり、それより芳野行脚に向つたものであらう。何の木の花の歌仙に、杜國の加はつてゐる所を見ると、前月既に杜國は伊勢へ來て居たのであらう。去留の「全集」に、「上野を辭し、芳野の花見んと、先伊勢の山田にいたる。云々」とあり、「次郎兵衞物語」にも、上野を辭して伊勢山田網田氏に十日餘り止り、そこに杜國が待ち受けて居つたやうにもある。併し芭蕉が杉風に與へた手紙（眞蹟拾遺）によると、

拙者無事に越年いたし、今程山田に居申候。二月四日參宮いたし、當月十八日親年忌御座候付、伊賀へかへり候て、暖氣に成次第、吉野へ花を見に出立んと、心がけ支度いたし候。尾張の杜國も、よし野へ行脚せんと、

伊勢迄來候而、只今一所に居候。……若急に御しらせ事御座候はゞ、鬪の地藏にて、笠屋彌兵衛と申者迄、飛脚便御狀被遣候。二月十八日より三月十四日までは伊賀に居申候。以上

はせを

杉風様

此手紙には日附はないが、文面では二月十八日以前のものかと思ふ。越年は伊賀の郷里だらうが、今は山田に來てゐて、杜國と一緒にゐた。當月十八日とは二月十八日のことであらう。二月十八日から三月十四日迄は伊賀に居るといふのだが、其間芭蕉一人でゐたものか、杜國を連れてかへつたものか記錄はない。卯月二十五日附、萬菊・芭蕉連署の惣七あての手紙には、「三月十九日伊賀上野を出て、云々」とあるから、恐らく萬菊も芭蕉の郷里へやつて來て、二人連立つて大和へ出立したものと見える。世に絣の圖といふ芭蕉眞蹟の戲畫が傳はつてゐる。此絣の圖といふのは可笑しなもので、杜國の絣を圖示したもの、音が高くなると幅員四尺七寸もあつた。さすがの芭蕉も此高絣には弱つたであらう。士朗の「枇杷園隨筆」・竹二坊の「正傳」・「一代錄」共の他に出てゐるが、「枇杷園隨筆」と「一代錄」の繪は似てをり、正傳の繪は非常に違つてゐる。正傳のはいるかの如き形で、中ほど廣さ四尺一寸とある。「一代錄」には西麓庵猿雖にてとある、即ち猿雖亭に泊つた時の畫と見えるが、疑はしい。西麓庵は元祿五年の命名であるから、猿雖亭としても、西麓庵ではあるまい。此畫が猿雖亭で書かれたものとすれば、杜國も伊勢から伊賀へやつて來て、芭蕉と起臥を共にした事になる。尚「笈日記」に、「貞享五の年春、何月幾日、芭蕉老人よし野山の花見むとて、伊賀の國より旅立申されしに、尾の杜國も是に供せられて、と

もに筆をとつて、檜の木笠の裏に狂せしとなり。云々」とある。之も一證となる。支考の「本朝文鑑」庚午紀行中に、岩菊丸とあるけれどあやまりである。萬菊丸である。眞蹟に「萬菊殿いびきの圖にて御座候」とあり、本文にも、みづから萬菊丸と名をいふとある。「一代鈔」に、「大塔の宮吉野へ入御の時、千菊丸といへる供臣を召て行玉ふ。其例をかり奉りて、杜國を萬菊丸と號て供遊するか。」とあるがどうだか。

郷里留別吟

　このほどを花に禮いふ別れ哉

本文に、旅の道具多きは道のさはりだから、皆拂ひ捨てたけれど、紙衣一・合羽やうの物、硯・筆・紙・藥など物に包みて後に負うたもので、力なき身は跡さまに引かれるやうに覺え、道がはかどらないなどとある。

　草臥て宿かるころや藤のはな

竹人の「全傳」に、芭蕉が京から猿雖へ送つた手紙が出てゐる。それに京迄の道中の物語が書かれてある。此手紙は長文であるから抄錄しないが、「甲子夜話」の續篇卷三十九にもあり、又近頃樋口氏の「研究」にも引用されてある。詳しくはそれ等を見られたい。その手紙によると、六といふ奴僕に、これ迄荷物を擔いで來て貰つたが、途中で別れ、いよ〳〵重い物を打かけられ困つてゐる所へ、梅軒と云ふものがくたびれ出して、道連れの愁とたつた。丹波市（たばいち）やぎと云ふ所、耳なし山の東に泊る。「ほとゝぎす宿かる頃の藤の花」とする。草臥ては後の訂正か（赤冊子にもさうある）。凉袋の「頭陀物語」に、芭蕉の言として、

一とせ大和路に分入つて、負へるものに道をつられ、永き日影をたどり暮し、なにがしの宿をからんとするに、むらがらす森にいそぎ、野山はいたう霞たる、畫によくも似たる哉と、ゆきあひイむかなたの頃に、藪藤のおぼつかなく咲かゝりたるを見て、

くたびれて宿かるころや藤の花

かくいふ句のうかみたる、我ながら二なくおぼゆ。

とある。

初瀬に詣、

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　　萬菊

葛城山にて一言主神をしのび、

猶見たし花にあけゆく神の顔

「泊船集」に「やまとの國を行脚して、葛城山のふもとを過るに、よもの花はさかりにて、峯々はかすみわたりたる明ぼのゝけしき、いとゞ艶なるに、彼の神のみかたちあしと、人の口さがなく、世にいひつたへ侍れば、」と前書がある。「春秋」に、

大和國を行脚して、かつらぎ山の麓を通るに、四方の花は盛に咲て、峯〳〵の霞に似たる有明の月もいとゞ

哀なり。花に彼の美目わるきといゝけん神の御かたち、いかなる人のわる口にや。なき名といぶかしく、おもひうたがひて、△猶見たし花に明ゆく神の顔。……今選スル詞ハ杉家ノ「先手後手」ニ出タリ。

とある。「泊船集」を本にして後人の作爲したものらしい。

三輪・多武峰・臍峠（多武峯より龍門へ越道也と小書がある）、

雲雀より空にやすらふ峠かな

「曠野」に、上にやすらふとある。「小文庫」に、芭蕉の「栖去之辯」を前書にして、此句が出てゐるが、栖去之辯と何等關係のない句である。

龍門

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみにかたらんかゝる瀧の花

龍門とは、大和に龍門ケ嶽といふ山があり、麓に龍門の瀧がある。「句選年考」に、延寶六年江戸廣小路に、信章素堂が句に、「李白いかに樽次は何と花の瀧」、是は瀧の花にはあらず。花を瀧の比喩ながら、瀧をいへるより、李白が事を句作せしにや。……延寶に素堂がけやけき、貞享に芭蕉の穏なる句作を察すべし。

とある。句風の變化は積翠の言の如しである。

西河にて、

ほろ〳〵と山ぶきちるか瀧の音

「句選年考」に、和州巡覽記を引き、

西河の瀧、大瀧ともいふ。此瀧は唯急流にて、大水岩間を漲り沸きて落つる也。よの常の瀧の如く、高き所より流れ落つるにはあらで、岩間を漲り沸きて、甚見事なり。近寄りて見るべし。遠くては不堪賞。

とある。

蜻蛉が瀧、布留の瀧、布引の瀧、箕面の瀧見物、

櫻

さくら狩きどくや日々に五里六里

日は花に暮てさびしやあすならう

扇にて酒くむかげや散さくら

「笈日記」・「泊船集」には、「さびしさや花のあたりのあすならう」とある。日は花にが原句で、淋しさやは後の訂正か。「陸奥千鳥」・「泊船集」に次の如き前書がある。

明日は檜の木とかや。谷の老木のいへる事あり。きのふは夢と過て、あすはいまだ來らず、生前一樽のたのしみ外に、あすは〳〵といひくらして、終に賢者の訾（ソシリ）をうけぬ。（「陸奥千鳥」）

とある。淋しさやの方が深刻である。

苔清水にて、

春 雨 の 木 下 に つ た ふ し み づ か な

本文に、

よし野の花に、三日とゞまりて、明ぼのたそがれのけしきにむかひ、有明の月のあはれなるさまなど心にせまり、胸にみちて、あるは攝政公のながめにうばはれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室がこれは〳〵と打なぐりたるに、我いはん言葉もなくて、いたづらに口を閉ぢたる、いと口をし。思ひ立たる風流いかめしく侍れども、こゝに至りて無興のことなり。

とある。之によると芭蕉は吉野に三日留つて、種々吟懷に心を碎いたけれど、結局貞室の句に言ひつくされて、一句も出なかつた。最後の思立つたる風流いかめしけれど、こゝに至つて無興のことなりは、如何にも芭蕉の純眞さがあらはれて氣持がよい。それを竹人の「全傳」(支考の東山墨直にもある)のやうに、「松倉嵐蘭が翁一生富士・芳野の句なしといへるは、すなはち翁が常話にして、まことに句なきにあらず。口傳。」といふと、いやになる。かゝることに口傳も何も要る譯はない。句を作らうと思つても、先人の雅懷に壓倒されて、句が出來なかつただけでよいではないか。句を殘して返つて名所の絶景に及ばず、あたら天才の價値を下げてしまうと困るから、芭蕉が句を殘さなかつたわけではない。名所に句なしといふ語を月並流に解釋すると俗になる。又芭蕉は其角や

去來に文通して、角の句を歎稱してゐる。卽ち「句兄弟」に、

近くいはば、「明星やさくら定めぬ山かつら」といひし句、當座にはさのみ興感せざりしを、芭蕉翁吉野山にあそべる時、山中の美景にけをされ、古き歌どもの信を感ぜし叙、明星の山かつらに明殘るけしき、此句のうらやましく覺えたるよし。文通に申されける。云々

「去來抄」にも、

杜國が徒と吉野行脚したまひける道よりの文に、或はよし野を花の山といひ、或は是は〳〵とばかりと聞えしに魂を奪はれ、又は其角が櫻さだめぬといひしに景色をとられて、よし野に發句もなかりき。云々

とある。尤も芭蕉はさくら川で一句殘してゐる。それは芭蕉が石せ三之丞と云ふ人にあてた手紙の中に見えて、

「彌生の頃は誘引有候而、よし野へ花見に參候。發句はいたし不申候。いろ〳〵あんじ候而も、貞室の句には及不申故、句はいはぬ方がましと存候。其かはりにさくら川にて一句いたし候。

人の氣や花に乘行さくら川

漸々此句にて芳野をすまし申候。……」(眞蹟拾遺)とある。然るに「泊船集」・「小文庫」を見ると、よし野と前書して、

花さかり山は日頃の朝ぼらけ

とあつて、芭蕉が吉野で句作してゐるやうに思はれるが、作らない事はなかつたが、うまく行かなかつたのであ

らう。

吉野を出て高野山へ登る。

父母のしきりに戀しきじの聲

散花にたぶさはづかし奥の院　　萬菊

紀行には、高野山とあるだけであるが、「枇杷園隨筆」によると、

高野のおくにのぼれば、靈場さかんにして、法の燈消る時なく、坊舍地をしめて、佛閣甍をならべ、一卯頓成の春の花は、寂莫の霞の空に匂ひておぼえ、猿の聲鳥の啼にも腸を破るばかりにて、御廟を心しづかにをがみ、骨堂のあたりにイて、倩おもふやうあり。此所はおほくの人のかたみの集れる所にして、わが先祖の鬢髮をはじめしたしきなつかしきかぎりの白骨も此内におもひこめつれと袂もせきあへず。そゞろにこぼる涙をとゞめて、

父母のしきりに戀し雉の聲

右秋擧夜話

とある。但し芭蕉の筆なるか眞僞は分らない。「次郎兵衛物語」には、「故主令嗣君の靈牌を拜し、云々」とあるが之も當になるまい。去留の「全集」には、「亡主の墓を拜し、涙を止めかねて、「淋しさや花のあたりの翌ならふ」とあるがあやまりである。此句は後の改作で吉野の吟である。

高野を出て和歌の浦へ行く。紀行に云、「只一日の願ひ二つのみ。こよひよき宿からん。草鞋の我足によろしきをもとめんとばかりはいさゝかの思ひなり。云々」。旅中の更衣、

ひとつ脱いでうしろにおひぬころもがへ

よし野出て布子賣たしころもがへ　萬菊

「曠野」に、布子賣をしとあるが、賣たしの方がよい。

四月八日奈良に至る。紀行に云、「灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、云々」。

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな

招提寺に鑑眞和尙の盲目の尊像を拜み、

わか葉して御目のしづくぬぐはばや

「笈日記」に、「幾年ばかり先にや侍らん。この宮古の西大寺に詣して」と前書し、靑葉とある。「句選年考」引用、和州巡覽記に曰、招提寺は菅原寺の東也。是より西大寺へ二十五町。寺門廣く諸堂多しとある。

舊友に奈良にて別れる。

鹿の角まづ一ふしのわかれかな

その頃郡山の原田宇古（ノキフル）の亭に至り、杜國と三吟歌仙成り、別に際し芭蕉宇古に頭陀箱を與へる。舊友とは宇古のことか。「次郎兵衛物語」其他に、杜國と奈良で別れた時の吟であるやうにあるが、さうではあるまい。原田氏

宇古は郡山の重臣で、はじめ才丸門。後蕉門。玄々一の「奇人談」に、頭陀箱の圖があり。伴閑人の識語がある。

頭陀箱ノ傳

貞享年間、蕉翁蹈二芳山之花一、道過二郡山一而止二於宇古一十許日。與二弟子杜國一有二三詠之俳諧一。于時翁臨レ別餘二此一物一(頭陀笥)宇古深秘二石室一云。後有レ故遂爲二正正處士之有一。僕尚旨行而得二模之野火止之丘一矣。是爲與附二屬惟然一者不レ共同焉。今依二其家記一、以識二其傳來之正一爾。

とある。因に、杜國との三吟歌仙は、天明年中池魚の災にかゝり、燒失してしまつた。

大坂へ上り或人の許にて、

杜若かたるも旅のひとつかな

猿雖に送つた手紙に、

津の國大江の岸にやどる。いまの八間屋久左あたりなり。

杜若語るも旅のひとつかな　愚句
山路の花の殘る笠のか　一笑
朝月夜紙干板に明そめて　萬菊

二十四句にて止む、

とある。或人の許とは一笑亭のことか。

須磨明石遊覽

月はあれど留守のやうなり須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

紀行に云、

卯月中頃の空も曉に殘りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山はわかばにくろみかゝりて、時鳥啼出づべきしのゝめも、海のかたよりしらみそめたるに、……漁人の軒ちかきけしの花のたえ〴〵に見わたさる。

海士のかほまづみらるゝやけしの花

東須磨・西須磨・濱須磨の三所にわかれて、あながちに何わざするとも見えず。きすごといふ魚をあみして、眞砂の上に干しちらしけるを、鳥の飛來りてつかみ去る。これをにくみて、弓をもておどすぞ、海士のわざともみえず。云々

須磨の海士の矢先に啼やほとゝぎす

時鳥きえゆく方や島ひとつ

須磨寺やふかぬ笛きく木下闇

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

淡路島手にとるやうに見えて、須磨・明石の海左右にわかる。……又うしろの方に山を隔てゝ、田井の畑と云所、松風・村雨ふる里といへり。……鐘掛松より見下すに、一の谷內裡やしき目の下に見ゆ。云々

などとある。猿雖に與へた手紙によると、十九日尼が崎出船、兵庫に夜泊、繪の島・和田岬・和田の笠松・內裏やしき・本間が遠矢を射た舊跡などときゝて、行平の松風村雨の跡、薩摩守六彌太組討の跡悲しげにすぎ、西須磨に入て、てつかいが峯に登ると、須磨明石左右に別れ、淡路島・丹波山・田井ノ里眼の下に見下され、敦盛の塚に涙をとゞめ、明石より須磨に歸つて泊るとある。

紀行文は平家の滅亡をあはれむ所迄で終つてゐる。實に貞享四丁卯年十月に旅立つて、貞享五年戊辰四月に盡きてゐる。その間七箇月、世に之を卯辰紀行又は吉野紀行と云つてゐる。卯辰とは貞享四五の歳に渉つてゐるからであるし、吉野とは杜國を連れて吉野へ行つたからである。刋本は寶永六年正月大津の乙州が「笈の小文」と題して上木したのがはじめであらう。併し「笈の小文」といふ題號は僞である。それは「去來抄」に、「去來云、笈の小文集は先師自撰の集也。名を聞いていまだ書を見ず。草稿半にして遷化ましく〳〵ける。云々」。又「三冊子」中、「黑ざうし」にも、

師のいはく、わが句ども多くの集に誤り多し。是をみづから書本とし、門人の志を以て、二三句ほどづゝ書添て、所々の歌仙一折づゝ、是も伊賀の門人を初として、志を以て書留むべし。是を笈の小文とせん。又小

文とばかりやすべき。此號は或方にて能見侍るに、太刀とかいふ謠に此事あり、云々

とあるので明かである。即ち芭蕉自選の俳句集の名を、乙州が勝手に取つて、芭蕉の紀行文の名にしたのである。又支考は「本朝文鑑」に、庚午紀行と題してゐるが、之も不適當な題號である。庚午の支干は元祿三年である。此紀行は貞享丁卯から卯辰に渉つてゐる所から、卯辰紀行と云つたので、庚午紀行では理窟に合はない。

須磨から歸つて、何所へ向つたかは、紀行には書いてないが、猿雖に與へた手紙によると、二十一日布引の瀧に登り、山崎街道にかゝつて、能因の塚・金龍寺の鐘を見、山崎宗鑑屋敷跡で、餓鬼つばたの句を思出し、

有 難 き す が た 拜 ま ん か き つ ば た

の句を作り、四月二十三日京に入つたのである。

彼の四月二十五日附、萬菊・桃靑連名の、惣七に與へた手紙、即ち

三月十九日、伊賀上野を出て三十四日。道の程百三十里。此内船十三里。駕籠四十里。歩行路七十七里。雨に逢ふ事十四日。

瀧の數　七ツ　龍門　西河　蜻蛉　蟬布留　布引　箕面

古塚　十三　兼好塚　歌塚　乙女塚　忠度塚　淸盛石塔　敦盛塚　人丸塚　松風村雨塚　通盛塚

越中前司盛俊塚　河原太郎兄弟塚　良將楠塚　能因法師塚

峠　六ツ　琴引　臍峠　野路小佛峠　樫尾峠　クラカリ峠　當麻嵩屋

阪　七ツ　粧坂　西河上ちいか坂　うはかり坂　宇野坂　かふり坂　不動坂　生田小野坂

山峯　六ツ　國見山　安禪嶽　高野山　てつかいか峰　勝尾寺の山　金龍の山

此外橋の數、川の數、名もしらぬ山は、書付にもらし申候、

卯月廿五日　萬　菊

桃　青

惣七様

「批杷園隨筆」に、「眞蹟は伊賀上野猪來にあり」とある。京で認めたものであらう。京にはどの位留つてゐたものか分らないが、「次郎兵衛物語」によると、芭蕉は五月五日京の長者町去來が許にかへりついたことになつてゐる。併し「春秋」の素蓮は、此手紙の旅行日數を數へて、

按、三月十九日ヨリ三十四日ハ卽四月二十二日ニ當ル。尤三月大ノ積也。且此里數ヲ考ルニ、伊賀ヨリ大和・紀伊・攝津・播磨・近江ノ吟行ニ、船路十三里トハ、淀ノ船路ナルコト明也。故ニ大津ニ至トス。

と論じ、四月二十二日難波から川舟で大津に至る事にしてゐる。素蓮說では京に入らないやうになつてゐる。併し之は竹人說の如く、やはり京に入つたのではなからうか。例の萬菊の鼾の圖は、京から猿雖の許へ文通する時、たはむれに出來たものだと竹人は言つてゐる。そこで杜國であるが、彼は何所迄芭蕉と連立つたのであるか。之も竹人の說では、「萬菊は京よりひとり伊賀にかへり、猿雖が宿に四五日の足休して、六月二十五日美濃にかへ

る。」とあるが、美濃は變である。三河とか保美とかいふ所であらう。猿蓑に、

翁に供せられて、すまあかしにわたりて

似合しきけしの一重や須磨の里　亡人 萬菊

とあるから、須磨明石を見終つて、山崎街道から京へ出たものと思はれる。さうすれば芭蕉と京まで一緒に來て、こゝで別れたと見た方が、自然のやうである。

京を出でて芭蕉は大津に行つた。大津は乙州の所を宿としたのであらう。今度は木曾路の旅を思立つたのである。まづ瀬田の螢を見、

此ほたる田毎の月にくらべ見ん

とある。「次郎兵衞物語」に、

五月二十日に彦根に赴き給ふ。行がけに曲水・丈草・正秀・乙州子など同道にて國分山に登り、音に聞く幻住庵より湖水を見給ひて、許六の迎に逢給ひて彦根に行給ふ。

とある。國分山に登つて、幻住庵に行つたなどは信ぜられないし、許六に逢つたことも小説らしいが、大津には四月から五月にかけて止つてゐたものだらう。湖中の「略傳」に、祖翁の日記（自筆にして三行ばかりとある）を引き、

六月六日大津を出、ゐち川に泊。七日赤坂に一宿。八日岐阜に到る。秋芳軒宜白を主とす。

とあるがどうだらうか。「春秋」には、「五月、日（四日五日）未詳。岐阜（加納ヨリ左ニ入ル、里數一里、）ニ至、偕己白が秋芳軒ニ止錫ス。」とある。私は五月說の方がよいかと思ふ。但し四日五日と定めたのは、こゝらかとのぞくあやめ云々の句から推定したものか。己白亭に泊つたことは「笈日記」に、

ところどころ見めぐりて、洛に暫く旅ねせしほど、みのゝ國よりたびたび消息有て、桑門己白のぬしみちしろべせむとて、とぶらひ來侍りて、

しるべして見せばやみのゝ田植歌　　己白
笠あらためむ不破のさみだれ　　はせを

とあるから、己白が案内のため近江へやつて來て連立つたものと見える。なほ同書に、其草庵に日比ありてと前書して、

やどりせむあかざの杖になる日まで

「曠野」に、

はじめて葎室をとふらはれける比
こゝらかとのぞくあやめの軒端哉　　秋芳

とある。之によると芭蕉も此草庵が氣に入つたものか、長く逗留して旅勞を慰めようと思つたらしい。然るに落梧の「瓜畠集」（支考の「笈日記」中に出）には、

落梧なにがしのまねきに應じて、稲葉山の松の下涼みして、長途の愁をなぐさむほどに、

山かげや身をやしなはむ瓜畠

とあつて、芭蕉の美濃行脚は已白亭にも宿り、落梧の草庵にも宿つたものだらうと考へる。「次郎兵衛物語」に、六月十日岐阜の落梧から、長良川の鵜飼を見せようと云つて、已白と云ふ人を迎としてよこしたから、六月十三日岐阜へ赴いたとある。或はそんなこともあつたかも知れない。但し月日は當にならない。「笈日記」に、

落梧亭

藏のかげかたばみの花めづらしや　荷兮
折てやはかむ庭の箒木　落梧
たなばたの八日は物のさびしくて　翁

とある。又同書に、

名にしあへる鵜飼といふものを見侍らむとて、暮かけていざなひ申されしに、人々稲葉山の木かげに席をまうけ、盃をあげて、

又やたぐひ長良の川の鮎なます
夏來てもたゞひとつ葉の一葉哉

鵜舟も通り過る程に歸るとて

　面白てやがてかなしき鵜ぶね哉

芭蕉は己白・落梧其の他この地方の人々と共に、稲葉山に登つて鵜飼を見たのである。賀島氏の水樓に登つて、十八樓ノ記を作つたのも其頃である。記は「笈日記」、風德の「芭蕉文集」、蝶夢の「芭蕉翁文集」其他に出てゐる。

　此あたり目に見ゆるもの皆涼し

「笈日記」に、貞享五仲夏とある。

落梧の一子の夭折を悼む。「笈日記」に、

　その頃ならん、落梧のぬしおさなき者を失へる事をいたみて、

　もろき人にたとへむ花も夏野哉

　似た顔のあらば出で見ん一をどり　　落梧

落梧の句はあはれな一ふしがある。

去來の妹千子の死を聞きて、去來の許へ追悼吟を送つたのは、六月であつた。

　なき人の小袖も今や土用干

六月十九日岐阜の芦文亭で俳諧興行、連衆芦文・荷兮・芭蕉・越人・惟然・炊然・落梧・蕉笠・己百・梅餌・露蛍・鴎歩・拾景・用呂・東巡の十五吟歌仙。

蓮池の中に藻の花まじりけり　芦文

水おもしろく見ゆる鴛の子　荷兮

さゞなみやけふぞ火ともす暮待て　芭蕉

（「一葉集」下略）

惟然此頃入門。

美濃を立つて尾張の鳴海に至る。重辰・知足・如風・安信・自笑・表六句成る（「千鳥掛」）。「一葉集」には七月十三日とある。

鳴海眺望

はつ秋や海も青田の一みどり　芭蕉

乘行馬の口とむる月　重辰

藁庇霧ほのくらく茶を酌て　知足

玉晁の「俳諧百人一句抄」に、巢鳳軒樂山隨筆の文を引き、芭蕉が島田町の麓杏伯の家で病氣になつたことが出てゐる。即ち

島田町養（?）右衞門申來候

去冬も御斷申上候。松尾桃靑と申俳諧師、生國伊賀表より罷歸、島田町土肥三郎兵衞借家麓杏伯所罷越候處、

持病差發申候付、當地にて養生仕度之由奉願候間御斷申上候。
右之通來候付、病氣の儀ニ付、差置養生爲仕可申候。併江戸者之儀ニ候間、若怪敷躰少なりとも見出候はゞ、
早々可申來候。〇(不明)大和町佐のより(?)請合御座候付、差置可申候。
　右貞享五辰七月五日御奉行所記
とあるのである。伊賀表より罷歸るとは變であるが、年代が「卯辰紀行」の歸途であるから、參考迄にあげる。
此島田町は鳴海附近の町でなければ理窟に合はない。
知足が弟金右衞門の新宅を祝ふ。

　賀新宅

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　芭蕉
蒜にみゆる野菊刈萱　知足
投渡す岨のあみ橋霧こめて　安信
（「千鳥掛」下略）

二十日、名古屋の竹葉軒長虹亭に於て歌仙興行。芭蕉・長虹・荷兮・一井・越人・胡及・鼠彈の七吟である。

　貞享五戊辰七月二十日、
於竹葉軒長虹興行

粟稗にとぼしくもあらず草の庵　芭蕉
藪の中より見ゆる青柿　長虹
秋の雨歩行鵜に出る暮かけて　荷兮
（「秋の日」下略）

此歌仙は安永元年暮雨巷曉臺が、「秋の日」（「尾張續五歌仙」とも云）と題して上木してゐる。也有の序によると、曉臺門の駅六なる者の家に傳はつた一巻の歌仙がある。之は往昔竹葉軒の主人が、芭蕉を招いて、其日に成つたもので、其座の荷兮の筆である。云々と。

名古屋止宿中、野水の上京を送る。

見送りの後や寂し秋の暮

九、更科紀行

八月、芭蕉は越人を連れ、荷兮の奴僕を供にして、さらしなの里、姨捨山の月見に向つた。「次郎兵衛物語」には、「八月八日、越人を同道、荷兮が奴僕を供にして、名護屋を立給ふ。」とある。「笈日記」に、十八樓ノ記の次に、「その年の秋ならん、この國より旅立て、更科の月見んとて」と前書し、留別四句、

送られつおくりつ果は木曾の秋　翁
草いろ〳〵おの〳〵花の手柄かな

人々郊外に送り出で、三盃を傾侍るに、

朝がほは酒盛しらぬさかり哉

ひよろ〳〵とこけて露けし女郎花

とある。之によると芭蕉は美濃の國（岐阜）から旅立つて、更科の月を見に行つたことになる。從つて此留別吟は美濃の連中に對するものであつた。卽ち芭蕉は再び名古屋から美濃へ引返したものと見える。岐阜から木曾街道に入り、稻荷山から八幡村・姨捨といふ順である。善光寺へは稻荷山・丹波島・善光寺と來るのである。

途中で六十ばかりの道心坊と一緒になつた。腰が曲る迄荷物をしよつてゐるので氣の毒に思ひ、その荷物を馬に付け、その上に芭蕉を乘らせた。四十八曲りとかいふ嶮しい山道で、歩いてゐても目がまはる所を、彼の奴僕は馬の上に居眠りして、危くつて見てゐられない。宿へ着いて燈火の下に句作してゐると、道心坊は旅情の心うく、物思に沈んでゐるのだらうと早合點して、若き時巡拜した地、阿彌陀樣の尊いことなどを、次から次へと話しつゞけるので、やかましくて句も作れず、結局酒にすることになつたら、普通の倍もする盃に、而もまき繪が書いてあるものを出され、思ひがけず興に入つた。

あの中に蒔繪書たし宿の月

棧やいのちをからむつたかつら

棧や先おもひいづ馬むかへ
霧晴て棧はめもふさがれず　　越　人
さらしなや三よさの月見雲もなし　　同

姨捨山

俤や姥ひとりなく月の友
いざよひもまださらしなの郡哉
ひよろ〱とこけ（尚）て露けしやをみなへし
木曾のとちうきよの人のみやげ哉
身にしみて大根からし秋の風

善光寺

月影や四門四宗も只一ツ
吹落あさまは石の野分哉
吹とばす石はあさまの野分哉

（芭蕉眞蹟「更科紀行」より）

十五日、姨捨山の月見、十六日、善光寺へ參詣した。木曾のとちといふ句は、芭蕉が月見の土産に、橡の實を

荷兮に贈つたからである。それは「曠野」に出てゐる。

木曾の月見て來る人のみやげにとて、杼（トチ）の實ひとつおくらる。

年の暮迨うしなはずかざりにやせむとて、

としのくれ杼の實一つころ〳〵と　荷兮

二年に渉つた旅行も無事に終へて、芭蕉は越人を連れて、深川の草庵に歸つて來た。「春秋」に、「濱木綿」の文を引いて、素堂の賀詞をあげてゐる。

茶の羽織おもへばぬしに秋もなし　山素堂

とある。文は芭蕉庵六物ノ記に出てゐる。こゝでは略す。

越人芭蕉の兩吟歌仙成る（曠野集參照）。苔翠亭に於て歌仙一折。越人・苔翠・芭蕉・友五・夕菊・泥芹・依々七吟である。

月出は行燈けさむ座しき哉　越人

朝夕かゝる柴垣の梗　苔翠

此君と名をいふ竹の露落て　翁

（「一葉集」下略）

杉風・越人・芭蕉・苔翠・友五・夕菊・依々・泥芹の八吟、半歌仙成る。

しら菊に高き鷄頭おそろしや　杉風
泥かぶりたる稲を干屋根　越人
月何日海なき國に旅ねして　翁
（「一葉集」下略）

九月十日、素堂亭に於て菊見をする。「笈日記」に、

素堂亭　十日菊

蓮池の主翁又菊をあはす。きのふは龍山の宴をひらき、けふはその酒のあまりをすゝめて、狂吟のたはぶれとなす。なほ思ふ、明年誰かすこやかならん事を。

いざよひのいづれか今朝に残る菊　はせを

其他路通・越人・友五・嵐雪・其角・素堂の句がある。

十三日、芭蕉庵の月見、「笈日記」に、

芭蕉庵

十三夜

はせをの庵に月をもてあそびて只月をいふ。越の人あり。つくしの僧あり。まことにうき草のこらず水にあへるがごとし。あるじも浮雲流水の身として、石山のほたるにさまよひ、さらしなの月にうそぶきて庵にか

へる。いまだいくかもあらず。菊に月にもよほされて、吟身いそがしい哉。云々

唐土に富士あらばけふの月見せよ　素堂

之をはじめとして、杉風・越人・友五・岱水・路通・宗波・石菊・芭蕉の句があつた。此素堂の前書は「笈の小文」にある前書とは違つてゐる。「笈の小文」の方が短い。「笈の小文」の「さらしな紀行」には、

歸庵に十三夜

木曾の痩まだ直らぬに十三夜　翁

とあるが、「笈日記」には、

木曾の痩もまだなほらぬに後の月　はせを

とある。併し杉風の文(「さらしな紀行」出。元祿十一暮秋十三夜、杉風とある。)に、

一とせ亡師下向のころ、姨捨の月をみて、いざよひもまたさらしなの郡哉、此句を土產にして歸庵有けるに、ほどなく十三夜になれば、をの〳〵よりて吟けるに、翁も

木曾の痩もまだ直らぬに後の月

とむすばれけるも……

とある。後の月は十三夜を後で直したものか。

越人は十月にかへる。冬、芭蕉・岱水・兩吟・十二句成る、後岱水・杉風・兩吟にして半歌仙となす。今年の

冬は芭蕉庵に籠つて俳諧に餘念なかつた。その二三をあげると、

大通庵道圓追善

共かたち見ばや枯木の杖の長　翁
千鳥來て啼よし垣の池　夕菊
蓑作りみの作りさす雨止て　苔翠
（「一葉集」下略）

右芭蕉・夕菊・苔翠・友五・素堂・路通・曾良の七吟歌仙。

雪の夜は竹馬の跡に我連よ　路通
花屋をとはん梅の早咲　宗波
打渡す外向に酒の食干て　友五
（「一葉集」下略）

右路通・宗波・友五・芭蕉・岱水・曾良・夕菊の七吟歌仙。

雪毎に梁たはむ住ひかな　岱水
けふらで寒し浦の鹽燒　路通
さま〲の魚の心も年くれて　翁

（「一葉集」下略）

右岱水・路通・芭蕉・友五・曾良・宗波・嵐竹・雨洞・夕菊・綠絲の十吟歌仙成。

皆拜め二尺の七五三を年の暮　翁

篠竹うたふ煠拂の風、　岱水

弱うる俵の小口絣そめて　曾良

（「一葉集」下略）

右芭蕉・岱水・曾良・嵐竹・宗波・路通・友五・泥芹・夕菊の九吟歌仙成。

越人に文通したのも此冬である。

二人見し雪は今としも降けるか

去年の侘寐を思出してゞある。

十、曠野集に就て

曠野は橿木堂荷兮の撰である。芭蕉の序に、「尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名をあらのといふ。云々」とあるから明かだ。元祿二年彌生、芭蕉桃靑の序、八卷並に員外、三冊である。卷之一は花・郭公・月・雪の發句、即ち古來詩歌の景物として持囃されたもの。卷之二は歲旦・初春・仲春・暮春の發句、卷之三は初夏・仲夏・暮夏の發句、卷之四は初秋・仲秋・暮秋の發句、卷之五は初冬・仲冬・歲暮の發句、卷之六は雜の發句、卷之七は

名所・旅・述懐・戀・無常の發句、巻之八は釋教・神祇・祝の發句を集めたものである。すべて發句を主とし、連句は員外とする。曠野といふ題號は荷兮の抱負を語つたもので、四季の吟詠から神祇・釋教・戀・無常・詩の題句及び他門の句まで刈りあつめて、一大句集としようとした意味が見える。

發句は七百三十五句ある。作者は宗鑑・忠知・貞室を始めとして、季吟・芭蕉・其角・去來・杉風・尙白・越人・野水・荷兮・鼠彈・落梧・素堂・路通・杜國等である。內荷兮は五十九句、芭蕉は三十五句入つてゐる。

何事ぞ花みる人の長刀　去來
獨來て友選びけり花の山　冬松
ほとゝぎすどれからきかむ野の廣き　柳風
蚊屋臭き寐覺うつゝや時鳥　一髮
めいげつやはたしでありく草の中　傘下
松かざり伊勢が家買人は誰　其角
かげろふや馬の眼のとろ〱と　傘下
茶の花や杉茶の土手のあい〱に　長虹
うごくとも見えで畑うつ麓哉　去來
飛入てしばし水ゆく蛙かな　落梧

ほうろくの土とる跡は菫かな　野水
草刈て菫選出す童哉　鷗歩
刈草の馬屋に光るほたるかな　一髪
ちからなや麻刈あとの秋の風　越人
あさがほの白きは露も見えぬなり　荷兮
松の木に吹あてられな秋の蝶　舟泉
しら菊のちらぬぞ少口をしき　昌碧
こがらしに二日の月のふきちるか　荷兮
このはたく跡は淋しき圍爐裏哉　一髪
霜の朝せんだんの實のこぼれけり　杜國
湖の水まさりけり五月雨　去來
とまり〳〵稻する歌も替けり　ちね
妻の名のあらばけし給へ神送り　越人
負て來る母おろしけりねはんぞう　鼠彈

連句はすべて十歌仙ある。內半歌仙が一卷。最初は素堂の句を立句とした、野水・荷兮・越人の三吟歌仙一。次は

龜洞・荷兮・昌碧・野水・舟泉・釣雪の六吟歌仙一。越人・傘下（二句づつ附ける）兩吟半歌仙一。野水・落梧・二句づつ附ける）兩吟歌仙一。一井・鼠彈・胡及・長虹の四吟歌仙一である。以上の內共角と越人の兩吟（落着にの卷）が勝れてゐる。共角も越人も作意を好む人で、そこがよく合ふ。大體一卷の調子は華かで、空想的で、情緒的であるが、變化の波はよく合致する。卽ち

飲でわするゝ茶は水になる　角
誰か來て裾にかけたる夏衣　同
齒ぎしりにさへあかつきのかね　人

人事になると二人共巧みなものである。

空蟬の離魂の煩のおそろしき　角
あとなかりける金二萬兩　人
いとおしき子を他人とも名付けたり　同
やけどなをして見しつらきかな　角
酒熱き耳につきたるさゝめごと　同

二ノ表の三句目より

あぢきなや戸にはさまるゝ衣の棲　角

戀の親とも逢ふ夜たのまん　人
やゝおもひ寢もしねられずうち臥て　同
米つく音は師走なりけり　角
夕鴉宿の長さに腹のたつ　同

一句に含蓄があり、變化も巧で、實に旨い。越人と芭蕉の兩吟（雁かねの卷）も面白く出來てゐる。併し此卷は表の第三、四句目あたり、附合が少しどうかと考へる。

足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬ〴〵やあまりかぼそくあでやかに　芭蕉
かぜひきたまふ聲のうつくし　人
手もつかず晝の御膳もすべりきぬ　蕉
物いそくさき舟路なりけり　人

裏へ行くとさすがに捨てられぬ情味がある。とかくなまめかしい情緒的な句がつゞく。其他越人・傘下の兩吟（月に柄をの卷）も相應によい。荷兮・野水の兩吟（ほとゝぎす待ぬの卷）も變化の波が順調で、殊に名殘ノ表から名殘ノ裏へかけて、輕くすら〳〵と附け進んでゐる所は面白い。

太鼓たゝきに階子のぼるか　野水

ころ〴〵と痳たる木賃の草枕　　荷兮

氣だてのよきと聟にほしがる　　水

忍ぶともしらぬ顏にて一二年　　同

庇をうけて住居かはりぬ　　兮

その他の卷は特に取出して云ふ程のこともあるまい。普通の出來である。但し最後の一井・鼠彈・胡及・長虹の四吟（一里の炭賣の卷）が一番劣つて居よう。曲齋は「婆心錄」にそれ〴〵の卷を批評して、即ち

「麥を忘れ」の卷は表あしく、逃句並ある故に集中第四也。「遠淺や」の卷は集中にて劣つたり。「美しき泥餡」の卷は集中第四也。「時鳥」の卷は集中第二也。「月に柄を」の卷は集中にて勝たり。「雁か音」の卷はよく出來たれども、越人が付損多き故に集中にて第二に成たるは殘念也。「落着に」の卷は集中第一也。「我もらじ」の卷は集中の勝物也。「初雪や」の卷は集中第三也。「一里の炭賣」の卷は逃句多く、集中にて大に劣しは、四子の中秀たる人なき故也。此等の卷はなくてよけむを、鼠彈・一井・長虹の卷なき故に加けむと見ゆ云々

と論じてゐる。併し嵐雪・越人の「我もらじ」の卷は、嵐雪も越人も艶な感情を表す點に於て似てゐるが、嵐雪の弱い調に、越人は牽制されたらしく、調子の揃はぬ所が見えて、一體に卷が引立つてゐない。曲齋の賞美はどうかと思ふ。「美しき泥餡」の卷が集中第四に落されたのはちと贊成出來ない。あの卷は發句脇の情趣もよく合つてゐるし、變化も相應に行つて居て、そんな不出來な卷とも考へられない。他は私も曲齋と同感である。

「曠野」は元祿二年三月の撰であらう。古來蕉門の一權威であつて、許六などは「自讃之論上」に、「翁の句並に門人の句等を聞てその風をさぐる時に、あら野集出來たり。喜んで求め、晝夜枕とす。云々」、「滑稽傳」に、「あら野は俳諧やはらかにして少かるし。云々」、「宇陀の法師」にも、「あら野の時はや炭俵・後猿のかるみは急度顯れたり。云々」と論じてゐる。蓼太の「栩さがし」に、「翁の序はありながら、あながちに手傳申されしものとも見えず。云々」とあるが、杜撰なものとは考へられない。殊に荷兮・野水・越人如きは、「冬の日」や「春の日」に於て、芭蕉の懇篤な指導を受けて居るから、自信も付き、句作も熟達したことで、例へ「曠野」が芭蕉の手をはなれて出來たものとしても、價値のない書とは云へない。荷兮・越人等の間に新らしい撰集を作らうなどといふ話は、芭蕉に逢つた時持出されないこともなからう。少くともその噂位は芭蕉の耳に入つて居りはせぬか。芭蕉だつて序を書いてゐるのである。例へその序が東武から送られたものとしても、突然芭蕉に序をたのむわけもなからう。序をかけば芭蕉の責任も加はる。それは芭蕉の指導だつて程度問題で、「曠野」がどの程度まで芭蕉の指導に與つたかは分らないが、全く芭蕉の關知せぬ理由もあるまい。「猿蓑」のやうに芭蕉が熱心にその撰に關與はしなかつただらうが、芭蕉の承認を經てゐることは疑ふ餘地はあるまいと思ふ。許六も「宇陀の法師」に、「名ごやの荷兮・越人あら野に眼明たるに似たれど、云々」と論ずる位だから、正風に不純な集とは考へられない。「凡兆日記」に、

尤廣野集に師翁の序ありて大集也。其事詳なりといへども、是きつと正風ときまりたる書にてもなく、古風

正風の境なし。其故は、集中に古風の宗鑑・貞德・貞室・宗因、其外名も聞かざる人、又誰とも知れぬは、よみ人しらずなどゝ見えたり。云々

とあるが、之は文曉の意見らしく、古人・他門の句が多く入つてゐる譯でもなし、又蕉風の立場から見て、古人・他門の句と雖もよいと思つたものは入れて差支へなからうし、古風・正風の境なしなどと云つて、荷兮を責めるのは、餘り門戶を構へすぎた僻見かと考へる。たゞ「曠野」は、芭蕉の代表撰集といふよりも、荷兮の撰集といふ感じが强い。その點が猿蓑などと多少見劣りする。

「曠野」は比較的大集であつた。「冬の日」・「春の日」に序が無かつたのに反し、これには序がある。つまり七部集中序を置いたはじめである。吏登は「あら野」・「ひさご」は「猿蓑」に熟し、云々と言つて、「あら野」を過渡時代の撰集の如く看做してゐるが、古人の論は七部集を芭蕉の代表撰集として、何處迄も見ようといふ考であるから、或は芭蕉の助力がないとか、或は不純であるとかといふが、「春の日」でも、「ひさご」でも、本集でも、一地方の蕉門の或有力の撰集と見ればよくはないかと思ふ。なほ吏登は「七部搜」に、

芭蕉門の俳諧も、冬の日春の日から一轉して、漸此集に至りて、古風のねばりを離れたものなり。さりながら一二箇所は芭蕉も悔まれし附合あり。いはゆる越人の句なり。

理 を は な れ た る 秋 の 夕 ぐ れ

瓢 箪 の お ほ き さ 五 石 ば か り な り。

此里に古き玄蕃の名をつたへ
　足駄はかせぬ雨のあけぼの

此の句は理をはなれたといふ所の情をはこびて、瓢葦の大きさ五石斗りと云ひ、後の句は古き玄蕃の名を傳へたから、足駄はかせぬと前句を借りて一句に力なし。云々

と論じてゐるが、果して芭蕉の悔まれた附合であるか、嵐雪あたりの意見であるか、分らない。情を運ぶといふのは、前句の趣をはなれない事、附句が前句の意味に頼ることなどを云うたものだらうが、成程さうした難はあるが、全體として論じたら、なか〳〵巧に行つてゐる。

荷兮が芭蕉の勘氣を受けたといふ說が流布されたものか、或は正風に純ならずといふ點からでもあらうか、曠野の特別な註釋書はまだ見ない。七部集の註釋中では錦江のが詳しいやうに思はれる。

第二節　奥羽行脚

一、奥の細道の考證

松島の月先づ心にかゝり、草庵を人にゆづつた芭蕉は、杉風の別墅に移ることになつた。

　草の戸も住替る代ぞひなの家

本文に、

やゝ年も暮、春立る霞の空に、白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。云々

とあつて、餘りあはたゞしい出立のやうに思はれる。併し之は「次郎兵衛物語」によると、芭蕉は風雲の情常に動いて、しばらくも一所に止つて居られない性で、自分は騒ぐ心はないけれど、道祖神が自分を動かすのであると戯れに言つたとある。芭蕉は杉風から、多病心もとなしと、彌生の末まで引きとゞめられたさうである。又同書に、二月中頃から芭蕉庵を住捨て、杉風が後廳に移り、日々餞別の會ばかりで、三月二十七日旅立とある。「笈日記」に、「むかし此叟深川を出づるとて、此草庵を俗なる人にゆづりて」とある。

面八句を庵の柱に懸け置く。

面八句とはだれとの附合だか分らない。

いよ／＼芭蕉は細道の途に就かうとした。時は三月二十七日、月は有明にて影を沒し、富士の山幽に見え、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細い。睦しき限り宵より集まり、船に乘つて送つてくれる。千住といふ所で船から上る。前途三千里の思ひに胸ふさがり、離別の涙をそゝぐ。

行春や鳥啼き魚の目は泪

人々からの餞別は、道具や詩歌種々あつた。道具は本文に徴しても、必要なものだけ携へて、他は捨てた事が

分る。詩歌は風雅の種で、嵩ばるものでもないから、頭陀袋の内に入れて、携へたものであらう。本文松島の條下に、

舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうら島の和歌をおくらる。袋を解て、こよひの友とす。

且杉風・濁子が發句有。

とある。濁子とは美濃大垣の人。中川氏。大和行脚の時にも、芭蕉に餞別を送つてゐる。素堂の松島の詩は、

夏初松島自清幽。雲外杜鵑聲未同。眺望洗心都似水。可憐蒼翠對青眸。

又「とく〳〵の句合」の跋（雷道百里）に、

はせを曾良をつれて、おくの細道に赴かれけるに餞別

松しまの松蔭にふたり春死ん

とある。之は素堂の句である。曾良は信州上諏訪の人。武士で、久保島氏（岩波氏トモ）。通稱久左衞門。後浪人して、河合惣五郎と改名。江戸に出で、吉川惟足に神道を學び、氣魄不撓の人であつた。寶永七年五月、壹岐の勝本に於て歿。行年六十二。

共日やうやく早加といふ宿へ着く。紙子・ゆかた・雨具・筆硯の類は、打捨てるわけに行かず。疲骨の肩にかかつて、難儀をした。芭蕉が體質の弱かつたことは、大和行脚の時、荷物を苦にしたることでも分るが、又こゝでも困つてゐる。

室の八嶋に詣る。同行曾良祭神を說明する。「雪丸げ」に、室八島と前書して

糸遊に結びつきたるけふりかな

とある。

三十日、日光山の麓に泊る。主人を佛五左衛門と云つて、正直偏固のものである。珪山の「鬢麓夜話」(安永七年刊)に、

思ひ出づる道こそかはれ人ごとにしのぶはおなじ昔也けりにて、只したはしき翁のいにしへ、猶佛五左衛門とは見まほしき篤實ものならん。翁に宿まゐらせし家居は、鬢山の麓いづこならん。其子孫はいかになどと好事の人〳〵と共にもとめ捜し、古老に問へば、元祿中戸籍に、今市宿上町西側に五左衛門といふあり。茅屋清貧にて夫婦いとなみ、老にけるまで一子もなく相果てたり。少しの家財調度などは遠緣の者引とりしとぞ。其後かの緣類のものより、五左衛門が妻の老婆所持せし一幅とて、佛頂禪師眞跡の南無阿彌陀佛長六寸ほど、はゞ二寸ばかりなるを、今市宿某かたへ贈今猶存せり。思ふに佛頂禪師ははせを翁の法の師なり。一夜のやどりもまこと厚心の交なれば、其名號を附屬せられしと見えたり。されば是を證據として、佛五左衛門といふものは、今市にあつたとさ。むかし、むかし。

とある。

四月一日、日光山詣拜。

　あらたうと青葉若葉の日の光

「句選年考」に、下野高久（タカク）といふ所、何某（頭書に、高久角左衛門とある）が家に芭蕉の眞蹟あり。「あな尊うと木の下闇も日の光」と書けり。青葉若葉は再案にや。」とある。

黑髮山は霞かゝり、雪がまだ白い。

　剃捨て黑髮山に衣更　　曾良

曾良は旅立つ曉、髮を剃つて、墨染に形をかへ、名を惣五と改める。衣更の二字力がある。うらみの瀧を見る。

　暫時（シバラク）は瀧に籠るや夏（ゲ）の初

「俳諧曾我」に、「郭公うらみの瀧のうらおもて」とある。此時の吟であらう。「一代錄」に、

　　初案
　裏みせて涼しき瀧の心かな
　　再案
　ほととぎすうらみの瀧の裏表
　　治定
　しばらくは瀧にこもるや夏の初

とある。

那須の黒羽といふ所に知人があるので、尋ねて行く途中、雨が降り、日が暮れる。農家に一夜を借り、明くれば又野中を行く。野飼の馬があつたので、それを借りて來る。人里に出たから、駄賃を鞍壺に結付けて馬をかへす。曾良は馬の跡を慕ひて走るかさねといふ小娘のやさしき名に感じ、

かさねとは八重撫子の名なるべし　　曾良

黒羽の館代淨法寺圖書を訪れる。思ひがけぬ主人の悦に日夜歡待される。その弟翠桃など朝夕訪れ來り、自分の家にも伴ひ、又親族の方にも招かれ、日數を送る。犬追物の跡、那須の篠原を分けて、玉藻の前の古墳を見る。八幡宮に詣る、

「陸奥千鳥」に、

陸奥にくだらむとて、下野まで旅立けるに、那須の黒羽と云所に、翠桃何某の住けるを尋て、深き野を分入る程、道もまがふばかり草ふかければ

秣負ふ人を枝折の夏野哉　　芭蕉

とある。「雪丸げ」には、「那須余瀬翠桃亭にて」とある。本文の桃翠は翠桃の誤である。芭蕉・翠桃・曾良の三吟歌仙がある。即ち

青き覆盆子をこぼす椎の葉　　翠桃

村雨に市の假屋を吹とりて　　曾良

（「陸奥衙」下略）

那須の黒羽の館代淨法寺氏は、領主大關伊豫守（信濃守トモアル）の老臣である。錦江の「通解」に、「今も淨法寺齋宮老臣の重職を勤む。」とある。碧梧桐氏の「三千里」に、

淨法寺何がしの家はなほ現存してゐると聞いた。所の者は今に城代の館といふ。町の東北に當る小山の上で、小學校のすぐ左側だと教へる。黒い荒木の衡門には「士族淨法寺三夫」と丁寧に書いた標札が見える。玄關で一度物申と訪れても返辭がない。藁砧の音であらう。壁隣にドス〱とひびく。二度訪れる。しばらくしてハイと頓狂な返辭をして玄關の障子を明ける。……老女との立話は、城代の家は昔からこゝにあつたもので、何年前か家藏殘らず燒けてしまうた。自分の舅に當る人は俳諧を嗜んで、各所を行脚したが、其後この道に志した者はない。芭蕉については何の話も殘らず、遺物といふものは大方は燒けたのであらうといふに過ぎなかつた。云々

とある。

湯をむすぶちかひもおなじ岩清水

「一代鎵」に、那須八幡宮詣拜の條下に此の句が出てゐる。「菅菰附錄」に、「那須溫泉大明神の拜殿に八幡宮を移し奉りて、兩神一方に拜まれ給ふ。」と前書がある。「陸奥千鳥」には、那須溫泉と前書がある。翠桃は鹿子畑氏、善太夫と云。

修驗光明寺に招かれ、行者堂を拜む。

夏 山 に 足 駄 を 拜 む 首 途 哉

「句選年考」の頭書によると、光明寺は黑羽の領主大關伊豫守臣、祿四百石を賜はり、津田光明寺といふ武家修驗である。今の光明寺は津田家より別れしもの、本家は祿百五十石、津田源左衞門といふさうである。「菅菰抄」に、「世々傳ふ。小角常に木履を著て、嶮岨を行く事平地の如しと。故に此像は必ず著履の形を作る。」とある。

當國雲岸寺の奥に、佛頂和尙の山居の跡がある。その跡を見ようと、雲岸寺へ杖を曳く。後の山に登ると、石上の小庵を岩窟に結んでゐた。

木 啄 も 庵 は や ぶ ら ず 夏 木 立

雲岸の岸は巖の誤りといふことである。山居の跡と云ふのだから、此時は既に山を去つて居たのである。佛頂の歿所に就いては、雲岸寺說と長慶寺說とあつて明かでない。又何時頃雲岸寺にゐたものか、それも分らない。兎に角芭蕉が訪れた時は、佛頂は留守だつたのでなく、全然住んでゐなかつたものと思はれる。然るに「一葉集」に、「那須雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋ねて」と前書して、

留 守 に 來 て 棚 さ が し す る 藤 の 花

とあるが詳かでない。

殺生石を見に行く。館代から馬で送られる。此口付の男に短冊を書いてやる。

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

「猿蓑」撰の時、荷兮の面繼やの句が此句と比べられて落第してしまつた。「雪丸げ」に、

高久角左衞門に宿り、みちのく一見の桑門同行二人、那須のしの原を尋れて、なほ殺生石見むと越えけるほどに、雨降りければ、先此所に宿りて、

落來るや高久の宿の子規

とある。「菅菰抄附錄」・「奧細道拾遺」には、「高久角左衞門へ授る。みちのく一見の桑門同行二人、なすの篠原を尋て、猶殺生石見んと越え侍るほどに、雨降りければ、先此所に留り候。」と前書がある。曾良それに脇を附けて、

木の間をのぞくみじか夜の雨

去留の「全集」に、「宗周云、那須野高久村の角左衞門と云ものゝ家に逗留の中、庭を作らせる。「落來るや高久の宿の時鳥」、此家にての句なり。又翁の眞蹟の行脚十七條、其外畫讃等珍藏す。」とある。「一代錄」に、「高久覺左衞門亭に三日逗留」とある。「陸奧千鳥」に、殺生石と題し、

石の香や夏草赤く露暑し

秋鴉主人の佳景に對す

山も庭もうごき入るゝや夏座敷

蘆野里に清水流るゝの柳を見る。

田一板植て立去る柳かな

清水流るゝの柳は、「新古今集」夏の部、題不知、西行法師の「道のべの清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立とまりつれ」といふ歌の傳説化されたもので、百庵の「林藪餘談」によると、西行は元來畫を見て詠んだ歌であるから、その柳は彼里にあるべき筈がない。西行一代記に後鳥羽上皇が鳥羽殿に行幸し、御所のふすまの繪を御覽になつて、當時の歌人を召され、此繪を題にして、各一首の歌を奉らせた時、西行は清水流るゝ柳かげに、旅人の憩へる樣を畫いた繪を見て、此歌を作つたのであると云ふ。「通解」に、

西行此柳を見て、道の邊の歌をよめるといふ事、新古今集の詞書にも見えず。是は繪にしるされし歌なりといへり。道の邊の清水は附會の說なるや。又は此歌によりて事を好む者の名けたるや。かゝる事世に多し。翁の吟は古今抄に、翁の句はじめ立よる柳かなとありしは、西行の道の邊の柳の歌をはこび、田植の姿も凉しげにありしに、淸書にいたり、立去る柳かなと定りたるよし。但田一枚植ゑ仕舞ふを見て、立去りしといふ意なりといへり。

とある。

心許なき日數を重ね、白川の關にかゝりて、旅心定まる。兼盛や能因の故事を思ひ浮べる。

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

等窮の「信夫摺」に、

しら河の關をこゆるとて、ふるみちをたどるまゝに、

西　か　東　か　先　早　苗　に　も　風　の　音

又「伊達衣」にも、

白川に住何云へ文をつかはすはしに、

關　守　の　宿　を　水　鶏　に　と　は　ふ　も　の

などとある。ふる道とあるは奥州街道でなく、關街道である。そこは道細く、草深く、歩行に困難な所だらうである。「信夫摺」に、「風流のはじめやの句の前書に、みちのくの名所〳〵心におもひこめて。先關屋の跡なつかしきまゝに、ふるみちにかゝりて、いまの白河も越えぬ。頓ていはせの郡にいたりて、乍單齋等躬子の芳扉を扣。彼陽關を出て故人に逢なるべし。」とある。文によると、關屋の跡を尋ぬべく行つたのであるから、關街道を選んだことになる。然るにこゝに異說がある。それは「菅菰附錄」の說で、

按ずるに、往還野州蘆田と奥州白坂の宿との間の山のうち、兩國の境に境の明神とて二社あり。この所の坂を白坂といふ。しかれば此前書坂をしら川とあやまり、終に關の字を添えたるにや。一句風情西か東かの詞といひ、此句はいづれ白坂の吟なるべし。ことに白川の關には卯の花水鶏の兩句あれば、かた〴〵今前書を改む。云々

とあつて、西か東かの句を奥州しら坂にてとする。

阿武隈川を渡り、かげ沼を過ぎ、すか川の驛に等窮を尋ね、四五日とゞめらる。

風　流　の　初　や　お　く　の　田　植　う　た

脇・第三と附けて三巻とする。

雨考の「青かげ集」（未見。勝峰氏引用の文による）に、「白河から松島迄の泊り〳〵の日記が出てゐる。曾良の覺書か。」とある。四月二十一日から始まる。

廿一日、白川中町佐五左衛門を尋、野半次へ案内して通る。白川より四里半先、矢吹に宿。

廿二日、須賀川乍單齋宿。俳あり。

廿三日、同所可伸に遊、寺へ歸る。はまん（八幡）へ參詣。

廿四日、可伸庵に會あり。

廿五日、同斷。

廿六日、同斷。

廿七日、同、せり澤瀧行。

廿八日、同、矢内吉三郎。

「一代錄」に、

四月二十二日、相樂伊左衞門亭にて、

風流のはじめやおくの田植歌　芭蕉
覆盆子を折て我儲草　等窮
水せきて晝寐の石や直すらん　曾良
（下略）

○

刈やう（イ、孩やう）を又習ひけりかつみ草　等窮
市の子どもの着たる細布　曾良
日面に笠をならぶる涼しくて　芭蕉

○

旅衣（イ、旅の宿）早苗に包む乞食（イ、食乞人）かな　曾良
淺香のつゝみあやめ折すな　芭蕉
夏引の手引の青へりかけて　等窮

とある。「菅菰抄附錄」に、此等の三卷は本文にいふ三卷であると。其明の「ふくろ表紙」、蓼太「拾遺」には、風流の初やの卷が全部出てゐる。「ふくろ表紙」によると、等窮亭の歌仙興行は四月廿三日になつて居る。その頃黑

羽の桃雪（淨法寺圖書）から句を送る。雪丸げに、

はせを翁みちのくへ下らんとして、我茅屋を音信て、なほしら川のあなたに、すか川といふ所に泊り侍りと聞て申つかはしける。

雨はれて栗の花咲跡見かな　桃雪
いづれの草に啼落る蟬　等窮
夕食くふ賤が外面に月出て　芭蕉
秋來にけりと布たくるなり　曾良

とある。等躬は相樂氏。伊左衛門。須賀川の驛長。石田未得門。乍單齋は其號である。井泉水氏の「賛註」によると、寶永二乙酉年歿。七十八。法名、實岩了道居士とある。なほ同書楫郎氏の通信には、「元祖が貞次といつて、寛文十二年子十一月七日卒とあつて年齡は分らない。その五男に甚左衛門貞榮分家すとある。……その甚左衛門の子が伊左衛門（卽ち等窮）ではないかと思はれる。分家したのはたゞ一軒だけであるから、等窮の分家說は違ふことになる。等窮の家は後が絕えて、その上家に殘るものは何もないといふことで仕方がない。」とある。去留の「全集」に宗周云、

桃翠亭へ等窮も參りて、俳諧の仕樣を問ひければ、翁のたまふには、眼前すがたをおもふ所を述べて句とす。外に求る事あらず。是專要也。たとへばありのまゝを、涼しさや椽からあしをぶらさげる。又思ふ所のまゝ

に、雨折々おもふ事なきさなへ哉、かくいたすを正風體といへりと教へ給ふ。この時の事にや。

とある。此說は明かにあやまりである。涼しさやの句は支考の句で、續猿蓑集に出て居る。支考は元祿三年以降の入門で、奥の細道頃はまだ芭蕉に逢はなかつた。それを芭蕉がその句をこゝへ引用して、教示の例にひくわけはない。

「信夫摺」に、「須加川の驛より二里ばかりに石河の瀧といふ有よし。行てみん事を思ひ催し侍れど、このごろの雨にみかさはりて、河を渡る事かなはず、といひてやみければ、」と前書し、此句を出す。

　五月雨は瀧降りうづむみかさ哉

此宿の傍に大なる栗の木かげをたのんで世を厭ふ僧があつた。

　栗といふ文字は西の木と書て、西方淨土の便ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用給ふとかや。

　世の人の見付ぬ花や軒の栗

「伊達衣」に、

　桑門可伸は栗の木のもとに庵をむすべり、傳へ聞、行基菩薩(ぼさつ)の古は、西に緣有木なりと、杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや。幽栖心ある分野にて、彌陀の誓ひもいとたのもし。

　かくれ家や目だたぬ花を軒の栗

とある。且つ七吟歌仙一卷がある。卽ち芭蕉・栗齋・等窮・曾良・等雲・須等・素蘭。

まれに螢のとまる露草　　栗齋

きり崩す山の井の名は有ふれて　　等窮

（下　略）

須賀川何某所持の眞蹟に、かくれ家のとあるよし、「通解」に見える。「雪丸げ」には、面四句のみあげ、須竿が濁二となり七吟である。

因に、可伸の軒の栗は、芭蕉の一句より有名になつて、附近の人々が愛する事になつた。「伊達衣」に、

予が軒の栗は、更に行基のよすがにもあらず。唯實をとりて、喰のみ成しを、いにし夏、芭蕉翁のみちのく行脚の折から、一句殘せしより、人々愛る事と成侍りぬ。

須加川栗齋
梅が香を今朝は借すらん軒の栗　　可伸

等躬が宅を出て、五里ばかり檜皮の宿をはなれて、あさか山がある。此邊は沼が多い。かつみ〳〵と尋ね歩いて日がくれる。二本松から右に折れ、黒塚の岩屋一見。福島にやどる。しのぶもぢ摺の石を尋て忍の里に行く。もぢ摺の石は昔は山の上にあつたけれど、往來の人が麥草を荒して、此石をためすのを惡んで、里人が谷に突落したもので、石の表面が下の方に伏したのである。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

「小文庫」に、文字摺石と題し、「忍ぶの郡しのぶの里とかや。文字ずりの名殘とて、方二間ばかりなる石あり。此石は昔女のおもひに石になりて、其面に文字ありとかや。山藍摺みだるゝ故に、戀に寄せて多くよめり。今は谷合に埋れて、石の面は下ざまになりたれば、させる風情も見えず侍れども、さすがにむかし覺えて、なつかしかりければ、」と前書して此句が出てゐる。「卯辰集」・「花の雲」には、前書夫々異り、早苗つかむ手もとやとある。「陸奧千鳥」に、「扇にて尺を取るに、長さ一丈五寸、幅七尺餘、楢の九太をもて圍ひ、脇より目印に杉二本植ゑ、云々」とある。「菅菰附錄」に、「しのぶもじすりの石は、ふくしまの驛ちかきに有。里人のいへるは、往來の人のむぎ草をとりて、此石をこゝろみけるをにくみて、この谷に落し入て、石の面は下さまにふしたれば、いまはさるわざする人もなかりけるとなん。風雅のむかしに替れるをかなしみて、「さなへつかむ手もとや、云云。」とある。

五　月　乙　女　に　し　か　た　望　ま　ん　し　の　ぶ　摺

此時の吟であらう。「雪丸け」・「拾遺」に見えてゐる。

月の輪の渡しを越えて、瀨の上といふ宿へ出る。飯塚の里鯖野を尋ねて行くと、丸山といふ所に來た。こゝに佐藤庄司の舊館がある。

笈　も　太　刀　も　五　月　に　か　ざ　れ　紙　幟

佐藤庄司元治は秀衡の臣で二子ある。兄を繼信と云ひ、屋島の戰に能登殿の矢にあたり戰死する。弟を忠信と云

ひ、吉野山にて義經に代り奮戰し、後京に入り死す。「義經記」・「攝待」に詳しい。後世その忠勇義烈を賞讃する。

五月朔日、その夜飯塚に泊る。あやしき貧家である。灯もないから爐のそばに寢る。夜に入りて雷雨臥せる上からもり、蚤蚊に食はれて寢られない。持病さへ起つて死にさうになる。翌朝馬をかりて桑折の驛に出る。伊達の大木戸を越す。鐙摺・白石の城をすぎ、笠島の郡に入つて、藤中將實方の塚をたづねる。五月雨に道あしく、體もつかれてゐるので、外ながらながめて通る。

笠じまはいづこさ月のぬかり道

「猿蓑集」・「卯辰集」に、笠島やとある。「さなへつかむ、かさじまやの句、前書ともに眞蹟加州金澤談夕所持す」と「菅菰附錄」にある。「青かげ集」に、五月二日、飯塚に泊るとある。中將實方、一條天皇頃の人。父は小一條左大臣師尹公の孫侍從定時の男、母は左大臣源雅信公の女。宮中で藤原行成の冠を打落し、天皇より陸奧の歌枕見て參れとて、陸奧守に貶せられ、任所に薨去する。新古今集哀傷部に、西行の「朽もせぬその名ばかりをとゞめおきて枯野のすゝきかたみにぞ見る」といふ歌がある。「菅菰附錄」に、「中將實方のつかは、なとり郡笠じまといふ所にて、道より一里ばかりに侍るといへど、雨しきりに降て、日もくれに及び侍れば、わりなくて過ぬ」とある。「卯辰集」の前書と大同小異。

岩沼に泊る。武隈の松を見る。

武隈の松みせ申せ遲櫻と、擧白と云ものゝ餞別したりければ、

櫻より松は二木を三月越し

擧白は草壁氏。「虚栗集」に句入る。

五日、仙臺に入る。旅宿を求めて、四五日逗留する。こゝで畫工加右衛門といふ貞門の俳人と知合になる。彼に案内されて宮城野の萩・玉田横野・つゝじが岡のあふひを見、み侍みかさと歌によまれた、木の下といふ松林に入る。薬師堂・天神の社を拜み、其日も暮れる。加右衛門から松島・鹽がまの名所を畫いて貰ひ、且つ紺の染緒の付いた草鞋二足を贈られる。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

「青かげ集」に、

三日、白石に泊る。
四日、仙臺國分町、大島庄左衛門。
五日、同所見物。法蓮寺門外嘉右衛門同道。泊同人。
六日、同斷。
七日、同斷。
八日、鹽がま。
九日、松しま。

とある。仙臺入、本文とは一日違ひ。いかゞ。畫工加右衛門の傳は、「仙臺三十六俳仙」に詳しく出てゐる。私も一本を藏したけれど、地震に燒いてしまひ（?）、甚だ殘念に思つて居る。「泊船集」に、紐にむすばんとある。書誤か。

此畫圖に任せて辿り行くと、おくのほそ道の山際に、十符の菅がある。つぼの石ぶみを見る。それから野田の玉川・沖の石・末の松山を尋ね、鹽がまの浦に入相の鐘をきく。その夜盲法師の奧淨瑠璃をきく。早朝鹽がまの明神に參る。午頃舟をかりて松島に渡る。其間二里餘、雄島の磯につく。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などをたづね、松の木かげに世を厭ふ人に感じ、海にうつる月かげに、遊興の情を恣にする。

松 島 や 鶴 に 身 を か れ ほ と ゝ ぎ す　　曾 良

十一日、瑞岩寺に詣る。

十二日、平和泉と志し、道ふみたがへて、石の卷といふ港に出る。宿を借りようとしても更に借す人もない。やうやく貧しい小家に一夜を明し、又知らぬ道を迷ひ步く。袖のわたり・尾ぶちの牧、まのゝ萱原などを外に見て、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に至る。高舘に上り、北上川をながめ、衣川・和泉が城の古を追懷し、杜甫の詩を思ひ浮べて、時うつる迄涙を落す。

夏 草 や、兵 ど も が 夢 の 跡

「菅菰附錄」に、

平泉一見

さても其後御さうしは、十五と申はるのころ、鞍馬の寺をしのびいで、あづまくだりのたびごろも、はるけき四國さいごくも、この高たちの土となりて、申ばかりはなみだなりけり。

夏草やつはものどもの夢の跡

右眞蹟のよしにて、越中井波に有。

とある。芭蕉は平泉より北へは行かなかつた。その理由は分らないが、恐らく象潟一見を急いだためであらう。經堂・光堂を見る。

五月雨の降のこしてや光堂

南部道はるかに見やりて、岩手の里に泊る。小黒崎・みつの小島をすぎて、なるこの湯から尿前の關にかゝり、出羽の國へ行かうとして、關守に怪しめられる。大山に登りて、日が暮れたので、封人の家に泊る。三日風雨になやまされる。

蚤虱馬の尿する枕もと

究竟な案内者を頼み、辛き思をして最上の庄に出る。尾花澤に清風といふものを尋ね、長途のいたはり、様々にもてなされる。

涼しさを我宿にしてねまる也

「一葉集」に歌仙二卷出。一は淸風・曾良・風流などの附けた一卷、卽ち

涼しさを我家にしてねまるなり　芭蕉

常の蚊遣に草の葉を焚　淸風

鹿子立尾上の淸水田にかけて　曾良

（下略）

他は淸風・芭蕉・素英・曾良の四吟歌仙である。卽ち

起臥の麻にあらはす小家哉　淸風

狗ほえかゝる夕立の簑　芭蕉

行翅ひく度羂のにくからん　素英

石ふみかへす飛こしの月　曾良

（下略）

である。本文に、「かれは富るものなれども、志いやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知たれば、云々」とあるが、梨一の「附錄」によると、淸風はもと羽州村山郡最上の庄尾花澤で第一の富家である。最上は紅花を多く作る所で、それを都へ上せ、又は他國の商人も家へ出入し、或時は京師へ往來し、都をも見物などして、人馴れて居て、普通の田舍者とはちがふ。それがため常に酒食に腹をふくらし、糸竹の遊にも趣味を持

つて居た。紅花大臣と云はれて居た。一年上方へ上る途中、江戸へ出てしばらく遊んだ事があつた。或日のこと案内者一人を連れ、湯島といふ所の天滿宮へ參詣し、或茶店に入り煙草を吸ひ乍ら、傍の老人と話すると、老人云、出羽の國のお人なら、名高き象潟などいふ風流地に行つてお遊びの事だらうと。さうだといふと、老人、象潟の櫻は浪に埋れて花の上こぐあまの釣舟と西行も詠んだその櫻樹は、何と昔の俤に變らないかといふ。清風は唯一方の守錢奴であつて、櫻があることさへ少しも知らないのであるが、知らぬといふも恥しいから、口から出任せに、成程その櫻の木は今も海中に榮えて、春毎に水の底で花が咲き、昔の俤を失はないと答へたので、側に居た案內人も汗を流し、息をこらし、顏を打守つてうづくまつた。老人之を聞くとあきれたやうな顏をして、挨拶もそこ〳〵に立去つて了つた。やがて清風も出掛けた。そこで案內者は道々淸風にいふ。さきに老人の尋ねられた西行櫻のお答はどうしたことであるか。あれはさういふわけではない。汀に咲出た花の影が、淸らかな水に映つて、その上を釣舟の行交ふ狀が、丁度櫻の木が波の底に埋れて、花の上を舟が往來するやうであると、その風景に感じた歌であると笑つたので、さすが厚顏の田舍者淸風も恥入つて、學問したい心も出て來たといふことである。その後又都へ上つた。頃は三月花盛で、淸風も出入りの者と共に花見に行く。一座の中には座頭や幇間も打交り、杯盤狼雜、舞ふやら唄ふやら大騷ぎである。すると傍に禪門と見える老人、これも花屋の莚を借りて花を眺めて居た。淸風は名を好む男であるから、禪門の侘しげな樣子を見て、辨當や重箱を送つて終日もてなした。やがて花も入相となる頃、彼の老人淸風の許に來り、種々禮を述べ、さて云ふには、自分は俳諧をやるものであ

る。一句作つたから貴方にも作つて貰ひたいと、短冊を一枚出された。清風困つたけれど、そこは都馴れたものであるから受取り、押しいたゞき、大に感じた風をして、人にも見せ、さて懷紙を取出し、「我等此たんざくを得申候處、御存の通にて挨拶に當惑いたし候間、宜しく頼入候。」と書付け、氣の利きさうなものを見付けて、此發句に麁末乍ら脇を附けようと思つて、かうはやつて見たが、どんなものだらうと、目で知らせた所、彼者心得て、如何にもよく出來てゐる。私が執筆仕らうと言つて、その人脇句を附け、遂に清風の拙さをかくしてしまつた。その禪門は誰れあらう。卽ち芭蕉翁である。その時の發句・脇は、

花 咲 て 七 日 鶴 見 る ふ も と 哉　　芭 蕉

懼 て 蛙 の わ た る 細 橋　　清 風

といふのである。清風之を緣として、芭蕉の門人となり、清風といふ名を賜つた。清風は此俳諧を一卷となし、それに方々通交の卷々發句等を加へ、「一ツ橋」といふ集を編んだといふのである。何だか「芭蕉談」や「俳諧世說」にでもありさうな話で信じられない。此附合は擧白・曾良・コ齋・其角等の六吟歌仙で、貞享三年三月廿日の卽興である。

此句のねまる語意に就いては、其角の「類柑子」に擧白集の文を引用して略說して居る。近頃半田良平氏の「ねまる考」といふ一文もある。

這 出 よ か ひ や が 下 の ひ き の 聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがた哉　　　　　　　　曾良

二句共に清風亭に於ける吟であらう。本文には涼しさをの句の次に列記されてある。

立石寺（リツシャク）といふ山寺に詣る。

閑さや岩にしみ入蟬の聲

風國の「初蟬」に、さびしさや岩にしみ込とある。「追悼木がらし」に、淋しさの岩に云々とある。「句選年考」云、「或曰此句眞蹟にさびしさやと有り。涼さやとも聞え侍る。初案にや。」とある。眞蹟桃鏡所持と云ふ。

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉を訪れ、別當代會覺阿闍梨に謁する。四日、本坊に於て俳諧興行。本文に、「もがみ川をのらんと、大石田と云所に日和を待つ。こゝに古き誹諧の種こぼれて……新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなければと、わりなき一巻を殘しぬ。云々」とある。古來芭蕉が松島で、獨吟歌仙を作つたといふ說が傳はつてゐる。雲南の書に（題簽剝脫。內容は芭蕉の松島獨吟歌仙一卷。須賀川の栗齋が許に於て、栗齋・等躬・曾良・等雲・須竿・素蘭と作つた眞蹟歌仙一卷及び附錄として晉流傳、雲南の四時吟とを收める）それを發表し、晉流の序や自分の跋を加へて、その傳來を明かにしてゐる。此序跋によると、芭蕉が大石田で日和を待つてゐる序、松島にての獨吟歌仙の末を續いで、野夫・村老に附與した。それを乍單齋等躬、其後大石田何某から乞求めて秘藏した所、策月洞晉流須賀川の產であり、等躬とは親族であつたので、等躬歿後

三四年を經て、その子乍跡右の一卷を晋流に與へた。晋流も深く秘め置いたが、梓行の企成らずして歿してしまつた。そしてその期に望み、右松島歌仙を雲南に附屬した。雲南先師晋流の志をついで、生前之を出版したのであるといふ。眞蹟は曾良の筆であると。

我松島の松といふめるを、苫屋かしたる案内の海人の習ひて、

はせを

松の花笘屋見に來る序哉
汐干の跡を知てゆく蝶
几巾日のちらちらに移ろいて
月片破れは鐘にへだたり
礎は唯あらましの草紅葉
世とて案山子を居ゑし闘守
頃しもや陸の湯ぬるく成り増り
霜に欠出の笈おろすなり
一備へまだいなの目の森の中
どの畝々に消る螢ぞ

色々に氣のつく神の時花(はやり)やう
　石なき川を木萱流れて
連立て旅せば寢なと雁の聲
　月に黒むをいとふ雨ぶり
斯迄の姤ミは君が御あやまり
　心の水にそゝぐ筆垢
花あれば狹きを常の住所
　蝶まへとてかとり殘す芝
陽炎の移るも細き雛の友
　几帳にもたれいまそかりけり
得云ぬは位にふるへたる懷にて
　文ミを宿世に結ぶ色なし
憂き身とて討手の勢には交られず
　泣々山を追下。す兒
寐覺やら何やら淋し窓の月

記念の袖につゝむ稲虫

馬場殿の木槿哀に咲つゞき

檜皮を積に通ふ船頭

朝もよひ紀の貫之に三寸とりて

額一行り朽残るなり

歩行ずに此まゝ見ばや峰の花

晝の前後はねふきかほ鳥

春の駒おのれが影に振かへり

吹雪の袖をふるふ兄弟

松竹の冥加を買んけふの市

暦まきたる曉の霜

一體本文に、予は口を閉て眠らんとしていねらずとあるやうに、芭蕉は松島では一句も出なかつたといふのが通說である。然るに後の「句鑑」・「一代録」・「句選拾遺」などを見ると、松の花の句以外に、

松島や夏を衣裳の月と水（一代録）

松島や水を衣裳に夏の月（句鑑）

島々や千々に砕けて夏の海（一代録・拾遺）

などの句をかゝげて居る。けだし細道に洩れた句は、「雪丸げ」・「伊達衣」・「信天摺」・「奥細道拾遺」・「菅菰抄附録」等によつて大概補ひが付くことで、是等の集に載つて居ない句は、先づ後人の竄入と見てよからうと思ふ。芭蕉が單に松島を詠んだ句は此外にもあるやうであるが、それは空想化された句で、實際の作ではないやうに思はれる。晋流が雲南に芭蕉の松島歌仙を附與する時、「われ和歌三神に誓て必眞なることを子に示す。」と言ひ、雲南も、「萬に一つ僞書たるに於ては、予も亦和歌三神の御罰を蒙るべきこと明けし。されど眞僞の疑しきに於ては、一巻の句意・句法を見て知るべし。」と誓つて居る。然るに奥人幽嘯なるもの、「蕉翁獨吟五歌仙考」を著し、之れ等躬の獨吟なりと斷じて居る。成美も、「隨齋諧話」に、

友人幽嘯曰、陸奥須賀川相樂順藏といへるは等躬が末なり。いまも躬が筆のもの多くあり。……その第二巻目に、今の世はせを松島獨吟と稱する松の花の發句の巻あり。芭蕉の獨吟といひ傳へしことと日比疑ありしが、是にて躬が獨吟なる事しられたり。尚按るに、此句の詞書に、我が松島の松といふめるに云々とあり。躬もまたみちのくの人なれば、我松島とはいへるならん。はせをにおいては我の字穩ならず。

とある。甘井の「金蘭集」（文化十年刊）の凡例に、

松しまの獨吟歌仙、奥州大石田といふ所にありて、須賀川の等躬が持ち、晋流と云者ゆづりうけて東都にあるとて、隱家やめだたぬ花を軒の栗の巻と共に近頃梓行せり。軒の栗は余過し年、奥州にて、すか川の內藤

某が等躬より得て持傳へたるを一覽せり。懷紙墨消のまゝにて、翁の自筆甚だ殊勝なる物也。松島獨吟は心得がたき風調に侍る。近年梓行の書にかくの如きこと多し。

とある。雲南は、わりなき一卷とは卽ち此松島歌仙のことであると言つて居るが、此獨吟の風調を考へるに、芭蕉にしては拙く、且つ又本文に曾良の句だけをあげ、すぐ次に予は口を閉ぢて云々と書いて居る口吻から見て、芭蕉は松島で句が出來なかつたものと考へる方が至當のやうに思ふ。幽嘯の言ふやうに、前書の我松島の我も、芭蕉には不用の詞のやうに見える。わりなき一卷とあるのだから、名もなき所の人から、餘程懇望されたものと見えるが、それならその所で作りさうなものである。敎へる目的ならば、新古ふた道に迷うてゐる人々と作り合つた方が徹底するやうに思はれる。わざ／＼松島から作りかけの連句を持つて來て、尙その末を繼いで渡すなどと御念の入つたことをするにも當るまい。私には松島歌仙は信じられない。發句でさへ口を閉ぢて言はなかつた芭蕉に、連句のある筈はなからうぢやないか。又連句を作つたとしても、獨吟で行かなくとも、そばに曾良も居ることだから、二人で附けさうなものである。大石田でわりなき一卷を殘したことは慥かであるが、それは松島歌仙でなく、そこで作つたものであらう。幽嘯の說の如く、等躬の作り事であると言つて了へば問題は片付くものゝ、それは芭蕉松島歌仙を否定しただけで、わりなき一卷を殘したその正體が分つたわけではない。湖中の略傳に、「最上川を乘らんと大石田の一榮（俗名高野平左衞門）が家に日和を待て（俳諧あり）、さみだれをあつめてはやし最上川」とある。卽ち湖中はわりなき一卷を、さみだれをの句を立句として、一榮等と作つた歌仙一卷

のことのやうに考へてゐる。私も或はさうかと考へてゐる。それは次になほ詳しくいふ。

五月雨をあつめて早し最上川

「伊達衣」に、五月雨をあつめて涼しとある。「句選年考」に、「出羽國大石田の住、只狂といへるものゝ所持の芭蕉眞蹟に、五月雨を集めて涼しとあり、奥の細道再案にや。」とある。「雪丸げ」に、「大石田高野平左衞門亭にて」と前書し、芭蕉・一榮・曾良・川水の四吟歌仙一巻がある。卽ち

螢をつなぐ岸の舟杭　一榮
瓜畑いざよふ空に影まちて　曾良
里をむかうに桑の細道　川水

（下略）

蓼太の「拾遺」には、「山形町にて」と前書し、末に「最上川のほとり、一榮子の宅において興行。元祿二仲夏。芭蕉庵桃青書」とある。本文わりなき一巻とは、此一榮子亭に於ける一巻を指したものだらう。「菅菰抄」大石田にて日和を待つの註に、此時芭蕉は大石田の川向ひ、新庄といふ城下に至り、所々にて俳諧興行のやうにあるが、之は最上川を上つて行つたものか。所々にて俳諧とあるは、「菅菰附錄」に、

新庄盛信亭にて

風の香も南にちかし最上河　芭蕉

小家の軒をあらう夕立　柳風

物もなく麓は霧に埋れて　曾良

「雪丸げ」には、たゞ盛信亭にてと前書。

同じく風流亭にて

水の奥氷室たづぬるやなぎ哉　芭蕉

ひるがほかゝる橋のふせ芝　風流

風わたる的の籟矢に鳩啼て　曾良

「雪丸げ」には、たゞ風流亭にてと前書。

又

御尋に我宿狹し破れ蚊屋　風流

はじめてかほる風のたきもの　芭蕉

菊つくり鍬にすゝきを折そへて　孤松

（下略）

「拾遺」には、出羽新庄と前書。風流・芭蕉・孤松・曾良・柳風・如柳・木端などの歌仙一巻がある。「略傳」に、「新庄の山形町風流亭にて俳諧あり。」とあるが、前の「拾遺」の前書によると、山形町は大石田の町名らしく思

はれる。兎に角、菅菰抄の説では、大石田で日和を待つてゐる間、新庄へ行つて、風流其他の人々と連句した事になつてゐる。

六月三日、羽黑山に登る。圖司左吉を訪れ、別當代會覺阿闍梨に謁す。四日、本坊に於て俳諧興行。五日、權現參詣。八日、月山に登る。阿闍梨の需に依つて、三山順禮の句々を短冊に書く。

有がたや雪をかをらす南谷

涼しさやほの三か月の羽黑山

雲の峰幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな　曾良

有難やの句は其角の「花摘集」に、雪をめぐらす風の音とある。本文の句は後に改めたものか。此句を立句として、四日本坊に於て俳諧興行があつた。卽ち芭蕉・露丸・曾良・釣雪・珠妙・梨水・會覺の七吟歌仙である。

有がたや雪をかをらす南谷　芭蕉

住ほどゝ人の結ぶ夏くさ　露丸

川舟の綱に螢を引たてゝ　曾良

（下略）

露丸は圖司左吉氏。芭蕉を山へ案内した人である。或は呂丸とも書く。「陸奥千鳥」に、
麓に手向町、旅人舎り所也。芭蕉門人圖司呂丸とて誹士あり。四年以前洛の土に成ぬ。其所縁はと尋ね入ル。
亡跡は見事に相續して、賑敷渡世す。……彼呂丸は一度風雅の眼を開き、四十に足らずして行く事本意なかるべし。云々

とある。桃隣も「樹も石も有のまゝなり夏座敷」といふ句を立句として、露茄・則堂・呂州・助叟・普提等と追悼の一巻を手向けて居る。支考の「笈日記」に、圖司を祭る文が出て居て、「む月の中比から病みつき、春も二月の二日なるに身まかりけるなり。」とある。卽ち呂丸は元祿五年二月二日、京で亡くなつたのである。

死に來てその二月の花の時　　支考

雁一羽いなでみやこの土の下　　洒堂

土たかき所あはれや春の草　　園友

當歸よりあはれは塚のすみれ草　　はせを

などの各追悼吟が、その文の末にあげてある。「三山雅集」に、「呂丸も亡人となりて、其名のみ殘せり。彼が事は都の土といへる一牒に詳なり。云々」とある。「一代鎵」に、本坊興行俳諧卽ち有がたやの卷の次に、

忘るなよ虹に蟬啼山の雲　　會覺

杉の茂りを歸り三日月　　芭蕉

磯傳ひ千束の弓を携へて　不玉

汐に絶たる馬の足あと　曾良

の四句をあげてゐる。「菅菰附錄」に「黒羽より贈る」と前書がある。後芭蕉が酒田の不玉亭へ行つた時に贈られたもので、後を不玉と曾良と附けて居る。四句ほかない。宗周の說に、「三山順禮の句、短册今にそこに藏す。」といふ事である。芭蕉の登つた羽黒山の記事は、東水の羽黒月山湯殿三山雅集（寶永七年刊）に詳しく出て居る。卽ち本坊は若王寺と云つて、

此寺は世に一山貫主職を守り、諸國散在の末流を檢斷す。寺山の號をば伊非諾山若王寺寶前院と號す。當時東武輪王寺の宮の御支配にして、繁榮追日月。門前に蓮池あり。中に辨天宮あり。その外靈佛秘寶來由の著き舊故年を積てたやすく記しがたし。此寺そのかみは山上に有けるを、天宥法師此所に移せり。そも此天宥師の事は五十世の別當にして、その智の才用は更に一山の棟梁この時にたてり。芭蕉翁行脚のとき書殘せし文をひく。

芭蕉庵桃青拜

羽黒山別當執行不分叟天宥法師は行法いみじききこえ有て、止觀圓學の法智才用人に施して、あるは山を穿ち、石を割て、巨靈が力女媧がたくみを盡して、坊舍を築き、階を作れる。靑雲の滴をうけて、筧の水とほくめぐらせ、石の器、木の工、囘山の奇物となれる物多し。一山擧てその名を慕

ひ、その德をあふぐ、まことにふたゝび羽山開基に等し。されどもいかなる天災のなせるにやあらむ。伊豆の國八重の汐風に身をただよひて、波の雪はかなきたよりをなん告侍るとかや。この度下官三山順禮の序ヶ追悼一句奉るべきよし、門徒等しきりに勵めらるゝによりて、をろをろ戯言一句をつらねて、香の後に手向侍る。憚多き事になん侍る。

そのたまや羽黒にかへす法の月

とある。別當代會覺阿闍梨は、同書に、「會覺師も美濃國谷汲にて身まかり給ふ。」とある。寶永七年には既に亡くなられて居たのである。南谷別院とは紫苑寺のことであらう。同書に

その坂へ上る右の方より三町ほど行て寺あり。紫苑寺と號す。則三山修行職の寺なり。上古は三長吏・五先達・院主職・學頭職・夏一職などいへる職分繁多なりけるよし。今は此職寺のみ存せり。

反魂梅發薰南谷。　南谷活春萬國新。
楓葉秋來好花好。　風光又愛好於春。

實傳

とある。

めづらしや山を出羽の初茄子

本文にはない。「初茄子」に、「羽黒山を出て、鶴岡重行亭」と前書。「菅菰附錄」に、「六月十日、鶴か岡重行

亭興行」と前書がある。本文に、羽黒山を立て鶴岡の城下長山氏重行と云もののふの家にむかへられて俳諧一巻有。左吉も倶に送りぬ。云々とある。即ち

珍らしや山を出羽の初茄子　芭蕉
蟬に車の音そへる井戸　重行
絹機の暮いそがしう梭打て　曾良
閏彌生の末の三日月　呂丸
（「一葉集」下略）

四吟歌仙一巻である。重行は酒井侯の臣である。「菅菰抄」川舟に乘つて、酒田の湊に下る。淵庵不玉といふ醫師に泊る。

あつみ山や吹浦かけて夕涼み　芭蕉
海松かる磯にたゝむ帆筵　不玉
月出よ鬪屋をからん酒持て　曾良
（「一葉集」下略）

此句「韻塞」・「宇陀法師」・「一代錄」等に「あつみ山吹浦かけて云々」とある。「棚さがし」に、蓼太云、あつみ山やのやの文字不用ではない。やの字はあつみ山やふく浦と首をめぐらした句であると。淵庵不玉といふ人

は「句選年考」頭書に、羽州庄内城主酒井左衛門尉に仕へた醫師で、伊藤玄順と云つたとある。潜淵庵と號。文考の「葛の松原」の編者。その他「繼尾集」といふ著もある。

因に云、完來の「あきの夜」といふ書に、此不玉の獨吟歌仙に、芭蕉が元祿六年評詞を加へたものが出てゐる。その不玉の歌仙は、初めに芭蕉翁句評一軸と題し、延享四年八月の樂水軒の序が附いてゐる。序に云、「此俳本は吾祖叟の卷にして、はせを翁の評せるものなり。過し頃囘錄の災侍りて、家本失せけるを、二木何がしの秘め置きしを乞ひ侍りてうつしぬ。云々」とある。併しその評言を讀むと、貞享三年の「初懷紙」を見るやうな、幽玄とか珍重とか新意とかいふ文字を遣つて居て、どうも芭蕉らしくない所が見える。殊にその奥書がどうかと思ふ。即ち

一卷熟覽感吟不斜候。近年武府の風雅分々散々、邪路の輩も相見え候處、微軀方寸相傳て、邊國鄙のかたはらより、かゝる風雅を見せしめ侍る。誠に殊勝の事に候。云々

元祿六年春中　　　　　　　　芭蕉庵桃青

とある。元祿五年の秋、閉關の辭を作つて物臭くなつて來た芭蕉に、何でかくの如き門戸を構へる傲岸な態度があらうか。勝峰氏は芭蕉最後の評言と言つてゐるが、私にはどうも僞書のやうに思はれてならない。

暑き日を海に入たりもがみ川

「菅菰附錄」に、「六月十五日、酒田、寺島彥助亭にて」と前書、凉しさをとある。「拾遺」に、凉しさやとある。

之を立句として芭蕉・令直・不玉・定連・曾良・任曉・扇風の七吟歌仙一巻がある。

涼しさや海に入たる最上川　芭蕉
月をゆりなす浪の浮みる　令直
黒鴨の飛ゆく庵の窓明て　不玉
（下略）

「菅菰抄」に、後にあつき日と改めたのだらうとある。令直は寺島彦助の號。

初眞桑たてにやわらん輪にや切ん

本文にはない。盛岡の平角の「柴ふく風」に、「あふみや玉志亭にして、納涼の佳興に瓜をもてなして、發句をこうて曰、句なきものは喰事あたはじと戯れければ、」と前書して、「初眞桑四にや斷ン輪にや切ン」とあるさうである。

象潟に舟を浮べ、絶景に魂をなやます。

象潟や雨に西施が合歡の花
汐ごしや鶴脛ぬれて海すずし

曾良や低耳の句もある。「陸奥千鳥」に、象潟の雨やとある。「菅菰附錄」に、腰たけや、前書、「腰たけの汐といふ所はいと淺くて、鶴おり立てあさるを、」とある。前書ともに眞蹟井波に殘ると。

小鯛さす柳すずしや海士が妻

「雪丸げ」に出。本文にはない。

夕晴や櫻に凉む波の花

「泊船集」に、「唯波を浸せる夕晴いと凉しければ」と前書。「附錄」に、「夕がた雨やみて、處の何がし舟の中を案內せらる。」と前書ありて、眞蹟越中井波にあると。本文にはない。

鼠の關を越え、越後の地に入り、越中一ぶりの關に至る。此間九日、暑濕の勞に病發る。

文月や六日も常の夜には似ず

「附錄」に、「越後新潟にて」と前書。

海にふる雨や戀しき浮身宿

「雪丸げ」に、「直江津にて」と前書し、芭蕉・左栗・曾良・眠鷗・此竹・布嚢・石雪・義年の八吟歌仙の未完がある。卽ち

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉

露をのせたる桐の一葉　左栗

朝霧に食たく煙立わけて　曾良

蜑の小舟のはせ上る磯　眠鷗

鴉啼むかふに山を見せにけり　　此竹

（下略）

「附錄」に、「今町にて、たなばた近きゆふべを、越の今町といふ所に草枕す。此ところの人々尋とはれて、風雅の事共なんど語り慰みて」と前書がある。そして今町は昔直江の津といふと註がある。なほ眞蹟越中生蠅村枝中所持。「風俗文選」の文とは所々相違する事が書いてある。「泊船集」に、文月の六日とある。「其袋集」に、「北國何とやらいふ崎にとまりて、所の夷もおし入りて句を望みけるに」と前書がある。「句選年考」の頭書に、似鳩覺書を引いて、此句は聽心寺といふ寺にての吟である。聽心寺の僧は眠鷗と號し、芭蕉から付けられた號である。彼寺に眞蹟がある。脇は眠鷗の書蹟であると云うてゐる。尙「秘問集」に、芭蕉陸奥行脚の折、直江津のある寺に立寄り、知音の人の添書を携へて宿を乞うた所、主の僧その淺ましき姿を見て宿を斷つた。すると伴僧が出て來て、發句を書いてくれといふので、芭蕉は發句を書いてやつた。曾良大に怒り、秋の日の短きにぐづぐづして居ては泊る所もなくなつて了ふからと言つて芭蕉を引立てた。芭蕉はかゝる心底では行脚の一宿も覺束ないと言つて、曾良を制しながら立出でた。それを竹風といふ者が見て、自分の家に來いといふ。芭蕉は志はありがたいけれど、添狀を持つて來た寺に泊らないで外へ行くと、何だかわけがありさうに思はれるから、その寺の軒下でもよいから泊めて貰ひたいものだといふ。竹風聞いてわけはないことである。あの寺は私の菩提所であるから、何とでもして泊めさせようと遂に泊めることになつた。芭蕉は佛前に安坐した。曾良は一間の次にかしこまつた。

その様子たゞ人とは見えなかつた。文月やの吟は此時のことであらうなどとある。何だか小說じみて、當になる話でもあるまい。「雪丸げ」に、越後直江津にて、石雪・曾良・芭蕉・更也の四吟歌仙が出てゐる。

星今宵師に駒牽てとゞめたし　石雪
色香ばしき初刈の稻　曾良
瀑の水桶にいそ〳〵布つきて　芭蕉
（下略）

荒海や佐渡によこたふ天の河

「雪丸げ」に、「越後國出雲崎といふ所より、佐渡の島へ海上十八里となり。初秋のうす霧立もあへず。流石に浪も高からざれば、たゞ手の上の如く見渡さる。」とある。「泊船集」・「勸進牒」・「類柑子」、出雲崎にて前書。「其袋集」に、「其夜北の海原にむかひて」と前書。「風俗文選」銀河の序に、「北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。……日既に海に沈んで月ほのくらく、銀河半天にかゝりて、星きら〳〵と冴えたるに、沖のかたより波の音しばしば運びて、魂けづるが如く、腸ちぎれて、そゞろに悲び來たれば、云々」とある。又正興の「柴橋」（元祿十五年刊）に「越後國出雲崎といふところより、沖の方十八里に佐渡が島見ゆ。……折ふし初秋七日の夜、宵月入果て、波の音とうとうと物凄かりければ」とある。

藥園にいづれの花を草まくら

本文にない。「雪丸げ」に、「高田醫師細川春庵にて」とある。「泊船集」に、「越後國高田の醫師何某を宿として」とある。「一葉集」その他、藥欄にとある。「句選年考頭書」に、「或人曰、細川春庵、俳名棟雪。今家業して、眞蹟所持。」とある。春庵亭にての連句を「雪丸げ」から引く。

藥園にいづれの花を草枕　芭蕉
荻のすだれをあげかける月　棟雪
爐けぶりの夕を秋のいぶせくて　更也
馬のりぬけし高藪の下　曾良

親知らず子知らず、犬もどり、駒がへしなどいふ北國の難所を越える。旅宿にて新潟の遊女と泊り合はせる。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結緣せさせ給へとすがられた。あはれにも、あだなる一條の物語を持つ句である。

一家に遊女も寢たり萩と月

くろべ・四十八が瀬など多くの川を渡りて、那古といふ浦に出る。加賀の國に入る。

わせの香や分入右は有磯海

本文、加賀の國に入る時の吟であるが、「菅菰附錄」に、
越中石動の俳士交琴云、祖翁行脚の時、福岡村のあたりにて、里人に氷見へ行べき道を問申されしに、北の

方に見えたる並松こそ、氷見へ通る道にて候へと教へたるよし。早稲の香の吟も此所にその事なるべし。

云々

とある。「通解」に、「越中にての吟にうたがひなきものなり。云々」とある。「一代録」に、越中國安房寺と前書。「陸奥千鳥」・「有磯海集」、分入る右とあれど、「類柑子」には、分入る道とある。「卯辰集」に、越中に入りてとある。

熊　坂　が　ゆ　か　り　や　い　つ　の　玉　祭　り

本文にはない。「笈日記」に、「加賀の國を過とて」と前書がある。「卯辰集」には、「くま坂ざかと云所にて」と前書し、「熊坂が共名やいつの玉祭り」とある。里圃の「翁草」(元祿十五年刊)に、加賀の國にてと前書し、「熊坂をとふ人もなし玉祭」とある。

卯の花山、くりからが谷を越え、七月十五日金澤着。こゝで大坂の商人何處といふものと泊り合せる。一笑の追善に句を手向ける。一笑は小杉氏、茶屋新七といふ。元祿元年十一月六日歿。

塚　も　動　け　我　泣　聲　は　秋　の　風

ノ松の「西の雲」(元祿四年刊)の序に、

行年三十六、元祿初辰霜月六日、かゝげたる沙草の塚に、身は先達而消えぬ。聞く人哀れがりて泣きぬる。明けの秋、風羅の翁行脚の序に訪ひ來ります。ぬしは去にし冬世を早うすと語る。あはれ年月我を待ちしと

なん。生きて世にいまさば、越の月を見ばやとは何思ひけんと、泣く泣く墓にまうで、追善の句をなし、回向の袖しぼり給へり。云々

とある。「雜談集」(元祿四年刊)に、父の十三回忌にあたり、苦しき息の下に、歌仙十三卷を卷き終へて死んだことが出てゐる。「其角十七回」に、芭蕉が駿河府中の籠作り九兵衛の墓を尋ねて、塚も動けの句を手向けたことが出てゐるが、一笑の追善句をそのまゝ利用したものか分らない。

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

「西の雲」に、「松其庵樂會卽興とあつて、殘暑しばし」とある。「韻塞」(元祿九年刊)に、訪草庵とあつて、秋さびしとある。「花の故事」に、小幻庵にて、「殘暑暫く手毎にれうれ瓜茄子」とあり。半歌仙。「通解」に、「奥の枝折に、一泉亭にて遊吟、「殘暑しばし手毎に料れ瓜茄子とありて歌仙一折。芭蕉翁の眞蹟何某のもとに存すといへり。少幻庵、一泉の標號なるや。」とある。今「一葉集」よりその歌仙引用。

少幻庵にて

殘暑暫手ごとに料理れ瓜茄子　芭蕉
みじかさまだき秋の日の影　一泉
月よりもゆく野の末に馬次で　左任

（下　略）

此歌仙は芭蕉・一泉・左任・ノ松・竹意・語子・雲口・乙州・如柳・北枝・曾良・流志・浪生の大勢である。

途中吟

あかくと日は難面もあきの風

金澤は七月中の五日也とあるから、「説叢」の說の如く、七月十五六日頃の吟であらう。「雪丸げ」に、「旅愁をなぐさめかねて、ものうき秋もやゝ至りぬれば、流石目に見えぬ風の音づれもいとゞしくなるに、殘暑なほ止まざりければ」とある。「句選年考」に、「或行脚の僧曰、下野國馬門村長嶋義左衛門所持眞蹟に、目にはさやかに見えねどもといひけん、秋立つ氣色すゝき刈かやの葉末に動きて、聊昨日にかはる空のながめ哀れなりければ、と前書ありて此句あり。」とある。「頭陀物語」によると、秋の山と書いて、芭蕉が北枝に此句を見せた所、北枝難じて、山といふ字の据りすぎて、氣色が廣くないといふ。芭蕉いふ、初めから風と云つたら、聞く人がないだらうと思つて、山と斷つたのである。さすがは加賀に北枝ありと感じたとあるが、眞僞未詳。

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

「雪丸げ」に、「北國行脚の時、何れの野にや侍りけん、暑さぞまさるとよみ侍りし撫子の花さへ盛過行頃、萩芒に風のわたりしをちからに、旅情をなぐさめ侍りて」とある。芭蕉・鼓蟾・北枝・斧卜・塵世・志格・夕市・致

盆・觀生・曾良の歌仙一卷がある。「一葉集」より引用。

しほらしき名や小松吹萩芒　芭蕉
露を見知て顏うつす月　鼓蟾
踊る音さびしき秋の數ならぬ　北枝

（下略）

「一葉集」に、「柳陰軒にて」とある。「句解參考」に、「柳陰軒句空に會り」とある。

散る柳あるじも我も鐘を聞

ぬれて行く人もをかしや雨の萩

「印の竿」に、「ぬれて行くや人もをかしき雨の萩」とある。「雪丸げ」に、觀水亭雨中會と前書。「附錄」に、芭蕉・亭子・曾良・北枝・工蟾・志格・斧卜・塵生・季邑・親三・夕市の半歌仙の一部が出てゐる。卽ち

ぬれて行人もやさしや雨の萩　芭蕉
すゝきがくれに芒ふく家　亭子
月見とて獵にも出ず船あげて　曾良

（下略）

「一葉集」には、七月廿六日觀水亭にてと前書し、芭蕉・觀水・曾良・北枝の四吟百韻一折を出す。

太田神社參拜。實盛の甲、錦の切を見る。

むざんやな甲の下のきりぎりす

「卯辰集」に、あなむざんやなとある。「去來抄」によると、去來が魯町の問に答へて、芭蕉奥羽行脚前は異體の句も多少あつたけれど、此行脚の内にあなの二字を捨てられ、その他にも異體の句を省き捨てたものが多いとある(北枝に與へた扇へぎ別るの句もそれか)。卽ち初案はあなむざん云々としたものと見える。芭蕉・亨子・鼓蟾の三吟歌仙があつた。「一葉集」より引用。

あなむざんやな冑の下のきりぎりす　芭蕉

ちからも枯し霜の秋草　亨子

渡し守綱よる丘の月かげに　鼓蟾

(下略)

山中溫泉に入る。溫泉宿の主人は久米之助といふ子供で、彼の父は貞德老人の門人であつた。

石山の石より白し秋の風

那谷の觀音を拜しての吟。「山中集」に、「那谷觀音は湯本より三里ばかりの道なり。桃妖のぬし送り來りて名殘を慕ふ。」とある。

山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ

山中溫泉入浴の吟。その功有明に次ぐとある。「韻塞」に、加州山中の重陽と前書。「山中集」に、菊は手折らじとある。「菅菰附錄」・「句選年考」に、芭蕉の山中溫泉の頌をかゝげて、

北海の磯づたひして、加州山中の湧湯に浴す。里人の曰、この所は扶桑三の名湯の其一なりと。まことに浴することしばしばなれば、皮肉うるほひ、筋骨に通りて、神心ゆるし。偏に顏色をとゞむる心地す。彼桃源も舟をうしなひ、慈童が菊の枝折もしらじ。

山中や菊は手折らじ湯の匂ひ

元祿二仲秋日

（菅菰附錄）

又「句選年考」に、此眞蹟桃夭が子和泉屋甚左衞門といふものゝ家に傳へて今なほ存す。」とある。「菅菰附錄」に、「加州大聖寺の俳士八水といふものの說を傳へて云、

祖翁山中行脚の時、あるじとせられし久米之助は、其頃年いまだ六七歲ならむ。翁大岩といふ所一見に伴ひ給ひて、先の景に何なりとも發句せよ、俳名をあたふべしと申されければ、久米之助取あへず、

○○（虫損）は蔦のはへそな所かな

と○○（虫損）。翁はなはだ感賞ありて、則ちそこにて桃妖○○（虫損）ふ名を賜りけるとぞ。云々

とある。北枝が芭蕉から俳諧を敎示されたのは山中溫泉滯留中であつた。之は後年也同が書寫して、秋江・鶯村

の乞に任せ上木してゐる。山中温泉で北枝・曾良・芭蕉の三吟歌仙があつた。俗に「燕歌仙」と云つて有名である。

馬かりて燕追ひ行く別かな　　北枝
花野みだるゝ山の曲め　　曾良
月よしと相撲に袴ふみぬきて　　芭蕉

（下略）

「一葉集」、山中の温泉にてと前書。「卯辰集」、「元祿二の秋翁をおくりて、山中温泉に遊ぶ。三吟。」とある。今「卯辰集」より抄出。「全集」に、「宗周云、北枝亭にて名殘の遊吟、……燕歌仙といふ。」とある。

いさり火にかじかや浪の下むせび

本文にはない。「卯辰集」に、「山中十景、高瀬漁火」と前書して出。「東西夜話」に、かゞり火とある。

桃の木の其葉ちらすな秋の風

之も本文にない。「泊船集」に、「加賀山中桃妖に名をつけ給ひて、」と前書して、此句出。「菅菰附錄」に、

山中の里出る名殘

湯のなごり今宵は肌の寒からん

曾良の句（霧の里見るたび泣ん湯の名殘）もあり。此二句眞蹟山中祖明といふ俳士所持す。

とある。

曾良腹を病み、伊勢國長島といふ所へ一足先立つ。曾良の留別吟、芭蕉送別の句があつて、しみ〴〵する場面である。

今日よりや書付消さん笠の露

行〳〵てたふれ伏とも萩の原　曾良

大聖寺の城外全昌寺に泊る。曾良も前夜此寺に泊り、

終宵秋風聞やうらの山　曾良

といふ句を殘す。別に際し、芭蕉一句を寺僧に與ふ。

庭掃て出るや寺に散る柳

汐越の松をたづね、丸岡の天龍寺を訪れる。金澤の北枝此所まで見送る。

玄梅の「鳥の道」（元祿十年刊）に、庭掃て出ばやとある。

物書て扇引さく餘波哉

「古今抄」に、「扇の一章は、賀府の北枝が山中の見おくりに、橋の茶店にて、それが扇に書てたびけるよし。今も金城の家珍に傳へしが、扇へぎ分る別哉とあり。云々」とある。「菅菰附錄」に、「北枝にわかるとて」と前書し、「物書て扇へき分る名殘哉、此眞蹟扇面、今大坂一鼠所持す。此時北枝は越前細呂木驛と金澤町との間、姉落しと云所の茶店迄翁を送り來ると言傳ふ。」とある。「卯辰集」には、「松岡にて翁に別侍し時、あふぎに書て給る。」

と前書し、

もの書て扇引さく名殘かな　　芭蕉

笑うて出る朝ぎりの中　　北枝

と泣く〳〵申侍る。

とある。併し「一代錄」には、北枝の脇を、「笑うて霧にきほひ出ばや」とする。去留の「全集」に、宗周云、翁の持てる扇を北枝に殘し給りし。北枝が後希因が手に入り、今に傳ふ。京骨にて、萩の繪也。云々」とある。因に云、闌更の「俳諧世說」に、芭蕉が金澤の小春亭（通稱宮竹屋伊右衞門。藥屋。）で一夜會合した時、饗應に山海の珍味を連ねた。會後芭蕉云、今宵のもてなしは大名のお成りのやうで、風雅の寂びがない。向後かゝるむだ奢はやめて貰ひたいと戒めた。又金澤の萬子（生駒氏。通稱藤九郎。前田侯馬廻。八百石を領する。此君庵と號する。許六の作者列傳に、蕉門之英士也と云はれる。）會に後れたのを遺憾に思ひ、裸馬に乘つて芭蕉の跡を追來り、松任で追付き、餞別に白衣一ツ、金子三兩を取出した所、芭蕉固辭して受けなかつた。又俗說に、曾良が山中で芭蕉と別れたのは、芭蕉の氣にそむいたからであるといふ事、又萬子はじめて對面の時、我は方外の友となつて、暫く俳諧を守護しようと言つたら、芭蕉も首肯いたといふ話、萬子は南無當來佛といふ五字を短冊に書いて貰つたといふ話、北枝と秋之坊（金澤卯辰山蓮生寺別院の僧。寂玄。享保三年正月寂）とは殊に親しかつたが、餘り睦み過ぎて口論絕えず、芭蕉との會合にも秋之坊は北枝と一向語らず、芭蕉に笑はれたといふ話、北枝が芭

蕉に蓑を贈つたといふ話なども同書にある。

北枝は立花氏。次郎右衛門。加賀小松の人。金澤に住み、研屋を業とし、源四郎といふ。牧童の弟。はじめ宗因門。酒が好きで逸話もある。許六の作者列傳に、「北方之逸士也」とある。享保三年五月歿。牧童は支考の「草刈笛」（元祿十六年刊）の巻頭に傳が載せてあるから參考にならう。支考に利用されさうな、人の良い人物で、芭蕉に會つた時、素堂の浮葉巻葉の句談に及ぶと、此句は蓮ゝと聲で唱へた方がよいと敎へられた外、何事も記憶して居ないといふ逸話がある。

五十町山に入りて永平寺に詣る。福井の等裁といふ隱士を訪れ二泊する。八月十四日夕、越前敦賀の津に泊る。氣比の明神夜參。

月清し遊行のもてる砂の上

「其袋集」に、砂の露とある。「四幅對」、前書に八月十四日云々とある。

あさむつや月見の旅の明はなれ

「其袋」・「泊船集」に、「淺水の橋を渡る。時俗あさうづといふ。淸少納言の橋はとある一條、あさむつのと書ける所なり。」と前書がある。「句選年考」に、「元祿二年八月十四日の曉に、越前國淺水の橋にての吟なるべし。云々」荷兮の「曠野の種」（元祿七年刊）に、「一年芭蕉越路に至り、古き名所を尋ねて、月の十句を或人の語り、湯尾、月を名のつゝみかねてやいもの神。砥山、義仲の寢覺の山か月悲し。濱、月のみか雨に相撲もなかりけり。」とあ

る。本文には句はないが、以上の名所は記されて居る。
十四日の夜は月が殊に晴れたので、翌の夜も天氣だらうといふと、宿の主人が越路の習ひ、晴曇計りがたいといふ。果して雨。

名　月　や　北　國　日　和　定　な　き

十六日、種の濱に船を走らせる。海上七里。天屋何某破籠と小竹筒など細やかに用意する。夕暮の寂しさ、須磨以上である。

寂　し　さ　や　須　磨　に　か　ち　た　る　濱　の　秋
浪　の　間　や　小　貝　に　ま　じ　る　萩　の　塵

その日の大略を等栽に書かせて、そこの寺に殘す。
侘しき法華寺に酒を溫め、夕暮の寂しさを味つた。「泊船集」に、越前いろの濱にてと前書、浦の秋とある。石山の石より白しと同巧の句である。

小　萩　ち　れ　ま　す　ほ　の　小　貝　小　盃

本文にはない。巴水の「薦獅子」(元祿六年刊)に、「いろの濱に誘引れて」と前書、此句出る。「菅菰附錄」に、「或は此句を推敲の後、本文の句に改中されしにや。いぶかし。」とある。纎巧な句である。

月　い　づ　こ　鐘　は　沈　み　て　海　の　底

本文にはない。東恕の「四幅對」（享保四年刊）に、「あるじの物語に、釣鐘のしづみて侍るを、國の守の海士を入てたづねさせ給へど、龍頭のさかさまに落入て引あぐべき便もなしと聞て」とある。「菅菰附錄」に、敦賀鐘が崎にてと前書し、鐘は沈める海の面とある。

路通敦賀まで出迎ふ。美濃國に向ひ、馬に乘つて大垣に入る。曾良伊勢より來り、越人も馬を飛ばし、如行が家に着く。前川子・荊口父子、其外親しき人日夜訪ひて、且つ悦び、且ついたはる。

「一葉集」に、九月三日落着の夜と前書し、不知・荊口・芭蕉・如行・左柳・殘香・斜嶺・恕風の八吟歌仙を出す。

野あらしに鳩吹立る行脚哉　不知
　山にわかるゝ日を萩の露　荊口
初月や先西窓をはづすらん　芭蕉
（下　略）

如行の「後の旅」（元祿八年刊）に、「元祿二年のはじめの夏、深川の庵も人に遣りて、……千百餘里の嶮難終に頭を白うして、美濃の國我里に移り給ふ。句どもあまたあり。奥のしをりに殘し給へば、大方は漏しつ。云々」とあつて、

胡蝶にもならで秋ふる菜むし哉

たねは淋しき茄子一もと　　如行

からびた吟聲で、如行の下の句を吟じたといふ。

戸を開けば西に山あり。伊吹山といふ。花にもよらず。月にもよらず。たゞ是孤山の徳あり。

そのまゝに月もたのまじ伊吹山

斜嶺が硯を出すと、此句を書き付ける。

怨水子別墅にて即興

こもり居て木の實草のみひろはゞや

此筋に望まれて、茅舍の繪讃有。

むぐらさへ若葉はやさし破レ家

などとある。

はやく咲け九日も近し菊の花

之も此頃の吟であらう。「笈日記」に、左柳亭と前書する。「鄙懐紙」に、芭蕉・左柳・路通・文鳥・越人・如行・荊口・此筋・木因・殘香・曾良・斜嶺の十二吟歌仙一卷がある。

はやく咲九日も近し宿の菊　　芭蕉

こゝろうきたつ宵月の露　　左柳

新ばたけ去年の鶉の鳴出て　路通

（下　略）

九月六日、伊勢の遷宮を拝まうと、又舟に乗る。

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

「後の旅」に、「翁此所より伊勢にうつり給ふ時、我舟にて送り侍るに、」とある。如行の仕度した船に乗つて、揖斐川を下つたものと見える。「芭蕉林」に、「元祿二年九月八日、祖翁は伊賀の上野何がしが許にて、一座の歌仙ありて、翌の日は遷宮を拝み給はむとて、はまぐりの二見と聞えしも此所からにや。」と前書あつて、路通・蘭夕・白之・殘夜・芭蕉・曾良（十句目より木因入）の歌仙一巻を出す。

一泊り見かはる萩の枕かな　路通

むしの侘音を薄縁の下　蘭夕

紙子もむ夕べながらに月澄て　白之

（下　略）

芭蕉は大垣へ着いて、出羽の最上ノ庄の或人から貰つた紙の衾を、如行の門人竹戸なる者に附與した。その「紙衾の記」は、支考の「和漢文操」・闌更の「蓬萊嶋」・蝶夢の「芭蕉翁文集」・風德の「芭蕉文集」・湖中の「一葉集」其他に出てゐる。卽ち

紙衾の記

古き枕古きふすまは、貴妃がかたみより傳へて、戀といひ、哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には、鴛鴦をぬひ物にして、ふたつの翼に後の世をかこつ。彼はその膚にちかく、共にほひ残りとゞまれらむをや。戀の一物とせんむべなりけらし。いでやこの紙のふすまは、戀にもあらず。無常にも非ず。蜑の苫屋の蚤をいとひ、驛のはにふのいぶせさを思ひて、出羽の國最上といふ所にて、或人の作り得させたるなり。越路の浦〳〵、山館野亭の枕の上には、二千里の外の月をやどし、蓬むぐらの敷寐の下には、霜にさむしろのきり〴〵すを聞て、晝はたゝみて背中に負ひ、三百餘里の嶮難をわたり、終に頭を白くして、美濃の國大垣の府にいたる。なほも心のわびをつぎて、貧者の情をやぶる事なかれと、我をしたふ者にうちくれぬ。

（芭蕉翁文集）

其他如行・路通・越人・曾良の記もある。其等は風化坊の「雪のおきな」に、衾記の余稿として並記されて居る。参考迄に引用して見る。

　衾記の余稿は、金陵の北翠亭の函中に得て、後に附し侍る。蕉翁衾記は、蓬萊嶋に出たれば、ここに略しぬ。

芭蕉師翁回國つゝがなく、我郷大垣にむかへとりて、杭瀬の水をくみて草鞋をとかしむ。ある夜油單の内よりかみのふすまをとり出て、我門人竹戸といふものに得させ侍る。沙門ならば是を禪定の衾とせん。勇士は

これを母衣きぬにかへむ。あへて汝そこなふ事なかれ。身を終るまで愛して、終に棺の中にしけとぞ爾云。

ものうさよいづくの泥ぞ此衾　如行拜

題衾四季

花の陰葦寐して見ん敷衾

虫干のはれにかざさん衾哉

長き夜のねざめられしや敷ぶすま

首出して初雪見ばや此衾　竹戸拜

○

いろ香をさきとするものは、見る事はなやかにして、さめて後愛を失ふ。その工の業こまやかなるものは、用る事あやうく、やぶれて後うれふ。皆道によるものゝとらざる所なり。此紙衾ひとつはみちのくきさがたのあたりより、いぶせき草のまくらにうちはへ、雪の高濱・有磯海・萱の山・秋篠の里までも、つかれたる肩にかけ、ほそりたる腰につけて、はる〴〵とみのゝ國までのぼりつき給ふを、竹戸といふおのこにゆづりあたへけるなり。哀一身舊里をはなれ、邊土けがれたる肉眼ににらまれたまひ、うき寢の夢のはかなきたゞちにも、かゝる衾の上にこそ有らめと、肝にまで覺え侍る。紙とのりとのさかひは、日を追てはなれやすかる

べし。こゝろざしとなさけはとしふるとも、そこなふ事なかるべし。

露なみだつゝみやぶるな此衾　　路通敬書

○

阿難は世尊の入滅の後に來り、孔子は周のおとろへに出。宣房はあらしや庭の松にまたへんと有庭を見る。こゝに芭蕉老人は、霞とともにむさし野を出、能因西行の跡をしたひ、ひだるき事、寒き事を習ひに、松嶋しら川をながめ、漸秋風立て、越路をへて、雪車のはや緒のはやくも、濃州の市隱如行のもとにものし給ふよし。夕に聞て、其朝はしり着て、先逢てめづらしなんど泣わらふ。その道のほどは、まへにきこえつる衾は、竹戸にとられけんこそこはいかに。富貴官位は德大寺のごとくうらやまず。此ふすまとられけむこそ本意なけれ。貴妃李夫人が後を泣つゞけたるは、うつけたる噺になりぬ。越人／＼。おそく來てくやしからんと、越人と越人が云。

くやしさよ竹戸にとられたるふすま　　越人

○

先たつて往、おくれて來り、此衾の記を讀てやまず。此ふすまは是はてしなきみちのくより、あら海の北の濱邊をめぐり、みのゝ國まで翁のもち給へり。我したがつて旦夕にこれをおさむ。いま竹戸にあたへられし事をそねんで、奪んとすれど大石のごとくあがらず。おもふべし衾のものたる、薄してそのまことの厚き

事を。

たゝみめは我手の跡ぞ其衾　　曾良

元錄二年巳己九月下旬

又江三の「むつのゆかり」に、芭蕉が奥の細道の際用ひた頭陀や如意の圖が出てゐる。卽ち頭陀は葢長サ八寸五分・幅七寸二分・身長サ七寸三分・幅六寸七分・葢と身を合せて幅一寸五分。外黑塗・內行成紙で張る。如意は表に、不生不滅 其身正不令行其身不正雖令不從 〇風羅坊、裏に、元錄二年己孟夏奥州紀行爲如意 外三品携之〇 同行二人曾良刻 とある。

二、奥の細道の價値

以上の旅行記を「奥の細道」といふ。如行の「後の旅」に、奥のしをりに殘し給へば云々とあるから、原書名は「奥のしをり」と云つたものか。「奥の細道」は芭蕉四十六歲の作で、元祿二年三月二十七日、深川の草庵を人に讓り、門人曾良を連れて、旅途に就き、草枕七ケ月、同年九月六日伊勢の遷宮を拜みに行く所までで擱筆したもの。葢し紀行文中の白眉である。

「奥の細道」といふ題名は、宮城野から松島へ行く途中の地名を取つたのである。錦江の「通解」に、廻國雜記の文を引いて、「おくの細道・松本・もろをか・あかぬま・西行かへりなどいふ所を打過て、松しまに至りぬ。」とある。本書の奥書に、「おくのほそ道と自筆に書て隨身し給ふ。云々」とある。おくの細道といふ名が風雅である所から附けたのであらう。

旅行の目的は白河の關に兼盛・能因の歌があり、松島の月に俊成其他の吟詠があるなど、すべて舊跡のなつかしく、古人の足跡も知らまほしく、是等の歌枕を踏査するためであらう。今日の旅行と違つて、昔の旅は一方ならず骨が折れた。而かも芭蕉は病身であり、不毛の地に行く先き〲の知人の喜捨を受けて行くやうなもので、その艱難辛苦は察するに餘りあると云つてよい。伊達の大木戸を越える時だつて、蚤蚊に刺されて一夜中眠れず、持病さへ起つて、死にさうになつたのを、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死ん是天の命なりと、道縱横に踏みならし、氣を取り直して、越えた位である。或は尿前の關にかゝつて、關守に怪しまれ、命から〲最上の庄に出たのである。併し心細き日數を經てゐる間には、館代に歡迎されたり、會覺阿闍梨の尊き席に列つたり、遊女に法の袂を取られたり、豫期せぬ光榮や情事もあつて、又は山川の風光に慰められたりして、芭蕉はよく此難に堪へ得たのである。

去來の云ふやうに、芭蕉は奧羽行脚から都へ立戻つて以來、その風を一變させた。「去來抄」に云、

魯町曰、先師も基より出ざる風侍るにや。去來曰、奧州行脚の前はまゝあり。此行脚の爲に工夫し給ふと見えたり。行脚のうちにも、あなむざんやな甲の下のきりぎりすといふ句あり。後にあなの二字を捨てられたり。是のみにあらず、異體の句などもはぶき捨てたまふもの多し。

又「芭蕉談」に云、

奥の細道淸書の時、我（去來）申けるは、かゝる折をもて問ひ奉らんと思ひ侍る。

　あなむざんやな甲の下のきりぎりす

きのふはあなの二字置給ひて、今此二字をはぶき給ふ。是句意に思見ありての事にや。示敎し給へ。師曰、句意にあらず。文字餘りの事につけてなり。檀林中にありし時は、まゝ言たる言葉也。しかれども今おもひみれば、みだりにすべき事にあらず。云々

とある。是等の事で大方は分らう。卽ち旅行前の句はまだ枯屈異體の風が殘つてゐた。それが旅行後になつて、醇化され、洗練されて、いよ〳〵正風の光を放つやうになつた。此點に於て細道行脚は芭蕉の心境に非常なるショックを與へ、その俳風に革新をもたらしたものと云へる。

去來の「花實集」に、

其角曰、誹諧文の趣をうかゞひ侍るに、先師曰、世上誹諧の文章を見るに、或は漢文を假名にやわらげ、或は和歌の文章に、漢章を入れ、詞あしく、賤しくいひなし、或は人情をいふとても、けふのさかしきくま〴〵まで探り求め、西鶴があさましく下れる姿あり。我徒の文章は、たしかに作意を立て、文字は假令漢章をかるとも、なだらかにいひつゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懷しくいひとるべしとなり。

とある。又「芭蕉談」に、去來は卯七の問に答へて、

竹取物語などは俳諧文章に近し。……翁の文は詞和らかにして意せまらず。尤則とすべし。……夫我門の俳諧の文章は、和漢の古語古典心に任せて書つゞくるものなれば、上古の詞にては書きがたし。中古以來の文勢

よし。只古き文章を博く見て、時代を知るべし。其中に寂びおかしみを捨てざるを俳諧の眼と知るべし。故に先師の文章多くは韓退子が文勢と思はる。體は擧白集により給へる所まゝありと見ゆ。

とある。之は眞僞は分らないが、去來は簡潔であつて、粉飾を施さない、その中に寂びが含まれてゐる文が、俳文であるといふ考らしい。「風俗文選」の許六の自序に、

先師芭蕉翁、はじめて一格を立てゝ、氣韻生動をあらはせり。たとひ鄙言・漢字をまじへたりとも、心は吉野・龍田の花紅葉をうらやみ、和歌の浦に志をよせて、難波津の細きよしあしをたどり知るべし。云々

とある。卽ち許六は、たとへ鄙言・漢字を用ひても、心は和歌の風雅であり、細みのある文が、芭蕉俳文の一格であるといふやうな說である。

「奥の細道」が名文であることは、古來衆口一致する所であつた。すでに元祿に於て、去來はその筆寫を芭蕉に乞うて止まず。（土芳の「三册子」に、「或歳の旅行・道の記少し書ける由物語あり。是を乞ひて見むとすれば、師の曰、さのみ見る所なし。死んで後見侍らば、是とても又あはれにて見る所もあるべしとなり。感心なる詞也。見ざれどもあはれふかし。」とある。）素龍は清書の砌り跋を書いて、

からびたるも、艶なるも、たくましきも、はかなげなるも、おくの細みちみもて行に、おぼえず起ちて手たゝき、伏て村肝を刻む。云々（元祿七年初夏）

と稱揚し、許六も「韻塞」、旅の賦の小序に、

我翁白川の田植歌を聞初め、奥羽の間を廻り、高館の夏草に兵共が夢を驚し、あつみ山の夕すゞみには吹浦をながめ、佐渡に横たふ天の川に初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡て、七百三十餘程を吟ず。曾良が落髮の力量を感じ、一鉢の飯を分て風流をつくさる。一と日はせを庵を敲き、晝の雜談に及ぶ時、予に旅十體の繪をかゝせて、讃して何某が求めに應ず。其風雅にたより、俗語をあつめ、狂賦五段となす。穴賢奥の細道、草枕の類には非ず。

紀行文の白眉たる語氣を見せてゐる。「芭蕉談」に、「素堂云、今奥の細道を見侍るに、其文勢土佐日記に相似たり。翁も好み給ふやと。翁たゞ笑ひ給へり。」とあるが、疑はしい言である。後になると蝶夢は梨一の「菅菰抄」の跋に、

實にも奥の細道の奥深き、いろは文字のやすらかなれば、牛追童も分け入るべきやうながら、意味の深長なるは、筆かむ老人たりとも踏みや迷ふべき。云々

と言つて、文字は平易であるが、意味は深遠で、その道の老人にも、一寸解しがたい所があると論じてゐる。漣々の「白雄夜話」に、白雄は「奥の細道」を評して、

まことに愛度紀行なるなり。白河の關越て旅心さだまりぬ。又やうやう白根が嶽かくれて、雛が嶽あらはると書たる、旅情言外にありて、詩歌の文人に魁せしと、頌歎かぎりなかりし。かたじけなしや。

白雄は、白川の關の文と、末の等栽に送られて敦賀の浦へ行く途中の文とを、すぐれた個所としてゐる。鶯宿の

「鼇頭奥の細道」の梅室の序に、

篇中自然の變態を顯はす。中にも松島象潟の一節は全く賦のごとし。壺の石ぶみの一節は記に類せり。高館は懷古を傳にして、治亂の變化を盡せり。祖翁の文に長ぜられし事斯くの如し。云々

とある。即ち梅室は、松島・象潟・壺の碑・高館の懷古とを特別に取立てゐる。明治になつて佐藤飯山氏は、その「俳諧紀行全集」中、「奥の細道菅菰抄」の解題に云、

文體は亦平易にして簡潔なり。さてからびたるも、艶なるも、たくましきも、はかなげなるも、奥の細道云々といへる素龍の評の如く、先づ發程を叙せる一條のからびたる。松島の一段の艶なる。三山を寫せる件のたくましき、遊女の一節のはかなげなる、善く情を寫し、景を敍し、人をして目擊實踐の思ひあらしむ。宜なるかな、本書の世に珍重せらるること。然れども予竊かに思へらく、その行文野ざらし紀行に及ばざること遠しと。蓋し味者より之を視ば、その艶麗にして遒健なる、野ざらしに勝るといはん。夫れ或は然らんも、奈何せん兎角細工に失して神韻に乏しきを。……平易にして簡潔なれども、之を野ざらしに比ぶれば亦やゝ繁衍冗漫なるを覺ゆ。且つ語格文法の謬りさへ少からず。此の彼に劣る知るべきのみ、云々

樋口氏は「芭蕉研究」に、

此の文は特に芭蕉の本色が最もよく顯はれてゐて、雄厚にして文深沈、高渾にして又瀟洒な獨特の風格は、到底他人の摹し得ざる一種のものがある。其の何處となく人を引きつける懷かし味・溫か味のうちに、亦何と

も言へぬ寂味・雅味を含んだ思想と文章とは、蓋し芭蕉其の人の本性から自づと生れ出たのである。……若し之を單に文章として見る時は、西鶴の文章などよりも缺點が多い。散文として決して完璧とはいへぬ。云々

と論じてゐる。

以上の如く從來種々に論評されてゐるが、要するに奥の細道の文章論は、素龍の言で盡きて居るかと思ふ。その干びたるも、艶なるも、逞しきも、果敢なげなるも、種々錯綜して、情緒に變化がある。而かも文體は平易簡潔で、何人にもその妙を味ふことが出來る。飯山氏は細工に失して、神韻に乏しいと言つてゐるが、技巧といへばむしろ野晒紀行の方が巧で、本書は平易な書方かと思ふ。神韻に乏しいといふ言も首肯が出來ない。筆が簡潔であれば、從つて余韻余情を文字以外に示すことになる。野晒紀行の方は本書に比べると行文にむらがない。堂々と强く出る書方で、わるくいふと生硬い所がある。第一發端の、「千里に旅立て路粮をつゝまず。三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて、云々」、或は、「腰間に寸鐵を帶びず。襟に一嚢をかけて、手に十八の珠を携ふ。云々」などと、何所までも雄渾跌宕、强く出るのが野晒の筆法で、若々しい感情には滿ちてゐるが、ほどけた、支考が言つたやうな、行脚のさびをつくされた心持は出て來ない。野晒は全體緊張してゆとりがない。本書は緊張してゐる所、弛緩してゐる所、情緒的な所、寫生的な所種々織り込まれて、恰も芭蕉その人の生活の行路を讀むやうな感がする。世人は松島の條下の文を激賞するやうだけれど、私は全體として一區間を取り離さないで讀みたいと思つてゐる。詩人の文に、文法の誤謬を喧しく詮議するのは不必要である。小林歌城が、秋成の「癖物語」

を訂正して、笑を殘したやうな事は、避く可き事である。

三、奧の細道の原本及び異本

芭蕉は自分の旅行記を門人に見せる事を嫌つた。土芳の「黑ざうし」に、「或歲の旅行、道の記すこし書けるよし物語あり。是を乞ひて見むとすれば、師の曰、さのみ見る所なし、死て後見侍らば、是とても亦あはれにて、見る所もあるべしとなり。感心なる詞也。見ざれどもあはれ深し。」とある。此道の記は何の書であるか詳かでないが、この言を以てすると、「奧の細道」は門人の容易に窺ふ事の出來なかつた事も分る。去來・其角・杉風其他の門人も、見たかつた事は推するに難くないが、去來はやうやく芭蕉の死ぬ前に遺言を得て、歿後一讀する事が出來、其角は元祿十年迄は見られなかつたらしく、杉風も素龍淸書本を得たのは芭蕉歿後の事であらう。支考は「古今抄」に、「奧の細道は老の物ぐさに、人をたのみて、手蹟を先とせし筆者なれば、今いふ假名・眞名のくばりにはおよばず。おほくは萬葉の假名がちに、今はた我だによみやすからず。さはいへど此紀行は、いまだ梓にちりばめぬほどは、難波のいとまを得て點檢すべし。云々」と言つてゐるが、例のごまかしで、萬葉の假名がちで、我だに讀み易すからずではなく、讀む機會が無かつたので、刊本になる迄は讀まなかつたのであらう。「奧の細道」の原本に、種々の類本のある事は、之れがためであつた。

原本には眞蹟本・素龍淸書本・去來書寫本・其角筆寫本等がある。

イ、眞蹟本

井筒屋本の奥書に、「眞蹟本は門人野坡の許にあり。草稿の書故文章所々相違す。云々」とある。北華の「蝶の遊」に、北華が須賀川の晋流を訪れた條下に、「あるじに珍物あり。先師翁の眞跡奥の細道、……取出して見せられ、淺からぬもてなしなり。云々」とある。併し晋流の傳へた眞蹟本が、野坡の手に渡つた眞蹟本であるかどうかは不明であり、又何時何處で、芭蕉が眞蹟を野坡に與へたものか、それも不明である。勝峯氏の「去來本おくのほそ道解説」によると、享保十一年夏、野坡が芭蕉三十三回忌追善の「八烏放生日」の見返しに、おくのほそ道と書入れて、その下に「芭蕉翁眞蹟、墨附三十二葉」と註し、香爐を備へた略圖があるといふから、その頃は未だ野坡の手許にあつたわけである。然るに江戸の櫻壽軒といふ人が、芭蕉翁眞蹟の「奥の細道」を拓本にして出版してゐる。此書は現今慶應大學圖書館の所藏にかゝり、卷末に左の跋文が附いて居る。

此一書芭蕉眞蹟は、武陵古き俳家の珍藏なるを、風友窪峯堂のあるじ、公務のいとま摹して予に送らる。こは奥羽專一の紀行にして、文章の花實雲煙の筆の跡にしあれば、白字にものして、猶はた世に顯さん事を、同志の頻に勸るに應じ、櫻壽軒の窓下に、謹て刀をことぶき畢ぬ。

とある。但し之も晋流傳來の眞蹟本のやうに、本書が芭蕉より野坡に附與された眞蹟であるかどうかは明かでないが、とにかく眞蹟本の行衞を知る手がかりとはならう。刊年未詳。

ロ、素龍清書本

奥書に、

此一書は芭蕉翁奥羽の紀行にして、素龍が筆也。書の縦五寸五分、横四寸七分。紙の重五十三。首尾に白紙を加ふ。外に素龍が跋有。今略之 行成紙の表紙。紫の糸。外題は金の眞砂ちらしたる白地に、おくのほそ道と自筆に書て随身し給ふ。遷化の後門人去來が許に有。又眞蹟の書門人野坡が許に有。草稿の書故文章所所相違す。今去來が本を以て摸寫する者也。

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

とある。此去來が本といふは、去來が所持した奥の細道で、去來が芭蕉歿後伊賀に於ける芭蕉の兄から送つて貰つた素龍の清書本をいふのである。刊行は元祿十五年のやうに傳へられてゐるが、支考の「俳諧古今抄」によると、滅後六年の秋に至り、四半なる本紙のまゝに、その一冊を書き寫し、洛の去來を奉行にして板にちりばめさせた云々とあつて、元祿十二年秋の出版のやうになつて居る。

本書の傳來に就いては、昭和九年七月十八日の大阪毎日新聞の紙上に、「奥の細道の原本を發見、福井縣の舊家から」といふ見出しで、敦賀史跡調査委員・郷土史研究會委員山本計一氏の言をあげて、

發見された「奥の細道」の原本は、越中の俳匠三四坊の「細道傳來記」、「奥の細道」井筒本、同蝶夢本、「白鳥集」、「奥の細道菅菰抄」などによると、芭蕉が素龍に代書せしめ、常に筐中に携へて居たが、門人去來に與へようと思ひつゝ死去したので、去來は伊賀の芭蕉の兄に懇願譲受けたが、去來の歿後、長崎人で、京に出

て醫を業とした久米升歌に傳はり、同人は娘を若狹小濱の吹田几遊に嫁せしめる際、引出物として素龍本に去來の短冊を添へて持たせてやつたが、几遊は夭折したので、珍本の蝕まれるのは本意でないと、「落柿舍の記」と去來の短冊を添へ、重緣の間柄である敦賀の白崎琴路へ讓つたのが寶暦九年の秋で、その後傳來は詳でない。今回發見した西村繁氏（福井縣敦賀郡愛發村新道の舊家）方の曾祖父は鷄群舍野鶴と號して知られた俳人だつたから、おそらく琴路から讓受けたものだらう。云々

とある。以上傳來の素龍本は素龍清書の原本の事で、井筒屋刊行の素龍本の原本のやうである。（慶應義塾圖書館國分剛二氏の「珍書再會」の文に據る。）

去來に傳はつた素龍本の外に、杉風に傳はつた一本もあつた。之も勝峯氏の「解說」によると、杉風から厚爲に宛てた手紙に、「奥の細道去來より參候由、御見せ忝奉存候。私儀素龍書申候を所持仕候間則返信」とあるから、杉風も素龍本を持つて居たと見えるが、之は素龍の眞蹟本であるか、或は井筒屋刊行の素龍本であるか詳かでない。若し素龍の眞蹟であつたとしたら、こゝにも亦別途の傳來の系統が起るわけであるが、それは更に不明である。

ハ、去來書寫本

本書は素龍の跋（元祿七年初夏）、去來傳書の跋（元祿八乙亥年九月十二日、於嵯峨落柿舍書寫焉、門人去來拜）及び蝶夢發見の次第、即ち

井筒屋が家に傳りし奥の細道板行の末に、素龍が跋ありて、今略之とあり。としごろ其文章のゆかしかりけるに、去年の冬、伊賀の上野に掛錫の折ふし、古き反古の中に、この細道の原本を得たり。見るに素龍の跋、去來傳來の因縁を書たるものなり。見るにむかし忍ばしく、あらたに寫して、此書の奥にくはふ。

明和七寅年十月翁忌の日、湖南義仲寺の廟前にて、蝶夢書之

といふ跋が添へてある。

去來傳書の跋によると、奥の細道は古師芭蕉翁の紀行であつて、素龍が清書してゐる。書の長サ五寸五分・幅四寸七分・紙の重さ五十三、初終に白紙があり、行成表紙、紫の絲を以て綴ぢ、外題は金の眞砂を散らした白紙に、自ら奥の細道と書き、年月頭陀の内にかくして、行くさき／＼に携へたものである。元祿七年六月、芭蕉が去來の草庵に來た時、その書寫を深く乞うた所、芭蕉は同年十月大坂の客舍に病み、重き枕も上げ兼ねたので、去來を枕近く呼び、汝日頃この集の求め深きによつて、今之を足下にゆづらうが、もし不思議にも生き長らへるやうであつたなら、寫しとゞめて本の書を返せ、書は兄の慰めに、故郷へ殘して置いたから、送つて貰へと言はれたので、悲しく思つてゐる中に、翁は遷化した。そこで兄の許へ文通して、原本を送つてくれるやうに頼んだ。すると芭蕉の兄の言ふやう、今はかういふものを老の形見ともなぐさんでをるから、手放すのは情けなく思ふが、遺言ならば送つてやる。併し奥羽旅寢の夢の跡もなつかしく、且つは門人の手跡も珍らしく見たいから、書寫して送つてくれとあるので、再び能書を選ぶ由もなく、自分が書寫した。その製をたがへないつもりだけれど、尚

誤字や落字の多からんことを恐れて居るといふのである。卽ちその去來が伊賀へ書寫して送つた一本が本書で、その刊行は明和六年の蝶夢の發見によつて、同七年に成つた事であらう。再版は寛政元年で、井筒屋と橘屋の合刻である。因に、梨一の「菅菰抄」に、「奥の細道の本書は、本文素龍の筆、外題は翁の筆跡にて、素龍去來の跋あり。此本書は今越前敦賀の津の俳士琴路所有すといふ」とあるが、此琴路は晋路の誤で、素龍書寫の原本ではなからうか。勝峯晋風氏は昭和八年六月「去來本おくのほそ道」を岩波書店から出版した。本書は蝶夢本と異り、「奥の細道」の最も信憑すべき善本だと云はれてゐる。其解說に云、

明和六年に蝶夢が伊賀上野で發見した去來本「おくのほそ道」に就いて、伊賀上野の村治圓次郎氏と語つた際、氏からたたう包みの上に「おくのほそ道」と書いて、行成表紙の題簽には金の眞砂散らしの僅に光り、「おくのほ」とだけは明瞭で、「そ道」とあるべき部分は手擦れで剝落した一本を見せられた。……これこそ蝶夢の發見した去來本であることゝ思つて、本文を比較研究した結果、蝶夢の發見したのは村治氏所持のものとは別の副寫本であることが判然した。從つて眞の去來本としての價値はこの書に存することを確信するに至つたのである。卽ち本文の紙數は野坡所持の芭蕉自筆本が「墨附三十二葉」とあるに對し、これは去來の奥書の如く五十三丁あつて、初終に各一丁の白紙があり、竪五寸五分、横四寸七分、曲尺で測つてまさにその通りである。表紙の模樣は井筒屋刊本が藍色の格子形であるのに、これは萠黄色の山形重ねで、雲母の箔をおいたやうな光澤をおびてゐる。綴ぢ糸は奥書に紫とあるが、これは鶯茶色の絹糸二本でかゞつてある

のが違ふだけである。

と言つて、素龍本と去來本、蝶夢本と去來本との辭句の異同を檢討してゐる。

私は最も信憑すべき奥の細道の原本は、やはり素龍の清書したものが本で、勝峯氏の復製した去來本は、去來の筆寫した蝶夢本と同種類の一本と見るべきではなからうかと思ふ。たゞ本書は蝶夢の覆刻した去來筆寫本よりも善いといふだけであらう。若し奥の細道の定本をいふべくんば、それは素龍本であると考へたい。去來の說に「年月づたの内にかくして、行先〳〵に隨身し給ふ。」とあるから、素龍の清書した奥細道を、門人にも見せず、ひとり頭陀の内に押かくして、行く先き〳〵に携へたもので、その點から云つても、古い信用の出來る原本でもあるし、又出版年代も元祿であり、芭蕉の直弟の多く生存してゐた時代であるから、信憑すべき可能性は、去來本よりも多いと見なければなるまい。野坡に附與した眞蹟本の傳來が、比較的詳かでない今日に於ては、素龍本を先づ確かな原本として推すより外はあるまいと思ふ。なほ余は先年門生小池初枝氏の知人の所藏にかゝる去來本の別本を見た事があつた。之は素龍の跋、去來傳書の奥書ある一本で、小池氏の調査によると、內容は勝峯氏の去來本とも、蝶夢刊行の去來書寫本とも多少相違する所があるといふから、これ又去來本の別本と見るべきものである。

ニ、其角筆寫本

前二者は俗に桝形本と云つて、やゝ四角な形の本であるが、之は大本である。明治十八年二月其角堂藏版で、

奥に元祿十年冬其角寫於大坂旅店灯下校合畢とある。伊藤松宇氏の說によると、其角自筆の年譜中、元祿十年の條下に、上京とも上阪とも記載なく、且つ又筆跡永機の手に違はぬから、僞書であらうといふが、勝峯氏は「去來本おくのほそ道解說」に、「其角寫本の「おくのほそ道」は、明治十八年永機が落丁一枚あるものを補筆して、其角の書その儘を摹刻した。云々」と言うてゐる。永機の「俳諧みゝな草」乾、元祿十年の條下に、「秋の央上京、此冬浪花の旅舍において、翁のおくのほそ道を書寫あり。今草庵に傳ふ。云々」とあるから、必ずしも永機の僞筆とも考へられまい。或は勝峯氏の說に從ふべきか。

ホ、乙由筆寫本

勝峰氏の解說によると、伊勢の神宮の徵古館に、中川乙由の寫本が藏されて居ると。又蕪村筆の「奥の細道圖」もあつて、現に長尾欽也氏の珍藏にかゝる。

奥の細道の異本は、半化坊闌更の「おくの細道」其の他二三種あるやうである。半化坊のは天保十四年刊で、卷頭に「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」の句をかゝげ、本文はその次に記されてゐる。又一本あり、半紙本十行の寫本で（伊藤氏の記錄による。「にひはり」、大正十四年六月號）、内容も跋も、蝶夢の奥書も同じであるが、卷頭に蛤のふたみの句を出し、次に本文となつて居るさうである。

別本奥の細道には、三津人の「百家交筆おくの細道」（文化十二年刊）と、交山・香雪の畫いた「おくの細道」（文政五年刊）などがある。前者は頗る體裁の凝つたもので、先づ表紙は山口素絢の書いた笈摺模樣、上卷の序は西園

寺寛季卿、下巻の序は澤三位淸原久量卿、それに樗堂・成美・雄淵・午心・定雅・月居・奇淵・士朗等すべて當時の名流百家の俳士を選び、細道の文一節を書かせ、所々徹山・孔寅・巣兆・松年等の、これ又知名の畫家の繪を挿入したものである。本文は別に變つた所も見ないが、百家交筆といふ點が、當時の俳人の筆蹟を知る上に此上もない參考となる。後者は交山・香雪といふ深川の畫家が、芭蕉庵出立から大垣へ入る迄、それ〴〵本文に適した繪を入れたもので、交山粗畫、香雪密畫の取合せ面白く作つたものである。乙二の序がある。

奥の細道は「一葉集」・「袖珍抄」・「芭蕉一代集」・石兮の「蕉門七書」等に收められてゐる。又行脚中の發句若くは連句を集めたものに、「雪丸げ」・「菅菰抄附錄」・「奥の細道拾遺」・「細道繫橋」・「俳諧奥の枝折」等もある。

四、奥の細道の註釋書

奥の細道の註釋書には、梨一の「奥細道菅菰抄」（半紙本二冊。安永七年刊。明治三十四年刊「俳諧紀行全集」中所收。麹亭飯人補）、同氏の「奥細道菅菰抄附錄」（寫本。半紙本。一冊）、鶯宿の「鼇頭奥之細道」（大本。二冊。安政五年刊）、護物自筆の「奥廼細美知考」（寫本。一冊。外題「おくのほそ道引證」）、錦江の「奥細道通解」（自序に、安政五年冬十一月上澣書とある。大本。二冊。但し自筆本と門人書寫本とある）、木村架空氏の「新釋奥の細道」（明治二十九年刊）、三宅邦吉氏の「新釋奥細道」（明治四十四年刊）、黑澤敎一氏の「奥細道詳解」（大正九年刊、非賣品）、小林一郎氏の「奥細道評釋」（大正十年刊）、荻原井泉水氏の「奥の細道贅註」（大正十四年九月早稻田文學に載す）、大藪氏の新研究等がある。

以上の中菅菰抄が最も有名で、之は梨一が六十歳近くになり、官を辭し、故郷丸岡（越前）に隱退して書いたもので、はじめ上卷は、越中富山の直生といふ俳人に原稿を奪はれ、後記憶を辿つて更に筆を起したものである。その卷初にかゝげられた芭蕉翁傳の如きは、桐雨の筆記・既白房の覺書に基いたもので、有名な一參考と見做されてゐるが、細道の解は多くは故事出典の引用にとゞまり、慊らぬ點がある。同書の附錄は菅菰抄の奥附や再版本の奥の細道の末に追而出來とあるが、刊行されなかつたものらしい。私の見たものは縱七寸五分、橫五寸五分、柿色の表紙で、文政十二年四月十三日少波寫とあつた。始めに序があり、本文は細道行脚中發句（連句）拾遺・祖翁行脚掟・壺碑圖・木曾義仲願書・木曾義仲副書加州小松八幡宮寶物緣起・奇談雜話（六則）・文章論である。併し直接細道に關係あるものは、細道行脚中の俳諧・壺碑圖・奇談雜話位のものである。「鼇頭奥之細道」は本文に頭註を加へただけで一部の參考にすぎない。ただ蕪村の畫圖を摸刻して、十數葉入れた所が、飄逸閑雅の趣を添へる事と、梅室自筆の序をそのまゝ版に起した所とが一寸面白い。「おくの細道引證」は護物の自筆といふ點が珍らしいに過ぎない。解も、舟を借りて松島に渡る云々といふ所までしかない。井筒屋の跋が序になつて入つてゐる。錦江の「通解」は、門人書寫本は全部揃つてゐるけれど、錦江自筆の稿本は四卷二冊の大本、黃表紙もので、最後の一卷を缺き、太田神社參詣の條迄しか註がない。併し本書は從來の註書中解釋が最も親切丁寧で、彼の梨一の解などより一層信じられる。ただ抄中引用の漢文の送假名・返點が粗漏であり、且つ假名遣の用意も十分でない。それに本文が普通の原本に比して夥しい語句の相違を見るのである。明治になつては木村氏のも三宅

氏のも菅菰抄を出でず、狄原氏のが斷片的ではあるが、多少新しい材料と、實地踏査によつて獨自の註解を施してゐる點がよい位のものである。近頃四高教授大藪氏の「奥の細道新研究」といふ詳しい註書が出版されて、初學に非常な便利を與へてゐる。

五、後の奥の細道

詩人は漂泊性を持つてゐる。西行の如き、宗祇の如き、生涯を旅上で送つたと云つてもよい位である。それは是等の人の境遇が孤獨であり、自由であつた關係もあらうが、一方に感情の劇しい動搖性が、轉々として新しい刺戟を求めねば止まぬやうになつたからでもあらう。芭蕉も西行・宗祇の亞流であつた。「東海道の一すぢも知らぬ人、風雅に覺束なし。」(「韻塞」)と言つた芭蕉の言葉は、體驗が詩作の源泉であることを告げたものゝ、實は自己の漂泊性を、昂然と物語つたもので、芭蕉の詩人的地位が高まり、その生命の流を汲むものが續出するやうになると、詩作のモツトーのやうに看做されて、限りなき憧憬・追從の具體化が演ぜられる。

奥の細道は時代の一般から見たら一行脚の廻國に過ぎないが、起ちて手を叩き、伏してむら肝を刻むやうな名文をもたらした所、詩人芭蕉の權威であつた。而もその旅行を羨み、その紀行に感歎した門人は、其角・去來・許六・杉風を始め隨分多かつたことだらうと思ふ。

芭蕉の生前細道の追從第一步を踏んだ者に路通と支考とがあつた。路通は元祿三年十一月十七日の夜觀音大士の靈夢に感じ、俳諧の勸進を發起し、翌年六月の初め月山に登り、會覺・呂丸・不玉・重行其他の人々の句合十

八番の判詞を書いてゐる。之は卽ち「月のやま發句合」と云つて、「勸進牒」（元祿四年刊）の中に收められてゐる。

支考の細道行は元祿五年五月である。許六の「歷代滑稽傳」に、「支考は松島・象潟の旅に赴き、葛の松原を撰す。」とあるは卽ちそれで、酒田の不玉が編んだことになつて居る。芭蕉もその東行を餞別し、

此こゝろ推せよ花に五器一具

と戒め、支考その意を體し、

もゝすぢりゆがみてふさむ花の陰

其の他、

白河の關に見かへれいかのぼり　其角
片方はわが眼なり春霞　桃隣
年經ても味をわするな岩城海苔　露沾

などの送別句がある。「芭蕉談」に、其角が支考に與へた旅の紹介狀がある。面白いものではあるが、眞僞のほどは分らない。卽ち

今度支考と申芭蕉門の新參者、奧羽行の志にて、師より五器一具の餞別を申請、伊達の大木戸を罷通候。些(ちつ)坊化(ぼけ)に口點(かしこく)候條、風雅口に奢(ほうより)候程、御振舞可被成候。以上

三月十一日

所々俳諧御關所

白川の花見にかへれいかのぼり　　共角

芭蕉の親族なる天野桃隣は、元祿九年三月十七日、細道行脚に赴いてゐる。「陸奥衛」卷五云、

既今年三回忌、亡師の好む所にまかせ、元祿九子三月十七日武江を霞に立て、關の白河は文月上旬に越ぬ。凡七百里の行脚、是を手向草、所々の吟行、懷舊の百韻、此等は師恩を忘れず、風雅を慕のみなり。云々

何國まで花に呼出す耋狐

とある。嵐雪は其餞別に、

虛空を引とゞめばや几巾のぼり　　嵐雪

とする。「俳諧問答」の同門評判に、許六云、

この人（桃隣）に色々をかしきはなし多し。みちのくに旅せんと言ひしは春のころなり。その春に晋子が句に、

饅頭で人を尋よ山ざくら

といふ句せしに、この坊ンみちのくの餞別と心得て、松島のかたへ趣向けたるもをかし。戾りてのちの今日は、餞別にてなきと知たるや、彼に聞たし。

許六の例の悪口であらうが、其角の句を松島餞別と感違ひするのもをかしな話である。

道順は大方芭蕉の經路を取つたけれど、別の道を取つた所もある。その大略を記すと、江戸から行德迄川船。木嵐へ着。鹿島神社參詣。日光から那須の黒羽に出る。與市宗高の氏神八幡宮・犬追物の跡・殺生石を見、白河に出で、石川の郡へ入り、小名濱をすぎ、日和田へ出、二本松・福島・桑折を過ぎ、白石に至り、岩沼・增田・仙臺は大町南村千調に宿る。南村に二十日滯留。病む。それより松島見物。金花山に登り、石の卷へ戻り、平泉に入、附近の名所舊跡をさぐり、古川に來り、岩手にかゝる。尾花澤・大石田・酒田への乘合を待つて下る。象潟見物。羽黒山參詣。圖司呂丸を悼ひ、湯殿山登り。山形より湯の原へ出る。須ヶ川に二宿。喜連川庚申塚に泊り合せ宇津宮へかへり、小山に宿。それより淺草に入。草庵は破れ、蜘蛛の巣だらけとなる。その紀行を「陸奥衢」と云つて、元祿十年出版されてゐる。

水間沾德も松島へ遊ぶ。「文蓬萊」（元祿四・五年頃刊）の序に云、

錄重くして松島を見ず。笠破れても松しまをみず。そのほどよき幸をえて岩城に到りぬ。又も來て見よのおほせありて、なほゆくまゝに、名とり川を越す。あるじ千調こらへず發句して、枸杞の芽に枝のつくまで待に梟　予に見するより、はや奢るほどに嶋々めぐりて、松島や寺ある島は山ざくら　一部となし、花洛に來りて筆吟味とはなりける物也。沾德撰。

とある。

元文元年六月二十日、立國は奥羽探勝の旅に赴いてゐる。立國は二度出かけてゐる。始めは享保十八年癸丑の秋八月十六日江戸を立ち、下野常陸の雅人をたづね歩いてゐる内に冬となつたので、奥羽旅行に困難を感じ、宇都宮あたりを廻つて歸庵した。その後四年を過ぎ、いよ〳〵元文元年第二次の旅行を企てた。先づ幸手の宿に芭蕉清水を汲み、宇津ノ宮明神へ詣で、阿久津に入り、附近の門人と連句し、氏家に至る。こゝでも舊知と應酬。文月九日阿久津を旅立ち、太田原に泊る。遊行柳をたづね、二十八日を經て白河の關を越える。此地には知人が多い。那須黒木村東福院は母の墓地なので、十二日詣る。須ケ川に晋流を尋ねる。床に芭蕉の自畫讃を見る（菊、見所のあれや野分の後の朝）。岩瀬の森・淺香沼（今は田なり）を見、本宮に泊る。安達ケ原・黒塚をたづね、二本松に泊る。夜中雨洩り、蚤蚊のため寢れず。とく出立。福島へ泊る。文字摺石をたづね、信夫山へ上り、飯坂の溫泉に入る。佐藤庄司が舊館・鯖野・醫王寺をたづね、桑折に出る。伊達大木戸・佐藤兄弟の堂を見、船迫（フナハサマ）より千貫松へ上る。それよりたけくまの松・笠島道祖神・中將實方の塚などを見、名取川を渡り、仙臺國分町箱屋長十郎方に入る。國分町を出、原町より八幡をすぎ、沖の石・末の松山・壺の碑を見、鹽竈へ着く。明くれば鹽竈神社參拜。千賀の浦から小舟に乘つて松島へ渡る。松島の磯八屋勘兵衞に宿る。案内を連れ、瑞岸寺に詣り、雄島へ行き、雲居禪師・座禪堂・寧一山の碑その他の名所を見る。二三日を經て仙臺へかへる。緒絶の橋・轟橋・十府の菅菰・宮城野・躑躅が岡などをたづね、八月四日金華山へ行く。再び松島へかゝり、小野の宿長右衞門といふものゝ許に宿り、酌婦の歌に感じ句を作る。途中大雨に逢ひ、辛うじて至る。石の卷に泊る。富山の大仰寺

に上る。又仙臺へかへる。此地の多くの俳人より餞別吟を受け、九月上旬仙臺を立ち歸途に付く。十月下旬日光の御宮を拜む。百餘日をすぎて、絹川の邊り立調が家にかへる。下野より三日をすぎ江戸に入る。此紀行を「月見ケ崎」と云つて、各地に於ける門人舊知の句が多く出てゐる。殊に壺碑の文が石摺になつて入り、碑面考證や龍水の石ずり臨書のいはれなどがあつて便利である。文章は見るべき程のものでもない。

北華も元文三年三月二十二日、江戸を立ち、松島の旅に赴いてゐる。その道順は大方芭蕉の足跡を追うてゐる。併し象潟へは廻らないで歸庵する。その旅行記を「續奥の細道」（一名「蝶の遊」、延享二年刊か）と云ひ、所々挿繪があり、干滿珠寺の傍の草庵に某僧を訪れ、夢中、僧即ち芭蕉と俳を談ずるといふことから、象潟行を中止することになつてゐる。面白い戯作風の筆致である。象潟夢中問答によると、北華は江戸の人。小笠原侯の臣。後米澤侯、秋元侯に仕。多病にて武門を辭し、俳を去來の門人雪竿に學ぶ。七富道人・十無居士・自墮落齋の號がある。別に「風俗文選拾遺」の著がある。

方鏡樓千梅も亦松島へ行つてゐる。卽ち元文三年四月十二日先づ日光の神事を拜み、次いで白川の關も越えようと、宗祇の名所集、芭蕉の細道などを袋に入れて、深川の市中を出立し、人々に送られて川口に至り、それより同行翠松、從者と三人で、いよ〳〵奥州の旅へ向つた。十四日小山の宿に入る。室の八島を拜む。十五日宇都宮明神に參る。十六日日光山參詣。十八日今市から大田原へ行く。十九日那須の湯本を越える。次で白川に至り、須賀川に等窮が孫相良藤兵衛をたづね、あさかの沼を見、二本松に泊り、黑塚一見、文字摺を探り、倘途々芭蕉

が細道にある名所舊跡をたづね、白石を過ぎ仙臺へ入る。內に、「其夜しれる俳人にあふ。ちかき年陸奥に下り、松島までの紀を梓にして、月見が崎といふよし。此度又出羽道を經て、象潟に赴き、此ころ爰に來れりとぞ。云々」とあるから、立國と途中で逢つたものと見える。二十五日、雨中鹽竈へ出かける。玉田横野・十符の菅・壺の碑。末の松山・沖の石・野田の玉川等、例の細道の名所舊跡を探り乍ら行く。午の半から快晴になつたので、江上に棹さして松島へ渡る。雄島の磯へ着く。瑞岸寺參詣。明朝平泉へ向ふ。例の高館・光堂・經堂・達谷の窟・あねはの松などを見て引かへし仙臺にかへる。象潟行はやめる。五月朔日仙臺を出立。歸途につく。宇都宮七日路に下り、八日宮を立ち、道をかへて石井といふ所からきぬ川筋を下り、おざかた着。それより船を捨て、下妻・宗道・境・關宿・粕壁を經て十日江戸にかへる。此旅行記を「若葉の奥」(松島紀行)といふ。元文四年六月の出版である。

露川の門人馬州も奥羽旅行を志した。馬州は桶狹間を越え、今川義元の塚を弔ひ、それより東海道を下り、身延山に詣で、伊豆を廻り、江之島・鎌倉から江戸へ出。松島・象潟、型の如く、鹿島・筑波を經て、東海道を歸庵した。「奥羽笠」(元文五年序)といふ紀行文集がある。

蕪村も松島へ行つた。「新花摘」に、「松島の浦づたひして、好風におもてをはらひ、外の濱の旅寐に、合浦の玉のかへるさを忘れ云々」とある。蕪村の松島行は寛保三年の春から夏へかけての事らしい。「新花摘」によると、松島の天麟院の和尙から、名取川の埋木で硯の箱を作り、それに宮城野の萩の軸を付けた筆を添へて、二條家へ

奉つたその板の餘りを貰つたが、重くて困るので、途中白石の宿屋の椽の下へ放り込んで了ひ、やがて結城の雁宕が家へ歸着し、潭北にその話をすると、潭北大に驚き、早速人をやつて須賀川の晋流の添書を貰ひ、蕪村の捨てた宿屋を尋ね、やうやく見付けて來た。後雁宕之を傳へ、魚鶴といふ硯の蓋に用ひたといふ事である。如何にも恬淡な蕪村の性格が表れて面白い逸話である。一體蕪村は「咸陽宮の釘かくし」と云つて、物を骨董的に珍重する事を嫌つた。埋木も釘かくしと思つたのであらう。その時蕪村は白石の城主片倉鬼子（亭月庵）の邸へ立寄つたらしい。鬼子は蕪村や几董と親交のある人であつた。

雪中庵蓼太の細道行脚は有名な話である。吏登の一周忌追悼文、「松の嵐」（寶暦六年）に、「なほ思ひあまりて、奥の細道の跡たどらまほしく、暇申入る。師とゞめて、其國や雪深うして、秋より末の初旅、心いと便なからん。……嘗て蓼太松島に赴けるは卯月中の三日也。小名木川を北へわたりて、先龜戸の瑞籬をぬかづき、長途の末をいのり奉る。師も此所まで見送給て、綰柳の吟あり。云々」とある。蓼太の松島行脚は寛保三年（「奥細道拾遺」の莎青が序に、折から行脚しける蓼太、松島象潟を經て、このほど信濃にあり。云々。寛保癸亥初冬とある所から推定。）であらう。句集に

　　松島行脚の頃千住爺が茶釜まで人々に送られて

　日やけ見に歸らん釜の鏡山

とあるはその時の吟か。彼は仙臺に嘉定庵を結び（後再興する）、高舘懷古の文を草して居る。尚奥の細道に洩れ

た芭蕉の吟詠を集めて、江戸の莎青に送り「奥細道拾遺」と名けて、延享元年出版してゐる。之は恐らく寛保三年芭蕉五十回忌の記念出版であらう。内に室の八島にての芭蕉の句、奥州岩瀨郡相樂伊左衞門亭に於ける歌仙、出羽新庄風流亭に於ける歌仙、一榮亭に於ける歌仙、左栗亭に於ける歌仙等を收めては居るが、大方周德の「雪丸げ」に出てゐるものばかりである。

富鈴房宋屋も松島・象潟の見物に赴いた。宋屋は延享二年九月十六日、六十二歲餘の老齡を以て、京の草庵を出立した。出立の句、

よるとなく月に喰入れ杖の土

を始めとして、羅人・竿秋其他六十人餘の餞別吟を受け、先づ御所拜見を振出しに、江戸へ來たのは十月七日であらうか。次の句がある。

しづけしや小春七日の江戸櫻

九日江戸を出て千住に向。草加・越ヶ谷・粕壁・宇都宮・白川入は十六日。十七日須か川の晋流を訪れたが、江戸へ行つて留守。二本松・福島・伊達の大木戸・白石・岩沼・笠島。實方の宮は十町ばかり行き、鹽手村茂右衞門の藪の中にある。五輪倒れ、物淋しなどとある。仙臺五條坊に數日を送る。その附近の名所を見物。二十三日松島へ渡る。古人の句を書付ける（曾良・助叟・千梅・蕪村等）。金花山へ行く。そこで此日記は中斷し、四月一日に變つてゐる。仙臺で越年したものか。五月二日仙府を別れて奥へ赴く。去年の秋より是迄の風友二百餘人……

とある。十七日、平泉入。高舘見物。盛岡・秋田。十月四日、酒田。十月二十八日、結城へ立寄り、雁宕・風人對話。十一月二日、江戸へ歸着。東海道を下る。十一月二十六日歸庵。歸途江戸に十有餘日逗留。所々見物。「月の矢も北野へ光り陰一夜」、歸庵の句である。此旅行記を「杖の土」と云ひ、寶暦五年九月の跋がある。「杖の土」はただ旅行吟稿のやうなもので、文は隨所の手控である。全く一行脚の日記のやうな體である。記事複雜し　通讀に興味を惹かない。たゞ當時の名流に逢つた話が所々出てゐるから、その點は研究の資料にならう。宋屋は望月氏。富鈴坊・机墨庵の號がある。宋阿門。

芭蕉の有名な研究家五升庵蝶夢も松島へ赴いてゐる。蝶夢は寶暦元年三月京を立ち、木曾路に入り、善光寺・姨捨山を一見、高崎より日光街道に出で、芭蕉の足跡をたどつて仙臺に入り、鹽釜・松島附近の名勝を探り、象潟へは行かず、歸路は安達ヶ原・黑塚を通り、下野に出で、古河・栗橋より江戸に入り、鎌倉・江之島を見物し、東海道を經て・五月七日歸庵した。此旅行を「松島道の記」と云ふ。

秀國も明和元年七月朔日松島・象潟の旅に上つた。道順の大畧は、先づ氏神なる神田明神へ詣で、岩槻より古河に出で、利根川を越え、室の八島を拜し、宇都ノ宮・今市に至り、佛五左衛門の子孫を尋ねたが知れず、日光山へ詣り、那須の明神を拜し、殺生石・犬追物の跡を見、白河の關を秋風に越え、阿武隈川を渡り、須賀川に至り、白石より最上海道に移り、山形・天童・六田・楯岡・飯田・尾花澤・新庄に入り、七月十一日夜舟にて最上川を淸水といふ所迄下る。十二日湯殿・羽黑山參詣。酒田に出で、吹浦へ二里ばかりの所で、或男に逢ひ、其者の娘

智情童女の回向を頼まれ、汐越の町から象潟一見の船に乘り、秋田に至り、南部境の生保内峠を越え、津輕を志し、外の濱なる大濱の漁村に着く。靑森見物。それより濱傳ひに南部を志し、狹布の里に出る。七の戸・五の戸・一の戸・九の戸を過ぎ、仙臺入。それより水澤・前澤を過ぎ、衣川を渡り、平泉・高舘に登り、中尊寺參拜。石の卷にかゝり、金花山に登る。松島に着き、瑞岸寺、雄島の雲居和尙の松吟庵坐禪堂見物。雄島より船に乘り、島島一見。鹽釜明神參詣。野田の玉川・末の松山・沖の石・壺の碑・十符の名勝を探り、再び仙臺入。武隈明神、笠島の道祖神參詣。大川・原の驛・相馬・三春・岩城の七濱一見。なこその關、筑波山に詣で、堺より船にて水戸へ出る。ついでいわ井町・潮來・鹿島・佐倉・國府臺・行德より舟にて江戸入。以上の旅行記を「奥羽行記」（明和元年刊）と云。靑森・外の濱迄行つた所が、他の細道行脚より異彩を放つて居る。

角庵行雲もその細道の一すぢを尋ねまほしく、六十九歳の老齢をかへり見ず、明和二年三月二十日余り、洛西の茅屋を出立して居る。其旅行記を「笈の細道」といふ。併し之はその驛々の句を記しただけの句稿である。

明和六年二月十二日佐々木泉明は大坂を淀の川舟に乘つて伏見に下り、松島見物に向つた。先づ大津・石部を過ぎ、お定まりの鈴鹿はくもり、熱田の宮に松島行脚を告げ、荒井の渡りで富士の夕日を拜み、名古屋明神の祭禮に出會ひ、箱根山石割坂で細道一見の歸りに逢ひ、鳴立澤の鳥醉を訪ひ、留守。廿一日江戸は有岡の店に舍り、立之・烏明等をたづね、雪門を餘所に見て、駒形より千住を過ぎ、粕壁に泊る。三月二日日光山行實坊に着。裏見の瀧見物。それより那須野の原を越え、芦野に出で、須賀川の桃祖を訪れ、あぶくま川を渡り、山口村忍文

字摺石を見、白石に麥羅を訪れ、宮城野を過ぎ、壺の石碑に至る。三月十日鹽釜神社參詣。雄島ヶ崎から舟に乘つて江中に泛ぶ。富の山大仰寺に登る。仙臺に遊び所々見物。丈芝をたづねる。歸途は岩沼・二本松を過ぎ、須賀川の桃祖が家に立寄り、白石を通り、妙義山に登り、碓日峠を超え、善光寺に宿り、姨捨山に登り、四月朔日松本を立ち、土岐へ下り、名古屋へ出で、伊勢の白子に至り、外宮を拜む迄で、その先は記されて居ない。それは四月二十四日である。之は恐らく芭蕉の細道が伊勢の遷宮を拜みに行く迄で擱筆した例に倣つたのであらう。此紀行を「東花帖」と云つて、大坂の安村から出てゐる。

曉臺の松島行は明和七年三月十八日であつた。武江の別に臨み、秋瓜・竹外・蓼太・小知其他の餞別句を受け、曉臺も「あぢさゐの翌日を定むる夜となりぬ」と一句を殘してゐる。鴻巣・日光・殺生石・白川・文字摺・葛の松原・伊達の城戸・武隈ノ松・道祖神・實方墳等、例によつて一見隈なく、仙臺の冬至庵に迎へられる。それよりなほ宮城野・つゝじが岡・愛宕山・壺ノ碑・十符ノ菅・末の松山・野田ノ玉川・千賀ノ浦夜泊・鹽釜明神法樂・松島に至り、「悲しひを添ふるあり。たのしみをうかべるあり。たましゐ左右に走つていづれにかよらむ。松島や我はもぬけて夜の鶴」と共絶景に感じ、又富山大悲閣に登り、「松島は莟むが如く、富山は落花に近し 云々」と歎じ、緒絕ノ橋・姉齒ノ松を過ぎ、高館懷古には、「嗚呼死して恨らくは田橫が五百人。」と悲しんで居る。旅行吟はこゝで盡きてゐる。それは出羽ノ國へ立たれた混陵といふ人に、送別の句を送つて居る所から考へると、象潟へは廻らなかつたものと見える。以上の旅行句稿を「しをり萩」と云。

春秋庵白雄も奥羽行脚に出た。彼が「奥羽紀行」によると、明和八年銚子から出立したらしい。筑波山・那須・殺生石・白川・黒塚・武隈、例によつて見殘さず、實方の墳・宮城野・壺の碑・鹽釜神社・松島・高館・光堂・象潟・屋花澤より越後に入り、出雲崎にて、「佐渡遠く木がれに渡る鷹もがな」の句に擱筆してゐる。

大坂の飛脚問屋大江丸の松島見物も明和八年頃であつた。筆硯の調度凊らをつくし、折ふし差出た春の月に、一句の趣向も浮かばず、明け離れた曙の空に、やうやく「朝露やあとより戀の千松島」といふ蓼太の句を思ひ浮べて、絶妙の境を探り得た事を喜び、蓼太からそれこそ我家の理窟を離れた、一路向上の風流であると言はれ、蓼太を師と尊んだといふ逸話がある(俳ざんげ)。

明和八年諸九尼(モロクニ)は五十八の老軀を提げ、只言法師と共に石山の坊を立つて、松島見物に赴いた。先づ東海道を下り、熱田の千代倉を尋ね、芭蕉の笈を見、こゝで難波の舊國(大江丸)に會ひ、岡崎・三島・箱根を越えて小田原に入り、大磯・藤澤・江の島・鎌倉・金澤の稱名寺からかな川に一宿。四月二十八日、品川に至り、江戸は本町田中氏の許に長途の勞を休めた。江戸滯在は二十三日間であつた。その際増上寺・梅若塚・龜井戸天神・みめぐり神社　淺草觀音・雜司ケ谷・目白・駿河臺・上野・日ぐらし・飛鳥山を見歩き、或は松露庵・雪中庵・松籟庵・其瀾亭を訪れたりなどした。殊に雪中庵蓼太は尼のために隅田川の舟遊を催したり、自分が再建した深川の芭蕉堂を見せたりした。五月二十日、いよ〳〵奥州行となる。行德・鎌が谷を過ぎ、白井から舟に上り、利根川を下り、香取につき、鹿島神社へ參り、水戸に至。六月四日、棚倉に一泊中、長刀をさした男と、その宿の女と

の寄會に興じ、須賀川・福島・伊達の大木戸・白石の城下に千手院麥羅を訪ひ、舟岡の大光寺に也蓼和尚をたづね、笠島・實方の墓・武隈の松を見て、仙臺は休粹といふ醫師の許に着いた。こゝで又尾張で會つた舊國と再會する。仙臺に着いた十二日の夜中から病氣になり、どつと床に就いたが、やゝ恢復したので、二十五日、竹の駕に乘り、松島へ渡り、瑞巖寺・鹽釜・野田の玉川・つぼの碑・つゝじが岡、例の名所を見てかへり、八月一日頃病氣全快。五日舊國に別れ、仙臺を出發し、歸途についたのである。歸りは桑折・福島・白川、二日かゝつて奈須野を通り、日光・鹿沼・桐生・米野原・大篠八里峠を越え、保科から善光寺へ詣り、川中島・姨捨山の麓を通り、中窪といふ所で落馬し、諏訪の溫泉に浸り、飯田より新道といふ難所を越え、九月一日美濃路に入り、四日守山を過ぎ、七ツ下り（午後五時）石山の世尊院の方丈に旅裝を脫いだ。以上五箇月餘を費し、無事細道を終つた氣力の旺盛なのには驚かざるを得ない。此旅行記を「秋かぜの記」と云つて、薌中暮雨の序にも「可謂女中之豪傑也。」と驚歎してゐる。老婦の身を以て、五箇月餘の日子を費し、幾百里の山河を越え行くなど、普通の決心では出來るものではない。本文冒頭に、奥の細道といふ文を讀初しより、何とおもひゆく心はなけれど、たゞその跡のなつかしくて云々とある。芭蕉もかゝる追從者を持たうとは思ひがけぬ事であらう。

天明四年二月二十五日、鳥醉門の百明は銚子を船出して松島・象潟へ杖を曳かうとした。老尼を連れてゐる（古の梅）。先づ鹿島揖取に下り、三月二十七日、下總八日市場に泊り、四月四日、鳥居士（鳥醉）の遺骨を袋に入れ、いよ／＼松島・象潟を志した。佐原の伊能氏から陸奥の案内記を示され、川口に至り、十六日水戸に入る。二十

日、奈古曾の關にかゝる。昔の櫻は二本殘つてゐる。二十一日、岩城三函山の麓なる溫泉に入る。二十四日から五月一日まで雨。二日相馬にやどる。四日、岩沼。五日、仙臺入り。向山なる宗禪寺に登り、也寥禪師に見える。禪師、圖南と三吟一卷する。十五日雨をいとはず禪師・良祇・勿知・良妙尼を伴ひ松島へ向ふ。多賀城の跡を見、鹽竈明神に詣る。それより船を借りて松島へ渡り、瑞巖寺の邊なる旅泊に入る。禪師・勿知・老尼・良妙尼は向山にかへりを待たんとて別れる。百明は良祇を連れて、象潟へ志し、渡波(ワタノハ)に泊る。金花山へ渡る。金花山を下り、山鳥の渡しを越え、鮎川へ出、前の渡波へ出る。二十三日、佐沼醉石亭に泊る。一貫和尙を伴ひて、平泉中尊寺門前なる酒店にやどる。經堂・金色堂一見。一の關にやどる。尿前の關今は咎めるものもない。象潟なる良祇が知人の家にやどる。象潟を出て、七月十日餘り、仙臺宗禪寺にかへる。こゝにて千鯉の訃をきゝ、也寥・圖南・蘭亭・良祇・勿知・巴丈の七吟追悼歌仙一卷をものす。七月晦日、歸途に就く。歸路は增田を過ぎ、武隈の松を見、槻木・船岡より白石なる千手院を訪れる。院主留守。伊達の大木戸を越え、藤田に泊る。奥山長右衞門方にて桃隣の腰掛松の文を見る。八月九日、本宮の冥々舍に至る。こゝにて服薬、日頃のいたはりを養ふ。冥々・呑溟・秋夫と四吟歌仙をまく。十五日、白川の關・境の明神にぬかづき、社前に夜もすがら、名月を賞す。病める身を推して、芦野に至り、遊行柳をたづねる。古木は枯れ、若木を植ゑる。怠たりし病再び起り、步けなかつたので、竹輿を求め出立する。日光山を遙拜し、辛うじて江戶の草庵に入る。此旅行記を「奥往來」といふ。老身殊につかれ、病後筆とるに物うく、天明四年六月末日やうやく脫稿する。本書は名所舊蹟をつぼらに探るといふ

となども面白い。

浪花の遲月上人は寛政元年四月松島に遊ばうとしてゐる。隨齋成美は彼と「一夜流行」の吟を共にし、或は送遲月上人序などを書いてゐる。

栗本玉屑の東行遊覽は大旅行であつた。彼はまづ寛政六年三月六日加古の渡より、あかしの浦に來り、友人青岐と同行。須磨明石より吉野・和歌の浦・都の東西をめぐり、比叡・鞍馬に上り、逢坂の關を過ぎ、伊勢の神宮を拜み、阿漕が浦、桑名を經、尾張三河の名所を見、長良川の鵜飼・姨捨の月と浮かれ、富士を過ぎ、江の島・鎌倉から江戸に入り、隅田川の邊なる成美の別墅に落着き、なほ安房・兩總・香取に至り、筑波山に上つた頃は、十二月の末になつたので、再び江戸に春を迎へ、それより妙義・榛名・二荒山をめぐり、白河の關・伊達の大木戸を越え、能因・藤中將・西行・芭蕉の足跡を尋ね、鹽竈・松島・金花山・宮城野・姉齒・武隈の松・壺の碑、殘る所なく見物し、秀衡が館・衣が關・錦木塚・狹里・末の松山・奥ふじの麓をすぎて、外が濱に出で、國見峠から辛うじて象潟に至り、鳥海山・月山をながめ、最上川を渡り、鼠が關より親知らずの險を越え、安宅の關をおぼろげに眺め、湯尾峠に行惱み、色の濱・あらち山を過ぎ、再び琵琶湖に浮び、大江の岸から小舟で淡路の舊庵に入り、人々と春を迎へ、尙三月の末大江山を傳ひ、天の橋立に遊んでゐる。その旅行記を「東貝」といつて寛政十二年五月出版してゐる。書中珍聞奇事多く、實に趣味津々たるものがある。蓋し古人の多くは松島・象潟

の旅行に止り、それより奥へ足を運んだものは少ないやうに思はれるが、玉屑の如きは東西をきはめ盡したと云つてもよい。

一茶の奥羽行脚は享保元年前に始まつて居る。それは享保元年の一茶自筆の父の終焉記に、「我は諸國わたらひを業として、東は松島・象潟の月にすさび云々」とあるから、享保元年以前に松島・象潟へ旅行した事が分る。其後文政二年四月再び奥羽行脚を思ひ立ち、善光寺迄行つて見たが、子供の死に會ひ、中止した。爾來家庭的の不幸により、其行を果さなかつたが、いよ〳〵文政八年四月十六日更に行く事になつた。一茶六十三歳の時である。道順は詳かでないが、先づ日光に至り、面白庵松露を訪ひ、漢字ばかりの句を作つて主人を驚かし、白河の關を越えて松島に到り、有名な「松島やあゝ松島や松島や」の句を見て、傍に、「松島や右之通に御座候也」と記し、それより足跡を外ヶ濱迄伸ばし、「今日からは日本の雁ぞ樂に寢よ」の句を殘し、なほ羽後の象潟に遊んで、「象潟の缺けをつかんで鳴千鳥」と云つた。此句は前書があつて、先年大地震で、鳥海山は崩れ、蚶滿寺はゆり込んで、沼と變つたなどとある。

明治になつて素兄の「おくの雪道」(明治十五年刊)といふのがある。明治十四年十一月二十〇日出立。「片袖をふつて紙子の首途かな」の留別吟がある。素石・蓬宇・春湖・等栽・幹雄・良大の送別吟がある。梅與同行。千住に宿る。芭蕉の一の泊りだと云つて草賀の驛に泊る。利根川を渡り、室の八島・滿願寺・日光山見物。本院で俳諧興行。中禪寺に至る。梅與に腰を押されて、灯し頃南湖の側にやどる。華嚴の瀧・霧降瀧・裏見の瀧を見

る。十二月一日、日光山を立ち、白川街道をすゝみ、玉生の驛に至る。玉生氏を訪ふ。下野の國鹽谷郡玉生の驛長玉生氏の家は、芭蕉の一夜泊り給ひし所と傳へられる。矢板の驛長矢板氏を訪れ、那須野にかゝる。殺生石は溫泉の山の麓にあつたが、安政中の洪水に崩れ塚を埋める。今は名ばかり殘つてゐる。大田原に出る。淸水流るゝの柳は蘆野の驛はづれ田圃の中にある。白川の關趾は白川街道より三里南に入つて旗宿村にある。古松のもとに白川樂翁公碑がある。「寛政十二年八月一日」とある。馬方の宿る馬宿といふ家に泊る。十二歲の五郎八といふ子供に馬を引かせて、矢吹の驛に宿る。安積沼は田圃となり、名ばかりである。本宮・二本松・黑塚の岩屋を見て、福島に至る、齋藤忍山翁を訪れる。十二月七日、聰雨氏の句碑を見に、忍山と連立つ。胁起しの俳諧の連歌一順。連衆、忍山・素兄等。飯塚溫泉は今は數百戶の商家軒を並べ、歌舞の地となつてゐる。桑折・伊達の大木戶・鐙摺・白石をすぎて、岩沼といふ驛から、二十四町左の山際に實方朝臣の塚が有る。增田に宿り、武隈の松をたづねる。名取川を越え、午後仙臺に入る。椿岸曉翁の家に宿る。曉翁の案內で、宮城野の原・つゝじが岡等の名所舊蹟を見る。多賀城趾にて古瓦を見る。たそがれ鹽竈に至る。滕畫樓（もと伊達氏の別莊）に飲む。そこで曉翁と別れる。拂曉、主の案內で鹽竈神社に詣る。こゝより船を借りて雄島が磯に着く。瑞巖寺に北山上人に謁す。觀瀾亭・富山を見る。紀行はそこで終つてゐる。所々挿畫あり、面白い本である。

以上の外二日坊の「陸奥日記」、以哉坊の「奥羽行」・黑露の「俳諧硯澤」（象潟紀行）、桀氏の「俳諧吾妻海道」（松島・鹽釜道の記）、既白の「菰一重」（寶暦九年）、竹齋の「句安奇禹度」（文化七年刊）等もあるが、まだ寓

しないから詳しく知らない。又細道の影響は他の旅行記の書名にまで取られて居る。例へば巴釣の「鹿の細道」（寶曆四年序）など其の一例であり、俳諧の作法を述べた書物の名にもなつて、例へば「おくの近道」の如きそれである。

因に江三の「むつのゆかり」の柏新甫の跋（萬延元年三月）に、「むつのゆかりのゆかしき言の葉は、奥の細道のほそからず世にひろごりて、今や海内の好士、ひとたびは松島の松に、風雅の操をたくらべんとて、杖を曳き、鴐を馳る人ひきもきらず。云々」とある如く、細道行脚の流行は後世に至る迄連綿として盡きなかつた。

第七章　晩年時代

第一節　江洛に遊ぶ

一、伊賀越え

伊勢の遷宮を拜まうと、揖斐川を下つた芭蕉は、內宮へ來て見ると、すでに事定まり。外宮の遷宮を拜むことになつた。

尊さに皆おしあひぬ御遷宮

伊勢の中村といふ所で、

秋風や伊勢の墓原猶すごし

又玄の宅に止り、其妻の健氣なる心に感じ、日向守光秀の妻を思出し、

月さびよ明智が妻のはなしせん

伊賀の長尾峠を越えて奈良に赴く。

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり

「猿蓑」卷頭の名句で、其角もその序に、「我翁行脚のころ、伊勢越しける山中にて、猿に小蓑を着せて、俳諧の神を入たまひければ、云々」と言つてゐる。竹人の「全傳」に、「直に九月上旬伊勢の遷宮。萬菊・路通・卓袋にあひ、久居二三日のやどり後、李下を伴れて、伊賀に歸り、霜月迄逗留（李下は一宿、路通は暫くあり）。曾良も來り、東に別日、ならの隣のしぐれかなといふ句あり。云々」とある。曾良の句は猿蓑に出た「なつかしや奈良の隣の一時雨」である。又「全傳」に、配力亭にて（杉野氏、上野の人）、

人々をしぐれよやどは寒くとも

の作がある。此時水鷄笛を、頭陀袋より取出し、配力に附與する。近江の人の餞別の具とか云はれてゐる。併し之は芭蕉が一笑から貰つたもので、即ち一笑あての消息に云、

然ば御約束之水鷄笛贈給恭珍重存候。此さとの人々聞馴ず。女子共も集り、我を藝者の様に申をかしく候。行脚先國所により一向音をしらぬ人御座候間、吹て聞せ可申と悦び申候。鹿笛も木曾より貰ひ申候。 時鳥も御座候はゞほしき物に候。云々

二月十六日　　芭蕉庵

一笑様

と。銘を靈極と云ひ、色、茶色、燒物ださうである。「一代錄」に、「右何年カ、芭蕉翁伊賀上野杉野氏配力ニ賜。以後勘介ニ傳フ。勘介嫡子也。其後故川口氏ニ傳フ。」とある。又半殘興行、一入といふ者の會に、

冬庭や月をいとなるむしの吟

千沖といふ者の宅にて、

屏風には山を畫書て冬ごもり

此句後に金屏の松のふるさよと改める（竹人「全傳」）。十一月朔日上野良品亭にて、

いざ子供はしりありかん玉霰

とある。之を立句として芭蕉・良品・梢風・之燕・土芳・半殘の六吟歌仙成る。卽ち

折敷にさふき椿水仙　良品

羽箒の凪やむ跡に軸卷て　梢風

（「一葉集」下略）

霜月末（路通同行）、奈良御祭禮拜見。夫より大津に出る（竹人「全傳」）。「笈日記」に、

元祿巳の冬、大佛榮興をよろこびて、

はつ雪やいつ大佛の柱立

とあるは此の時の吟か。それより京に上り、去來が落柿舍に遊び、鉢叩を聽くべく夜を徹し、やうやく明方になつて聞き付け、

長嘯の塚もめぐるか鉢たゝき

といふ句を作る。事は去來の「鉢叩ノ辭」に見える。即ち

師走も二十四日、冬もかぎりなれば、鉢たゝき聞むと、例の翁のわたりましける。今宵は風はげしく、雨そぼふりて、とみにも來らねば、いかに待侘び給ひなむと、いぶかり思ひて、

箒こせ眞似ても見せむ鉢たゝき

と灰吹の竹うちならしける。其聲妙也。火宅を出よとほのめかしぬれど、なほあはれなるふしぐの似るべくもあらず。……横雲の影よりからびたる聲して出來れり。げに老ぼれ足よはきものは、友どちにも歩みおくれて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の

長嘯の塚もめぐるか鉢たゝき

と聞え給ひけるは、此あかつきの事にてぞ侍りける。

是等の句は其角の「いつを昔」にも出てゐる。然るに一甫の「えの木」といふ書に、「一とせ芭蕉の翁、寒夜の都を見まほしく、鉢叩きと行連れて、三條のひんがし洛の外に至りぬ。いほあるじの尼清元あやしみて申ければ、翁のいはく、」と前書あつて、此句を出す。併し此記事は誤であらう。一般には鉢叩きの辭のやうに傳つてゐる。

十二月、膳所に赴く。

何にこの師走の市に行く烏

「泊船集」に、何をこの師走の市を云々とする。「何集」には、何をこの師走の市に云々とある。「赤冊子」によ

ると、此句は五文字のいきごみにあると、芭蕉が說いたものだと。桃鏡（？）の「芭蕉翁文集」に、萬菊丸にあてた手紙が出る。即ち

いかにしてか便も無御座候。若哉渡海の舟や打われけん、病變やふりわきけん抔、方寸を碎くのみに候。されども名古屋の文に御無事旨推量に見え申候。拙者も霜月末には南都祭禮見物して膳所へ出越年、歲旦京近き心、「菰を着て誰人います花の春」。山中の子供と遊ぶ、「はつ雪に兎の皮の髭つくれ」。南都、「雪悲しいつ大佛の瓦ふき」。京にて鉢叩を聞きて、「長嘯の墓も廻るか鉢たゝき」。歲暮、「何にこの師走の市に行く烏」。急便早々に候。正二月の間伊賀へ御越し待存候。宗七も御噂申斗に候。

正月十七日　　はせを

萬菊丸様

（「句選年考」抄出）

元祿三年、芭蕉四十七歲の春を迎へる。

都近き所に年をとりて

薦を着て誰人います花の春

膳所にての歲旦吟と見える。其角の「花摘」に、「當歲旦（元祿三年）に翁「薦を着て誰人います花の春」と聞えしも未來記なるべし。」とある。「句集」に、誰人が薦來て云々とある。

竹人の「全傳」に、「同じく三年、正月はじめより二月迄伊賀に在。云々」とある。「一葉集」に、二月六日と前書して、

黄鳥の笠落したる椿かな　翁

古井の蛙草に入聲　乍木

陽炎の消さき見たる夕影に　百歲

（下略）

右、芭蕉・乍木・百歲・村鼓・式之・梅額・一桐・槐市（十五句より哭雪入る）の歌仙成る。

其頃園女に句を與へる。

のうれんの奧物ゆかし北の梅

「菊の塵」に、「わが此道に入し初めは元祿二年の冬なり。あけの年の如月、かの翁、こゝの人、曾良などひきゐきたられしに、しか〴〵とつげければ、翁よろこびて、いかならむことをもつゞりてよとおほせいたるに、「花までは時雨て殘れ檜笠」といひ出ければ、やがて脇の句附てたうべてさらに」

と前書がある。入門は元祿二年冬園女（ソノメ）は伊勢松坂の人。本姓度會氏。山田の醫斯波一有（渭川）の妻。大坂に住し、夫歿後江戸に下り、智鏡と改め、冠里公（安藤大和守）の母に仕へる。變つた女で、大い籠をかぶつて男に見え、或は袖の下を切つて下駄の緒とし、文庫の蓋を流しに用ひたりした。髮の毛を頭の上に二十本位殘してゐ

たといふ。又芭蕉の卑んだ前句附の點者をして盛名があつた。享保十一年四月廿日六十三歳歿。深川靈岩寺念佛堂の後に葬る。

竹人の「全傳」に、三月十一日荒木村白髪の社にて、

畠うつ音や嵐のさくら麻

木のもとに汁も膾もさくら哉

之は風麥亭の吟で、此句を立句として、「ひさご」に歌仙出。

伊賀の國花垣の庄は、そのかみ奈良の八重櫻の料に附られけると、いひ傳へ侍れば、

一里はみな花守の子孫かや

「猿蓑」に出。竹人の「全集」に、「膳所に行とて、道より物に書付て、半殘が許に來る二句。」とあつて、「蛇食ふときけば怖し雉の聲」の句をそへる。

土手の松花や木深き殿造り

竹人の「全傳」に、「橋木子の許（藤堂氏、本名丹羽）、歌仙一折。」とある。

きり〴〵すわすれ音に啼く亘燵哉

同書に、「氷固宅にて、此句にて一折あり。」とある。氷固は松本氏、後非群と云。伊賀上野の人。

伊賀より近江に赴き、大津の濱田氏珍碩が洒落堂に至り、その記を作る。洒落堂記は、「芭蕉文集」・「芭蕉翁

文集」に出。

四方より花吹入て鳰の海

はその時の吟である。「句選年考」頭書に、「漣々云、海の字波と云ふ文字にて、眞蹟といふ一軸に見えたり。」とある。

行春を近江の人と惜みける

湖水を望み、春を惜んだ句である。古來唐崎の松はの句と共に稱揚された句で、蓼太は芭蕉が石山寺の奥幻住庵に居つた時、そこの門人等と春を惜んだ湖水の眺望であると(「古今抄」)、素丸は支考說を持して蓼太に反對し、幻住庵からは湖水は見えないと言つてゐる。支考は木曾寺の偶作であるとなし(「句解」)解し、「去來抄」に、尙白難じて、近江は丹波にもなり、行春は行年と云へようと言つたら、芭蕉去來に向ひ、「汝いかゞ聞き侍るや。」といふので、去來曰く、「尙白が難あたらず。湖水朦朧として春を惜しむに便りあるべし。……行年江州に居たまはばいかで此感ましまさん。行春丹波に居まさば、元より此情うかぶまじ。」と答へて、芭蕉から、「汝は風雅を語るべきものなり。」と賞められたといふ傳說がある。その頃「ひさご」成る。

二、幻住庵の閑居

四月のはじめ、芭蕉は石山の奥、岩間の後、國分山(コクブヤマ)の幻住庵を修覆して住んだ。幻住庵ノ記によると、麓の細い流を渡り、三曲二百步にして、八幡宮(「東海道名所圖會」に云、近津尾八幡宮とて、國分村の生土神(うぶすな)なり。云々)

がある。本尊は阿彌陀如來、その傍に住捨てた草の庵があつた。それが幻住庵である。主の僧は菅沼曲水の伯父イ、菅沼（本多八郎左衞門範元。五十二歳で出家し、當山にかくれ、天和三癸亥寂、歳六十二、法名を幻住庵探山居士）で、今から八年ばかり前に歿し、幻住老人の名を殘すだけであつた。その庵を軒端ふきあらため、垣根結添へなどしたのである。こゝは、大變景色の佳い所で、山は未申にそば立ち、人家はよき程にへだたり、南薫峯より下ろし、北風湖を浸して來る。日枝の山・比良の高根・辛崎の松は霞にこもり、城あり、橋あり、釣舟あり、笠取山に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗取る唄、螢飛ぶ夕やみ、水鷄の叩く音、美景足らずといふ事がない。中にも三上山は富士山の俤に通ひ、田上山は古人を數へる。さゝほが嶽・千丈が峯・袴腰といふ山がある（「東海道名所圖會」に、さゝほが嶽は幻住庵より東の方谷上（たなかみ）山のつゞきなり。千丈が嶽といふは坤（西南）の方にして、此ほとりの高山、北千丈・南千丈の二峯あり。袴腰は千丈が嶽より一里南にして、勢田川より西也。笠取山は石山と醍醐の中にあり。云々）。なほ眺望を恣にしようと思つて、後の峯に上り、松の棚を作り、藁の圓座を敷き、猿の腰掛と名ける。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲んで自ら炊ぐ。持佛一間をへだてて夜の物を入れる所をこしらへ、木曾の檜笠・越の菅蓑ばかり枕もとの柱にかける。丁度筑紫の高良山の僧が上洛したので、人をして額を乞ひ、幻住庵といふ三字を書いて貰つた。話相手は宮守の翁・里のをのこ、猪の稻を食ひ荒したことや兎の豆畑に入り込むなどの農談に興じ、夜は燈を取つて、自分の影法師に是非をこらす。まるで病人が人に倦んで、世を厭ふやうなものである。云々とあるやうな、閑素・幽邃な住家であつた。

先たのむ椎の木もあり夏木立

八幡宮の附近には椎の木が多かつた。椎の木は隱者の居にふさはしい物、芭蕉は國分山の絶景にめでて、やがて出でじとさへ思ひ定めたのである。二月十八日附、芭蕉が曲水に與へた手紙の中に「幻住庵上葺被仰付候由珍重存候。うき世のさた少々遠きは此山の事と、折々のねざめ難忘候。露命にかゝり候はゞ、ふたゝび薄雪の曙をと被存候。云々」(「三等ノ文」)、とある位、芭蕉は幻住庵入を待ち焦れてゐたやうに思はれる。薄雪の曙云々とは、若し病氣にでもなつたら下山して、元の風雲流水に身を任せるといふ意味であらう。文曉の「凡兆日記」に、幻住庵の構造が精しく書かれて居るが、眞僞は別として參考迄抄錄する。

幻住庵圖

一、九尺四方二三尺ノ下屋　但床の高さ三尺。太くして繰出し。尤四方障子。障子の骨紙美濃紙にして油紙。

一、下屋の下竹椽　但葛結。後ろの方又外に庇をかけ、一間として、庇の下は突上げにして疊を敷、棚釣て、金具又臥具を置く

一、四方共に葭簾　但雨風の時は共方角に右之葭簾を引廻す用心也。

屋根は草葺也。西方の椽の前に破瓶の水一荷も入るべきを据う。手洗水也。東南の椽先きには水三四荷も入るべきを据。是遣ひ水也。八幡宮の拜殿に、物の五六斗も入るべき新しき桶を結びて据ゑあり。是經石を入るゝなり。云々

とあつて、作事初めに尾張の知足から、後に芭蕉の舊跡として殘るものであるから、芭蕉の心のまゝに立てるが

よいと申送られたとある。併し知足が建てたとは信じられない。知足が建てたものなら、幻住庵へ來さうなものだが、几右日記を見たとて知足の句はない。之は膳所の曲水が修繕したのである。禮狀もある位だから、曲水が手を入れてやつたのである。又同書に、幻住庵は閑雅風景何一つ不足する所はないが、水の便が惡い。老いた次郎兵衛に汲ませるのは心苦しいと、此事を三井寺の定光坊阿闍梨實永法師に話した所、實永は庵の後の巖の凹みを獨鈷を以て掘つて、玉のやうな水を湧かせたなどとあるが、之も小說で信ずべきことではない。又幻住庵に泥棒が入つて、柱にかけた菅蓑と頭陀とを持つて行つたが、翌朝八幡宮の拜殿に捨てゝあつて、傍に、「入用なき品なれば、御返し申也。」と書いてあつたといふが、之も當になる話ではあるまい。一字一石の寫經の話も此書にある。

幻住庵の生活は「猿蓑集」の卷末にある几右日記を見れば大方分らう。几右日記の句は幻住庵を訪れた門人の句や遠くから文通した人の句を集めたものである。從つて卽景卽情を詠んだもので、文通の句は前書に文に云々すとか、書音とかある。曲水・野水・凡兆・千那・珍碩・乙州・探志・史邦・如行・之道・尙白・木節・智月・越人・其他近江の人々が訪れてゐる。

時鳥脊中見てやる麓かな　曲水

くつさめの跡しづか也夏の山　野水

海山に五月雨そふや一くらみ　凡兆

瑩飛疊の上もこけの露　乙州

五羽六羽庵とりまはす閑古鳥　元志

笠あふつ柱すゞしや風の色　史邦

月待や海を尻目に夕すゞみ　正・秀

目の下や手洗ふほどに海凉し　市隱

夕立や檜木の臭の一しきり　及肩

昇二猿腰掛一

秋風や皿の上山のくぼみより　尙白

稻の花これを佛の土產哉　智月

木履ぬぐ傍に生けり蓼の花　木節

是等の句を以て考へても、いかにその地の幽邃淸閑な所であつたかゞ分る。飮食物・夜具蒲團すべて曲水や他の門人共から仕送られたものであらう。野徑が紙帳を贈つて、

おもふ事紙帳にかけと送りけり

とあるし、之道が麥の粉を土產に持つて來て、

一袋これや鳥羽田のことし麥

と云ひ、北枝が蓑を贈つて（之は奥の細道の時の事であらう）、

しら露もまだあら蓑の行へかな

とある如き、その生活狀態の一部分を示してゐる。

こんな氣に入つた幻住庵でも、芭蕉はいやになるとすぐ破つてしまつた。「次郎兵衛物語」に、「兎角翁は風雲の情常にうごきて、暫も一所に居をとゞめ給ふ事しがたき御人にて、云々」とあるが、どうもさうらしい。尤も芭蕉は病身であつたから、だん〳〵すゞ風が立つ頃になると、寐冷え病ふ秋の山と云つたやうに、胃腸を損すことになる。七月十七日附、牧童に與へた手紙によると、「拙者儀山庵秋至候ては、雲霧に痛候而、病氣に障り候故、近日出庵致し、名月過には何方へなりとも、風にまかせ可申と存候。云々」とある。「笈日記」によると、八月の月見は木曾塚の無名庵に催して居るから、八月は山を下つたやうに思はれる。それは几右日記の句が夏から秋迄で、冬の句がないのを見ても分る。

明年彌生尋舊庵

春雨やあらしも果ず戸のひづみ　嵐蘭

とある。四年の三月はすでに人なき空庵となつて居たのである。

鬼貫の「犬居士」に、禁足之旅行記といふのがある。その九月二十一日の條下に、鬼貫が石山へ登つたかへりに、芭蕉の庵を尋ねて、

我に喰せ椎の木もあり夏木立

といふ句を作つてゐる。此句は芭蕉の先づ頼む云々の句の上五を換へただけで、果して鬼貫が幻住庵を訪れたものか詳かでない。

「俳諧芭蕉談」によると、我に喰せの句に芭蕉老鶯の脇があつて、二の裏のうつりに至り、芭蕉の「うすく\と色を見せたる村紅葉といふ句に、鬼貫「下手も上手も染やしてゐると附けたけれど、芭蕉感心せず、「田を刈りあげて馬率て行く、「田を刈あげて烏啼なり。正秀傍から「よめりの沙汰もありてはづかし。之も採用されず。遂に「御膳がよいと松風のふくと鬼貫が附けて、芭蕉に魂生すべしとほめられ、はじめて俳諧無心所着の場を感知したといふ話が出てゐるが、附會の說らしい。

四月中のことであらう、上林三入老の所で、

螢見や船頭醉て覺束な

とする。去來へ文通して、宇治へ來い。大坂からこゝへ、杉風も直に來るといふ知らせがあつた、などとある。秋之坊が來て、二日泊つて行つたのも、此夏であらう。

我宿は蚊のちいさきを馳走かな

夏の幻住庵は隨分蚊が多かつたと見える。

芭蕉歿後の幻住庵は、膳所の靈椿が守つて居つた。浪化の「有磯海」(元祿八年刊)に、

芭蕉翁の住捨給ひける幻住庵をあづかり侍りければ

はつ雪や去年も山で燒だらふ　　靈椿

とある。併しそれも一時で、後他に移したと云ふことである。蝶夢の「俳諧三等ノ文の解」に、

> 按るに、當庵は江州勢田のおく石山寺のうしろ、國分村の山にありて、幻住庵の記の文のごとく、曲翠の伯父の僧の山居の跡也。蕉翁こゝに一夏安居しおはして、麓の谷川の石を拾ひて、一石一字に法華經を寫し給ふ所也。その經石を埋めし所に、今も文字ある石出づ。其所に近き比勢田の住人雨橋扇律といふともがら經塚のしるしの石たつ。此所蕉翁住庵の後、年經て曲翠の家絶ければ、其庵を膳所の城の西なる別部村にうつす。に、寶暦のすゑ或禪尼ありて、蕉翁の遺跡なる事を諸國の好士に告げて、施財をあつめて再興し、今も幻住庵といふ。もとの庵の跡は木草しげり、三徑うもれてさだかならぬを、おのれ親しく里人の老殘りたるをかたらひ、むかしの庵の跡を尋ね、方角を正し、幻住庵舊趾と石に刻みて建しは、蕉翁の八十年に當れる安永二年の時雨音のころほひなりけり。

とある。又一說に、寶暦のはじめ雲裡坊杉夫の發起で、石山の奥の幻住庵の附近にあつた椎の樹を一本移植して、木曾塚の無名庵の舊地へ新に草庵を作り、後の幻住庵と呼ぶことになつた。とにかく幻住庵が二つ出來たことになる。今では元の幻住庵の址に碑が立つて居る。八幡宮の左方に、「芭蕉翁幻住庵舊趾」といふ碑と、先づたのむの句碑と、勢田の雨橋・扇律が建てた經塚とある。

幻住庵記は猿蓑に出てゐるが、「芭蕉翁眞跡幻住庵記」と題するものもあつた。註釋書は護物の「俳諧あしのひと

もと」(文政十年刊、「安詞迺比斗茂渡」とも題す。)が有名であり、親切である。其他湖東日布禮山の櫻門の「幻住庵私解」、雁來の「幻住庵記几右日記解」(文政四年、魯屋老人の序。)道奮の「幻住庵記略註」などがある。私解は辭句の解に詳しく、解・略註は簡單なものである。

三、粟津の無名庵入り

秋、芭蕉は木曾墳の無名庵に入つた。無名庵とは粟津の義仲寺の境内なる木曾義仲の墓の傍の草庵である。「笈日記」に、

元祿三年の秋ならん。木曾塚の舊草にありて、敲戸の人〳〵に對す。

草の戸をしれや穗蓼に唐がらし

とある。

八月十四日(待宵)は楚江亭に遊び、十五日(名月)は木曾塚に集り、十六日(十六夜)は船を湖上に泛べ、堅田の浮御堂に遊んだ。この三夜を月の本末と名けて、「笈日記」に句が出てゐる。卽ち

三夜の月

是も昔の秋なりけるが、今年は月の本末を見侍らんとて、待宵は楚江亭にあそび、十五夜は木曾塚にあつまる。いざよひは船を浮べて、さゞ波や堅田にかへるとよめるその浦の月をなん見侍りける。路通が待宵に月をさだむる文あり。支考が名月の泛湖の賦あり。阿叟は十六夜の辯を書きて、竹内氏の所にとゞむ。此三夜

を月の本末と名けて、成秀・楚江が二亭に侍り。文しげければ爰にしるさず。

十四夜

うかるなよ跡に月待宵の興　路通

まつ宵はまだいそがしき月見哉　支考

五器たらで夜食の内の月見哉　同

十五夜

米くるゝ友を今宵の月の客　翁

十六夜

やすくと出ていざよふ月の雲　翁

この句を立句として、芭蕉・成秀・路通・丈草・惟然・狢睡・正則・楚江・膀重・葦香・兎苓・正秀其他の連衆の歌仙がある。

舟をならべて置わたす露　成秀

ひらめきて咲も揃ぬ萩の葉に　路通

（下略）

十六夜や海老煮る程の宵の闇　翁

鎖あけて月さし入よ浮見堂　　同

とある。以上の中、支考の月見賦は「和漢文操」に出てゐる。

月見賦

ことし琵琶湖の月見むとて、しばらく木曾寺にたび寐して、膳所松本の人々を催すに、乙州は酒をたづさへて、泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶をつゝみて、信樂に一夜の夢をさます。今宵は茶といひ、かたうの人も二派にわかれて、洒堂は灯にかたぶきて、其茶に玉川が歌を詠じ、丈草は月にうそぶきて、其酒に樂天が詩を吟ず。支考は若く、木節は老ひぬ。智月は物のおぼつかなう、かつぎのあまのなま浮びならず。それが中にも惟然法師は酒におどろき、茶に感じ、ほむるもそしるもそらに風吹て、……思ひしまゝの草の庵に、浮世の外の風狂をつくせり。

米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乘じて、湖水の月に船を浮べんと、物好む人の風情をそへたるに、……鏡の山もこなたにさしむかひ、日枝は横川の杉につらなりて、比良の高根は雁をも數へつべし。うしろに音羽峯たかく、石山の鐘は粟津の嵐にさえて、そこに楓橋の霜も置ぬらん。矢橋の歸帆は今宵をもてなすに似たり。

名月や湖水に浮ぶ七小町

猶はた傾く月の名殘には、辛崎の松もひとりや立てる。古き都の名もゆかしければ、尾花川の明ぼのをこそと、千那尙白をおどろかしぬれば、夜ははや五更に過ぎぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

情景洵に見るが如く、洒堂の茶好き、丈草の酒好き、智月の霜枯れたる、惟然の飄乎たる、とり〴〵に面白い月見である。

尙芭蕉の「堅田十六夜之辯」は史邦の「小文庫」に出てゐる。卽ち

望月の殘興なほやまず。二三子いさめて、舟を堅田の浦にはす。其日申の時（午後四時）ばかりに、何某茂兵衛成秀といふ人の家の後にいたる。醉翁・狂客月にうかれて來れりと聲々によばふ。主思ひがけずおどろきよろこびて、簾をまき、塵を拂ふ。園中に芋あり。さゝげあり。鯉・鮒の切目たゞさぬこそいと興なけれど、岸上に筵をのべて宴を催す。月は待つほどもなくさし出、湖上花やかにてらす。云々

鎖明けて月さし入れよ浮御堂　はせを

此月見は「略傳」共他に元祿三年秋の事となつて居るが、元祿三年は路通奥羽行脚の歳で、名月の夜は白川の關で、「名月や衣の袖をひらつかす」とあるから、路通が待宵に月を定める文を書いた（三夜の月、支考の笈日記出。）年は、元祿三年の秋ではなく、元祿四年の秋だらうといふ說がある。（句選年考說）。併し「雜談集」（元祿四年正月作）に、

於大津義仲庵

三井寺の門たゝかばやけふの月

其夜を思ひ合せ侍るにも、云々

とあるから、此月見は元祿三年八月のことでなければならない。或は路通の文は支考の記憶ちがひか。

堅田にて

病雁の夜寒に落て旅寐哉

李由・去來の二人に

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

大風のあしたも赤し唐辛子

是等はその頃の吟であらう。病雁の句は、「去來抄」に、「去來云、病雁は格高し。趣かすかにして、いかでか爰を案じつけん。云々」とある。蒟蒻と柿は、李由・去來の贈物であらう。大風の句と共に無名庵の吟か。

おなじ年九月九日、乙州が一樽をたづさへ來りけるに

草の戸や日暮れてくれし菊の酒

乙州が脇をして、

蜘手にのする水桶の月（笈日記）

洛の雲竹の自畫像に賛して

こちらむけ我もさびしき秋の暮

無名庵を出た芭蕉は、大津・膳所・堅田の門人の家に泊り歩いて居たので、旅心更に落着くひまがなかつた。路通の「勸進牒」に、

一日曲水を訪ひ、役にも立たぬ事どもいひあがりて、心細くなり行きしに、膳所の文とて持て來れり。とりどり披きて見るに、いれいれと人に言はれても、猶喰ひあらす旅のやどり、どこやら寒き心をわびて、

往つかぬ旅のこゝろや置火燵

遂に大津は乙州の新宅に年を忘れ、

人に家を買はせて我は年忘

同書に、「臘月の末京都を退出で、乙州が新宅に春を待ちて、」とある。

四、嵯峨の落柿舍に遊ぶ

元祿四年、芭蕉四十八歲。湖頭の無名庵に春を迎へ、三日閉口題四日。

大津繪の筆のはじめは何佛

曲水に與へた手紙に、

三日口を閉て、題正月四日

大津繪の筆のはじめは何佛

金平が分別のごとく、ことしは休みにいたし候て、歳旦おもひよらず候へども、如此御座候、以上

（「一葉集」）

とある。許六の篇突に、此句をあげて、「大津繪等の前書、後代歳旦の格式、是にて分明也。」とあるが、去來の「篇突難陳」に、「大津繪の前書の事、其年我方に書送り給ひしは、鳰の浮巣に春を迎へて、三日晴を氷らす、題四日と侍りき。此前書後代の格と云へる事聊辨へがたし。唯打聞きたる儘にて替る事なし。云々」とある。

「芭蕉談」に、一日桃花さかりなる頃、去來長者町の宅へ芭蕉を招請し、丈草・乙州・曲翠集つて句作の後、去來此句意を芭蕉にたゞした。すると芭蕉は、汝は徒然草を讀んだか。その中の佛問答を讀むがよい。餘り往復して聞き盡さうとすると、返つて興味のないものであると言はれたので、其夜から丈草・乙州と共に、徒然草と土佐日記の大意を講釋して貰つた。支考に與へた聞書といふのはその書であるとあるが、眞僞は例によつて分らない。

乙州の江戸へ下るを餞して、

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

とある。「猿蓑」に之を立句とした歌仙がある。

竹人の「全傳」に、「同じく四未のとし、四月始、大津より伊賀に來り、薪の比南良に行、伊賀にかへり、三月

末、また大津に在、冬まで爰かしこ歴覽、霜月はじめ粟津より東武に歸庵（桃隣同行）。」とある。正月、卓袋の月待に、

　　月まちや梅かたげ行く小山伏

西島百歲の宅で歌仙催し、

　　こまかなる雨や二葉の茄子種

此夜は障があつて五句で止める。赤坂の庵で、

　　不性さやかき起されし春の雨

三月二十三日、萬乎の別墅で一折、

　　年々やさくらをこやす花の塵

是等の句は伊賀に於ける吟である。

　京阪に遊ぶ。

　　　　尙白と浪花に下る

　　たゞ一夜桃に宿かる木幡かな

　　　　相國寺にて

　　鶯に感ある竹のはやし哉

上醍醐にて

留守といふ小僧なぶらん山櫻

嵐山

花の山二丁のぼれば大悲閣

此時の吟であらう。

四月十八日。芭蕉は嵯峨に遊び、去來が落柿舍に入る。五月四日まで泊つてゐた。「嵯峨日記」に、

落柿舍はむかしのあるじの作れるまゝにして、所々頽破す。なか〳〵に作りみがかれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁、畫る壁も風に破れ、雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたる。竹椽の前に柚の木一もと花かうばしければ、云々

とあるから、元は作りみがかれた立派な家で、それがやうやく頽破して、今は淋しい草庵となつたものと見える。

「凡兆日記」によると、此落柿舍は元三井秋風の隱宅である。そこに秋風の愛妾たまといふ婦人が居た。或日柿の實が雨の樣に落ちる音で急に癪を起し、死にさうになり、それからは毎年柿の實の落ちる度に、氣分がすぐれなくなるので、秋風も閉口し、別に鳴瀧へ地所を買つて、家を建て、落柿舍は去來に廉く賣拂つて了つた。そこで去來は壁や襖を塗りつぶし、惣二階を取捨て、上下百三十餘疊もあつた部屋を、わづか六疊・八疊・三疊にちゞめ、瓦葺を萱葺に代へ、

檜の椽を竹椽にし、切倒した柿を數十本植ゑつぎ、物寂びた草庵にして、菊亭殿に落柿舍といふ庵號を書いて貰つて住むことにしたと。併し之は小說らしく、何所まで信じてよいか、見當が付かない。菊亭殿に庵號を付けて貰つたなどは虛說である。「風俗文選」の「落柿舍記」(去來)に、柿の木を賣つて一貫文を得た所、一夜の中に柿が落ちてしまつたので、買手に金を返してやり、友人への消息にみづから落柿舍の去來と書きはじめたといふ事が見えてゐる。

落柿舍の生活は十分に芭蕉を滿足させた。先づ障子つゞくり、葎引きかなぐり、舍中の片隅一間なる所を寢所とする。机一つ、硯、文庫を置き、白氏文集・本朝一人一首・世繼物語・源氏物語・土佐日記・松葉集を並べ、唐の蒔繪したる五重の器に、さまざまの菓子を盛り、名酒一壺盃をそへる。蒲團や臺所道具は京から持つて來たから十分である。我貧賤を忘れて淸閑をたのしむと言つてゐる。これなら芭蕉ならずとも好もしき別世界である。

十九日、午半、臨川寺に詣る。松の尾の林の中に小督屋敷がある。墓は三間屋の隣藪の内にある。しるしに櫻が植わつてゐる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪の茂りや風のすじ

夕方落柿舍にかへる。凡兆京から來る。去來京にかへる。宵から寢る。

二十日、北嵯峨の祭見に羽紅尼來る。去來途中の吟、

つかみあふ子供の長や麥畑

竹椽の前の柚の木がよく匂ふ。

柚の花やむかし忍ん料理の間

子規大竹藪をもる月夜

去來兄の室より菓子調菜の物など送つて來る。今夜は羽紅夫婦と芭蕉・去來、一人は使の者であらうか、五人が一つ蚊屋に入つて寢たけれど寢つかれず、夜半過ぎから起き出て、菓子を食つて、明方まで話し明す。去年の夏凡兆が宅に泊り、二疊の蚊屋に四國の人が寢たなどといふ話をして皆興がる。羽紅・凡兆京にかへる。去來なほとどまる。

二十一日、昨夜寢なかつたから氣分が重い。終日寢る。夕方去來京にかへる。夜寢られないから、幻住庵で書捨てた反故を出して淸書する。

二十二日、朝雨、今日は人來ず。淋しいからむだ書きして遊ぶ。即ち喪に居る者は悲しみを主とする。酒のむ者は樂を主とする。……獨住むほど面白いことはない。長嘯も客が半日閑を得れば、主は半日閑を失ふことになると言つた。素堂は常に此言を面白がつてゐた。自分も或寺に獨居して、

うき我を淋しがらせよかんこ鳥

といふ句を作つたなどと書く。夕方去來から消息。乙州が江戸から歸るので、友人・門人の手紙がどつさりとゞ

く。其中に曲水の手紙に、江戸の芭蕉庵を尋ねて、宗波に逢つたとあつて、すゝみれ草の句がある。又我が草庵から二丈ばかりはなれて楓が一本ある外靑いものはないともある。楓の句もある。嵐雪の文には蕨の句と出代の句とある。

二十三日、

手を打ば木魂に明る夏の月
夏の夜や木魂に明る下駄の音
竹の子や幼き時の繪のすさみ
麥の穗や涙にそめて啼雲雀
一日〳〵麥あからみて啼雲雀
能なしのねむたし我をぎやう〳〵し

などと句作する。

二十四日、凡兆の豆植うるの句がある。日がくれて去來京から來る。膳所の昌房から消息。大津尙白からも消息。凡兆來る。堅田本福寺から人がくる。凡兆京にかへる。

二十五日、千那大津にかへる。史邦・丈草來る。丈草の題落柿舍、尋小督墳の詩がある。柿の實の句もある。史邦の途中吟がある。黃山谷の感句がある（芭蕉の感じたもの）。乙州來り、江戸の話、並に燭五分の俳諧一卷中

から、六句ほど芭蕉の氣に入つたものをあげる。其角の句三句ある。午後四時頃雷霆雹降。大きなるものから、桃の如く、小さきもの柴栗の如しと。

二十六日、丈草・芭蕉・去來・乙州等と附合。五句止む。

芽出しより二葉に茂る柿の實　丈草
畠の塵にかゝる卯の花　芭蕉
蝸牛頼母しげなき角振て　去來

（下略）

二十八日、夢に杜國を見て泣く。

二十九日、高館の詩を見る。

五月朔日、江州平田明昌寺李由來る、尙白・千那から消息。李由・尙白の句がある。

二日、曾良來り、芳野の花見、熊野詣をかたる。江戶舊友門人の話をする。

大峰や芳野の奥を花の果

夕方大井川に船を浮べ、嵐山に添うて戶難瀨を上る。

三日、昨夜の雨降りつゞき、終日終夜止まない。曾良となほ江戶の話をする。

四日、宵に寢なかつた草臥に終日寢る。晝から雨止む。明日は落柿舍を出ることにする。

さみだれや色紙へぎたる壁の跡

以上は「嵯峨日記」の大畧である。「嵯峨日記」は、魯玉の寶暦三年本古く、別に城田氏の芭蕉眞蹟の模刻本もあり、「俳諧四部錄」・「蕉門七書」中に收められたものもある。四部錄中のものは魯玉本の再版であるさうである。之も語句に相互異同があり、曾良の句が芭蕉の句になつたりして居る書もある。勝峰氏の說によると、草稿は史邦(フミクニ)の手に入つたらしく、「小文庫」に、「嵯峨日記に有り。」といふ語が二箇所も出てゐると。

五、東武に向ふ

芭蕉は落柿舍を出て京に向ひ、四條河原の夕涼に、都の繁華に驚き、それより大津・膳所・堅田あたりをあちこちと泊り步いたらしい。「笈日記」に、

本間氏主馬が亭にまぬかれしに、太夫が家名を稱して、吟草二句

ひら〳〵とあぐる扇や雲の峰

蓮の香に目をかよはすや面の鼻

「泊船集」に、大津丹野亭とある。丹野は主馬の號、大津の人、能の太夫である。「篇突」に、「扇のひら〳〵とするは本間が舞臺にての作、時に取ての妙言也。云々」とある。なほ同書に、

おなじ津なりける湖仙亭に行て

此宿は水鷄もしらぬ扉かな

曲翠亭にあそぶとて、田家といへる題を置て、

飯あふぐかゝが馳走や夕涼

十月、李由が平田の明照寺に宿る。(「韻塞」)。李由は俗姓月澤氏。伊豫河野氏の裔と云。近江平田村光明遍照寺の住職。亮隅上人。字を買年。四梅廬と號する。許六と親しく、寶永二年六月寂。四十五。

前書略

百年の氣色を庭の落葉哉

大垣の斜嶺亭に至り、斜嶺・如行・荊口・文鳥・此筋・左柳・恕風・殘香・千川と附句し、十八句成る。

元祿四年の初冬、茅屋に芭蕉翁をまねきて、

もらぬほどけふは時雨よ草の屋根　　斜嶺

火を打聲に冬の黃鳥　　如行

一年の仕事は麥におさまりて　　翁

(「一葉集」下略)

斜嶺亭は、芭蕉も、「戸をひらけば西に山あり。伊吹といふ。花にもよらず。雪にもよらず。只これ孤山の德あり。(元祿二年秋作)」とほめてゐる勝地にある。度々行つて句作したやうである。支考の「笈日記」に、「此亭より伊吹山をたゞちに見渡す。此山は此府の名山にもてなして、秋冬の風情はさらによし。……吾叟の爰にも見、

かしこにも見て、吟情を此山にまつはれけるもわりなし。」とある。又「初便」に、「此第三を十餘句ほどせられて、後座がしめりたりとて、此句に決せられたりと、其運衆のかたるを聞きぬ。云々」とある。芭蕉も附句を決して疎にはしなかつた。

十月二十日頃熱田梅人亭に宿る。「皺筥物語」に、「支考・桃林の二法師ともなひて、梅人子が許へおはして、」とあつて、芭蕉・梅人・支考・湘水等歌仙九句成。卽ち

水仙や白き障子のとも移り

炭の火ばかり冬の饗應　　梅人

宵の月舟を淺みに引揚て　　支考

（「皺筥物語」下略）

此頃露川入門。露川は澤氏。通稱藤屋市郎右衛門。伊賀鷹山村の産。名古屋通傳馬町に住み珠數師。芭蕉に假託して假說を賣る事支考と同じく、それがため互に論爭する。寛保三年八月歿。八十三歲。月空居士と云。

おなじ冬の行脚なるべし。はじめて此叟に逢へるとて、

奥庭もなくて冬木の梢かな　　露川

小春に首の動くみのむし　　翁

三河の新城に至り、白雪といふ者の二子に、桃先・桃後といふ名を與へる。白雪は太田氏。通稱金十郞。升屋

金左衞門。享保二十年歿。七十五。「笈日記」に、

三河

新城はむかし阿叟の逍遙せし地なり。なにがし白雪といふをのこ、風雅の子ふたり持ち侍る。二人ながらいとかしこくぞ侍る。阿叟もその少年の才をよみして、是を桃先・桃後と名づけ申されしを、支考名の說書きてとゞめけるなり。

其にほひ桃より白し水仙花　翁

是は水仙の花を桃先、桃後といへるより、かくいへるなるべし。

しのぎかね夜着をかけたる火燵かな　桃先

節季候のはりあひぬかゝす明屋哉　桃後

とある。桃後の句の方が面白い。「續猿蓑」に、「節季候の拍子をぬかす明家哉。桃後(少年)」とある。此方が猶よい。此句を立句として、芭蕉・白雪・桃隣・蘆雁・支考・以之・扇車・淡水・桃先・桃後・桃鯉・雪丸の歌仙成る。

其匂ひ桃よりしろし水仙花　翁

土屋わら家の並ぶうす雪　白雪

朝から觜ならす鳥の來て　桃隣

(「一葉集」下略)

菅沼亭にて、

京にあきて此木がらしや冬住居

一書に、菅沼耕月亭にてとある。「略傳」に、「此時支考・桃隣同伴たり。同所（新城）の家士菅沼權右衞門が宅」とある。

鳳來寺に參詣する。病氣にかゝる。「笈日記」に、

おなじ比鳳來寺に參籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな

夜着ひとつ祈り出して旅ね哉

夜着一つの句は桃先の「茶のさうし」（元祿十二年刊）に、「みかはの國鳳來寺に詣る。道すがら例のやまひ起りて、ふもとの宿に一夜あかすとて」と前書がある。

島田驛の塚本氏如舟の家に到る。如舟は通稱孫兵衞。「笈日記」によると、此家は芭蕉が往來の勞を助けた所で、吟草も多くあると云ふ。「句選年考」の頭書にも、「今に風客を留む。芭蕉並に蕉門高弟の筆跡なしといふ事なし。」とある。代々俳人だつたと見える。

宿かりて名をなのらする時雨哉

然るに此句は「續猿蓑」に、「元祿三年の冬、粟津の草庵より武江におもむくとて、島田の驛塚本が家にいたり

て。」と前書があつて、元祿三年冬の作のやうに思はれるが、東武下向は元祿三年でなく、四年の冬のやうであるから、元祿三年冬作は誤りで、同四年冬の作ではなからうかと考へる。それは許六の「自讃之論上」に、

その頃猿蓑出板して、翁は吾妻の方へ赴きたまふ時、李由が月照寺に漂泊し給ふといへども、予また東武に逗留の間にして、かたちがひなること、是また師に緣のうすきなり。その冬予故山に歸る時、師は平田より出でゝ、美濃尾張を過ぎて東武に赴きたまふ。云々

とあつて、東武下向は猿蓑出板の歲、卽ち元祿四年の冬でなければならない。去留の「全集」には、九月、伊賀へ行き、十月、幻住庵にかへり、同月江戶へ赴かれ、島田の驛塚本氏の家にしばらく逗留。四年、四十八歲の春を、江戶の芭蕉庵で迎へる事になつてゐるが、支考說の誤を承繼したものかと思ふ。

十一月の初め江戶の舊草へ歸つた。元祿二年三月二十七日、松島の月を眺むべく、芭蕉庵を出立してから、三年を東西に漂泊して、やうやく古巢へ戾つたのである。車庸の「己が光」（元祿五年刊）に「翁つゝがなく、霜月初の日、むさし野の舊草にかへり申さる。めづらしく、うれしく、朝暮敲戶の面々に對して」と前書して、

都出て神も旅寐の日數哉

とあるが、すぐ芭蕉庵へ入つたのではなく、一時橘町に寓居して居つた。或は番町に越年したやうな說もある。

（支考の「倒かけの返事」）。

ともかくもならでや雪のかれ尾花

「枯尾華」に、「ともかくもならでや雪のかれ尾花と、無常閉關の折〳〵は、とふらふ人も便なく、云々」とあるが誤りである。此句は東武下向舊草安着の述懐である。句空の「北の山」（元祿五年刊）に、「行脚としをかさね、東武にかへりて」と前書して、此句が出てゐる。「芭蕉談」によると、初案は兎も角もならばや老の枯尾花とあつて、素堂に見せた所、一句屈したりと言はれ、ともかくもならでや老の枯尾花と改め、去來に見せたら、老とはいかゞ、障子をへだてゝ月を見るが如し、雪ではどうかといふので、芭蕉が汝と北枝とは句をきかすべきものなりと喜んだとあるがどうか。

六、ひさごに就いて

元祿二年九月、奥の細道を終つた芭蕉は、同三年春を湖南の門人間に過した。「ひさご」の成つたのは其頃である。刊行は六月である。撰者は珍碩又は越人とも云はれてゐるが、「ひさご」へ送つた越人の序によると、江南の珍碩我にひさごを送れり云々とあるから、珍碩撰と見るべきである。「宇陀の法師」に、「名ご屋の荷兮・越人あら野に眼明たるに似たれども、瓢に底を入られ、云々」とあつて、「ひさご」は、越人の撰のやうにも思はれるが、「花見車」にも洒堂（珍碩）の撰集として出てゐるから、珍碩撰と考へた方がよい。越人が序を書いてゐる所を見ると、或は編集に助力したのかも知れない。

珍碩は近江膳所の人。濱田氏。醫名道夕。一に洒堂と號す（洒落堂の略）。元祿五年江戸に下り、芭蕉庵に越年する。同六年夏大坂に移住し、晩年又膳所にかへる。元文二年沒か。許六の「自讃之論上」に、「路通・洒堂如き

もの一生の行跡嘸と亂墮ならん。……しかれども先生（去來）は、急度路通・洒堂ごときの者をにらみ、法を正したまふこと尤至極なり。云々」とある。又許六の「再呈落柿舍書」に、惟然の「藤の實集」の後見を洒堂がした記事が出て居るから、湖南一方の勢力を張つてゐたものと思はれる。風之の「俳諧耳底記」に、

> 此書耳底記と題するものは、亡父風之若きより蕉門に志ふかく、浪花の野坡翁の親弟たれど、猶あきたらす、膳所の洒堂子にちなみ、とし月湖南に通ひて、師弟の如くむつまじかりけるに、或時翁在世に蕉門の未來記とてしるし置給へる梅の鎖の秘書を傳らん事を望まれけるに、洒堂の曰、さればよ。その書は今に我家にひめ置といへども、昔祖翁予に對して、「梅の錠汝と我と鍵一つ」と示し置給へる書なれば、けふに至りて、誰に向ひてか開くべき。云々

とあるが、之は洒堂の僞書で、門戸を樹てる上の聖典であつた。之によると洒堂の人物も支考の亞流で、許六の言も一時の漫罵ではなささうである。實際芭蕉の手傳で撰者の號を蒙つた人、師遷化の後集を出して下手の尻尾をあらはし、初心の人に嘲けられる位なら、速に俳諧をやめるか、又は亡人の數に入つた方が、一度あげた名譽に傷がつかず、人はたゞはやく死にたしと願ふべきことである。之は獨り荷兮・越人への戒めでなく、洒堂如きもの少しは自らかへり見るべきであらう。

「ひさご」は、すべて連句五歌仙より成。即ち芭蕉・珍碩・曲水の三吟歌仙一、珍碩・芭蕉・路通等の歌仙一（名殘表より荷兮・越人の兩吟となる）、野徑・里東・泥土・乙州（オトクニ）・怒誰・珍碩の六吟歌仙一、乙州・珍碩・里東・探

志・昌房・正秀・及肩・野徑・二嘯の九吟歌仙一、正秀・珍碩の兩吟歌仙一を收めてゐる。去來は贈晋子其角書に、「瓢」・「ひさご」・「猿蓑」を以て、奥羽行脚以後の蕉門俳諧の一變風を示す書となし、風國は「泊船集」の序に、「瓢猿蓑出來て、新しき風流を起し、正風の腸を見せ給ひ、云々」と論じ、許六は「滑稽傳」に、「膳所曲翠・正秀・珍碩等を引導て、ひさごの俳諧あり。大方趣き猿蓑に等し。云々」とあり。支考は「古今抄」に、「姿情は凡瓢集に分れて、云々」と論じ、吏登は嵐雪の說として、「七部さがし」に、「あら野・ひさごは猿蓑に熟し、云々」と述べ、蓼太は「雪おろし」に、「瓢・曠野集に正風を見開き、云々」と斷じ、加輿は「俳諧本來道」に、「是や姿情の法を得たりといふべし。」とし、五明は「小夜話」に、之を行の體の一に數へ、曲齋は「婆心錄」に、「風調凡春日に似て、最曲節多し。云々」と異つた見方をして居る。要するに古人は本書を猿蓑と並稱してゐるけれど、尾張俳人の間に、冬の日・春の日の蕉風があつたやうに、近江俳人の間に成つた一蕉風と見るべきであらう。「猿蓑」は芭蕉の嚴重なる監督の下に成つた撰集であるだけ、實に間然する所なき撰集であるが、「ひさご」はその調が「猿蓑」に近いといふだけである。且つ又「ひさご」は發句なき小冊子で、連句も芭蕉が入つてる卷は一つしかなく、その點から論じても、「猿蓑」の比ではない。

五歌仙の內、最初の木のもとにの卷が一番よく出來てゐる。之れならば「猿蓑」の連句に比して遜色を見ない。

鞍置る三歲駒に秋の來て　　翁

名はさまぐ＼に降替る雨　　碩

入込に諏訪の涌湯の夕まぐれ　水
中にもせいの高き山伏　翁
いふ事を唯一方へ落しけり　碩
ほそき筋より戀つのりつゝ　水
物おもふ身にもの喰へとせつかれて　翁
月見る顏の袖おもき露　碩
秋風の船をこはがる波の音　水
雁ゆくかたや白子若松　翁
千部讀花の盛の一身田　碩
巡禮死ぬる道のかげろふ　水
何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁
文書ほどの力さへなき　碩
羅に日をいとはるゝ御かたち　水
熊野みたきと泣給ひけり　翁

初裏へ這入つての句であるが、實に巧みなものである。氣分と云ひ、變化と云ひ、緩急自在で、而も句々の情趣

がしみ〴〵として、立派な出來榮である。曲齋も此卷を殊に勝れたりと論じてゐる。次のいろ〳〵の名もの卷もよく出來てゐるが、中途から越人・荷兮が入つて來て、少し前と步調が合はなくなつたやうである。はじめから越人・荷兮で卷いたらといふ氣もする。曲齋は此卷集中第二也と論じてゐる。次の鐵砲の遠音の卷は面白くない。たゞ場面が次へ〳〵と變化するだけで、情調の抑揚に乏しい。曲齋は此卷集中第三也と言つてゐる。次の龜の甲の卷も面白くない。第一發句が面白くない。奇拔なことを云つたものだと思ふ。珍碩の脇は旨く附けてゐるがぴたりと來ない。裏へ這入つて、里東の戀の句が拙い上に、一體に步調が合はない。曲齋は此卷第四に落たりと言つてゐる。最後の疇道やの卷は變化の上に抑揚もあり、油が乘つて居て、相應の出來である。曲齋は秀逸と稱してゐる。「ひさご」にはまだ特別の註釋書を持たない。

七、猿蓑に就いて

芭蕉は元祿三年四月幻住庵に入り、四年の春を粟津の無名庵に迎へ、四月嵯峨の落柿舍に遊んだ。「猿蓑」は此間に成つたのである。撰者は去來・凡兆、芭蕉の嚴重なる指導の下に成つた。編集の場所は嵯峨の落柿舍であらう。去來の「贈晋子其角書」に、

故翁奧羽の行脚より、都へ越えたまひける、當門の俳諧すでに一變す。我ともがら笈を幻住庵にになひ、杖を落柿舍に受けて、略そのおもむきを得たり。瓢・さる蓑是也。云々

とあるから、幻住庵へ行つたり、落柿舍へ招いたりして、芭蕉の指導を受けたものと見える。そして其際「猿蓑

集」刊行の企ても話されたことであらう。去來の心では、「冬の日」・「春の日」は小冊子であり、尾張中心のものである。「曠野」は必ずしも正風に純な集とも考へられない。師翁の俳諧も奥羽行脚以來一變した。其新風を代表して、一の撰集があつてもよからう。それには芭蕉の正斧を得た、末代の龜鑑たるべきものでなければならない、と云つたやうな抱負と熱心を以て、猿蓑編成に當つたことであらう。芭蕉の方でも、これまでの撰集とは異つた態度で、此集を監修したやうである。それは「去來抄」を見れば分る。即ち

　此木戸や鎖（カギ）のさゝれて冬の月　　其角

猿蓑撰の時、此句を書送り（落柿舍へ送つたのであらう）、冬の月・霜の月、置わづらひ侍るよし聞ゆ。衆議冬の月による。先師曰、其角が冬霜に煩ふ句にもあらずとて冬の月に定め、入集せさせられける。初は文字つまりて、柴戸とよめたり。然るに出板の後、大津より先師の文に柴の戸にあらず。此木戸也。かゝる秀逸は一句も大切也。たとへ出板に及ぶとも、いそぎ改むべしとなり。云々

○

　病雁の夜寒に落て旅寐かな

　蜑の家は小海老に交るいとゞ哉

猿蓑撰の時、一句入集すべしとなり。凡兆曰、病雁はさることなれど、小海老にまじるいとゞは、句のかけりごと新しく、誠に秀逸なりといふ。去來曰、小海老の句は珍しといへど、其物案じたる時は、予が口にも

出ん。病雁は格高く、趣かすかにして、いかでか爰を案じつけんと論じ、終に兩句ともに、乞ひて入集す。云々

○

泥龜や苗代水の畦うつり　史邦

猿蓑の撰に、予誤つて畔づたひと書入れたり。先師曰、畔移と傳ひと形容風流各別也。殊に畔うつりして蛙啼なりともよめり。肝要の景色をあやまる事筆の罪のみにもあらず。句を聞事のおろかなる故なりとて、きげんあしかりけり。

○

じだらくに寐れば涼しき夕かな　宗次

さるみの撰の時、一句の入集を願ひて、數句吟じ侍れど、とるべき句なし。一夕先師の傍に侍りけるに、いざくつろぎ給へ。我も臥しなんとおほせられければ、御ゆるし候へ。じだらくに居れば涼しと申しければ、先師曰、是は發句なれとて、今の句に作りて、入集せさせ給ひけり。

○

面梶やあかしのとまり郭公　荷兮

猿蓑撰の時、去來曰、此句は先師の野を横に馬ひきむけよと同前なり。入集すべからず。先師曰、明石の時

烏といへるもよし。去來曰、明石の郭公はしらず。一句たゞ馬と舟とかへ侍るのみ。句主の手柄なし。先師曰、句の働に於ては一歩もうごかず。明石を取柄にいれば入れなんとあり。終に入らず。

○

田のへりの豆つたひ行ほたる哉　　萬乎

もとは先師の斧正ありし凡兆が句なり。さるみの撰の時、凡兆曰、此句見る所なし。除くべしと。去來曰、へり豆をつたひ行螢の光、闇夜の景色、風姿ありと。凡兆ゆるさず。先師曰、兆もし捨てば、我拾はん。云々

○

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆　　去來

去來曰、猿蓑は新風の始なり。時雨は此集の美目なるに、此句はそこなひ侍る。たゞ

有明や片帆にうけてひとしぐれ

といはゞ、いそがしやよりも、句のはりよく、心のねばりすくなからん。眞帆もその内にこもりてん。先師曰、沖の時雨といふも、又一ふしにてよし。云々

（以上「去來抄」）

○

月雪や鉢たゝき名は甚之丞　　越人

此句猿蓑集草稿に撰入侍りけるを、伊丹の集に、彌兵衛とは知れど哀や鉢たゝきといふ句見當りて、入集如何侍らんと伺ひけるに、先師云、其心ざす所替りあり。然共句に於て紛し。遠慮有るべしと下知したまへり。

○

越人が芥子は（散る時の心やすさよ米嚢花）後に題を附給ふにあらず。越人路通に別るゝ時の句と聞きぬ。猿蓑集の頃、越人路通を忌むゆゑに、僧に別るゝの二字にあらため、先師に捧げて、先師も殊に興じ給ひ侍るなり。云々

○

乙州木曾塚の句（其春の石ともならず木曾の馬）は勝れたるにはあらずといへども、是をゆるして猿蓑集に入るべきよし下知し給ふ。云々

（以上「湖東問答」）

其他「去來抄」に、凡兆の下京やの句の上五を芭蕉が自信を以て置いてやつたり、游刀のつかみあふの句に付て、凡兆・去來のなれるなれぬの論なども、入選の際の論戰であつた。越人の芥子の花の句は、其角・許六の難があつたが、去來は聽かずして入れた。去來・凡兆ともに選に就いて議論し、相互自論を執つて下らなかつた。芭蕉の

說といへども、容易に用ひなかつた所が見える。芭蕉も去來の粗漏を遠慮なく叱つてゐる。かくの如く師弟のへだてを徹し、句のために、思ふまゝにその價値を論じ合つた點は、實に去來の忠實さと熱心さのあらはれで、本集を蕉門龜鑑の集たらしめるに、十分な努力であつた。「花屋日記」、十月二十七日附、去來から伊賀の松尾半左衞門に宛てた手紙の中に、猿蓑選成り、吟聲の際、わざ／＼深川から取寄せた鳥羽の文臺を用ひたことが書いてあるが、それ程猿蓑の撰は芭蕉に於て大切なことであつた。尤も此手紙は文曉の僞作かも知れないからうつかり信ぜられないが、單に之を傳說と考へても、猿蓑集撰の愼重さが窺はれる。又「猿蓑」に於て翁を改めて芭蕉と書かせた。從來は其角の意見で、同門の人が芭蕉を尊んで翁といふばかりでなく、他門の人まで翁と稱してゐるから、門人が翁と書いたつて憚る所はないと言つて、其角が集に初めて翁と書いたと云ふのであるが、芭蕉は之を嫌つてゐた。それは「旅寐論」に、

> 芭蕉と後に改むる事は、猿蓑撰果し侍る時、句の下に翁と書。先師の云、此頃門下の集を見るに、たゞ我を翁と書けり。尤も憚るべし。去來云、師の謙退に於てはしかり。弟子尊敬に至りては、翁と書せん事苦しからじ。先師曰、されば門人なれば自分の家に納めんには兎も角もあるべし。之を世間に廣め、人に沙汰せんには、却て淺間なるべし。人丸赤人の歌の聖と聞え侍るも、いづれの集にか其名書かざる。重ねて必翁と書く事なかれと下知し給ふ。是に依て猿蓑集に改めて芭蕉と書き侍る也。別に師を尊ぶ淺深あるにあらず。

とある。自門同志の間なら翁でもよろしい。世に廣め、人に知らせるには翁ではいけないといふ芭蕉の心は、猿

蓑を以て正風の眞髓を天下に知らせようとする考があつたからであらう。併し猿蓑の序に、其角は、「我翁行脚の頃、云々」と書いてゐる。例の無頓著な筆法であらう。

去來は向井氏。名兼時。字元淵。通稱平次郎、又次郎大夫。落柿舍と號す。父元升、長崎聖堂の祭酒。兄元端(震軒)、弟魯町、牡年、妹千子、共に俳人である。丈草が潘川に與へた手紙に、「此人も昔は具足を賣て、傾城にかゝり候とて、其角なども大ぼめのよし、自身にも笑ひ申候。」とある。此傾城といふのは可南といふ妾で、二人の女の子があつた。八歳の時父と共に上洛し、武藝を學んだが、二十四五歳頃弓矢を捨て、嵯峨に落柿舍といふ別業を構へ隱棲した。元祿の末之を毀ち、東山南禪寺聖護院の邊にかくれた。性篤實、深く正風を信じ、芭蕉の愛弟と云はれてゐる。許六の去來が誄に、「老兄法印の孝養を忘れずして、……ある時は攝家親王の御舘に候じ、遠近の來客に對し、四時の運氣を察し、二六の陰晴を考ふ。云々」とあるから、堂上家に出入して陰陽の學を教へたものと見える。義仲寺の葬式に、肩衣に鋤鍬を携へたのは此人である。寶永元年九月十日、痢病を煩ひ歿。五十四。凡兆は野澤氏。はじめ加生と號す。加賀金澤の人。京に住し醫となる。後罪ある人に交り、その連累にて投獄される。「猪の首のつよさよ花の春」は獄中吟として傳へられる。正德四年歿。

「猿蓑」は六卷から成つてゐる。序は晋其角(元祿辛未歲五月下浣、雲竹書)、跋は丈草漢(正竹書)。内發句三百八十二句(作者、芭蕉四十一句、其角二十五句、去來二十五句、凡兆四十二句、嵐雪・曾良・杉風・乙州・智月・羽紅・丈草・史邦・尙白・路通等)、附合四歌仙(去來・芭蕉・凡兆・史邦四吟歌仙。凡兆・芭蕉・去來三

吟歌仙。凡兆・芭蕉・野水・去來四吟歌仙。芭蕉・乙州・珍碩・素男・十三句成、後に智月・凡兆・去來・正秀・半殘・土芳・園風・猿雖・嵐蘭・史邦・野水・羽紅入りて完成）、幻住庵記、几右日記を含んでゐる。本書は古來非常に尊ばれた集である。許六は「宇陀の法師」に、「前猿蓑は俳諧の古今集也。初心の人去來が猿蓑より當流俳諧に入るべし。云々」と賞揚し、支考は「發願文」（正徳五年刊）に、「猿蓑集に至りて、全く花實を備ふ。云々」と論じ、風國は「泊船集」の序に、「飄猿蓑出來て、新しき風流を起し、正風の腸を見せ給ひ、忽千歳不易の姿、一時流行の變格明也。云々」と云ひ、加興は「本來道」に、「全く行の體を題し、花實姿情悉備りて、誠に萬代不易の流行、俳諧の古今集といふべし。」と賞し、曲齋は「婆心錄」に、「風調は地を專にして、風韻を主とし、高雅なる物冬日に似ず。曲節なる物瓢に反して、獨當時の一體と見れば、世擧て俳諧の花實全備たりと稱して、爰に止まる事しばらくあり。云々」と述べてゐる。其の他蓼太・五明等の論もあるけれど、大方前說を採つて賞揚して居るに過ぎない。

「猿蓑」の發句は、一體に氣品高く、情趣深く、朗々誦すべきもの少くない。殊に凡兆の句は句法がひきしまつて、純客觀の異彩を放つてゐる。鳴雪翁が凡兆の客觀句を賞揚して居たのは有名な話である。子規の新派運動は猿蓑の句作態度に啓發された所もあるかと思ふ。少し抄錄して見よう。

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　　芭蕉
鑓持の猶振たつるしぐれかな　　正秀

廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎　史邦

伊勢の境に入て

なつかしや奈良の隣の一しぐれ　曾良

しぐるゝや黒木つむ家の窓明り　凡兆

だまされし星の光りや小夜時雨　羽紅

新田に稗殻けふるしぐれかな　昌房

禪寺の松の落葉や神無月　凡兆

翁の堅田に閑居を聞て

雜炊の名どころならば冬ごもり　其角

一夜〳〵寒き姿や釣干菜　探丸

住つかぬ旅のこゝろや置ごたつ　芭蕉

あら磯やはしり馴れたる友千鳥　去來

筏士の見かへる跡や鴛の中　木節

ながながと川一筋や雪の原　凡兆

信濃路を過るに

雪ちるや穗屋の芒の刈殘し　芭蕉
一月は我に米かせ鉢たゝき　丈草
夏がすみ曇り行方や時鳥　木節
時鳥何もなき野の門ン構へ　凡兆
入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅
猪に吹かへさるゝともしかな　正秀
ひね麥の味なき空や五月雨　木節

膳所、曲水の樓にて

螢火や吹とばされて鳰のやみ　去來
隙明や蚤の出て行耳の穴　丈草
日のあつさ盥の底のうんかかな　凡兆
たゞ暑し籬によれば髮の落　木節
青草は湯入ながめんあつさ哉　巴山
すゞしさや朝草門ッに荷ひ込　凡兆
唇に墨つく兒のすゞみかな　千那

加賀の全昌寺に宿す

終夜秋風きくや裏の山　曾良

初露や猪の臥芝の起あがり　去來

都にも住まじりけり角力取　去來

果もなく瀬の鳴音や秋黴雨　史邦

そよ〳〵や藪の中より初あらし　旦藁

百舌鳥鳴や入日さし込女松原　凡兆

初雁に行燈とるなまくらもと　亡人落梧

翁を茅舎に宿して

おもしろう松かさもえよ薄月夜　土芳

明月や處は寺の茶の木はら　昌房

澁槽やからすも喰ず荒畑　正秀

鳩ふくや澁柿原の蕎麥畑　珍碩

鯵釣る頃も有らし鱸つり　半殘

立出る秋の夕や風ほろし　凡兆

梅が香や酒の通ひのあたらしき　蟬鼠
日當の梅咲ころや屑牛房　支幽

憶翁之客中

裙折て菜をつみしらん草枕　嵐雪
薄氷やわづかに咲る芹の花　其角
鉢たゝき來ぬ夜となれば朧也　去來
うぐひすや遠路ながら禮かへし　其角
出かはりや櫃にあまれるごさの丈　龜翁
かげろふや土もこなさぬあらおこし　百歲
陽炎やほろ〳〵落る岸の砂　土芳
蜂とまる木舞の竹や虫の糞　昌房
春風にこかすな雛の駕の衆　荻子
子や待んあまり雲雀の高上り　杉風
知人にあはじ〳〵と花見かな　去來

「猿蓑」の連句は天下の龜鑑であり、各時代の渇仰であつた。殊にはじめの三卷は實に正風の骨髓を表したも

のであつた。

第一の歌仙、

鳶の羽も刷（カイツクロヒ）ぬはつしぐれ　去來
一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
たぬきをおどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　芭蕉
人にもくれず名物の梨　去來

此表の靜かな寂びた氣分、野趣に富んだ田園の事象、表の推移はこれ程の變化で行きたい。

ひとり直りし今朝の腹立　來
いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪げに寒き嶋の北風　邦
火ともしに暮れば登る峰の寺　來
ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦

二句置いて、

いまや別れの刀さし出す　來
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
靑天に有明月の朝ぼらけ　來
湖水の秋の比良の初霜　蕉

初裏の十二句目あたりから、だん〱歩調が迫つて來て、遂に名殘ノ表の八・九・十句目に至り高調に達し、十一句目で變化の場面を展開しつゝ、前からの張つめた氣分をいなせ、十二句目の湖水の秋の句で全く他の場に轉じ、氣分を下げて行く附方の巧妙さには實に敬服するより外はない。第二の歌仙、市中やの卷は、

此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞどひやうしに長き脇差　來
草むらに蛙こはがる夕間暮　兆

表の五六句目に一寸變化の波を見せたけれど、やがて收り、裏の三句目、道心のおこりあたりから、又波が高まりかけ、十句目

僧やゝ寒く寺にかへるか　兆

猿引の猿と世を經る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　來
五六本生木つけたる瀦　兆

十一句目に猿引の述懐を出して心持を張りつめさせ、それが十二句目・名殘ノ表一句目・二句目と進むに連れて輕くほどかれ、七句目あたりから、歩調が高くなりかゝつて、

こそ〳〵と草鞋を作る月夜さし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
その儘にころび落ちたる升落　來
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵にしばらく居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　來
さま〴〵に品かはりたる戀をして　兆
浮世の果は皆小町也　蕉
何ゆゑぞ粥すゝるにも涙ぐみ　來
御留守となれば廣き板敷　兆

名殘ノ裏の二句目、小町の戀の觀想を中心として、前後に波を高まらせ、花の定座でそれを輕く落して行く手際は、實に凡手の及ぶ所ではない。第三の歌仙、灰汁桶の卷も立派なものである。併し之は前二卷に比べると、少し劣るかと思ふ所がある。初裏の五句目、

ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　來
金鍔と人によばるゝ身の安さ　蕉
あつ風呂すきの宵〳〵の月　兆
町内の秋も更行明やしき　來
何を見るにも露斗なり　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉

此邊までは變化の波に油が乘つて、緩急自在實に巧なものである。次に又名殘ノ表、三四句目あたりから、氣分が迫つて來て、步調が高くなりかけてよいが、六句目の野水の「何おもひ草狼のなく」といふ附句が、どうも耳障りでいけない。之は前句の女の智惠に對して、何思ひ草と附けたのであらうが感心しない。一體に此卷は芭蕉の觀想的な附句を逃がしてしまふ失敗がありはしないか。觀想とか述懷とかいふ句は連想を複雜にし、氣分を重くし、緊張させる傾向があつて、一卷の情調の上に變化の波を惹起させて面白いが、それが巧に取扱はれて居な

いと、リズムが途切れて來る。その弊がこの卷に見える。第四の梅若菜の歌仙は、初裏までは實によく出來てゐるが、後がいけない。かう正秀・半殘・土芳・園風・猿雖……などが出て來て、少しづつ附けては代り〳〵するのでは、とてもよい連句は出來ない。表の五句目

片隅に蟲齒かゝえて暮の月　　州
二階の客はたゝれたるあき　　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　　男
稻の葉延のちからなき風　　碩
發心の初にこゆる鈴鹿山　　蕉
內藏頭かと呼聲はたれ　　州
卯の刻の箕の手に並ぶ小西方　　碩
すみきる松のしづかなりけり　　男
荻の札薄の札によみなして　　州

このあたりの推移、前句の心持にぴたり合つて、緩急を附けつゝ進んで行く附方は感服する。すみきる松の附味も、青天に有明月の附味も同一である。前句の緊張した心持を遁さないで、而かも後に變化を殘して行く所全く凡手ではない。

猿蓑の註釋書では、空然の「猿蓑逆志抄」(萬延元年刊)が最も詳しい。其他何丸の「七部集小鏡」(弘化四年)、之は「逆志抄」の誤を是正し、罵倒したものであるが、さういふ自分の註にもあやしい所がある。杜勤の「猿蓑集爪しるし」(天明七年刊)に、發句十三の解・幻住庵・几右日記の短評・七部集論・連句の解等が見える。道舊口傳の「猿蓑集共角序註解」(寫本)もある。簡單な評註で、所々文法の誤を正してゐる。卷末に、「閑樹園菊雄叟の秘藏せられしを、伴鷗殘月軒にこれを藏す。」とある。成美の「猿蓑集歌仙異同考」、杜哉の「俳諧古集之辯」(寛政四年刊)、猿蓑・炭俵・續猿蓑の附合を簡單に註釋說明したものである。指直の「猿蓑附合註解」(明治二十年刊)、附錄として附句案方七名の說明がある。

「猿蓑集」中、市中やの卷に千葉縣流山町の秋元洒汀氏藏の眞蹟歌仙がある。普通の七部集本とは多少語句が違つてゐる。沼波氏の「芭蕉全集」中に之を頭書に拔出して異同を示してゐる。江三の「むつのゆかり」に、也寥禪師の傳來した猿蓑草稿の一部が出てゐる。卽ち

五六本生木つけたる水(潦ミヅタマリ)たまり　兆
足袋ふみよごす黑ぼこの道(消)　蕉
追たてゝ早き御馬の刀もち　來
てつちか荷ふ甕(ホ)(こへ消)こほ(消)しけ(た)(消)り　兆
戸障子もむしろかこひの賣屋敷　蕉

てんしやうまもりもはや（いつか）色つく　來

右、猿蓑集草稿祖翁ノ添削、朱ニテ書入ノ本、雅華禪師其門生へ授與シ給フヲ、又々其社徒引ホドキ、剪斷分配シテ、掛物等ニ標莊シ、今所持スル者アリ。實可惜々々。

とある。之は秋元洒汀氏藏の眞蹟とも違ふ。

第二節　最後の芭蕉庵

一、芭蕉庵再興

芭蕉庵は奥の細道出立の際に人にくれてしまつたので、此冬は橘町へ居を變へたのである。仙化が父の追善に、

　袖のいろよごれて寒しこい鼠

とある。又

　魚鳥の心はしらずとしの暮

歳晩の吟であらう。

元祿五年壬申、芭蕉は四十九歳の春を橘町で迎へた。「栖去之辯」は此春の作である。「小文庫」・「芭蕉翁文集」・「芭蕉文集」等に出。即ち

こゝかしこうかれあるきて、橘町といふ所に冬籠して、睦月きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして口を閉むとすれば、風情胸中をさそひて物のちらめくや。風雅の魔心なるべし。家を放下して栖を去、腰にたゞ百錢をたくはへて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情、終に菰をかぶらんとは。

（「芭蕉翁文集」）

三年間漂泊な旅をつゞけて、やうやく江戸へ歸つて來たものゝ、住むべき草庵はなく、又ぞろ人の厄介にならなければならない。風雅もよしやこれ迄と、口を閉ぢて了はうとすれば、詩興胸中に起り如何ともなしがたい。之れでは遂に乞食になつてしまふ。芭蕉の述懷は、俗生活と詩的生活との衝突の苦悶である。芭蕉の如き俗縁を放下して、詩の感情生活に沒入する者にさへ、なほ且つかゝる歎きがある。芭蕉の詩は淚の寂しき慰藉であるとも云へよう。

二月、圖司呂丸の死を悼んで、

當歸よりあはれは塚のすみれ草

鶯や餅に糞する椽の先

ほとゝぎす啼や五尺のあやめ草

之も此頃の吟である。「笈日記」に、「僧の和及はかゝる事きかずなりぬるぞ、今は戀しき人の數なり。」とある。

鶯やの句を立句として、支考との兩吟歌仙成。

日も眞直に晝のあたゝか　　支考

やぶ入はたゞ藪入と見せかけて　　同

（「百轉」下略）

此歌仙は梅人の「附合要錄」（天明三年刊）に、支考の七名八體の附方を敎へるために、解釋されてゐる。

五月、支考の東行を餞し、

此こゝろ推せよ花に五器一具

許六の「同門評判」に、「世を佞ふ生得ありと見えて、翁の餞別に、

此心すゐせよ花に五器一具

と申され、旅五器一具とらされたり。翁はかれが佞なる生得を見とゞけたまへども、彼はこの心をすゐする事あたはず。云々」とある。

五月半、舊庵の傍に芭蕉庵を再興した。竹人の「全傳」に、深川の庵再興の文が出てゐる。即ち

古き芭蕉庵は山氏素翁序製て、貧主が心ざしをあらはし、其角・一品等勸進の聖と成りて、風士の輩に一紙半錢を乞ふ。今年辛未の夏、杉風一人の施主と成りて、聊か枳風が志を相兼、住居は曾良、岱水が物好に任せて、三間の茅屋池に臨て立り、云々

とある。元の芭蕉庵は素堂の勸化によつて、諸風士の寄附を仰いだ。右の文に其角・一品云々とあるが、素堂の勸化簿の中には、其角・一品の名は見えない。とにかく此度は杉風一人で建てたのである。その草庵の狀態は次の「芭蕉を移す辭」に明らかである。即ち

ことし五月の半、花橘のにほひもさすがに遠からざれば、人々の契もむかしにかはらず。猶此あたりえ立さらで、舊き庵もやゝちかう、三間の茅屋つぎ〳〵しう、杉の柱いと淸げに削なし、竹の枝折戸やすらかに、よし垣あつうしわたし、南に向ひ、池に臨で、水棲（イ、楼）となす。地は富士に對して柴門景をすゝめてなゝめ也。淅江の潮三股の淀にたゝへて、月を見るたよりよろしければ、初月の夕より雲をいとひ、雨をくるしむ。名月のよそほひにとて、まづ芭蕉を移す。その葉ひろうして、琴をおほふにたれり。云々

（芭蕉翁文集）

とある。新庵は舊庵より廣かつた。位置は舊庵の傍であつた。やはり富士の佳景に接し、三股の月を眺める便があつた。池に臨んで水楼となすとする書もあるが、水楼はあやまりであらう。此池も前のよりは廣かつたらしい。湖中の「略傳」に、「芭蕉五もとを栽たり。」とある。

夕 顏 や 醉 て 顏 出 す 窓 の 穴

晋の淵明をうらやむ

窓 形 に 晝 寢 の 臺 や 簟

新庵の吟であらうか。

　　七株の萩の手本や星の秋

李由の「韻塞」に、「素堂の母七十あまり七としの秋七月七日にことぶきする。萬葉七種をもて題とす。これにつらなる者七人。此結縁にふれて、冬また七叟のよはひにならはむ。」と前書がある。七人とは嵐蘭・沾徳・曾良・杉風・其角・素堂・芭蕉である。各句皆「韻塞」に見えてゐる。「句選年考」によると、素堂の追悼集なる「通天橋」には、七株の萩の手もとや星の縁となり、其の他其角・沾徳・嵐蘭・素堂等の句も「韻塞」と異つてゐる。然るに西馬の「一翁四哲集」には、萩の千本やとあつて、杉風家藏七種の卷物に、萩の千本とあると頭註がある。

八月、許六桃隣の手引で入門する。「自讚之論上」に、

　予明の年七月又東武に赴く、此とき翁に對面せんことを喜ぶなり。橘町より深川芭蕉庵再興して入たまふ年なり。江戸着の日數經ず、桃隣手引して八月九日深川の庵をたゝき、師弟契約のはじめなり。一座に嵐蘭・桃隣・淨求法師なり。桃隣云ひけるは、翁へ發句持參あるべしといふに任せ、桃隣執筆して、四五句はじめて呈す。云々

とある。許六は以前から芭蕉に對面しようと思つて居たのであるが、芭蕉が近江に居る時は許六は江戸へ下り、許六が故山に居る時は芭蕉は江戸に赴くと云ふ工合に、いつもかけ違つて會ふ機會がなかつた。それがやつと此歳の秋會ふことが出來て、多年の望を叶へたのである。その時芭蕉に見せた句の中、「十團子も小粒になりぬあき

の風」といふのが芭蕉から激賞された。此句は二十句ばかり作り直し、二日案じ煩うて、やうやく小粒になりぬと思ひ付いたのである。許六は芭蕉に會ふ前、尙白に二度程會ひ、其角に兩席會合しただけで、餘は專ら「あら野」・「猿蓑」を熟讀し、正風の眞髓を探り得たのである。芭蕉に、「愚老が魂を集にてさぐり當る人は門弟子に許子一人なり。……愚老が本望今日達せり。」と言つて喜ばれたのである。

許六は森川氏。名百仲。字羽官。通稱五助。五老井・菊阿佛などと號した。近江彥根藩井伊侯の臣。三百石領。はじめ支考と親しく、後罵倒するやうになつた。性傲岸。取合せ手段を信じ、同門諸子を酷評した。正德五年九月二十六日歿、六十。

二、閉關と其後

閉關の說を作り、門を閉ぢて人に逢はなかつたのは、此秋のことであらう。閉關の說は、「小文庫」・「風俗文選」、蝶夢の「文集」、風德の「文集」等に出る。

人生七十を稀なりとして、身の盛なる事はわづかに二十余年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢の如し。……人來れば無用の辯あり。出ては他の家業をさまたぐるもうし。孫敬が戶を閉て、杜五郞が門を鎖さむには、友なきを友とし、貧を富りとして、五十年の頑夫自書、みづから禁戒とす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣　（小文庫）

奥の細道以後の芭蕉は體も衰へて來たやうだし、一層老を感ずるやうになつたらしい。嵯峨日記のむだ書といひ、栖去の辯と云ひ、閉關の辭と云ひ、芭蕉の述懐に寂しい影が殖えて來たやうである。「俳人芭蕉」によると、西國が訪れたけれど會はなかつたとある。

九月、洛の洒堂江戸へ下り、芭蕉庵に越年、六年二月のはじめまで止まる（「深川集」の序）。その間芭蕉・嵐蘭・許六・杉風・嵐竹等と附合つた集を、「深川集」（元祿五年刊）と云つて、七部集の一に擬せられてゐる。内に歌仙六巻、素堂亭忘年書懐の發句を収める。最初の巻は芭蕉庵興行で、芭蕉・洒堂・嵐蘭・岱水の四吟歌仙である。

深川夜遊

青くても有べきものを唐辛子　芭蕉
提ておもたき秋の新ラ鍬　洒堂
暮の月槻のこつぱかたよせて　嵐蘭
坊主がしらの先にたゝるゝ　岱水

初裏の六句目あたり、

正氣散のむ風のかるさよ　水
目のはりにまづ千石は仕て遣りて　堂

きゆるばかりに燈おさゆる　蕉
踏まよふ落花の雪の薄月夜　水

名殘ノ表六句目あたり、

我が跡からも鉦鼓うち來る　蘭
山伏を切つてかけたる關の前　蕉
鎧もたねばならぬ世の中　堂
付合は皆上戸にて呑あかし　蘭

此附句は古來有名なもので、變化の上に抑揚あり、緩急あつて、なか〳〵巧に出來てゐる。全歌仙の中すぐれたものである。

次は草庵の留守と前書して、杉風の發句・洒堂の脇であるから、杉風が芭蕉庵の留守を訪れて、洒堂以下と作つたものと見える。餘り面白い出來ではない。

次は「二日とまりし宗鑑が客。煎茶一斗、米五升、下戸は亭主の仕合なるべし。」と前書して、洒堂・許六・芭蕉・嵐蘭の四吟歌仙がある。芭蕉が洒堂を連れて、許六亭へ赴いた時の吟。

洗足に客と名の付く寒さ哉　洒堂
綿館双ぶ冬むきの里　許六

鷦鷯(ミソサザイ)階子の鎰を傳ひ來て　芭蕉
春は其まゝなゝくさも立ツ　嵐蘭

初裏一句目から、

相國寺牡丹の花のさかりにて　蘭
椀の蓋とる蕗に竹の子　蕉
西衆の若黨つるゝ草まくら　堂
むかし咄に野郎泣する　六
きぬ〲は宵の踊の箔を着て　蕉
東追手の月ぞ澄きる　蘭

名殘ノ表九句目、

乘掛の提灯しめす朝颪　蘭
汐さしかゝる星川の橋　蕉

之も有名な附合である。青くてもの卷の如く花やかではないが、なか〲巧に出來てゐる。次は芭蕉が支梁亭の口切に招かれて作つたもので、芭蕉・支梁・嵐蘭・和合・洒堂・岱水・桐溪・也竹の八吟歌仙である。

支梁亭口切

口切に堺の庭ぞなつかしき　芭蕉
　　箏見たき藪のはつ霜　支梁
山雀の笠に縫べき草もなし　嵐蘭

（下略）

此卷は變化に山がないから面白くない。併し

　酒で乞食になりやすき月　蘭

だとか、

　兒にまたるゝ釋迦堂のくれ　堂
咲初て忍ぶたよりも猿すべり　蕉

などの附合は面白い。

次は洒堂が芭蕉と淺草の嵐竹を訪れて作つたものである。洒堂・嵐竹・芭蕉・北鯤・嵐蘭の五人で、十句を附けた。あとは洛へかへつて、昌房・正秀・去來・遊刀などの連中と少しづつ附けて滿尾としたものである。

最後の一卷は曲翠・洒堂の兩吟で、松の中と前書があるから、六年の春の作であらう。之も面白いものではない。

　三日月の地は朧なり蕎麥畠

名月や門にさし來る潮がしら

芭蕉葉をはしらに懸けん庵の月

是等の句も此秋の吟であらう。三日月の句は三月や、三日月に……蕎麥の花ともある。

九月の末、女木澤桐溪を訪れて、

秋に添て行ばや末は小松川

の句がある。

十月三日、許六亭を訪れる。

けふばかり人も年よれ初時雨　はせを

野は仕付たる麥のあら土　許六

油實を賣む小粒の吟味して　洒堂

（下略）

此卷は芭蕉・許六・洒堂・岱水・嵐蘭の五吟歌仙で、「韻塞」に出てゐるが、なか〳〵よく出來てゐる。初裏ノ句目、

才はりの傍輩中に憎まれて　水

燒焦したる小棲もみ消す　翁

粽つむ笹の葉色に明わたり　六

輾磑をのぼるならの入口　堂

半分は鎧はぬ人もうち交り　蘭

船追のけて蛸の喰飽き　水

宵闇はあらぶる神の宮遷し　翁

此邊の變化工合が面白い。

又その頃許六、芭蕉庵を訪れて、寒菊の歌仙をする。「笈日記」に、

深川の草庵をとぶらひて

寒菊の隣もありやいけ大根　許六

冬さし籠る北窓の煤　翁

月もなき宵から馬をつれて來て　嵐蘭

許六の「滑稽傳」、俳諧指南に、芭蕉の脇を評して、

此句世間煤を雪とする句なり。煤の一字俳諧の讀方にして、達人の手柄といふは是なり。知らぬ人は等閑に見通し、蕉門の不可思議をしらず。第三嵐蘭にあたれり。數刻案じ申されけれども出ず。後に宿のよせ馬などいつも此樣な横小路へ牽入置候と申されければ、先師の曰、よせ馬といふもの、今まで何千度出候やら知

らず。是皆世にある三合のうちなりと申されければ、在郷より宵から馬をつれ來り、寒からせ申と、嵐蘭重ねて申されければ、眞直にそれがよき第三にて侍るなりとて、

月もなき宵から馬をつれて來て　嵐蘭

と先師作り申されたり。云々

とある。

深川の大橋が半分かゝつた頃に、

はつ雪やかけかゝりたる橋の上

の作もあつた。「陸奥千鳥」の序に、「深川の草扉を閉ぢ、ひそかに門を覗ては、初雪や缺けかゝりたる橋の上などひとりごちて、閑に送るもたのし。云々」とある。

葱白くあらひたてたるさむさ哉

納豆きる音しばし待て鉢叩

鉢叩きは餘程氣に入つたものと見える。

十二月二十日、彫棠・晋子等と歌仙する。

壬申十二月二十日卽興

うちよりて花入探れ梅椿　芭蕉

降こむまゝのはつ雪の宿　彫棠
目にたゝぬつまり肴を引かへて　晋子
（「句兄弟」下略）

素堂亭忘年會に招かれ、

節季候

節季候を雀のわらふ出立かな

各探題、嵐蘭は餅舂、曾良は衣配、洒堂は佛名、素堂は歳暮の句になる。餘興として、

としわすれ盃に桃の花書ン　洒堂
膝にのせたる琵琶のこがらし　素堂
宵の月よく寝る客に宿かして　芭蕉

の附合があつた。

元祿六年癸酉、芭蕉五十歳、江戸の芭蕉庵で春を迎へ、

年々や猿にきせたる猿の面

歳旦吟であらう。無季の句として論のあつた句である。

正月末、嵐蘭の一子に嵐戎といふ號を與へる。之は悼嵐蘭詞に、

ことしむ月の末ばかりに、稚子が手を取り、予草庵に來りて、かれに號得さすべきよしを乞ぬ。五䓘五才の眼ざしうるはしければ、䓘の一字を缺て、嵐䓘と名づく。その悦べる色、今日のあたりをさらず。云々

とある。

二月、是橘が剃髮、醫門に入るを祝して、

露沾公にて

はつうまに狐のそりし頭哉

西行の庵もあらむ花の庭

三月、僧專吟の伊勢熊野へ詣るを餞して、

鶴の毛の黑き衣や花の雲

蝶夢の「文集」に、僧專吟に餞別の辭といふ一文がある。

富花月

草庵に桃さくらあり

門人に基角嵐雪あり

兩の手に桃と櫻や草の餅

之は兀峯の「桃の實」(元祿六年刊)に出て居る。此句を立句として、芭蕉・其角・嵐雪の三吟歌仙がある。卽ち

翁に馴し蝶鳥の兒　嵐雪

野屋敷の火繩も許すかげろふに　其角

（「一葉集」下略）

此歌仙は、「俳諧未來記」の中にあつて、それは安永三年、雪中庵門の周竹の上木によつて、知られたものである。周竹の序によると、或貴家の文庫に、芭蕉・其角・嵐雪の三吟が傳はつてゐた。其書は未來記と題し、序は仙化、文と歌仙は其角の自筆であつた。なほ又その附言に云、「未來記の文はひめ置かるゝ封印あれば、是を寫す事あたはず。故省之。此集前後二卷、元祿の編なり。既板に行はるべき草稿のまゝにして、下卷には歌仙六卷、其角・嵐雪の二師をはじめ、露沾公・杉風・仙化・沾德・曾良・百里など興行。其外諸國門葉の發句あり。今是にもらす。云々」とある。樋口氏は此卷を疑つてゐるが、芭蕉の附句が猿蓑以後一變して、輕みに出かゝつてゐるやうでもあり、殊に「夏寒き闕の孫六ぬきはなし」（嵐雪）へ、「たしなき風の石菖へ來る」（芭蕉）の附句は名高いもので、から輕くいなして、前句のはづみを拔いて來る手際は、芭蕉ならでは叶はぬやうな氣もするから、之は元祿の歌仙であらうと考へる。因に、「俳諧未來記」は、「俳諧文庫」の「蓼太全集」中に收められる。

五月、許六の木曾路を經て、舊里にかへるを送る。「韻塞」に、

おなじく五月六日の頃、旅だたむと申つかはしけるに驚き、例の次郎兵衛を使として、後の旅は我も木曾路を經て、眞一文字に五老井と志す。彦城の諸子にやうやく對面せむ事を常〻にねがふ。かならず人に沙汰

する事なかれと、こまやかに文して、色紙・短尺・繪讃の類もたせ給はる。云々

とある。例の次郎兵衞とあるから、芭蕉庵に居て、何時も芭蕉の用をたして居たものと見える。其餞別吟の詞書に、

木曾路を經て、舊里にかへる人は、森川氏許六と云ふ。古へより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に露霜をいとひ、己れが心をせめて、物の實を知る事をよろこべり。今仕官おほやけのためには、長劍を腰にはさみ、乘かけの後に鑓をもたせ、歩行若黨の黑き羽織のもすそは、風にひるがへりたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅　はせを

うき人の旅にも習へ木曾の蠅　同

兩句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後の形見にふたつながらならべ侍る。（韻塞）

とある。許六は江州彥根の井伊侯の家臣で、此度の出府は主君の供であらうから、仕官・公のためには長劍をはさみ、……と云つたのである。「續猿蓑」には、「旅人の心にも似よ椎の花」とある。「風俗文選」に、柴門の辭といふ芭蕉の餞別文が出てをり、「韻塞」には、許六離別詞となつてゐる。內容は同一である。之は四月の末に書いたものと見える。「柴門の辭」に、「晝はとつて予が師とし、風雅は敎へて予が弟子となす。云々」とある。此歸鄉には杉風・桃隣・百里等の餞別句もあつた。

一聲の江に横たふやほとゝぎす
時鳥聲横たふや水の上

此夏の吟である。「篇突」によると、此句は芭蕉が取捨に迷うて、沾徳に判を乞ひ、水の上の句に極めたのであるが、一聲の方がすぐれて居る。察するに、江に横たふの方が先へ出來たのだらう。一聲の江に横たふや迄は平に聞えて口に障らないが、ほとゝぎすといふ所舌頭に當り、はね返るやうな感じがする。それだから時鳥といふ下五を上に引上げて、聲横たふやと作つたのだらうと喧しく論じてゐる。此事は「笈日記」の、芭蕉が荊口に與へた手紙の中にも出て居て、山口素堂や原安適など詩歌の好者もやつて來て、水上の聲の方がよいことに定つて濟んでしまつたとある。自分の句を門人に批判させて、其優劣を定める所などば、道の上に師弟の別のない事を示して、自由討究を尊んだ態度が見えてうれしい。

七月七日、兩星を弔ふとあつて、七夕小町の歌に題し、

高水に星も旅寐や岩の上

といふ句を作つてゐる。これは「小文庫」に、

弔初秋七日兩星

元祿六文月七日の夜、風雲天にみち、白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭をながし、一葉梶をふきをるけしき、二星も屋形をうしなふべし。今宵なほ只に過さむも殘おほしと、一燈かゝげ添る折ふし、遍照小町が

歌を吟ずる人あり。是によつて此の二首を探て、兩星の心をなぐさめむとす。

といふ前文を載せてゐる。

五本松に船を浮べて、月を賞したのも此秋である。「續猿蓑」に、

深川の末、五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友

とある。葛飾の素堂を思つたのだらう。

八月二十七日、嵐蘭病死。鎌倉のかへりに病を得たのである。芭蕉の「悼嵐蘭詞」が、其角の「末若葉」に出て居る。嵐蘭は其角・嵐雪に次ぐ芭蕉の古い門人で、芭蕉は十九年の交情淺からざるものであつた。三年ほど前に官を辭し、七十の母と七歳の子を殘し、五十に足らざる年で死んだ。

その追悼文にも、「父の如く、子の如く、手の如く、足の如く、年頃なれむつびたる俤の、愁の袂にむすぼれて、枕もうきぬばかりなり、云々」とある。

秋風に折れてかなしき桑の枝

芭蕉の哀愁もさこそと思はれる。

初七墓にまふで

みしやその七日は墓のみかの月

初七日は九月三日であつたからである。其角は尙同書に、「此悼の詞は、翁存生に病心をなやまし、かく書つゞりけれどもとて、懷中し來給ひて、追善興行の事ども迄、相談に及びし時、予が机のはしに殘されたるなり。云々」とある。

八月二十八日、其角の父東順歿。七十二歲。芭蕉の東順傳がある。「句兄弟」・「錦繡緞」・「風俗文選」等に出てゐる。

　入月の跡は机の四隅哉

八丁堀にて、

　菊の花咲くや石屋の石の間

十月九日、素堂菊園の遊に招かれる。

　菊の香や庭に切れたる履の底

之には前書がある。之によると重陽の頃は花がまだめぐみもしないから、展重陽の例にならつて、秋菊を詠じたのであると。

洒堂を戒めたのも此頃である。「市の庵」に、

　贈洒堂

　湖水の磯を這出たる田螺一匹、

蘆間の蟹のはさみをおそれよ。
牛にも馬にも踏るゝ事なかれ。

難波津や田螺の蓋も冬ごもり

とある。此句は二月に、洒堂が江戸を出立する際の、送別の句だと思ふ人もあるが、さうではなからう。

十月二十日、深川にて即興

振賣の雁あはれなりえびす講

寒菊や粉糠のかゝる臼の端

「炭俵」に出て居るが、後句は「初便」に、(「寒菊随筆」にも)、はせを庵にてと前書し

寒菊や小糠のかゝる臼の端　芭蕉

提て賣行はした大根　野坡

夏冬は取置橋を懸初て　同

（下略）

と、三十二句だけで終つて居る。之は芭蕉の意に適せぬ句が多かつたから、満尾に至らずして止めたのであると、野坡の奥書に見える。

武士の大根苦(イ辛)きはなしかな

竹人の「全傳」に、「玄虎子の旅館にて卽興也。大根に一折ありと云。」とある。「句集」には、「玄虎子が旅館にて、菜根を喫して、終日丈夫に談話す。」と前書がある。玄虎は藤堂氏。伊賀上野の人。藤堂家の重臣であらう。

有難やいたゞいて踏む橋の霜

深川新大橋が初めてかゝつた時の吟である、前に、「初雪やかけかゝりたる橋の上」と云ふ句がある。之は架設中の吟であつたが、今年になつて出來上つたのである。芭蕉・岱水（杉風十三句目入）の歌仙一折ある。

生ながら一に氷る海鼠かな　翁

解けば勾ふ寒菊の菰　岱水

代官の假屋に冬の月を見て　翁

（「一葉集」下略）

歳暮に、

有明も三十日にちかし餅の音

の句を作る。

三、炭俵に就いて

炭俵は野坡・孤屋・利牛の撰。井筒屋庄兵衞・本屋藤助の出版である。素龍の序によると、元祿六年冬、この二三子芭蕉庵に會し、火桶に消炭を起しつゝ、俳談の折、芭蕉の金屏の松の古さよ冬籠と云つた句に深く感じ、

撰集の議も進み、春の日ののつと出でしより、秋の月に頭を傾けつゝ、やゝ吟終り、篇成りて、竟に天地の二卷に分ち、炭俵は俳なりけりと云つて題號とした。即ち本書は元祿七年閏五月に成り、同年六月刊行されたのである。勿論編集に就いては、芭蕉の指導を受けたもので、素龍の序にも、「ひと日芭蕉旅行の首途に、やつがれが手を携へて、再會の期を契り、かつ此等の集の事に及で……此集をえらぶ媒と成にたり。云々」とあるから明かな事である。

内容は歌仙七卷（芭蕉・野坡兩吟歌仙一。嵐雪・利牛・野坡三吟歌仙一。孤屋・芭蕉・岱水・利牛四吟歌仙一。其角・孤屋兩吟歌仙 四句不足 一。桃隣・野坡・利牛・歌仙一。芭蕉・野坡・孤屋・利牛四吟歌仙一。杉風・孤屋・芭蕉・子珊・桃隣・利牛・岱水・野坡 十句目より沾圃、石菊入。十四句目より利合、依々入。二十二句目曾良入。二十五句目より沾圃入。 等歌仙一）、百韻一卷（利牛・野坡・孤屋三吟）發句四季二百五十八句を收めてゐる。

撰者野坡は志田氏。通稱彌助。越前福井の産。淺生庵といふ。江戸に出て、越後屋の手代をつとめる。芭蕉歿後大阪に移住し、粟津の無名庵を大坂高津野に移し、高津ノ翁と稱した。後西國に旅行し、元文五年一月日向で歿した。七十八。利牛は池田氏。通稱十右衛門。蜂須賀侯の足輕であつたが、後越後屋の手代となる。舍羅の「荒小田」に「一季半季の奉公のいかに〳〵いそがしき世にや。」と前書して句がある。孤屋は小泉氏。之も越後屋の手代ださうである。許六の同門評判に、「野坡・利牛・孤屋、その中に野坡すぐれたり。舊染のけがれを炭俵にあらため、流行の輕き一筋を得たり。しかれども元來三人共に、越後屋が手代なれば、胸中せまきものどもにて、

たとへば淺草川に舟逍遙する人の如し。陸地より見る人、起臥自由にたのしめるとおもへども、舟より外は動く事がたし。云々」とある。風之の「耳底記」によると、芭蕉の俳諧は和歌の俳諧であるとか、或は芭蕉の教に三才の傳があるなどと云つて、淺生庵の說を示してゐるが、芭蕉を誣ふるの甚しき說である。許六の言ふやうに、胸中狹くして、我得ざる方少しも見えず底のものらしい。

芭蕉晩年の風は輕みであつた。去來が猿蓑後又一つの新風を起さると言つたのは卽ち此輕みの風であつた。但し此輕みは「曠野」時代にすでに表れてゐたといふ。元祿五年の深川集に、

乘かけの提灯しめす朝颪　嵐蘭

汐さしかゝる星川の橋　芭蕉

とある如きは此調であつて、「愚老が俳諧四五年の後は、皆かやうに成と申されけり。」(滑稽傳)と芭蕉も豫言してゐた。芭蕉が花實完備の猿蓑からわづか三年後にして、かゝる風に變化したことは、特にかるみといふ新風をねらつたわけではなく、芭蕉の人格の自然な脫化であつた。輕みは趣味として眞似たとて、眞相を捉へることは出來ない。輕みを皮相的に眞似れば、卑俗な調に墜ちて了ふ。梅通が天保に炭俵を覘ふといへども、炭俵に等しからずと言つたのは、當然な事である。輕みは人格の脫落である。人生の辛酸をなめた者の、ほどけた老熟した氣分である。それを芭蕉の極意として眞似た所が、作者が實際その域に達して居なければ、猿の人眞似になつてしまふ。五明の言つたやうに、炭俵は草の調で、最も危い所であるから、うつかり眞似てはならない。野坡等は

越後屋の手代であるから、世事になれ、輕い淡い人情を好んだのであらうが、それが性格的でないと、一句はただ俗な世情となつて、卑しくなる。

芭蕉は輕みを主張した。元祿七年九月二十三日、意專に與へた手紙の中にも、「惣體かるみあらはれ大悦不少候。云々」とか、或は同年五月の上方旅行前、子珊の別座敷に於て俳談の折、「今思ふ體は淺き砂川を見るが如く、句の形は心ともに輕きなり。其所に至りて意味ありと侍る。何れも感じ入りて、及ばずも此流を慕ふ。云々」などとあつて、元祿七年の俳壇は此輕みによつて最後の花を咲かせたのである。卽ち同年九月十日、芭蕉が杉風に與へた手紙の中に、「上方筋別座鋪・炭俵にて色めきわたり候。云々」とあるのでも、此風の流行が知れる。「別座鋪」は「炭俵」の調と變らない。「續猿蓑」も「炭俵」に附けて論ずべきである。「炭俵」・「別座敷」・「續猿蓑」と移つて行くけれど、「炭俵」のかるみの延長であつて、同じく芭蕉末期の變風を示すものである。許六は自讃之論に、「今世間の人、後猿蓑の俳諧はかるみ有て面白き事也とて、筋なき無用の句を出せり。別座敷・炭俵の風熟吟せざる人、いかで後猿の風に飛入事を得んや。云々」と、別座敷・炭俵があつての、續猿蓑なる事を主張して居る。吏登も續猿蓑は炭俵にあるなり云々と論じて居る。

炭俵の讃嘆は非常なものであつた。恐らく之は芭蕉最後の新風であつたからであらう。支考は始めて俳諧の甘味を去り、月花のねばりを洗ひつくすなどと言ひ、雪中庵吏登は「七部捜」に、續猿蓑は炭俵にあるなり。全體は三度程の流行ぢやと先師などの云はれた。たゞうつりかはりを見て置いて、

炭俵がよい手本なり。先師も此歌仙が生涯の出來ぢやといはれたげな。此炭俵を曲尺にして置いて、時々の風體はどのやうにもやるがよきなり。云々

と言うてゐる。之は勿論嵐雪の說によつたものだらうが、炭俵を手本にせよといふことは注意すべきである。風之は「俳諧耳底記」に、淺生庵（野坡）の說を示して、

初心の人は先色々の書物吟味をして、紛らはしき事に骨折んよりは、先炭俵集を手本として、翁の風流を學ぶこそめでたかるべし。炭俵の風流は翁の極意の所にて、すなほに愚かに安き所なり。たとへば門徒宗の安心決定を悟りたるに似たるべし。……問云、翁の風流は炭俵に極りたると存候に、此頃俳諧文章を書きたる新板に、翁の風體も炭俵は餘り輕過ぎて初心のためにはあしきと書きたり。……答云、其書を著したるものは、俳諧の十段階子を漸く五六段上りて、其上を知らぬと聞えたり。例へば佛典にていはゞ、炭俵は法華經、猿蓑は涅槃經なり。蕉門の宗とする所なり。輕過ぎたりと云は己が風雅の重くして、輕みを知らざる 樣なり何藝にても下手は重く、上手はかろし。重き事は眞似よく、輕きは似せられぬものなり。云々

と論じてゐる。曲齋は「婆心錄」に、

此集の一體たるや、前句の案方、趣向の取方、只半生にして力をつくし、句作はわざと撰集の粧を用ず。只無味の中の味を專として、淡しき事たぐふべき集なし。……昔より此集を徒に眞似し人の卷を見るに、たゞ田舍茶に酢をかけたる樣にて、其色の青きこそ似たれ。風味に於ては似るべくもあらず。見ずや翁歿後淺生

庵の著たる諸集に、此集の鹽梅再なし。……今世の人には祖翁一世の變化だに學ばず。只此一集の無味を甘んじ違て、俳諧はこゝに止る物と覺けるが、既に百年此一體にうはべのみ似たる物に固して動かざるは、當風味を得たるにあらず、造化にうつる事の不自在なればなり。云々

此論耳を傾くべきである。天保以下の俗調は、實に芭蕉の俳諧をこゝに限り、うはべのみ似たるものに固執して動かざる結果であつた。その罪は野坡の說にもある。

炭俵の發句作者は、野坡（二十五句）、利牛（十七句）、孤屋（九句）、芭蕉（十四句）、杉風（五句）、去來（七句）、支考・其角（十四句）、許六・丈草・曲翠・正秀・智月・嵐雪（七句）、北枝・洒堂・桃隣・湖春等重なるものであつた。

立春

蓬萊に聞ばや伊勢の初便　芭蕉
春や祝ふ丹波の鹿も歸るとて　去來
長松が親の名で來る御慶かな　野坡
うめ咲や臼の挽木のよき曲り　曲翠
赤味噌の口を明けり梅の花　游刀
大原やてふの出て舞朧月　丈草

五人扶持とりてしだるゝ柳哉　野坡
傘に押分け見たる柳哉　芭蕉
花守や白きかしらを突あはせ　去來
柿の袈裟ゆすり直すや花の中　北枝
食の時皆あつまるや山ざくら　野坡
かつらぎの神はいづれぞ夜の雛　其角

此集いまだ半なる頃、孤屋旅立事ありけるに、品川迄見送りて

雲霞どこ迄行も同じ事　野坡
鹽魚の裏干す日也衣がへ　嵐雪
聞までは二階にねたり子規　桃隣
ほとゝぎす鳴〳〵風が雨になる　利牛
五月雨や傘につけたる小人形　其角
文もなく口上もなし粽五把　嵐雪
枯柴に晝顔あつし足の豆　斜嶺
すゞしさや浮洲の上のざこくらべ　去來

名月や椽とりまはす黍の虚　同

星合にもえたつ紅や蚊屋の縁　孤屋

悔いふ人のとぎれやきり〲す　丈草

こほろぎや箸で追やる膳の上　孤屋

秋風や茄子の數のあらはるゝ　木白

凩や沖より寒き山のきれ　其角

寒さを下の五文字にすゑて

人聲の夜半を過る寒さ哉　野坡

雪の日や薄やうくもる寫し物　猿雖

はつ雪や先馬屋から消そむる　許六

海山の鳥鳴立る雪吹かな　乙州

禪門の革足袋おろす十夜哉　許六

芭蕉よりの文に、くれの事いかゞなど有し、其かへりごとに

爪取つて心やさしや年ごもり　素龍

炭俵の發句は芭蕉・去來・丈草・其角・嵐雪などには佳句もあるやうだが、一體淺く俗で引立たない。肝心の

野坡が發句になると、その卑俗な風が特に目立つていやになる。利牛・孤屋も俗である。選者は連句は旨いけれど、發句には見劣りする。撰者は返つて輕い淡い寂のある句ばかりを選んだ方がよかつたかと思ふ。猿蓑の發句などとは比べものにならない程渾一性に缺けてゐる。

連句は最初の梅が香にの巻がよく出來てゐる。昔から人口に膾炙した卷だけあつて、面白く卷けて居る。たゞ難をいふと、名殘ノ裏の五句目・六句目が人事になつて、突然糸が切れたやうな感じがする。なんだかまだ後に句が續きさうに思はれる。併し初裏の三句目あたり、

奈良通ひ同じつらなる細基手　　野坡
今年は雨のふらぬ六月　　芭蕉
預けたる味噌取に遣る向河岸　　坡
ひたといひ出すお袋の事　　蕉
終宵尼の持病を押へける　　坡
こんにやくばかり殘る名月　　蕉
初雁に乘懸下地敷て見る　　坡
露を相手に居合ひとぬき　　蕉
町衆のづらりと醉て花の蔭　　坡

門で押るゝ壬生の念佛　蕉

名殘ノ表の三句目あたり

こちにもいれどから臼をかす　坡
方〱に十夜の内のかねの音　蕉
桐の木高く月冴るなり　坡
門しめてだまつて寢たる面白さ　蕉
ひろうた金で表かへする　同

此邊の附方の妙味、歩調の抑揚を味ひたい。實によく出來てゐると思ふ。兼好もの卷は嵐雪と野坡等の氣分合はず。野坡のさばけた風と、嵐雪の細い弱々した風と調子が合はない。それでも初裏の末から名殘ノ表の二三句目にかけて、面白い歩調のはづみを見せては居るが、嵐雪の戀の句で失敗して了つた。空豆の花の卷は卷中秀逸である。初表の一句目・二句目のおだやかな變化もいゝし、名殘の表三句目あたり、

泣事のひそかに出來し淺茅生に　芭蕉
置わすれたるかねを尋ねる　孤屋
着の儘にすくんで寢れば汗をかき　利牛
客を送りて提る燭臺　岱水

今の間に雪の厚さを指て見る　屋

年貢濟んだとほめられにけり　蕉

息災に祖父の白髮のめでたさよ　水

此邊の變化の抑揚頓坐を注意したい。子は裸の百韻は面白くない。さら〳〵と附けてあるせいか、變化の上に緩急もなく、同じ樣な情趣の句がつゞく樣な感じがする。百韻は場面が長いから、變化に緩急がないと、だら〳〵して見える。秋の空の歌仙は、炭俵のかるみ調にふさはしくない。孤屋も其角の技巧化した人事句には、さだめし困つた事であらう。初裏の二句目あたり、

坊主の着たる蓑はをかしき　其角

足輕の子守してゐる八つ下り　孤屋

息ふきかへす鶴亂の針　角

田の畔に早苗把て捨て置　屋

道者のはさむ編笠の節　角

行燈の引出しさがすはした錢　屋

顏に物着てうたゝ寢の月　角

輕みどころではなく、其角一流の巧みな重たい人事句が續て、如何にも堂々とひゞいて來る。初裏の一句目・名

殘の表二句目のあたり、

むかしの子ありしのばせて置　角
いさ心あとなき金のつかひ道　同

これなどは共角でなければ云へない句である。相當に抑揚があつて惡い出來ではない。道くだりの卷は感心しない。此卷はあまり俗事俗情の句多く、一體に調子がひくゝ、緩急がはつきりしない。振賣の卷は集中の秀逸である。かるみの風もこの位だと品があつてよい。矢張芭蕉が入らないと、うまく出來ないものか。初裏の一句目あたり、

網のもの近づき舟に聲かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊に軍の大事也　芭蕉
泡氣の雪に雜談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹消して　屋
肩癖にはる湯屋の膏藥　牛
上おきの干菜きざむもうはの空　坡
馬に出ぬ日は內で戀する　蕉

粕買の七つ下りを音づれて　牛

抑揚波瀾が實によく出來て居る。

新畠の糞も落ちつく雪の上　屋

砂にぬくみのうつる青草　坡

吹とられたる笠とりに行　牛

平坦な叙景句に移つて行つて、それが名殘の表八句目あたりから、歩調が急になつて、よく出來てゐる。

又沙汰なしにむすめ産（ヨロコブ）　坡

どたくさと大晦日も四ツの鐘　屋

無筆のたのむ狀のあとさき　牛

中よくて傍輩合の借いらひ　坡

壁をたゝきて寢せぬ夕月　蕉

凪（ナウ）止みて秋の鷗の尻さがり　牛

名殘ノ裏へ行つて、又歩調の下つて行く所を注意されたい。最後の雪の松の卷は餘り感服しない。變化は相應についてゐるけれど、初裏の二三句目あたり、名殘ノ表六句目あたりに、同じやうな調子の句が續いて來て、大體の氣分の上に抑揚が乏しい。

炭俵の註釋には、宜麥の「續繪歌仙」の內、曰人（エツ）の「炭俵註」、梅室の「梅林茶談」の內、碌々翁の「炭俵註解」等がある。其他は七部集の註本の中に入つてゐる。詳しくは後節俳諧七部集の條下參照。

第三節 西國行脚の途

一、最後の江戸住

元祿七年甲戌、芭蕉五十一歲。芭蕉は最後の春を江戸で迎へたのである。路通の「行狀記」に、「老もなかばの春を迎へ、雜煮の餅むまく覺え、淺漬も齒にしみわたるなれば、年の名殘も近づくにやと、門人正秀がもとへ、文の端に書て送給ふ。云々」とある。餘程衰弱を感じて來たものと見える。虫が知らしたものか、年の名殘近づくにやなどと、心細い事を言うてゐる。

蓬萊に聞かばや伊勢の初便

「炭俵」に立春と前書がある。「去來抄」に、

深川よりの文に、此句さまゞゝの評あり。汝いかゞ聞侍るやとなり。去來曰、都又は古郷の便ともあらず。伊勢と侍るは、元日の式の今やうならぬに、神代を思ひ出で、たより聞ばやと、道祖神のはや胸中をさはがし給ふかとこそ承り侍れと申。

とある。春早、例の旅行癖が動いたものと見える。

梅が香にのつと日の出る山路哉

「炭俵」に野坡との兩吟がある。

はれ物に柳のさはるしなへかな

柳のさはる、さはる柳に就いて種々議論があつた。「小文庫」に、此句をあげ、「此句浪化子のありそ海に、さはる柳のしなへかなと去來が書誤りて、入集し侍るとて、常に此事をくやみぬるまゝ、このつゐでとなしぬ。」とある。「去來抄」に、

支考曰、さはる柳なり。いかで改め侍るや。去來曰、さはる柳とはいかに。支考曰、柳のしなひは腫物にさはる如しと比喩せるものなり。去來曰、しからず。柳の直にさはりたるなり。さはる柳といへば、兩様に聞え侍る故、重て予が誤をたゞす。支考曰、吾子の說は行過たり。只障る事と聞くべし。丈草曰、詞のつゞきはしらず。趣向は支考がいへる如くならむ。去來曰、流石の兩子、こゝを聞給はざる口惜し。比喩にしては誰々もいはむ。直にさはるとはいかでか及ぶべき。格位も又各別也と論ず。許六曰、先師の短尺にさはる柳とあり。其上柳のさはるとは首きれ也。去來曰、首切の事は予が聞所に異也。今論に及ばず。先師の之に柳のさはると慥にあり。許六曰、先師あとより直し給ふ句多し。眞蹟も證としがたしと也。……去來曰、いかなる故にやありけむ。翁此句は汝に渡し置。かならず人に沙汰すべからずと、江府より書贈り

給ふ。其後大切の柳一本、去來にわたし置けるとは、支考にも語り給ふ。云々

とある。之は支考說のやうに取るのが普通であらう。去來のやうに實際さはつたとすると面白味は索然とする。尤もどつちにしても俗な嫌味な句で、去來が頑張る程の句ではない。芭蕉が柳一本を去來に渡したといふ話は、芭蕉自身未完成な句と思つたからであらうか。

八　九　間　空　で　雨　ふ　る　柳　哉

「續猿蓑」に、芭蕉・沾圃・馬莧・里圃の歌仙がある。「花はさくら」に、「春興、春の雨いと靜に降て、やがて晴たる頃、近きあたりなる柳見に行けるに、春光きよらかなる中にも、したゝりはいまだおやみなければ」と前書がある。

傘　に　押　分　見　た　る　柳　哉

「炭俵」に出る。之を立句として芭蕉・濁子・涼葉・野坡・利牛・宗波（三十一句目岱水入る）の歌仙がある。

わ　か　草　青　む　塀　の　築　ざ　し　　濁　子
朧　月　い　ま　だ　火　燵　に　す　く　み　居　て　　涼　葉
（「一葉集」下略）

靑　柳　の　泥　に　し　だ　る　ゝ　汐　干　か　な
春　雨　や　蜂　の　巢　つ　た　ふ　屋　根　の　漏

二句「炭俵」に出る。

花見にとさす船遲し柳原

「句集」、「玄虎子が深川の旅舍を訪。」とある。竹人の「全傳」に、「玄虎子の旅館にて卽興也。……花見に六句ありといふ。」とある。上野へ花見に行き、

四ツ五器の揃はぬ花見心かな

「炭俵」に、「うへ野の花見にまかり侍しに、人々幕打さわぎ、ものゝ音にうたの聲、さまぐ\なりけるかたはらの松かげをたのみて」と前書がある。

木がくれて茶摘も聞くや郭公

烏賊賣の聲まぎらはし杜宇

桃隣の新宅の自畫讃に、

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

牡丹に杜鵑の畫の讃である。桃隣は天野氏。藤太夫。伊賀上野の人。太白堂と號。芭蕉の甥。元祿四年芭蕉に伴はれて江戸へ下る。點者を業とし金持になる。享保四年十二月歿。八十二。淺草新寺町光明寺に葬る。

卯の花やくらき柳の及ごし

「炭俵」に出る。「別座鋪」に、「素龍曰、卯の花やくらき柳の及ごしの佳句は、柳暗花明なりといへる碧巖に似

かよひ侍るを、夏の小雨をいそぐ澤蟹と、卒爾に脇をさへづる折も有つゝ、いつか十日も泊り侍ける。」とある。

紫陽花や藪を小庭の別座敷

「別座鋪」の序に、「麻の生平のひとへに、衣打かけ、身がるく成行ほど、翁ちかく旅行思ひ立給へば、別屋に伴ひ、春は歸庵の事を打なげきて、云々」とある。子珊亭の句である。之を立句として、芭蕉・子珊・杉風・桃隣・八桑の五吟歌仙成る。即ち

よき雨間に作る茶俵　子珊
朔日に鯛の子賣の聲聞て　杉風
（下略）

とある。本集は輕みの調で炭俵と並稱される。

二、伊賀の無名庵入り

五月いよ〳〵芭蕉は深川の草庵を立出でて、伊賀の舊里へ向つた。「枯尾花」に、

四度むすびつる深川の庵を又立出るとて、鶯や笋藪に老を鳴、人も泣るゝわかれなりしが。心待するかた〴〵とにかくかしがましとて、再び伊賀の古郷に庵をかまへ（三ケ月の記有）爰にてしばしの閑素をうかゞひ給ふに、心あらん人にみせばやと津の國なる人にまねかれて、爰にも冬籠する便ありとて思ひ立給ふも、道祖神のすすめなるべし。云々

とある。出立は戊五月八日である。「行狀記」に、「五月十一日、江府そこ〳〵にいとま乞して、云々」とあるが、「陸奥衛」によると、「然れども老いたるこのかみを、心もとなくや思はれけん、故郷ゆかしく又戊五月八日、此度は西國にわたり、長崎にしばし足を止めて、唐土船の往來を見つ、聞馴れぬ人の詞も聞んなどと、遠き末を誓ひ、首途せられけるを、各々品川まで送り出、二時斗の餘波、別るゝ時は互にうなづきて、聲をあげぬばかりなりけり。窶籠の内より、離別とて扇を見れば、麥の穗を力につかむ別れかな。云々」とあつて、五月八日の方が正しいやうである。「有磯海」には、「人々川崎まで送りて餞別の句を云、其かへしと前書して、麥の穗を便につかむ別かな　芭蕉」とある。「行狀記」には、「弟子共追々にかけつけて、品川の驛にしたひなく。」とあつて「麥の穗を便につかむ云々」とある。

「續猿蓑」によると、それは利牛・野坡・岱水であるが、句は力につかむの方が實情のやうである。なほ「行狀記」によると、乙州が京橋の宿を訪れて、一緒に行かうと誘つたけれど、乙州に一日二日障りがあるので止めになり、名殘惜しげに立れたとある。山店の餞別吟がある。それを立句として芭蕉と兩吟歌仙成る。

新麥はわざとすゝめぬ首途哉　　山店
また相蚊帳の空はるかなり　　翁
馬時の過てさびしき牧の野に　　同
(「小文庫」下略)

其他淨求法師も、指を折り、文字を數へて、餞別句を作つたり、素龍齋全故の「贈芭叟餞別辭」もあつた。（「別座鋪」）。

箱根の關を越えて、

　目 に か ゝ る 時 や 殊 更 五 月 富 士

と名殘を惜しみ、道芝に休ひて、

　ど む み り と あ ふ ち や 雨 の 花 曇

五月十一日附の杉風宛の芭蕉の手紙に（此五月は閏五月であらう。それでなければ本文の日附が理窟に合はない。それでも十一日とは少し變である。芭蕉最後の旅行を告げたものであることは慥かだが、日附の點がよく分らない）、

　拙者道中島田あたりまでは、つかへなども折々音づれ候得共、次第に達者に成候て、道々二三里、日により五里ばかりも養生の爲歩行、足場能所は馬にも乘旁致候て、無恙上着致候、雨天大かた小雨にあひ候て、さのみあつき程の事は無御座候。云々

とある。大方は駕籠に乘つて行つたものらしい。道芝に憩ひても、つかれを感じたからで、此度の旅行は出立の時から、餘程體が衰弱してゐたやうである。

十五日、島田に三日泊る。「行狀記」に、

島田は塚本氏などいひて、久敷音信馴し方あればとて、おぼつかなき五月の雲をはらす。

　五　月　雨　や　雲　吹　落　す　大　井　川

とある。「笈日記」に、「十八日、嶋田の驛に入りて、如舟亭に足を休め侍る。此亭はかつて阿叟の往來の勞を助け侍る故ありて、吟草もあまた侍りける中に」額とあつて、

五月雨の雨風しきりにおちて、大井川水出侍りけるにとゞめられて、しまだに滯留す。
女舟・如竹などいふ人のもとにあそびて、

　ち　さ　は　ま　だ　青　葉　な　が　ら　に　な　す　び　汁　　　は　せ　を

　さ　み　だ　れ　の　雲　吹　お　と　せ　大　井　川

とある。如舟は島田氏、如竹は杉本氏か。如舟亭は、芭蕉が東海道往來の際、しば〳〵泊つた所で、さみだれの句は、空吹落せとか、雲吹おこせなどと傳へられる。萓の句も、青葉ながらやとする書もある。杉風宛、芭蕉の手紙に、

　十五日、島田へ着候て、一夜留候處、其夜大雨風水出候て、三日渡り留候て、十九日立申候。いまだ高水にて、馬のしりがひやう〳〵かくれぬほどの事に候得共、島田の宿は懇意の者共故、馬川越隨分念入、一手ぎは高水をこさするを馳走に致候。島田より一通書狀賴遣候。相屆候哉。云々

とある。

名護屋に入り、荷兮亭に止る。

世を旅に代かく小田の行戻り

「陸奥衛」に、「行き〳〵て、尾州荷兮が宅に汗を入れ、世を旅に代かく小田の行戻りと、日來の境界を言ひ捨て云々」とある。

野水方に赴く。杉風宛手紙に、

野水隱居所支度の折ふし

涼しさを飛騨の工がさしづかな

すゞしさの指圖にみゆる住居哉

句作二色の内、越人相談候て、住居の方をとり申候。飛騨のたくみまさり可申候。云々

とある。「俳諧問答」に、去來が荷兮を痛罵する條下に、荷兮は野水・凡兆と共に芭蕉に遠ざかつたが、芭蕉その恨をすてゝ、遷化の年東武より都へ赴く道すがら、名古屋に至りて、荷兮が柴扉を叩き、一二日親話した。荷兮又芭蕉を崇めること舊日のやうであると。白雄の「俳諧名家錄」にも、荷兮・越人・野水・路通・木因をあげ、此五士は後翁の勘氣を受けたる門人也とあるが、荷兮が芭蕉の怒にふれたことは詳かではない。正直な去來の言だから全く僞りだとは云へまいが、最後の旅に立寄つて居る所を見ると、芭蕉も過去を忘れてしまつたものか。野水は勝峯氏の說によると、「茶道に凝つて俳諧に遠ざかる。」(蕉門分布史觀) とあるから、之も生前芭蕉の怒にふ

れたわけでもないらしい。現にかうして立寄つて親しく句を作つて居る。越人もさうである。路通は芭蕉に救はれて置き乍ら、還俗したことが、芭蕉の怒にふれたやうであるが(三等文)、芭蕉の死ぬ前に實永阿闍梨を仲に入れて、その罪を赦して貰つた。凡兆の遠ざかつたのは、凡兆が刑餘の人であるから、自分で身を退いたのであらう。木因のことは分らない。勘氣問題も他からの想像が多く加はるから、一向信じられない。

名護屋より荷兮・露川等に導かれて佐屋に至る。

「有磯海」に、

露川が等(ともがら)さやまで道おくりして、共にかりねす。

水鶏なくと人のいへばさや泊り

とある。杉風宛の手紙によると、名古屋へかけ寄つて、三宿二日逗留。佐屋へ廻つた所、荷兮等例の連衆道で待受け、又佐屋へ半日一宿逗留したとある。後露川は享保二十乙卯年五月佐屋に水鶏塚を建て、表面に芭蕉の水鶏なくの句を刻し、石の右に、芭蕉の略傳を誌してゐる。即ち

芭蕉翁は伊賀の國の産にして、氏は松尾をつぐ。風雅を季吟老人に傳はり、一生不住の狂客也。東南西北の風行移り、逍遥する事三十餘年。元祿八のとし(七のあやまりである)皐月の初、予師の行脚を此佐屋の宿に迻り、山田何某の亭に五日をとゞめて、水鶏の一卷を殘す。云々

とある。山田何某の亭といふは山田氏素覽亭である。此一卷は芭蕉・露川・素覽の、三吟一折で、二ノ表から支

考・左次・巴丈が附けてゐる。即ち

隱士山田氏の亭にとめられて

水鷄啼と人のいへばや佐屋泊　　はせを
苗の雫を舟になげ込　　露川
朝風にむかふ合羽を吹たてゝ　　素覽

（「笈日記」下略）

尙杉風宛の手紙に、

名古屋は深川集を手本に若き者共修業の由申候。惣て俳諧評判の事など有之候得共、他にあたり候事も有之候得ばいかゞ故、書しるし不申候間、ほのかに筆のはしを御さとり候て、最其元御はげみ可被成候。

とある。之によると、名古屋の連衆は「別座鋪」・「炭俵」の輕みよりも、「深川集」を好んだものらしく、席上江戸連衆の兎角の噂もあつたと見える。それで杉風は古老である所から、一層の奮發を望んだ譯かと思はれる。或は杉風の惡口位出たのかも知れない。

それより芭蕉は伊勢長島に止り、翌日久居まで行き、二十八日伊賀へ着いたのである。右の手紙に、「同姓よろこび、舊友ども日々かけ合候て、今月十六日迄伊賀に逗留致候て、……云々」とある。今月十六日とは閏五月十六日の意。但し此手紙の日附は、五月十一日であるのに、今月十六日迄といふと少し分らなくなるが、或は十一

日は六月十一日の誤か。竹人の「全傳」に、元祿七戌のとし、初の五月十九日尾張の方より伊賀の國に歸り、閏五月雪芝宅歌仙一卷。

猿雖宅にて、

涼しさやすぐに野松の枝の形

難波の之道訪ひし時、

柴つけし馬のもどりや田うゑ樽

我に似なふたつに破れ(し、落か)眞桑瓜

とあるは此時の吟であらう。

伊賀を立つた芭蕉は、大和加茂の猪兵衛の在所に一宿した。五月二十一日附、猪兵衛宛の手紙によると、江戸出立の際、何か話でもあつたのだらう。

一、當月十六日加茂へ參、平兵衛に一宿。御袋樣、源兵衛殿、あねごなどへ逢申候。御袋御無事に御入候。されども四年以前よりはよほど年も御寄、耳も遠く御成候。あねごとふたり、貴樣事のみくどくかへすぐ逢申度由被申、難儀いたし候。云々

一、二郎兵衛道中達者にて、拙者苦勞にもなり不申、能つとめ申候。

とあるから、加茂へ行つて猪兵衛の親兄弟に逢つたものと見える。且つ又此旅行は次郎兵衛を連れたものと思は

れる。猪兵衛は桃隣などと最後の芭蕉庵を守つて居た。猪兵衛も壽貞も病人で、芭蕉庵に居たことは、前の十一日附杉風宛の手紙に見えた。

十七日、大津へ參る。十八日から膳所に滯在。伊賀の親族方は暑いし、蚊も多いから夏中は膳所、折々京へ出て去來と語り、或は嵯峨の去來屋敷に休息することもあつた（杉風宛手紙）。尙其手紙によると、草臥もまだしかと止まないから、持病もさし起らない。だん／＼暑くなつて行くから、どうかと思ふが、前々から服藥して居るし、醫者も替へないで居るから、病氣のことは心配するなとある。此杉風宛の手紙は、膳所滯在中か、或は去來の宅かでの消息であらう。

五月二十二日、落柿舍に遊ぶ。

　柳骨柳片荷は涼し初眞桑

酒堂の「市の庵」（元祿七年刊）に、

　閏五月廿二日

　落柿舍亂吟

柳小折片荷はすゞし初眞瓜　芭蕉
間引捨たる道中の稗　酒堂
村雀里より岡に出ありきて　去來

（「市の庵」下略）

とある。之は支考・丈草・素牛の六吟歌仙。二十三日附の芭蕉より支考に與へた手紙が、「笈日記」に出てゐる。之も芭蕉が落柿舍滯在中のことであらう。即ち

されば與風(フト)此間存知出たる
二種被レ懸ニ御芳情一、旅店の一德珍重
去歳武府脚半わすれ候。
不レ淺賞翫申候。今日去來きせるの
脚半の方ニ而、季を
掃除、去來一世の初たる故、きせるの
定可申候也。
掃除、壬(うるふ)五月と季を定て、折節ニ貴僧初音信、是亦壬五月の季を定候間、向後左樣ニ思召可レ被レ成候。晩方御入來可レ仰候。

廿三日　　はせを

落柿舍ノ制札に、速に灰吹をすつべしとあるが、今此烟管掃除と合せ考へて、去來の性癖があらはれて面白い。其頃支考は下京に居つたので、此手紙は支考よりの文通の返事である。又同書に、

去年の夏なるべし。

朝露によごれて涼し瓜の泥

人々つどひて、瓜の名所なむあまたいひ出たる中に

瓜の皮むいたところや蓮臺野

とある。之もその頃の吟であらう。

「行狀記」に、「嵯峨野の方に赴き、をかしき人の濫園など借て、逍遙せられける。」とあつて、

六月や嶺に雲おくあらし山

とある。

小倉山院

松杉をほめてや風のかほる音

清瀧眺望

清瀧や波にちり込む青松葉

大井川浪に塵なし夏の月

「笈日記」によると、芭蕉が臨終前支考に向つて、大井川の句は園女亭に於ける白菊の塵に紛らはしい。之もなき跡の妄執となるからと言つて、清瀧やの句に仕直したとある。

清瀧や水汲よせてところてん

「泊船集」に、「清瀧の水くませてやところてんとありしは、野明に引きさきすてたまふ。」とあり、「笈日記」に、「水くみよせてといふはあやまりなるよし。」ともある。以上の句は皆京へ遊んだ時の吟である。

六月十六日、曲翠亭に遊び、月を見る。

夏の夜や崩れて明し冷し物

「續猿蓑」に、支考の今宵賦があつて、之を立句とした芭蕉・曲翠・臥高・惟然・支考の五吟歌仙がある。即ち

露ははらりと蓮の椽先　曲翠

鶯はいつそのほどに音を入て　臥高

（「一葉集」下略）

二十一日、大津木節庵に遊ぶ。

秋ちかきこゝろのよるや四疊半

之を立句として、芭蕉・木節・惟然・支考の四吟歌仙成る。即ち

しどろに臥るなでしこの露　木節

月殘る夜ぶりの火影打消て　惟然

（「同書」下略）

木節は望月氏。近江大津の醫。

竹人「全傳」に、「六月末膳所に行きて、云々」とある。

ひやひやと壁をふまへて晝寐哉

「行狀記」に、「玉祭といふ文月十日も過て、しきりに父母の昔もおもはるゝにや。殊に此秋は氣短に、身の骨もとがりぬれば、桃尻のみせむかたなきなどうち笑ひ、又伊賀の方へ心ざし、道すがらなれば、此かへるさにも粟津の庵に立より、しばらくやすらひ給ふ殘暑の心を」とあつて、此句を出すから、七月であらう。粟津の無名庵の吟である。

本間主馬（丹野）の宅にて、骸骨どもの笛・鼓をかまへて、能する繪を見て、人生を觀じ、

稻妻や顏の所がすゝきの穗

といふ句を作る。

七月、郷里へ赴き、盆會を營む。

家は皆杖に白髪の墓參り

「行狀記」・「陸奥衢」には、「一家みな白髪に杖や墓參り」とある。竹人の「全傳」に、「魂まつる頃、又立もどりて」とありて、此句がある。「續猿蓑」には、「甲戌の夏大津に侍りしを、このかみの許より消息せられければ、舊里に歸りて、盆會をいとなみて」と前書がある。

壽貞尼の訃を歎いたのもその頃である。「有磯海」に、

尼壽貞が身まかりけるときゝて

數ならぬ身となおもひそ玉祭

芭蕉と壽貞の關係の普通でない證據に引かれる句である。
猿雖宅に、土芳と二人、稻妻の題にて、

いなづまや暗の方行五位の聲

玄虎子の宅に遊び、

風色やしどろに植る庭の萩

表六句ある。
二十八日、猿雖亭夜席。猿雖・芭蕉・配力・望翠・土芳・卓袋（十二句目より木白入）の歌仙成る。

あれ〳〵て末は海ゆく野分かな　猿雖
鶴のかしらをあぐる粟の穂　翁
朝月夜駕に漸おひつきて　配力

（「一葉集」下略）

猿雖は窪田氏。通稱惣七郎。剃髮して意專といふ。伊賀上野町の人。
八月七日、望翠宅にて歌仙。望翠は井筒屋新藏。上野町の人。

里ふりて柿の木もたぬ家もなし

十五日、月見。

名月に麓の霧や田のくもり

名月に（イ、の）花かと見えて木綿畑

こよひ誰吉野の月も十六里

竹入の「全傳」に、「新庵の月見」として、此三句をあげ、「此三句、庵を見するとて、門人たれかれ多く招かれし時と也。此庵赤坂にありて、無名庵といふ（近頃庵を舊地の東、白舌翁の別墅に移され、再形庵といふ）。云々」とある。無名庵は赤坂町の兄半左衛門の邸内にあつて、此時新築されたものと見える。「笈日記」には、吉野の月の句だけをあげ、「名月の佳章は三句侍りけるに、外の二章は評を加へて、後猿蓑に入集す。爰には記し侍らず。云々」とある。成程「後猿蓑」に前二句が出て、支考の評が附いてゐる。

二十四日、望翠・惟然・土芳・雪芝・猿雖・芭蕉・卓袋・九節の八吟歌仙成る。

つぶ〳〵と掃木をもるゝ榎實哉　望翠

竹のはづれを初あらし吹　惟然

朝月に鶏さきへ尾をふりて　土芳

（「壬生山家」下略）

此卷は壬生山中金龍庵の什物である。金龍庵とは攝津荒陵山の北壬生山淨春禪寺の境内にある庵で、芭蕉が最後の浪花行の際、一時旅寓した所で、芭蕉の名けた庵であつた。そこには其他雪芝・芭蕉・土芳・風麥・玄虎・苔

蘇の六吟歌仙も同じく什物の一として保管された。

残る蚊に袷着て寄る夜寒哉　雪芝

餌畚ながらに見するさび鮎　翁

夕月のひかる椿は實になりて　土芳

（「壬生山家」下略）

九月二日、支考は伊勢の國から斗從を誘ひて、伊賀の山中に赴き、三日の夜かしこに至る。「笈日記」に、「草庵のもうけもいとゞこゝろさびて」とあつて、

蕎麥はまだ花でもてなす山路哉

松茸やしらぬ木の葉のへばり付

この松茸を、その夜の卷頭に乞ひうけて、歌仙侍り。云々

とある。連衆は芭蕉・元代・支考・雪芝・猿雖・望翠・惟然・卓袋（十六句目より荻子入る）で歌仙成る。

秋の日和は霜でかたまる　元代

宵の月河原の道を中ほどに　支考

竹人「全傳」に、「其とし秋洛の惟然、伊勢より支考、斗從、熱田より白鴻來る（支考、斗從は九月三日なり）」とある。

四日、夜某亭に會して、惟然・支考・猿雖等と附句する。

松茸や都にちかき山の形　惟然
　雨に繩手のしるき秋風　土芳
おもしろく噺す間に月暮て　猿雖
（「一葉集」下略）

松風に新酒をさます夜寒哉　支考
　月もかたぶく石垣の上　猿雖
町の門おはるゝ鹿の飛こえて　翁
（「同書」下略）

「笈日記」に、次の夜なにがしが亭に會して、

松茸や宮古にちかき山の形　惟然
松風に新酒を澄す山路かな　支考

此句は山路を夜寒にすべきよしにて、その會みちて歸るとて、集などに出すべくは、もとの山路しかるべしといへり。云々

とある。

竹人の「全傳」に、「元説宅歌仙一折。此巻伊賀にての歌仙仕をさめと云。」とある。

行 秋 や 手 を ひ ろ げ た る 栗 の い が

猿雖宅、

新 藁 の 出 初 て は や き 時 雨 か な

其歳伊賀にて名殘の畫贊は、

白 露 も こ ぼ さ ぬ 萩 の う ね り か な

などとある。

三、奈良・難波行

九月八日、芭蕉は奈良の重陽をかけて、大阪へ旅立つた。人々の送り迎へが面倒だといふので、朝早く立つことにした。芭蕉の兄も、此度は別けて弟の體が衰へてゐるやうだから、心配でならず。支考・惟然等の伴の者に、介抱のことをくれ〴〵も頼んで、後姿の見える迄見送つた。その日必ず奈良迄行かうと急ぎ、笠置から川舟に乘つて、木津川を下り、錢司といふ所を過ぎると、山の腰が一面に蜜柑畑なので、支考は先の夜、「山はみな蜜柑の色の黄になりて」と言つた芭蕉の句を物語ると、芭蕉も眺めながら、我が吟腸を見せたと言つて笑つた。

船を上つて一二里行くと、日が暮れたので、猿澤の邊に宿を求めた。その夜はすぐれて月も明るく、鹿の聲〴〵亂れて聞えるので面白くなり、月三更の頃、猿澤の池の邊に吟行する（「笈日記」）。

支考も一句あつた。

　　びいと啼尻聲かなし夜の鹿

九日、奈良を立ち、其暮に大阪へ至り、洒堂方に旅宿。

　　菊の香や奈良には古き佛達

くらがり峠にて、

　　菊の香にくらがり登る節句哉

湖中の「略傳」には、「其所（くらがり峠をさす）より大阪迄駕籠に乗給ふ。難波の少しこなたより駕籠を下て、雨の菰に身をなして、云々」とある。「笈日記」には、生玉の邊より日を暮して、

　　菊に出て奈良と難波は宵月夜

とある。併し「行狀記」には、「その日は平野あたりよりほのくらくて、たど〳〵敷や侍りけん。」とあつて、「菊にいで奈良と難波は薄月夜」とある。

芭蕉より九月廿三日附兄半左衞門に宛てた手紙に、「私南都に一宿、九日に大阪へ參着、道中に又右衞門かげにて、さのみ苦勞も不仕、なぐさみがてらに參つき申候。大阪へ參候而、十日の暁よりふるい付申、毎暁七つ時分（午前四時）、夜五つ（午後八時）まで、さむけ熱頭痛參候而、もしはおこりに成可申かと藥給候へば、廿日頃よりすきとやみ申候。云々」とある。十日の朝から體工合が惡るかつたと見える。

十三日、今宵は十三夜の月をかけて、住吉の市へ詣つた所、晝から雨が降つて、吟行靜かならず。殊に惡寒さへ催すので、月見を止めにし、宿へ歸り、次の夜心持がよくなつたので、畦止亭に行き、前夜の月の名殘をつぐなふ。住吉の市に立ちて(笈日記)、

升買て分別かはる月見かな

芭蕉より十八日(九月)附如行に宛てた手紙に、此句を書き、「これより直にはりま路に參候而、來月末に歸り申候。云々」とある。竹人の「全傳」に、「十三日雨降、心地常ならざれども、住吉に詣で、升買て分別かはるの句あり。畦止亭に遊び、或は其柳・車庸などいふものゝ宅に會あり。云々」とある。

十六日、夜去來・正秀の手紙を開くと、奈良の鹿殊の外滅じて、その奥に人々の句がある。

車庸亭

面白き秋の朝寐や亭主ぶり

其柳亭

秋もはやはらつく雨に月の形

「笈日記」に、此句の先、「昨日からちよつ〳〵と秋も時雨かな」といふ句なりけるに、いかに思はれけむ、月の形にはなしかへ申されし。廿一日・二日の夜は雨もそぼ降りて靜なれば」とあつて、

秋の夜を打崩したる咄かな

「同書」に、「此句は寂寞枯稿の場を、ふみやぶりたる老後の活計、なにものか及び候はんと、おの〳〵感じ申あひぬ。」とある。

二十六日、清水の茶店に遊吟して、

人聲や此道かへる秋のくれ

此道や行人なしに秋の暮

「同書」に、「此二句の間いづれをかと申されしに、この道や行ひとなしにと獨歩したる所、誰かその後にしたがひ候はんとて、そこに所思といふ題をつけて、半歌仙侍り。……爰にしるさず。」とある。連衆は芭蕉・泥足・支考・遊刀・諷竹・車庸・洒堂・畦止・惟然・龜柳の十吟歌仙一折である。

岨のはたけの木にかゝる蔦　泥足

月しらむ蕎麥のこぼれに鳥のねて　支考

（「一葉集」下略）

松風や軒をめぐつて秋暮ぬ

「追悼木がらし」に、「大坂茶店四郎左衛門亭にて秋ををしむ。」と前書。主人の懇望によつて書き與へたもの。「芭蕉談終焉實記」には、此遊吟を九月二十一日の事とし、「毎年九月二十一日、浮瀬四郎右衛門亭にて、松風の會式あり。花屋庵より執行ふ。」と頭註がある。

此秋は何で年よる雲に鳥

「行狀記」に、「浪花の人々、師をむかゆるそのきはゝいと珍しく、翁見むとて何くれかくれもてはやす程に、しづかなる席も侍らず。天王寺・住吉の濱など、心にまかせてあそび給ふ。」とあつて此句がある。「笈日記」に、「此句はその朝より心に籠てねんじ申されしに、下の五文字、寸々の腸をさかれける也。云々」とある。

園女亭に會して、

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

「菊の塵」に、「折から芭蕉の翁尋ね來りまして、「白菊の目に立てゝ見る塵もなし」と吟じ出されしによりて、六日やがて卷をなしぬ。云々」とある。その歌仙は之を立句として、芭蕉・園女・諷竹・渭川・支考・惟然・洒堂・舍羅・何中の九吟である。卽ち脇・第三、

もみぢに水をながす朝月　園女

ひや〳〵と鯛の片身を折わけて　諷竹

（「一葉集」下略）

「笈日記」に、是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし。云々」とある。

二十八日、秋の名殘を惜しむべく、七種の戀を結題にして、各發句をする。明日は芝柏亭に行くわけだが行か

ず、發句をつかはす。

秋深き隣は何をする人ぞ

二十九日、此夜より芭蕉泄痢の病起り、十月一日の朝に至る。園女亭で馳走になつた菌の塊積(ツカエ)にさはつたのであらうと云はれる。

四、終焉及び埋葬

十月二日・三日、芭蕉はいつも胃腸が惡いから、門人も深く氣にかけないで居た所、二日・三日の頃から病勢やゝつのり、人々あはて出す（以下主として「笈日記」・「枯尾華」による）。

五日、此朝今迄居た之道亭は狹くて、多人數入込みては介抱も出來まい（「終焉實記」）といふ所から、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門の裏座敷を借受け、病床をそこへ移す。「終焉實記」に、一箇月座敷料三歩二朱とある。

六日、昨日暮より某氏の服藥で、心持よくなり、自ら起き返つて、白髮の樣などを見せる。影もなく衰へはて、膳所・大津の間、伊勢・尾張の親しき人々に手紙を出す。暮に支考を召し、氣が殊の外落着いたといふ。枯木の寒岩に添へるやうであつた。

七日、朝、湖南の正秀夜船で來る。間もなく洛の去來來る。「有磯海」に、

芭蕉翁の難波にてやみ給ひぬときゝて、伏見より夜舟さし下す。

舟にねて荷物の間や冬ごもり　去來

とある。暮れ方乙州・木節・丈草各々來る。平田の李由も來る。去來はしばらくも病床をはなれない。それは芭蕉が落柿舍へ來た時、人々は自分を親のやうに思つてゐるが、自分は老いて人々を子のやうに扱ふことが出來ない、と言つた言に感じたからである。

八日、之道住吉明神に參詣して、此度の延年を祈る。各句がある。

落つきやから手水して神集め　木節
凩の空見なほすや鶴の聲　去來
足がろに竹の林やみそさゞひ　惟然
初雪にやがて手引ん佐太の宮　正秀
神のるす賴み力や松のかぜ　之道
居上ていさみつきけり鷹の貌　伽香
起さるゝ聲も嬉しき湯婆哉　支考
水仙や使につれて床離れ　呑舟
峠こす鴨のさなりや諸きほひ　丈草
日にまして見ます顏也霜の菊　乙州

深更に及び、介抱して居る呑舟を召され、硯をすらせ、

病中吟

旅に寢て夢は枯野をかけ廻る

「なほかけ廻る夢心」ともしたいと云ふ。芭蕉は不淨を憚つて、人々を近くへ招かなかつた。呑舟と舍羅は之道の門人で、貧しくもあり、忠實な男であるから、特に芭蕉の介抱に當らせたものと見える。牀の衣も垢付いたので、よき衣に脱ぎ代へ、夜の衣も薄いからと云つて、錦繡の立派なものをかけた。藥は木節が調合した。木節も一生懸命になつて治療したのである。

九日、支考に向つて、大井川の句は、園女亭の白菊の塵に紛らはしいから、改作すると言つて、淸瀧や波にちり込青松葉とする。

十日、暮より芭蕉の容體急に變る。人々殊の外に驚く。夜に入つて去來を召しやゝ談ずる。その後支考を召して、遺書三通をかゝせる。外に一通は自ら書いて、伊賀の兄の名殘に送る。其等は正秀あづかりて、木曾塚の舊草にかへる。九日・十日は殊に苦しかつたものと見える。此日遺言の次に路通の罪を赦された。それは前に定光坊實永阿闍梨の仲裁があつたためでもある。

十一日、是より先、其角は岩翁・龜翁と共に、ふけひの浦を眺めて、堺に止り、十一日の夕大阪に着いて、何心なく芭蕉の行衞を尋ねた所、病氣が重いといふので大に驚き、急ぎ病床にかけ付けて、皮骨連立の姿を拜し、共に悲んだ。

吹井より鶴を招ん時雨かな　其角

うづくまる藥の下の寒さかな　丈草
病中のあまりすゝるや冬ごもり　去來
引張てふとんぞ寒き笑ひ聲　惟然
しかられて次の間へ出る寒さかな　支考
おもひ寄夜伽もしたし冬ごもり　正秀
鬮とりて菜飯たかする夜伽哉　木節
皆子なりみのむし寒く鳴盡す　乙州

夜伽の灰書である。木節もいよ〳〵芭蕉の死の近きを知り、他に上手な醫者の治療を求めたらどうかと云ふやうなことを言出したものか、明方に芭蕉は木節をさとして、自分の命も旦夕に迫つてゐる、彼の藥此の藥と云つて、淺しくもがいたつて仕方がない。たゞ願はくは君の藥で、最期迄唇をぬらさうと言つた。此後は左右の人を斥け、不淨を浴し、香を燒いて安臥して、物も言はない。

十二日、芭蕉は病み付いてから、飲食は明暮かゝさなかつたが、昨日の朝から今日迄何物も取らないので、名殘も今日限りだらうと、人々は次の間に茫然としてゐる。午頃になつて、目のさめたやうに見渡すから、粥をすすめ、唇をぬらした。今日は小春日和であたゝかく、障子に蠅が集つて困るから、鳥もちを竹にぬつて捕へるに、上手下手があるのを見て笑はれたが、後は何事も言はず、申の刻ばかりに（午後四時）、死顏うるはしく、眠るや

うに、絶世の詩人は大往生を遂げた。

その夜ひそかに遺骸を長櫃に收め、商人の荷物のやうにこしらへ、川舟にかきのせ、其角・去來・乙州・丈草・支考・惟然・正秀・木節・呑舟・次郎兵衛の十人が前後を守り、伏見に着く。伏見から義仲寺へ移したのである。淨衣その他は智月と乙州の妻が縫つて着せた。芭蕉は茶色の衣を好んだとかいふので、淨衣も茶色の服にしたさうである。送葬は十四日の夜と定めた。

花屋から支考・惟然の二日に出した伊賀あての手紙は、羅漢寺の僧に頼んで持たせたのであるが、此僧奈良に着いた日から腹を下し、歩行叶はず、幸ひ十一日朝伊賀上野へ行く人があるので、それに頼んだので、十二日の暮頃に、書狀は上野へ屆いた。土芳・卓袋披き見て大に驚き、取るものも取りあへず、松尾氏に告げたら、之も同時に書狀が着いたと云。そこで二人は食事もそこ〳〵にして、子の刻すぎ近道にかゝつて、大和の帶解まで行き、之よりくらがり峠（十三峠のあやまりだらうといふ）を越え、俊德海道をたゞ急ぎに急ぎ、平野口から御城の南をかけぬけ、直に久太郎町花屋にかけつけたのは十三日の暮頃であつた。花やに會つて病狀を聞くと、すでに事切れたと云。兩人共殘念がり、さらば葬送に追付からと、八軒屋より船に乘り、伏見・京橋に着いたのに夜明である。直に飛下り、狼谷にかゝり、義仲寺に着いたのは入棺前であつた。死顏を拜み、悲歎の涙に暮れた。導師は義仲寺の直愚上人であつた。入棺は酉の刻である。門人通夜して、伊賀の挨拶を待つたけれど、何の返事もない。去來・其角・乙州等評議して、葬式はいよ〳〵十四日酉の刻（午後六時）と定めた。丈草・其角・去來・李

由・曲翠・正秀・木節・乙州・惟然・之道・尙白・土芳・卓袋・許六・風國・支考等すべて四十人各捻香。その餘此翁の情を慕へる者、招かざるに集り、人數凡三百餘人であつた。かたの如く木曾塚の右に葬り、傍に冬枯の芭蕉を植ゑて形見とした（「終焉記」）。

五、遺書及び遺物

十六日、夜正秀が預つた芭蕉の遺書を曲翠亭にひらく。其角・支考・惟然・丈草・去來・乙州等重立つた門人は立合つたことであらう。內一通は芭蕉が自筆で、兄半左衞門へ送つたものである。

御先に立候段殘念に可被思召候。如何樣とも又左衞門便に被成、御年被寄、御心靜に御臨終可被成候。至爰申上事無御座候。市兵衞・次左衞門殿・意專老、初不殘御心得奉賴候。中にも十左衞門殿・半左殿、右之通に候。はゝ樣およし力落し可申候。以上

十月十日　　桃青

書判

松尾半左衞門樣

新藏は殊に骨被折忝候

「笈日記」に、支考が伊賀への文は、「たゞ何事もなくて、先だち給へる事のあさましう、おぼゆるよし、かへすがへす申殘されしなり。」云々」と言つたのは卽ち此事であらう。外の三通は形見の品〳〵、或は反故文章等に就い

て、門人への永の別を惜んだものである。此三通の遺書は、支考の「十論爲辯抄」・「笈日記」、竹人の「全傳」、湖中の「一葉集」等に見えてゐるが、各辭句の相違が多少ある。今「全傳」の文を抄錄する。

一、三日月記、伊賀に有
一、發句の書付、同斷
一、新式（是は杉風へ可被遣候、落字有之候間、本寫と改可被校候）
一、百人一首、古今序註（拔書、是は支考へ可被遣候）
一、埋木、半殘方に有之候

江戸

一、杉風方に前々よりの發句文章の覺書可有之候。支考校之文章可被付置候、何も草稿にて御座候。
一、羽州岸本八郎右衞門發句二句、炭俵に拙者句になり、公羽と翁との紛れにて可有之、杉風より急度御斷可給候。

右一通

一、伊兵衞に申候。壽貞事に付色々骨折、面談に御禮と存候所、無是非事に候。殘り候二人之者共十方を失ひ、うろたへ可申候。好齋老など御相談被成、可然了簡可有之候。
一、好齋老萬御懇切、生前死後難忘存候。

一、榮順尼、禪可坊情ふかき御人にて、而上に御禮不申、殘念之事に存候。

一、貴様病起御養生隨分御勉可有之候。

一、桃隣へ申候。再會不叶、可被力落候。彌杉風・子珊・八草子よろづ御投かけ、兎も角も一日暮可被致候。

元祿七年十月　　はせを朱印

支考此度慟驚深切實を盡候。此段賴存候。庵の佛は則出家の事にて候へば遣し候。

右一通

一、杉風へ申。久々厚志死後迄難忘存候。不慮なる所にて相果、御暇乞不致段、互に殘念無是非事に存候。彌俳諧御勉候て、老後の御樂に可被成候。

一、甚五兵衞殿へ申候。永々御厚情にあづかり、死後迄も難忘存候。不慮なる所にて相果、御暇乞も不致、互に殘念、是非なき事に存候。彌俳諧御勉候て、老後はやく御樂可被成候。御內室樣に不相替御懇情最後迄も悅申候。

一、門人方幾角は此方へみえ、嵐雪を始めとして不殘御心得可被下候。

元祿七年十月　　自筆　はせを朱印

右一通

以上の三通は何れも支考が筆にして、はせをの三字自筆、此内支考此度もとある三行自筆也。云々とある。

併し「爲辯抄」によると、

右は湖南の木曾寺にて、三日夜の法事を過して、膳所の曲翠亭に此狀をひらくに、竪紙（杉風其他あて、伊兵衞その他あてのものをさす。）も横紙（遺物覺で、三日月記、埋木、新式、其他）も洛の去來代筆にて、支考へ出山佛の一段と、名判とは祖翁の自筆なり。云々

とある。

其他芭蕉の遺物には、出山佛（長一寸一分）・鐵如意（佛頂より附與。長さ押延て凡一尺九寸位。頭蔦葉形り金箔）・觀音經（小本）・紙縷袈裟（佛頂より附與）・被風・銅鉢・木硯（樫木、旅硯である。筥長サ二寸三分、幅一寸三分）・笠（反古澁張）・菅蓑（襟木綿、茶色）・杖（三尺五寸斗）・頭陀（内に杜甫の詩集、山家集外に後猿蓑と題ありて歌仙三卷、發句四五吟、書捨の反故、紙に包みたる布裂五寸に六寸許、上包に狹ノ細布とある、進上淸風。又外に和歌の古短册二枚、松島蚶瀉の繪二枚）などがあつた。右の中出山佛は支考に附與、如意は丈草に附與、袈裟より以下七品は兼て惟然に附與の約があつたので、惟然に與へる。今は播磨の國增井山の麓風羅堂に納とある。狹ノ細布・松島蚶瀉の畫は去來が貰ふことになつた。去來・其角連名の半左衞門宛の手紙によると、綿入一・袷一・肌付一・帶二を花屋仁左衞門から次郎兵衞へ贈つて來た。衣裳の類は澤山あるが、大阪出立の際

不殘花屋へ預けて來たといふことである。半左衛門の返事に、花屋へ預けた古衣裳はそのまゝにして置いて貰ひたい。外の品は何なりと勝手にするがよいといふのである。尙貞徳相傳の鳥羽文臺といふのがある。之も去來の手紙によると、風雅の大切なる雅器であるから、其角に讓らうとした所、其角固辭して受けず、やがて江戶へ下つてしまつた。そこで一時義仲寺の直愚上人に預けることにしたが、上人も風火災や盜難を恐れて斷はられたから、半左衛門の方へ預けたいといふと、松尾氏の返事に、それは貴方の所へ置いてくれといふので、去來が預る事になつた。黑塗、長さ一尺九寸・幅一尺二寸・高さ四寸・板厚さ三分・筆反一尺一寸のものである。芭蕉の文臺には二見形（無名庵文臺、伊賀上野再形庵藏）・松木文臺・尾花文臺・反古文臺（幻住庵に居た頃作つたもので、曲翠所藏、後膳所の本多家に有）・二見潟文臺等があつた（「一代錄」）。其他芭蕉庵六物や紙衾・水雞笛などは生前歿後それ〴〵門人の手に傳へられた。

六、追悼と句碑

其角・去來・丈草・支考・惟然等重立つた者は、七日が程木曾寺へ籠つて、追善に餘念がなかつた。「枯尾華」に「人々七日が程こもりて、かくまでに追善の興行、幸ヒにあへるは、予なりけり。云々」とある。十六日、曲翠は其角を幻住庵に伴ひ、芭蕉の隱家なる椎木を見せて、いますが如く愁吟する。

木がらしや何を力にふく事ぞ　曲翠

「有磯海」に、「芭蕉翁の七日〳〵もうつり行あはれさ、なほ無名庵に寓居して、心地さへすぐれず。去來がもと

へ中つかはしける。」と前書して、

朝霜や茶湯の後のくすり鍋　丈草

かへし

朝霜や人参つんで墓まゐり　去來

丈草はあと迄長く無名庵に居たものと見える。尤も義仲寺の二町許り南、岡山といふ所に、丈草は庵を構へ、佛幻庵と云つて居たといふから、いはゞ墓守のやうなものではある。

十月十八日、義仲寺に於て追善の俳諧百韻があつた。連衆は其角・支考・丈草・惟然・木節・李由・之道・去來・曲翠・正秀以下四十三人。大津膳所・京嵯峨・攝津・伊賀のものである。各愁眉を感じ、巧言を求めず、しめやかに師の靈を慰めたのである。

なきながらを笠に隠すや枯尾花　晋子

溫石さめて皆氷る聲　支考

行灯の外よりしらむ海山に　丈草

（「枯尾花」下略）

「笈日記」に、「所願忌、湖南・江北の門人おの〳〵義仲寺に會して、無縫塔を造立す。面には芭蕉翁の三字をしるし、背には年月日時なり。塚の東隅に芭蕉一本を植て、世の人に冬夏の盛衰をしめすとなり。云々」とあつて、

此巻がある。「行狀記」に、「一七日の法事に參り、云々」とあつて、路通も、

ひからかす袖や小春の死出の山

といふ句を手向けてゐる。路通が追善百韻の席に出ないのは遠慮したものか。「枯尾華」によると、初七日迄に集つた追悼句は四十四句ある。大方大津・膳所・京・大阪・伊賀の門人からである。

忘れ得ぬ空も十夜の泪かな　去來
啼うちの狂氣をさませ濱衞　李山
無跡や鼠も寒きともぢから　木節
曉の墓もゆるぐや千鳥數寄　丈草
一たびの醫師ものとはん歸花　許六
月雪に長き休みや笈の脚　千那
しけ絹に紙子取あふ御影哉　尙白
一夜來て泣友にせん鳰の床　風國
耳にある聲のはづれや夕時雨　土芳
鹿のねも入て悲しき野山哉　支考
入月や日比の數奇の朝朗　春澄

腰打て木葉をつかむ別れ哉　正秀
まぼろしも住ぬ嵐の木葉哉　晋子

二十七日追悼の句より、

花鳥よせがまれ盡す冬木立　惟然
花桶の鳴音も悲し夜半の霜　可南
冬柳かれて名ばかり殘りけり　向震軒

二十七日伊賀連追悼の句より、

時雨るゝやおくへもゆかず年なやみ　玄虎
寒菊やすゝぐ彿の膳の端　雪芝
夢みたか啼て飛ゆく浮ね鴨　配力
六疊に見殘されたり冬の月　苔蘇
彿や足もさゝれぬ置火燵　尾頭
かるき身の果や木の葉の吹とまり　猿雖
芭蕉〱枯葉に袖のしぐれ哉　風麥
茶のからの霜や泪のその一つ　式之

なにはへの飛脚、粟津よりかへりて、忘師の遺書まゐれり。

夢なれや活たる文字の村衛　　半殘

四七日の追悼句は晋音文通の句である。内に尾州の露川や素覽の句がある。

江戸では芭蕉の死を知らず、十月二十二日になつて、追善興行所々で袂をしぼつた。尤も杉風等に暇乞した遺書もあるのであるから、歿後直に江戸衆に知らせたことゝ思はれるが、芭蕉の死を悼んだ句は、十月二十二日頃にやうやく見えてゐる。「枯尾花」によると、十月二十五日嵐雪は桃隣と共に江戸を出立し、十一月七日夜義仲寺の芭蕉の墓に至り、

此下にかくねむるらん雪佛

と一句を奉つた。尙十月二十二日夜興行として、嵐雪・氷花・百里等十七八人の追善歌仙もある。

十月をゆめかとばかりさくら花　　嵐雪
しぐれの中に一筋の香　　氷花
鎰の手の二間は五疊〱にて　　百里
（「枯尾花」下略）

原安適も芭蕉の死を悼んで、

芭蕉翁みまかりぬるに、跋をだにとて、たびだつ人にことづて侍ける。

秋風にたえてしばしは殘りしも
霜の芭蕉のあはれ世中　安適

桃隣・子珊・杉風・岱水・曾良・孤屋・利牛・野坡等の十月二十二日追悼歌仙興行もある。

故人も多く旅にはつと、逆旅過客のことわりをおもひよせて

俤やなにはを霜のふみをさめ　桃隣
淡くかげろふ冬の日の影　子珊
一面に起伏す小松風やみて　杉風
（「枯尾花」下略）

歌仙滿座普音之吟

うらむべき便もなしや神無月　杉風
是非わかぬ枯野に草の種もなし　子珊
むせぶとも蘆の枯葉の燃しきり　曾良

義仲寺へ送る悼

氷るらん足もぬらさで渡川　法眼季吟
告て來て死顏ゆかし冬の山　露沾

「芭蕉談終焉實記」に、

以飛札得御意申候。益御清雅奉賀候。爰許無異ニ居申候。然者師翁遷化之事承り途方に暮候。いかに成行可申哉、只闇夜と相成、唯愁涙迄に候。取あへず一句案候。靈前に御敬手可被下候。以上。

十月二十三日　　露沾

去來雅丈

告て來て死顏ゆかし冬の山　　露沾

とある。

紅葉ちり樒は青し塚の前　　濁子
五十二年ゆめ一時のしぐれ哉　　ちり
凩の聲に檜原もむせびけり　　素龍

十月二十三日、湖春・素龍・露沾・萍水・桃隣・岱水・野坡・孤屋・利牛・杉風・素堂等の追善歌仙がある。

亦誰そやあゝ此道の木葉掻　　湖春
一羽さびしき霜の朝烏　　素龍
碇綱綰(わが)なる月に浪ゆりて　　露沾

（「枯尾花」下略）

又同日、晋子亭にて、仙化・是吉・介我・柴雫・湖月・神叔・揚水・枳風・由之・全峯・沾徳・李下等の歌仙興行もあつた。恐らく江戸へ知らせが來て、其角の留守宅で、追善興行を催したものと見える。

今はくも雪のはせをの光哉　仙花
　かへらぬ水に寢て並ぶ鴨　是吉
冬の月黒き衣類は影鈍(トン)で　介我

（「枯尾花」下略）

深草の翁、宗祇居士を讃していはずや。「友(トシ)二風月(ヲ)一家(トス)二放泊(ヲ)一」と。芭蕉翁のおもむきに似たり。

旅の旅つひに宗祇の時雨哉　素堂
落葉見し人や落葉の底の人　沾徳
十徳の袖はなみだの氷かな　（女）秋色
雪の夜をおもひ忍ぶや名付親　李下
ちからなや膝をかゝへて冬籠　野坡
竹の繪を掛て悲しき時雨哉　孤屋
油火の消て悔むや冬籠　利牛

義仲寺に參り、亡師の塚のもとに、舊來を語らんとす。身も隱逸の志につかへ、一たびは笈

のたすけともなりぬ。今更に遠里を隔て、かゝる所の苔の下に、空しき名のみ聞えけるな、

月雪に假の庵や七所　桃隣

芭蕉が死ぬ前月、杉風に宛てた手紙の末に、「少は桃隣にも師恩貴きすべをわきまへ候へと、御申成候べく候。桃隣俳諧俄に偕上申候と專沙汰にて候。云々」とあるから、定めし杉風から注意もあつたらうと思ふが、今になつて見ると、師恩の尊さも身にしみて、塚の前に立つた時は、さぞかし懷舊の涙に咽んだ事であらう。

嵐雪は十一月七日夜義仲寺に詣り、同十二日初月忌を、京丸山量阿彌亭で催した。會者嵐雪・桃隣・岩翁・晋子・龜翁・横几・尺艸・松翁・去來・正秀・曲翠・徹士・心圭・暮四・亘海・荷兮・野童・風國・集加・重藤・遲望等で、百韻興行である。

泣中に寒菊ひとり耐へたり　嵐雪
向上體を雪の明ぼの　桃隣
澁壁のひる間を遲く扇がせて　岩翁
車にはこぶ藪の疊なり　晋子
（「枯尾花」下略）

路通は芭蕉の勘氣を受けた者であるが、芭蕉歿後師恩に泣いて、「行狀記」（元祿八年刊）を著し、四十九日間の追善まめ〳〵しく營んだ。卽ち二七日（十月二十五日）は、乙州・木節・土龍・卓袋・木志・正道・如行・丹

野・智月・土芳と共に、義仲寺に於て追善俳諧四十四句を成した。

追善各集粟津義仲寺
請直愚上人設齋

木がらしや通うして拾ふ塚の塵　路通
神なし月の二七日泣　乙州
眠目の障子外よりたゝかれて　木節

（「行狀記」下略）

三七日は芭蕉の自畫像を乙州亭に開き、追善の句を作つた。會者、乙州・木節・惟然・土龍・智月・錦江・丹野・路通の人々であつた。

………更行燈に、智月は紙子の袖かき合、硯を前にそなへ、我に形見となるべき書殘し給へと、しきりにのぞまれぬ。師翁うなづき、六そぢの霜にむかふ人に、形見を乞れていと力なし。我先に死ねとやなど興じ給ひ乍ら、智月には幻住庵の記一卷、やつがれはいまだ若し、誠の後の形見とて、自畫の像を出して賜ひぬ。はた光陰とゞまらず。ことし既に四とせばかりにして、むかへ奉りしが、無常迅速、今は過し夜の興談迄思ひ出されて、そゞろに袖をひたす。一七・二七は義仲寺にて追善、三七日は信仰の輩をむかへ、尊像の前において、人々句をならべ、生前のごとくうかゞひ奉る。

つく杖は三十棒や冬の風　乙州拜

霰ふる形は木曾路か武藏野か　木節

しめ直す奥の草鞋や冬の月　惟然

像の畫に物いひかくる寒さ哉　智月

ころびてもすごく見ゆるか雪の像　路通

四七日、芭蕉の頭陀・笠・杖を義仲寺に寄進し、木節・路通・土龍・乙州・岱々・丹野・高匠・智月・木芯・惟然・嵐雪の追善句がある。

三物有句

此笠はいくつの年の雪みぞれ　木節

生涯はこれかや寒き頭陀袋　路通

寢てかへる奈良の夜寒や笠のしみ　乙州

冬の日や老もなかばのかくれ笠　智月

山茶花や宿々にして杖の瘦　惟然

木がらしや猿も馴初か蓑と笠　嵐雪

初月忌思ひ〳〵の追善があつた。乙州・木節の兩吟歌仙に、

風月の霜の劍を折らしけり　乙州
冬の野原にいなす飼鳥　木節

（「行狀記」下略）

五七日木曾塚に會し、追善俳諧。連衆は京・江戸・大津・膳所の人々である。五十韻成。

冬の月も照ル上は皆泣まひぞ　木節
沈水いける炭の火加減　桃隣
惣門の前は赤土漉かけて　義仲寺上人直愚

（「同書」下略）

六七日路通亭一座興行。土龍・智月・乙州・正道・木節・路通・桃隣の人々である。發句、

あとの月おもへば氷るたゝき鉦　智月
雪吹ては雁鳴たゆる塚のズン　乙州
大極の輪と消にけり塚の霜　木節
草も木も霜をもてなす佛哉　路通
雪あらば旅す九人の夜も寢ず　桃隣

四十九日反古さらへ。

枯萩は陸奥紙につゝみけり　路通

噛しだく反古のばさむ生火桶　智月

こゞへ死ぬや旅の皮籠の蟲のから　乙州

霜の夜や大鷹小鷹薄かさね　木節

なほ「行狀記」によると、遠近よりの追悼句五十章をあげる。内に金澤から、

是も散不斷櫻の冬の花　北枝

あぢむらの鳴つれ多さとふさ哉　萬子

墓の肌さぞ此ころの雪みぞれ　牧童

などがあり、島田からは、

大井川隔て悲し神無月　如行

五月雨に四日留しが死出の雪　如舟

などと川留めの昔を追懷し、大垣からは、

めぐる日の茶湯によるや冬の蠅　斜嶺

蓑蟲も木にはなれたる落葉哉　殘香

燭消て闇になりけり冬籠　怒風

と頼む樹陰を失つた悲しみを述べてゐる。

壺中・芦角は「芭蕉翁追悼こがらし」（元祿八年六月刊）を著して、芭蕉の死を悼んでゐる。之も芭蕉の追善集として、最も早く現れたものゝ一つである。其表に、

かんな月中の二日、風雅を浪花にとゞめ給ひしは、つにも咽んでやすからぬ世と、いたみをさゝげぬ。

木がらしや涙は顔にしみわたり　壺中

道筋ややなぎのかれて十方なさ　芦角

そのころ義仲寺の塚にまうでて、花水をそゝぎ、住すてし無名庵のむなしく残りけるも哀れなり。折から時雨をつるゝ嵐に、ひゞきのゝしる波の音もみぎりにかなしう、何となく木の葉のちりかゝるもつねならぬながめ也。云々

とある。本書には追悼の發句二十八、歌仙三巻を收めてゐる。その内より

ゆりすはる小春の海や塚の前　丈草

翁身まかり給ひて、ふたゝび伊賀におもむく道中

痩顔のうつりて寒しむらの橋　惟然

花も實もうたひ盡してかれ野哉　信徳

大阪は水が悪いから、芭蕉の養生には京か膳所がよからうと、支考から言うて來たので、風國は北野の南松の木

陰に草庵を借受け、戸障子の煤を拂つて、翁の入來を待つてゐる中に、芭蕉は死んでしまつたといふやうな事が、風國の追悼句の前書に見えてゐる。

ちからなく軒を見廻すしぐれ哉　風國

此庵もいらなくなつたと云つて、主人にかへしてしまふ。風國の愁傷想ふべしである。

なきがらを同門にわたして舟を見送り、人しれず棺にむかひて、永きはなむけをさゝぐ

ちからなき御宿申せし時雨かな　之道

三七日一會を催す

とかういふ間に冬の日や雪の梅　之道

五十日

かき餅や雪に行脚の立すがた　尙白

鉢たゝき廿日程來る夜あけ哉　壺中

百ケ日

くど〳〵とおもへば悲しき夜の梅　支考

同義仲寺にて三句

思ひ出し〳〵蕗のにがみかな　路通

さえかへる壁の日影のあはれ也　風國

正月二十三日百ケ日追悼、歌仙興行。

風もなくきほひぬけたる春日かな　壺中
いたむだ蝶のひくう飛なり　芦角
瓜種を一二たんほど蒔つけて　同
（下略）

同じく芦角・壺中・風國の三吟歌仙もあつた。

身のいたづらに、翁の百ケ日も過去りければ

土筆いつをさかりにほうけたる　芦角
そこらあたりに陽炎の塵　壺中
薄霞鰤の舟したうはさにて　風國
（下略）

其角嵐雪が追善の席にかなしくおもむき、涙痕をもんで塚にむかふ。

生てゐる身もしぐるゝや塚の前　風國拝

百ケ日は義仲寺へ参り、正秀興行の歌仙に列つたとある。連衆は正秀・臥高・風國・惟然・直愚上人・舎羅・土

龍・囘鳧・榎軒・路通・丈草・乙州・木節・作者失念の十四吟である。

出菩忌、義仲寺亂吟

ゆかしさをともにうなづく柳かな　　正秀

香わたり來る庭のかげろふ　　臥高

鶯の軒ロ出る餌はみして　　風國

（下略）

熱田の桐葉は芭蕉の訃を聞き、十年前の淸遊を思出して、東藤等十二人の人々と共に、追善の句を手向けてゐる。

泪の內に人々一句をのべて、西の空を拜すのみ。

泣事も先力なき水の雪　　桐葉

我泣聲は秋の風と聞しに、同事と成給ひしかなしさ、秋傷十方なくて、一字をたむけぬ。

塚も動け我泣聲は冬の風　　東藤

支考は芭蕉の臨終に侍して、最後まで親切を盡した者である。彼が「笈日記」（元祿八年八月刊）は芭蕉の病前歿後の日記であつて、追善句集ではないが、又亡師懷舊の一端に成つたものである。內に各地に於て芭蕉追善の句が見える。初七日の芭蕉追善を終つた支考は、四十九日は伊勢にあつて、大練の供養をひらく。

節〳〵のおもひや竹に積るゆき　支考

三月四日（元祿八年）江戸に至り、同十二日芭蕉の忌日を思出し、桃隣と共に深川長溪寺の發句塚へ參詣した。「笈日記」に、

十二日は阿叟の忌日つとむるとて、桃隣をいざなひて、深川の長溪寺にまうで侍る。……堂の南の方に、新の一簣の塚をきづきて、此塚を發句塚といへる事は、世の中はさらに宗祇のやどり哉　翁、此短冊を此塚に埋めけるゆゑなり。……かの塚の前に香華をそなへ、柾木の枝を折、左右にかざし置きて、いふ事も思ふ事も、亡き跡は知らずなりぬるよと、二人ながら泣て出ぬ。その後は舊草を見に行けるが、たゞ見しらぬ人の住てぞ侍るなり。

とある。又同書に、

二十二日（四月か）木曾塚にいたりて、師の無縫塔を拜す。拜してさしむかひゐける塚の神の、何ともいはざるはたゞ悲し。その夜は舊草に昔をしのぶとて一夜寢侍りて

夜咄のねふたかりしも夏の夢　支考

浪花が三月十二日大津の義仲寺古翁の塚に詣で、

かげろふや苔につきそふ墓めぐり　浪化

と悲んだ事も、「笈日記」に出てゐる。

四十九日、百ケ日の法要もとゞこほりなく濟んだ。芭蕉の親族門人、西でも東でも、忌日〳〵には香花を供へたり、句を詠んだりして、芭蕉の靈を慰めた事であらう。支考が二十六日（四月か）猿雖亭にさまよひつきて、撰集の事を物語り、舊交の人々と共に、芭蕉の生前死後の談に及んだ（笈日記）事や、霜月十三日（元祿七年）の夜、其角・嵐雪・桃隣が京の落柿舍を訪れて、四子一胸に成り、芭蕉翁の昔を泣み笑みして、たゞ翁一人を眼にし、口にし、横行の蟹の迯穴をふんで、時のさかなにせんと咄しこり、嵐雪の馳走で、十錢を奢發して、鉢叩を聞いた（刀奈美山ノ引）などといふやうな追懷談も、其後至る所で始まつた事であらう。杉風が芭蕉歿後の冬、芭蕉の短冊を深川の長溪寺の境内に埋めて、發句塚を建て、「霜枯の芭蕉を植ゑし發句塚」といふ句を手向たのも哀悼の餘りである。史邦がその緣に因つて、「芭蕉庵小文庫」（元祿九年刊）を著したのも亦亡師に對する追善の意味である。

一周忌は深川の芭蕉庵で營んで居る。嵐雪は「夢人の裾をつかめば納豆哉」といふ句を手向け、許六は「鬠の霜無言の時の姿かな」といふ句を捧げてゐる。許六は「自得發明辯」に嵐雪の句を罵り、「師のなき追善に、かやうのたわけを盡す、嵐雪が俳諧も世に行はれて、口すぎをする。世上面白からぬ事也。晋子中々か樣の處をはづさぬ一器量のやつめ也。云々」とあるが、嵐雪の納豆の句の批評だけは同感である。元祿九年三月、芭蕉三回忌追善が洛東東山で催された。里圃の「翁ぐさ」の出版は三回忌の追憶である。此年三月十七日桃隣も細道行脚をはじめた。これも芭蕉追憶の結果に違ひない。七回忌（元祿十三年）は粟津の義仲寺で行はれた。支考の催であ

る。集まる者二百三十五人餘、盛會であつた。「歸花集」はその追善集である。江戸では杉風・素堂・曾良等も六月十二日七回忌を深川の芭蕉庵で開いてゐる。杉風の「冬かつら」は其追善句集である。卷末に、

師におくれ、既に七回に及ぶといへども、四序のけしきにつれて、忘るゝ事なく、月〳〵の忌日は此庵室において、懷舊の句を綴り、像前に備ふ。……

言の葉をこまかに慕へ冬かつら　杉風

とある。

嵐雪も「霜しぐれそれも昔や坐興庵」といふ句を作つて居る。寶永三年三月、支考は芭蕉の十三回忌を洛東の雙林寺で開いてゐる。萬句興行である。その追善集を「東山萬句」と云ふ。素堂の序がある。出句者湖南・美濃・尾張・伊勢・近江・越前・越中・加賀・肥前・肥後・豐前・安藝・讃岐・備中・備前・美作・攝津等連衆五百七人。卷數一萬百韻。双林寺閑阿彌三日興行であつた。面白いのは次の記錄である。

諸國招待

千那　一日出座　　尙白　一日出座　　北枝　囘祿有斷　　木因　公用有斷　　芦文　三日出座
露川　世事有斷　　凉菟　眼病有斷　　諷竹　無返事　　洒堂　失念有斷　　吾仲　三日出座

京都招待

言水　一日出座　　鬼貫　二日出座　　春澄　異義有斷　　轍士　芳野行脚

春澄の異義缺席は仕方ないとしても、洒堂の失念や諷竹の無返事はどうした事か。露川の世事缺席も變な挨拶である。支考の興行を不快に思つたからであらうか。或は芭蕉の恩義も忘れかけられた事であらうか。寂しい感がないでもない。芭蕉の追善供養を後々迄營んだ者は支考である。支考は芭蕉の名にかくれて、自說を賣り歩いてゐる男だから、果して此供養が報恩的な純な氣持にのみよつて行はれたものかどうかは分らない。越人は「不猫蛇」に、彼が賣名行爲を痛罵して、

おのれ出家にて、自在を好み樂しむ故、婬房・衣服・厚味の費を求め、妄言・佞姦の事どもを思案し、芭蕉の遺骨をおさめし塚義仲寺にあるを、京と松本迄はわづか三里に、又京に石牌を立、塚を築く事・人を諂ひて錢を取る術なり。……只名利の種ばかりを築く塚なり。當年も翁の遠忌なるとて、京にてせし由。翁は十月の十二日なるに、三月にする事、世間の法事取越すといふ事もあれども、止む事得ぬ事に依つてはあり。汝何事のやむ事なき事ありや。田舍より寶物靈物開帳に京へ出るを能き事と思ふか。悉皆汝が邪智それなり。是も事を追善に寄せ、婬房の謀ばかりなり。それに美服を身にまとひ、闇愚を集め、上座にあがり、恥しとも思はず。妄語を雨露のごとく云散らし、敎ふるなどいふ事、さりとては片腹いたき事、云々

とある。恐らく支考の本心は越人の評の如きものであつたらうと思ふ。許六も「十三歌仙」といふ追善集を出してゐる。其他除風の「一順百韻」もある。嵐雪は「品々のふとんにのぼる木魚かな」といふ句を手向けてゐる。

支考は又寶永七年三月、芭蕉十七回忌に當り、京都東山雙林寺に芭蕉の碑を建て、なほ享保十年、芭蕉三十三回

忌を東山雙林寺に開くべく、諸國に廻狀を廻し、歌仙及び一人一句を蒐集し、「三千化」といふ追悼集を出してゐる。桃隣の「粟津の原」も三十三回忌追善集であつた。野坡の「八島放生日」も矢張それであつた。此頃は大方蕉門の高弟も歿してしまつた。丹頂堂寒爪の「芭蕉翁牛白記」「雪の棟」（延享元年）は芭蕉五十回忌の追善集である。巽窓湖十の「ふるすだれ」（寛保三年十月刊）も芭蕉五十回忌追善の句集である。寛保三年、芭蕉五十回忌、京都に芭蕉堂が建てられた。蓼太は寶暦十三年、芭蕉七十回忌を、舊庵に程近い要津禪寺に營み、明和八年、かの寺に芭蕉庵を再興した。天明元年九月、洛東一條寺村金福寺に、芭蕉庵及び句碑が建てられた。蕪村の主催である。天明三年芭蕉九十回忌を、粟津東山一條寺村に於て營む。曉臺これが主催である。寛政五年芭蕉百回忌。西馬の「花の雲」（天保十三年序）は芭蕉百五十回忌追善集である。

芭蕉の俳德は廣大無邊であつた。今日でも舊派の宗匠の間には、芭蕉忌が年々營まれて居る。卽ち十月十二日を芭蕉忌として、全國の俳人は皆芭蕉に追善句を捧げてゐる。それは季題に芭蕉忌といふ題が出來たのでも知れよう。義仲寺から「諸國翁墳記」（寶暦十一年刊）が出てゐる。それは全國に於ける芭蕉の句碑の所在を記したもので、すべて二百三十ばかりある。中には鹽竈晩鐘碑や松島吟の序の碑もあるが、大方は芭蕉の俳句中の言葉を取つて塚の碑名とした。江戸に於ける芭蕉の碑は四十以上もあらう。聖地の順拜者の出來た事は、宇橋の「茗荷集」、野桂の「茗荷圖會」、同じく「廣茗荷集」などを見れば委しく分かる。實に芭蕉渇仰者の多いことは驚嘆すべきである。

芭蕉は寛政三年桃靑靈神といふ尊號を、時の神祇伯白川資延王から賜つた。鶯雅の「金牛獨語」に、芭蕉靈神記といふ文があつて、

芭蕉靈神記　　鶯雅

筑紫高良山國〇（不明）神社のかたへに祠れるは、寛政辛亥神祇伯從二位白川資延王に、何某がねき乞ひて、桃靑靈神と號を申下したりしに、又天保癸卯百五十年の周辰忌によりて、忝も二條殿より奏上なし給ひ、大明神の贈號を宇宙に普く及ぼし給ひ、益々和光いやましぬ。かくて維新の際、其靈を祀るに、忝も色の服を身にまとひ、烏帽子かぶりぬかづくも、俳諧正風を起立せし其功績を深く敬ふのあまりなり。

とある。然るに下總の人雙雀叟氷壺は嘉永二年此贈號を難じ（「俳諧龍雀」による）、

祖翁を何靈神と、近き頃いみじきことの如く思ひて、筆にものせ侍るを見たり。……祖翁は禪居士にてましくしかば、御心にはさらに嬉しともおもほし給はじ。同盟の人はゆめく申すまじきことになむ。

と論じてゐる。これに對して同國境町の文哉は、「舌切雀」に辯じていふ、

靈神は神靈也。此神靈まつればかならず來格するなり。俳席にも、祖翁の像をかけ、香を捻りて、敬をいたす。若神なしと云はゞ、尊像をかくるに及ばず。………禪宗に神なしと云はゞ、禪寺に達磨尊者又は梁の武帝をかくることは如何に。渠は頑なる神儒佛之道の神のごとのみ思ふや。云々

芭蕉の尊崇も至れり盡せりである。

七、續猿蓑に就いて

芭蕉歿後五年を經て、「續猿蓑」が出た。即ち元祿十一年五月、井筒屋の開版である。井筒屋の附記によると、本書は何人の撰であるかわからない。芭蕉遷化の後、伊賀上野芭蕉の兄松尾氏の許にあつたのを懇望して、やうやく世に弘める事が出來た。草稿だから、書中或は墨消し、或は書入れなどが多かつたが、一字一行を改めず、其儘版行したとある。

此集に就いては古來喧しい議論があつた。それは支考の僞書といふ説である。先づ越人は「不猫蛇」に、

芭蕉の自撰なりと訇る續猿蓑、片腹いたき事。あの樣なる埒もなき集、付やうの古さ、句の仕樣の惡さ、語路のわるさ、翁の句なりと、汝が作りて入れたる句、いかほどかある。其故自撰のなき證據は、汝が仕たる梟日記・笈日記などに、知らぬというては知り、知つたというては又知らぬといふやうなる、口の違ひたる云分どもにて知れたり。云々

と痛罵してゐる。支考は「削かけの返事」（享保元年）にこれを駁し、

そも〳〵續猿蓑は江戸の沾圃を撰者にて、其人は公儀の伺候人也。然れば此沙汰は公表の大事なり。此集は元祿七年の夏、伊賀の東麓庵にて、伊勢より先師の來れるを待つて、七八兩月の間の密撰也。その仔細は前猿蓑の實をほどき、炭俵集の虚を補へば、祖翁一代の法華經にして、凡夫の目にはなか〳〵見え難し。しかるを僞書の數に入れて、打越の運びのあしき句いかほどありと思ふぞ、知らぬ故にしたるものなりといへる、

めくらの蛇におぢぬたとへにて、俳諧冥加は此一巻にてつきぬべし。此集は翁の滅後に、再び清書もおそれあればとて、去來・丈草を兩奉行にて、草稿のまゝにて版行したれば、書て消したる所もあり。其時請取て版行したる井筒屋のむす子庄兵衛も、手代の橘屋治兵衛も、今無事にて京住せり。大切の事なればたづねきいて、祖翁と先師へ詫事のために、蒟蒻の白和でもして、靈供をそなへ給ひなば、未來罰舌の鉄はのがれぬべし。是は返答も恐入候。

と手酷しく打返してゐる。然るに越人はなほも「猪の早太」（享保十四年作）で之に答へて、

續猿蓑は江戸の沾圃撰者にて、元祿七年の夏、翁伊賀の東麓庵へ、伊勢より貴房の來れるを待て、七八兩月の間の密撰にて、前猿蓑の實をほどき、炭俵集の虚をおぎなへば、翁一代の法花經にして、凡夫の目には見えがたしとのいひぶん、盗人たけだけしとは是ならん。よし沾圃は猿樂にても役者にても、それは俳諧に入用なし。つら／＼此集を見るに、撰者は名ばかり、誰にもせよ、貴房の作にまぎれなし。何を隱す事ありて、密撰とは申さるゝぞ。察するに、翁に託して、名月二句ノ評などつくり入、支考は芭蕉在世にも、かく勝れたる門人なりしと、世人に奥深う思はせ、貴房が名利の助にせんとの趣向から、ひそかに編みたて申されけん。さなくば、なぜに板行の時、井筒屋の奥書のまぎらを止めて、此集翁の添削にて、撰者は則沾圃とか支考とか押出して披露せられざるや。心に邪あるが故に、隨分手づまをやられても、尻から嘘の見え透をしられず、……翁の法花經なんどとは勿躰なき喩にて候。凡ひさご集すら見るに用捨あり。況や炭俵集の如き撰者、其

人にあらざるをや。猿蓑とならべていはるゝ集にはあらず。……許六も續猿蓑を翁草稿かと思ひ、貴房がだましを一ぱい喰ひはくうたれど、あら野に眼をつけたるは、まだ見識によき所もあり。……

又曰、此集は翁の滅後に、再び清書も恐あればと、去來と丈草を兩奉行にて、草稿のまゝに版行したれば、……是はをかしき證據にて候。貴房の書れたる草稿を、再清書も恐あればとは何事ぞ。書て消したる所も、わざと書損へる文字も、皆例のまぎらかしと相見え候。去來・丈草ともに柔弱の內また膏藥、生きて居ても證據人には成がたし。殊に此世になき人也。次に井筒屋・橘屋の書林を證據に引るゝは、若輩千萬をかしく候。たとへば江源武鑑のうそ八百をも、佐々木家の實錄と思ひ、板行し商ふ類、續猿蓑やら贋猿蓑やら、井筒も橘も座頭に味噌とは是なるべし。もし寺田重德ごとき書林ならば、成程證人に成べく候。扨未來の沙汰は、猶若輩ながら、蒟蒻の白あへ地獄でも、豆腐のこくぜう地獄にても、それはそなたのお好き次第、彼地に於て御賞味あれ。且罰舌の外科へも先ヅ貴房御逢候て尤に存候。一笑……

文曉の「俳諧芭蕉談」坤之卷に、

卯七問、續猿蓑集は先師の撰に相違なきや。去來の曰、いかに。卯七曰、少し不審の事ある故たづね侍る。

京入や鳥羽の田植の歸る中

とは我句なり。是は先師遷化の翌年、先師の墓參せし歸時、作せし句なり。しかるに續猿蓑に加入しあるもいかにぞや。去來曰、されば續猿蓑は先師遷化の年七月、伊賀にかへり給ひし時、兄の松尾半左衞門殿、又

は猿雖・土芳ともく\此國にて一集なきは殘念なりと、しきりに口說申されし時、いかにもとて諾し給ひしかど、其年江戶にて炭俵集漸く春より六月までに成就し、諸國の發句も選び盡して、反古に殘りし發句纔に二百には足らず。卷ともにしかとしたる卷なし。幸に美濃の落梧が瓜畠集を出さんと願ひし時、贈り給ひし三卷の卷あり。然るに落梧身まかりて、集も空しくなりしかば、幸その卷に、伊賀にて猿雖が野分の一卷あるに、今一二卷加へて、小集にても出さばやと、我にも其事文通ありしなり。序も我に命じ給ひしなり。殊に卷頭に置給ふ卷は、猿みのにもれたる霜の松露哉と露沾公の發句ありて、日はしづかなる岡のと先師脇ありて、第三は露荷なり。第四句は沾蓬なり。第五句は沾德なり。然るに今梓にのせたるは、沾圃が發句にして、支考と惟然と先師となり。露沾公は岩城侯にて、支考・惟然は終に出會なし。しかれどもかく先師の書殘し給ふなるべし。いかなる心ありやしらず。又猿蓑にもれたるの發句、一部の卷頭にありてこそ、續猿蓑の標題も面白からめ。其上いさみ立鷹ひきすゆる嵐哉も、はじめ、流れのなりに枯るゝ名草と脇ありて、第三馬莧、第四先師にて、一卷ありしかど、卷中一體力なしとて、後に先師の仕替へ給ひし卷なり。四季の句とても、十の半もなかりしなり。夫故伊賀にてあつめ給ふ心ざしなりしに、難波よりしきりに迎へ申すにより、先とて八月初め浪花に赴き給ひしが、不慮に彼地にて遷化なり。我句とても、

瀧壺もひしげと雉子のほろゝかな　　去來

山の端をちから貌なり春の月　　魯町

なども、先師遷化翌年の句なり。すべて諸方の句を加へたるも此類多し。是は先師の志の空しくならん事を本意なしとおもへる人の、後にあつめ加へたるものならん。集の模樣を考へ見れば、心得ぬ事も多し。しかれども一派の集にまぎれなければ、何ぞこぼつべき事にもあらじ。僞作にはあらじ。集め加へたるものなり。必ず他に聞すべきことにあらず。

鶯笠の「芭蕉葉船」には、

續猿蓑を贋作といふ事、是あながちに贋作といふにあらず。翁編央にして難波へ下り、寂し給ふ故に、首尾をも遂げ給はず。草稿伊賀の無名庵にありしを、支考行きて編續せり。尤己が名の漏れたるを悔いて、歌仙の內他の名を己れにもりかへ、或は名月二句の評、並に今宵の賦などこしらへ入れたり。翁死後の編續なれば、己れが勝手にしたるなり。さればこそ「猿蓑にもれたる霜の松露かな」といふ句の卷は、續猿蓑の集名に於ける發句故、第一番に編置き給ひしを、猥に繰下げなどしたる故、此句何の譯やら知れぬ句となりたり、さりながら俳諧は翁の俳諧に相違なく、悉く斧正ありて、自筆の中淸書並に斧正の草稿と共に秘存せり。俳諧をも味ひ見よ。支考が手に及ぶ力にあらず。付肌も彼が筋ならず。將門人達の句は、翁死後の編繼なれば、滅後の句も何心なく入れ足したりと見ゆ。こゝに支考一つ不屈の謀あり。此集己れが名を顯し、翁の志を追ひなしたりとせば論なかるべきを、翁の手にてさせねば、己れが威光なきにより、唯此草稿のまゝを寫したる體にて、本書は己れ貰ひとり、寫しを翁の姉聟山岸半殘に與へ置き、時を經て井筒屋庄兵衞へ含めて、何

ぞ翁の遺書はなきやと伊賀を捜させ、件の草稿を探し當らせ、庄兵衞が奥書を加へさせて梓にのぼさせ、己れは飛退て知らぬ顏にて居たりしとぞ。然れども其事誰彼知りたる人もありながら、去來などは篤實にて口を閉ぢ、其外の輩もひそ〳〵言ふのみなりしが、越人ひとり大にからかふたりと聞ゆ。

積翠園の「俳諧或問」、七部集の事の條下に、

問曰、續猿蓑ははせをの撰にあらず。支考の撰なれば疑しといふ者あり。いかに心得べきや。答曰、疑はしと思はゞとるべからず。此一集採らずとも炭俵・別座鋪にても足るべし。然れども七部の集各はせをの門人の撰なり。後猿蓑斗支考なりとて、とらぬは其理聞えず。其上に滑稽傳にはせをの事を云へる所に、江戸にて保生沾圃をすゝめ、續猿蓑を手傳はして、伊賀にかへるとありて、其附合をも少しばかり出す。又去來抄に云、

涼しくも野山にみつる念佛かな　　去來

初め冠あり。ひいやりとなり。先師曰、かゝる句は全體おとなしく仕立る物也。五文字然るべからずとて、風薰ると改め、後猿蓑の時再吟の冠に直して、入句まし〳〵たりと見えたり。……去來・風國・許六・支考が說を以て是をとるべし。後人の說用ひがたし。又其續猿蓑の內にても取捨ある事は續猿蓑に不限。世々の集に取捨ある事勿論なり。

五明の「小夜話」に、

續猿蓑は翁世を去り給ふ後に出たるもの故、人の疑多し。其上右集の跋に、誰の撰なること知れず。伊賀の國の血縁の方より得たるを、其草稿の儘板行にせし由井筒屋重寛が書せり。然るを右の草稿は也寥といへる和尙今所持して仙臺にあり。此僧は翁の一家の人也。偖其草稿は蓮二房が手蹟也。然れば蓮二の竊に撰せしものか。夫等の事ある故にや、今世翁の俳諧を慕ふもの信じ難しといふなるべし。

なほ同氏の「落穗集」の序にも、續猿蓑の草稿は支考の筆跡で、仙臺の也寥和尙の所にある。和尙は芭蕉の血族で、件の草稿は土芳の家から出たなどとある。

何丸の「七部大鏡」に、支考が「俳かけの返事」の説を難じて、

續猿を法華とは舌長し。祖翁と密撰の書に、滅後の句々あるはいかに。「はかまきぬ聟入もあり年の暮」、此句すでに炭俵に出でたるを再入せしなど、かた〴〵以て心得がたく、又猿蓑の實を解くとは、死物狂ひの放言也。猿蓑こそ翁一代の髓腦にして、花實全備、蕉門の龜鑑、この一部にとゞまれり。炭俵の虛を補ふとは、尙々文盲の言樣也。俗談をつくして、輕き事炭俵にとゞまる。虛といふものはかうしたものにあらず。

云々

之に對して曲齋は「婆心錄」に陳じていふ。

白狂が俳掛は、越人が腹黑を憎み、笑中の刀もて打し物也。此故に越人口を閉ぢて再難せず。何丸は其文の虛實をしらず。偏固に思詰し故に、言を荒くしてかく論じけむ。續猿を法花といふ事は、許六既に賛しければ、

舌長くとも堪へなむ。滅後の句と巻頭の事は、芭蕉談の僞文に惑ひし尻馬也。そは前に論じたり。句再入の事は、俳諧の諸集及詩歌の諸集にも例多かれど、爰に再入の句を再入せしは殊に故あり。云々

とある。

以上の如く本書に就いては、古來甲駁し、乙辯じ、或は芭蕉の撰とする者、或は支考の僞書也と斷ずる者があつて、一定しないが、私の見る所では、本集は全く支考の僞作とも思はれないし、又芭蕉の密撰とも考へられない。內容の體裁からいふと、沾圃關係の連句は四卷もあり、發句も十九出てゐる所から考へて、撰者は寶生沾圃らしく思はれるが、芭蕉歿後その實權を支考に奪はれて了つた傾があり、撰者として影が薄かつたやうに見られる。芭蕉の選んだものを補正するなら、沾圃がやるべきであるが、支考に指を染められるやうでは、沾圃は支考ほど野心もなければ、勢力もなかつたものと思はれる。沾圃は服部氏。京の能役者で、通稱寶生左太夫。野々口立圃は母方にゆかりある人なので、立圃の俳系をつぎ、三世立圃と改めた。元祿六年頃芭蕉に入門。享保年間に歿し、七十餘歲であつたらしい。曰人の「諸生全傳」に、「馬莧ハ二男カ。嫡、俳名里圃、云々」とある。許六の「歷代滑稽傳」に、「江戶にて保生沾圃をすゝめ、續猿蓑を手傳して、伊賀に歸る。」とあるから、芭蕉は伊賀出立前既に續猿蓑編成の意志があつたやうで、それを沾圃にやらせた事が分る。芭蕉は當時野坡の手から炭俵を出させて置きながら、何のために沾圃に後見して撰集を作らうと考へたかは詳がでないが、或はそれは沾圃を引立てて、三世立圃の名をつがせるため、記念として一の撰集を作らせてやらうといふ師弟間の情誼からであるかも知

れない。芭蕉が伊賀へ出立したのは、元祿七年五月で、その頃は未だ炭俵は刊行されなかつたが、沾圃の集へ送るべき連句・發句は、大方炭俵へ取られて了つたから、材料に乏しく、そこで沾圃・馬莧・里圃等の連句三四卷を先づ添削して入れる事とし、發句も廣く集めて入れるやうに準備して居る中、芭蕉は五月伊賀へ行く事となり、次で大阪で病死して、續猿蓑は未定稿のまゝ中絶して居つたものかと考へる。支考の「削かけの返事」の説は信じられない。伊賀の東麓庵に於ける密撰といふが、「削かけの返事」には東麓庵とあるし、「俳諧古今抄」には、「元祿甲戌の秋にや。伊賀の西麓庵にいまして、後猿蓑の撰集のついでに、云々」とあつて、言葉が一致して居ない。かく一致しない所が、支考説の疑はしい點である。東麓庵・西麓庵は共に窪田猿雖の草庵で、元祿五年十二月三日附意專（猿雖）宛の手紙に、芭蕉の命名した事情が記されてゐる。併し此兩庵は、勝峯氏の説によると、其名のみありて、庵を構ふるに至らなかつた（蕉門分布史觀）といふから、有名無實な草庵らしい。東麓庵・西麓庵の撰といふよりも、兄半左衞門の後園にある無名庵に於ける點檢と云つた方が信じられさうである。それは竹人の「芭蕉翁全傳」に、「同じ秋（元祿七年八月）新庵（無名庵）にて、續猿蓑草稿吟味のころ、句の仕かた、人の請（ウケ）などの事、土芳言ひ出て、貌に似ぬ發句も出よはつざくら。」とあるし、又前に引用した鶯笠の説、即ち「草稿伊賀の無名庵にありしを、支考行きて編續せり。云々」とある説から見て、此方が事實らしい。或は其時兄の半左衞門や猿雖・土芳などから、伊賀に一集なきは殘念であるといふやうな話が出たかも知れない。併し私は未だ「芭蕉談」に於ける去來の説に就ては疑念を持つてゐる。「續猿蓑」には芭蕉歿後の句が入つてゐると云つて、卯七

の「京入や鳥羽の田植の歸る中」、或は去來の「瀧壺もひしげと雉子のほろゝかな」、又は魯町の「山の端を力貌なり春の月」を示してゐるけれど、京入やの句は、去來・卯七の「渡鳥集」に、「元祿のはじめ都にのぼり、落柿舍を扣いて」と前書して出てゐる。他の二句は未だ調べては見ないが、卯七・去來共撰の「渡鳥集」に、元祿のはじめの作としてある句を、卯七が元祿八年の吟と誤るわけはないと思ふ。此一事から推しても、芭蕉談の說は、後人の作爲の加はつたものかといふ疑念が深かめられる。それに芭蕉談の說では、伊賀を中心とした撰集といふ意味になつて居て、江戸の沾圃を主とする撰集ではなくなつてゐる。猿雖や土芳に撰集發起を口說かれて、「續猿蓑」を出す氣になつたといふならば、猿雖でも土芳でも、伊賀衆の有力者を撰者にして、芭蕉が句稿を點檢しさうなものだが、內容を見ると、伊賀衆よりも、撰者は江戸の沾圃にあつたやうに考へられる。美濃の落梧の「瓜畠集」に贈つた猿雖の野分の一卷（七月廿八日、猿雖亭應席、あれ〳〵て末は海ゆく野分かな猿雖、鴿のかしらをあぐる粟の穗　芭蕉。以下配力・望翠・土芳・卓袋の歌仙）があるから、それに一二卷加へて出さうとあるが、上梓された「續猿蓑」には、その歌仙は入つて居ない。之は或は支考が後に刪除して、自分の作つた「今宵ノ賦」の附いた曲翠亭の歌仙と入れ換えて了つたものかも知れない。去來は柔弱で、內股膏藥であると、越人から罵られたり、又篤實で、口を閉ぢたと鷺笠から傳へられて居る位だから、去來は支考の手を附けた程度は知つてゐる筈だのに、芭蕉談の去來說と實際出來上つた內容とが一致しないのも變ではないか。又芭蕉談によると、卷頭に置いた卷は、「猿蓑にもれたる霜の松露哉」露沾の發句で、脇芭蕉、第三露荷、四句目沾蓬、五句目沾德であつ

たが、刊本には發句沾圃、脇芭蕉、第三支考、四句目惟然で、「然れどもかく先師の書き殘し給ふなるべし。」とあつて、如何にも怪しい言方をして居る。露沾は磐城侯で、芭蕉も其前では煙草を吸はなかつた程、禮義を正された殿樣であるから、芭蕉が勝手に露沾の名を削つて、沾圃の句にする譯はあるまいし、篤實の去來が又そんな事を言ふ筈もなからうと思ふ。此卷の發句は「續猿蓑」の題號のよつて起る本であるから、卷頭に置くべき事は、必しも去來や鶯笠の言を俟たないが、刊本には四番目に下げられてあり、且つ沾圃の名は發句だけで、脇下以芭蕉・支考・惟然の三吟歌仙のやうになつて居る。「續猿蓑」の題號を知る大切な歌仙に、沾圃の句が一句しか出ないといふのも、頗る怪しむべき事で、それに就いて何か支考の工作でもありさうに思はれる。或は鶯笠說の如く、自分の名の漏れたのを悔いて、歌仙の內他人の名を自分の名にもりかへたのかも知れない。なほ一歩突込んで言へば、支考が露沾の發句を沾圃に書き換へて、以下芭蕉・支考・惟然の三吟のやうにしたので、わざと遠慮して、四番目に置いたのかも知れない。先師の書殘し給ふなるべしは、支考が自分の罪を芭蕉になするべく、去來に言はせた作爲かも知れない。李東が、八九間空での卷を添刪した芭蕉の眞蹟稿本を、伊賀の士得から得て摸刻した「八九間雨柳」といふ書を出版して居るが、前述の鶯笠說によると、他の卷も同樣添刪した草稿が殘つて居るらしいが、「俳人芭蕉」引用の曰人說には、「蓋翁所書初之三歌仙而已矣」とあつて、猿蓑に洩れたるの卷には言及して居ない。

要するに、私の考では、越人は去來を柔弱だの、內股膏藥だのと罵つて居るが、それは僻した感情論で、むし

ろ去來は支考に利用されたもので、支考の編續に就いては詳知しなかつたのであらう。例へ若し知つて居たとしても、去來は隱逸的な人物だから、強ひて名聞苦しい問題に立ち入つて、人と爭ふ事を好まなかつたやうに考へる。それは芭蕉歿後の句の竄入もあつたらうし、他人の名を換えたり、卷を勝手に入れたり、其他の越權沙汰はあつたらうが、それは支考一人の細工で、知らぬ顏をしてゐる去來の罪ではない。井筒屋の奧書は越人の言ふやうに信じられるものでない。あれは鶯笠說のやうに支考と井筒屋との相談づくであらう。原の芭蕉の草稿は自分が取り、寫しを半殘に與へた云々といふやうなからくりはやり兼ねぬ男である。仙臺の也參禪師が支考筆の「續猿蓑」を持つてゐるといふが、それは半殘に與へた寫しであらうか。五明說に、それは土芳から得たといふと、半殘から土芳に傳はり、それが也參の手に入つたものか、そこは詳かでない。とにかく支考は蔭にかくれて隨分勝手に振舞つたらしい。一寸內容を調べて見ても、支考の勢力はあまりあり過ぎる。例へば曲翠亭の歌仙を入れたり、自分の句が二十四句も入つたり芭蕉の名月の句を批評したり、卷末芭蕉の句前に、自分の句を二句も並べたりする所を見ると、故人が本集を七部集から除かうとするのも無理ならぬ次第である。

自撰・僞作の爭はあつても、本集の價値に就いては古來一般に認められて居た。支考は先づ之を法華經に比して、越人や何丸から罵られてゐるが、許六は、「炭俵・別座敷の風熟吟せざる人、いかで後猿の風に飛入事を得んや。云々」（自讃之論）とか、或は、「其後師上洛し、伊賀に籠りて、後猿とかや撰し給ふと聞く。さゞゐのうまみをぬきて、遺經の俳諧を殘せりと聞けども、板出さねば知らず。云々」と論じてゐる。去來も「贈晋氏其角書」

中に、「その後（ひさご・猿蓑の後）また一つの新風を起さる。炭俵・續猿蓑なり。」と推稱してゐる。併し私は本書を以て「炭俵」の續編とは考へてゐない。むしろ本書は「猿蓑」風の輕く脫落したもので、「猿蓑」以後の新風とすれば、本書は「猿蓑」の續篇と見るべく、炭俵とは多少趣を異にしてゐる。

本書は上下二冊に分れ、上卷は連句、下卷は發句を收めて居る。連句は歌仙五卷（芭蕉・沾圃・馬莧・里圃の四吟歌仙一。馬莧・沾圃・里圃三吟歌仙一。里圃・沾圃・芭蕉・馬莧四吟歌仙一。沾圃・芭蕉・支考・惟然の歌仙一、但し沾圃の名は發句に見るだけ。野盤子支考の今宵賦。附、芭蕉・曲水・臥高・惟然・支考五吟歌仙一）發句は四季の句五百十九（芭蕉・支考・沾圃・其角・惟然・嵐雪・丈草・曾良・北枝・萬子・曲翠・正秀・洒堂・土芳等、內芭蕉二十五・支考二十四・沾圃十九）である。次に發句を抄出する。

花散て竹見る軒のやすさ哉　　洒堂
曇る日や野中の花の北面　　猿雖
ぬり直す壁のしめりや軒の花　　卓袋
濡椽や薺こぼるゝ土ながら　　嵐雪
病僧の庭はく梅のさかり哉　　曾良
寢所や梅の匂ひをたて籠ん　　大舟
鶯や柳のうしろ藪の前　　芭蕉

瀧壺もひしげと雉のほろゝ哉　去來
しら魚の一かたまりや汐たるみ　子珊
白魚をふるひ寄せたる四ツ手哉　其角
うき戀にたえてや猫の盜喰　支考
振落し行や廣野の鹿の角　澤雉
白桃や雫も落ず水の色　桃隣
花さそふ桃や歌舞妓の脇踊　其角
ちり椿あまりもろさに繼で見る　野坡
春雨や枕くづるゝうたひ本　支考
のぼり帆の淡路はなれぬ汐干哉　去來
出かはりや哀勸る奉加帳　許六
黑ぼこの松のそだちや若みどり　土芳
春の日や茶の木の中の小室節　正秀
鶯や雜煮過ての里つゞき　尙白
萬才や左右にひらいて松の蔭　去來

時鳥なくや湖水のさゝ濁り　丈草
冷汁はひえすましたり杜若　沾圃
夕顔や酔て顔出す窓の穴　芭蕉
蘭の花にひた〳〵水の濁りかな　此筋
朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉
すゞしさや竹握り行藪づたひ　半残
涼しさや椽より足をぶらさげる　支考
煤さがる日盛あつし臺所　怒風
粘ごはな帷子かぶる晝寐哉　惟然
名月に麓の霧や田のくもり　芭蕉
更行や水田の上の天の川　惟然
百合は過芙蓉を語る命哉　鳳麥
枯のぼる葉は物うしや鶏頭花　萬乎
折〳〵や雨戸にさはる荻の聲　雪芝
竈馬や顔に飛つく袋棚　北枝

蜻蛉や何の味ある竿の先　探丸
秋風や二番烟草のねさせ時　游刀
早稲刈て落つき顏や小百姓　乃龍
一霜の寒さや芋のずんど刈　支考
更る夜や稲こく家の笑ひ聲　萬乎
けふ斗人もとしよれ初しぐれ　芭蕉
冬梅のひとつふたつや鳥の聲　土芳
野は枯てのばす物なし鶴の首　支考
こがらしや刈田の畦の鐵氣水　惟然
片壁や雪降かゝるすさ俵　園吟
節季候や弱りて歸る藪の中　尙白
寒聲や山伏村の長づゝみ　仙杖
かなしさや麻木の箸もおとな並　惟然
その親をしらぬ共子は秋の風　支考
別るゝや柿喰ながら坂の上　惟然

大名の寢間にも寢たる夜寒哉　　許六

本書の發句は輕みの調に於て、炭俵に似てゐるけれど、炭俵よりも野趣があつてよい。炭俵は俗な世間的の人事を淡く輕く扱つてゐる所が特に目に付くけれど、本書は田園趣味の輕く寂びた句が多く、人事でも田舍臭い風がある。本書を野坡等の「炭俵」の續編と見る事は出來ない。輕みにも種類がある。淺俗な句も見えるけれど、大體地味な寂びがある。句は割合に統一がついて居る。

連句。卷頭の八九間の卷は相應な出來である。變化も巧であるし、緩急もあつて面白い。然し名殘の表の中程に叙景の句が出てもよいかと思ふ。初裏の一句目あたり、

狗背かれて肌寒うなる　　芭蕉
澁柿もことしは風にふかれたり　　里圃
孫が跡とる祖父の借錢　　馬莧
脇差に替てほしがる旅刀　　芭蕉
煤をしまへばはや餅の段　　沾圃
約束の小鳥一提賣に來て　　馬莧
十里あまりの餘所へ出かゝり　　里圃

曲齋は此卷を集中第一なりと言つて居る。次の雀の字やの卷はどうも面白くない。芭蕉が加はつて居ないせい

か變化に乏しく、且つ句の情趣が同じ調子である。叙景の句が出てすこし氣分が輕くなるかと思ふと、すぐ複雜した人事の句に移つて行つて、重くるしい感じがする。曲齋は「婆心錄」に、「此卷逃句多ければ第三也。」と言つてゐる。いさみ立の卷はこれも面白くない。初裏の七句目あたりから、叙景的な人事が續いて氣ぬけがする。初裏よりも却つて緊張してゐる。此卷は芭蕉が第三より外に出ないから、面白く行かなかつたのであらう。同書に、「翁存命し給ひて、出梓あらば、拔きかへ給ふべけれど、滅後草稿の儘に出したる事なれば、せむすべなし。」とある。猿蓑にもれたるの卷は集中第一である。變化に緩急があり、俗事や景色の配合もうまく按排されてゐる。

初裏の一句目あたり、

通りのなさに見世たつる秋　支　考

盆しまひ一荷で直ぎる鮨の魚　惟　然

晝寢の癖を直しかねけり　芭　蕉

聟が來てにつともせずに物語　考

中國よりの狀の吉左右　然

朔日の日はどこへやら振舞れ　蕉

一重羽織が失てたづぬる　考

きさんじな靑葉の頃の樅楓　然

山に門ある有明の月　蕉

初あらし畠の人のかけまはり　考

この變化の波が面白い。最後の夏の夜やの巻はあまり面白くない。初裏の八・九・十・十一あたりの句が、一體に力がない。だれて居る　變化の緩急もあまり際立つて居ない。「同書」に、「此卷集中第一の出來物也。」とあるが、私はさうは思はない。本書の註釋は何丸の「續猿蓑註觧」が特別なもので、其他は七部集の註本中に解釋されてゐる。

第八章　芭蕉の傳書

一、二十五箇條　半紙本　一册　享保二十一年刊

芭蕉が去來に與へた傳書だと云はれて居る。奥書に、

右者俳諧之新式有二二十五ケ條一。最我家之管目也。卽於二落柿舍一自書而與二去來一。見レ之識レ之可レ明二自己之俳諧一。右不レ可三傳二寫他人一。最道之尊重也。

芭蕉庵

干時元祿七甲戌六月　日　　桃青判

とある。併し此奥書は疑はしい。許六が死ぬ十二日前に書いた「俳諧指南」の中に、「近年二十五條の秘訣など、去來より相傳したりとして、金銀をむさぼり、知らぬ人をたぶらかす由、沙汰の限り、僞にて大うそなり。愚老が宇陀ノ法師選する時、二十五條ばかりの秘訣ある由、書きくれよと賴む故に、書き記したるものなり。俳諧大秘訣といふは、愚老一人に傳へたまふ二卷の書よりなし。云々」とある。死ぬ前に言ひ殘した詞であるから、虚談でもあるまいが、今此説を眞とすれば、本書の奥書は支考の揑造で、支考が許六から書いて貰つたものを、芭蕉

が去來へ傳へたものと書直して、去來歿後去來の妾へ乾金十五兩で賣付けた事となるが、鶯笠の「芭蕉葉ぶね」によると、「二十五ヶ條を貞享式といふ事、いつの世よりの誤にや。是は翁去來が所望によりて、長崎卯七へしるし與へ給ひしものを本として、或はおのれ翁に聞き、或は同門に語り給ひし事をも、見聞きして書き集め、それにおのれが了簡をも加へて小冊とし、翁の奥書を贋して、正風裁錦と名題し、賣り歩行きたるものなり。後におのれが一派を立つるに至りて、名題も替へたりとぞ。又別に翁の旨と、おのれが了簡と混じて、こしらへたる新式あり。板にはせず。翁の遺書とて寫させて、金銀をむさぼりしなり。定めて今も彼一派には持ち傳へるならん。是を名けて貞享式とは申すなり。」とあつて、二十五ヶ條は芭蕉が去來へ書き與へた事にしてゐる。許六は自分が書いてやつたものだと言ひ、鶯笠は芭蕉が去來に附與したものだと言つて、何れが是なりや詳かでないが、芭蕉の說を本にして、それを支考が種々改竄して、まとめたものである事は事實らしい。第一文章が支考の筆である。し、內容も土芳の「三冊子」や北枝の「山中問答」其他に出てゐる說を加入したり、或は附句の趣向を定める法などといふ自說を交へたり、種々按排して作つた跡が見える。越人の「俳諧不猫蛇」に、そこの僞を指摘して、「又曰、此故に我翁は趣向を定むる法を立て、二十五ケの一條とはなせり（支考、「十論」說）と。いふに不及僞書也。先づよく聞け。趣向定むる法とて、句をするに法が定まるものか。……汝其句のあしらひのやうに定むる法といふ、先づ芭蕉になし。定むるも當流ではないぞ。二十五ケの一條ともに妄言也。趣向といふもの、其人の心〲にて、泉の湧く如く、其作意・働は極まりなし。前にも三法の、爰にも趣向定まる法のと馬鹿をいふ。云

々」とあるが確論であらう。但し自說の按排、同門說混入があるからと云つて、本書を全然僞書として取扱ふ事は誤つてゐる。元來芭蕉には二十五ケ條の口訣があつた。「宇陀ノ法師」當流活法の條下に、「廿五ケ條の口訣は、先師の奥儀にして、是を知らざれば、俳諧の道にくらし世に執心の人なき事を、先師常になげき給ふ也。」とあるから、あるにはあつたが、その原說の內容が分らないから、支考の改竄した程度も知れないので困る。本書は又一名「貞享式」・「新式」・「白馬經」の名によつて傳へられて居たが、之も鶯笠の說によると、「二十五ケ條」は始め「正風裁錦」と題して賣り步いたもので、別に芭蕉の說と自說とを混入した新式があつて、之が貞享式であると云ふから、新式は貞享式の別名で、「二十五ケ條」は新式・貞享式と關係がないやうに見える。「古今抄」に、「再撰貞享式」といふ名があつて、式の項目は「二十五ケ條」より遙かに多く、又內容も違つてゐる。「白馬經」といふ名目は「二十五ケ條」の別名であらう。支考に、二十五ケ條の註書があつて、一名「白馬奥儀解」とあるから、「白馬經」と「二十五ケ條」は同一書であらう。

本書の內容は、俳諧の道とする事、俳諧二字の事、虛實の事、變化の事、起定轉合の事、發句の切字ある事、脇に韻字ある事、第三手爾葉之事、四句目輕き事、月花の事、花に櫻つくる事、當季を案ずる事、二季に渡るものゝ事、發句の時は季に用ふ事、發句蒙きやうの事、附句案じやうの事、趣向を定むる事、戀の句の事、切字に口傳ある事、掛合の事、辛崎の松の事、鳶に鴉の句の事、宵闇の句の事、名所に雜の句の事、かなづかひの事、以上である。本書の註書に、支考の「芭蕉翁廿五條解」(一名白馬奥儀解)があり、「俳諧文庫」の「續俳諧論集」、

中に收められる。又曲齋の「貞享式海印錄」にも詳しい解說がある。本書は石兮の「蕉門七書」に覆刻されて居る。

一、梧一葉　半紙本、一册　享保十六年刊 寬政八年再刻

芭蕉庵桃青著とあれど、僞書である。千之の跋によると、家に傳はつたものを、書肆に乞はれて出版したとある。連俳の法式、附句、切字等百十餘條に渉つて說いたもの。四時庵紀逸の序、柿園青流洞の跋が見える。江戶庵に行はれた傳書だと云はれる。再板本の卷末に、柿園藏書目と題し、俳諧桐一葉抄、五册とある。

一、俳諧新々式　半紙本一册、刊年未詳

闌更の開版である。奧書に、

新式今案之大用、連歌多々爲俳諧用。拾集歌名新式爲。此壹册吾家大事、極之無。他漫傳之、可蒙和歌三神御罸者也。○（不明）莫重千金。仍如件

芭蕉翁桃青在判

元祿六癸酉春三月　日

森川氏許六丈

五老井許六印

右相傳之以本寫遺處也

寶永六己丑臘月　日

とある。芭蕉より許六に傳へ、許六より雲鈴に傳へた書である。內容は新式今案の大用を記したもので、連歌の起源・式目・詞寄・制の詞等を說く。

一、白砂人集　小本一册　安永頃刊

家藏の寫本に、芭蕉翁秘傳 俳諧白砂人集 とあるが誤である。卷初に、「此一卷古賢連歌の至極を記し、過にし天正八つの比にや、三井寺にて法橋紹巴の言（玄）仍にわたさるゝとて、筆を染めたまふを秘寫して、寶とすといへども、道に深き門弟子二三にあたふ。必ず汝が寶とせよ。人にしらする事なかれと。仍て愚書をまじへて、白砂人集と號す。」とある。貞德の秘寫であらう。奥書に、

自所持之書物相傳之申者也

芭蕉翁

桃青在判

旹元祿六癸酉三月　日

森川許六丈

右相傳之本寫遣所也

許六判

于時寶永六己丑臘月　日

摩詰庵雲鈴丈參

とある。貞德から季吟へ傳へ、季吟は之を芭蕉に傳へ、芭蕉はそれを許六に與へ、許六は雲鈴へ傳へたのである。內容は、連歌切字・面八句心得・手爾於波の秘事・出席心持・七ツのや・三ツのし・らんどめ等、各項證句をあげて說明してゐる。末に四季の詞の解說があるが、之は「三湖抄」の說を取つて付けたものらしい。

一、**俳諧相傳名目**　半紙本一册　寫

奧書に、

右芭蕉翁の遺式無殘令書寫畢

享保九甲辰卯月十六日

とある。何人が傳へ、何人が傳へられたか、不明であるが、傳書は事實である。或は露川の「名目傳」の類であらうか。內容は、發句の切字、脇の附方、第三とまり、月花の事、戀の句、不易流行、八躰の附方、五箇の付所、賦物、執事、本式の作法、執筆の法、懷紙折樣等に涉り、例句をあげて說明する。

一、**蕉門十六篇**　半紙本一册　寫

奧書に、延寶七年正月　桃靑とある書と、元祿七年正月とある書とあるが、何れも信じられない。雪中庵へ傳へた書である。專ら發句に就いて說いたもので、內容は、不易流行理論・理窟格式の體・算用合の場・句の𠬝・

句のねばり・常のかたち・たゞ言の論・取留る場・發句の論・あく場・ぬく場・句の苦み・未來を取る句・手はなつ場・氣色一轉・心一轉、以上十六篇を收めて居る。「蕉門七書」の石兮の序に、「十六篇はまことに翁のかゝれたれど、中ごろ思ひかへて反古とせられけるを、路通がひそかに盗み出て、世に廣うはせしものとぞ。云々」とあるが、それは芭蕉が加賀の北枝へ傳へようとした、蕉門十七體の附句の教の事で、本書とは全く違ふ。本書は發句の敎、十七體は附句の敎である。

一、**俳諧三部書**　半紙本三册　寶暦九年刊

俳諧之秘記・袖珍抄・本式并古式の三部を合せたもので、はせを在判とあるが、信じられない。誹諧之秘記は「蕉門七書」所收の「十六篇」と同一であり、「袖珍抄」は宗養が三好長慶に贈つた「秘袖抄」であり、本式・古式は、昌琢・季吟の說と、會席の心得を述べたものだと云はれてゐる。

一、**幻住庵俳諧有也無也關**　半紙本一册　明和元年刊

卷初に芭蕉とあり、末に幻住庵三世主人在判とある。內容は、十八體引手爾波・發句竪横并狂句仕立樣之事・姿情の事・虛實正事・不易流行之事・發句五品の事・發句八體之事・奉納傳三品・附合八體の事・附合八體の七名・附合八體の轉句・俳諧五花の口訣・俳諧月之傳・七夕傳の事・月次の月の事・名所前後の事・本式表十句之章、以上十七ケ條を收める。古風の說に芭蕉の句を引用したもので、芭蕉の傳としては、全く信じられない。

一、**山中問答**　半紙本一册　刊年未詳

元祿二年秋、芭蕉が加賀の山中溫泉滯留中、北枝に教示した說を、北枝が覺書風に手記したもので、後秋江・鶯村の出版にかゝる。其中前半が芭蕉の談で、俳諧大意、道理と理窟との二種ある事の條下に、すべて十九條の說を揭げて居る。鷗里の「三四考」乾之卷に、「北枝考」が收められ、之には「山中問答」の芭蕉談よりも詳細に述べられてゐる。「山中問答」は旅中談であるから、傳へ洩れもあつた。一例であるが、十月十三日附の芭蕉から北枝へ宛てた手紙に、

松岡茶店にての句、物書て扇引さく別哉と直し申候。脇、てには留めにて候。てには留めは脇にては草にて、神祇・追善・祝儀・本式はいかい・貴人の挨拶、すべて我より上たる人の發句にはせぬ事に候。我も只今にては其元の師に候間、挨拶の脇にて、てには留めはよろしからず候。外より彼此申者御座候ては、兩人ともにふつゝかに見え申候。山中問答にも三ツ物の事御尋なく、我も心付不申候。此度委しく三ツ物傳別帋にて申入候。是にて第三文字留め、草の事も能わかり申候。山中問答へ御書加へ可被成候。去來・丈草・凡兆・正秀なども問答見たがり申候。云々

とある。三ツ物の法式に就いて言ひ落した事にでも、別紙に認めて送つてやる位の熱心さであるから、いろ〳〵と丁寧に敎へてやつたものかと想像される。「北枝考」の方が、此點に於て「山中問答」より、詳細に記されてゐるが、一方に又北枝の自說も加はつて居つて、全部が師說とも思はれない。本書は「俳諧文庫」の「俳諧論集」、「俳書大系」の「蕉門俳話文集」中に覆刻されてゐる。

一、附合十七體

芭蕉が北枝に附句の法を教へようとした事に就いて、當時種々の噂が起つて、或は路通が芭蕉から之を傳へたとか、又は千那が傳へようとしたとかとあつた。之に就いて先づ芭蕉と北枝との關係をいふと、芭蕉が此教を北枝に傳へようとした事は事實であつた。六月廿七日附、北枝に與へた芭蕉の手紙に、

附合十七躰別紙に記進候。初心には見せ申されまじく候。術のかなはぬ内に、此味をつけんといたし、却て一句もとゝのはず、附意もしれぬ候事に相成ものに候。又むづかしきものなり、斯る味とてもかなふまじと、退く人もあるものにて、術かなひ候後に扱ひ候へば、一卷のはこび甚むづかしきところにて、人のつけなづみたるを、或は響、或は情などにて起して付て、變化おもしろく成申候。さもなき人はうちこし三句を恐れて、つまる處はいつも〳〵逃句のみ致し候は初心に見え、巧者おこして二三句も附たる上に無理に付るも、炎天に砂道をたどるごとくなるものに候。能々御考御扱被成候はゞ、鬼に鐵棒にて有之候。門人のうちにも五七人ならでさたいたし不申候。名高くても付合の術さほどになき人、却て迷ひ可申候と存候故に候。かくし申にては無御座候。十七躰を得たる上は、千變萬化の術を得る事に候。只附くと附かぬといふ事ばかり知りて、附合は千變萬化と口にていふ人御座候。をかしく候。十七躰の法も知らずして、何とて千變萬化の働が出來可申や。百韻・千句に及びても、附心一二躰を出不申候。知りたる者は笑ひ候。小器ははやくみつる輩多く、後には人々あけて通し、相手にならず。只四五人同心の連中にて、互に他をそしり、高慢になり、陰にて俳

諧氣違ひなどと、名を附けられ候も、あさましく候。御連中よろづ御しめし可被成候。

六月廿七日　　はせを

結ぶよりまづ齒にひゞく淸水かな

北枝様

とある。實に道を說くに懇篤な手紙である。併し芭蕉は後になつて此書を破棄して了つた。それは初心のまどひともなつて、却て悪い結果を招く恐があると考へたからであつた。去來の「旅寐論」の餘評に、

或人問云、蕉門の附句十七體の敎ありとなり。一とせ路通此浦に來りて、人々に傳授する。定めて此事を聞き給はらん。去來答曰、十七體とやらん、四體とやらん、書きたる文を破りたまふ事はうけたまはり侍る。是を傳受し給ふ事は知らず。先年野水先師に語りて曰、近來大津の連衆名護屋に來りて、蕉門十七躰の附句不ㇾ殘傳受し侍るよしを申す。名護屋の連衆かつて信ぜず。もしかゝる事も侍るや。先師の曰、これ誠に斗方もなきことなり。先年加賀の門人何がしが許より、常に遠國に侍れば、親しき敎を受くる事もかなはず。願くは附句の體書き記し示し侍るべき由を望む。是がために附句の大數を書出し侍れども、如ㇾ此記さば、かへりて初心のまよひあるべしと思ひとりて、終にその書をやむ。さだめし反古のはしを拾ひ見て、是をいふなるべしと大笑ひしたまへり。思ふに此文をとゝのへ給ふは、大津にての事也。路通久しくかしこに侍れば、その文を見て、そのむねを知らずして、みだりに遠境の人に傳ふなるべし。云々

とある。路通が長崎へ來て、芭蕉の傳授をふり廻すなどは面白い。江戸や名古屋では人も信じないから、遠い田舍へ行つて、したり顔に芭蕉の教を說く所、路通の面目躍如としてゐる。大津の連衆といふと、智月や乙州などであらうが、路通と乙州は割合に親しいやうだから、乙州も路通のほらをまに受けたと見える。なほ「去來抄」に、

宇鹿曰、先師十七の附方路通に傳授し給ふと聞く。去來曰、遠境の門人の願に依て、附方を書出し給ふ。されど後々はせをが附方は、是に限りたりと、人の迷ひならんと、之を捨てらる。其書出し給ふ分、十七ケ條とやらん聞えたり。是を傳授としたまふ事を知らず。大津にこの事とやらむなれば、路通若し其反古を拾ひ取りて、人に教ふるにや。許六曰、此事を願ひたるは千那法師なり。

千那が路通に教を乞うたとすると、路通も定めし得意であつたらうと思ふ。此千那には別に芭蕉の傳書があつたさうだ。樓川の「俳諧獨稽古」に、俳諧の二字の事といふ條下に、一書の說を掲げ、芭蕉が俳諧の俳の字を人篇に定めたといふ說を述べて、「其眞跡千律師遷化の時、遺物として予(白翁)に賜ひたるうちの一品にして、則今に家珍とす。云々。右は千那より門人白翁へゆづりたる遺書にある趣にして、白翁八十二歲の時、明和四年に記したる書にあり。」とある。果してかゝる傳書が芭蕉にあつたかどうかは詳かでないが、かゝる說は支考などの言ひさうな事で、信じられる說でもあるまい。

一、高山麋塒への傳

白亥の「俳諧眞澄の鏡」に掲げられた教示で、芭蕉が高山傳右衛門へ與へた手紙の中に見えて居る。はじめの

段は芭蕉が槃塒の句風を批評した言で、俗語の遣ひやうが古風であるとか、一句を細工してはいけないとか、附句が前句に全體にはまつて、古風中興のやうであるとかと云つて、才丸や其角の附句を示して居る。次以下は古風の法式を教へたもので、本式俳諧之次第、つゝ留り・て留り・に留り・韻字留・らん留等の式、切字の制、花に櫻付けやう等に就いて說いてゐる。何時頃の傳だか分らないが、延寶の末か、天和時代のものであらう。芭蕉眞蹟として「眞澄の鏡」に出て居る。

一、梅の鎖

洒堂が芭蕉から傳へたといふ傳書であるが、僞書であらう。信じられない。九十九庵風之の「誹諧耳底記」の文下の序に、亡父風之膳所の洒堂と親しく、師弟の如く睦しかつた事を述べて、「或時翁在世に、蕉門の未來記とて記し置き給へる、梅の鎖の秘書を傳はらん事を望まれけるに、洒堂の曰、さればよ。その書は今に我家に秘め置くといへども、昔祖翁予に對して、梅の錠汝と我と鍵一つと示し置き給へる書なれば、今日に至りて誰に向ひてか開くべき。たゞ年比かたり聞かするこそ、みな梅の鎖の心なりとありけるより、云々」とある。芭蕉の名に假託した洒堂の著であらう。

第九章　誤傳された芭蕉の句文

一、發句・連句

芭蕉の句の最多く誤傳されたのは寛文時代であつた。それは當時芭蕉の宗房號に幾人かの同名異人があつて、其等の句と混同されたからであつた。之に就いては既に第一章の各條下に詳說して置いたからこゝでは畧する。以下專ら延寶以後の句に就いて正誤する。芭蕉の發句・連句の正誤は、勝峯氏の「芭蕉俳句定本」(大正十二年刊)の中、「作者誤傳の部」に揭出されてゐるから便利である。私も大體之に據つたが、自分で調べたものを參考した所もある。

後人の集めた芭蕉の句集或は全集に、「泊船集」・「芭蕉句選」・「芭蕉句選拾遺」・「芭蕉翁句解參考」・「俳諧一葉集」等は有名であるが、誤傳は依然として改められて居ない。「句解參考」の附言に、「宗房と名乘るもの、京都・伏見・河内及び祖翁四人あるを、只宗房とあれば、其家々の筆記に留置、それよりこれへ傳へて、皆祖翁の初名と心得たればなり。されば餘の宗房の句をばけづり捨て、云々」とあるが、それでも誤傳は殘つてゐる。布碩の「誹諧諸集訂誤」(天明二年刊)によると、「泊船集」は校合が麁末である。「芭蕉句選」、之も一向杜撰なもので、水

取やとあるべきを、水鳥などと言いてゐる。「芭蕉句選拾遺」は、上の二部に比して精撰のやうだが誤はある。普船の句を芭蕉の句として入れて居るなどとある。「俳諧一葉集」は從來唯一の芭蕉全集として認められて來たが、それでも寛文時代の芭蕉の句に、同名異人の宗房の句を多く入れてゐる。以下年代順に書名をあげて、疑はしいものを訂正する。

炭俵（野坡等、元祿七年刊）

川中の根木によころぶ涼みかな　芭蕉

冬枯の磯に今朝みるとさか哉　同

種文の「俳諧猿舞師」（元祿十一年刊）に、

冬枯の磯に今朝見ルとさか哉　公羽

右の句翁の句也と、誰やらが集に書入たるは、翁と公羽の文字を讀たがへたると史子申されける。

川中の根木に横ろぶ涼かな　幺羽

右の句、翁の句也と、誰やらが集に書入たるは、翁と幺羽の文字を讀たがへたると史子申されける。

とある。史子とは史邦の事。

芭蕉翁追悼こからし（壺中・芦角。元祿八年刊）

からの字のつれて渡るや鳥の聲

芭蕉最後の旅行吟で、集に洩れたものを巻頭に掲げてゐるが、此句だけは疑はしい。これは「續猿蓑」の馬莧の句で、馬莧・沾圃・里圃の三吟歌仙の發句がある。

雀の字や揃うて渡る鳥の聲　　馬莧

てり葉の岸のおもしろき月　　沾圃

笈日記（支考。元祿八年刊）

湖水田植

渺〳〵と尻ならべたる田植哉

「泊船集」に云、「笈日記に、渺〳〵と尻ならべたる田うゑ哉と云句を入集いたされけれど、是は伊丹の句にて、翁の句にはあらず」。又「句選年考」云、「按ずるに此句外に見當らず。……鬼貫句選にも此句見あたらず。兼平塚にて、「兼平が塚渺々と苅田かなと、鬼貫が禁足旅記に見えたり。似よりたる所あればしるし侍る。」などとある。併し蟻道一周忌追善集なる「鉢扣」（正徳二年五月、億麿編）に云、「渺々と尻ならべたる田植かな、此句食といふ俳諧の書に、蟻道ぬしと成ぬ。また或書に、都の自悦の句にも聞えぬ。是なん一草二名なるべしや。」とあつて、伊丹派の蟻道か季吟門の自悦の句として傳はつて居る。食といふ書は宗旦の撰である。兎に角芭蕉の句でないことだけは明かである。

芭蕉庵小文庫（史邦、元祿九年刊）

雪ごとにうつぼりたはむ住居かな

小文庫には「はつ雪やとけかゝりたる橋の上」、「初雪やひじり小僧の笈の色」、「雪ごとにうつぼりたはむ住居かなと三句つゞけて、芭蕉の句になつてゐるが、之は岱水・路通・芭蕉・友五・曾良等の十吟歌仙の卷頭の句で、岱水の作である。一葉集によると、

雪毎に梁たわむ住ゐかな　　岱水
けふらで寒し浦の鹽燒　　路通

とある。
泊船集（風國、元祿十一年刊）

さぞな都淨瑠璃小歌はこゝの花

信章の句である。延寶六年の江戸三吟に、

さぞな都淨瑠璃小歌はこゝの花　　信章
霞とともに道化人形　　信德
靑いつら笑ふ山より春見えて　　桃靑

とある。

奈良七重七堂伽藍八重ざくら

これは誤傳だかどうだか分らないが、介我の「俳諧黑白集」によると、才麿の作となつて居る。そして註に、「此句奈良七重何とも考べきよしなし。七重八重とはかゝらず。うつゝなく寫しあやまてるものなるべし。奈良七世として一句明らかなるべし。云々」とある。

風國の寫誤であらう。千春の武藏曲(天和二年刊)に、

侘てすめ月侘網笠の窓を家として　角止

うかれ行月網笠の窓を家として

侘テすめ月侘齋がなら茶歌　芭蕉

から二句並べてある所から、恐らく風國が筆寫の際、侘てすめ月侘の所まで書いて、うつかり前の句の網笠の窓を家としてとつゞけて書いたものであらう。泊船集には「天和の比の句也。」と傍註があるが、これは版木に彫つたあとで、埋木をしたものゝやうに思はれる。風國も後には變に思つたのであらう。

船となり帆となる風のはせをかな

一晶の作といふ說がある。春色の「移徒抄」(元祿五年刊)によると、

船になり帆になり風の芭蕉かな　一晶

とあるが、遊林の「反故集」(元祿九年刊)地の卷には

船になり帆となる風のはせを哉　芭蕉

とある。風國は「此句翁の製なりとある人申されし。實否はしらず。」と傍註してゐる。「句解參考」には、「愚考、此句「江戸通丁」といふ集に、一晶とあり。既に杉風への狀の末に、「ふと此句をいたし候故申上候。いかゞあるべく候や。尤海邊の寺にての吟。」とあれば、却て翁の句を取違へて、餘人の句にして、入集したるかもしらず。」とある。

野々宮の花表に蔦もなかりけり

凉菟の句である。「皮籠摺」（元祿十二年刊）に凉菟の句とある。なほ「凉菟句選」・「芭蕉句解」にもある。

山はみな蜜柑の色の黃になりて

此句は「芭蕉句選」にも發句として入れてあるが發句ではない。元祿七年九月、伊賀の猿雖亭で興行した支考・猿雖・芭蕉・雪芝・惟然・卓袋・望翠の五十韻の二ノ表中の句である。卽ち、

一里の舟も腹のすきたる　望翠
山はみな蜜柑の色の黃になりて　芭蕉
日なれてかゝる畑の露霜　支考
（下略）

とある。支考の「笈日記」に、

笠置より河舟にのりて、錢司といふ所を過るに、山の腰すべて蜜柑の畑なり。されば先の夜ならん、

山はみな蜜柑の色の黄になりて　翁

と云りし句は、まさしく此所にこそ候へと申ければ、あはれ吾腸を見せけるよとて、阿叟も見つゝわらひ申されし。

とある。蓼太は之を第三也と斷じ、嵐雪袖中抄に出てゐると言うてゐるが、白雄の說によると、之は第三也と推量した事で、嵐雪にさへ罪を負はせたのは淺間しい事である。嵐雪袖中抄といふものは元よりなきものであると難じて居る（「白雄夜話」）。

芭蕉句選（華雀。天文四年刊）

いろ〳〵の名も紛はし春の草

之は「ひさご」に珍碩の句として出てゐる。卽ち

いろ〳〵の名もむづかしや春の草　珍碩
うたれて蝶の夢はさめぬる　翁

とある。併し芭蕉句選の頭註に、「ひさご集に珍碩の句にして、翁の脇あり。」と斷つて居るから、華雀も芭蕉として入れたものゝ、後で氣が付いて、註を加へたものと見える。

あしだはく僧もみえたり花の雨

杜國の句である。卯辰紀行に、初瀨と前書して、

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えけり花の雨　万菊

とある、華雀の見違ひであらう。

たなばたにかさねばうとし絹合羽

「芭蕉句選」の頭註に、「泊船集」に此句杉風とある如く、「泊船集」には、遍照が歌と前書して、杉風とする。これは杉風作が正しい。句選も疑はしく思つて頭註を加へたのだらう。史邦の「小文庫」(元祿九年刊)穐之部に、弔初秋七日兩星と題して、芭蕉の前書があり、末に

小町が歌

高水に星も旅寐や岩の上　芭蕉

遍照が歌

七夕にかさねはうとし絹合羽　杉風

とある。

出羽の國に赴く、陸奥のさかひを過て

そのかみは谷地なりけらし小夜砧

岸本氏公羽の句である。「續猿蓑集」に、

出羽の國におもむく時、みちのくのさかひを過て

そのかみは谷地なりけらし小夜砧　　公羽

とある。但しはじめは翁と彫つたものを、後に側つて公羽と二字に分けたらしく、版木が不鮮明である。

全昌寺といふ寺に泊る

終夜秋かぜ聞やうらの山

「奥細道」に云、

大聖持の城外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。曾良も前の夜此寺に泊て、

終宵秋風聞やうらの山

と殘す。云々

とあるから、之は明に曾良の句である。全昌寺を金昌寺と書誤る位なことは、句選に往々見る事である。

水鼻にまこと見せけり御取越

積翠園の「句選年考」には、芭蕉が明石主水といふ人にあてた手紙の中に入つてゐる句だとして居るが、「韻塞」(元祿九年刊)十月之部に、千那になつて居る。明石主水に與へた手紙といふものが確かなものでない以上、千那の句としなければなるまい。

芭蕉句選拾遺（寛治、寶曆六年刊）

ちかづきに成て別るゝかゝし哉

秋擧の「惟然坊句集」に、意専にあてた手紙が出て居て、其中に、

先日奈良越にて

近付になりて別るゝ案山子かな

錢百のちがひが出來た奈良の菊

右兩句いたし申候。御聞可被下候

とあるから、作者は惟然である。

深川やはせを富士に預け行

「芭蕉翁道の記」や「甲子吟行」を見ても、千リとなつて居る。千里の句である。

秋の暮男はなかぬものなればこそ

調賓の「白根ヶ嶽」(貞享二年刊)に、

秋は夕べを男は泣ぬものなればこそ　才麿

とあるから、才麿の句であらう。

薄氷折目のまゝの茶巾かな

布碩の「諸集訂誤」によると、其角の「雜談集」の普船が句であると。卽ち「雜談集」下、利休の茶の湯にあひ

て云々といふ條下に、普船と其角の兩吟歌仙が出て居て、

薄氷折目のまゝの茶巾かな　普船

ことさら今朝は耳ぞつめたき　其角

とあるのでよく分る。

芭蕉翁發句集（蝶夢、安永三年刊）

有名な芭蕉研究家蝶夢の撰ではあるが、誤傳もたまには入つて居る。

つくつくと榎の花の袖にちる

貞享二年の作は作だけれど、作者は熱田の桐葉で、芭蕉でない、熱田三歌仙に、

つくつくと榎の花の袖にちる　桐葉

獨り茶をつむ藪の一家　芭蕉

といふ六七人でやつた歌仙がある。

芭蕉新卷（蠶外、寛政五年刊）

つかみ合ふ子供のたけや麥ばたけ

「嵯峨日記」、四月二十日の條下に、「北嵯峨の祭見んと、羽紅尼來る。去來途中の吟とて語

つかみあふ子共の長や麥畑

とあるから、去來の句である。

芭蕉袖日記（寛政十一年刊、素綾）

　物の名の蛸や故郷の凧幟

信徳の句である。「江戸三吟」に信徳・桃靑・信章三吟百韻が入つて居て、その卷頭の句である。

　物の名も蛸や古郷のいかのぼり　　信徳
　あふのく空は百余里の春。　　桃靑

　かさねとは八重撫子の名なるべし

「奥細道」に、

　獨は小姫にて名をかさねと云、聞なれぬ名のやさしかりければ
　かさねとは八重撫子の名成べし　　曾良

とある。曾良の句である。

　着て立て夜の衾もなかりけり

「丈草發句集」追加の部に、

　著てたてば夜の衾もなかりけり

とある。丈草の句である。

ばせを盥（有隣、享保九年刊）

梅が香や通り過れば弓の音　毛紈

毛紈の句である。元祿六年毛紈・許六・芭蕉の三ツ物によると、

梅が香や通り過れば弓の音　毛紈
土取鍬に雲雀囀る　許六
陽炎に野飼の牛の杙ぬけて　芭蕉
（「一葉集」）

とある。

布子着て夏より暑し桃の花

支考の句である。「蓮二吟集」に出てゐる。

十家類題集

一僕とぼく〳〵ありく花見哉

季吟の句で、有名なものである（「俳家奇人談」季吟の條に出）。

下闇や地中ながらの蟬の聲

猿蓑集夏の部に、

下闇や地虫ながらの蟬の聲　　嵐雪

とある。嵐雪の句と見える。

關こえてこゝを藤しろみさか哉

「曠野」に云、

關越て爰も藤しろみさかな　　宗祇法師

美濃の國せきといふ山寺に、ふじの咲たるを吟じたまふとかや。

と註がある。然れば宗祇の句である。芭蕉も此句に倣つて、一句を殘して居る。卽ち「泊船集」秋之部に、

關の住素牛何かし、大垣の旅店を訪れ侍りしに、彼の藤しろみさかといひけん、花は宗祇のむかしににほひて

藤の實は俳諧にせん花のあと

とある。これでいよ〳〵芭蕉の作でないことが分らう。

芭蕉翁句解參考（何丸、文政十年刊）

元日や何となけれど遲櫻

路通の句である。「曠野集」の歳旦の部に出てゐる。原句は元朝やとある。

春雨や枕くづるゝものゝ本

支考の句である。「續猿蓑集」卷之下に、

なにかし主馬が武江の旅店をたづねける時

春雨や枕くづるゝうたひ本　　支考

とある。

またれつる五月も近し聟ちまき

倘白の句である。「嵯峨日記」に還岐と前書ありて、倘白とある。

木曾の虚翁が許にやどりをもとめて

木曾殿とうしろ合せの寒哉

伊勢の叉玄の句である。支考の葛の松原（元祿五年刊）に、

木曾塚に旅寐せし比

木曾殿と背あはする夜寒かな　　イセ叉玄

とあるし、車庸の「己が光」（元祿五年刊）にも

木曾塚無名庵に一夜あかして

木曾殿と背を合す夜寒哉　　伊勢叉玄

叉兀峰の「桃の實集」（元祿六年刊）にも、

木曾塚にふして

木曾殿と背あはする夜寒哉　又玄

などとある。何丸のは前書があやしい上に、句も違つてゐる。家藏本の「句解參考」には、本文中に此句を削つて、卷末に、

爰に一ツの不審あり。元祿六年兀峯撰の桃の實集「木曾塚にふして、「木曾殿と背あはする夜寒哉　又玄

しかれば此句を聞あやまりて、後人翁の句とおもひて、虛翁が許にて翁の作也と流布せしものならむ。

と訂正してゐる。然れば後に氣が付いて直したものと見える。尙此句は季範の「二月」(元祿五年刊)によると、尾州越人の作になつてゐる。恐らくこれは季範のきゝあやまりであらう。元祿の古書に三部とも又玄の作としてあるのだから、又玄作とすべきである。

連句に就いても誤傳があり、疑問もある。蝶夢の「發句集」に、

鷺の足雉子脛ながく繼そへて

を發句としてゐるが、これは普通の場合の發句ではない。此句は信德の「七百五十韻」に次いで、「次韻」五十句を、其角・才丸・揚水と附けた卷頭吟で、新に五十句を起すといふ意味から云へば發句とも云へようが、

挨拶を爰では仕たい花なれど　正長

又かさねての春もあるべく　常文

鷺の足雉脛長く繼添て　桃青

遣句以ニ莊子ニ可レ見矣　其角

と以下續くべき句であるから、發句と定めるのはどうかと思ふ。

亦夢の「一串抄」に、

かけ乞に戀のこゝろを持せばや

をあげて發句として居るが誤である。之は「深川集」巻頭の芭蕉・洒堂・嵐蘭・岱水の歌仙、初裏三句目の芭蕉の長句である。卽ち

ふすま搔むで洗ふ油手　蘭

○掛乞に戀のこゝろを持せばや　蕉

翠簾にみぞるゝ下賀茂の社家　堂

（下略）

とある。

芭蕉が松島で獨吟歌仙を作つたといふ說が、古來傳へられて居るが、その疑はしい事は、第六章奥ノ細道の條下に論じて置いたから、こゝでは畧する。

二、文章

今日芭蕉の文として傳へられるものは、長短合せて百餘篇（紀行文、日記、消息を除く）ある。この百餘篇悉く芭蕉作であるとは信じられない。百餘篇の内には眞蹟物や句の前書なども含まれてゐるが、眞蹟でも成蹊の「菜集」、江三の「むつのゆかり」などは信じられるけれど、其外の物は傳來や筆格から見ると、どうかと思はれるものも少くはない。句の前書になると之も厄介で、果して芭蕉の手に成つたものか、或は撰者の手によつて改竄されたものか、區別がむづかしい。常識から云へば、撰者が芭蕉の門人であり、撰集の刊行が芭蕉の生前か又は歿年を去る遠からざるものであれば、先づ芭蕉作として信じられようが、時代を遠くへだつるに從ひ、又は蕉門の末流になると、撰者の手が加へられる可能性があるから危險である。以下實例に就いて考へて見る。

芭蕉が奥の細道で、中將實方の塚を訪れようとした所の文でも、「奥の細道」には、

　笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんと人にとへば、道より遙右に見ゆる山際の里をみのわ笠島と云。道祖神の社かた見の薄今にありと敎ゆ。此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よ所ながら眺やりて過るに、蓑輪笠島も五月雨の折にふれたりと、

　　笠島はいづこさ月のぬかり道

「猿蓑」には、

　奥州名取の郡に入て、中將實方の塚はいづこにやと尋侍れば、道より一里半ばかり左の方笠島といふ處にありとをしゆ。をりふしふりつゞきたる五月雨いとわりなく打過るに、

笠島やいづこ五月のぬかり道

「卯辰集」には、

中將實方の塚は、みちのく名取の郡笠島と云所にて、道より一里ばかり侍るといへど、雨しきりに降りて、日もくれかゝりければ、

かさ島やいづこ五月のぬかり道

「一葉集」には、

藤中將さねかたがつかは、道より一里ばかり笠島といふ處にありといへど、さみだれ降つゞきて、みちもいとあしければ、わりなく見過して通りぬ。

笠じまはいづこ五月のぬかり道

以上四種の文に就いて考へるに、奥の細道は別として、「猿蓑」・「卯辰集」は芭蕉生前の刊行であるから、撰者の改作とも思はれまいが（或は撰者の作かも知れない）、「一葉集」のは芭蕉の文であるか少し疑はしい。後人が「芭蕉文集」に入れる場合、奥の細道から取るのが最安全で、次は猿蓑・卯辰といふ順序にならうが、古集の文を勝手に改めて出すといふ事は、不穩當な行爲かと考へる。

耳得の「芙蓉文集」に、垣の梅といふ芭蕉の文が出てゐる。

ある人の草の戸を尋侍りけるに、よそに出侍るよしにて、とし老たるをのこひとり、留守をまもり居ければ、

垣穗の梅のさかりなる、是なむあるじといへば、隣の梅にてさぶらふと申に、いよ〳〵興なき心地にて歸らんとせしに、

留守に來て梅さへよそのかきねかな

之も「一葉集」には、

ある人の草の戸を尋侍けるに、よそに出けるよしにて、年老たるをのこのひとり、留守を守居けるに、垣穗の梅さかりなりけるを、これなんあるじといひければ、かのをのこ隣の梅にてさぶらふと申すに、いよ〳〵興うしなひて歸り侍るとて

留守に來て梅さへよその垣根哉

とあるが、原作は採茶庵に傳はつた芭蕉の眞蹟で、「菜集」に出て居て、即ち

あるひとのかくれがをたづね侍るに、あるじは寺に詣でけるよしにて、とし老たるをのこ獨庵をまもりゐける。かきほに梅さかりなりければ、これなむあるじがほなりといひけるを、かのをのこよそのかきほにてさぶらふと云をきゝて

るすにきて梅さへよそのかきほかな

「芙蓉文集」と「一葉集」の文とは大同小異で、或は別種の原文として傳はつたものか。或は撰者の改作であらうか。

芭蕉が蝶といふ女に句を乞はれたといふ前書は、蝶夢の「發句集」、秀三の「一代集」等に載つて居る。即ち

ある茶店の傍にやすらひしに、我を見しり侍るにや内へ請じて、家女の料紙持出て曰、我は此家の遊女なりしを、今のあるじの妻となし侍る也。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とす。その頃難波の宗因、此所にわたり給ふを見て、句を願ひ請ひたると、例のをかしき事まで言出て、頻に望侍れば、いなみがたくて、かの難波の老人が句に、葛の葉のおつるがうらみ夜の霜と云句を前書にして、てふといひける女にあたふ。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

然るに此文は土芳の遺稿「三冊子」によると、

此句は、ある茶店の片はらに、道やすらひしてたゞずみありしを、老翁を見知り侍るにや内に請じ、家女料紙持出て句を願ふ。其女のいはく、我は此家の遊女なりしを、今はあるじの妻となし侍るなり。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其比難波の宗因此處にわたり給ふを見かけて、句をねがひ請たるとなり。例をかしき事までいひ出て、しきりにのぞみ侍れば、いなみがたくて、かの難波の老人の句に、葛の葉のおつるの恨夜の霜とかいふ句を前書にして、この句遣し侍るとの物がたりなり。其名をてふといへばかくいひ侍るとなり。云々

とあつて、土芳が芭蕉から聞いた話を書きつゞつたもので、それをなほ蝶夢が多少改めて前書としたやうで、芭蕉の文ではないらしい。

「一葉集」・「一代集」に白髪吟といふ序詞が載せてある。之も頗る疑はしいもので、原文は甲子吟行に、

長月の初故郷に歸りて、北堂の萱草も霜枯れ果て、今は跡だになし。何事もむかしにかはりて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、只命有てとのみいひて言葉もなきに、兄の守袋をほどきて、母の白髪をがめよ、浦しまが子の玉手箱、汝が眉もやゝ老たりと、しばらく泣て、

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

とあるが、之を「一葉集」では、

たよりも文月の玉まつる頃、武陵より古里に歸るに、二十とせの月日も夢なれや。北堂の萱草も霜がれて、今は其おもかげだになかりしが、何ごともむかしに立かはりて、はらからの鬢しろく、眉しはみて、つれなきいのちありとのみ、いひ出ること葉もなきに、兄の守袋をほどきて、母の白髪をがめよ、浦しまが子の玉手箱、汝が眉もやゝ老たりと、年月のおこたりはかたみに泣つゝ、

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

と改竄してゐる。「一代集」には手に取らば消えんの句を削つて、「一家みな杖にしら髪の墓参」の句に直してゐる。今この文に就いて考へるに、文月の魂祭る頃とすると、元祿七年七月芭蕉最後の歸鄕の事となり、一家みな杖に白髪の發句には合ふけれど、母の白髪拜めよ、浦島が子の玉手箱と云つた貞享元年九月の歸鄕の事實とは一致しない。又手に取らば消えん涙の句を活すとなると、甲子吟行の歸鄕とは合ふけれど、冒頭のたよりも文月の

玉まつる頃だの、二十年の月日を夢だのといふ事は事實が合はなくなる。支考の「古今抄」に、一家みな杖に白髪の句を註して、「西麓庵の遺稿には白髪吟といふ序詞ありて、云々」とある。西麓庵の遺稿とは、芭蕉が伊賀の西麓庵に於て、貞享以後の文稿をすぐつて、十餘篇點検した草稿を指したので、同じく古今抄に見えてゐるが、かゝる事實は實際あつたかどうか詳かでない。或は白髪吟は支考の僞作で、それを後人が甲子吟行の歸郷の記事に合はない所から、一家みなの句を削つて、手に取らばの句に代へて了つたのかも知れない。

士朗の「枇杷園隨筆」に、鶯亭夜話と註して、芭蕉が貞享五年伊勢參宮した一文を掲げてゐる。即ち

貞享五とせ如月の末伊勢に詣づ。此御前の土を蹈事今度五度におよび侍りぬ。さらに年のひとつも老行まゝに、かしこきおほむひかりも、たふとさも猶思まされる心地して、かの西行のかたじけなさにとよみけん涙の跡もなつかしければ、扇うちしき、砂にかしらかたぶけながら、

何の木の花とはしらず匂ひかな

この文も疑はしい。第一、如月の末といふ事がどうかと思ふ。支考の「笈日記」伊勢之部に、

貞享の間なるべし。此國に抖藪ありし時、奉納二句。

西行のなみだをしたひ、增賀の信をかなしむ。

何の木の花ともしらずにほひかな

裸にはまだ二月のあらし哉

「泊船集」に、

二月十七日神路山を出るとて、西行のなみだをしたひ、増賀の信をかなしむ。

裸にはまだ二月のあらしかな

いせ神法樂

何の木の花とも しらずにほひかな

とある。又嵐雪の「其袋」にも、二月十七日神路山を出るとてと前書して、裸にはの句を出してゐる。今是等の前書によつて考へるに、何の木の句は西行の故事によつて作られ、裸にはの句は増賀の故事に基いたもので、芭蕉は二月十七日神路山を出で、神宮に此二句を奉つたと見るべきで、神宮參拜は二月の末ではなく、二月中旬と思はれるのである。なほ一つの疑問は、御前の土をふむ事今度五度に及ぶとあるが、芭蕉參宮の書に表れたものには、貞享元年八月と同五年二月位で、五度とは疑はしい。或は延寳年間父の病を聞いて歸國した時に參拜したものか、或は伊賀仕官時代の頃であつたか、貞享五年迄に五度詣でた事は詳かでない。

なほ「枇杷園隨筆」に、芭蕉が貞享五年三月萬菊丸を連れて、芳野の花に遊び、高野山へ登つた時の句文が載せてあるが、之も甚だ疑はしい前書である。卽ち

高野のおくにのぼれば、靈場さかんにして法の燈消る時なく、坊舍地をしめて佛閣甍をならべ、一印頓成の春の花は、寂寞の霞の空に匂ひておぼえ、猿の聲鳥の啼にも腸を破るばかりにて、御廟を心しづかにおが

み、骨堂のあたりに彳て、倩おもふやうあり。此處はおほくの人のかたみの殘れる所にして、わが先祖の鬢髪をはじめ、したしきなつかしきかぎりの白骨も、此内にこそおもひこめつれと袂もせきあへず。そゞろにこぼるゝ涙をとゞめて、

父母のしきりに戀し雉の聲

芭蕉の先祖の鬢髪や父母の骨が、高野山に埋まつてゐる事は、他に聞かない。芭蕉が故主蟬吟公の遺髪を、高野山の報恩院に收めたといふ説（之も異説があつて詳かでない）は傳はつてゐるが、高野山に松尾一家の墓があるといふ事は一層疑はしい。父母の句は行基の「山鳥のほろ〳〵となく聲聞けば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」といふ傳説的な和歌によつて作られたものらしく、高野山に芭蕉の先祖の鬢髪や親しきなつかしき限りの白骨が埋められてあるから、その思出がなつかしく、父母が戀しくなるといふわけではあるまい。如何にも此前書は、後人が主君の遺髪か遺骨のお供をして、高野山へ收めに行つたといふ傳説を、芭蕉一家の墓に附會して、いゝかげんに捏造して、父母の句に結び付けたものであらう。

支考の「和漢文藻」や「本朝文鑑」に出る芭蕉の文にも疑はしいものが多い。先づ和漢文藻に、芭蕉の月見ノ賦があるが、どうかと思ふ。少し長いけれど引用して見る。

月見ノ賦

ことし琵琶湖の月見むとて、しばらく木曾寺にたび寐して、膳所松本の人々を催すに、乙州は酒をたづさへ

て、泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶をつゝみて、信樂に一夜の夢をさます。今宵は茶といひ、酒といひ、かたふの人も二派にわかれて、酒堂は燈にかたぶきて、其茶に玉川が歌を詠じ、丈草は月にうそぶきて、其酒に樂天が詩を吟ず。支考は若く、木節は老いぬ。智月は物のおぼつかなう、かつぎのあまのなま浮びならず。それが中にも惟然法師は、酒におどろき、茶に感じ、ほむるもそしるもそらに風吹て、爰に三子者の志をためざらんや。ましてその外の友とする人も、峨々洋々の心ざしをしれれば、すべては飲中八仙のあそびならん。誠やつれ〴〵の法師だに、心をつくろはぬ友えらびは、かゝる月見の侘なるやと、思ひしまゝの草の庵に、浮世の外の風狂をつくせり。

米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乘じて、湖水の月に船を浮べんと、物このむ人の風情をそへたるに、爰に瓢箪の唐子はなけれども、扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船のとぼしさにはあらざめり。さゞ波や打出の濱の名にしおふ鏡の山もこなたにさしむかひ、日枝は横川の杉につらなりて、比良の高根は雁をもかぞへつべし。うしろに音羽の峯たかく、石山の鐘は粟津の嵐にさえて、そこに楓橋の霜も置ぬらん。矢橋の歸帆は今宵をもてなすに似たるべし。

名月や湖水に浮ぶ七小町

されば我朝の紫式部は、石山に源氏のおもかげを寫し、唐國の蘇居士は、西湖に越女のよそほひをたとふ。

いづれも風雅の名に殘りて、今のまぼろしに浮ざらんや。實そも和漢の名蹤なりけらし。さて松本に船をさしよせて、茶店の欄干に心を放てば、目はよし蓬萊の水をへだてず。身はただ芙蓉の露にうるほふ。竹の林の酒も時ならで、松が江の鱸は今宵なるをや。なほはた傾く月の名殘には、辛崎の松もひとりやたてる。古き都の名もゆかしければ、尾花川の明ぼのをこそと、千那・尙白をおどろかしぬれば、夜ははや五更に過ぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

誠よ推敲の昔ながら、船に今宵の遊を思へば、此座に韓愈が文章をもあざむき、賈島が詩賦をももどきぬべき。詩人文客に乏しからねば、たとへ赤壁の前後といふとも、その地に此人を恥づべきやと、見ぬもろこしを相手にとりて、今宵の風流をあらそふほどに、月は長等山の木の間に入りぬ。

右の文は「芭蕉文集」・「一葉集」・「一代集」等にも載つてゐるが、一葉集は眞僞未詳とする。支考の「笈日記」によると、芭蕉は元祿四年八月支考・路通等を從へて、湖南に三夜の月見を催した。つまり月の本末を見ようと云つて、待宵は楚江亭に遊び、十五夜は木曾塚に集まり、十六夜は船を堅田に泛べたのである。其時路通には待宵の文があり、支考には名月の泛湖の賦があり、芭蕉には十六夜の辯があつて、竹內氏（成秀）の家に止めたのである。支考の記錄は大方疑はしいものであるけれど、この「笈日記」だけは信を置けるかと考へる。そこで私は名月の泛湖の賦は卽ち月見ノ賦の事であらうと思ふ。例へ之が芭蕉の作であつたとしても、支考の手の加はつた

ものではなからうかと思ふ。「古今抄」に

世更に我家の文章を論ぜば、湖南に月見ノ賦をつたへて、百世の文格にも恥ざらんかと、云々

とあるが。どうもこの口上が面白くない。百世の文格などといふ事は支考のよく言ふ事で、自分の作を芭蕉の名に假託して、偉さうに言ひ立てる事は、支考の常套手段であるから、油斷は出來ない。

雪見ノ賦

十月の時雨、霜月の霜、師走は雪の降る月とて、ひとり法師は、火燵の小藥鑵に、物くるゝ友達をもてなし、金箱のもりするおやぢは、袖口より背中をかゝせて、菜飯に更行鐘の聲をかぞふ。それより一ふし世なれたる男は、夜着の袖より庭を見やりて、あゝ降たる雪かなと、身の上に謠ひ捨たるは、花も紅葉もあそび過して、今更物の淋しけれど、折々父母をこらしたるひとりむす子の身の果ならん。世はかくさまぐの相手あれど、是と遊ばんと思ふ人は稀也。たとへ香爐峰に簾を捲たる女も、智惠過てすさまじく、かの山陰の夜の雪に、小船の模樣をつけたるをのこも、興つきて後寒からん。いざや無分別界に平白漫地の雪見せむ。此三國川に船を浮たるに、錦城の歌吟は更に知らず。中に置火燵の紫ふとんは、雪の夕日にかゞやきて、繻子のひむくも、純子のそら色も、なこその關の名こそとがめね。しかは人目もしのばずやあらん。昔陶朱公が船に乘せて、五湖のあなたにあそびし人は、我もの顏にてにくからんに、越女の紅裙も燕姫の翠黛も、こゝに乏しからぬ遊ならん。さて經岡の松の雪は、佛くさきをいやがりて、上戸は長くらべ山に頭をめぐらせば、げに日

野が嶽には反椀（ソリワン）の名ありて、我と思はむ者あらば、此盃まゐらさうと、舳先に立て相手を待つに、我は小盃のかげにかくれて、月窓寺の入相に、此夕暮を惜しむばかり也。

此文は芭蕉の作ではあるまい。支考であらう。𩿴乙子といふ號は支考の號名で、「本朝文鑑」の悠然ノ賦に、作者𩿴乙子とあつて、白狂の註に云、「此名ヲ𩿴乙子トハ例ニ我師ノ隱號ナガラ、某ニ莊子ヲ讀メル時ノ問題トゾ。」本朝文鑑は蓮二房の名によつて作られ、白狂の名によつて註されてゐる。白狂の序に、「東花坊を師とし、蓮二房を見として、文鑑に此註者たらんに、云々」とあるから、我師の隱號とは東花坊の隱號といふ意味で、實は東花坊も蓮二房も白狂も支考の別號であつて、虛實の遣分けである。

芭蕉の幻住庵の文は古來三種傳はつてゐる。一は「眞蹟拾遺」の幻住庵記、一は「和漢文藻」の幻住庵賦、一は「猿蓑」の幻住庵記である。賦は眞蹟拾遺の記よりも長いが、大同小異で、猿蓑の記だけが大に違つてゐる。

次にその全文を掲げよう。

幻住庵ノ賦　　　　風羅坊

五十年やゝちかき身は、苦桃の老木となりて、蝸牛のからをうしなひ、蓑蟲のみのをはなれて、行衛なき風雲にさまよふ。かの宗鑑がはたごを朝夕になし、能因が頭陀の袋をさぐりて、松島白川に面をこがし、湯殿の御山に袂をぬらす。猶うたに啼そとの濱邊より、えぞがちしまを見やらんまでと、しきりに思ひ立侍るを、同行曾良なにがしといふもの、多病いぶかしなど、袖をひかゆるに心たわみて、象潟といふ所より、越路の

方におもむく。さるは高砂子のあゆみくるしき北海のあら磯にきびすを破りて、ことし湖水のほとりにたゞよふ。鳰の浮巣の流とゞまるべき蘆の一葉のやどりを求むるに、その名を幻住庵といひ、その山を國分(コクブ)山といへり。古き御社の立せたまへば、六根おのづから淸うして、塵なき心地なむせらる。かの住捨し草の戸は、勇士菅沼氏曲水子の伯父なる人の、此世をいとひし跡とかや。ぬしは八とせばかりの昔になりて、棲(スミカ)はまぼろしのちまたに殘せり。誠に知覺迷倒も皆たゞ幻の一字に歸して、無常迅速のことわり、いさゝかも怠るべき道にあらず。山はさすがに深からず。人家よき程にへだたり、石山を前にあてゝ、岩間山のしりへに立てり。南薰高く峯よりおろし、北風はるかに海をひたして凉し。折しも卯月のはじめなれば、つゝじ咲殘り、山ふじ松にかゝりて、時鳥しば〳〵過るほど、宿かし鳥の便さへあるに、木つつきのつゝくとも出でじ、かつこ鳥我を淋しがらせよなど、ひとりよろこび、そゞろにたのしみて、吳楚東南のながめにはぢず。五湖三江もこゝに疑しきや。日枝の山、ひらの高根より、辛崎の松は霞こめて、膳所の城は木ノの間にかゞやき、勢田の橋に雨晴て、粟津の松原に夕日を殘す。三上山はふじの俤にかよひて、武藏野の古き住家も思ひ出られ、田上山(タナカミ)に古人をしたふ。さゝほヶ嶽、千丈ヶ峰、はかまごしといふ山あり。笠取山に笠はなくて、黑津の里人の色や黑かりけむ。猶はた眺望くまなからんと、後の峰にはひのぼり、松の棚作り、藁の圓座をしきて、是を猿の腰かけと名く。傳へ聞ぬ、除老が海棠巣の飲樂も、市にありてかまびすしく、王道人が主薄峯の住居も、爰を捨てうらやむべからず。虛無に眼をひらいて嘯き、孱顏に虱を捫て坐す。たま〳〵心すこやかなる時は、

薪を拾ひ、清水を結ぶに、齒朶ひとつ葉のみどりをつたふ。とく〳〵の雫をわびては一爐のそなへいと輕し。前に住ける人もさすがに心高く、たくみおける物數奇もなし。持佛一間をへだてゝ、夜の物かくらふべき所などいさゝかしつらへり。さるを高良山（カウラ）の僧正洛にのぼり居給ひしを、ある人をして額をこふ。いとやすらかに筆をとりて、幻住庵の三字をおくらる。其裏には予が名を書て、後見ん人の記念ともなれとなり。山居といひ、旅寐といひ、させる器たくはふべきにもあらず。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱にかけたり。晝は宮守の翁、麓の里人など入來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、我聞しらぬ咄に日を暮し、かつはまれ〳〵とぶらふ人も、夜座しづかにして影をともなひ、罔兩に對しては是非をこらす。かくいへばとてひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにもあらず。病身やゝ人にうみて、世をいとひし人に似たり。何ぞや法をも修せず、俗をもつとめず、いと若き時より、よこさまにすける事侍て、しばらく生涯のはかり事とさへなれば、終に此一筋につながれて、無能無才を恥るのみ。勞して功空しく、神つかれ、眉をしわめて、秋も半過行まゝ、風景朝暮の變化とても、又たゞまぼろしの住居ならずやと、やがて此文をとゞめて立さりぬ。

支考の說によると、始の一通は落柿舍にあつて、文章の無用をすぐり、中の一通は幻住庵ノ賦で、文章の花美を揃へ、終の一通は猿蓑の幻住庵ノ記で、文章の花實を整ふといふのだが(「喝干錄」)、賦は必ずしも花美を揃へるとも思へない。支考は「古今抄」に、元祿七年の秋、芭蕉は伊賀の西麓庵に於て、後猿蓑撰集の次手に、貞享以後の文

稿をすぐつて、十餘篇點檢した時、幻住庵ノ記の魂呉楚の文論があつたと言つて、「魂呉楚の三字より、其餘の未練は指を倒すにつきず。これらは學而不レ思といへる早計の人の悔ならん。云々」と論じてゐる。併し猿蓑は俳諧の古今集に比せられてゐる理想的な撰集であるから、句も文も餘程精選したもので、瑕だらけな幻住庵ノ記を去來も入れるわけはなからうし、芭蕉も載せはしまいと考へる。それは或は後に見て後悔した所もあつたかも知れないが、賦の筆力は到底猿蓑の幻住庵ノ記に及ばず、眞蹟拾遺のものよりも平板・冗長な感がする。殊に支考は其文論は獅子庵の遺稿にあつて、五秘の一品であると言つてゐるなどは、容易に信じられるものではない。幻住庵の文の草稿は三通あつても、賦は支考の手の加はつたものと考へて差支なからうと思ふ。

なほ本朝文鑑に憐捨子辭（芭蕉庵）、庚午紀行（風羅坊）を載せてゐるが、何れも支考の僞作であらう。憐捨子辭は貞享元年の「甲子吟行」中の富士川の捨子の文を少し改めたものであり、庚午紀行は貞享四年から元祿元年に涉る卯辰紀行の燒直しである。白狂の註に、

此記ハ元祿ノ庚午ナランカ。世ニ傳ルモノ多ケレバ、或ハ乙丑紀行トモ云ヘル。其紀ハ貞享ノ秋ナルベシ。サルヲ武江ノ芭蕉庵ニテ、紀行ヲ取捨シタマヘルハ元祿ノ辛未ト見エタレバ、兩紀ノ文法ヲ取合セテ、此篇ヲ成セリト見ユ。尤モ故翁ノ書捨シ文章ノ反故ニハ、幻住庵ノ賦ト記トニ三通ノ違ヒアル如ク、幾度モ取捨シタマヘルヲ、人ハ秘藏シテ書傳フル故ナリ。云々

とあるが、兩紀の文法といふ意味がよく分らない。元祿三年（庚午）の紀行と貞享二年（乙丑）の紀行といふ意

味か。元祿三年には幻住庵の文があるだけで、別に紀行文はない。貞享二年は甲子吟行の事か。甲子吟行とすると貞享元年秋で、乙丑紀行は事實に合はない。貞享二年秋は江戸に居つて旅中ではない。とにかく支考說は幻住庵の文に三種あるやうに、卯辰紀行にも幾種かの草稿があると言つて、暗に庚午紀行はその草稿の一であると匂はせたのだらうが、例の欺瞞である。その實支考は芭蕉の卯辰紀行を改作して、庚午紀行といふ勝手な題號を付けたものに違ひあるまいと考へる。卯辰とは卯年（貞享四年）から辰年（元祿元年）にかけての旅行だから名けたので、意味は分るが、庚午と云つて元祿三年の紀行として、芳野行脚や須磨・明石の旅行を書くのでは、一向意味をなさない。元祿四年（辛未）に卯辰紀行を取捨したなどとは信じられない。假にさういふ事があつたとしても、題號はその時の旅行に適合するやうなものを選ばなければならない。庚午紀行は支考の僞作である。

史邦の「芭蕉庵小文庫」に、煤掃之說といふ文を載せて、芭蕉の作としてゐるが、之も一葉集などに疑つてゐるやうにあやしいものである。

煤掃之說

明ぼのゝ空より、物のはた〳〵ときこゆるは、疊をたゝく音なる可し。けふは師走の十三日、すゝはきのことぶきなり。げにや雲井の儀式、九重の町の作法は、嘉例ある事にして、唯なみ〳〵の人の煤掃く體こそいとおもしろけれ。おのおの門さしこめて、奥の一間を屛風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、嫗が帷子の上張、爪先見えたる足袋もいとさむく、冬の日かげのはやく晝になりゆき、庭の隅調度どもとりちらしたる

中に、持佛のうしろむきたるぞ目には立なれ。家の童の縁の破れすのこの下をのぞきまはるは、何を拾ふにやとあやし。味噌とよばる大男の袋かぶり、蓑着たるもめづらかに、米櫃のさんうちつけ、狙しらけ、行燈張りかへて、田つくり鱠淺漬のかをり花やかに、上下の膳据ならべたるに、ほどなく暮て高いびきとはなりぬ。

すゝはきや暮行宿の高鼾　　はせを

平明に寫生的に書かれて面白いものではあるが氣品に乏しい。成美の「隨齋諧話」に、

小文庫に載せし煤掃の說といふものも、ひそかに思ふにはせをの筆力ならぬやうなり。これらも支考が手に出たるを史邦漫に書き加へたるもしるべからず。文中拙き語共も交れり。殊に結句にほどなく暮て高鼾とはなりぬと書きて、その發句暮れゆく宿の高鼾とあり。これら決してはせをの造意にはあらぬなり。云々

とある。成程成美の言ふやうに、結句に程なく暮れて高鼾とはなりぬとあつて、發句に暮れ行く宿の高鼾では、餘りに平凡な、拙劣な技巧である。恐らく前書の文と發句とは別個のものであるのを、史邦が取つて付けて了つたものかと考へる。

又同書に石臼之讃といふ文があつて芭蕉の作となつてゐるのも誤である。

石臼之讃

市中にあつて、俗塵によごれぬ物は、げにその始をよくするよりも、その終をとぐる事はかたし。商山竹林

の隱士も猶出て仕へ、寛平華山の上皇も終たしかならず。たま〳〵是を見るに、唯石臼の一つのみ、聖一國師は是を以て肉身をやしなひ、法身を知る。民家にはまた麥刈そむる頃よりも、籾こき落す冬に至るまで、片時もよ所にする事なし。その高きことを論ずれば、役の優婆塞の庵の中にかくれて、彼たぐひを道引切の上に立べし。上と下と二つなるは、力足らざる者のために専なればなり。不斷土間にありて、莚より外を見ぬは、謙に居る事の調へるにあらずや。假にも黄姉の手にとられざる事のありがたき事を深くさぐりしるべし。月なだらかなる時は、かますを荷ふ老翁のいで來りて、こつ〳〵とする音すみて後は、李札が劍を塚にかくる事を恥づべし。名をぬすむ盗人はあれども、石臼を盗む盗人はなし。また人の心をみださゞるの至ならずや。月さしのぼる夕顏のかげに、ひとりはおどろの髮をまぐね、ひとりは佛の眞似をするあたまなりにて、くるしきことを覺えず。挽まはす力に其の飢を助くるは、文王の始に仕たまへるに事たがはず。やゝ今様のむづかしき歌のふしにかまはず、聲も唱歌も古代のまゝにして、枝も榮ゆる葉も茂ると、しはぶきがちにわななかれたるぞをかしきや。

右は越人の「不猫蛇」に、

予が芭蕉へ石臼の銘と云戲の文書、惡かるべきは勿論、殊に聞にくき所は御直ｼ可レ被レ下と、京に居られし時つかはし、予麁紙に書遣はせしを、翁定て書直ｼおかれし所も可レ有。予も草案のまゝ名も不レ書遣したるに、翁死後頭陀袋などにありしと見えたり。それを被レ死時付居、左様の反古などは彼が取しと見えたり。文

選とやら文を集たる物して、其内へ其石臼の銘を翁と名書入たり。予が昔若き時書たり。とても文などと云やうなる事にてなし。若き時は猶以ての事なり。芭蕉の筆とは各別若クさわがしき文なるに、芭蕉翁に名付る共目の闇サ不調法さ言語同斷なり。今とても可見翁の筆か、その勢文勢大に異也。云々

とあつて、越人の若い時の作を芭蕉が添削したもので、それを支考が芭蕉歿後頭陀袋の中から取出したのだらうといふのである。之に對して支考は「削かけの返事」に、

石臼の頌の事、祖翁の文とも貴公の作とも遺稿の沙汰に聞えねば、しかとは返事申がたし。つら〱文選に共頌を見れば、故事・故語のしぼらしさ、貴公の不猫蛇の雜言と違ひ、全く祖翁の筆格也。推するに貴公の石臼の文を、のゝ字ばかりに直し給ひ、反故の中に草稿などありしを、去來か許六の麁相にて、芭蕉の二字を書添へ申されけむ。云々

と辯護してゐるが、どうも此口上が徹底しない。文選とは本朝文選の事で、去來の許にあつた「猿蓑文集」を許六が增訂して、本朝文選と題して出版したのである。はじめ支考と許六は親しく、支考が本朝文選の題號を訂正すべく勸告した位であるから、或は支考が承知して居ながら、越人の石臼の銘を芭蕉作として入選させたのかも知れない。それを不猫蛇で越人から突込まれたので、去來か許六の麁相にして、責任を他に轉化したのかも知れないと思ふ。成美の隨齋諧話に、

今案ずるに、文鑑・文操石臼の銘を載せず。これは史邦が小文庫にあり。越人みづからかくいへれば、此文

章はせをの造意にはあらざるべし。文中筆力似たる所は加筆の所と見ゆ。されどはせをに似ざる所多くあれば、越人が作として可なり。云々

ともある。因に「不猫蛇」には銘とし、「小文庫」には讃とあり、「風俗文選」には頌となつてゐる。又「一葉集」は越人の作として略し、「一代集」は参考迄にかゝげると註する。

「風俗文選」に芭蕉として松島ノ賦を掲げる。

松島ノ賦　　芭蕉翁

そも〳〵事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖に恥ず。東南より海を入て、江の中三里、浙江の潮をたたふ。七十二峯、數百の島々、欹つものは天を指し、ふすものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、右につらなる。負るあり。抱るあり。兒孫愛するが如し。內ふたご、外ふたご、鎧島・かぶと島・牛島・蛇じま・內裏島・屛風島・笆が島はあまの小舟漕つれて、肴わかつ聲〳〵に、網手かなしもとよみけむ俤を殘し、末の松山は寺となりて、松のひま〳〵墓を築く。羽をかはし、枝をならぶる契の末も、終には皆かくの如しと悲し。野田の玉川・沖の石・宮城野の萩・武隈の松・猶此境に名をならべたり。しほがまの浦には鹽がまの明神あり。神前のかな灯籠、文治三年泉の三郎寄進と記す。雄島が磯は地つゞきにて、雲居禪師の別室のあとに坐禪石、瑞岩寺は相模守時頼入道の建立、當時三十二世の昔、眞壁平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其後伊達政宗再興して、七堂伽藍となれりける。法

蓮寺は海岸に峙ち、老杉影をひたし、花鯨波にひゞく。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山ずみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さむ。

右は奥の細道松島の條下を前後取り來つてつゞり合せ、或は多少辭句を改竄したもので、許六の作爲である。當時の習慣としてかゝる行爲は許されて居たかも知れないが、師匠の文章を弟子が勝手に作りかへて、それを師匠の名義で發表する事は妥當な事ではない。作りかへた弟子の筆が、師匠の筆より勝れてゐた場合はよいだらうが、さうでなければ師匠の名をけがす事にならうし、それが後世に傳はると、ます〱師匠の德を損することになる。

「隨齋諧話」に、

風俗文選に載たる松島の賦、こゝろみに奥の細道の文章と參考するに、はせをの書ける所を前後に錯綜して、强ひて賦の體につゞりあらためりと見ゆ。許六さしもの英才にて、而もはせをの書けるまゝながら、前後に引たがへてつゞりぬる故、語脈のつゞかざる所あり。學者よく心を付けて考ふべし。

之は許六の罪である。許六は支考ほど動機は複雜でなかつたにせよ、芭蕉翁といふ署名は遠慮すべきである。

芭蕉の文として疑はしいものは未だ外にある。「枇杷園隨筆」中の芭蕉落書の文、或は「一代集」にある越後能生宿汐路之名鐘の文の如きどうかと思はれるが、確證を得ないから後日の硏究に讓つた。

第十章　芭蕉の俳論

芭蕉の俳論は俳話的であつた。俳論と云つて、特に理論的な組織的なものは、芭蕉にはなかつた。大體門人の間に答へて、敎へて居るのだから、斷片的である。それも門人の長所・短所を看て、指導したので、甲の人に說いた敎と、乙の人に說いた敎との間に、說の相違があつて、一寸考へると、矛盾したやうに思はれる所もあるが、そこは應病與藥的に、人によつて敎方をかへてゐるだけで、本質に於ては同一の思想から出發してゐる。例へば許六に向つては取合せを旨とすべきを說き、洒堂に向つては黃金を打延べたやうに句作すべきを勸め、又支考・北枝には俗談・平話說を傳へ、去來には不易・流行の別を敎へてゐるといふやうな風であつた。芭蕉は詩人であると共に、最も善き敎師であつた。是等は芭蕉の抱擁性に富んだ人物なる事を示し、是等の敎示は蕉門の隆盛を促すべき動因となつた。

芭蕉の門人は各師說を傳へてゐる。例へその全部を傳へない迄も、一部は慥かに承繼してゐる。但し門人中には野心家もあつたから、どこ迄が芭蕉の說で、どこが自說か、容易に區別が付かない。去來・土芳の如き師說に忠實な者の俳論ならば、それによつて芭蕉の正說も知り得られようが、支考・許六如き者の論になると、芭蕉の

根本主義を知らうとするには、かなり危險性が伴ふのである。それでも許六はまだよい。正直な所がある。芭蕉より取合せの句作手段を敎へられ、それを金科・玉條と信じて、俳諧の底を拔きて、古今に渡る者は、五老井一人であると、威張つてゐる所は罪がない。支考の如きは、先師・故翁の遣ひ分けをして、門人の假名にかくれ、芭蕉說を賣り步くので始末がわるい。支考の言だとて全部師說を離れたものでもないが、僞說・虛構を平氣で芭蕉の美名の下に工作されると、後學の惑ひとなつて、識別に骨が折れる。其他野坡・洒堂・露川の如き、芭蕉を誤らせる罪は決して輕くない。芭蕉を離れて、たゞ自說だけあげてゐるならば、返つて芭蕉研究に參考となつて便利だが、先師曰くとして、讀んで行くと、芭蕉の說らしくもなくなるのには困る。

本章は、以上の障害に鑑み、比較的信じられさうな土芳の「三冊子」、去來の「去來抄」、北枝の「山中問答」を本として考察した。但し「去來抄」は故實編入るべくして版本之を除き、その故實編又文曉の「芭蕉談」の說と酷似したり、或は句評が「花實集」の文と同一であるなど、なほ研究すべき餘地のあるものではあるが、大體に於て信用さるべき集として之に從つた。其他許六・支考・野坡等の說も、信ずべきは引用して、本論の敷衍とした。

イ、誠の俳諧

芭蕉の俳諧は誠にあつた。貞徳はやさしきを體とし、をかしきを用とする俳諧を立て、宗因は道化・輕口の狂體を專一としたけれど、芭蕉は誠を以て俳諧の第一義諦とした。誠とは觀照態度の純眞性である。誠によつて、見るものゝ本情をつかみ、聽くものゝ本意をさぐる。物にも我にも、純一・無雜な自然心を以て接する事が、芭蕉のいふ風雅に居る者の心がけであつた。言葉を强ひて技巧したり、求めたりする外的な用意では、誠の句は出來ない。誠の中に自然と句の姿がある。句の姿は作爲されるものでなく、自然に出來るのである。土芳は「三册子」中「白ざうし」に、

師の俳諧は、名昔の名にして、昔の俳諧に非ず。誠の俳諧也。されば俳諧の名ありて、其物に誠なきが如く、代々空しく押移る事いかにぞや。師も此道に古人なしと云へり。……昔より詩歌に名ある人多し。皆その誠より出て、誠をたどるなり。我師は誠なきものに誠を備へ、永く世の先達となる。まことに代々久しく過ぎて、此時俳諧に誠を得る事、天正に此人の腹を待てるや。……水に住む蛙も、古池にとび込水の音といひはなして、草に荒れたる中より、蛙の入る響に、俳諧を聞付けたり。見るにあり。聞くにあり。作者感ずるや、

句と成る所は、則俳諧の誠也。云々

と述べてゐる。之を約言すると、俳諧といふ名は昔からあつたが、誠の俳諧はなかつた。芭蕉は誠の俳諧を第一義として、永く世の先達となつた。例へば古池や蛙飛び込む水の音の句でも、荒れた草の中から、蛙の飛び込むひゞきに、俳諧を聞き付けて、實感を表現した所が、俳諧の誠であるといふ意で、純眞な觀照が誠の俳諧を産むわけになる。そこが芭蕉の俳諧の本源であつた。

ロ、連俳の區別

貞徳は俳言の有無によつて、連歌と俳諧とを區別した。卽ち彼は正保三年三月十七日、花咲亭に於て、俳諧は百韻ながら、俳言にて賦する連歌であるから、端作りを俳諧之連歌と書くべきであると定めたり、(「増續山井」)或は宗鑑の「犬筑波」の附句を評して、「無俳言わろき連歌也。」などと論じて居る(淀川)。土芳の「白冊子」に、俳無言（俳諧無言抄か）といふ書を引用して、聲にいふ詞はすべて俳言である（音讀する詞といふ意）。連歌に聲でいふ詞もあるが俳言の方である（連歌に連俳兩樣の詞といふ敎がある）。例へば屛風・几帳・拍子・律の調子等の類である。千句連歌に出る鬼・女・龍・虎、其外千句物の詞も俳言である。又連歌に嫌ふ櫻木・飛梅・雲の峰・霧雨・小雨・門出・浦人・賤女等の詞も俳言であるとある。蓋し和歌や連歌の用語は主として訓讀されたもので、狂連歌や俳諧の用語は音讀されたものも入つて居るから、和歌・連歌の用語と區別して、音讀した詞を俳言卽ち

俳諧の用語と看做したものかと考へる。

貞徳の俳諧は詞の俳諧であつた。俳言が通俗・卑近の感を與へると、內容迄も俳趣味を帶びるやうになるが、俳言を重んずるとか、取成附を尊ぶといふ事から見て、彼等の俳諧の本義は心の上よりむしろ言語・表現の上にあつた事が分る。俳諧趣味が言語より思想の上に推移した事は、蕉門に於て成就したと云つてよい。「白冊子」に、

先師曰、春雨の柳は全體連歌也。田にし取る烏は全く俳諧也。五月雨に鳰の浮巣を見に行くといふ句は詞に俳諧なし。浮巣を見に行かんといふ所俳也。又霜月や鸖のつく〴〵並びゐてといふ發句に、冬の朝日のあはれなりけりといふ脇は、心・詞共に俳なし。ほ句をうけて、一首の如く仕なしたる所俳諧也。云々

此說は明に貞徳以來の俳諧本質の進展である。春雨の柳が連歌で、田螺捕る烏が俳諧である事は、貞門でも云ふだらうが、浮巣を見に行くと云つた詞の上に俳意はなくとも、見に行かうといふ心の上に俳趣味のある事は、慥に古風よりの一進步である。又霜月やの光景に對して、冬の朝日のあはれなりけりと、つく〴〵前句の情趣を深かめて云つた所は、思想・言語の上に俳意はなくても、觀察の內面に寂びた氣持を含んでゐて、全く芭蕉獨自の俳趣味である。

連俳の區別に就いて、二三門人の見解をあげて見ると、許六は、「五月雨は俳言也。五月の雨といへば連歌也。……の文字一字入りて、連歌になる事を知るべし。俳諧は自由體なる故に、貴賤・親疎・都鄙・遠近、一事として殘す物もなく、言はずといふ事なし」(篇突)。「滑稽のをかしみを宗とせざれば俳諧にあらず。滑稽入れがたき

所には、連歌にせぬ言葉つゞきを切込み、俳諧にしてするものなり。暮れて行く春の別は連歌也。今日きりの春の別は俳諧也。……昔の俳言といふはなけれど、連歌につゞけぬ辭は皆俳諧也。」（一枚起請）などと論じ、支考は、「今や我門の俳諧には、俳諧の心といふものはあれど、俳諧の詞といふものはなし。たとへ筑波の體をつくし、八雲の詞を重ぬとも、連歌と俳諧の姿は別なり。此故に我家の點式には、雅言のぬめりには俳諧の體なしとも、俗語のいやみには俳諧にあらずとも、そこの兩様を書きわけよと、新式に故翁の傍訓なり。爰に雅言といひ、俗語といひ、どちらも俳諧の公用なるに、ぬめりといやみともそれが病とは、これらに俳諧の明白を察すべし。云々」（俳諧十論）と解してゐる。

是等の說は大方芭蕉の敷衍であるが、許六のいふ、「滑稽のをかしみを宗とせざれば俳諧にあらず。」といふ言は必ずしも妥當ではない。俳諧を滑稽と解した事は貞門以前よりの說で、芭蕉はむしろ自由の立場から之を考察してゐる。春雨の柳は優美なる連歌趣味であるが、田螺捕る鳥は俗談・平話のほどけた面白味で、それを滑稽と考へてはいけない。鳰の浮巣を見に見かんと云つても、又冬の朝日のあはれなりけりと附けても、滑稽な趣はどこにもない。鳰の浮巣を見に行かうと云つた所に、ひなびた物にも趣味を感ずる打解けた自由な氣持がある。霜枯れた田野に、鶴がしよんぼりと並んで居る姿へ、朝日が射してゐる光景は侘しいものである。その侘しい光景をしみ〴〵と感ずる所に、芭蕉の特殊の情味がある。かゝる情味に滑稽などといふ感じは少しもない。嚴肅な內省的な感動こそあれ、おどけたをかしみなどはどこにあらう。支考が芭蕉の俳諧を心の俳諧と斷じ、雅語のぬめ

りと俗語のいやみを、俳諧の病と言つて斥けた事はよいが、新式に芭蕉の傍訓也は例の假託で信じられない。

八、俗談・平話

俳諧に俗談・平話を用ひる事は、必ずしも芭蕉に始まつたわけではない。貞徳が俳言を用ひ、緣語・掛言葉に通俗・滑稽な趣を示した事は、俳諧が庶民相手の文學である事を物語つてゐる。俳言は庶民の言語である。緣語・掛言葉の滑稽は庶民の雅情である。通俗・滑稽の言語は、やがて俳諧の俗談・平話たるべき前提である。併し貞德の俳諧はやさしきを體とす（玉くしげ）と云つて、連歌の優美な趣を實質としてゐるから、庶民の娛樂文學としては不徹底な譏を免れない。之を一般民衆の文學として、その內容たる俗談・平話に、卑俗・低劣な感を抱かしめなかつた所は、芭蕉の功績であつた。

「山中問答」に、芭蕉云、

俳諧の姿は俗談・平話ながら、俗にして俗にあらず、平話にして平話にあらず。その境を知るべし。云々

「三冊子」に、

師のいはく、俳諧の益は俗語を正す也。常に物をおろそかにすべからず。此事は人の知らぬ所也。大切の所也。云々

「宇陀ノ法師」に、

一とせ先師（芭蕉）伊勢山田にて俳諧ありしに、神樂堂といふ句せられけるに、山田人神樂堂を難じ申しける時、俳諧は平話を用ふ。常に神樂堂といひならはし侍れば、深き事は知らずと答へ給へり。云々

などとある。こゝに注意すべきは俗談・平話を正すといふ義である。芭蕉は俗談・平話をそのまゝ表さなかつた。芭蕉は風雅といふ事を忘れなかつた。風雅とは寂び・栞り・細みなどの心得である。寂び・栞り・細みの用意がなければ、平話の句はたゞことゝなり、荒くなり、野卑に流れ、道理に落ちて、俳諧の本意を失つて了ふ（山中問答）。寂び・栞り・細みの心がけが平生大切で、此理解があつて、俗談・平話も俗にならず、卑しくもならず、詩として價値ある內容となるのである。

支考の「白馬奥儀解」によると、俗談・平話を正す事に表裏がある。表面の意味は言語のあやまりを正す義である。例へば晦日（つごもり）をつもごりと云ひ、大根をだいこと讀ませる事は俗習のあやまりである。又言語に雅俗がある。瘦せて涼しは雅であるが、肥えて暑苦しは俗である。油をあむらといふは俗語にいやみがある。三味・てれんの類もそれである。裏面の意味はその情を正す義である。言語に虛實あり、誠僞がある。その言語の變化に從つて、その情を知る。言語に行ふ世間の理窟を捨てゝ、風雅の道理を取る所が、正すの義である云々と云つて居る。併し俗談・平話のあやまりを正すといふのは、俗間の卑俗な言語を正すといふ意味ばかりではない。一歩進んで云へば、五音のひゞきを正す事で、五音の調が整はなければ、一句の首尾が整はない事になる。其角が、「されば魂の入りたらば、ア・イ・ウ・エ・オよく響きて、いかならん吟聲も出ぬべし。云々」（「猿蓑」序）

と言ひ、許六も、「俳諧は俗談・平話を述べ侍れば、誰も〳〵よく言ひ習ひたるに似侍れども、知る人の耳には、いと淺間しき事のみ多し。第一てにはの事を知らぬ故に、一句の首尾調はぬ句のみなり。それてにをはは、五音のひゞきにて、目に見えぬ鬼を泣かしめ、武夫の心を和げ侍るはてにはなり。云々」（篇突）。と論じてゐる。此論の方が、支考のいふやうな單に世俗の稱呼を是正するといふ解釋よりも、藝術的に意義がある。支考が裏面の意味として說明した、風雅の道理を取るといふ事は、芭蕉が北枝に敎へた說とよく合致する。風雅の道理といふのは、寂び・栞り・細みの事で、かゝる基本情調の體得があつて、俗談・平話が藝術的價値を持つ事になるので、それはたゞ世間の理窟に捉はれてゐては出來る事ではなく、世間の理を捨てゝ、活きた人生を深く味解して、俗談・平話を語る事が、芭蕉俳諧の精神であつた。

二、寂び・栞り・細み

芭蕉の俳話にさび・しをり・細みといふ敎があつた。「去來抄」に、去來云、

さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。例へば老人の甲冑を帶し、戰場に働き、錦繡をかざり、御宴に侍りても、老の姿あるが如し。賑やかなる句にも、靜かなる句にもあるものなり。例へば、

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰、さび色よくあらはれたり。云々。

句の色とは句の情調である。句意や材料が華やかであつても、賑やかであつても、作者の觀照氣分に落着いた、脫落した、艶の消された色があれば、それが寂びである。從つて寂びは寂しいといふ苦痛な感情ではない。暖いけれど夏の日のやうな暑さではない。冷いと云つても冬の日のやうな落寞たる冷さでもない。强ひて言へば小春日和のやうな長閑な枯色であらう。かゝる寂びは寂しい心をねらつて得ようとしても得られない。自然の體得で、大體靑年時代よりもやゝ老境に入つた人の氣持に多い。

同書に、去來云、

しをりは哀なる句にあらず。……しをりは句の姿にあり。……

十　團　子　も　小　粒　に　な　り　ぬ　秋　の　風

先師曰、此句しをりあり。

栞りは語義未詳であるが、或は言語・表現の折れ傷む意を含んだ句を云つたものか。

同書に、去來云、

細みはたよりなき句にあらず。……細みは句の心にあり。……

鳥　ど　も　も　寢　入　つ　て　ゐ　る　か　余　吾　の　湖

先師曰、此句細みありと評し給ひしとなり。

細みは太く逞しきの反對で、線の細い、內容のこまかい、併し銳い感じの句を云つたものらしい。細みはよく芭

蕉の感情を表した詞である。「三冊子」中の「赤ざうし」によると、芭蕉が或所へ客に行つて、食後蠟燭を早く取つてくれと言つた。夜の更ける事が眼に見えて、心忙しいからであるとあるが、之れなどは芭蕉の神經の鋭い事を物語つた一例であらう。

芭蕉の門人には種々の境遇の人が居つた。その個性や趣味も決して一樣ではなかつた。併し芭蕉に師事する以上、芭蕉の寂栞主義に感化された事は事實であるが、それは人によつて厚薄があつた。例へば去來は直く寂びた風があり、杉風・野坡は淺くして淡く、丈草はさびしみに作があり、許六はをかしみに作を入れ、其角は活達にして作を旨とし、嵐雪はなよやかに寂び、支考は卑俗を專らにして、今日の上を云つた（小夜話）。その中でも殊に其角と芭蕉とは個性的に趣味を異にした。許六が芭蕉に自分の俳諧と其角の俳諧の符合せざる事、芭蕉の風雅と自分の風雅の符合する理由などに就いて質問した所、芭蕉云、許子が句作する時は、閑寂にして山林に籠るやうな氣がするだらう。自分の好む所もそこであるが、其角は伊達風流で、作意の働き面白き事を好み、風が太いが、自分は閑寂を好んで細い。そこが自分と其角の符合せざる所であり、同時に自分と許子の趣味と一致する點であると言つた（俳諧問答抄）。此言によると、芭蕉は閑寂を好んで、線が細く、其角は伊達風流を好んで、線が太いから、師弟の間に句作上の感化はないやうに思はれるが、其角は芭蕉の古い門人であり、殊に大才であつたから、芭蕉の寂栞に就いては十分に理解があつた。例へば「花實集」に、「其角曰、句談・句評は尤一大事也。すべて聞く人も我好むかたに聞きなして、たとへば閑寂なるを好む者は作ある句をとらず。作好む人は閑の場を知

らず。是いまだ俳諧の手に入らぬ故不自在也。云々」。とあるのでも分る。併し相容れない性格は、芭蕉歿後洒落風となつて表れ、遂に正風の精神を失つて了つた。（巻末補遺其二參照）

二、風體論

一、不易・流行

之は俳風の性質より見た論である。芭蕉も奧羽行脚前は基から出ない句が往々あつた（漢語調の字餘り異體の句や謎の如き滑稽句は皆基から出ない句と云はれてゐる。後條詳說。）併しそれは奧羽行脚中に工夫して、異體の句を省き捨てたが、未だ行脚中に、例へばあなむざんやな甲の下のきり〴〵すといふ異風の句もあつて、後にあなの二字を捨てた。不易・流行の敎は奧羽行脚の年の冬、卽ち元祿二年冬はじめて說いたのである（去來抄）。尤も元祿二年秋、芭蕉が加賀の山中溫泉で、北枝に說いた敎示の中に、「不易の理を失はずして、流行の變にわたる。云々」の語が見えてゐるから（山中問答）、奧羽行脚中に此論があつて、行脚後專ら去來に說いたものかと考へる。去來が此年の冬はじめて說き給へりと言つたのは（花實集には其角の言とする）、芭蕉が元祿二年冬嵯峨の落柿舍に去來を訪れて、此論を說き、それが去來を深く感動させたので、はじめての語を用ひたものであらう。

去來はなほ本論の芭蕉の發明にかゝる事を詳說して、

不易・流行は萬事にわたるなり。然れども誹諧の先達是をいふ人なし。長頭丸以來手を込むる一體（掛言葉・取成を巧に工夫する事）久しく流行して、

角樽や傾けのまう丑の年

花に水あげて咲かせば天龍寺

といふまで吟じつめぬれば、世人誹諧を如レ斯のものとのみ心得て、風を變ずる事を知らず。宗因一度そのこりかたまりたるを打破りて、新風天下に流行し侍れど、いまだ此教なし。しかりしより以來都鄙の宗匠達古風を用ひず。いつたん流々を起せりといへども、又其風を長く己がものとして、時々變ずべき道を知らず。先師始めて誹諧の本體を見付け、不易の句を立て、又風は時々に變ある事を知り、流行の句々分ッに教へ給ふ。されば不易・流行の事は古說によらず。先師の發明なる事、今だに於てあきらかなり。云々（花實集）

とある。然らば不易・流行の句とは如何。次に去來・魯町の問答をあげる。

去來曰、蕉門に千歲不易の句、一時流行の句といふあり。是を二つに分けて教へ給へる其元はひとつ也。不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず。不易は古によろしく、後にかなふ句なる故、千歲不易といふ。流行は一時々々の變にして、昨日の風今日よろしからず。今日の風明日に用ひがたき故、一時流行とは言ひ侍るなり。

魯町問、不易・流行其元一つとはいかゞ。去來曰、此事辨じがたし。あらまし人體に譬へて言はん。先づ不

易は無爲の時、流行は坐臥・行住・屈伸・伏仰の形同じからざるが如し。一時の變風也。其姿は時に變ずるといへども、無爲も事あるも、元は同じ人也。……

魯町問、不易の句の姿はいかに。
去來曰、不易の句は俳諧の體にして、いまだひとつの物數奇なき句也。一時の物好きなき故に、古今に叶へり。例へば

月に柄をさしたらばよき團扇哉　宗鑑
是は〳〵とばかり花のよし野山　貞室
秋風や伊勢の墓原なほすごし　芭蕉

是等の類也。……

魯町曰、流行の句はいかに。
去來曰、流行の句はおのれに一つの物ずきありてはやる也。形容・衣裝（原本、懷容・古歌・器物とあれど、今「去來抄」によつて改める）・器物に至るまで、時々のはやりあるが如し。例へば

むすやうに夏にこしきの暑かな

或は手を込め、或は歌書の言葉づかひ、又は謠の詞取りなどを物ずきしたるあり。是等も一時流行し侍れど、今日はとりあぐる人なし。云々（花實集）

以上去來の說明によつて、大體の意味は分るが、なほいふと、不易の句は永續性ある句、一人の物好きでなく、萬人の等しく讃美する句、一時代の趣味・好尙を超越した句などを指し、流行の句は一人の物好きの一時代の風をなした句、時代の一時的趣味に叶つた句などを云つたもので、それが根本に於て一つであるとは、何れにしても俳諧歌の體を備へてゐるといふ事であらうと思ふ。俳諧歌の體を備へるといふ事は、不易・流行の句の本質で、去來が之を人に喩へて、無爲にせよ、有爲にせよ、その本は同じ人であると言つた意味と同一であらうと考へる。併したゞ俳諧歌の體を備へてゐるだけでは、不易・流行の句の基とならない。芭蕉は古今集の俳諧歌中から、「冬ながら春のとなりの近かければ中垣よりぞ花は散りける」、「思ふてふ人の心のくまごとに立ちかくれつゝ見るよしもがな」といふ二首をあげて、まめやかに思ひ入りたる體の和歌としてゐる（「三冊子」中「白ざうし」）。このまめやかに思ひ入りたるといふ性質がなければ、不易・流行の句の基とはならないのである。まめやかに思ひ入りたる體とは、感情が僞りなく深く表はれてゐる體であつて、そこが卽ち芭蕉の俳諧の本質であつた。土芳は「白ざうし」に云、

師の風雅に萬代不易あり。一時の變化あり。この二ツに究り、其本一なり。その一といふは風雅の誠也。云々

この風雅の誠が、とりも直さず、まめやかに思ひ入りたる感情で、之が不易・流行の句の基本たるべきものでなければならない。

不易・流行論は、去來の主唱によつて、かなり同門間に反響があつた。先づ許六は之に就いて去來と論爭し、去來に「答許子問難辯」があり、許六に「再呈落柿舍書」があつた。許六の說は俳諧は不易・流行の二體に極まる。不易でなければ流行、流行の姿がなければ不易である。この二つの姿をはなれて、句といふものは曾てない。併し近來不易・流行に自繩して、眞の俳諧血脈のすじを失ふ者がある。或は不易がよい、又は流行勝れてゐるなどと論ずる徒もあるが、不易・流行に甲乙はない。不易・流行が尊いのではない。萬葉　古今から相續した血脈がある。芭蕉は此血脈を發明して世上に廣めた。蕉門の輩多くは芭蕉を崇敬して、芭蕉の俳諧を崇敬しない。之は俳諧に熱心が少ないから、芭蕉の俳諧の尊きを元來知らないからである。云々（篇突）とある。右の中不易・流行に自縛して云々と言つた事は、正秀を暗に攻擊したもので、卽ち許六の「自讃之論之上」に、「前論に云、正秀が詞に、師遷化の後流行賴みなし。不易の句ならでは作るまじきと云ひけると書せり。此事いぶかし。翁滅後共流行賴みなきと申すは何ぞや。……此正秀血脈をつがぬ故に、かやうの珍らしき一言をいふと見えたり。云々」とある。不易・流行に自繩して、芭蕉の精神を失ふ事は誤つてゐるが、芭蕉の俳諧の本質を、物の取合せによつてのみ得るといふ許六の說は、やはり一部の人が不易・流行にのみ捉れて、その基を忘れてゐる論と同一で、取合の自縛論となつて、芭蕉の血脈を繼いだ者の說としては、偏狹であり、不自由な感がする。

次に支考は「東華集」に、四格ノ辯を序し、「不易は黃金の昔今に尊きが如し。流行は羽書とて紙札に物書きて金銀になせるが如し。世に從ひ、時にとりて、用ひも用ひずもなりぬべし。いづれがよく、いづれがあしからん。

世に従ひたる名なるべし。」と論じ、不易・流行は世の習慣に従つた名目で、何れも甲乙がないと輕く扱ひ、表合の發句に不易・流行の眞・行・草の格ある事を說いてゐる。

二、眞・行・草

之は俳風の時代的變化の上から見た論で、支考の「東華集」・「三疋猿」・「俳諧古今抄」等に見えてゐるから、支考が主に傳へた說であらう。

土芳の「三册子」中「あかざうし」に云、

師の曰、此道のこゝに出て百變・百化す。しかれどもその境眞・草・行の三つをはなれず。云々

併し此說は既に連歌にあつた。宗養の「秘袖抄」に、宗牧が宗長から傳へたといふ眞・草・行の教が見えた。恐らく俳諧にも古來あつた說であらう。眞・草・行は俳風の姿で、俳風は如何に變化すると云つても、此三つの風を出ないといふのが芭蕉の教であつた。支考は「三疋猿」の序に、之を解して云、

或翁の遺誡に、俳諧は眞・草・行の三をはなれずといへるは、世情の限をいへるなるべし。眞とは眞實にして、五色の糸筋を亂さず。行は世の常の世情をつくし、草はその情のほどけるをいふか。云々

支考は世情といふが、之は支考の俗談・平話主義の見解であつて、俳諧はひとり世情にのみ限らるべきものではないが、その義は支考の解說の通りである。即ち眞とはその風の堅く眞面目である事、行とは堅からず、柔かな

らず、眞と草との中間を行く調子、草とは脫落した平淡な風を云つたものである。五明は「小夜話」に、芭蕉の俳風を眞・行・草の三品に宛てゝ、「初懷紙」・「冬の日」・「熱田三歌仙」・「一ツ橋」は眞の體、「ひさご」・「猿蓑」・「深川集」は行の體、「續猿蓑」・「炭俵」・「別座敷」・「小文庫」は草の體とし、各是等三品の獨吟歌仙を試みてゐる。なほ芭蕉は「その三ツの中いまだ一二をもつくさず。云々」(「あかさうし」)とも言つて、時代の風としては今後種々發展すべき餘地ある事を暗示してゐる。

三、句の新しみ

以下數條の論は句作表現の價値に就いての敎である。

芭蕉は句の新しみを常に考慮してゐた。それは北枝の「山中問答」に、「あたらしみを心懸くべし。好き句の古きよりも、惡しき句の新しきを、俳諧の第一とす。云々」、土芳の「あかさうし」に、「亡師常に願にやせ給ふも新しみの句也。云々」、「去來抄」に、「宗因なくんば、我々が俳諧、今以て貞德の涎をねぶるべし。云々」などとある言でも分るが、風國の「菊の香」の序には、一層痛切に之を說いて、

はせを庵の先生、一日門人に對せられて曰く、今の風體を以て、故人の致されし所を見るに、その趣向・作意既に求むるにたやすし。又われ〳〵が今翫びて、情志を樂しましむるの境も、亦さぞしかなり行くべし。後世何者か出て、如何なる新しみをやさゝぐり出すべし。我はたゞ來者を恐る事ばかりにぞ。云々

とある。芭蕉の言の如く、古人の趣向・作意は當時既に古くなつて、誰れも言出すに骨が折れない。やがては芭蕉の句境も古くなつて行かう。何時何處から偉人が起きて、芭蕉流の句風を破つて、新風を鼓吹するかも知れない。自分はたゞ來者を恐れるのである。蓋し新しみとは俳風の變化である。風を變へるには努力しなければならぬ。努力しても流行しなければ新しみがない。芭蕉の俳諧に七度の變化があつたとか、或は三度の流行であつたとかいふ論は、その風が一時の俳壇を支配したからである。「菊の香」に、時代の新古を知らなければ、芭蕉の變化・流行の次第は分るまいとあるが同感である。

芭蕉の新古論は去來に深い感銘を與へたと見えて、此論は專ら去來から說かれてゐる。風國は去來の教を受けた者であるから、前述の如き論を立てゝ、「菊の香」を刊行したのだらう。「菊の香」はひとり「初蟬」の誤を訂正したものではない。句の新しみを知るといふ事が、芭蕉の俳諧の眞諦を知る眼目で、それを示さんがための出版である。殊に卷末に去來の「贈其角先生書」を添へたのもそのためである。此書は其角が古格を墨守して流行に從はない事を難詰したものがある。

併しながら去來はたゞ句を新しくすればよいとばかりは考へて居なかつた。去來は「俳諧は新意を專にすといへども、物の本情を違へていふものにはあらず。云々」(去來抄)と言つて、其角の鶯の身をさかさまに初音哉の句を難じてゐる。去來云、角が句は暮春の亂鶯である。初鶯に身を逆にする曲はない。凡そ物を作するに、先づその本情を知るべきである。知らざる時は、珍物・奇言に魂を奪はれて、その本情を失ふ事がある(去來抄)。句

を新しくするのはよいが、それがため物の本情を失ふと、句は作り事となり、虚僞となる。それでは誠から出た俳諧とは云へない。其角は作意を好む人で、人の意表外に出づる事を喜ぶが、その弊として物の本情を失ふ傾がある。芭蕉が其角を定家に比して居るのは、彼が才に驚歎した賞美の言であらうが、一面技巧の弊に陷る事を物語つたやうにも思はれる。

嘯山の「雅文せうそこ」に、野坡云、「句はしまりを第一にして、新しみを願ひ申す事に候。取合せものを尊しとは存せず候。云々」とあつて、芭蕉の「鶯や柳のうしろ藪の前」といふ句を説明して、「鶯に柳は其比も古く候へども、かくの如く句作り給へる故、あたらしみ第一也。云々」と論じてゐる。鶯に柳の取合せは芭蕉當時既に陳腐になつた趣向であるが、柳の後藪の前と云つて、鶯の居る場所を寫實した所に新しみがある。許六の「宇陀ノ法師」に、「あたらしみといふ事、末々の門人迄聽き習ひて申侍れど、慥に知りたる人なし。新しくといふは趣向にあり。あたらしみといふは句作りにあり。毎度新しき趣向は稀れなる故、句作りにて新しみを付けていふ事也。云々」とある。之によると野坡も許六も新しみを願ふ事は一致してゐるが、野坡はしまりを第一とし、許六は取合せを專にする點が違ふ。併し趣向は陳腐になり易いとなると、何かの手段によつて新しくしなければならないから、結局許六の言の如く、句作りによる外はあるまいと思ふ。されど趣向は決して盡きるものではなからう。許六も題詠的の句は古くなるから、題を箱の中に入れて、其上に立つて、廣く乾坤を尋ぬべきであると言うてゐる（篇突）。芭蕉の言に、「景氣の句は皆古し。」（宇陀ノ法師）とあるが、それは景氣の範圍を限るからである。景

氣の範圍を限ると、連想が固定してくる、連想が固定すると、同じやうな趣向の句が出來て古くなる。乾坤を尋ねるといふ事は、景氣の範圍を自在にし、連想を固定させないためで、廣く寫實するといふ事になる。

四、句の勢ひ

句の調子を張らせる事である。調の張つた句と、調の弛んだ句とは、鑑賞の上に格段な價値の相違がある。調の張つた句の方が、具象化がキビ〳〵して新しくなる。「去來抄」に、「去來曰、句に句勢といふ事あり。文に文勢、語に語勢あるが如し。たとへば、「ふるふがごとく小糠雪降る」といふ句を、先師曰、「打あぐるごと小ぬか雪降る」と作れば、句勢ありとなり。」とある。

五、句の姿

句の情趣が自然の風姿を備へる事である。「去來抄」に、去來曰、句に姿といふあり。たとへば

妻よぶ雉子の身をほそうする　去來

初めは此句、「つまよぶ雉子のうろたへて啼」と作りたりけるを、先師曰、去來、汝いまだ句の姿をしらずや。同じ事も斯くいへば、姿ありとて直し給へるなり。支考が風姿といへるもこれなり。」とある。雉子が妻を呼ぶ情の切なる思ひを表すには、うろたへて啼くでは拙い。身を細うするの方が自然である。

六、句の語路

句の口調の平滑なる事である。「去來抄」に、「去來曰、句に語路といふものあり。句ばしりの事也。語路は盤上を玉の走る如く、滯りなきをよしとす。又青柳の風に亂るゝが如く、優を取りたるもおもしろからん。溝川に土泥の流るゝやうに、行きあたり〳〵なづみたるはわろし。其外卷中一句二句は曲をなせるもあるべし。夫とても語路の滯りたるは嫌ふなり。」とある。

七、句の位

句の格調を云。格調の低い句は品位が劣る。「去來抄」に、「野明曰、句の位とはいかなるものにや。去來曰、これも又一句をあぐ。

卯の花のたえ間たゝかむ闇の門

先師曰、句の位尋常ならずとなり。去來曰、畢竟句位は格の高きにあり。句中に理窟をいひ、或は物をたくらべ、或はあたり合せたる發句は位くだるものなり。」とある。同書に、猿蓑撰の時、芭蕉の、

病鴈の夜寒に落て旅寐かな

海士の家は小海老にまじるいとゞかな

の内一句入れようとして、凡兆に計ると、凡兆は海士の家の方が句のかけりごと新しく、秀逸だといふし、去來は、病鴈の方が格高く、趣かすかで、容易に案出されないと論じ、遂に兩句共入れる事にした。其後芭蕉之を聞き、病鴈を小海老と同じやうに論じたかと言つて笑つたとあるが、之も句の位の一例である。格調は病鴈の方が高いが、新しみの方は小海老の方にあらう。此點から考へて、新しみといふ事よりも、句の位の方が第一だつたものと見える。

三、作法論

一、發句の作法

イ、句作の用意

前述の如く、芭蕉は門人の氣象や口質によつて、種々の教示を垂れた。「去來抄」に、

去來曰、先師は門人に教へ給ふに、その言葉極まりなし。予に示し給ふには、句毎々にさのみ念を入るゝものにあらず。又句は手づよく、俳意たしかに作るべしとなり。凡兆には一句わづかに十七字なり。一字もおろそかに置くべからず。誹諧もさすがに和歌の一體也。句にしをりのあるやうに作るべしとなり。云々

とある。其他洒堂・許六・惟然等に向つても、それ〲異つた教があつた。

併しながら芭蕉は先づ句作の第一歩として氣鋒を以て作る事を說いた。此教示は總括的な言語で、門人の個性や趣味の相違に關せず、何人にもかゝる態度を必要とした說と考へる。「去來抄」に、

先師曰、今の俳諧は日頃に工夫をつけて、席に臨んでは氣鋒を以て吐くべし。心頭に落すべからずとなり。

去來曰、俳諧は氣鋒にて無分別に作すべしとのたまひ、云々

又土芳の「あかざうし」に、

功者に病あり。師の詞にも、俳諧は三尺の童にさせよ。初心の句こそたのもしけれ。などとたび〳〵云ひ出でられしも、皆功者の病を示されしなり。……氣先きを殺せば、句氣にのらず。先師も俳諧は氣にのせてすべしとあり。……門人功者にはまりて、たゞ能き句せんと私意を立て、分別門に口を閉ぢて、案じ草臥るなり。云々

ともある。以上の敎は平生句作修行につとめ、いざ其場に臨めば、一氣呵成に、大膽に、眞率に作れといふ事である。功者の弊を戒めたのは、たゞ佳句を作る事に苦心して、私意・私情を挾んで、物の本情を捉へようとしないからである。土芳も、「其物より自然に出づる情にあらざれば、物と我二ツになりて、其情誠に至らず。私意のなす作意也。云々」(同書)と言つてゐるが、師說の敷衍である。大膽になれ、率直になれといふ事は、句作態度の第一條件である。作に向つて、思案に凝る事は、私情を入れる基で、物の本情を逃がして了ふ。芭蕉は俳席に於て速吟を尊んだ。去來は蕉門遲吟第一であつた(去來抄)。或時芭蕉は去來と共に正秀亭に會合した。去來は珍

客であるから、發句を所望されたのであらう。所がそれがなか〳〵出來ない。芭蕉怒つていふやう、一夜の程いくばくかある。汝が發句に時を移したならば、今夜の會は空しくならう。余り不興の事である。と言つて芭蕉は發句を出し、正秀が脇を附け、去來は第三を附けたが、芭蕉に斧正されて面目を失つた（去來抄）。句作の後れるのは、平生の不鍛練と思案に落ちて物の本情を失ふからである。「あかざうし」に、

> 句作りに師の詞あり。物の見えたる光、いまだ心に消えざる中にいひとむべし。又趣向を句のふりに振出すといふ事あり。是その境に入りて、物のさめざるうちに、取りて姿を容るゝ敎也。句作になるとするとあり。内を常に勤めて物に應ずれば、その心の色句となる。内を常勤めざるものは、成らざる故に、私意にかけてするなり。

とある。之は實際感受した物の印象が、まだ消えない中に句作する事をすゝめた敎である。實感の光が消えると、私意にかけて作り物となる。境地に入つて、物の本情を十分摑んでゐると、自然と句の姿がその本情に適合するやうな形を取つて表れる。强ひて言語・表現の工夫をめぐらさずとも、自然の氣持に合つた句が出來る。平生の用意・練習が第一である。物の實情を十分思ひ極める事が第一である。それには感受性が强く鋭くなければならないし、實感の把握性が確實でなければならぬ。芭蕉の言は後人に迄もよき敎訓である。

ロ、上達の道

俳道上達の道は、多作主義にある。而も過去の境地を忘れ去つて、ひとへに將來の進展に志す底の人が、上手

の域に達するのである。許六の「篇突」に、

又云（芭蕉）、上手になる道筋慥にあり。師によらず。弟子によらず。流によらず。器によらず。畢竟句數多く仕出したる者の、昨日の我に飽ける人こそ上手にはなれり。

とある。上手の作者は想像力に富んでゐるが、下手の作者は想像力に乏しい。上手の作者は未來の句を作る。その風は今は行はれなくとも、先へ行くと用ひられる。それは奥を尋ねて案ずるからである。之は「篇突」に、

又云（芭蕉）、未來の句をするといへば、未練の者は途方もなき様に覺え侍れ共、眼前に知れたり。たとへば花の句所望せし時、一句案じて當前に出す。又一句望む時、最前の案じ所を換えて、奥を尋ねて、一句取出すべし。又所望する時、ひたもの奥を尋ねて出さん。是未來の句眼前に知れたり。世上の人奥を尋ぬる事を知らざる故に、未來の句曾て見えず。上手のすり上げて、案じたる骨折を知らざる事無念也。……上手は又其時五年も十年も先へ流行して、終に下手の居る所に遊ばず。故に一生追付く事かたかるべし。

ともある。併し上手な句必ずしも師說に忠實であるとは云へない。將來の流行を見る句必ずしも文學的價値あるものとも定めがたい。其角などは上手な作者であるが、芭蕉歿後師風を變じ、洒落俳諧といふ謎のやうな價値の低い句を作つてゐる。上手と云つても、句の根本方針が確立しての上である。許六は「とりはやすを上手といふなり。」といふ芭蕉の教をありがたく思つて、ひとへに上手〳〵と言ふけれど、その前に文學的價値の高い句を志さなければなるまいと思ふ。昨日の我に飽ける人も、あらぬ道に轉向しては問題にならぬ。此點に留意して、芭

蕉の言を聽くべきである。

八、取　合　せ

取合せとは材料の配合である。芭蕉之を許六に傳へ、許六之を以て蕉風血脈の教なりと信じ、自門の金科玉條とした。「花實集」に、

先師曰、發句は頭よりすら〳〵といひくだしたるを上品とす。ほ句はものを合すれば出來せり。そのよくとり合するを上手といひ、あしきを下手といふ。其角曰、ものを取合せて作する時は、句多く、吟速なり。初學の人是を思ふべし。功成るに及んでは、取合ふ合はざるの論にあらず。

「去來抄」に、

洒堂曰、先師曰、發句は汝が如く物二ツ三ツ取集めて作るものにあらず。こがねを打ちのべたるやうにありたしとなり。云々

「宇陀ノ法師」に、

師說云、惣別發句は取合物と知るべし。題の中より出づる事は、よき事はたま〳〵にて、皆古しと申されける。此旨よく請繼ぎて、江東の俳諧は常に取合第一とす。同門の中にも、江東は道具過ぎたりと難ずる人もあるよし。先師の句十に七八は必取合にて道具也。難ずる人取合樣を慥に知らざる故に此難あり。道具でする事得物ならば、幾度も道具でよき句せらるべし。不得手の格にて、あしき句して何の益かあらん。例へ

ば徒鑓つかひに、十文字を得つかはぬと難じたると似たり。

などとある。芭蕉は洒堂に向つて、黄金を打延べたやうに作れと敎へ、一方許六には取合物と知るべしと說いてゐるが、それは二者の氣根に從つて敎へたもので、兩說とも正しい敎示である。併し句は頭から堂々と言ひ下した方が品位がある。格が高い。取合せ手段に訴へて作つた句は品が落ちる。格調に卑しい所がある。成程其角の言の如く、物を取合せて作ると、句は多く出來るし、早く作れる。故に初學者に向つては取合せ手段の句作をすゝめるもよからう。併し功成るの曉に於ては、取合・不取合の論ではない。もつと根本的の問題がある。「雅文せうそこ」に、野坡の說として、「自然の作と聞え侍るなり」とか、「一句の神定り侍るなり」とあるが、此言の方が、根本問題に觸れてゐる。三宅嘯山の許六の句評に、「枯談肉少、率易無含蓄。云々」(俳諧古選)とあるは、蓋し的中の論であらう。

二、餘韻・餘情

芭蕉は印象明瞭よりも餘韻餘情を尊んだ。「去來抄」に、

蘿の葉の……何々とやらん、跡は忘れたり。尾張の人の句也。

此句は蘿の葉の谷風に一すぢ峯まで裏吹きかへさるゝといふ句なるよし。予先師に此句を語るに、先師曰、發句は斯の如くくま〴〵まで、いひつくすものにあらずとなり。支考傍に聞きて大に感動し、はじめて發句といふものを知り侍るとて、此頃物語りありけり。云々

下臥につかみわけばや糸櫻

先師路上にて語り給ふ。此頃其角が集に此句あり。いかに思ひてか入集しけむと。去來曰、糸櫻の十分に咲きたる形容、よくいひおほせたるに侍らずや。先師曰、いひ課せて何かある。予こゝに於て肝に銘ずる事あり。はじめて發句になるべき事と、なるまじき事とを知れり。

とある。隅々まで言ひ盡してはいけない。言ひ終せて何かあると言つた芭蕉の教示の中には、余韻・餘情といふ事を尊んだ意味が分る。印象が明かになれば、餘韻・餘情は乏しくなる。物の趣を言外に表す事は、句の情味を豊かにする。深くする。品を付ける。それに反して物の情景を明瞭に表すと、情趣を味ふ餘地がなくなる。句の情趣は讀者の想像によつて面白くなるので、たゞ句の表面に表された情味だけでは物足りない。淺くなる。品がなくなる。芭蕉はそれを斥けたのである。

ホ、題を離れる

芭蕉は題詠の弊を述べて、發句は題の中から出る事は少く、出ても大方古いと言つてゐる（「くろざうし」）。

「篇突」に、

又云（芭蕉）、題の噂と覺えたるがよし。たとへば花の句せんに、花とばかりは文字十七の數なし。されば風に花の散るといふ事、一度はをかし。二度は面白からず。入相の鐘に散るともいひかへ、風の吹かぬに散るなど、隨分噂を盡したれば、上手はよき噂を尋出し、下手は下手にて噂わろし。

ともある。許六はなほ之を敷衍して、

世上發句案ずるに、皆題號の中より案ずる。是なきものなり。余所より求め來らば無盡藏ならん。たとへば題を箱に入れ置き、其箱の蓋に上りて、乾坤を廣く尋ぬるものなり。題號の中を尋ねて、新しき事なきといふは、たま〳〵萬が一殘りたるものありとも、隣家の人同日に同題を案ずる時、同じ題の曲輪なれば、殘りたるものにひしと尋ねあつべし。道筋かはらざれば疑ひなし。まして遠國・遠里に於て、いくばくか仕置き侍らん。曲輪を飛出て案じたらんには、親は子の案じ所と違ひ、子は親の作意と各別なるものなり。

と論じて居る。去來も「去來抄」に、

發句は曲輪の內に無きものにあらず。殊に卽興・感偶するものは多くは內にあり。然れども常に案ずるに、內は少く、多くは古人の糟粕なり。千里にかけ出て吟ずる時は、句多きのみならず。第一等類をのがる。初學の尤思ふべき處也。云々

といふ。曲輪とは範圍である。題詠は題の範圍を固定し、思想の趣味を傳統的にさせる。題の範圍を脫出して句作すると、題に捉はれないから、自由に廣く景情を探す事が出來る。題に想を限ると古くなり、千遍一律のものとなる。許六の蓋の喩は面白い。題を隱して置いて、その傳來の趣味を忘れて、句作すると、變化がある。新しい句はいくらも出來よう。芭蕉が題の噂と言つたのは、題の間接的な思想の事である。題の想像化である。題の趣味を變へて句を詠むと、十七音の短い形でも、趣の違つた句は多く得られる。題の噂とか、題の曲輪を飛び拔

けるとかいふ事は、從來の題詠趣味を破つて、新しい句作に作者を導くための敎示である。

二、附句の作法

イ、附方の用意

土芳の「あかざうし」に、

師の曰、學ぶ事は常にあり。席に臨みて、文臺と我と間に髮をいれず。思ふ事速に云出て、爰に至つて迷ふ念なし。文臺引おろせば卽反古也と、きびしく示さるゝ詞もあり。或時は大木倒す如し。鍔本に切込む心得。西瓜切る如し。梨子くふ口つき、三十六句皆やり句などと、いろ〳〵にせめられ侍るも、皆功者の私意を思ひやぶらせんとの詞也。云々

とある。是等の比喩は、發句は氣鋒を以て作れと云はれた意味と同一である。一氣呵成に作る。放膽的に作る。思案・工夫に落ちないで、思ひ切つてする。私意を挾む餘地のないやうにする。私意を以て作ると、物の本情を失つて了ふ。それを芭蕉は嫌つたのである。「去來抄」に、

船にわづらふ西國の馬　彥根の句也

許六試みの點を乞ひける時、此句に長をかけたり。先師曰、今はかゝる手帳らしき句は嫌ひ侍る。是等は手帳なり。長あるべからず。重て上京の時、此句何故に手帳に侍るや。先師曰、船の中にて馬の煩ふ事はいふ

べし。西國の馬と迄はよくこしらへたるものなりとなむ。

とある。之は私意を挾んだ句の戒である。私意を挾む時はこしらへ物となる。作り事となつて、本情を失ふ。發句ばかりでなく、連句にもかゝる用意が大切であつた。

ロ、附方の種類

附句は前句によつて千變萬化するもので、數に於て定むべき理由はない。併し芭蕉は先づその基本的のもの、即ちうつり・ひゞき・匂ひ・位・俤・景色の附句に就いて敎示して居る。「花實集」に、

先師曰、發句は昔より樣々かはり侍れど、附句は三變也。昔は附ヶ物を專とす。中頃は心附を專とす。今はうつり・響・匂・位をもて附くる事をよしとす。

とある。附物とは物附（詞附）で、言葉の緣によつて、前句の或名詞に名詞を附ける事、心附とは前句の意味を說明する附方である。之は元來連歌にあつた附方の名目で、連歌の寄合は、前句の緣語をたどつて附ける附方だから、物附と見るべく、心附は良基の「連理秘抄」にも見えて、後世重要なる附方の一つになつた。貞門では詞附と心附を相互に用ひ、詞附中の取成附・心附中の古事附（德元の「俳諧初學抄」には、心附を古事附と解く）を特に尊重した。談林も詞附・心附を兩用し、何れも奇拔な道化・輕口を主眼とした。「花實集」に、

牡年問、いかなるを響・匂・うつりといへるにや。去來曰、支考あらましを書出せり。是を手に取りたる如くにはいひがたし。先師の評を擧げて語る。他は押して知らるべし。

赤人の名につがれけり初がすみ　史邦

鳥も囀る合點なるべし　去來

先師曰、うつりといひ、匂といひ、誠に去年中三十棒を受けられたるしるしとなり。

其角釋曰、つがれたりといひ、なるべしといへるあたり、その言ひ分の匂相うつり行く所見るべし。若し發句、名はおもしろやとあらば、脇は囀る氣色なりけりといふべし。

卽ち移りも響きも匂ひも、二句間の情趣や氣持の呼應ではあるが、移りは俗に云、うつりが善い惡いのうつりで、反映といふ義であらう。前例に就いて云へば、赤人の名はつがれけりといふ俗談的な氣持に、合點なるべしといふ氣持が、反映するのだらうと考へる。名は面白やと雅やかに、輕く云へば、氣色なりけりと、之も輕く、品よく、心持を合はすべきである。

響は、同書に、

響は打てば響くが如し。たとへば

榑椽に銀土器をうちくだき

身ぼそき太刀の反ルことを見よ

此句をあげ、右の手にて土器を打ちつけ、左の手にて太刀に反り打ちかけるしかたして語り給へり。一句一句に趣變り侍れば、悉くいひ盡しがたし。

とある。表現の上から句の情趣を呼應させる事であらう。此句は楠公の子別れのやうな場面で、父は討死を覺悟して、子と別れの盃を酌み、形見として細身の太刀を與へるといふ附意であらうが、打碎きと云つた表現に對して、太刀のそりを示した緊張した心持を響かせた所、呼吸がピタリと合つて居る。支考は之を起情と言つてゐるが（十論爲辯抄）、たゞ起情では響きといふ語の內容に當らない。

匂ひは、土芳の「あかざうし」に、

折〲や雨戸にさはる荻の聲

はなす所におらぬ松むし

この脇、發句の位を思ひしめて、匂ひよろしく、事もなく附けたる句也。

とある。之も支考は「爲辯抄」に「馨といふ事は、百韻が百句ながら、二句の間に籠れるを、和歌には餘情といひ、俳諧にはにほひといふ。云々」とあつて、百句が百句に渡るものとしてゐる。「花實集」・「去來抄」に例句をあげて居ない所を見ると、すべてに應用さるべきものか。

位は「花實集」に、

前句の位を知りて附くる事也。たとへば好句ありとても、位應ぜざれば乘らず。先師の戀句を擧げて語る。

上置の干菜刻むもうはの空

馬に出ぬ日は內で戀する

此前句は人の妻にもあらず。武家・町家の下女にもあらず。宿屋・問屋などの下女也。

とある。即ち前句の人の品位なり、場所の狀況なりを見て、その情趣に適應した句を附ける事である。前句が古代めいた人の有樣を云へば、古風な風俗を附けるとか、今樣な浮氣女を云へば、浮氣つぽい風俗を附けるとか、然るべき武士の妻なら、奧床しきつゝましさ、町家の腰元なら、何と云つたやうな例である。

俤とは古事の想像化である。「花實集」に、

牡年問、俤にて附くるとはいかゞ。去來曰、うつり・響・匂は附やうの鹽梅也。俤は附やうの事也。昔は多く其事を直に附けたり。それを俤にて附くるなり。例へば

艸庵にしばらく居ては打破り
命嬉しき撰集の沙汰

始は和歌の奧儀を知らずと附けたり。先師曰、前を西行・能因の境界と見らるゝかし。されど直に西行と附けんは手づつならん。只俤にて附くべしと直し給ひ、いかさま西行・能因の俤ならんとなり。又人を定めていふのみにもあらず。例へば

發心の始に越る鈴鹿山
內藏頭かと呼ぶ人は誰

先師曰、いかさま誰ぞが俤ならんとなり。云々

去來が浪化に敎へた「去來文」といふ書に、なほ詳說して云、

當流に面影をもつて句を付け申候事御座候。是は古人のしたる事を、その通りに句に仕候へば、故事にて御座候。其故事とはちがひ申候。たとへば書にも文にもかつてなき事も、その人の風勢〻〻必ず如ㇾ此なるべき事をと、思ひ寄せ可ㇾ仕候。譬へば、

草庵に暫く居ては打破り
命うれしき撰集の沙汰

此句は西行か能因が如きの人の面影と聞え候。

稻の葉のびの力なき風
發心の初に越ゆる鈴鹿山

是は實ヅ西行を思ひ寄せたる句にて候。西行行脚のはじめ東國へ下り、鈴鹿にて略す。是を

行脚して歌讀み初る鈴鹿越

と仕候ては、一句もあしかるべし。跡々も付けがたく候。云々

とある。俤とは貞門の故事附の進步したものである。故事をそのまゝ附けると、德元のいふ心附になるが、蕉門では俤を附ける。事實は古書にないが、想像化して附けると、句の懷が廣くなり、後の附句が樂になる。發心のはじめに鈴鹿山を越える人を、西行のやうな境界の人と見て附けるのだから、內藏ノ頭かと呼ぶやうな句も附け

られるのである。内藏ノ頭の故事が西行物語などにあらうがなからうが、それに拘泥しないで、たゞ故事を匂はせるだけでよい。從つて其次に、「卯の刻の箕の手に並ぶ小西方」と附けて、合戰の拔がけの狀を利かす句が出來て、變化が面白く展開される。

景色の句に就いては、元來良基の「連理祕抄」に、景氣附といふ名目があり、宗牧の「胸中抄」にも、景氣連歌とあつて、例句が見えて居る。俳諧では連歌に倣つて、既に景氣といふ語は見えて、例へば「正章千句」の貞德の判詞に、「おもしろき景氣にて候」とあつて、連歌と同じく敍景的な附句の名稱になつてゐる。「去來抄」に、

先師曰、氣色はいかほどつゞけてもよし。天象・地形・人事・草木・魚虫・鳥獸の遊べる其形容みな〳〵氣色也。

とある。倂し許六の「宇陀ノ法師」に、

春風や麥の中行く水の音　木導

師說云、景氣の句世間容易になる以の外の事也。大事の物也。連歌に景曲といふ。いにしへの宗匠深くつゝしみ、一代一兩句には過ぎず。景氣の句初心まねよき故深くいましめり。俳諧は連歌ほどは忌まず。惣別景氣の句は皆古し。一句の曲なくては成りがたき故、強くいましめ置きたるなり。木導が春風、景曲第一の句也。後代手本たるべしとて褒美に、「陽炎いさむ花の糸口」といふ脇して送られたり。云々

とある。芭蕉のいふ氣色とは、客觀的事象といふ意味で、田園の敍景に限られたものでもないらしい。田園の敍景ならば、つゞけて出すわけもあるまいと思ふ。

四、法式論

イ、法式に對する觀念

土芳の「しろざうし」に、

貞德の差合の書、その外その書世に多し。その事を問へば、師信用しがたしといへり。その中に俳無言（誹諧無言抄か）といふあり。大樣よろしといへり。……師の門にその一書あれかしといへば、甚つゝむ所也。法を置くといふ事は重き所也。されども花の下などいはるゝ名あれば、其法立てずしては其名の詮なし。代々あまた出し侍れど、人用ひざれば何ゝがためぞや。法を出して、私に是を守れとは、恥しき所也。差合の事は時宜にもよるべし。先は大方にしてよろしとなり。云々

又「花實集」に、

其角曰、さし合等の事。先師曰、おほむね御傘・はなび等を用ふべきとなり。惣じて差合の事はあらましをさへ覺え侍らば、强ひて吟味すべき事にはあらじ。是誹諧を無量ならしめんがため、先師もさし合くりの上手といはれんよりは、誹諧に上手のかたあらまほしと宣ひき。云々

卯七問、先師は誹諧の法式を用ひ給はずや。去來曰、是を成程用ひてなづみ給はず。思ふ所ある時は、古式

を破り給ふ事もあり。されど私に破るは稀也。第一先師の誹諧は長頭丸以後の誹諧を以て元來とし給はず。唯世々の誹諧體に基きたまへり。凡誹諧の句は已に久しといへども、連誹となるは長頭丸以來にして、未法式なし。仍て連誹の式を用ひらる。重ねて誹諧の法式を改作あらるゝにも及ばず。又上より定まりたる法式にもあらず。若し其人あらば是を損益あるとも罪なるまじ。其時の宗匠達はみな元來連歌師たる故、連歌の法式を借用ひらるゝなり。退いて思ふに、今日の先師若し其時に居まさば、連歌によらず、誹諧の式は別に立つべし。世の人は誹諧を以て連歌の奴僕のやうに思へり。先師の沙汰は格別也。

とある。以上の說によると、芭蕉は大體古式に倣つたけれど、必ずしも之に拘泥しなかつた。從ふ必要のないものは、破つて行つたが、一方又先哲の言を重んじて、むやみに破らうとはしなかつた。俳諧の式は貞門以後「御傘」や「花火草」に則つたけれど、芭蕉はそれのみに準據せず、返つて連歌の制を參考した所もあつた。式の書を作る事は重大な事で、式を立てゝも人が用ひなければ、立てる必要もなく、式を定めて之を守れといふ事も恥しいから、改めて式も立てなければ、式の書も出さなかつた。たゞ志ある門人が芭蕉に直に聽いて、信用して書き留めたものが、我門の式ともなればなるのである。支考が長崎へ行つて、卯七と表合の興行をした。それを去來が批評した言が「旅寐論」に出て居るが、その中に、「凡先師折〳〵古法を破り、新式を定め給ふ事は、制をはぶき、事を廣めて、句に秀句多からん事をはかり給ふなり。……然れども故實をふまへ、みだりに破り給ふ事なし。云々」とあつて、煩瑣な制を省き、詠む事柄を自由にさせ、秀句あらしめんために、古法を破つたので、み

だりに破つたのではなかつた。故實をふまへて居る。それは芭蕉が大體連歌の式や貞門の式を知つてゐるからこそやれるので、その知識のあつた事は、例へば「三冊子」を見ても、本歌を用ひる事・本歌と證歌の差別・輪廻・遠輪廻・切字・懷紙の制・月・花・戀の句の制等の教示があるのでも分るし、芭蕉の傳書を讀んでも、想像されようと考へる。

ロ、思想進行の順序

一卷の思想進行の順序を、音樂の序・破・急の手にあてはめて論じた事は、元來連歌の教であつた。良基の「筑波問答」に、「たゞの連歌にも、一の懷紙の面の程は、しとやかの連歌をすべし。てにをはも浮きたる樣なる事をばせぬ事也。二の懷紙よりさゞめき句をして、三四の懷紙をば殊に逸興あるやうにし侍る事也。……連歌も一の懷紙は序、二の懷紙は破、三四の懷紙は急にてあるべし。云々」とある。此説は誹諧にも蹈襲されて、貞門では、「初折はあまり作意も見えぬやうにすら〳〵として、二之折よりそろ〳〵と作意ある句をし、三之折には隨分作意をふるひ、人の目をさまさせ候がよし。此折は道化たる句もいひて、一興も二興もあるがよきなり。名殘はかろ〴〵と仕立つるものなり。云々」(誹諧京羽二重)と教へてゐる。芭蕉も是等の説に倣つて北枝に教示してゐる。「山中問答」に、

初折は地の句を專にして、奇語・怪言を好まず。直なるべし。戀の句などその心得あるべし。二の折に至り

ては、半地・半節也。初折の禮法を少しゆるめたる心なり。……三の折は俳諧の遊び所也。專ら花やかなる句を求め、をかしみを案ずべし。されど和して禮を忘れずとは、正風の姿情と心得べし。名殘の折は一卷の首尾なれば、その坐を屈せぬやうにすべし。匂ひの花、擧句に至つて、高貴の人を待たせぬるは不禮也。俳諧は言語の遊びにして、信を以て交る道也。妙句に一坐を屈しさせんよりは、麁句にその坐の興を調へよとなり。云々

とある。なほ去來は「去來抄」に、師說を敷衍して、

先師曰、一卷表より名殘迄一躰ならんは見苦しかるべし。去來曰、一卷、面は無事に作るべし。初折の裏より名殘の表迄に、物數奇も曲もあるべし。半より名殘の裏にかけては、さら〳〵と骨折らぬやうに作るべし。末に至りては、互に退屈出で來たれるものなり。なほよき句あらんとすれば、却て句しぶりて出來ぬものなり。されど末々迄吟席勇みありて、好き句出で來らんを無理に止むるにはあらず。好き句を思ふべからずといふ事也。

と說いて居る。是等の說は、皆連歌以來の敎の傳承で、新說ではない。一體懷紙は百韻が本式で、歌仙は畧式となる。百韻は蕉門以前一般に流行した形で、歌仙は蕉門以後の流行であるから、思想進行の順序も、卷の式も、百韻に就いて制定されたのがはじめである。百韻は普通懷紙を四枚用ひる。一枚の懷紙を二つに折つて、四枚備へるのだから、折といふ語が生じたのであらう。卽ち一枚目の懷紙が初折、二枚目が二ノ折、三枚目が三ノ折、

四枚目が四ノ折と呼ばれるわけであるが、四は死に音の相通する所から忌んで、普通名殘ノ折と呼んでゐる。そこで初折には表と裏があり、二ノ折には二ノ表と二ノ裏、三ノ折には三ノ表と三ノ裏、名殘ノ折には名殘ノ表と名殘ノ裏がある事になる。今假に芭蕉の教を、歌仙の上にあてはめて言はうなら、表は序の格で、穩かに行き、初裏から名殘ノ表半過ぎ迄は破で、巧みに、華やかに、道化もあり、作意十分にする。それより名殘ノ裏は急で、さら／＼と骨折らず、進ませて行くといふやうな樣式でもあらうか。

ハ、懷紙の式

表を嫌ふべき物の制は、大體古式に則つて居た。「しろざうし」に、芭蕉は土芳の問に答へて、

師の曰、古法表十句の例を守りて、八句の後二句過ぐる迄、表に嫌ふものゝ類、連歌に今にせず。俳には苦しからず。連歌に龍・虎・鬼・女、さし出たる類、表の內嫌ふ。俳諧にも鬼・女はなりがたし。龍・虎は苦しからず。その外、人を殺す、切る、しばるなどの類は用捨すべし。百韻一所に過ぐべからずと師の云也。又戀の詞、述懷の類、祝言に云ひたる句は、表の內いかゞ侍らんとたづねる時、師の曰、句によるべし。文字は苦しからず。祝言にいひなすとても、人の上に云へばいよ／＼述懷也。花のさびしきの類は苦しからず。崩れし壁に下る夕顏などと、全くの貧家を移す句は用捨すべし。他人の句は咎むまじとなり。又戀・無常、其外嫌ふ古事、もと祝を下心にして、表にあらはさず。又他物の上に借り用ひたるなどの句の類いかゞ侍らん

と云へば、師の曰、大方は表に嫌ふべし。事にもよる事ながら、いづれとても心嫌ふなり。詞に出さずして、心の下に嫌ふ事を持ちたるは、作者清からず。心きたなし。一向に打出て云ひたるかた然るべし。されども表の體にあらざれば、常に苦しからず。打出せといふにはあらずと云へり。又古今の人の名、表に出す事いかゞ侍らんとたづねしに、師の云、今の人の名はつゝしむべし。古人の名は物によりて苦しかるまじ。されども好みがたし。心嫌ふなりと云へり。云々

俳諧の式は和漢の式に準じて居る。貞德の式目歌に、「誹諧は式目ぞなき大方は和漢の如く去嫌ふべし」(あぶらかす) とある。和漢の式は新式よりも多少寛かになつてゐるから、俳諧もそれに倣つたのである。表八句の内を嫌ふ物とは、兼良の「連歌初學抄」に、「近代一の懷紙、引返之第二句迄、戀・述懷・名所等、猶如レ面不レ付レ之。」とか、或は明應七年の「漢和法式」に、「面八句、裏二句、以上十句不祥ノ字・戀・述懷・懷舊・釋教・名所・國名・人名・故鄕等ノ字、不レ可レ用レ之。」などとある例である。引返しの第二句とは、裏の第一句、第二句を云ふので、本式連歌は表十句であつたが、後に式がすたれて、新式の表八句連歌が一般の興行となつた。併し表に嫌ふ詞は重大な詞であるから、新式になつても本式に遠慮して、裏二句迄嫌つたものであらう。龍・虎・鬼・女等の詞は、所謂尤(ケヤケ)き物と云つて、新式では一座一句物になつてゐる。是等の詞は千句に一つあるもので、之も貞德の式目歌に、「鬼女虎狼の千句物面にもすれど一座一句ぞ」。(同書) とある。戀・述懷・無常・人名等の類は表に嫌ふとは、連俳同一の制であるが、下心に祝つて、表にあらはさない古事などは、作者の態度が清くないと言つて、咎めて居る點は

面白い。芭蕉の俳諧は詞の俳諧でなく、心の俳諧であるから、詞の制を専にした連歌や古風の式は、蕉門では不必要となる譯であるが、式を問はれると、古式を說かなければならぬと見える。又「宇陀ノ法師」に、

歌仙は百韻三分ノ一なれば、式法一座三句の物は一つたるべき由、先師申されき。たとへば新式に、藤・紅葉・一座三句也。歌仙には只一句の筈也。……雪・氷・連歌四つ也。俳諧歌仙、春・冬の中に慥に二つなり。云々

とある。一座三句物は歌仙では一句物となり、一座四句物は歌仙では二句物となる。歌仙は百韻の畧式だから、式もかくの如き斟酌を要するので、恐らく之は古風の制であらうが、是等の點から見ても、芭蕉は連歌以來の式に相當通じて居つた事が分る。

二、發句

土芳の「しろざうし」に、

發句の事は一座巻の頭なれば初心の遠慮すべし。八雲御抄にも其沙汰あり。句姿も高く、位よろしきをすべしと、昔より云ひ侍る。先師は懷紙のほ句輕きを好まれるなり。時代にもよるべき事にや侍らん。又古來より新宅の會に、燃ゆる・燒くなど火の噂、追悼に、くらき・道迷ふ・罪・とが、船中に、歸る・沈む・浪風等の類、忌むべき心遣ひとなり。五體不具の噂、一座に差合ふ事思ひめぐらすべし。ほ句のみに不ㇾ限、其心得あるべし。云々

右、「八雲御抄」云々とあるは、「八雲御抄」に、「發句は於二當座一可レ然人得レ之。無レ何人すべからず。云々」とあるに據つたので、「筑波問答」にも、「當道の至極の大事發句にて侍るなり。發句わろければ、一座皆けがる。されば堪能・宿老にゆづりて、末座に斟酌あるべきなり。云々」ともある。俳諧も此教を承けて、貞門では發句は必ず貴人か珍客か宗匠に望む事になつてゐる。句姿も高くとあるは、心敬の「さゝめごと」上に、「かたつほとりの人の申侍る。ほん句は大むねたけたかく、大やうに、する／＼と一ふしなるを、なほ本意と申さるべきことにや。古人申侍る。云々」とあつて、之も連歌の教の傳承である。新宅や追悼の會などに、非常識な言動を戒めた事は、竹亭の「をだまき綱目」に、「臨席可レ有二覺悟一」と題して、「新宅の會には、燃ゆ・やくるなどの火類を忌み、夢想の會には、夢の字・左遷の噂、追善には、沈む・うかばぬ・くらき道・迷ふ道・罪科やうの事、船中には、かへる・しづむ・浪風など忌む事、くわしく記すに及ばず。其外五體不具の噂など、おぼえずして連衆の中、心にかかれる人もやあるべきと、思量すべきものとぞ。云々」とあるから、之も昔よりの戒であつた。すべてその場の社會常識は、「連歌會席廿五禁」などがあつて、連衆の愼むべき事になつてゐる。又「山中問答」に、

　發句は發句の姿あり。平句は平句の姿あり。發句は大將の位なくしては、卷頭にたらず。平句は士卒の働なくしては、鈍にして役にたゝず。先この心得第一也。

とある。之は許六も「宇陀ノ法師」に傳へて、

　百韻の卷頭なれば、たけ高き句第一也。平句にのびたる句あれば、發句見劣さるゝなり。發句は大將の位な

くて、卷頭にたゝず。平句は士卒の働なくては、鈍にしてぬるし。其用に立たず。云々

と言つて居る。是等の說は百韻の卷頭吟といふ場合の事で、歌仙の發句となると、多少緩和されようかと考へる。殊に蕉風俳諧は庶民相手の文學であるから、身分の高下によつて、發句製作を限定する譯もあるまい。此點は芭蕉も十分理解して居たらうと思ふが、但し發句には發句の姿が必要である。發句が平句のやうでは發句にならない。發句は必ず云ひ切るべしとあるやうに、云ひ切らなければいけない。云ひ切るとは意味をまとめる義である。併したゞ意味がまとまつただけではいけない。發句は氣品があるとか、風韻が高いとか、落付いて居るとか、すべて何となく獨立した重みがなくてはいけない。こゝが平句と異る所である。平句は場合によつては意味がまとまらなくともよいし、特別な風姿を備へなくともよいが、連句の發句はそれ〴〵姿が大切である。そこを芭蕉や許六が大將の格に喩へて敎へたのである。

發句には、切字と季題を入れる事が、連歌以來の習慣であつた。切字とは、句を切る詞で、宗砌の「田舍への狀」、專順の「詞祕之事」、宗祇の「白髮集」などに十八の切字が見える。即ちかな・もがな・けり・ぞ・よ・や・か・いかに・ず・じ・ぬ・つゝ・らむ・け・せ・し・へ・れである。それは鎌倉のはじめに「發句は必ず云ひ切るべし。」といふ敎があつたので、その後云ひ切るべき文字の研究が起り、遂に數をあげる事になつたのだらうと思ふ。その數も紹巴頃になると二十二となり、俳諧ではなほ數を增して、四十八と下知九つ（をだまき綱目）、或は三十九と下知八つ（鷺水の誹諧新式）となつた。詞の種類は、助辭・助動詞・副詞・動詞形容詞の終止形で、下知とあ

るは、動詞の命令形である。中には句切に關係のないものも含まれて居た。

かゝる切字に對する芭蕉の說は全く革命的であつた。「去來抄」に、芭蕉と去來の問答が見えて、芭蕉は之を祕說として、去來に傳へたとある。

先師曰、切字を入る句は句を切るためなり。切られたる句は、字を以て切るに及ばず。いまだ句の切れる、切れざるを知らざる作者のため、先達切字の數を定められたり。此字を入れる時は、十に七八は句切れるなり。殘二三は入れて切れざる句あり。又入れずして切れる句あり、……　或人曰、先師曰、切れ字に用ひる時は、四十八字皆切字なり。用ひざる時は一字も切字なしとなり。云々

此說によると、切字は初學に句切れを敎へる方便に成つたもので、形式的のものである。切字を入れても句の切れない場合もあるし、切字を入れなくとも句の切れるものもある。句を切らうと思へば、四十八字皆切字となし、切るまいとすれば、一字も切字にならないといふのである。要するに句切は切字によらないことになる。芭蕉の句を切るといふことは、句の意味を切ることである。支考は「二十五箇條」に、

發句の切字といふは、差別の心なり。物はそれじやによつて、是じやと、埒明くるなり。たとへ切字ある發句とても、切れぬ時には發句にあらず。云々

と論じてゐる。曲齋の「海印錄」に「蕉門に切字と云ふは、物を裁切ることならず。一句の中詞滯りて、種々の餘情を含む所をいへり。此故に强ひて定まりたる文字なし。云々」ともある。卽ち句の意味が切れれば特に所定の

文字を必要としない。切字の有無に拘泥しないがよいといふわけである。

發句に季題を入れることも、必須條件の一つであるが、これは既に鎌倉時代に於て、連歌の發句には必ず當季を結ぶことの教があつた（水蛙抄）、その後次第にこの研究も進んで、良基の新式などを見ると、自然物や自然現象の語の整理が著しく、兼良の「和漢篇」には、「聯句中可レ定ニ其季等ニ字事」といふ條下に、四季に渉つて幾つかの語の分類を試み、「漢和法式」にも、是等の季語の分類を示すやうになつた。宗祇作と云はれる「白髮集」に、「夫發句を仕まつるに、春・夏・秋・冬ともに、その時節に相當の發句を旨とすべし。少しも其時に違ひたるは然るべからず。春の季の物にても、正月の物、二月の物、三月の物、是あるべし。云々」とあつて、季の詞の詳細な分類がある。應其の「無言抄」に、季及び非季詞三百八十餘の註が見える。かくして連歌に於ける季語の存在は、必然的のものとして、重要なる地位を占めるやうになつた。「白髮集」や「無言抄」の分類は俳諧にも多大の影響を與へ、徳元の「初學抄」を始めとして、立圃の「花火草」、重頼の「毛吹草」、季吟の「山之井」以下、いやしくも俳諧の作法を說きたる書には、四季の詞寄が大部分を占めてゐた。是等の現象は、元來連歌師の生活が、自然の風物を好伴侶とし、自然を詠歌の對象とした結果で、俳諧師もその傳統に從ひ、自己の吟詠より自然の風物を拔く可からざるものと思惟したからであらう。かゝる時代に生まれ、かゝる周圍の雰圍氣を知悉した芭蕉が、發句に季題を尊重したのは當然なことで、芭蕉の人生觀が造化に從つて造化にかへるとまで云はなくとも、自然の溫容を冒見き現象であつた。たゞ彼の發句が貞門の徒の如く掛言葉や、緣語の滑稽趣味を中心として、

潰しなかつた迄であつた。併し芭蕉には無季の句もあつて、去來に其說を語つて居るから、全然發句に季を必須としなかつたことは分る。此論は後項に詳說する。

ホ、脇

土芳の「しろざうし」に、

脇は亭主のなす事昔より云。しかれども首尾にもよるべし。客ほ句とて、むかしは必ず客より挨拶第一にほ句をなす。脇も答るごとくにうけて、挨拶を付け侍る也。師の曰く、脇、亭主の句を云へる所即ち挨拶也。雪月花の事のみ云ひたる句にても、あいさつの心也との敎也。ほ句に三月に渡る景物出づる時は、わきにて當季を定むべし。是は連歌の習也。俳にも其心遣ひ也。師の曰く、ほ句に神祇・尺敎其外一事ある時は、應じて脇すべし。たとへ詞に出さずとも、心にはあるべし。但し水祝などの季、一通りにして云ふ句は、脇に戀なくてもあるべし。たゞほ句に依るべし。對付・違付・うち添ひ、留の類昔より云ひ置く所也。師云、第一ほ句をうけて、つりあひ専に、うち添へて付くるよし。句中に作を好む事あるべし。留りは文字すはり宜しくすべし。かな留メ自然にある心得口決あり。第一、應對合體の心とおもふべし。作者心得べきは、先ほ句出づると、よく聞しめさせる事見えずとも、作者より句意をあらはすやうに挨拶して、よく聞きふせて脇すべし。心とゞかざれば、無禮にして無下なる事也。たとへば連哥のほ句は聯句の唱句也。脇は對也。此格を

以て文字留也。詩聯句に習ひて韵といふ也。云々

脇の句は發句と一體の物なり。別に趣向・奇語をもとむべからず。唯發句の餘情をいひあらはして、發句の光をかゝぐる也。脇に五つの附方あれども、これみな附やうの差別にして、外に趣向を覓むるにあらず。云々

北枝の山中問答に、

脇は亭主の格、發句は客の格といふ教は、紹巴の「連歌至寶抄」に、「發句は客人の如し。脇の句は亭王の如し。第三は相伴の如し。云々」とある。脇は客への挨拶で、必ず亭主が附ける。此教は俳諧にもあつて、例へば「をだまき綱目」に、「發句出來侍らば、たとへ打聞えて別儀なくとも、作者より句の心を說き顯すやうに、あいさつ可有也。分明に聞えざるを、心得がましううけとる事、ほいなきわざなり。作者の思入れを聞きて、しばらく沈吟して脇の趣向うかぶとも、宗匠のさしづ受けて句作して、又宗匠の添削を得て付くべきなり。第一發句の時節にたがひたるは惡也。韻を手爾於葉にて留める事なきにしもあらねど、功者の業なれば、初心のする事にあらず。唯字留よろしかるべし。腰のて（發句の上から九番目のての字、古式では必ず用ひないことになつて居る。第三を付ける人に不禮だと云ふ。）第三へ心得ありてなきやうにするがよきとなり。」とある。客への挨拶であるから、發句作者に禮を缺くやうな附方ではいけない。發句の趣意がよく分らないのに、分つたやうな態度で、附ける事は無禮である。趣意がよく通らなければ、作者の氣持を十分味はつて、句意をあらはすやうに、挨拶して作るべきである。此說は連歌の說の敷衍で、芭蕉も之を傳へたのである。一體脇は發句を受けるもので、發句に言ひ添うた

り、句意を明らめたりする補助の役をするのが、脇の格であつた。「筑波問答」に、「脇句は發句をうけてする事なれば、さのみ心こもる事はあるまじけれど、是もあまりに平懐（我を高ぶつて、勝手な、不遠慮なことをいふ體の句）ならんはわろくや。たゞするくと詞やさしく、心あらむ事をしたまふべきなり。云々」。紹巴の「連歌教訓」に、「脇は發句にいひそひて、句柄を長高く、物の名、假名に候ても、一字にて留め候なり。手爾波にて云ひ流し留めぬものなり。脇に五つのやうあり。第一には相對附、第二にはうちそへ附、第三には違附、第四には心附、第五には頃留なり。」宗祇の「吾妻問答」に、「發句は三ケ月に渡りて、いづれとも侍らぬあるべし。折節のちがふ事はあしかるべし。……大方脇は發句のごとく、月なき朝に、月のあるやうに仕るはよろしからず候。發句になき山類、水邊よろしからず候。云々」。又「無言抄」に、「脇は發句を理り立つるやうに、山ならば山、水邊ならば水邊たるべし。……さのみ古事がましき事嫌ふなり。……雪月花等の時節も、心に發句にかひそひたるやうにすべし。けり・らん留などの體、脇句には不似合なり。空・山などのやうなる文字にて然るべきか。云々」などとある。芭蕉が是等の說を承けたことは、土芳との問答を見ればよく分る。

へ、第三

土芳の「しろざうし」に、

第三は師の曰く、大付にても、轉じて長高くすべしとなり。或書に、留りの事むかし沙汰なし。宗祇よりの格

式也。常用ひる通りなり。疑の切字のほ句の時は、第三はね字にとめずと古來云へり。うたがひの句二句去る故也。覽（らん）はうたがひのはね字なり。句中に押へ字あり。や・か・いつ・何などの類也。又句によりて押字なくてはねるあり。一字はね也。をらん・ちらんの類也。哉留りのほ句の第三、にて留メせずと昔より云へり。是治定の哉故にせずと也。花のさかり哉・月の光哉の類也。盛りにて・ひかりにてといふにかよふ也。先師の曰く、にてになるに留メくるしからず。にて留は嫌ふべしとなり。文字留・手爾葉留自然にあり。古法口傳有事也。一説、古書にあるは脇の句韵字留りゆへ、懷帋に文字留り並ばざるやうに留也。若、脇、手爾葉にて留メば、第三文字留にて留るとも云へり。かくの事は達人に有。常の留をよしとす。是れ此道の習也。第三は轉ずるを專らとすれども、脇の句によるべし。違付・取なし付等の句の時は、第三にて轉ずるにおよばざる事なり。ほ句、戀・神祇等のものにて脇是に應ずる時、第三に至り、必ず是を轉じ、はなれてすべし。師の說也。云々

とある。之も大方連歌以來の教を說いたもので、宗祇の「吾妻問答」に、「大やうにたゞしくあるべきか。云々」、紹巴の「至寶抄」に、「第三の事、前へのより所は大かたに候とも、一句のがらをたけ高く、大やうに遊ばされて、第三は大略てどまりにて候。さ候はねば、はね字にて候。自然には又もなしとも留め申候。此外は不レ好候。此三の外に候へば、平句のやうに聞え申候。云々」。宗養の「三部抄」に、「第三は轉ずるを本とするなり。云々」、應其の「無言抄」に、「ふるき事、本說めきたる事然るべからず。脇の心まではなれ、一作たくましく仕立つるなり。

上半の上にては、文字などにて留めらるゝ事などもあり。唯普通には、て留り、らん留りなるべし。云々」などとあり、俳諧にも之を承けて、「第三は附心は少し大様なりとも、唯一句を幽美に高くすべし。留はて留幾度もよきなり。此外ははね字留りすべし。此外の留初心の人かたくせぬ事也。にて留の事少し仕やうある事也。云々」（京羽二重）、或は、「第三、たけ高く、脇の句に轉ずるをよしとす。句柄いやしきは第三の本意たるべからず。扨大方てどまり然るべし。又ははね字留なるべし。（らん留、らんどまり、常にいふ事なれども、よろしからず。はね字といふべし。ト云也。）又らんとある發句に、脇にこしのてあれば、第三てどまりも、はね字もならぬやうの時は、もなしどまりにとまりなり。或は文字にて留める事あるなり。惣じて昔は句の留の沙汰なし。宗祇より以來の格式也。脇の句又字にてとむる故、懐紙に文字のたけ並ばざるやうにてどまり、はね字の輕き假名にて留めたるものなり。此故に若し脇の句に、てにをはにて留め侍らば、第三を文字にてとむるなり。（但し句の仕立に習あるなり。）但しかやうの事は名人にゆづりて、常の人はつねのとまりの外はせぬものと心得る。是又此道のならひなり。」（をだまき綱目）などとある。芭蕉は是等の說に基いて土芳に語つたものだらう。

ト、四句目

土芳の「しろざうし」に、

四句目は昔より四句目ぶりなど云うて、やすく、輕きをよしとす。師の曰、重きは四句目の體にあらず。脇

にひとし。句中に作をせずとなり。古事・本說など嫌ふ事也。春秋の季つゞき、四句目にて花月の句をする事必ずあるまじとの師說也。云々

之も連歌以來の敎の傳承で、應其の「無言抄」に、「第四句目よりは、いかにも輕々とすべし。云々」とあり、俳諧でも「四句目ぶりとて、なり・けりなどの輕きとまりにて、ふしなく、やすらかなるをよしとするなり。」(をだまき綱目) 或は「四句目はかろ〲とするものなり。留めもなり・けりなどとめ候也。」(「京羽二重」) などとある。春・秋の季つゞき云々といふ說は、曲齋の「海印錄」に「こは師說の聞違ひ也、花は表の內四句目以下に決してせず。月は六句目の端迄する事は、面每に出づる物と、折に一つ出づる物との違ある故也。云々」とある。連歌では春・秋の句は五句つゞく事になつて居るが、俳諧では三句から五句迄する。そして月は發句より七句目迄出してよいが、八句目は嫌ふ。但し指合ひの關係で、七句目迄出せなければ、八句目にしても苦しくない。併し花は發句・脇・第三迄の內にして、其外には出してはいけない。但し獨吟なれば、五句目・六句目・七句目に出しても差支へないが、四句目・八句目には堅く禁ぜられてゐる。之が古式である。卽ち月の方が花より寬やかに取扱はれて居り、花は餘程重く見られて居た。

チ、月の句

「しろざうし」に、

月の定座をこぼす事、師の曰、五十句より内にはあるべからず。奥に至つては、少しの興にもなるものなり。歌仙は苦しかるまじ。略の物故也。月の座月の字ある時も、差合ひたる時は異名にてすべし。異名の仕方人々の作意にあるべしと師の詞也。又師の曰、月は上句勝たるべし。落月・無月の句つゝしむべし。時によるべし。法にあらずとなり。星月夜は秋にて、賞の月にはあらず。若しほ句に出る時は素秋にし、他季にて有明などとするなり。月といふ字に五句隔と新式にあり。師の曰、表に月二ツ稀にあり。此時は月數八ツなり。

名の裏はまれにも月なしと、なり。

右の中、月は五十句以内にはこぼさないとあるが、こぼした例はないこともない。殊に表の月は「出がちにすべし」(「京羽二重」)とあるから、發句から七句目迄の間に出して差支へない。普通は四句目の月を嫌ふけれど、花ほどやかましくないらしい。但し月の句は古來尊ばれて、「功者にゆづるべし、云々」(「をだまき綱目」)或は「月の句七ツ、此内一座の貴人・珍客にさすべし。若き人・初心の人澤山に句數するものにあらず。」(「京羽二重」)などと云はれてゐる。第三以後は上の句に出すといふのは、作者に禮を正しくするためであらう。短句に作らせるのは無禮である。異名の月とは、有明・桂の花・桂男・十三夜・立待・居待・弓張等の類である。星月夜は賞の月ではないが、秋季とあるはいかゞ。胤矩の「誹諧通俗志」に、「夜分也。面の月を不レ持。いつの比よりか誹諧にては雜也。名所の時は非二夜天一。」とある。月と月は新式では可レ隔二七句一物の内に入つて居る。兼良の「和漢篇」には之を緩和して、「同季可レ隔二七句一。同字幷戀・述懐等可レ隔二五句一。自餘隔二七句一之物、

可レ隔二五句一（月と月の類也）」とある。俳諧は之に倣つて五句去である。

リ、花の句

「しろざうし」に、

花の事は、花四本の內下の句は一句ばかり、定座まれにもこぼす事なしとなり。……師の曰、たとへ名木を隠して、花とばかりいふとも正花也。花といふは櫻の事ながら、都て春花をいふ。是等を正花にせずしては花の句多く出て、賞輕しとなり。宗祇の時代迄百韵花三本也。雨一ツ也。宗長の時に至り、匂ひの花一本、雨一ツ勅許を蒙り度き旨奏聞せられて、花四本、雨二ツには究り侍る。連歌の式と師の詞也。云々

とある。新式によると、月・花は一座三句物で、割註に、月は只の月一、有明一、三日月一、花は懐紙をかゆべし。近年爲二四句之物一餘花其內有べし、花紅葉と云ても、花四の內たり、花ある面に櫻嫌レ之、又花可レ爲二三句一之由、有二其沙汰一然而可レ謂二無念一乎、所詮四句三句共、以不レ可レ有二子細一歟などとある。併し後に四花・七月とか或は四花・八月といふ制が出來て、各懐紙に一本づつ、全體に月七ツ又は八ツ出す事になつた。「連歌髓腦」の兼載說に、「花は中頃四本にて候ひしを、近年三本になされ候事は、四本の時は折每に花候へば、時に當つて失念などにて、付けられぬ句に花をせよと申候へば、理もなき事を付くる事にて候。このためにかからん時は一本なくともと申事にて候。云々」とある。芭蕉が宗祇時代迄花三本と言つたのは、かゝる事を指したものか。併し實例に

徴して見ると、式の通りに行つてゐないものが多い。四花・九月もあれば、五花・十月もあり、六花・七月もあれば、三花・六月もあるといふやうな風で一定しない。ただ宗祇・肖柏・宗長の水無瀬三吟は、四花・七月の制で、花も懐紙をかへ、月も名殘ノ裏には出てゐない。福井久藏氏は月・花の數の一定したのは、宗祇時代のやうであると言はれて居るが、恐らく宗祇以後の事であらう。殊に「水無瀬三吟」は後代の龜鑑たるべきものであつたから、此連歌の式も後人の則るべき可能性を持つたものと見てよからう。

　連歌の花は櫻といふ意味の花であつた。貞門でも之に倣つて櫻とし、正花・非正花の別を立ゝてゐる。例へば夏の正花は餘花・若葉の花、秋の正花は花火・花の踊、冬の正花は歸花・餅花、雜の正花は花紅葉、非正花は花の帽子・花野・雪の花・浪の花等の類である。併し芭蕉はすべて春の花を花と認め、櫻といふ意味の花ばかりでは、花が多く出て、賞翫が輕くなると言つて居る。「宇陀ノ法師」に、

　花を櫻と思ふ作者もあるなり。唐朝の花は牡丹也、吾朝詩歌の花は櫻也。連俳の花は櫻にも非ず。牡丹にてもなし。篇突云、花は賞翫の惣名と註ス。されば花に櫻付くる事習あり。何ぞ花の句櫻ならば、花に櫻付くる事あらん。茶の出ばな・藍の出ばな、正花たるべしと先師申されき。云々

とある。併し古式によると、花に櫻は七句去で、櫻に花は曾て附けないが、花に櫻を附ける時は、句を分けるに考があると云はれてゐる。花を賞翫の總名と解した事は、華やかといふ意味を主とした意見で、櫻の句にも適用は出來るし、茶の出花・藍の出花といふやうな句にも流用が出來て、すべて鑑賞に變化を與へるための論かと考

へる。併し實例を見ると、やはり櫻といふ意味の花の句が多いやうで、他季の花或は雜の花は少いやうである。

「去來抄」に、

卯七曰、猿蓑集に、花を櫻にかへらるゝはいかに。去來曰、此時予花を櫻にかへんといふ。先師曰、故いかに。去來曰、凡花は櫻にあらずといへる、一通りはする事にして、花聟・茶の出花なども、はなやかなるによる。花やかなりといふもよる所あり。必竟花は櫻をのがるまじと思ひ侍る也。先師曰、さればよ。古は四本の内、一本は櫻也。汝がいふところも故なきにあらず。兎角作すべし。されど尋常の櫻にては、かはりたる詮なからんとなり。予「糸ざくら腹一ぱいに咲きにけり」と吟じければ、何我まゝなりと笑ひ給ひけり。

とある。櫻は連歌では五景物の一で、最上の景物になつてゐる。その花の艶美は實に類ふべきものもない。單に花といふ文字を用ひた句の感じと、櫻といふ文字を用ひた句の感じとは、同じ內容の事を歌つたにせよ、鑑賞の氣分が違ふ。糸櫻が腹一杯に咲いたと云つたつて、華やかといふ感じは直覺されない。知識的には華やかな意味は十分味へるが、感覺的には味へない。若し花を賞翫の總名と解するならば、何處迄も花といふ文字を遣つて言ひ表はさなければ、目的は達せまい。花といふ文字に華やかといふ意味を十分含ませるならば、花といふ文字の下に、季の物・無季の物・人事等を代表させて、その範圍を擴大させせなければならぬ。去來の句は失敗と思ふ。否去來は直覺と知的作用の效果を知らないやうにも考へられる。

蕉門では月花の定座がないといふ。許六の「宇陀ノ法師」に、

月花の座定まれる所なし。七句・十三句目は下の句にてすまじきためなり。一座の時宜によりて、七句・十三句迄延びたる事也。月花結び合せたる句なほ手際入るなり。雪・月・花懐紙に同作あるべからず。云々

「去來抄」に又、

卯七曰、花に定座ありや。去來曰、定座なし。花の句は互に大切と讓り合ひ侍る故、裏十一句・十三句にて出す。十句・八句は短句なり。十三句目おのづから花の句となり侍るなり。當流には此說を用ふ。

などとある。定座とは貞門に始まつた事で、種々の關係上自然に定まつたものゝやうである。月の座の移る事は前に少し書いて置いたが、花の座も獨吟や呼出しの花の場合などには引上げて作る例がある。月も花も折端からこぼす事はしないが、前へ引上げる事は構はない。但し月・花は、景物の最上として連歌以來尊重されて來たため、短句には遠慮された。殊に花の句は重く見られて居たから、互に遠慮して居れば、裏の十三句目あたり迄引張られる譯になつて、自然とこゝが花の座といふ事になつて了ふ。去來は當流に此說を用ふといふが、之は旣に貞門にある說で、卽ち「京羽二重」に、

十三句目に花をするなり。但し是を定座と思ふは譯知らぬなり。是も獨吟なれば引上げていづかたになりとも言ひ出づるなり。十三句目を花の座とする事は、互に時宜をして、言ひ出でずして延べ候故に、おそなはりて、十三句目になる事也。故に人〳〵寄合ひの俳諧に、引上げて前に花をするは大なる不禮也。自然貴人などへ、前になされよなどいふ事はある事也。云々

とあるから古式の傳承と見える。又同書に、「初折の花に散る花などをせぬものなり。いか程よき句をしても、かやうの事相違すれば、習なき作者と思ひて淺くなるなり。」とあるが、之は蕉門では搆はなかつた。猿蓑に、「花と散る身は西念が衣着て　芭蕉」とあるし、「あら野」にも、「散る花に日は暮れるとも長咄し　越人」などとある。尤も歌仙は畧式だから搆はなかつたものか。花を引上げるのに場合があつた。「しろざうし」に、土芳云、

裏になりて・四春・八木と連歌に古説あり。四句目春をせず。八句目に高うゑ物せず。花につかゆる遠慮也。俳諧も其心得なり。他の句を返すには不レ及。春出ば花を附くべし。是呼出しの花となり。花の前句に秋の字用捨すべし。戀の花はむづかしきわざと連歌に秘して、前句よりつゝしむとなり。俳其沙汰なし。

之は古式である。「をだまき綱目」に、

六句目(裏)に春を仕出さず。十句目に高き植物斟酌可レ有也。花につかゆる故也。然れども他の句出たるを返すにもあらざれば、春の季出たらば、其春の中にて花を引上（是をよびだし花と云）うゑ物出たらば、その付句に花あるべきなり。

とある。去來はなほ之を詳説して、「去來抄」に、

卯七曰、花を引上げて作るはいかに。去來曰、花を引上ぐるは二品あり。一ツは一座に賞翫すべき人ありて、其人に花をと思ふ時、其句前に至りて、前句より春季を出して望むなり。是を呼出しの花と云。又一ツは一座の貴人・功者抔は他に讓るべき人もあらねば、よき寄り來る時は、呼出しを待たず花をなす。又兩吟の時

は、互に一本づつの句主なれば、謙退に及ばず、何方にても引上げて作するなり。扨故もなく花を呼出すは、呼出す者の過にして、花主の罪にあらず。又故もなくみづから引上ぐるは、くわんたいの作者なり。是等の事は隔心の會の式なり。常の稽古にはともかくもあるべし。人にふりかゆる花あり。これは花一句と思ふ人の句所あしき時は、我句を前にふりかへて、花を渡すなり。

とある。之も古式の習慣であらう。

又、戀の句

「しろざうし」に、

戀の事を先師曰、昔より二句結ばざれば不レ用也。昔の句は戀の詞を兼ねて集め置き、その詞をつゞり句となして、心の戀の誠を思はざるなり。今思ふ所は戀別けて大切の事也。なすにやすからず。そのかみ宗砌・宗祇の比迄、一句にて止む事例なきにもあらず。此後所々門人とも談じて、一句にても置くべき事もあらんかとなり。又或時曰、前句戀とも戀ならずとも片付けがたき句ある時は、必戀の句を附けて、前句ともに戀にすべしとなり。是には此句のみにて、つゞいて戀にも及ぶべからず。新式にも此沙汰あるよしなり。然れども戀の事は分けて其座の宗匠に任すべしとなり。

とある。「去來抄」に、なほ詳說して云、

卯七・野明曰、蕉門に戀を一句にて捨つるはいかゞ。去來曰、予此事を伺ふ。先師曰、古は戀の句數定まらず。勅以後二句以上五句となる。これ禮式の法なり。一句にて捨てざるは、大切の戀句に挨拶なからんはいかゞとなり。一説に戀は陰陽和合の句なれば、一句にて捨つべからずともいへり。皆大切に思ふ故なり。予が一句にても捨てよといふも、いよ／＼大切に思ふ故なり。汝は知るまじ。昔は戀句出れば、相手の作者は、戀をしかけられたりと挨拶せり。又五十韻・百韻といへども、戀句なければ一卷とは云はず。はした物とす。かくばかり大切なる故、皆戀句になづみ、わづか二句一所に出づれば幸とし、かへつて卷中戀句稀なり。又多くは戀句より句しぶり、吟重く、一卷不出來になれり。この故に戀句出て付けよからん時は、二句が五句もすべし。附けがたからん時は、しばらく附けずとも、一句にても捨てよと云へり。かくいふも何とぞ卷づらをよく、戀句も度々出よかしと思ふ故也。勅の上をかく云ふは恐るゝ所あるに似たれども、それは連歌の事にて、俳諧の上にあらねば奉背にもあらず。然れども我古人の罪人たる事を免れず。唯後學の作しよからん故を思ひ侍るのみ。

とある。連歌では戀の句は春・秋の句と同樣に非常に尊んだもので、五句つゞく事に規定された。兼良の「新式追加」に、「戀の句只一句にて止む事無念云々」とあるから、當時一句で捨てた例もあつたと見える。芭蕉はかゝる前例をふまへて、一句で捨てたものだらうが、古風の俳諧では、二句より五句迄つゞかせ、一句で捨ててはいけない事になつてゐる。たゞ去嫌が連歌より緩和され、連歌の五句去が、三句去になり、戀の字は折を嫌つて、

四ツ出す制である。一句で捨てない理由は、挨拶のためにも一つ出すとか、陰陽和合のためだとか云はれてゐるが、是等は古風の說であらう。連歌で初折の裏の三句目に戀を出す事を待兼戀と云つて嫌つてゐるが（或は戀は待ち兼ねるのが情であるから差支へないといふ說もある）、古風にもその制はあるが、蕉門では裏の一句目から戀を出す例があつて一向嫌つてゐない。之も歌仙が一般の興行だから嫌はなかつたものだらうが、普通は二三句目あたりから戀が出てゐる。戀を一句で捨てるといふのは芭蕉の新說でもないが、それよりか蕉門の戀の句は、意味の上から考へて、詞によらなかつたといふ點が特筆すべき卓見であつた。貞門の作法書を見ると、「戀之詞」・「非戀詞」といふ部門を設け、多くの語を集めて居るが、中には戀愛的な意味を持たない語もあつて、それを用ひたからとて、戀の句にはならないもの迄も入つてゐる。戀とか非戀とかいふ義は、語にあるのではなく、語を用ひた作者の思想の上に存する事は見易き事實であるが、貞門では連歌の遺習に捉はれて、詞の制を主眼としたため、かかる矛盾も生ずるのである。戀を一句で捨てると云つても、二句によつて思想の內容が明瞭になるのであるから、どちらか一方の句に戀の意味を十分含ませて居れば、他方の句は戀の意味に乏しくても、必然的に戀の句と見做されて了ふ。從つてそのどちらかの句も戀の句となるわけであつて、一句で捨てたとも考へられなくなる。その點他門の非難に對して十分辯護の餘地はあらう。

又、揚　句

土芳の「しろざうし」に、

揚句は付かざるよしと古說あり。今一句になりて、一座興覺むる故也。また兼ねて案じ置くとも云へり。ほ句主并に亭主のする所にあらず。初の一順に執筆の句なくば、揚句を筆にすべし。ほ句にある文字をつゝしむと也。にほひの花にて、春季五句に至るとも揚句に季を放すべからず。たとへ季六句に及びてもすべしとなり。云々

とある。之も古式の傳承である。「をだまき綱目」に、「擧句は付かざるがよきとなり。是は一句になりて、付けあぐみ侍るは、一座の興もさむるものなり。只あさ〳〵と付くがよきなり。又擧句は案じて置くともいへり。是は多分前句は花なる故、前三折の花に付けたる句ども春の氣を考へて、指合のなき物を分別し、發句より一卷の首尾を思ひ合はせ、卷軸の心を案じ置く時は、當らずといへども遠からざるなり。祝言めきたる句體も時宜によるべし。發句の作者或は亭主の役にあらず。又初の一順に執筆の句なくば、擧句執筆の役也。又發句にある文字を嫌ふなり。」とあり、又「京二羽重」にも、「あげ句は祝する故、亭主はせぬ事也。あげ句は不レ付がよきといふなり。成程付けたるがよけれど、挨拶を入れて、又遲きがあしき故、随分早くするものなれば、付かずとも苦しからず。めでたきやうに早くせよとの事也。」ともある。皆同一の敎である。

五、季題論

イ、宵闇・盆・鹽牡蠣の說、其他

芭蕉は季の詞に就いては大體古風の制に從つて居つた。土芳の「くろざうし」に、

呼子鳥の事、師の曰、季吟老人に對面の時、御傘に、春の夕ぐれ梢高く來て鳴く鳥と思ひて句をすべしとあり。貞德の心いかにとたづねられしに、老人の曰、貞德も古今傳受の人とは見えず。全く句をせざる事也といへるよし、師の話あり。

とあるから、先づ貞德の「御傘」を本とし、疑はしいものは季吟の教示を仰いだ事もあつた。併し芭蕉は古來の制定にのみ盲從しなかつた。新しい季題を定めたり、季語の解釋の不慥かなものなどは、自由に改訂した。「去來抄」に、

魯町曰、竹植うる日は古來より季にや。去來曰、不覺悟。先師の句にて始めて見侍る。古來の季ならずとも、季に然るべき物あらば、撰び用ふべし。先師曰、季節の一つも探し出したらんは、後世によき賜となり。鹽牡蠣の夜も古來の季節か知らずといへども、五月三十日なれば夏季に定まる。云々

とある。竹植うる日は「御傘」・「はなび草」・「山之井」等に見えないから、後に定まつた季題であらう。或は芭

蕉の辭に定めた季か（降らずとも竹植うる日は蓑と笠）。鹽かきの季も定まらなかつたのを、芭蕉が五月三十日と定めたものらしい。「くろざうし」に、春雨・春の雨・五月雨・夕立・露時雨・時雨・雪・みぞれ・初嵐・野分・木がらし・螢・蟬・日ぐらし・殘る雁などの季節を定め、或は東風・南風・西風・北風・順の峰入・逆の峰入・貌よ鳥・つぼすみれ・苗代・夕さり・夕まぐれ・はたれ雪・帷子雪・すぐろの薄・氷の衣等の意味を説明して居るが、是等も土芳が芭蕉より敎示された詞であらう。その中に、「春雨はをやみなく、いつまでも降りつゞくやうにする。云々」、「日ぐらし、蟬のやうに鳴いて、夜も鳴く。初秋になく。日中には不ㇾ鳴。曇には鳴く。云々」、「田鶴は水邊か里近く鳴くやうにするなり。」、「霞は夜と晝は似ぬものなり。夜の朧といふ事なし。云々」などゝ、自然鑑賞の本情を説明したものもあつた。是等は「白髮集」などの筆法を眞似たもので、貞門に「三湖抄」の敎があり、鬼貫の「獨言」にも、四季の風物を説明した條目が見えた。許六はかゝる敎を芭蕉より傳へたものか、「篇突」に二十五條ほどの季題論を示し、又寶永二年三月摩詰庵雲鈴に與へた「雅樂抄」といふ傳書中にも、四季題規矩大槩と題して、百八十餘項の季語の説明がある。此傳書と大同小異のものに、明和元年十二月、水戶の行脚三日坊の、或人に附與したものもあるが、其中に、「正風血脈掛合の傳」と云つて、四季の題目百餘項の説明があつた。鷗里の「三四考」（天保十二年刊）坤之卷に、「芭蕉翁口授」と題して、鷗里の許に傳はつた句作の心得百七十七條、並に合考七十九條を揭げてゐるが、之は恐らく後人が、貞門の敎や土芳の記錄や許六の説などを本として、勝手に增訂したものだらうと思はれる。芭蕉翁口授とあつても、全部が芭蕉の言ではなし、又芭蕉の

教が入つて居たとしても、どこ迄が芭蕉の言であるか分るものでない。二柳庵の「俳諧四季部類」といふ季寄せの書には、巻末に芭蕉翁口授として、「霞は朝うすく、夕に深し。」、「霧は朝深く、夕に薄し。」、「川音は晝しづかに、夜さわがし。」、「海の音は晝さわがしく、夜靜かなり。」などといふ語二十五條を添へて、初學の句作上の心得としてゐる。之を以てしても、いかに芭蕉の季題說が、流布したものか分る。

ロ、無季の句

芭蕉は無季の發句も作つた。之は今日から見ると極めて新しい企であつた。併し當時は發句には必ず季の詞を入れる事に規定されて居たのだから、此企もたゞ一片の試作として、時勢に葬られて了つた。去來の「旅寢論」に、

> 問云、歳旦無季の格とて、許六二句あげて示さる。無季の句と申す事侍るや。答曰（去來の答也）、先師もたま〳〵無季の句有之。然れどもいまだ押出して是を作り給はず。或時宣ふは、神祇・釋教・賀・哀傷・無常・述懷・離別・戀・旅・名所等の句は、無季の格ありたきものなり。是を興行せんと思ひ侍れども、暫思ふ所ありと云々。無季の句といへるは、落馬の卽興に、
>
> 歩行ならば杖つき坂を落馬哉　　翁
>
> 何となく芝吹く風もあはれなり　　杉風

此句は先師の旅行を送りての吟なり。

戀をして思へば年の敵かな　去來

これらの句也。表裏ともに季を見る所なし。此句のみに限らず。折々の吟あり。今許六の擧ぐるも、二句は無季といふべからず。表に季見えずといへども、內に季あり。此故に歳旦の句にはなれり。一とせ先師の歳旦、

としぐや猿に着せたる猿の面　先師

此句季はいかゞと伺ひけるに、としぐはいかにとの給ふ。いしくも承るものかなと退きぬ。年は季の詞にあらずや。かくの給ふ處を知るべし。面に季見えずして季になる句、近年付句等にもほゞ見え侍るなり。云々

とある。「旅寐論」は去來が長崎へ歸省して、卯七・魯町の問に答へて、許六の「篇突」を批評したもの、元祿十二年の作である。「篇突」の歳旦無季の格とは、

明る夜もほのかに嬉しよめが君　其角

君が代にあふや狩野家の福祿壽　許六

鼠をよめと稱して、ほのかに嬉しといへるは、元朝の曙ならではあるまじ。狩野家の布袋・福祿壽も常は見あきたる風情もあれども、初春のあしたには、いとめでたきもてあそびならん。此界に入りて、無季の味を察し知るべし。云々

とあるが之である。卽ち是等の句は、表に季の文字はないけれど、思想に季の意味を含んで居るから、歳旦の句となつたので、無季の句にはかゝる一格もあつたのである。之も蕉門の輩は、季の詞に拘泥しないで、專ら句の思想・感情の上から、季感を求めた例證にもならう。なほ「去來抄」に、

卯七曰、蕉門に無季の句興行侍るや。去來曰、無季の句は折々あり。興行はいまだ聞かず。先師の發句も四季のみならず、戀・旅・名所・別等無季の句ありたきものなり。されどいかなる故ありて、四季のみとは定め置かれけん。其事を知らざれば、しばらく默止侍るとなり。其無季といふに二ツあり。一ツは前後・表裏・季と見るべきものなし。落馬の卽興に、

歩行ならば杖つき坂を落馬かな　　はせを

何となく柴吹く風もあはれなり　　杉風

又詞に季なしといへども、句に季と見る所ありて、或は歳旦とも名月とも定まるなり。

年〳〵や猿にきせたる猿の面　　はせを

如ㇾ斯なり。

ともある。以上二書の說を比較すると、「旅寐論」では無季の句を興行したくは思ふが、しばらく思ふ所があつてやめて居るとあるのに、「去來抄」では無季の句を作つて見たいが、どうして發句が四季のみに定められて居るか、理由が分らないから、しばらく默つて居るのであると云ひ、又「旅寐論」では詞に季はないが、思想の上に季を

含んでゐる場合一つを示してゐるが、「去來抄」では全然季と見るべきものがない場合と、詞に季はなくとも、思想に季がある場合と二種の無季の格を示して居て、「去來抄」の說の方が「旅寐論」より詳しく書いて居る。何故に發句が季の詞を必要としたかといふ理由に就いて說明のないのは、連歌以來の傳習が、何人も疑念を挾む餘地のない程、絕對視され、神聖視された結果であらう。かゝる渦中に立つて、强ひて無季の句の格を立て、一般に之を興行する事は、餘に傳統を無視し、先哲の敎を破壞するわけになるので、敢て行はなかつたものと考へる。たゞ神祇・釋敎・祝賀・哀傷・無常・述懷・離別・戀・旅・名所等の句は、直接に四季の風物の詠歎と關係がないから、故實から見ても之れだけは、無季の格を立てゝもよくはないかといふ希望であつた。芭蕉としてはそれ以上に出られなかつたのも無理はない。穩健な說である。

六、俳人論

イ、俳人の資格

「俳諧問答抄」、自讃之論上に、許六は芭蕉の說をあげて、俳人の資格を論じてゐる。

師の曰、

一、器のすぐれたる者第一。

一、この道に執心にして、寝食を忘れ、財寶まで欲に代へる人。
一、歳四十を越えざる人。
一、いとまある身にあらざれば、道は行ひがたし。
一、貧賤にして、朝夕苦しめる人ならず。富貴にあらずといへども、商賣・農士に穢れず。
一、博識にあらずとも、和漢の文字に乏しからぬ人。

とある。之は許六の旅亭で、芭蕉が許六の才能を語つた時、傍に居た嵐蘭の問に答へた言で、實に至言である。

第一器量の勝れて居る事、之は何事によらず成功すべき根本問題で、如何に俳諧が好きでも下手の横好きではいけない。天分がなければいけない。天分はなくとも、努力で行けば成功しさうなものだが、根本的でない。かかる人は平生の拂拭を怠ると、後戻りする。その退歩した伎倆を取返す迄には、舊倍の努力を要する。例へば自分達の句作にしても、しばらく怠つてゐて又やり出すと、なか〳〵うまく行かない。努力して見ても拙い。いやになる場合がある。第二義的の者は、さうなると偏に表現に訴へて、句を技巧しようとする。句といふものは想が第一である。想が枯渇すると表現を考へる。表現の力によつて、乏しい想を豐富に見せかける。そこが惡いが、天分の足りない者にはさうするより外に行く道がない。去來曰、「句案に二品あり、趣向より入ると、又詞・道具より入るとなり。詞・道具より入る人は、多くは頓作・多句也。趣向より入る人は、遲吟・寡句也。されど案じ方の位を論ずる時は、趣向より入るをよしとす。云々」(去來抄)とあるが、その趣向より入る人の方が、一義的

で、作り物の弊に陷らない。言語・表現を工夫する人は、想を作りたがる。想が渇へてゐるから、言語・表現の上のみを考へる事になる。想の枯渇は天分の乏しい證據である。物を觀ても感情が流動しない。想像が湧かない。神經が鈍く、いつも灰色な氣分で居るから、新しい想が起らないのである。芭蕉が遲吟を嫌つて、句は氣鋒を以て作れと言つたのは、天分を尊んだ論である。趣向にこだわると遲吟となり、肝心な天籟の聲は逃げて了ふ。言語・表現は想から出てくる。想が豐富であれば、その中核を掴む言語・表現は自然と出る。

次に此道に熱心である事、之も斯道上達の第一條件である。天分あると否とに關せず、熱心に句作し、研究する事が、慥かに一つの境地を拓く原因となる。天分はその人の地位や境遇の如何によらないし、又意識されるものでもない。熱心といふ事は自己の地位・境遇を超越する。寢食を忘れるほどの熱心は、たゞ此一筋につながつて、自己の俳諧ばかりを凝視させる。勿論過去の我も考へるし、未來の我も想像するが、その目的はたゞ自己の俳諧の發展といふ點だけである。それがためには失敗もあり、後悔もあらうが、自己の俳諧に生きるといふ目的に成功すれば、失敗も後悔も甘受しなければなるまい。芭蕉のやうな偉人にだとて此歎きはあつた。併し彼はあきらめてゐる。その點は寂しいが、詩人として尊い所である。

歳四十を越えない事、人間四十を越えると、やゝ老を感じ（今日ではさうでもないが）、氣力が衰へてくる。向上心もなくなれば、名譽心も少くなる。すべてに欲望がうすくなる。句作も研究も若い血氣盛んな時代の事である。俳諧を道樂にし、家業の傍ら單なる慰みとしてやつて行くなら別問題であるが、眞劍に打込んでやらうとい

ふには、若い時でなければだめである。此段は所謂西行の筋を探り、杜甫の方寸に入るといふ意氣組の人々に向つての教で、遊俳の徒の聽くべき言ではない。併し世の中には種々の立場の人があつて、必ずしも專門俳人ばかりがよいといふ譯ではない。遊俳や專門家も居て、差支へないのである。芭蕉も「俳諧は老後の樂也」(花實集)と言つてゐる。許六や嵐蘭に向つては、四十を越えてはいけないと說きながら、杉風や濁子に向つては、「いよ〳〵俳諧御勉候て、老後の御樂に可被成候。」(遺書)ともある。此二說は一見矛盾したやうに見えるが、決してさうでない。芭蕉は人々の境遇・地位・個性・年齡などに應じて、道を說いたので、それが彼の襟度である。人生を達觀しなければ、俳諧には居られない。遊俳は遊俳だけの價値しかないし、眞劍にやる者は其努力が酬ひられて、自家の俳境は拓かれよう。道の本義を說いても、理解の淺深は人々の心にある。どちらも自然であり、自然の存在である。

金持ではないが、生活に困らない人。余裕ある者でなければ道は行はれない。此二說は芭蕉の社會常識である。生活に困つて、自分も食へず、家族も養へないやうでは、文學はやつて行けない。之は獨り俳諧ばかりではない。生活が出來ないといふ事は、自分の修めた業務が、社會一般の需用を滿たさないといふ意味である。併し社會一般の需要を滿たしむべき事業が、必ずしも自分の生活を豐かにさせるか、それは問題である。社會には特權もあり、競爭もある。個人には才に長けた者もあれば、氣の利かない者もある。社會制度や個人の誠僞如何によつて、需要を滿たさぬ業でも相當に食つて行けるし、叉需要を滿す業でも容易に食つて行けない場合がある。元祿の昔

といへども、俳諧だけでは食つて行けないと見えて、芭蕉にもかゝる常識があつた。殊に蕉門の俳諧は心を高く悟つて、俗に歸るのであるから、反世俗的であり、高踏的であつた。その人に德でもなければ、貧乏俳人の食つて行ける筈はない。其角・嵐雪の點者商賣は尤である。露沾はさて措き、杉風・卜尺・濁子・木因・桐葉・知足・千里などは先づ裕福の人達であらうが、路通・惟然などは赤貧洗ふが如きの人物であつた。許六・正秀・曲翠・如行などは武士であるから、富まずといへど、貧しからずの方であらうが、同じ武士でも浪人した曾良や越人は金があるとも思へない。去來は浪人でも別莊を持つ位だから、さう貧乏でもなかつたらう。芭蕉から紙衾を貰つて喜んだ竹戸などは、俳人になる資格のない男である。それでも惟然は、芭蕉にその天分を認められて、後に一流を起して居るから、强ち貧乏で、朝晩苦んで居る者が、成功しないとは限らない。たゞこゝでは一般人に就いて云つただけで、天才の上は別の事と見える。

俳人に學問の必要である事は芭蕉の言ふ通りである。學問がないと品性が卑しくなる。俳諧も淺くなり、俗に流れ易い。美濃派の末流が卑俗な風に墮ちた事も、江戶座の宗匠が幇間的行爲を恥ぢなかつた事も、大方無學の俗俳に甘んじた結果であらう。芭蕉がそこに着眼して、句作の目的を俗談・平話を正す事に置いたのは、學才あらしめんがためであつた。併し俳人の學問は深きを望まなかつた。學問の深いといふ事よりも、學問の範圍の廣く、且つ趣味の豐富であるといふ點にあつた。文章や發句・附句を讀んでも、芭蕉は和漢の文學に大體通じて居つた事は分る。芭蕉は季吟に就いて連俳の式ばかりでなく、國文學の一般も敎へられた事であらう。又坦庵や桐江に

就いて漢詩や漢籍の理解力も得たやうである。「去來抄」に、「浪化曰、今の俳諧、物語等を用ふる事いかゞ。去來曰、同じくは一卷に一二句あらまほし。猿蓑の中に、待人いりし小御門の鍵も、門守の翁なり。此集撰む時、物語等の句少しとて、粽結ふの句を作りて入れ給へり。」とある。之によつても芭蕉は古典趣味の句を好んだ事が知れよう。尤も蕉門の古事の取りやうは、俤なりとも想像されないだらうと思はれる。貞門には貞德はじめ季吟・盤齋・宗利などの國文學者があつて、古典の研究は一般に忽にしなかつた。俳諧修行は德元の言ふやうに「和歌の浦波に心をよせ侍る事」（初學抄）とあつて、國學研究の一助ともなるべき德があるものと考へられてゐた。季吟の如き學者の出たのも、此意味に於て怪しむに足らない現象と思ふ。併し蕉門へ行くと、俳諧の領域と國文學の領域とは全く區劃が付いて、俳諧修行は和歌の浦波に心を寄させるためではなく、歌道や歌學とは獨立した地位の下に置かれるやうになつた。殊に俗談・平話の俳諧であつては、古典の趣味や研究に緣遠くなる傾向を生じさうだから、芭蕉はそこを洞察して、和漢の文字に理解を持つ事を說いたのであらう。此敎示は蕉門の高弟間によく遵守された。其角・嵐雪・去來・許六・丈草・支考・越人等相應に和漢の文字は博かつた。古事の滑稽化を特色とした所謂俳文の一格は許六・支考等によつて唱へられたが、之などは文學の知識が博くなければ分るものではない。衒學の弊に陷つたとまで思はれる也有の俳文を讀むと、一層此感を深くするだらう。衒學的といふ事は芭蕉の敎示の副產物でもなからうが、一體元祿俳人は和漢の文學の知識があつて、品位を落さなかつた。

ロ、俳人觀

芭蕉は世上の俳人を三種類に分けてゐた。一は點取俳人、一は富者の遊俳、一は正風の本流であつた。その事は芭蕉が曲翠に與へた手紙の中に見えて、後寛政十年「俳諧三等文」と題し、蝶夢の註を加へて、門人可笛五明が出版した。「三等文」に云、

風雅之道筋大かた世上三等に相見え候。[一]點取に晝夜を盡し、勝負を爭ひ、道を見ずして、走り廻る者あり。彼等は風雅のうろたへ者に似申候へども、點者の妻子腹をふくらかし、店主の金箱を賑はし候へば、ひが事せんにはまさりたるべし。又其身富貴にして、[二]目に立つ慰は世上を憚り、人事いはんにはしかじ、日夜二卷・三卷點取り、勝ちたる者もほこらず、負けたる者も強ひて怒らず。いざま一卷など又とりかゝり、線香五分の間に工夫をめぐらし、事終りて卽點など興ずる事、偏に少年のよみがるたに等し、されども料理を調へ、酒を飽くまでにし、貧なる者を助け、點者を肥やしむる事、是亦道の建立の一筋なるべきか。[三]又志をつとめ、情をなぐさめ、あながちに他の是非を取らず。これより誠の道にも入るべき器なりなど、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るやから、わづかに都鄙を數へて、十の指をふさず。君も則ちこの十の指たるべし。能々御つゝしみ御修行御尤に奉存候。

とある。一體芭蕉は點者生活をした事があつたらうか。「江戸鹿子」俳諧師の部に、桃靑の名が見え、元祿二年の

「江戸惣鹿子」に、本庄三十間堀芭蕉とあり、又林鴻の「京羽二重」(元祿四年刊)に、俳諧師として、西洞院二條上ル町京芭蕉とあつて、發句を出してゐるが、之は點者生活をして居たといふ譯でもあるまい。「京羽二重」には、點者と誹諧師と作者と三種類に書き分けて、點者は點料を取つて、衣食する業俳、誹諧師は點者を業としない知名な俳人、作者はたゞ俳諧をやるといふだけの人といふやうに區別して居るから、京二條上ル町の芭蕉は點者でない事は知れるが、江戸鹿子の方は俳諧師とあつても、林鴻の言ふやうな意味の者ばかりも居ないやうだから、或は延寶頃江戸に放浪中點者をやつた事もあつたかも知れない。惣鹿子の方は、元祿へ入つての事であるから、勿論點者といふ意味ならば誤であらう。芭蕉には點式があつた。芭蕉が探丸・拙許・式之の三吟歌仙に點をかけた草稿が殘つてゐて、それに墨點・長・丸などの點式が見えた。(第二章第一節參照)。點式がある位だから、全然點者生活をしないといふ譯もあるまいが、後になつてそれを止めたものと思はれる。いつ止めたか、それは詳かではないが、先づ芭蕉庵に入つて、杉風の保護を受けるやうになつてからの事だらう。いつ點者生活をして居つたか、それも詳かではないが、之は恐らく主家を亡命して、上京した時代の事か、或は江戸放浪中の出來事ではなからうかと推測する。「三等ノ文」を見ると、點取俳諧に夢中になつてゐる者を罵つて居るから、從つて點者なる者も眼中になかつたやうで、此語氣から考へても、當時は既に點者を輕んじて居つた事が分る。此手紙は元祿三年であらう。元祿三年の芭蕉は眼中既に點者なく、點取俳諧なく、是等を風雅のうろたへ者と罵るやうになつた。第二段の俳人は遊戲本位ではあるが、まだ斯道建立の一助ともなつて、好意は持つて居た。併し考へると此種の俳

人は當時かなり多かつたらうと思はれる。芭蕉の門人でも、富貴な人は、點取こそしないが、大方は上品な遊俳ではなかつたらうか。芭蕉が人によつて指導の方法を異にする所以は、かゝる俳人があつたからであらう。第三段は之こそ眞に蕉風俳諧の骨髓を得ようとする人で、定家・西行・樂天・杜甫の吟腸を探り、その貫通する一道を摑まうとする者、都鄙を數へて、十指を伏せず底の勇士である。芭蕉の理想的俳人はそこにあつた。併し曲翠がその選に入るや否やは分らない。或は芭蕉の過賞かも知れないし、よく言へば一層の發憤を促した言とも見える。因に、蕉門十哲といふ語は、支考の「俳諧十論」、許六の「師の說」などに出る詞であるが、それは既に芭蕉の言に十指とある事でも分らうが、人選は人々によつて一定しない。普通は其角・嵐雪・支考・去來・許六・丈草・杉風・野坡・越人・北枝をあげてゐるが、一說に野坡・越人・北枝を除き、千那・曾良・桃隣を加へたり（俳諧獨稽古）、或は越人・北枝を除き、惟然・土芳を加へたり（鬬ノ清水物語）、或は野坡・越人・北枝を除き、桃隣・園女・正秀を加へたり（鮫洲抄）、又は支考・許六・越人・杉風を除き、荷兮・曲水・凡兆・曾良を加へたり（風俗文選通釋）、なほ又其角・嵐雪・去來・丈草・嵐蘭・土芳・曲翠をあげて、「其余は誰ならんか知らず。」と跡を濁した說（蝶夢の三等文註）さへもあつた。尤此稱呼の起りは、去來の「旅寐論」の序に、畏敬せる同門の士、丈草・其角・野坡・土芳・正秀・曲翠・半殘・野水・越人・酒堂の名をあげた事や、支考の「露川責」に、「惣じて蕉門の十哲は、杉風・去來は實情を寫し、酒堂は俗話をあつかひ、許六はこなしを知り、越人はなぐりを得て、云々」とある事などに端を發したものかと考へる。

附　錄

俳諧七部集總論

一、代表的撰集としての七部集

元祿の遠い昔から、明治に至る迄、二百餘年の俳壇を支配して來た撰集は、「俳諧七部集」である。

「俳諧七部集」は芭蕉一代の主要なる撰集を七部集めたもので、蕉門俳諧を學ばうとする者の、容易に芭蕉の變風を知り得られる所から、大に尊ばれ、流布された。貞德の三部書卽ち「御傘」・「淀川」・「油糟」と云へど、其勢力は貞門時代に限られ、後の俳壇に何等統一的感化を與へなかつたが、七部集はさうでなく、その感化は元祿の俳壇を出でて、二百年後の明治に迄及んでゐる。

芭蕉は延寶天和の頃は、いまだ談林の奇怪な調を離れなかつた。其調のやゝ脫しかけて來たのは貞享の初であつた。諸註皆冬の日の俳諧を正風の土臺に置いて居る。俳諧七部集は冬の日以下六部の撰集を收めて居る。是等の撰集は芭蕉の指導に成つたもので、例へ撰者は門人であつたにせよ、芭蕉の諒解を得て上木したものであるから、自ら他の撰集とは異つた態度で觀察されてゐた。許六の如きは、芭蕉門に入らない時から愛誦して居つたの

である。之は自讃之論の條下、「宇陀ノ法師」などに見えて、卽ち許六は「曠野」・「瓢」・「猿蓑」をば日夜忘れる間なく、精讀玩味したと云ふ事である。去來も其角に與へた手紙、許六の問難に答へた手紙、「去來抄」などで見ると、「冬の日」・「猿蓑」・「炭俵」を、芭蕉一代の變風を代表すべきものと考へ、支考も七部集の編者ではなからうかと疑はれる位、七部の變風に付て論じてゐる。風國も「泊船集」の序に、「冬の日」・「瓢」・「猿蓑」・「炭俵」・「續猿蓑」をあげて、芭蕉一代の代表的撰集に數へて居る。其他の高弟も、七部の書に就いて、論說もあり、推稱もあつた。併し元祿の俳人は、芭蕉の俳諧を研究しようと云ふ事が目的であつたから、研究も七部の書に限られては居なかつた。其例は、許六が「歷代滑稽傳」に、芭蕉の撰集として「延寶二十歌仙」・「初懷紙」以下凡て十一部の集を示して居る事でも分るし、去來が許六に答へた文中、「次韻」・「虛栗」・「冬の日」以下凡て五部をあげて、芭蕉の變風を代表させてゐるのでも分る。支考になると、撰集を「冬の日」以下五六のものに限つてしまつたが、之は時代を劃すべき撰集を特に選んだからで、支考がそれ以外に蕉門の撰集を讀まぬといふ譯ではあるまい。要するに元祿に於ける七部集の研究は、七部の書そのもの丶研究でなく、芭蕉の風調の變化を知る事が主となつて居るから、發句・附句・附方などの部分的研究はあつても、七部集だけの纏つた研究はなかつた。「大鏡」の凡例に、何丸が古註十五篇と云つたのは、恐らく發句・附合などの部分的說明を含んでゐる書をも數へたのではなからうかと思ふ。

芭蕉は元祿七年に歿した。芭蕉歿後、寶永から寶曆までの間は、寶永に其角の洒落風、正德に不角の化鳥、享

保に五色墨、延享に二十歌仙などの動搖はあつたが、大體に醇正な蕉風の衰へた時代と云つてよい。併し七部集の尊重は依然として變らなかつた。淡々の如きは、「猿蓑」・「炭俵」を一日見ないと、眼に霞がかゝつたやうだと言ひ、雪中庵吏登は寛保二年の春七部集を草庵で講じた。之は門人蓼太の問に答へたもので、蓼太はその口述を吏登の七回忌卽賓曆十一年六月に上木してゐる。本書は「七部捜」と題された。蓼太は七部集の研究家でもあり、崇拜者でもあつた。「雪おろし」の卷初に、氏は芭蕉の變風を、「冬の日」・「春の日」・「曠野」・「瓢」・「猿蓑」などの集で、代表させて居る。同書によると、門人に「冬の日」・「猿蓑」・「炭俵」の三部を、芭蕉第一の撰集であると物語つてゐる。蓼太は又門人鼠腹といふ者の亭で、運座後俳諧に關する質疑に應じ「猿蓑」・「曠野」・「冬の日」の講義もしてゐる。此講義は明和元年の正月から、同三年の三月までつゞいた。「俳諧棚さがし」とは此研究の書名である。一體雪中庵の傳系の人は、七部集をひどく尊重してゐる跡が見える。吏登も芭蕉の俳諧は全體で三部程の流行ぢやと言うて居るし、蓼太も三部說を信じて居る。是等は恐らく去來・支考の影響であらうと思はれる。明和七年（序）加輿の「俳諧本來道」が出た。その內に蕉翁七部書の辯といふのが出て、詳しく七部集に就いて論じてゐる。

安永・天明に至り、俳諧は新しい活天地に入つた。曉臺・蕪村・蓼太・闌更・白雄・靑蘿・樗良・麥水の諸哲を迎へた俳壇は、從來の俗調を打破して一生面を開いた。彼等は新風の開拓者であると共に、蕉風の研究者であつた。七部集の研究も天明期に入つて大に展開して來た。第一に注目すべきは七部集の註本の出版である。蓼太は安永

四年更に「七部捜」を刊行した。之は寶暦板の焼失したためである。天明七年杜勤の「猿蓑爪じるし」が出た。天明八年蓼太門の三駱「七部抄」を作成した。寛政四年出羽の杜哉の「俳諧古集の辯」が出た。同六年闌更の「冬の日解」が出た。同七年（序）素綾の「七部小槌」が出た。同八年升六の「冬の日註解」が出た。是等は此時代に於ける註本の重なるものであるが、なほ他にかくれたる註本もあるだらう。第二に注目すべきは天和貞享の俳諧研究である。此現象は寛政六・七・八年とつゞいて、「冬の日」の註本が出たのでも大方推せられようが、尾張の曉臺は「冬の日」・「熱田三歌仙」の調を鼓吹し、加賀の麥水は「虚栗」を賞揚し、浪花の蕪村は「初懐紙」の附句に感服してゐる。次に注目すべきは七部集の飜刻である。それは小本の「俳諧七部集」と「俳諧七部集」の再刻とであつた。「小本七部集」は安永三年の開板であるけれど、校合が杜撰で、寫誤多く、到底研究の資にはならない。それに僞板もあるやうである。再刻本は寛政七年の刊で、京の筒井・浦井・野田の合刻である。曲齋は再刻といふも、外題・帙・奥の三丁變りしのみで、内容は舊本であると言うてゐる。

此時代は又七部集の流行に連れ、利にさとき書肆は、芭蕉の七部集に倣ひ、蕉門高足の集を七部集めて刊行する事も行はれた。天明七年「其角七部集」（虚栗集・續虚栗・新山家・たれか家・萩の露・花摘・錦繡緞）が此種の諸本の先鞭を付けた。寛政五年「樗良七部集」（我が庵・村雨笛・月の夜・石をあるじ・としの尾・菊の香・花七日）が出た。

天明期の七部集研究は、註本の外に、部分的・斷片的研究もあつた。之は七部中の發句・附句に就いての説明で

ある。此側は間接の研究であつて、蓼太や几董の附合を說いた書中に二三見えてゐた。要するに此時代の七部集研究者として特筆すべき人は雪中庵蓼太である。

新風鼓吹の重なる俳人は、享和初年までに大方歿してしまつた。併しその門人は各自師の衣鉢を傳へて新風を維持してゐた。文化・文政の俳壇は、天明俳壇の如く絢爛たる光彩を放つて居らぬが、又別趣の風格を備へてゐる。此時代の七部集研究も亦見るべきものに乏しくなかつた。註本の重なるものは、曰人の炭俵註、文化元年の稿である。文化八年宜麥の「續繪歌仙」が出た。之は歌仙を繪で解釋したもので、內一歌仙は炭俵の連句である。文政六年何丸の「七部集大鏡」が出た。七部集の拔註である。又同年何丸の子公石父の撰び置ける註を一括して、「續猿蓑註解」を出してゐる。その他この時代の七部集研究家には、成美・鶯笠・無味堂・太笻・風谷・五芳・芝山・五明・篤老・白雄・月居・木阿彌等があつた。成美の「隨齋諧話」(文政二年刊)は「冬の日」・「猿蓑」・「曠野」の句に就て考證的な研究を示してゐる。鶯笠は大鏡の序詞に、冬の日を正風不朽の礎、此道の老經と說き、其他の卷々を詩書禮樂などの敎書に比べてゐる。氏の說は大鏡中所々に見えてゐる。凡て成美から芝山までの說は大鏡中に出てゐるのである。五明の「小夜話」といふ雜話中にも、六の問に應じた七部集論が出てゐる。篤老の「芭蕉翁附合評註」中にも七部集中の附句百四十六を註解してゐる。木阿彌は「俳諧饒舌錄」(文化元年刊)に、俳諧の切字・係結び・天爾波・命令形などの說明と共に、七部集中の發句を大方引用して解釋してゐる　國學者富士谷成元も「俳諧手爾波抄」(文化四年刊)に七部集より句を拔いて、語法を說明してゐる。月居は「俳諧道の便」

(文化五年刊)に七部集の句を二十六ケ所に渉つて引用し、附方の則るべき事を示し、且つ註解を加へてゐる。白雄は「俳諧寂栞」(文化九年刊)に七部集の發句・連句を引用して解說してゐる。併し本書は有名な割に解が簡單で、例句に就いてたゞ句の風格・附方を直感させるだけであつた。

文化・文政期は蕉門の撰集や當時の宗匠の撰集を七部まとめて刊行することが流行した。享和二年「俳諧七部拾遺」(初懷紙・野晒・三歌仙・一つ橋・桃の實・初便・其袋集)が菊舍から出版された。皆蕉門必讀な書で、例へ寫誤はあるとしても、後人を裨することと少くない。享和三年「續七部集」(深川集・卯辰集・匂塞・刀奈美山・有磯海・小文庫・千鳥掛)が出た。闌更の序に、「俳書數萬卷のなかにも芭蕉七部と稱して、正風にこゝろざすともから几上にのせずといふ事なし。……」とある所を見ると、如何にその頃、七部集が流行されたものか知れない。尤もそれは「大鏡」中成美の序詞にも、合せて俳諧を學ぶ徒は、皆之を準的としたといふ言に徵しても分る事で、當時の書肆が爭つて之を刊行したのも、かゝる流行につれてゞあらうと思はれる。文化二年「士朗七部集」(飮中八歌仙・うらかゞみ・山吹・鳶の眼・痲刈・口笛・留主懷紙)が名古屋の永樂屋から出た。文化五年「西國七部集」(野梅・鳴戶海松・夜寒・雪つくし・ひご鯛・ひなた路・蓬路)が出た。花屋庵奇淵の編である。文化五年「蕪村七部集」(其雪影・明烏・一夜四歌仙・桃李・續明烏・五車反故・花鳥篇)が京の懷玉堂等から出た。本書の奧書に、蕪村七部集後編春夜樓若夢といふ廣告が出てゐるが、出版されなかつたものと見える。文化十二年「芭蕉七書」(行脚掟・二十五ケ條・十六篇・句合・嵯峨日記・奧細道・芭蕉發句集)が出た。併し之には享和元

年刊「蕉門七書」といふ類本がある。「蕉門七書」の方は上下二巻で、佐野石兮の序及び附言が附いてゐるが、「芭蕉七書」は三巻で、「蕉門七書」の下巻なる蓼太輯の「芭蕉附合集」を削り去つて、「芭蕉發句集」を收めてゐる。恐らく「芭蕉七書」は「蕉門七書」の再刻で、「蕉門七書」の解題・附言を修正し、附合集を除去して出したものかと思ふ。文政三年「流行七部集」（新蛙合・雪わり・鮎波・炭瓢・鼠道行・長月集・月見記・斧の柄・附錄三十六家詠）が出た。鼠道行は其角作で、角が醉餘格枝に與へしもの、半太夫節のうたひ物で珍らしいものである。文政七年「士郎續七部集」（未見）も出た。「士郎七部集」には「士郎五七集」といふものもある。之は刊行年月未詳であるが、初篇以下五篇を一括して三十五部を收めたもので、五七集と題したものである。即ち（一ノ巻）留守懐紙・落梅花・麻がら・草枕集・於本尊・松ノ硯。（二ノ巻）法法華經黄鸝品・山吹集・名なし鳥集・花橘集・橘日記・鳶の眼集・ひとくどり・松の炭・王くしげ集。（三ノ巻）・三日月集・玉笈集・庇太集・婦久邊日記・飛波婦久呂・閑古鳥・名なし草。（四ノ巻）ロ笛集・於賓路夜集・宇羅加良須集・藁づと集・飲中八歌仙・長壽樂（五ノ巻）木爪つゝじ・きぬうた・泣瓢集・蓑虫集・玉兎集・柴の戸集・文化五歌仙である。文政十一年「俳諧七部餘錄」（一名「新七部集」）が其成の編で、大坂の宋榮堂等から出た。內容は田舍句合・常盤屋句合・續ケ原・武藏曲・別座敷・雪まろげ・桃の白實であつた。其成の序に、「年過ぎて蝶夢が續七部集を出せしより、几董が其角七部集あり、七部拾遺あり……」とあるが、「續七部」は享和三年の刊、「其角七部」は天明七年の刊で、前後時代を轉倒してゐる。且つ蝶夢が續七部も變であるし、几董が其角七部も間違つてゐる。例によつて便利ではあ

るが、寫誤多く、うつかり出來ない。同年「月居七部集」(宵の古道・日くらし・反古合・山水行・二十日月・立枝(たちえ)・河ちどり)が出た。其成・其龍の編である。なほ同年四月梅價の「枯魚七部集」(呉竹・月見草)も出てゐる。文政十二年「曉臺七部集」(竪並集・爪じるし・幣袋・佐渡日記・しをり萩・秋の日・夜の柱)が出た。門人庭雅の編である。內、秋の日は貞享五年七月、芭蕉が竹葉軒長虹の亭で興行した歌仙一巻と、社中の四歌仙とを加へたものである。文政十三年、江戸の野田から「道彥七部集」(蔦の眼・そゝろ言・澁四ツ手・鶴芝集・馬の上・黒ねぎ・畑芹附錄)が出た。內、「蔦眼集」は、士郎一派の附句を知るに便利であり、畑芹は蕉門古哲の名句を引用して、句の格を敎へてゐる所が面白い。

かくの如く此時代は七部集出版の流行を極めた。實に蕉門の撰集を七部まとめて、便利な小冊子にして賣出すことは、後人に多大の稗益を與へるけれど、前にも一寸述べたやうに、此飜刻本は頗る杜撰のもので、寫誤・假名違ひ・脫字等が多いばかりでなく、古集の序・跋を除去し、開板年月・版元の名も削り去り、之を以て古集の研究にあてるには、全く危險と不自由を感ぜしめてならない。要するに是等覆刻本は反刻の流行に連れて、書肆が營利の目的より、未練の俳人に校正させたものと思はれる。

化政度の新風を維持して來た成美・士郎・乙二・道彥・完來・月居の徒は、大方文政の末年までに歿してしまつた。是等の人々の歿去と共に、俳壇の機運は又一轉化し來つた。天保以降の俳壇は、梅室・蒼虬・鳳郎・一具・護物・梅通・見外・爲山・西馬・蓬宇・幹雄等の所謂月並宗匠の占領する所となつてから、日一日と低趣味に俗

化した　此時代の七部集研究はどうであつたか。此時代は七部集が未曾有の權威を持つやうになつた。七部集の研究も、從來とは違つた方面に着手せられるやうになつた。註本も大部の物が出るやうになつた。先づ註本から說くと、天保四年曰人は「七部礫噂」を脫稿してゐる。同六年成美の「七部集纂攷」がある。同十三年梅室の「梅林茶談」中に「炭俵」の空豆の花の卷が半分ほど解せられてゐる。弘化四年何丸の「七部小鏡」が出た。嘉永元年寄三の「七部集連句早見」が出た。嘉永二年其日庵錦江は「俳諧七部通旨」十四卷を大成してゐる。萬延元年曲齋の「七部婆心錄」七册が出た。同年東杵庵樨柯の「猿蓑逆志抄」七册が出た。之は再版であらうか。元治元年西馬「標註七部集」が出た。岡本保考の「七部集打聽」も、慶應元年の秋から同三年五月の間に成つてゐる。天堂一叟の「俳諧七部集十寸鏡」も天保以後の註らしい。明治二十年桃支庵指直の「俳諧猿蓑註解」が出た。同二十六年波鷗の「七部集講義」もあつた。同三十年俳仙堂碌々の「俳諧炭俵註解」もある。近頃では小林氏の「俳諧七部集連句評釋」、露伴氏の「冬の日抄」、新田氏の「猿蓑評釋」等がある。

此時代の七部叢書には、天保六年江戸萬笈堂から「乙二七部集」(斧の柄・わが佛・耳さらへ・箱舘紀行・蕪村句解・手爾葉草・松窓句集續篇・附錄今人句集)が出た。一具と布席の校合であらう。「護物七部集」も萬笈堂から出てゐる。天保七年「更科七部集」(旅手綱・月の照・御湯遊び・續御湯遊び・信濃富士・きの子狩・時雨會)が出た。周阿の編である。同八年「俳諧今七部集」(利根太郎・一二三・いぶり炭・栗柿・朧夜・すゝき・落穗)が出た。冬至庵庚年の編。同十年「禾葉七部集」(勝鹿早稻・藁笠・藁盒子・續藁盒子・福藁・藁菰・藁履)が出

た。藁を書名としたもので、天保調を代表したものであると。其他刊行年代不明なものに、「芭蕉翁俳諧四部錄」(可般圖・四季句合・野晒紀行・嵯峨日記)がある。之は菊舍の目錄にある內容とは少し違つてゐるのも變であるが、目錄には未刻二册とあるから、後で內容を變へたものであらう。享和頃のものらしい。「雪門七部集」(新夏引集・去嫌眞砂歌・住吉千句・墨水兩岸行・百羽がき・武藏三歌仙・秋の夜)、「同拾遺」(三春日記・筑波紀行・江の島・秋山家再興集・髭箒・一夏百步・藤衣)などもある。之は蓼太門の撰集をあつめたものである。奇淵輯の「俳諧四部栞」(山かけ集・あやめ根合・萍日記・玉箒)もあるさうである。曲齋編の「支考七部集」(古今抄・十論爲辯抄・本朝文鑑・和漢文藻・つれ〴〵讃・新撰大和詞)、或は「獅子百韻七部集」(新百韻・夜話狂・三疋猿・後山伏・南無俳諧・東山墨直八夕暮)、或は「凉莵七部集」(行脚戾・皮籠摺・一幅半・山中集・潮とろみ・七五月雨・鰤俵)等は廣告ばかりで出なかつたやうである。

此時代の七部研究資料には、「舍利風語」(弘化二年刊)中の麥慰舍隨筆に、七部集に關する梅通の見解がある。積翠園の「俳諧或問」・「俳諧附合問答」・「しらでよし」(天保七年寫。得壽)に七部集の事といふ項目がある。梅室の俳諧を難じた天來の「俳諧七草」、それに關した難陳の「齊々志」・「俳諧春の田」等も大いに參考とならう。卓朗の「俳諧道の便り」(文久三年刊)にも七部集に就いての考證が出てゐる。「梅林茶談」にも芭蕉の法則に拘泥しなかつた例として、七部集の附句を抄出してゐる。

天保以降七部集の尊崇は非常なものであつた。以前からも七部集は尊ばれてゐたけれども、まだ七部集に囚は

れるといふ程でもなかつた。然るにそれが此時代になると、七部集が俳人の聖典のやうな觀を呈して來た。天來の攻撃は梅室の俳諧に對してゞあつたけれど、私はその攻撃の目的よりも、むしろ當時の俳壇の裏面の消息を喝破した點に於て、より多くの興味を感ずる。「七草」の卷頭に云、

蕉門の徒、連歌より出でたる俳諧の式目を學ばずして、末書の杜撰なるものを信じ、殊に七部集などを釋迦の經典の如く思ふより、か樣の異端起れり。……只七部の廓中に遊ぶの御身、猿蓑の猿智惠を振ひ、……その廣き胸に、わづか七部集及貞享元祿の集のみなるは大倉の一粟也。……かく申すとも、和歌誹連蘊奧の書を熟讀せざる七部先生にては、其理合點參るまじ。恰も盲人と色を論ずるが如し。……憐むべし、老人は七部の井蛙也。……

それに對して梅室は何と答へてゐるか。

さて此論者は芭蕉門の大集は聊も讀まれぬと見ゆ。其證據は手本の七部集にさへある事をこと〴〵しく論ず。……七部集さへ讀まざる人を相手には老人大人氣なし。依つて閉口。

七部集を蕉門の大集と考へ、七部集を讀まぬ人を俳人でないかのやうに考へてゐる所は滑稽である。天來にかく迄嘲けられても、依然として例句を他の撰集より求めず、專ら七部集中より求めてゐる所から考へて、七部より讀まぬ七部先生とか、七部集の井蛙とか、批評されてもしかたないのである。」尤も此傾向は獨り梅室に限つたわけでもなかつた。蒼虬の徒なる花の本梅通は「麥慰舍隨筆」中に、

蕉門に七部集を要文とすれど、猿蓑・炭俵・深川等を本とすべし。……
又梅通は天明以來の風調を七部集の風調に配合して
天明・寛政・文化・文政を經て、曠野・猿蓑・炭俵をうつし來る。さあれ、安永に冬の日をうつせど、眞の冬の日にならず。文化に猿蓑を撰すと云へども、さらに猿蓑に等しからず。天保に炭俵を覘ふと云へども、炭俵に等しからず。……

安永に冬の日をうつすとは、曉臺などの運動を指したのだらうが、當時他の革新の人々は、冬の日ばかりを目標としては居なかつた。曉臺は尾張五歌仙、蕪村の徒は初懷紙、闌更の徒は延寶天和の調、麥水は虚栗と云つた工合に、各目的は一致して居らぬ。文化に猿蓑を撰ぶと云ふのも分らぬことである。乙二の徒が去來の風調を好んで規矩とした事は、「斧の柄」の跋に見えてゐるが、一般にさうかどうかは疑問である。かつ化政度の完來・成美・道彥・士朗等の俳諧を取つて見ても、猿蓑の寂栞りとは少し内容が違つてゐる。是等の論は梅通が七部集に囚はれた結果、元祿以後の俳諧と見れば、七部集を土臺にして論じたがる癖念があるからである。天保の調が卑俗になつたのは、梅通等の炭俵の調を理解せぬ結果である。五明がかつて門人の問に答へて云ふに、炭俵は草の調べで眞似易いが、此調は蕉門で最危い所である。道蹈たがへてあやまちをしてはいけないと云つたとあるが、それは形式的模倣を誡めた言である。梅通はじめ梅室・蒼虬皆皮相の模倣を事として、俗調に終つてしまつた。幹雄も「標註七部集」の凡例に、「七部集は俳諧第一の尊き文なれば、云々」と云つて居る。是等によるも、天保

以下の俳人は、どの位七部集を尊み、どの位七部の小天地に囚はれて居つたかゞ分るであらう。

七部集の流行に連れて、此時代には七部集の定本を作る事が起つた。前時代の研究は、附合發句の解、或は附方論が一般で、七部集の校合とか、定本とかいふ側の研究へは進んで居らなかつた。それは前時代に於ては、未だ信ずべき七部集の古版が殘つて居つたからでもあらうが、天保以降に入りては、古板も大方散逸し、流布の印本信じがたきもの多く、七部集を斯道の金科玉條と仰ぐには、どうしても校合を嚴にした七部集を要する事となつて來たのである。西馬の「標註七部集」の如きは、かゝる動機に基いたものである。註書にして校合を嘖しく論じて居るのは、曲齋の「婆心錄」である。次で弘化二年「校正七部集」といふのが出た。花鳥庵羅齋の校である、嘉永四年「校正七部集」が出た。之は八雲龍守・一葉舍仙皃といふ人の校合である。文久三年五律の「正改新刻七部集」といふのも出た。伊藤松宇氏の「類題芭蕉七部集」（附錄に、七部集概論がある、之は統一的の研究ではないが各種の七部集や註本の解題が非常に參考になる。大正十年一月町田書店發行）がある。近頃勝峯氏の「芭蕉七部集定本」が岩波から出てゐる。

二、七部集の編者に就いて

芭蕉の生前七部の書は單行本として刊行されたが、七部集と題して出版されたのは、何時の頃であるか明かでない。或は曲齋の言ふやうに、享保・元文の間の出版であるかも知れない。勿論編者も分らない。之も恐らく版元の仕業位の所ではなからうか。素綾の「七部小槌」の序詞に、

芭蕉の俳諧正風體を開きてより、貞享の冬の日を始とし、元祿の秋の暮に終、卷〱三百有餘、何れの時、いづれの人か、それが中よりひろいて、七部集と號、世に弘るといへども、云々

成美も「大鏡」の序詞にも、

世に俳諧の七書と云ふものは、芭蕉のかく定め置ける物にもあらざるを、後の人の心に、諸集の中を拔出しものなれど、云々

月溪も「蕪村七部集」の序詞に、

芭蕉翁及其角・嵐雪が著せし句錄七部を、俳諧七部集と云ふ事は、いつの頃よりは云出たるやらん知らず。云々

とあつて、古人も刊行の年代を明かにしてゐない。併しこゝに一說がある。それは「芭蕉翁新七部集」の醉室其成の序詞で、

こゝに元祿の頃の集共を集めて七部集と號る事は支考の仕業なる由、云々

とあることである。併し此說はたしかな根據があつてのことでもないらしい。支考は芭蕉の僞書を作り、名利に賢き者であるから、大方之も支考の仕業だらう位の推測に基いたものであらうと考へる。

三、芭蕉の變風と七部の書

芭蕉の俳諧と七部の書に就いては、既に芭蕉の高弟の間にしば〱論ぜられた。芭蕉の門人中でも去來・支考・許六等は談理の徒で、芭蕉の變風を代表さすべき集は、先づ彼等の意見から初まつた。

許六は「宇陀法師」に、曠野・瓢・猿蓑・炭俵・續猿蓑をあげて、芭蕉の變風の推移を論じ、或は「歴代滑稽傳」には、芭蕉の撰集として、桃青二十歌仙・初懷紙・冬の日・春の日・曠野・猿蓑・瓢・深川集・炭俵・續猿蓑の十一部を選んでゐる。許六の論は七部に限つて居ない。

去來は「贈晋氏其角書」の中に、瓢・猿蓑の後、炭俵・續猿蓑を以て、又一の新風であるとしたり、「答許子問難辯」にも、芭蕉の變風を次韻・虛栗・冬の日・猿蓑・炭俵の五部を以て代表させてゐる。即ち去來は五變論を立てゝゐる。

風國は「泊船集」の序に、「連歌は冬の日といふ五歌仙に響き、瓢・猿蓑出來て、新しき風流を起し、正風の腸を見せ給ひ、忽千歳不易の姿、一時流行の變格明也。それより替る替る新しみを探り得給ひしは炭俵・續猿蓑也。云々」と論じて、冬の日以前の集を捨てゝゐる。

支考に至りては七部集の編者と疑はれてゐるだけ、七部の論も明かである。即ち支考は「阿誰話」（正德元年刊）の序に、門人渡邊狂と僞り、「昔は冬の日・春の日より、曠野・猿蓑に三變して、炭俵・續猿蓑の變化に止りたるが、その後は新古韵に詞の花咲きて、白陀羅尼のやすき所にぞ出らる。前後に七度の變はありながら、云々」と論じ、「發願文」（正德五年刊）には、

抑俳諧に八體の變化ありて、冬の日・春の日の二集に正風の門を斷り、尾城の曠野に風情をとゝのへ、猿蓑集に至りて全く花實を備ふ。是を俳諧の古今集とも云ふべし。世更に此集に眼を止めて、爰に遊ぶ事年久し。

其後武城に炭俵と云ふ集を撰みて、人の心の花實を破るに、例へば佛の方等部等佛法の執心を阿り給ふが如く、始て俳諧の甘味を去り、月花のねばりを洗ひつくせるより、さて續猿蓑は遷化の秋に選れて、法華虛實一合とならば、花にして花ならず、實にして實ならんや。先翁は凡て五度の變化を見て、爰に此俳諧の元祖とは仰ぐべき也。云々

とあつて五變論を唱へてゐる。然るに「俳諧古今抄」(享保十五年刊)を見ると、

我家の俳諧集は天和の頃に濫觴せしが、冬の日・春の日は論に及ばず。姿情は凡瓢集に分れて、花實は正に猿蓑集に調ふ。さるを此頃の炭俵集は變化の中の曲節にして、俳諧はかく三變と知るべし。云々。

とある。之は恐らく前說を簡拔して、變風の中心となるべき集を示して、三變論を唱へたものだらうと考へる。兎に角支考の立論は、芭蕉の俳諧の取るべきものは冬の日以後である。冬の日以前の俳諧は蕉風に純でない。冬の日に於て正風を開眼したのである。冬の日以前の集は變風を代表さすべき集の中に數へる必要がないといふ見地に立つてゐる。此點は去來・許六等の態度とは明かに違ふのである。支考の論は芭蕉の俳諧を忠實に研究しようといふ側から見たら、獨斷であり、不完全でもある。併し蕉風の俳諧を分り易く流布させるとか、宣傳するとかいふ立場から考へたら、むしろ卓見と云はなければならない。支考の論は往々後人を誤らせる恐れがある。去來・許六の論にはかゝる心配は少いかと思ふ。

支考の三變論は後人に非常な感化を與へた。支考等の論以來大方の俳人は、「冬の日」を以て正風開眼の集と定

めて了つた。寛保に至り、二世雪中庵吏登も三變論を唱へてゐた。それは「七部さがし」に、

師云、三部三部と云ふ人あれど、何故に見ると云ふ事をも知らで、人眞似に尊るゝが多し。……翁の俳諧も冬の日に春の日は籠り、曠野・瓢は猿蓑に熟し、さて炭俵にしらげ上げたるものなり。續猿蓑は炭俵にあるなり。全體は三度程の流行ぢやと先師（嵐雪）などの申された。云々

とある。又蓼太は「雪おろし」に、

夫より貞享甲子の冬、尾五歌仙に談林風の古體を破り、續て春の日に光をかゝげ、瓢・曠野集に正風を見開き、去來が猿蓑集に於て漸々姿情定りぬ。云々

と論じてゐる。乙由門の柳居も、門人の問に答へて、「七部に三度の變あり。……蕉門に入る者七部集を見ざるものなく、又七部集をわきたまへたる人も稀也。云々」（四季供養）と言うてゐる。是等は支考・風國等の說を繰返してゐるに過ぎないが、一面いかに七部集が流行り出したかゞ分る。

併しその間にはかゝる流行に反對の意見を持つた人も一部にはあつた。秋田の小夜庵五明は、「こぼれ穗」の序に、

今世蕉門の俳士、冬の日より續猿蓑迄合せて、翁生涯七部の書也とす。何ぞ七部に限るべからず。洽く人々に伺ひて風格を施し給へればなり。云々

又「小夜話」にも、

客曰、今世芭蕉翁の七部書など云へる、誠に生涯七部の風のみにや。答曰、翁の凡の俳諧を心得ざる人、七部に限りたるなるべし。……前に申せし如く、時に應じ、人々の性質に應じて授け侍れば、風調は品々なるべし。凡の書を集め見給へ。……之を正す時は眞草行の三の外なし。之を悉く分ち侍らば、九品にも至りぬべし。先貞享初より四年まで眞の形、三品と知らるべし。元祿初より三年まで行格、三品と知るべし。同じく四の年より七年まで草格、三品是にて九品也。眞と云は初懷紙・冬の日・熱田三歌仙・一橋。行と云は瓢・猿蓑・深川。草と云は續猿蓑・炭俵・別座敷・文庫集也。云々

とある。此說はさすがに五明だけあつて、一見識を持つてゐるけれど、蕉風の基礎を貞享の初めに置いたり、芭蕉の俳諧を眞・行・草の三格に分けて論ずる事などには、支考の論の影響が見える。支考の「三疋猿」（寶永元年刊）の序に、

或翁の遺誡に、俳諧は眞行草の三を離れずと云へるは、世情の限りを云へるなるべし。眞とは眞實にして、五色の糸筋を亂さず。行は世の常の世情をつくし、草は其情のほどけるを云ふが如く、云々

とあるから、此點は强ち五明の創見でもない。五明の九品論中、冬の日・猿蓑・炭俵が三變の中心をなせる所は注意すべきである。冬の日に時代を劃して論ずると、三變論は動かすべからざる說となる。

次に積翠園の穩健な見解と、曰人（えつじん）の無稽な想像說を紹介して置かう。積翠園は「俳諧或問」中に、

問曰、蕉門の附合多し。いかなれば七部集とて分けて、是をもて遊ぶや。

答曰、はせをの風は、集ごとに變ずるを、見安からんがためなるべし。諸集に眼をわたすにしかずといへども、七部集すら見る人少し。

問曰、諸集多し。何故に冬の日・春の日・あらの・ひさご・猿蓑・炭俵・續猿蓑と、是をのみ七部と定めしや。

答曰、(この所風國説と許六説を引用す)、しかれば九部集ともすべけれど、しかる時は其餘の集悉く上げ用ひば、多端にして時代の移り行くを見るに便り煩し。然れば書に心ある者、是を七部と立て、變風を見安からしめんがためなるべし。云々

とある。此説は至極穩かな説かと思ふ。曰人は「七部礫噂」の終に、

曰人曰、七部とは後世三部殘して、六部の物を七部とす。口傳也。六部集とはひゞきあしく、例はゞ十二年を前九年とし、五年を後三年と云ふが如し。唐を二百八十年、三百年と云ふが如し。六部集とは云ひにくき也。後世に三部殘し給うて、百年の間、曰人など仕合の太平に生れ合ひ、名人の時に逢ふぞ有がたし。云々

とある。何の意味か要領を得ない。恐らく七部集は實は六部集である。六部だけ芭蕉の生前に單行されたから、かく論じたのであらうが、後世に三部殘したとは、一體何を殘したのか、全く荒唐無稽な、寐言のやうな説である。

四、七部集の内容に就いて

「俳諧七部集」とは、普通「冬の日」・「春の日」・「曠野」・「ひさご」・「猿蓑」・「炭俵」・「續猿蓑」を集めたも

のであるが、七部の編に就ては芭蕉の關知せぬ事であるから、內容も各家々の見解によつて議論があつた。或者は自門の規矩に立てようといふ考で、內容を嚴重に檢覈したものもあり、或者は一家の趣味から、內容を變更させたらしく見えるものもあつた。今その論の重なるものをいふと、蓼太は「棚さがし」に、曠野は芭蕉の補助になつたものではなからうと言ひ、五明は「春の日」・「曠野」は翁の書でないと論じ、闌更は「續七部」の序詞に、「春の日に翁の連句なき事をはしたなしといへるもあり。云々」と疑ひ、素蓮は「春秋」に、「春の日」を排斥してゐる。併し其中で最も疑惑の眼を集められたものは「續猿蓑」であつた。「續猿蓑」が僞書であるといふ說は、既に越人の「不猫蛇」にも論ぜられて、後の七部註者には之を抹殺する者も多かつた。加賀の麥水は、「蕉門一夜口授」に、或人の問に答へて、

問曰、蕉門に七部の書と稱するは何人ぞ。悉ク見ざれば叶ハざるか。

答曰、さにあらず。七部と稱する事、翁の意に叶はじ。是は日頃の行狀にても知り給へ。……七部の書とはあとより人々の寄せたるものなり。されば今世に聞く所の如くんば、

實なし栗。冬の日。春の日。曠野。猿みの。ひさご。すみ炭。

此ノ如なれども、東花坊の門には其角の高情を忌むゆゑに、實なし栗をはぶきて續猿蓑を加ふ。或は又東花坊の續猿蓑をきらうて、代るに深川集を以てするものあり。所々の物好に依るべけれども、七部と定めたる事なしと思はゞ、強て何をも論ずべからず。只冬の日・あら野・猿蓑は眞に翁の親筆殘れりとおぼゆ、みなし

粟は奇書なり。人をして活達ならしむ。巻中に氣凱高致の吟多し。

と論じてゐるが、「虚粟」を加へる事はどうかと思ふ。「虚粟」を加へれば、「次韻」も加へなければなるまい。麥水の説は、全く自家の趣味に立脚した論と見るべきである。加興は「俳諧本來道」の蕉翁七部書の辯に、

蕉門七部書は、所謂冬の日・春の日・曠野・瓢・猿蓑・深川・炭俵、是をさしていふ也。都て是蕉門古老の名づけ、そうくはんせる事也とか。續猿蓑・笈日記の類多くあるべけれど、いづれも翁歿後に撰たるにて、精選と定めがたし。云々

とある。之では「深川集」を入れてゐる。何丸は「大鏡」に、「續猿蓑」を除いて、「初懐紙」を入れてゐる。之は「芭蕉翁俳諧口決」(北枝傳)

我門の風流を學ぶ人は、鶴の歩み・冬の日・春の日・曠野・瓢・猿蓑・炭俵等を熟覽すべし。云々

との説に從つたのである。成美は「大鏡」の序に、「初懐紙の附句を加ふ。是又家説ある事也。云々」と冷やかに片付けてゐるが、大江丸は「初懐紙後補の義御尤の事に候。云々」と如才なく挨拶してゐる。何丸が「續猿蓑」を除いたのは、芭蕉歿後の撰集であり、疑はしいと思つたからでもあらうが、「春の日」を入れて置きながら、同年の「初懐紙」をも入れる事はどうであらうか。殊に「初懐紙」は「冬の日」に近いものであるから、前に「冬の日」が入つて居れば、又「初懐紙」を入れる必要もない。又「大鏡」の附言によると、

一書に云やうは、正風七部と稱しけるものありけるが、春の日・續猿蓑を除き、雪丸げ・鶴の歩みを加へ、

又は深川・卯辰の兩集などのさしぬき、家々の物數寄にして、共趣なきにしもあらず。云々とあつて、卽ち異本七部には、雪丸げや鶴の步みを加へ、又は深川集・卯辰集をさしぬきしたものもあつたと見える。なほ曰人の「礫噂」の說によると、曉臺は「熱田三歌仙」を加へ、又は「深川集」を加へて七部と名けてゐる者もあるとある。要するに各宗匠の見地と趣味によつて、種々なる內容を持つ事になつた。併し七部集編輯の目的は、芭蕉の變風を手近に知らせようとしたのだらうから、どこまでも變風の推移を代表さすべき撰集を內容としなければなるまいと考へる。私は一家の趣味の上から、勝手に撰集をぬきさしする事には反對である。芭蕉の變風を代表させるといふ事が、七部集編輯の大目的でなければならない。變風の代表にもならない集を、いくら入れたつてつまらぬ事でもあるし、最初の目的に反する事である。此意味に於て、私は「卯辰集」を入れたり、「初懷紙」を入れたり、「深川集」・「雪丸げ」・「虛栗」をぬきさしする事には贊成が出來ない。「卯辰集」は北越俳人の俳風を示すもので、芭蕉の變風には何等の關係もない。「深川集」を入れるのも不必要である。「猿蓑」と「炭俵」の間を代表させるものは無くてもよい。殊に「深川集」の連句は、一二卷見られるだけであつて、他は平凡である。調も亦花やかであり、曲節があつて、尾張の若い連中の好きさうな集である。「雪丸げ」を入れるに至つては、物數寄も程があつたものである。同集は芭蕉の奧羽旅行の吟が重で、その點に就ては非常に參考となり、有益な集であるけれど、變風代表には役に立たぬ集で、附句の如きも、各地に於て附合つてゐるためか、統一がなく、雜然として、時に出來不出來種々混淆してゐる。

五、七部集の版本に就いて

七部集の版本研究は、今日の場合、容易な仕事ではない。第一、研究の材料たる七部集の古版本が散逸しては、原版か再版かを考へる餘地がなくなる。從つて校本研究も起り得ない。こゝではしばらく古人の研究の跡をたづねることにする。

七部集の版本に就いては、古人も餘り研究して居なかつた。わづかに曲齋の「婆心錄」、西馬の「標註七部集」が、此の點にふれてゐる。曲齋の研究は、前人未發の所まで、深く立入つては居るが、かなり獨斷的の所もあつた。西馬のは獨斷は少いが、註が簡單である。研究は曲齋を第一に推さなければなるまい。

曲齋は「婆心錄」の序論に、「再板の考正」と題して、原板として當時行はれて居る七部集を否定して言ふやう、冬の日・春の日・曠野・瓢の四集は、享保元文の間再刻の時、原書各筆意を異にするので、筆工四人に寫させ、大に寫誤があつた。恐らく原板磨滅して分らなくなつたのを、未練の俳人が校合したからであらう。其時に再刻の書入れをしなかつたから、百年以來再板である事を世間では知らなかつた。自分は七部に註せうと思つて、色々考へて見たが、句意不明の句、前後の付肌に怪しい句が所々あつた。そこで疑り出して、再板ではないかと思つて、七部の字形を調べて見た所、冬・春・曠・瓢の四集は時代が若いし、猿・炭・續の三は夫々禿げてゐた。續猿蓑より十餘年も前に出た冬の日・春の日の板が新しい道理はない。四集の卦引の狹いのは、後世の書林の仕業である。端卦(ハナゲ)にはる・ヒサ・あ上・あ下・あ員、などと書いたのは再刻の印だ。又板木を調べて見ると、前四集

と後三集とは、刀の用方が違ふ。貞享・元祿の彫方と、享保・元文の彫方とは、刀法が違ふ。是も再刻の印である。夫から京阪の店々を尋ねて見たが、只再板の蟲ばんだのばかりで、眞の原本は舊い俳家にもない。蓼太・闌更の時すら、再板を原本と思つて、怪しいまゝに註した位だから、原本は既に紙屑も同樣になつて了つたのだらう。さて註成て後、今年の夏、懷玉堂の藏を探す次手、長サ二尺五寸、幅四寸七分の外題板及帙板を得た。貞享から元祿十一年迄、七度に彫つたものだから、外題はそれ〴〵板端にあるだらう。殊に七部に集めたのは、翁歿後の事だから、かく一枚板の外題がある筈がない。是四集再版の時集めたものである。此中、猿・炭・續は原板の外題を張つて、彫つたものと見え、筆意三別である。冬・曠・瓢は別筆工と見えて書體はよい。此中に春の日の外題のないのは、再刻の砌、春の日だけを栽文堂へ分與したからである。此故に春の日の終、貞享三丙寅年仲秋下浣とある傍に、

京都堀川錦小路上ル町
西村市郎右衛門梓

と入れたのである。昔筒井で彫つた物に、西村の名があるのは、貞享とあつても再板の證である。其後天明の末西村沒落して、安永の小本と共に、春の日を浪花へ與へし時、浪花にて其所書・家號を削つてしまつた。故に古本に西村の名ある物となき物とある。其時野田も七部半分、大阪奈良長へ分けたのを、寛政の頃京浦井所望により、春の日偕に再京へとり寄せて、後は七部を揃へて賣る積で、七寸に五寸三分の板に、外題をつめ彫し、十二卷を七卷に合せ、帙も額緣にかへ、奥書に三名を入れて再刻としたが、寛政に再刻したものは、外題・帙・奥の

三丁のみである。又春の日に「阪板」がある。殊に誤が多い。又安永の「小本」に寫し違つた。其上小本には僞板も三種ある云々と論じてゐる。

曲齋の論は、かくの如く微細の點まで注意し、考證してゐる。氏は七部集の再刻を、先づ享保・元文の間と推定し、冬・春・曠・瓢の四集は、共際新に板を起したものと斷じ、七部の字形・板木・刀法・外題板・帙板、春の日の奥書などから之を立證し、次に寛政の再刻本は、内容は從前の通りで、唯だ外題・帙・奥・三丁のみ新しく刻されたものに過ぎぬと喝破してゐる。氏の論に從ふと、七部集の刊本には、享保・元文間の再刻本、春の日の阪本（安永年間浪花の書肆の開板したものか）、小本七部集（安永三年刊、僞板三種もある）となるわけである。

次に七部集の版本に就いて、私の知れるものを示すと、

俳諧七部集　（普通原版と稱せらるもの）　半紙本　十二冊

曲齋の說によると、帙（一）外題及び題簽（二）に、左の如くある。世人は本書を原本と誤つて、珍藏してゐるが、再版である。此の内に、「春の日」のないのは、再刻の砌裁文堂（西村）へ分與したからであると。

（一）

葉を摸す次手長二尺五寸巾四寸
跋板及帙板木とゆうり此外数と
いと人皆承
は彩しうり
りえ禄十一
改ま彫しお

芭蕉翁
俳諧七部集
平安書肆　諧仙堂　懐玉堂　發行

（二）

ふゆの日　照所	すみだはら　建	すみだはら　頌		猿蓑　乾	はることれ　坤		阿羅野　上	阿羅野　下	あられ　員外	續猿蓑　上	續猿蓑　下		ふゆの日	数々あるすれども タルハ一部二冊ヲ スルなく

それは外数は其々の板揃へ
あるへし猶ま七ア集に施
没後のそれそれ一枚板の外
数あらし指す是に集再板
の時集るおく此中猿炭俵
いえ板の外数を法て彫しと
又え手恵ニ至く冬曠野の
三は外手ユと又えて出作に
さて此中ま去日の外数ふ
きに再刻の御去日ばけと
載文者之分手し於く此所ま
去日ノ跋貞享二丙刀年
仲秋下浣トアル備ま
京都堀川錦小路上ル町
西村市郎右衛門梓
と入くり首尾井そ彫しお
ま西村の名まりへ貞享ト移し

俳諧七部集（寛政七年再刻本）　半紙本　七册

曲齋の説によると、帙外題（俳諧七部集の字體隷書）及び題書に、

とある。本書は、外題・帙・奥ノ三丁が新しくなつただけで、内容は從來の七部集（再版）をそのまゝ持つて來たのであると。

俳諧七部集　二册　小本

水母散人（塙保己一）の序、大鵬館主人（蜀山人）の跋がある。安永三年甲午冬十一月開版。奥書に、東都書肆、山崎金兵衛・富田新兵衛、皇都書肆、西村市郎右衛門・野田治兵衛・井筒屋庄兵衛とある。

「大鏡」の蜀山人の序に、

いにし安永のはじめ、市ケ谷の書肆會尙堂來りて、俳諧七部集を一冊に書きくれよと云ふまゝに、冬の日の短句、春の日の長句を、炭俵の口とく〳〵、瓢の蔓の長〳〵と書て送りぬ。云々

とある。之によると、蜀山人の書寫した一本もあるやうだが、本書がそれかどうかは分らない。本書には幾種か別本があるやうで、私は二種の別本を見た。版元も開版の年月も同一であつて、內容を調べると、字體は違ふし、互に別個の誤がある。とにかく小本七部集は、誤字脫字多く、殆んど硏究には間に合はない。試に一本の內容と、校本・半紙本等とを比べて見ると、

［春の日］

文　王　の　林　に　今　日　も　土。へ。り。て。

諸本、土つりてとある。

朝　朗　豆　腐　を　鴬　に　と　ら　れ　け。り。

半・校、とられけるとある。

朝熊迯り出るほく〳〵

半・校、朝熊下りる出家ぼく〳〵とある。

あらましの雑魚寝筑摩も見へ過ぬ

半・校、見て過ぬとある。再考するに書體のあしきためか。

つう〳〵一期聟の名もなし

半・校、つら〳〵一期……とある。之も書體の悪いためか。

巻末、「貞享三丙刁年仲秋下浣」の十字を脱する。

瓢

澤山に兀め〳〵と吃られて

半・校、叱られてとある。併し西馬の說では原本に吃られてとあると。

猿蓑

晋其角序の下、「元祿辛未歳五月下浣雲竹書」の十二字を脱する。

續猿蓑

橙や日のくかれたる夏木立

半・校、日のこかれたる……とある。之も字體あしきためか。

姫ふりや袖に入れても重からず

半・校、姫瓜やとある。

冬の日

鶯起は紙燭とほして

半・校、鶯起よ……とある。

卷末、貞享甲子歳の五字を脱する。

阿羅野

阿羅野目錄を脱してゐる。卷數もない。

柳のうらのかまきりの聲

半・校、かまきりの卵とある。

炭俵

どの家を東の方に窓をあけ

半・校、どの家も……とある。

金佛の細きさとくをさするらん

意分らず。半・校、金佛の細き御足を……とある。

鯲汁若イ者よりよくばりて

半・校、よくなりてとある。

雨乞の雨着こはがる借着哉

半・校、雨氣こはがる……とある。

辛崎へ芒のこもる秋の暮

半・校、雀のこもる……とある。

しやうしんたれはあはぬ算用

半・校、しやうしんこれは……とある。

ちらはらと米の相場の行戻り

半・校、ちらほら……とある。

卷末、「元祿七歳次甲戌六月廿八日」の十二字を脫する。

なほ此一本と、他の小本とを比べて見ると、他の小本には、「文王の林に今日も土ほりて」と別の誤をしてゐるかと思ふと、「どの家も東の方に窓をあけ」「金佛の細き御足をさするらん」と正しく書いてある所もある。故に小本には、誤の多い本と、少い本とあるやうである。

七部集の反刻本は、外にまだ五種位あるやうであるが、それは校本研究の條下に廻す事にした。

六、七部集の校本に就いて

七部集の校本出版は天保以降に於て起つた。曲齋の「婆心錄」、西馬の「標註七部集」等は註本ではあるけれど、本文の校合には骨を折つた。先づ曲齋の研究から始める。

曲齋は校正の用意に就いて、「婆心錄」の序論、句作の内三條の下に、

本書に假名違・正字違・筆工の謬り等ある者は皆引直したり、又辭違と覺ゆる句あり。そを辭の意もて註する時は、付肌聞えぬ句となれば、作者の意を汲んで、前後へ叶ふ辭に直し、傍に□ □ □を入れて、其宜なる辭を書入れ、○の下にけりはたりト改めたし、らむハ也トシテ前後よし、しハ過去なればるト現在に作りたしなどと書きたり。云々

又考正の條下に、

爰において、其寫誤ならむと覺ゆる句々は、句法の道理をもて、悉考正し、本文を書改めて、卦の上に△を印し、註外に○［再板］何ヲ何ト誤たり。何々トアルハ、原書何々磨滅せしを見過ちけむ、と疑ひ置きたり。若後世其原本出けむ時、予が考と校へ見なば、奇しき迄にあやしからむと覺ゆ。云々

と意氣込んでゐる。氏の校正はかうである。

［冬の日］

髮はやす間を思ふ身の程

○［再板］しのぶ身の程トアルハ、原書忍ぶノ字缺て、忍ぶノ如く成しを見過ちけむ。此句身の程ト云詞を入る時は、「髪生す身の程思やりトいはでは叶ず。しかしては、後句へ付かざれば、下七字を思やりツ、と作て、前後よし。云々

○［再板］松の吹おれてト誤たり。吹は風の自己、をれは松の自然なれば、松のト云トキハ吹をられトいはでは調はず。云々

盗人の記念の松は吹をりて

哀さの詩にも作し時鳥

○［再板］謎にもとけしトアルハ、原書詩ノ字作ノ字磨滅シ、詩トモ迷トモ分らざるを、打越に李白あれば、詩にはあらず、謎ならむとさかしらに思定、云々

箕に鯮の魚をいたゝき

○［再板］悠と誤たり。

綾一重するゐ湯に志賀の花こして

○［再板］居湯（ヲリユ）と假名付たるは非也。

篠深く梢は柹の塔さひし

○［再板］柹の蔕トアルハ、原本にへたト假名に書きしを、眞名に直損じけむ。ソハ京師の俗、柹の落花ヲ柹の

塔ト云故に、蔕を正字ト思誤けむ。云々

しらかみいさむ越の獨活刈

○［小本］白雲ト誤たり。

包かねて月取落すしぐれかな

○［再板］シクレに霽ノ字を塡違たるを訓誤て、［諸書］アラレとしたり。

嬉しけに囀る雲雀ちり〲と

○［小本］ちよ〲ト誤たり。

花のあと櫻の徽を捨にける

○［再板］はなに泣櫻の徽とトアルハ、原書のハのト缺しを、ぷト思、ぷはぷト見ゆるを、泣ト見、をハとト成しをとト誤けむ。全體花に泣ト云テハ、一句も前後も聞へざるを、［諸註］再板の誤としらで、大に苦勞しけり。

云々

［春の日］

須磨寺に汗の帷子脱かへて

○［再板］てヲむト誤しは、此所て留越なれば、てにはあらじ、むノ缺しならむと、さかしらに直しけむ。前後の付現在なれば、かへむトハいはれず。云々

朝朗豆麩を鳶にとられける

○坂板けりト誤たり。

朝熊をおるゝ出家ぼく〳〵

○再板をヲ脱し、坂板朝熊おくりト誤たり。

一夜かる宿は馬かふ寺なれや

○坂板かすト誤たり。

解てやおかむ枝結ふ松

○坂板おりむト誤たり。

むさほりに絹着てありくよの中に

○再板世の中はト誤たり。はニテハ前後聞えず。

凩のなき秋の日舟に網入む

○再板入よト誤たり。よニテハ前後聞えず。

あらましのさこね筑摩も見て過ぬ

○阪板見へト誤たり。云々

曠野員外

幾つともなくてめつたに藏造

○［小本］いつくともト誤たり。

八重山吹はそだちなるべし

○［再板］そたちヲはたちと誤たり。

引捨し車は枇杷の片方にて

○［再板］琵琶のかたきト誤たるは、原書ひはのかたぢトアルヲ見過けむ。ぢとぎ紛安し。

山の端に松と樅（モミ）との幽なる

○［再板］椴ヲ樅ト誤たり。椴ハムクゲ、椴は械也。

深川の夜

雁か音も静にきけは聒（カマビ）すや

○［再板］からひすやト誤たり。

人去ていまた御（オ）座（マシ）の匂ける

○［小本］御座ヲ御坐ト誤たり。

のまで忘し茶は水になる

○［再板］飲てわするゝト誤たり。

誰か來て袑に掛たる夏衣

○再板 誰ヲ唯ト誤たり。

俵に鄕をつかみこむ秋

○再板 鄕ト誤たり。鄕ハ小具。鄕ハ雄蟹也。云々

瓢

月またで假の內裡の司召

○再板 月待てト誤たるは、原書待タでトアル片假名ト浊缺しを見過けむ。

花は赤いよ月は朧よ

○再板 朧夜ト誤たり。夜にては一句も立ず。前後の付肌も聞えず。

馴加減又とは出來じ醬みそ

○再板 出來シひしほトあるは、じノ字落しを、埋木入シ物也。

古き博奕の殘る鎌倉

○小本 のたるト誤たるは、再板 こヲるノごとく書たる、筆くせの見過也。云々

猿みの

待チ人いりし小御門の鎰

殊に人皆まつ人いれしト訓違たり。云々

炭俵

只ゐるまゝに肱（カヒナ）わつらふ

○小本　肱（ヒヂ）をト誤たり。

廣袖を上に引はる船の者

○小本　者ヲ宿ト誤たり。

正じんこれはあはぬ商

○原本、しやうしんこれはトアルハ、素龍が筆くせなるを、小本　たれト寫誤ける故に、諸註　皆惑へり。

川から直に小あゆわらする

○諸書　ワヲ又いト誤たり。

酒を止れは祖母の氣にいる

○原書　とまれはトアルハ、止（ヤム）れはヲ假名に寫誤けむ。云々

續猿蓑

町（チャウ）限に月見の頭の集錢

○諸書　びヲぴト誤たり。

賣物のしふ紙包おろし置

○[諸書]漬物と誤たり。原書ニ麦トアルハ筆くせ也。淺ノミヅ缺けるにはあらず。

砂をはふ蕀の中の絡線の聲

○[原書]蕀と誤。[ハセヲ談]蟾ト誤たり。

氣さんしな青はの比の樅鶏冠木

○[原書]栂楓ハ字違也。

尾張てつけし元の名になる

○[原書]つきしトアルハ書損也。八九間の巻にも書つきト直しあり。云々

以上は曲齋の校正の大略である。氏は句意の不完全、語法の不整といふ點から、大膽に原作を改竄してゐる。氏の說に從へば、冬・春・ア・ヒの四集は享保・元文間の再刻で、寫誤が多いといふのであるから、校正も此四集にやかましく、他三集は割合に少いのである。中には卓見もあるけれど、又肯背の出來ない點もある。一體校正といふ事は、假名遣を正したり、誤字を直したり、脫字を入れたりする程度でありたいと考へる。句意が不完全であるとか、語法が整はぬと云つて、勝手に原作を改めてしまつては、校正でなく、改作である。若し硏究の結果、筆者の寫誤と思はれる點があつたなら、原作はそのまゝにして、頭註を加へるとか、傍註を施すとかして、自己の修正を示したらよからう。曲齋のやうに自說を固持して、罪を筆者に塗り付けてしまふ事は、時に獨

斷の弊に陥りはしまいかと考へる。且つ又曲齋の云、冬・春・ア・ヒ四集は享保・元文の間の再刻であつて、原版は磨滅したらうといふ說は、果して信ぜられる說や否や、なほ研究の餘地があらう。「盗人の記念の松の吹折れて」を、語法が調はぬと云つて、松は吹折りてに直したり、「篠深く梢は柹の蔕淋し」を、意が通ぜぬと云つて、柹の塔淋しに改めて了ふやうな例は、穿鑿過ぎた校正で、却て獨斷に陥つて了ふ。かゝる例は、なほ他の句に就いても考慮すべきである。

西馬の「標註七部集」の校訂は、七部集の善本を本とし、別本異本に渉つて校合したものだらうで、曲齋のやうな卓見はないけれど、一方に又獨斷の弊もなく、割合に信ぜられるものである。西馬は七部集の原本を得たやうであるが、其原本に對する考證がないから、曲齋の所謂再刻本と、どれほど違ふか分らないのは遺憾である。西馬の校正によると、

冬の日

しらかみ勇む越の獨活刈

一本に、白雲に誤る。

春の日

文王の林に今日も土つりて

異本、土つりてを、土ほりてに誤る。

傾城乳をかくす有晨

古本、晨明は誤字、有晨か。

朝熊下る出家ぼく〱

此句誤寫甚し。

旅衣あたまばかりを蚊屋かりて

一本、蚊やりしてに誤る。

あらまして雑魚寢筑摩も見て過ぬ

異本・一本、ともに見へ過ぬと作る。非也。

具足着て顔のみ多し月見船

異本に、具足着たとあり。誤寫也。

曠野

初春のめてたき名也堅魚〱

古本、賢は書損か。

不圖飛て後に居直る蛙哉

古本、不闇とひてに作。書損也。

連立や從弟はおうし花の時

一本に、おそしに作る。原本におうし也。おほしの假名の誤か。

あたらしき釣瓶にかゝる葱哉

古本の葱は書損ならん。

海苔とりし跡には土も無りけり

古本、苔とりしは海苔也。今改。

芳野出て布子賣惜し更衣

一本に賣たしに作るは非也。

或人四時の景物なりとて、水鶏と鶉とを不食……

古本、鵁は鶉の書損か。

美しき鰍浮きけり春の水

原本、鰌は鰍か。鰍は和字なり。

誰か來て裙にかけたる夏衣

原本、唯は書損。

酒熱き耳につきたる私語

原本、熟は誤字。

あらこと〴〵し長櫃の萩

原本、とゞ〳〵しは書損。

瓢

女郎花心細げにおそはれて

原本、おけはれてと見れども、おそはれの書損か。異本に、又おもはれてに作る。魘（ヲソハレ）にや。

呑に行く居酒の荒の一諜（サヘギ）

一本に、驟は書損か。

傳馬を呼びに我まはり口

一本に、轉に作る。書損か。

澤山に兀め〳〵と叱られて

原本、吃は書損。

猿蓑

草刈よそれが思ひか萩の露

思ひかを重いかに誤る本あり。

陽炎や柴胡の原のうす曇り

原本、柴胡の糸に作る。……按ずるに原本の書損にや。

泥龜や苗代水の畦つたひ

畦うつりを去來書損の由。彼抄に見たり。

何故そ粥すゝにも涙くみ

一本、何故そをにに誤る。

炭俵

吹るゝ胼もつらき闇の夜

一本、闇を闕に誤る。

里はなれ順禮引のぶらつきて

一本、ふらつきてをほらつきてに誤る。

辛崎へ芒のこもる秋の暮

小本、雀を芒に誤る。

絈買の七ッ下りを音づれて

原板、ばかりに彫損す。七ッ下り也。

有ふりしたる國方の容

奉公ふりに有ふり、書損にや。

町切に月見の頭の集め錢

原板、頭とあり。一本頭とあり。

賣物の澁紙つゝみおろし置

一本、漬に作る。原板、古集辯ともに賣に作る。

東風の又西になり北になり

一本、こち〱に誤る。

苗札や笠縫置の宵月夜

置は、かの書損にて、丘か。

五月雨

白鷺や靑くもあらず……

原板、雨の字脫す。今補之。

元祿辛酉三初冬

原本辛酉は誤也。元祿四年辛未、同六年癸酉也。句選年考、元祿六年と云へり。

西馬の校本は其他詩題の校正（曠野）・人名・序詞に涉つて居る。又同意異形の句を示して、七部集の句と對照させてゐる。西馬は定本を作る考であつた。曲齋・西馬の校正は猿・炭・續に於ては大體一致してゐる。

異本七部集　二卷　豆本

天保十一年刊、精衞道人の編である。未見。松宇の解題を引用する。

此書上下二卷にて、予が所藏本に題簽なし。假に異本七部集と稱す。其編中の杜撰は、彼の子周が七部集形本にも劣らざる程の、夥多なるものである。然るに其緒言に曰く、「凡そ俳書の世に行はるゝや、牛車にも餘りぬべし。是聖代の惠み、仰ぎても猶尙としとせん。然れ共校正杜撰粗漏にして、やゝもすれば誤謬多く、句意を誤るもの少なからず。故人丹精寢食を忘れ、或は神佛に祈誓して、適々一句の名吟を吐く、後人これを誤り傳へば、靈魂の遺憾甚しかるべし。爰に蕉門の骨髓を得たりといふ或家の秘藏せる古寫本を得て、詳に訂正し、懷玉の一本となす。庶幾は大方の俳士、その老婆心を賞し給はんことを願ふになん」とある。試に曠野集卷の六の誤りを檢し見るに、三十六ケ所の多きに至つた。……只此書の他本に類例なき所は、春の日に卯辰集所載の句九句、瓢に同じく乙州・北枝・牧童・の柿喰三吟一卷、續猿蓑に同三十句と、又「千鳥掛」所載の句十八句、炭俵に卯辰集所載の句十二句、同「小文庫」所載の句十八句、曠野に「有磯海」所載の句四句、同「韻塞」所載の「今日ばかり人も年寄れ」の歌仙一卷が入集されてある。其代りに猿蓑の丈草の漢

文の跋が脱落してゐる。故に之を予は異本七部集と名號けたのである。

とある。

校正七部集　一册　三ツ切本

弘化二年刊。花鳥庵雑齋の校である。未見。之も松宇の解題によると、「曠野の時鳥二十句は矢張十九句なり、炭俵の振賣の巻の番匠が挽きかねし小節は縦なり。云々」とある。杜撰なものらしい。

校正七部集　二册　横本

嘉永四年刊。八雲龍守・一葉舍仙㠀の校訂である。凡例に云、

今流布の印本、何れも粗漏にして書寫の誤多く、之がために句意聞えざれば、惑を抱く者少からず。今度元祿の古板は云も更也。眞蹟及諸集を參考し、諸家の高說によりて悉く誤を正す。故に校正七部集といふ。……詩題の類は元祿の古板といへども、誤字脱字あれば本書に就て正す。云々

とあるが、内容はどうかと思はれる點も少くない。例へば續猿蓑の、

町 限 り に 月 見 の 頭 の 集 め 錢

此頭を頃としてゐる。曲齋・西馬同じく頃である。龍守のいふ元祿の古板と、曲齋・西馬等の原板とは違つたものか。

賣 物 に 澁 紙 つ ゝ み お ろ し 置 く

この賣物も龍守の校本は漬物となつてゐる。曲齋・西馬は原板賣とあると云うて居る。

　正改新刻七部集　一册　三ッ切本

文久三年刊。宇竹庵五律の編である。未見。之も松宇の解題によると、「七部集の連句のみを輯め、所々に地名故事等の短注を加へ、連句作法の必携用として、一寸便利なもの、云々」とある。正改とあるから校正本であらう。其他慶應頃の校本もある。序を讀むと、餘程詳しく、校合も完全にしたとあるが、詳しく見ないからよく分らない。

七、七部集の註本に就いて

何丸の「大鏡」の鵬齋の序に、後人爲之注釋者凡四十七家……、保己一の序にも、「世に七部集とてもはら翫べるさうし、此道のかゞみとかや。それを說し者四十餘篇あなれど、……云々」とある。何丸は其凡例に、

> 古註と記すは祖翁直弟の論也。其數凡十五篇。一書にもと記すは、寶暦年中より文政の今日に至るまでの注書也。其數大凡三十五篇云々

とある。併し之に就いて私は多少疑問を抱いてゐる。それは七部集全卷の註書が五十篇もあるといふ事か。其中に七部集の發句附句の註解が入つて居るといふ書物も數へて居る事か。その點が明かでない。若し先註五十篇が、前者のやうな意味のものであるとしたら、其中には寫本としてわづかに傳つてゐる家々の註書類も入つてゐるのではなからうかと考へる。

次に私の見聞した註書に就いて簡單な解說を施して見る。

一、年代の明かなもの

俳諧七部捜　　二册　　上下

蓼太が師の吏登から、日頃七部集の附句の難解のもの、又は法則等に就いて質問した筆記である。蓼太の序に、ことし辛巳水無月二十五日は、春秋七歳の昔を忍ぶ。たまたま居士の心まめなる折をうかゞひ、案下に聞出したるものあり。其言葉平らかにまゝながら、いますが如きを、今更の形見として、遺詠五章に歌仙を作り、門人の手向草とす。云々

とある。上卷は七部集の講述、下卷は歌仙發句を收める。寶曆十一年六月、吏登七回忌の刊である。雀志の記によると、原版は寶曆十一年であるけれど、安永元年目黑の行人坂から出た火事で、版木も都下散在の書も灰燼に歸したので、安永四年再刻したのであると。講述は寛保二年正月十五日からはじまる。

猿蓑爪じるし　　一册　　半紙本

杜勤著。天明七年刊。內容は發句十三の解・幻住庵・几右日記の短評・七部集論・連句の解等。七部集論は、大方先哲の說を承けてゐるが、中に

後猿はめでたき集に侍れども、正しき蕉翁の撰とも見えず。うたがはしく、うけられぬところも多し。…

…彼集にはねはん會・灌佛の違ひ・趙南・長男の誤り爭あまた侍り。近き頃この津に來れる關吏なる人も、

後猿蓑は七部の外の集に侍りといへるよし、又人のかたりし。かゝれば今やつがれがいふ所もその理なきに
あらざるか。云々

とある。

三鷺（駱トモ）七部抄　一册　半紙本

序に月巣・完來、跋に蓼太・沙羅佛の文がある。註者の自序もある。凡例七ヶ條の内、蓼太の七部集鑑賞論が出てゐる。之によると、附句は實で、發句は花である。七部集の善惡は、附句を以て論ずべきである。又俳諧は寓言の虚を旨としてゐるから、古事・古歌によつて句を解しないがよい。李白・蘆同が名を假りたる句は、常の詩人・茶湯者などの風流人と見るがいゝなどとある。其他註者の見解として、句は修辭語法の整はぬのもあるから、故人よしとばかり思つて讀んではならぬとか、發句附句の妙は言外に在るから、直感に待つべしとか、或は口傳や先輩の說で古事を說いたのは淺學を導くためで、寓言の故を以て深くとがむるなどと、註解に對する用意の程を示して居る。

本書は振々亭三鷺が日頃の研究を發表したもので、所々蓼太の高說を仰いで居る。寫本で傳はつたものらしい。私の見た書は、錦江の寫本であつた。卷末に錦江附記して云、

右七部集解二册は、美濃紙の大本にて、花色の表紙を付けたり。序は完來〇〇〇（三字不明）皆自筆なるべし。蓼太の跋も自筆なりや。印章疑しき處あれば、又完來の代筆なりや。筆鋒完來に相似たり。其外自序凡例は撰者三鷺の

筆也。此書七部を十三行に寫し、頭書に註解を記せり。皆三鷺の自筆なるべきなり。三鷺は秦氏にして、市ケ谷月桂寺前に住し、文政の頃までは存生せり。此書秦氏家秘なるべきに、三鷺沒後に入貝某の所藏となりしにや。門弟文貫堂山口乞て持來り、余に見するに、嘗て撰する所の七部通旨と其意同じく、又少しく異なる事あれば、粗寫して校本に傳ふるものなり。實に吏登・蓼太の說多ければ、元祿の世にも近く、其正を得るものまゝ多し。三鷺勉めたりと云ふべし。嘉永三年庚戌所洗蓮池主人識

とある。

俳諧七部解　一册　小本

曲齋の「婆心錄」に、「冬之日解」と題した闌更の註書である。車蓋の序は注意すべきである。「冬の日」だけであとは續かなかつたものらしい。寛政六年刊。北枝・支考・乙由・去來・希因等の說によつて註する。

俳諧古集之辯　三册　半紙本

荷笠・桃濱序。華仙跋。杜哉著。「猿蓑」・「續猿蓑」・「炭俵」中の連句の附方を註したもの。註は簡單で、餘り參考にならない。卷頭に「辨古集大綱」といふ論が出てゐる。寛政五年刊であらう。

七部木槌　一册　小本

冬の日の註解である。解は句に依りて繁簡一樣でない。註者は虬戸庵素綾である。自序。寛政七年刊。

冬の日註解　二册　半紙本

升六の註である。寛政八辰七月官許、文化六巳正月發兌とある。冬の日の俳諧を解した中では、親切に精しく出來てゐる。凡例に、「此書は余が門葉初心の輩に對して、其まどひをさとせるのみを專とすれば、一卷ごと文章にかゝはらず。云々」とある。曲齋の婆心錄に註解・解、此二書今板木全からずとある。

炭俵註　一册　小本（寫）

遠藤曰人の自筆稿本である。本書は切々の紙片を丁寧に裏打したものだつた。曰人の筆跡殊に面白い。初に附句の心得を說て居る。註は朱で、句の肩に施してある。又句の下に用體と附方を記して居る。終に狹庵曰人口談、文化元年秋九月十二日夜とある。註は簡單で、さして價値あるものとも思はれない。

俳諧手爾波抄　六册　半紙本

富士谷成元の口述を、浦井有國の筆寫したもの。七部集中の語法を解く。文化四月刊、凡例に、連歌者流と俳諧者流の爭の愚なることを論じ、「あゆひ抄の部立・例立にしたがひて、七部集中の句をあてゝ其の辯を其のまゝしるしたる也……。俗語をむねとする俳諧者流、こゝに心を用ゐぬもことはりなれども、蕉翁をはじめ門弟子の、かばかり深くまなび知りたりしを見て、おの〳〵恥て奮激あらまほしき事なり。云々」とある。

續繪歌仙　一册　半紙本

蓼太門の宜麥の解である。本書は「十六夜集」の芭蕉・成秀・路通・丈草など十一人の歌仙一卷と、「炭俵」の芭蕉・野坡・孤屋・利牛の歌仙一卷と、「鄙懷紙」の芭蕉・濁子・凉葉の歌仙一卷と、宜麥同人の歌仙一卷との附

意を、繪で說明し、脇・居所・打脇・第三・一轉・人の變化・附迎・時節・起情と凡て一卷の變化附方を說明して居る。註書と云ふも從來のものと面目を改め、附意をくだくだしく解かずとも、一見繪で想像が付く樣に出來てゐる。

文化八年刊。

七部集大鏡　　七册　　小本

七部集の拔註だが、ひろく和漢の書、先人の說に涉り、二十年の星霜を經て大成した。文政六年刊か。註者は闌更門の月院社何丸である。何丸の藏板である。一卷は序、二卷は冬の日、三卷初懷紙、四卷春の日、五卷曠野、六卷瓠、七卷猿蓑といふ順である。序は鵬齋・成美・大江丸・完來・對山・五芳・士朗・蕉雨・大黑庵・月居・鶯笠・梅室・寥松・護物・北元・長齋・三津人・芝山・乙二・蜀山人・水母散人と大方當時の名流をつくし、版下が各自の肉筆であるから面白い。此中成美の序文獨り識見が高い。何丸は注解の用意を、凡例七條に示して居る。卽ち

（一）芭蕉直弟の論十五篇「古註」と名づけ、（二）寶暦から文政までの註書三十五篇を「一書」にて示し、（三）誰曰は其人に對談或文通にて得た說、（四）「一說」とは世上流布の說、（五）問註は先註を先にし、愚評と世評と同じきものは世評を示し、（六）近世の俳諧を手本にして、亂暴な論をなす者を難破したとある。引用書は佛・史・經・詩・俳等頗る多い。又芭蕉翁俳諧口決といふ文が出て居る。次に續猿蓑を除いた理由を示し、終りに題號釋論とて七部の題號は名・宗・用・教の五義に依りて名づけたものだといふ附會な論が出て居る。

本書は切字を論じ、附方を說き、附意を示し、先人・今人一切の說を網羅せんとして居るが、難じていふと、原句にさまで關係なき事まで引用し、くだ〳〵しく論じ、爲に句解の目的を逸して居る。丁寧反覆を極めて居る割に、要領を得ない書である。行過大人の「俳諧者流奇談夢之棧」に、何丸の大鏡の誤謬杜撰を罵り、「汝もと信州吉田の產の山がつにして、させる俳技もなく、東都へ出、森村次郎兵衞（抱儀）が宅に食客たりし時、彼が遊里耽に諷諫せし恩德を以て、渠を引込、七步大鑑を世に公す。云々」と云つてゐるがどうか。

續猿蓑註解　一册　小本

何丸の子公石の編である。何丸の殘した註解をそのまゝ記したとある。文政六年刊。

七部礫噂　一册　小本（寫）

臼人翁醉話抄ともある。遠藤臼人註。七部集中の難語・難句の解である。卷末に臼人居士七十六、天保四癸巳九月九日重陽前一日書之とある。註釋は卷の順序に從ひ、口傳秘の秘・大秘傳也といふ語が所々に見える。續猿蓑の支考の僞書でない事を辯じ、大に意氣まいて居る。所々繪などさしはさみ、說明を加へて居る。註は價値あるものではない。

七部集纂攷　一册　半紙本

成美の註である。天保六年稿か。七部集の連句・發句・序跋の註で、所々出典を記して居る。續猿蓑を除き深川集を入れて居る。

七部小鏡　一册　小本

何丸口授、公石記筆である。本書の解題は大鏡の附記に、「大鏡成つて後、諸家の談論、市中に得る所の註書の類に、巨多の說あり。是を七部小鏡と題し、別卷に著す。云々」とある。空然の逆志抄の難書である。弘化四年刊。

七部集連句早見　折本掛圖式

河田寄三輯。惺庵西馬校。冬の日・春の日・あら野・ひさご・猿蓑・炭俵（百韻除く）續猿蓑・深川集の連句を罫の中に入れ、表・裏・二の表・名殘の裏を示し、春は靑、夏は赤、秋は黃、冬は黑と色分にして示し、月花はその形を捺印し、初學の便を計つて居る。歌仙の法則を一見して會得させる上に、極めて便利なものである。嘉永元年刊。「俳諧文庫」の「附合作法全集」所收。

俳諧七部通旨　十四册　大本

註者は錦江馬場正統である。七部全部に涉りての註書である。卷之一、冬の日。卷之二、春の日。卷の三——卷六、曠野。卷七、ひさご。卷之八——卷之十、猿蓑。卷之十一——卷之十二、炭俵。卷十三——卷十四續猿蓑となつて居る。嘉永二年に撰して、四年に再校して居る。卷之一の初に、正統自身の漢文の序が出て、七部の各集を論じて居る。次に假名序出で、「冬の日」から「續猿蓑」までの、芭蕉の俳諧の變化を說き、七部集は蕉門の精撰であると論じて居る。凡例に、註解の基く所、用意を示して居る。之によると、本書は先に撰された「七部

集詳解」の抜書で、發句・附句解しがたきものを說き、他は略したと云ふ事。次は素隱士・馬光以來の口授を元とする事（是を師說と呼ぶ）。誰の說か知らねど、古くより說かれしもの（舊解舊說）を取つた事。其他は升六の註解・何丸の大鏡・七部集解（杉家の秘書）・七部解（振々亭）などからも取つた事。古書を引き、古事を示すも、深く調べた事でもないから、あやまりもあらうなどと言つて居る。其他所々文來庵社中覺書・說叢大全の說も引用して居る。各集の前に解題を附し、解は附意・附方に涉つて居る。錦江は瓢集を激賞して居る。瓢集は正風の規矩だと迄云つて居る。續猿蓑は嘉永四年火事に逢つて、草稿を燒失して了つたから、五年の春、わづかに殘れる書と記憶をたどつて書なしたとある。七部註書中の善本である。

七部婆心錄　六册　横本

註者は曲齋瓢子である。七部集の連句の註書である。四項に分れてゐる。

（一）自註の大概

〔イ〕案じ方の内五條

〔ロ〕趣向の内五條

〔ハ〕句作の内三條

（二）補註の了管

（三）再板の校正

（四）　古註の評論

（一）　自註の大概

曲齋は附句を解せんとする者の心理狀態を、見立・趣向・句作の三種に分けて居る。見立てとは、吾人が附句を解せんとする時、若くは附けようと思ふ時、思想の未だ定まらざる狀態を指したのである。趣向とは、見立の狀態から一歩進んで、初念の見立を、如何なる場・體・人・情と考へて、思想を構成する事である。次は見立と趣向とを合した場合で、古語俤を含み、其餘情を論じた。即ち句々の附け工合を考定する狀態をさしたのである。

此案法に輕・中・重がある。重を起情、中を會釋、輕を逃句に相當すると說き、それには自註に印を付けて、即ち■□は起情、重の印。■▢會釋、中の印。●○逃句、輕の印。■□起情の曲節。■▢會釋の曲節とし、黑は意の重く、白は輕きを意味させて居る。△は其拙さを論じ、□は作者の苦心を知らせて居る。

〔イ〕　案じ方の內五條

（一）前句の上中下に詞を添へて、意味の理解を呼出す方法を云ふのである。例へば、

マダ元氣ナト思ヒシヲ寢覺〳〵のさても七十、何カト問ヘバ湯殿參の木綿立ツ也。乘物カク人ヲ勞リテ、許す木爪の山あひ、人呼止テ我名を橋の上ニテ名に呼る月ノクレ。

花盛リノ間ハ都も、ドコモ相談が未定らず。

（二）に留、て留の句を考へるには、其にノ字、てノ字の終りに言葉を足して考へるがよい。たり・けりの場合

も同一だ。餘韻を見立てた所には、皆見立の傍に〇印を入れた。

（三）之は前句を疑うて、其疑問を解決するやうな、意味に案ずるのを云ふのだ。

（四）前句を想像的な事柄と考へる場合、例へば鼓手向ける辨慶の宮といふ付句の見立ての如く、後句に想像的な事を想起して付ける法を云ふのだ。

（五）扉付になる場合、前句を離さず、其詞を卽體ある物に見立てゝ付ける法を云ふのだ。

〔ロ〕趣向の内五條

（一）准付（ナゾラヘ）　准付とは人情の句へ、山川草木の景を想像して、付ける付方である。其次の句は、准物を實景の山川生植と考へて、付けるが定法である。

（二）逆付　古來後付と云うて居る。例へば、巾に木槿をはさむ琵琶打の附句に、牛の跡弔ふ草の夕暮にと付けたのは、草の夕暮に、巾に木槿をはさんで、琵琶打が居つたと、後句の思想が、前句の思想の主體となるやうな付方を云ふのである。逆付の次は順付が定法である。

（三）裡付　反語的付方を云ふのだ。例へば道の邊に立ちくらしたる禰宜が妻、樂する頃と思ふ年の頃であるのに、樂もせずして、道の邊に立暮して居ると云ふ付意となるから、卽ち前句を後句で説明するから、裡付である。

（四）夫に付ての用　曲齋の新用語である。此付方はよく分らぬ。用付といふと、普通は前句の意味の主なる觀念に對して、附屬的な事を附ける句を云ふのだが、之はさうでもないらしい。夫に付ての用とは、「見立の傍より、

見立に付て求る用也。」と說いて居るが、難解である。

（五）空撓（ソラダメ）　常の付方は、前句の見立を追うて趣向をとれども、こは〇大圏を入れたる趣向の半より、又一轉の趣向を求むる法であるから、付肌の懷弘く、餘情深き附方也である。卽ち普通の附方は、前句の主たる觀念或は觀念團體を豫想して、それに適合する觀念或は觀念團體を附けるのであるが、空撓になると、其連合關係が密接せず、遠くからひゞく感情の本につながつて居るといふ離れた付方を指したものゝやうである。曲齋は「去來抄」の文を引用して、

付物にて付け、又心付にて付けるは、其付けたる道筋しれたり。付句を離れ、情を引ず付けむには、前句の移・匂・響なくては、何れの處にてつかむ。心得べき事也……といふも、空撓の互照の事也。云々

とある。つまりうつり・ひゞき・にほひで附ける事をいふらしい。

〔八〕　句作の內三條

（一）句作の法　前句のA觀念と、後句のB觀念と連合して居れば、A觀念團體と、B觀念團體とも連合すると云ふのであらう。前句全體の思想、後句全體の附工合を、其材料たる觀念の連合關係で規定したものである。次に思想と思想との連合がないと、見立が分らなくなると云つて居る。

（二）不用の用　之は前句へは、五七字にて附意を利かせて居るが、あとの詞は、有つても無くてもよいものを、そのまゝにして置くのは、後句へ意味を殘すためであるといふ意らしい。

（三）執中法　之は前句の思想と、後句の思想とは、連合上バランスが取れて居らねばならぬといふのだ。次に氏は雅言は片假名で譯し、假名違・正字違・筆工の違は引直したと云つて居る。又語法から考へて、付意の分らぬのは、付意の分るやうにしたと云つて居る。□□□などを傍に入れてしるしとして居る。又付意の不明な句は、▲の印を付けて置いた。又起情に見立てながら、會釋に成つて居るのも稀にあるから、それは○で印とした。

（二）補註の了管

「七部集の註本」の條で説明したから略する。

（三）再板の校正

「七部集の校本」の條で説明したから略する。

（四）古註の評論

（一）二句一意　難じて云ふに、翁は歌仙は三十六歩だ。一歩も跡へ引てはならぬ。二句一意の句が、五三ケ所も出たら、三十變にも足らなくなつてしまう。翁の付味が、愚眼には二三句も一體に見えるのだらうかとある。

（二）與奪　之は與とは前句へ付ける心、奪とは後句へあます心である。後人が扉付をとがめられた時、之は與奪だ。前は輕く。後は重い。兩用にならぬと言譯して居る。例へば前句は一尺にて付け、後句は二尺にて附けても、句の意味が、一直線上になつて居てはいけぬと云ふのである。

(三) 三句の變　一巻の變化を三句行きては變じ、三句行きは一變化するものと思ふのは誤である。

(四) 故事面影　故事を其儘に付けるを故事と云ひ、平生の事に故事を含んで、平生體に附け、又は故事をあらはし、それを洒落にこなして附けるのを俤と云ふ。故事に便るは、趣向を求めるのと、句作を粧ふとのためであると論じて、古人の非を罵つて居る。

(五) 輪廻　爰は前句を其まゝ何と付けたとか、前句の場を動かさず付けたとか云ふ解釋である。付句は一句一句に其場・其體・其人・其用・其情・其趣意をかへて行くものだと云つて、今世の宗匠の輪廻の句を好むを難じて居る。

(六) 後句の惑　之からは先註に對する批難の造語の說明である。例へば三句並んだ時、二三の付肌を以て一、二ケ所註したる難である。

(七) 誣言　之は自分の僻見から、先註を言曲げた類を言つたのだ。見立・趣向・句作の三法で附句を調べれば、そんな事はないと論じてゐる。

(八) 並物　先註の中、「其場也。延句也。只うつし也。」などと書いた註を咎めた言である。

(九) 眞顔　之は曲節・作意のある句を、眞面目に取つて、誤解したのを咎めた語である。

(十) 摸象　盲人の象を探つて語る樣に、何の俤より思付く、何事を取合せた附けだとか、又は前句の表に現はれた詞と、打越しの付肌に咎められ、強ひて曲解した註などの評言である。

（十一）一斑　こは先註の中、管を以て豹の一斑を窺ふやうに、爰は前句の何と云ふ語に便つて付けた、爰は前句の何と何の對だ、爰は其人を何と定めた附けだなどと、前句中の五字か七字かを切取つて、それへ付合せたやうな註を咎めた詞だてである。

（十二）紛かし　之は付味を悟兼ねて、共通りだ、別の意なし、よき付、尊き句、かゝる勝れたる句を解するは却て第二義に落る也、風雅風情言語に絕せり、などと書いた註を咎めた詞である。

（十三）一句論　之は付味を打捨て、唯一句の上のみで註したのを咎めた詞である。

其他大鏡・古集辯の評註を攻擊してゐる。そして末段に、諸註の弊源は、俳諧第一に傳ふべき趣向・句作・見立の法を考へずして、一時流行の風調を旨とした所にあるのだらうと、「芭蕉談」・「湖東問答」に付いて古人を論じて居る。

以上の如く曲齋が、附句の案を見立・趣向・句作の三方面から、心理的に解剖した所は卓見であるし、それを細條に分ちて說いた所も精細である。當時科學的思想の發達しなかつた時代に、かく迄明細に研究して居るのは偉とすべきである。たゞ氏は我見に執し、先註を難じて居て、時には見るべき言もあるが、叉誣言として先註を難じた仲間に、自らも入るべき所もある。

猿蓑逆志抄　七册　小本

東杵庵樨柯の註である。猿蓑集の全註である。初に猿蓑の作者百十五人の略傳をあげ、本文・序・跋に至るまで、專ら自己の解により、丁寧に說いて居る。萬延元年刊

標註七部集　二冊　中本

西馬述。幹雄編、寄三校とある。幹雄の凡例によると、古歌・古詩・文字の解・古事の解・文法・附方・變化・撰者などに付いて、單簡な頭註を加へたものである。註本としてより、校本として傳ふべき書である。元治元年刊。

俳諧七部集打聴　三冊　半紙本

岡本保考の註解である。「況齋叢書」中に收められてある。各集の序詞によると、本書は友人青藍の「七部集註解」によりて解したが、自説も加へて居ると。慶應元年の秋から、同三年の五月にかけて成つたのである。解は附意を旨とし、諸註中割合に要領を得てゐる。

俳諧七部集初まなび　一冊　横本

藍亭青藍著、閑樹園菊雄校。題簽に「七部集冬の日註解」とある。内題に、卷之一、冬の日とあるから、七部集の註釋の一部であつたと見える。青藍には七部集詳解だの大全だのといふ註書もある。本書は古書を引き、附意を解し、簡明に出來てゐて、初學には分り易い。卷初に慶應元丑年七月廿五日脱稿とある。

七部集解　一冊　半紙本

筑波庵翠兄著。金牛舍鶯難の書寫したもので、表紙に、七部集　雪中庵蓼太考　翠兄聞誌　とある。「冬の日」・「炭俵」・「猿蓑」・「春の日」・「瓢」の拔註である。奥書に、

右は原本書誤多き寫本也。勘考して謬を訂正し、寫といへども、解しかぬる所は其儘にして寫す也。紙數五十五葉を、今縮めて如斯寫(二十六枚餘)。本月八日より十四日迄七日に書畢りぬ。雪中庵蓼太翁の傳、翠兄の著。三駱の說をも加へたり。升六・闌更等の說も載せたり。又樗山、鶯笠の聞書も載せたるを考ふれば、文化より文政の初の頃、著したるものか。翠兄は定めて江戶の人なるべけれど、地名、俗姓知れず。予頭書注捷を加置くもの也。

明治十四年八月　　金牛舍鶯難 古稀前年老人

とある。

俳諧猿蓑註解　一册　小本

桃支庵指直纂述、其角堂永機校正とある。猿蓑の連句の解である。明治二十年刊。指直の自序に、今爰に註解せしものは、古書のよきは用ひ、あしきは正し、故事の類ひも、其附意に疑はしきはこれをとらず。專ら附意の解亮を主とし、打越より四五句の運び、且一面の見渡しのもやうを簡短にしるせり。又附方の必用となるべき法をいさゝか取集め、卷尾にかゝげて、初學の人の楷機となすことしかり。

とある。附錄の附方の必要となるべき法とは七名八體の說明である。

七部集講義　二册　四六版

楠蔭波鷗の講義で、連句だけである。文法の說明多く、講義は丁寧に出來てゐる。明治二十六年刊。

俳諧炭俵註解　　二册　　小本

俳仙堂碌々翁の解で、炭俵の連句の解である。題字に東久世通禧、序に江馬天江・谷如意等の名流がある。解はたいしたものではない。明治三十年刊

二、年代の未詳なるもの

秘註俳諧七部集　　七册　　半紙本

曉臺士朗の註で、連句だけである。句の傍に註を施し、俗語の語解も見える。附句の文法の説明が一寸目に立つ。秘註とあるが、別に珍說卓見もないやうである。松宇の「七部集概論」に、春の日・冬の日・曠野・瓢の四卷註釋半にして曉臺歿し、士朗其遺志を繼で猿蓑・炭俵・續猿蓑の三卷を註解し完成したもので、士朗門下の舊雨に傳はり、夫より政二の手に依て增訂し、田喜庵護物之を傳寫し、世に之を秘本として傳ふれども、云々とある。

七部集曉臺卽註　　一册　　半紙本

春の日・冬の日・曠野員外の註である。註は簡單で、たいして役に立ちさうもない。

稿本七部集註釋　　一册

註者未詳。冬の日・春の日・曠野集・ひさごの註である。連句の拔註である。松宇の概論に、古註の引用せるは吏登が七部捜のみなれば、著者は雪門中の人か。又は寬保二年以後、安政四年迄の間に註釋せしものか。要す

るに稿本のまゝにて、出版迄には至らずして止んだものであらうとある。未見。

元祿調引證　二册　半紙本寫

七部集の註本である。註者未詳。乾の巻に、冬の日・春の日・曠野・ひさごの一部分、坤の巻に、ひさごッヽキ・猿蓑・炭俵・續猿蓑・初懐紙を收めてゐる。註は連句のみであつて、所々古書を引き、更に頭書に朱で細註を加へてゐる。但し頭註は別人の書入れであらう。それも乾の巻に詳しく、坤の巻に少い。且つ坤の方の朱書と乾の方の朱書とは筆蹟が違ふやうである。

七部集蓼太考 翠兄聞誌　一册　半紙本寫

行間を詰め、丁寧に書寫されてゐる。雪中庵の註を主としたもの。

猿蓑集歌仙異同考　一册

題書に、「猿蓑」附、成美の「猿蓑集歌仙異同考」とあつた。市中はの巻の異同考であらう。今慥に記憶せず。

芭蕉七部集註解

無角の「俳家成美全集」の成美傳に、成美自註として、完全しなかつたと見える云々とある。併し果して題名の如き註書があつたものだらうか。

冬の日附合考　一册　半紙本寫

魚潜の註である。註は簡單のやうであるが、參考になる所もある。

七部集黒樹園即註　　一册　　大本寫

黒樹園道舊の註で、猿蓑・續猿蓑・あら野の拔註である。猿蓑からは發句三十九、附句二句を註し、續猿蓑からは發句二十二を註し、あら野からは、發句十二を註してゐる。卷初にいろは順になつて、句の索引が載せてある。簡單な註である。

俳諧七部集一寸鏡　　一册　　中本

註者は南總の天堂一叟で、良耕雪堂校合、松羅堂補助とある。續猿蓑の附言に、杉風傳書「玉鍵」中の言を引き、修行時期を初學・壯學・老學に分ち、それ〴〵の心持を示してゐる。春の日の附言に、「抑はせを翁我家祖杉風叟直指せしを杉家祕藏玉鍵といふ、則ち祖翁の直筆也。之を規矩として私をもちひず。七部註解を著す。」とある。但し解は春の日・ひさご・續猿蓑の三部だけらしい。

猿蓑集序註解　　一册　　半紙本寫

道舊の註である。

七部集詳解

錦江の解である。錦江の「七部通旨」は此の詳解の拔書であつた。未見。

七部便蒙

之も錦江の著である。未見。

猿蓑註解

同じく錦江の解である。未見。

俳諧七部集大全春の日註　一册　大本寫

藍亭青藍の註であらう。併し青藍の註本には「七部集詳解」といふのがあつて、保考の「七部集打聽」は此の說によつたものであるといふ。大全、詳解同一書であるか、或は別本であらうか、詳しくは分らない。果樹園郎註と合本。註は本文を略し、辭句の一部分を、囗の內に入れて見出しとある。かなり詳しい註である。尤も青藍の註本には、大本と横本とあつて、横本には註解とあつたやうに記憶してゐるが、それも「冬の日」の註だけしか殘つてゐなかつた。横本には註解の年代が記してあつた。恐らく慶應頃の註であらう。青藍の註は語句に就てかなり詳しく出來てゐる。保考が採る位だから信じられるものであらう。

七部集註解　一册　中本寫

假に名く。原書題簽に七部集とあるのみ。註者未詳。年代不明。「冬の日」・「ひさご」・「猿みの」・「續猿蓑」・「炭俵」・「曠野員外」の連句の註解である。雪中庵に傳る。

標註七部集　一册　半紙本

隨齋成美校正、草稿とある。上卷、冬の日・春の日・瓢・荒野。下卷、猿蓑・炭俵・續猿蓑である。卷頭に各集の目錄が伊呂波分けにしてある。註は古事出典の解である。

其他樓川の「鼇頭增註蕉翁八部集纂解大成」(四冊、大本)、「七部三集解」(註者未詳。研究室藏本であるが、今見當らない。詳しく分らない)、「俳諧繪入七部集」(十卷。貞房畫。奥附に、此冊子は七部集の内より名高き名句を撰み、俳諧に志ある御子様方の解し安きやう繪入に致し、追々出版仕候云々とあると、松宇氏の解題に見えた。未見)、「冬の日稿」(一冊、冬の日の註である。註者未詳。何時頃のものか分らぬ)。等もある。

以上で大略七部集註書の研究を終つた。古人の研究をかへり見ると、次のやうな難がありはしまいか。一、從來の註書は七部集全體に渉れるもの少く、多くは連句・發句の拔註である。二、從來の註は師傳家說に囚れて、註者の自由討究を妨げてゐる。三、故事出典の說明や附方論に煩はしく、句意の說明が割合に省略されてゐる。四、連句の註も一卷の變化の抑揚に就て批評が缺けてゐる。五、通釋的でない。六、校本の研究が屆いて居らぬ。私は大正の今日に於て慊りした七部集註釋の出でん事を切望してゐる。

(明治四十三年稿。其後「詩人芭蕉」の出る時修正し、又本書刊行の際多少修正した。)

芭蕉の畫像と筆蹟、其他（口繪の解說）

古來芭蕉の畫像は非常に多く傳へられた。併し其大部分は想像畫で、信じられるものではなかつた。平生芭蕉に親炙せる門人の畫といへども、各自その風貌を異にし、果して何れが芭蕉の眞像なりや取捨に迷ふ次第である。それは年齡によつて相違する事もあらうし、或は旅上の姿、又は草庵起臥の態などに於ても、相違はある事だらうが、門人同志の描いた畫の中に、甚しき相違があつては、後人は迷はざるを得ない。實にその相違は同一人の筆になるもの丶間にすら見る事で、描寫法の幼稚と云はうか、特徴を捕へる事の拙劣さと云はうか、到底後人を十分滿足させる畫は、一枚たりとも存在しないと云つてよい位で、余はたゞ種々の點から考察して、想像的にかかるべしと推測するに過ぎないのである。

芭蕉の風貌・性格に關する古人の記錄は、先づ柏莚の「老の樂」に、「はせを翁はうすいもあり。其角や、嵐雪が所へいくぞやといふ。あいさつしづかなり。しゆしやうなる翁なり。」、次に「水鷄塚集」の畫像誌に、「そのさま面長に、脊高からず。ひくからず。頬そばだつて、眉毛ながく、眼中すこやかに、鼻は鈍骨の双柱、耳厚く、薄唇にして、瘦せがれたる形容とや。云々」又「老の樂」小川破笠の物語に、「嵐雪なども俳情の外に翁をはづし逃げなどいたし候よし。殊の外氣がつまり、面白からぬ故なり。云々」、土芳の「くろざうし」に、「師ある方に客

に行て、食の後蠟燭をはや取るべしといへり。夜の更くる事眼に見えて、心忙しきとなり。云々」などとある。頬骨が出て、鼻が丸く大きいでは、不器量のやうに思はれるが、面長で、眼中が涼しいといふと、まんざらでもないやうだ。蠟燭の灯を見ると、夜が更けるやうで、氣忙しいなどは、如何にも敏感な神經の鋭い人のやうな氣がする。後人の畫は是等の考證によつて描かれたものだらうが、動作が靜肅で、姿が痩せ枯れてゐるやうでは、社會の劇務にたづさはる人とは思はれない。住居を山林の閑寂な地に求めたり、茶色を好んで、蒟蒻の刺身や芹の飯をうまがつて食べるやうな人では、脂ぎつた、頑丈な體格の持主とは考へられない。よく容貌魁偉な、骨格の逞しさうな芭蕉像を見るが、あれでは芭蕉の性格を壞して了ふ。例へば秋瓜の「鹿島詣」所載の像（口繪五）、三力の「第一義集」所載の像（口繪七）の如きは、その感じがある。瓊音の「芭蕉全集」所載の杉風筆の像（顏は下ぶくれである）、黑田氏の「芭蕉翁傳」所載の像（顏は細つそりしてゐる）も體は大きいが、是等はまだ參考になる點もあるが、「芭蕉翁遺芳」所載の許六筆の像は、顏が大きく、長く、體は老いて肉は落ちてはゐるが、大體に骨太な、頑丈な體格で、而も口の大きい所などは、何となく魁偉な相を想はせる。此畫は考證には合つてゐるかも知れぬが、芭蕉らしい感じは起らない。余は芭蕉の性格・趣味・詩の性質等から推測して、芭蕉は小柄な、痩せた、細面の、眼の涼しい、色の白い風貌の人かと考へる。細みといふ事を主張する人だから、余程デリケートな感情の人かと思ふ。一體畫は密なるが故に眞を傳へ、粗なるが故に僞であるといふ道理はない。要は筆者の直覺の鋭さにあつて、筆者が其人の顏の特徵を十分捕へて書かなければ駄目である。筆者は先づ氣分を摑む事が第一であ

る。粗畫であつても、よく焦點を摑んでゐる畫は、無雜作に引いた線の一本でも、十分其人の眞相を表す事がある。考證に合ふ畫だから、眞に近いといふ譯はない。考證に合はない畫だから、僞であるとも云へない。芭蕉の生活や詩を深く考察しないで、單に容貌を考證に合はせようとして描いたとて、芭蕉らしい芭蕉は出來るものでない。尤も根本的に云へば、親炙せる直弟が、芭蕉の眞像を殘して置く事である。それが今日の場合大なり小なり、各自の筆に相違があるのだから困る。つまり門人の畫が、寫實的に不用意であり、描寫法が平凡である事に歸因する。

古來最信用されて來たものは、杉風筆の芭蕉像である。余の寓目せる所でも六七種はあつた。「一話一言」所載の鉢叩きを聽く像は、元來が瓢逸な俳畫であるから、問題にはならぬが（口繪十）、義仲寺に傳はつた珉雪摸寫の像は（口繪一）よからうかと考へる。但し摸寫といふ點が面白くない。此畫像は嘗て日英博覽會に出品した事があつた。湖中の「芭蕉翁略傳」所載の小川破笠の像も參考になる。但し之も圭岳摸寫が缺點である（口繪二）。「陸奥衛」所載の像は（口繪三）、筆者未詳ではあるが、參考になる。此像は「奥の細道」頃の芭蕉を寫したものか、少し老いやつれてゐる感じがする。以上の三品は、やゝ芭蕉の眞相の輪廓を寫し得たものかと考へる。

康工の「百一集」所載の像は（口繪四）、杉風の筆の摸寫らしく、前に杉風のがあれば、之は余り參考にもなるまい。「水鶏塚集」所載の像は（口繪六）、月窓居士（露川）に傳はつたもので、松榮散人寄潮の筆、畫像誌の之に附いたものだが、似ても似付かぬ、安つぽい芭蕉になつて了つた。畫像誌は芭蕉の風貌を巨細に說明して、實際

の芭蕉の顔を知るには唯一の文献で、筆者も之に基いて描いたものだらうが、全く參考の價値はない。「行狀記」(?)所載の像（口繪八）は、笠に顔を隠したもので、之では問題にならぬ。風化坊の「雪のおきな」に、脇息によりかゝつてゐる後向きの像が出てゐる。長崎の君山畫であるが、之は略した。「一話一言」所載の、鯤翅の描いた芭蕉の立像がある（口繪九）。之は杉風の子孫に傳はつたもので、元祿九年九月の筆である。卯辰紀行の旅裝らしく、參考になりさうであるが、複寫だから當になるまい。「江戸の華」所載の像（口繪十一）は、祖荷の筆である。之は杉風筆のやうに、痩せてゐる所は、芭蕉らしいが、品がない。眼が釣上つてゐて好もしくない。芭蕉の畫像に、渡唐芭蕉像がある。「一話一言」所載のもので（口繪十三）、支那に渡つた芭蕉自畫讃の像を、客使沈草亭、鄭塙の二氏が摸寫したのである。木枯に吹かれてゐるやうな後向きの像である。畫は鄭塙、いかめしき音やの題句は、沈草亭書である。叡山の都不覺所藏、後日光山下呼吸庵に傳はる。全くの俳畫で、支那へ渡つたといふ點と、自畫像といふ點が興味を惹いた。元祿二年以後の作であらう。芭蕉の自畫像には、形見として乙州に與へたものもある。此像がそれであるかどうかは明かでないが、渡唐像の原のものも、乙州附與のものも、其後の傳來詳かでない事が遺憾である。柑翠の「鹿嶋集」（文化四年刊）所載の像（口繪十二）は、寥松の筆で、柑翠が鹿嶋根本寺の和尚の垂示によつて彫らせた芭蕉像を、根本寺に獻納する時、寥松の摸寫したものである。鷺秋の「聲の栞」（天保十四年刊）所載の像（口繪十五）は、芭蕉百五十回忌に當り、二條殿下から花本大明神の神號を賜はつた記念として、追善集を出した時の畫像である。筆者未詳。蕪村筆の芭蕉像は、粗畫・密畫數種あるが、何れも想像畫

で、參考にはならない。たゞ風韻が高いので、賞美されるだけである。田中光顯氏所藏の芭蕉立像畫は、その中殊に勝れたものであらうが、若々しくて芭蕉らしい所は見えない。こゝでは「蕪村七部集」所載のもの(口繪十四)、「鼇頭奥の細道」所載(口繪二十四)の俳畫をあげて置いた。その飄逸な筆致を愛したからである。月溪筆の芭蕉像もある。之は考證に苦心して畫いたものださうだが、余り若々しく、眉目秀麗な芭蕉になつて了つた。

其他芭蕉の畫像には、去來筆の芭蕉の半身像、風化坊の「花のおきな」(天明三年刊)所載洛、文堂畫のもの、本間家七代本間棗軒畫のもの、渡邊華山彩色畫、遠藤曰人畫のものなどもあるが、大方想像畫である。角上の「やどり塚集」によると、芭蕉は顔に疣があるさうだが、その疣を大きく畫いて、滑稽な顔にして了つたものは、曰人の芭蕉像である。棗軒翁の畫は旅裝だが、如意を持つてゐる所が面白い。とにかく古人の芭蕉畫像は、大方杖を持ち、笠を置いた旅裝であつた。

芭蕉の眞蹟は、發句・連句・書翰・文章等に渉つて、多く傳はつてゐるが、その中には僞筆もかなりあつて、今日ではその眞贋を鑑定するのに骨が折れる有様である。多年鑑定に從事する人といへども、時にはその鑑識を誤る事さへある。こゝに掲出したものは、十分その筆跡を考査し、その傳來を吟味して、確實なりと信ずるもののみである。

かさの記

秋の風さひしき折〳〵妙觀か刀をかり竹とりのたくみを得てたけをさきたけをたはめてみつからかさ作りの翁と名いふ

たくみつたなければ日をつくしてならすこゝろ靜ならされは日をふるにものうし朝にかみをしたゝめてかはくをまちて夕にかされしふをもてそゝきていろをそめうるしをほとこしてかたからむ事をようすはつか過る程にこそやゝいてきにけれかさのはのなゝめに荷葉なかはひらけたるににたるもおかしきすかたなりけりなか／＼にきくのいみしきより猶愛すへしかのさいきやうのわひかさか坡翁雪天のかさか

右は某氏出版の巻子本に據る。例の有名な「笠張の説」の一草稿である。（口繪十六）

うつろはむことたにおしき秋はきを
おれるはかりにをけろ露かな
穐の野にはきのにしきをふるさとに
鹿の音ながらうつしてしかな

蘭

前頭更有蕭條物老菊衰蘭三兩叢
扶桑豈無影乎浮雲掩而忽昏叢
蘭豈不芳乎秋風吹而先敗

貞享年中、芭蕉素堂の需に應じて、「和漢朗詠集」を淨書した。後慶應二年十月、東都宮戸川漁隱竹心りう和、之を諸家より蒐め、拓本として出版した。それには古筆了悦の「はせを（朗詠集）正筆珍敷ものに候。」といふ極書まで附いてゐる。俗に朗詠切と云つて、古來珍重された。舊洒竹文庫所藏。もと二十幾枚かあつたが、大正十二年の大震災に逢つて、殆んど全部燒失し、今はたゞこれ一枚殘るだけとなつた。（口繪十七）

何某ちりと云けるは此たひみちのたすけにとなりて萬いたはり心を盡し侍る常に莫逆の交ふかく朋友信有哉此人

深川や芭蕉を富士に預行　ちり

墨隈　富士

山六ツ間々ニ薄墨ニテ松

芭蕉眞蹟「甲子吟行」の一部である。安永九年波靜の摸刻したもの。（口繪十八）

やまかにとしたこえて

たかむこそしたにもちおふうしのとし

またのはるはあむにありて

いくしもにこゝろはせをの松かさり

ふるはたやなつなつみゆくおとこども

おきよ〳〵わか友にせむぬるこてふ

あるひとのかくれかたたつね侍るに
あるしは寺に詣てけるよしにて
とし老たるおのこ獨庵たまもりゐ
けけるかきほに梅さかりなりなり
けれはこれなむあるしかほなりと
いひけるたかのおのこよそのかき
ほにてさふらふと云たきゝて

某氏出版の巻子本に據る。貞享二年春の句稿。成蹊の「栞集」（文化九年刊）所載の芭蕉眞蹟の拓本と同一であ

る。（口繪十九）

鹿嶋詣

らくの貞室須磨のうらの月見にゆきて松陰や月は三五や中納言といひけむ狂夫のむかしもなつかしきまゝにこのあすかしまの山の月見んとおもひたつ事ありともなふ人ふたり浪客の士ひとり〳〵は水

秋瓜の「鹿島詣」（寶暦二年刊）所載、貞享四年八月芭蕉鹿島の月見の眞蹟の一部。常陸本間自準家に傳はつたもので、秋瓜が三代の孫畫江に、「證治準繩」といふ醫書を與へて、讓り受けたもの。（口繪二十）

らくのていしつすまのうらの月みにゆきてまつかけや　月は三五夜中なこむといひけむ　狂夫のむかしもなつかしきまゝにこのあすかしまの山の月みむとおもひたつことあり　ともなふ人ふたり　浪客の士獨ゝは水雲のそうゝはからすのことくなろ墨の

杉風家に傳はつた芭蕉眞蹟、「かしま紀行」の摸刻の一部。寛政二年芭蕉百回忌近づくにより、採茶庵梅人の命を受け、待宵人宗拱の上梓したもの。（口繪二十一）

さらしなの里おはすて山の月見事しきりにすゝむろ秋風の身に（消シ）しみ心に吹さはきてとも（に）風雲の情をくるはすもの又ひとり越人と云木曾路は山深く道さかしく旅寢（は）力も心もとなしと荷兮子か奴僕をしておくらすおの〳〵心さし盡すといへ共羈旅の事心得ぬさまにて共におほつかなくもの事のしところにあとさきなる（も）中々におかしき事のみ多し何々といふ處にて六十はかりの道心の僧おもしろけも　おかしけもあらすたゝむつ〳〵としたるか腰たはむまて　物おひ息はせはしく足はきさむやうにあゆみ來れるを

百我の更科紀行眞筆の敷寫しである。もと隨斎の門人から出たものといふ。（口繪二十二）

狐題して云世にかはかふりと云あり中く人間よく化て禽獸は衰たり仍而

足あとは雪の人也かはかふり

下ノ方ヲカスリ筆ニ書消シアリ

江三の「むつのゆかり」所載、芭蕉の戯書である。確花の附記云、

此書やむかし蕉翁伊陽上野袞虫庵にありし時、戯に書して窓下の壁間に粘せしを、此程庵をあたこ町より、藤堂氏の館に移さるゝを、庵主几良ぬしこれを予におくりぬ。今や西坡子か求に任せて、是をあたふ。後の反故ともならん事をおもひ出て、其よしをしるし置ぬ。

朝顔の跡に殘るや筆のきれ

確花手書□□

（口繪二十七）

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人や舟の上に生涯をうかへ馬の口とらえて老をむかふる物は日々旅にして旅を栖とす古人も多く旅に死せるあり予もいつれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます海濱にさすらへ去年の秋江上の

櫻壽軒の拓本にした芭蕉眞蹟「奥の細道」の一部である。第六章第二節參照。（口繪二十三）

さみたれをあつめて

すゝしもかみ川

芭蕉

岸にほたるを
繋く　舟杭　一榮
瓜はたけいさよふ
空に影まちて　曾良
里をむかひに
桑のほそみち　川水
うしのこにこゝろ
なくさむゆふまくれ　一榮
水雲重し
ふところの吟　芭蕉

大石田一榮亭にての吟。「奥の細道」中わりなき一巻は之であらう。（口繪二十五）

一、幻住菴上葺被仰付候半由珍重奉存候うき世のさた少も遠きは此山のとなり／＼の寝覺難忘候露命にかゝり候はゝ二
たひ薄雪の曙なと被存候

可笛五明の「俳諧三等文」所載。（口繪二十六）

（口繪二十四）、天明三年刊「增補江戸大繪圖」の深川芭蕉庵附近の圖。圖の中央卽ち伊奈半十尾張中納言、松平七郎、太田攝津、是等屋敷の一角が西元町に當る。西元町の東詰（圖の下方）の流、卽ち六間堀の附近に芭蕉庵

があつた。西元町の南詰（圖の左方）の川が小名木川で、その川上に素堂の寓がある。

（口繪二十九）・（口繪三十）、物部家の子孫に傳はつた物部道意の印象である。口繪左の解説は片山夽城氏の文である。

ふるきの時雨の亭しくれて面白けれと左の句短册に見ても
色紙にみても故よしありけなるにはしくましくや

八十一番

左勝　季吟をまねきて

染はやとまつにきた村時雨哉

右

夕かたやいつくもおなしさひしくれ

左句は寛文十一年十月初つかたはしめて御對面給りし時さま〴〵御懇意の御物かたりの次手に此御句を仰せ給へりしよろこひ身にすきたのしみ心に堪かれたりし折ふしの即興すてに九と世

季吟自筆「百番誹諧發句合」所載。（口繪三十一）

和韻

竹窓夜靜鎖春霖　微碎幽吟賦老襟

灯盡香消高枕臥　却知詩酒兩魔侵　　瀬華 老人書

芭蕉參禪の師佛頂和尚自筆の摸刻。依兮の「芭蕉門古人眞蹟」所載。（口繪三十二）

そり高き霜のつろきや
はしの上　　蟬吟

君かため春野々に出てわかなつむ
我衣手に雪はふりつゝ　　藤堂氏筆

依兮の「芭蕉門古人眞蹟」（天明七年序）所載、蟬吟及び探丸の眞蹟摸刻。（口繪三十四）

御懇懃の御手紙いたみ入申候昨日者御出被成被下□も一入□大慶に奉存候　従是こそ御禮可申上義ニ御報ニ罷成候何も面上ニ
可申上候　以上
二十三日
山田屋
七郎右衛門様　　松尾半左衛門

芭蕉兄半左衛門眞蹟摸刻。「古人眞蹟」所載。雪芝宛のもの。（口繪三十三）

繫船蘆荻間　蓬底睡眠閑　林葉遂風到　良疑雨出山　　直愚書

芭蕉の導師義仲寺の直愚上人の書。「古人眞蹟」所載。（口繪三十五）

補遺

其一

常陸の本間家に傳はつた古文書中、芭蕉診察の一紙片があつた。何人の診察したものであつたか明かでないが、常に胃腸の弱かつた芭蕉の事であるから、興味深き文献だと思ふ。輕い感冒らしいが、「常に氣の順（メグル？）らぬ人なる故、氣ふさがれ、めぐらぬ證なり。」といふ個所が、芭蕉の氣質を知る上に一參考とならう。氣順らぬ人とは、疳の強いとか、のぼせ性とかいふ意味であらう。先挠心とか闊頭痛といふ語は不明であるが、何かの病名であらうと思はれる。呴も分らない。藥名か。挠の横に藿正とか、闊の横に活とあるのも、語の訂正か何か之も分らない。とにかく珍しい文書である。左に

一、芭蕉風濕にアタリ、項ヒキツリ、咽少イタミ、ツバキ呑コミニクキトナリ。脉浮ニハアラズメ、スコシ力アリテカズアリ。サノミツヨキ感冒デハナシ。常ニキノ順ラヌ人ナル故、氣フサガレ、メグラヌ證ナリ。先挠（藿正）心ニ闊（活）頭痛モ少アル故ニ、呴（霍）加ヘニテ一即（貼カ）用井、朝少ヨシ。脉モヘリタリ。シカレ𪜈多ノ證ノカルキ

句讀は私の施したもの、讀み易からしめんためである。

其　二

芭蕉の俳論に寂び、栞り、細みといふ教がある。之は蕉風俳諧の本質で、蕉門の徒の等しく理想とする所であつた。よく引かれる文ではあるが、去來抄に、

去來云、さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。例へば老人の甲冑を帶し、戰場に働き、錦繡をかざり、御宴に侍りても、老の姿あるが如し。賑やかなる句にも、靜かなる句にもあるものなり。例へば

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰、さび色よくあらはれたり。云々

とある。卽ち寂びとは閑寂な句を言ふのではない。句意や材料が賑やかでも、靜かでも、句の情調が寂びてゐなければならない。內に根ざして、外に表れるもので、單なる閑寂趣味とは違ふ。人格の色である。從つて寂びは寂しい境地をねらつても得られるものではない。自然の體得である。具體的に言へば、靜かな、落着いた、ゆとりある、角の取れた感情性が寂びで、大方青年よりも老人とか、世間に苦勞した人などに見る所である。

元來寂びといふ教は連歌にあつた。心敬は「ひえさびたる方を悟り知れ。」（さゝめごと）とか、或は「ふけさびたる方最も尊かるべし。」（心敬僧都庭訓）などと言つて、ひえさぶ、ふけさぶの境地を、連歌修行者の理想とした。心敬の寂びの境地は、彼が連歌論の「ひとへに餘情・幽玄の心姿をむねとして、いひ殘し、ことわりなき所に、幽玄感情は侍るべしとなり。」（さゝめごと）といふ主張に立脚したもので、言ひ殘し、理なき所を尊んだ

所以は、物をあらはに示したり、露骨に言つたりする氣持を嫌つたからで、そこに寂びといふ氣持と一脈通ずる點があつた。蓋し寂びとは一面から見ると、言葉少なき態度である。靜かな、奥ゆかしい、物の俤を示すやうな態度である。連歌師と俳諧師とは其心境に相違があるが、芭蕉の寂びは心敬等の心境を進展せしめたものと言ふべきである。芭蕉が附句に、移り・ひゞき・匂ひを主張した事も、やはり宗祇などの幽玄的な附方に基いてゐるやうに、寂びといふ心持も、連歌の教に胚胎して、特殊の發展を示したものだらうと考へる。

次に栞りであるが、之も去來抄に、

去來曰、しをりは哀なる句にあらず。……しをりは句の姿にあり。云々

十團子も小粒になりぬ秋の風

先師曰、此句しをりあり。

とあるし、又去來の「答許子問難辨」(俳諧問答抄)にも、

去來曰、さびとさびしき句と異なり。しをりといふは、趣向・詞・器の哀憐なるを言ふべからず。しをりと憐なる句は別なり。たゞうちに根ざして、外にあらはるゝものなり。……强てこれをいはゞ、さびは句の色にあり。しをりは句の餘情にあり。云々

とある。是等の說を見ると、去來は一方に句の姿と解し、他方に句の餘情と言つてゐるが、姿も餘情も同一の意味にならうかと考へる。姿とは表現形式である。餘情とは言外の意味とか、含蓄とかを指し、物事をすべて言ひ盡さぬ所謂心敬の言ひ殘し、俤を示すといふ意味にもなる。併し表現の方法によつては、餘情があるやうにも言

へるのであるから、表現を注意すれば、內容がしをりある餘情になる事になる。栞りの語義に就いては、此場合導くといふ意味と、撓め傷めるといふ意味とあるが、導くといふ意味から言へば、表現によつて句全體の情趣を一層深かめるべく誘導する義となり、傷むといふ意味から言へば、哀憐の情を深く含ませる事にならう。但し後者の場合は、去來の說の如く、趣向や言語や材料の哀憐を指すのではなく、句の全體の情趣の哀憐といふ意味にならうかと考へる。とにかく栞りは句の表現に就いて言つたものと思つてよろしい。十團子の句は、許六が二十句ばかり作つて、二日かかつて、やうやく小粒になりぬと考へ付いたものだ（自讃之論上）が、許六の苦心は、如何にせば秋風吹く寂しい宇都ノ山の光景を、深く表現出來るだらうかといふ點にあつたのだらう。小粒になりぬといふ表現は、時間を含んだものである。時間を含んでゐるから、種々な佗しい想像が湧く。そこが餘情的表現で、全體の情趣に深みを與へる。それを芭蕉が賞めたのである。

　去來は寂び、栞りとつゞけて言つてゐる。寂びと栞りとを分離して言はない。前例を見ても、寂びとはかう、栞りとはかうと說明してゐる。此點を考へると、寂びと栞りには、分離すべからざる何等かの意味を暗示させる。寂びも栞りも內に根ざして、外に表れるものであらう。なほ言へば、寂び、栞りも人格的な意味があつて、趣向や言語や材料の閑寂を意味するのではない。物に體用の關係があるやうに、寂びは體、栞りは用となるのではなからうか。寂びは閑寂な個性の情調、栞りはかゝる情調に居る者の、言語・動作といふやうな意味ではなからうか。寂びは閑寂趣味ではない。閑寂といふ情調によつて、統一された人格の色である。かゝる人の自然觀照や詠

嘆に寂びが含まれてゐるし、栞りも自ら備つてゐる事になるが、栞りの如何によつて、寂びた人格の色が強く出る場合と、弱く出る場合とあるから、そこを統一的な閑寂情調を強く出さんがために、栞りの用意・修行が必要といふ事になるのだ。

最後の細みに就いては、去來抄に、

去來曰、細みはたよりなき句にあらず。……細みは句の心にあり。云々

鳥どもも寢入つてゐるか余吾の湖

先師曰、此句細みありと、評し給ひしとなり。

とある。此語も難解ではあるが、句の心にありと言つたのは、句の思想内容や觀照態度にあるといふ意味だらうか。許六が初めて芭蕉に逢つた時、芭蕉と問答した事が、許六の自讃之論上に見えてゐる。卽ち

又問ふ、師と晋子と師弟はいづれの所を敎へ、習ひ得たりといはむ。答て曰。師の風閑寂を好んで細し。晋子か風伊達を好んでふとし。此細き所師の流なり。爰に符合すといへり。云々

芭蕉の風は細い。其角の風は太いと言ふと、何となく纎細・豪放といふ正反對の意味に聞えて、「細き所師の流なり。」が要領を得ない事になるが、細いといふ概念は、纎細といふ意味ではなく、感覺の鋭さとか句法の緊密などといふ意味であらう。此意味から論ずると、去來の句の心にありといふのは、感覺の鋭い事になるが、路通の鳥共の句は、此例に適切でない。去來抄は全部信じられない集であるから、此句は或は後人の竄入であるかも知れないが、假に芭蕉の賞めた句として考へて見ると、過賞のやうな氣がする。路通が暮れた湖面をジツと眺めて、

浮寐鳥もはや寐入つてゐるか、少しも動かないと、つく〴〵佗しく思つた句であらうが、寐入つてゐるかといふ表現では、感覺が鋭く働いてゐるとは思へない。こんな間が拔けた、月並臭い表現の句を、芭蕉が賞めるのも變である。此句を細みの例句にすると、細みの意味がます〳〵分らなくなるが、それはしばらく措き、風之の「俳諧耳底記」に、其角の句を論ずる條下に、

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店と作りて、ほそみを見せられたり。……秋の雲尾上の杉をはなれたりなど言ひしほそみは、正風の丸ぬけにて、云々

とある。之れならば許六の說とも合ふし、芭蕉の主張もさぞかしと首肯かれる。鹽鯛も秋の雲も、皆鋭い感覺の句である。鹽にした鯛が魚屋の店先に齒を喰ひしばつて、橫つてゐる光景は、いかにも寒むさうで、寒しといふ主觀によく利いてゐる。又澄んだ紺碧の大空を、一片の白雲が悠々と、尾上の杉を離れて行く光景も、晴れ渡つた秋の郊外の明朗さを想はせる。兩句とも細かい弱々した句ではない。むしろ強く、逞しい感じの句である。而かも句法が緊密で、よく物の焦點を捉へてゐる。芭蕉が或所へ客に呼ばれた時、食後蠟燭を早く取つてくれと言つた。それは夜の更けるのが眼に見えて、心が忙しくなるからであるといふ逸話があるが(赤冊子)、いかにも芭蕉の神經の鋭さを物語つた話で面白い。神經が鋭く、感受性が敏いから、引緊つた句も出來るのである。路通のやうな寐ぼけた神經では月並が生れる。鋭い感覺でなければいけない。物の焦點を捉へたり、中核を摑むには、神經が細かくふるひ立つてゐなければいけない。詩人の感覺はデリケートであるが、弱くたよりが無いやうでは

困る。そこを去來が戒めたのであらう。（藤村博士功績記念會編「近世文學の研究」中、拙文、「芭蕉の詩の持つ感情性」より）

（芭蕉）

昭和十年九月十日印刷
昭和十年九月十五日發行
昭和十四年五月三十日三版發行

芭蕉の全貌

定價七圓

著者　萩原蘿月

東京市神田區神保町一丁目一番地
發行者　株式會社三省堂
代表者　龜井豐治

東京市蒲田區仲六鄕一丁目五番地
印刷者　株式會社三省堂蒲田工場
代表者　喜多見昇

發行所　株式會社三省堂
本社　東京市神田區神保町一ノ一（振替東京三一五五五）
支店　大阪市西區阿波座下通二ノ六（振替大阪八一三〇〇）



大日本


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03040 5583